

柿 田 遺 跡

(第1分冊 本文編1)

2005

財団法人 岐阜県教育文化財団

柿^{かき} 田^だ 遺 跡

(第1分冊 本文編1)

2005

財団法人 岐阜県教育文化財団

序

柿田遺跡の所在する可児市柿田及び可児郡御嵩町顔戸は、清流可児川によって形成された東西に長い平地に位置します。この地は県内でも有数の前期古墳が密集する地域であり、古代には可児郡の役所があった郡家郷の比定地で、古代七道の一つである東山道が通じていたとされております。また、室町時代には岐阜県内で最大規模の方形館である顔戸城があり、江戸時代には中山道が通ります。このようにいつの時代でも重要な拠点であり、特に古代以来、交通の要衝として栄えました。

このたび、国土交通省による東海環状自動車道（八百津～笠原）建設事業に伴い、発掘調査を実施しました。今回の調査では、縄文時代から近現代の遺構を多数発見し、中でも県内最古となる弥生時代中期の水田跡や古墳時代から室町時代までの堰や堤防跡、奈良時代の道路遺構、鎌倉時代の館跡、室町時代の条里地割に規制された水田跡などは、県内でも稀有の遺構群として注目されています。また、調査により出土した約40万点の土器や約2万点の木製品は、当地域に住んでいた人々の生活や文化を窺い知る上で貴重な資料といえ、それらをまとめた本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、可児市教育委員会、御嵩町教育委員会、地元地区の皆様へ深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 岐阜県教育文化財団

理事長 日比治男

例 言

- 1 本書は可見市柿田、可見郡御嵩町顔戸に所在する柿田遺跡（岐阜県遺跡番号21214-08846）、可見市柿田前山に所在する柿田前山遺跡（岐阜県遺跡番号21214-09609）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道（八百津～笠原）建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方建設局（現 国土交通省中部地方整備局）から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成14年度までは財団法人岐阜県文化財保護センター）が実施した。
- 3 発掘調査は、伊藤秋男南山大学教授の指導のもとに、平成11～13年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆分担は目次に示した。編集は小野木が行った。
- 6 平成12・13年度の発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、小池土木株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文、株式会社セビアス、STUDIO SKY に委託して行った。
- 8 空中写真測量は、株式会社イビソクに委託して行った。遺構図版作成は、株式会社セビアスに委託して行った。
- 9 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、株式会社吉田生物研究所、元興寺文化財研究所に委託して行った。また、千藤克彦氏、原田幹氏より玉稿を賜った。その執筆分担は第2分冊の目次に示し、結果は第7章に掲載した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。
赤塚次郎、井川祥子、石黒立人、伊藤裕偉、五十川伸矢、上原真人、魚津知克、内堀信雄、宇野隆夫、小笠原好彦、尾野善裕、蔭山誠一、可見光生、金子隆之、金子裕之、川本重雄、木村勉、清田善樹、栗谷本真、齋藤基生、佐藤公保、佐藤信之、清水重敦、鷲柄俊夫、鈴木元、高木宏和、高橋克壽、寺崎保広、中井正幸、長瀬治義、長沼毅、長屋幸二、仁木宏、箱崎和久、畑大介、八賀晋、早川万年、早野浩二、原田幹、樋上昇、広瀬和雄、藤澤良祐、古尾谷知浩、松村恵司、三上喜孝、水野耕綱、水野章二、三宅唯美、村上由美子、森達也、山下信一郎、山田哲也、吉田正人、若尾要司、渡辺博人、渡辺寛
- 11 本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。
- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998「新版 標準土色帖」（日本色研事業株式会社）による。
- 13 調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯	(小野木)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過と方法		4
第2章 遺跡の環境		11
第1節 地理的環境	(小野木)	11
第2節 歴史的環境	(近藤)	12
第3章 基本層序	(小野木)	18
第4章 遺構・遺物の概要		25
第1節 時期区分	(近藤)	25
第2節 遺構の概要	(近藤・小野木)	27
第3節 遺物の概要	(小野木)	31
第4節 土器の概要	(近藤・小野木)	32
第5節 木製品の概要	(笹木・小野木)	51
第6節 石器の概要	(鈴木・小野木)	66
第7節 金属製品の概要	(山内)	68
第5章 遺構	(笹木・松岡・近藤・小野木)	70
第1節 I期(縄文時代)の遺構		70
第2節 II期(弥生時代～古墳時代初頭)の遺構		72
第3節 III期(古墳時代前半)の遺構		83
第4節 IV期(古墳時代後半)の遺構		102
第5節 V期(古代)の遺構		120
第6節 VI期(中世前期)の遺構		129
第7節 VII期(中世後期)の遺構		158
第8節 VIII期(近現代)の遺構		178
第9節 多時期にまたがる遺構		180
第10節 時期不明の遺構		194
第6章 遺物		196
第1節 土器	(近藤)	196
第2節 木製品	(笹木・平田・近藤・小野木)	263
第3節 石器類	(鈴木)	311
第4節 金属製品	(山内)	321

報告書抄録

第2～8分冊目次

第2分冊	本文編2・索引
第3分冊	遺構図版編
第4分冊	遺物図版編
第5分冊	一覧表・観察表編

第6分冊	遺構写真図版編
第7分冊	遺物写真図版編
第8分冊	附図編

挿図目次

図1	柿田遺跡位置図	1	図31	柄孔隆起の分類	264
図2	調査地点位置図	2	図32	直柄平鍬の分類	265
図3	試掘坑位置図	3	図33	横鍬の分類	266
図4	グリッド模式図	4	図34	軸部の分類	266
図5	調査地点位置図	5	図35	曲柄鍬の部分名称	267
図6	遺跡周辺の地質図	11	図36	棒軸形曲柄鍬の分類	268
図7	周辺遺跡分布図	17	図37	ナスヒ形曲柄鍬の分類	269
図8	地点間の層位関係	23	図38	えぶりの分類	270
図9	層序模式図	24	図39	鋤の部分名称	270
図10	IX層の範囲	24	図40	横鋤の部分名称	271
図11	木制遺構の構造材と部位の名称	30	図41	横鋤の分類	272
図12	弥生土器・土師器分類(1)	39	図42	整杵の部分名称	272
図13	弥生土器・土師器分類(2)	40	図43	整杵の分類	272
図14	弥生土器・土師器分類(3)	41	図44	木鍬の分類	273
図15	弥生土器・土師器分類(4)	42	図45	田下駄の分類	273
図16	弥生土器・土師器分類(5)	43	図46	大足の部分名称	274
図17	青磁分類	48	図47	縦杵の分類	274
図18	白磁分類	49	図48	足板の分類	274
図19	中世土師器煮沸具分類	49	図49	足板横杵の分類	275
図20	遺構出土木製品1 (SW72)	54	図50	横木の分類	275
図21	遺構出土木製品2 (SW62)	55	図51	斧柄の部分名称	275
図22	遺構出土木製品3 (SD107)	55	図52	楔の分類	276
図23	遺構出土木製品4 (SD107)	56	図53	かせの部分名称	277
図24	遺構出土木製品5 (SW87)	57	図54	かせの分類	277
図25	遺構出土木製品6 (SD208)	58	図55	かせかけの部分名称	277
図26	遺構出土木製品7 (SE1)	59	図56	下駄の部分名称	279
図27	一次整理の流れ	62	図57	連歯下駄の分類	280
図28	杭の分類	63	図58	差歯下駄	280
図29	遺構出土石器	67	図59	籌の分類	281
図30	直柄鍬の部分名称	263	図60	杓子状木製品の分類	281

図61 槽・盤の部分名称	282	図73 柱材の分類	293
図62 槽・盤の分類	283	図74 柱根の分類	295
図63 曲物底板の分類	284	図75 横架材5の分類	297
図64 底板と側板の結合形態の分類	284	図76 戸口装置の部分名称	300
図65 椅子の部分名称	288	図77 扉板の分類	300
図66 竈申の分類	289	図78 欄・蹴放しの分類	301
図67 人形の部分名称	289	図79 垂木の分類	303
図68 人形の分類	289	図80 梯子の分類	304
図69 馬形の部分名称	290	図81 石蹴の平面形による分類	311
図70 馬形の分類	290	図82 石蹴の欠損部位	312
図71 刀形の部分名称	290	図83 打製石斧及び磨製石斧の折損部位	314
図72 刀形の分類	290		

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	16	表15 地点別の金属製品出土点数一覧	69
表2 遺跡全体の基本層序	20	表16 層位・遺構別の金属製品出土点数一覧	69
表3 各地点の基本層序	21	表17 SD15土師器破片数	90
表4 調査面と層位の関係	22	表18 主な木制遺構の構成材の分類	292
表5 時期区分一覧	26	表19 柱根の分類集計	295
表6 時期別遺構検出数	28	表20 欄・蹴放しの属性分析	301
表7 木制遺構の記載項目	29	表21 屋根板の属性分析	303
表8 土器編年対照表	50	表22 藪縦板の法量	305
表9 木製品の分類	52	表23 藪縦棒の釘孔位置	305
表10 遺構別木製品出土点数一覧	53	表24 石蹴の分類別出土点数	312
表11 時期別木製品出土点数一覧	53	表25 石墾丁の分類	316
表12 石器類出土点数一覧	66	表26 石材別の出土剥片数	317
表13 石器類出土遺構一覧	66	表27 RF 分類別出土点数	317
表14 金属製品出土点数一覧	69	表28 UF 分類別出土点数	318

挿入写真目次

写真1 調査風景	8
----------	---

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

当遺跡は岐阜県可見郡御高町三次子・尻無、可見市柿田池尻・稲垣・甫田上・屋下・三字古・杉坪・月田・細池・前山・孫六・六之坪に所在し、東海環状自動車道建設予定地内に位置する。

東海地方は2005年開催の「愛・地球博（愛知万博）」や中部国際空港の開港など、この地域の未来を切り開くプロジェクトを契機に、日本の産業・技術・経済・文化の中核圏域として総合的な発展が期待されている。東海環状自動車道はこれらの開発拠点を有機的に連結し、相互の連携・交流の活発化を支援するとともに、流入抑制、交通分散、周辺地域間移動、迂回路などの役割を果たすものである。具体的には、名古屋市の周辺30～40km圏に位置する愛知・岐阜・三重3県の豊田、瀬戸、岐阜、大垣、四日市などの諸都市を環状に連結し、東名・名神高速道路、中央



図1 柿田遺跡位置図

自動車道、東海北陸自動車道や第二東名・名神高速道路などの高速自動車国道と一体となって、広域的なネットワークを形成する高規格幹線道路で、当遺跡上には可見御嵩 I.C. が建設される。

この東海環状自動車道建設事業に先立ち、建設省中部地方建設局多治見工事事務所（現 国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所）から岐阜県に工事計画などが示された。当遺跡は改訂版岐阜県遺跡地図（平成2年3月）に登録されていないが、『岐阜県史 古代編』にて「柿田条里跡」として周知されている。また、当遺跡の北側に隣接する顔戸南遺跡では平成9年度に調査が実施され、集落跡や水田跡、流路跡などがみつき、それらが南側、つまり当遺跡側に延長する可能性が高いことが明らかとなった。そのため、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成14年度までは財団法人岐阜県文化財保護センター）が岐阜県から試掘確認調査の委託を受け、平成9年10月1日～同年12月25日、平成10年5月6日～同年12月18日、平成12年6月1日～6日、の3回に分けて実施した。

平成9年度は工事対象面積29,300㎡に対して1,500㎡、平成10年度は工事対象面積147,000㎡に対して7,000㎡の試掘確認調査を行った。顔戸南遺跡の調査成果から、地表面から地山面までは2 m以上ある地点が数箇所あることや、遺跡周辺には水田が広がっており、上部からの漏水と地山面からの湧水のため試掘坑の壁面が崩壊することが懸念された。そのため、試掘坑の掘削は十分に法面を付けて実施することにし、常に排水可能となるようにした。また、条里水田が検出される可能性が高く、水田畦畔を明確に把握するために試掘坑をトレンチ状の細長いものとした。さらに、南に位置する丘陵から運ばれる土砂堆積を考慮し、トレンチは主に東西方向に設定した。このような理由で幅約4 m、深

2 第1章 調査の経緯

さ約2mのトレンチを約120本設定し、重機掘削後に平面と断面を精査し、遺構の有無と広がり、遺物の出土状況などを記録して行った。その結果、遺構検出面は中世の水田があるⅢ層上面、古代の道路状遺構があるV層上面、古墳時代の竪穴住居跡などがあるⅦ・Ⅷ層上面の3面があることを確認し、地点によってはそれ以上の面数の存在が予想された。また、大半の地点で深さ約1mの流路跡を検出したことから、本発掘調査ではかなりの土量掘削が必要になることが明らかとなった。出土遺物は土器や木製品などがあり、とりわけ木製品が多く出土した。木製品は流路内に設置されている水制遺構の杭や横木などの土木材、他に農具、容器、紡織具など多種多様であり、その取り上げ方法や管理方法などを十分に検討した上で本発掘調査を実施しなければならないことが明らかとなった。これらの結果を踏まえて、平成9・10年度の岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、遺跡が広がる範囲は事業による破壊を免れ得ないため、記録保存を目的とするために78,058㎡の本発掘調査が必要であると判断した。また、試掘確認調査終了後、当遺跡が条里跡以外の多数の遺構が発見されたことから、平成10年12月に岐阜県教育委員会で「柿田条里跡」を「柿田遺跡」と改名し、岐阜県遺跡番号21214-08846として登録した。

平成12年度は先に実施できなかった範囲と工事変更に伴う範囲の試掘確認調査を行った。工事対象面積4,265㎡に対して150㎡の調査であり、その掘削方法はトレンチと坪掘りを併用した。そして、中世の水田畦畔や溝跡、古墳時代の流路跡などを検出し、それらに伴う土器や木製品が出土した。この結果を踏まえて、平成12年度の岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、670㎡の本調査が必要であると判断した。試掘確認調査終了後、平成12年10月4日付けで前山地区に広がる遺跡範囲を「柿田前山遺跡」と命名し、岐阜県遺跡番号21214-09609として登録した。なお、柿田前山遺跡は本報告書におけるC14・C15地点の2地点のみであることから、「柿田遺跡」と一括して報告する。

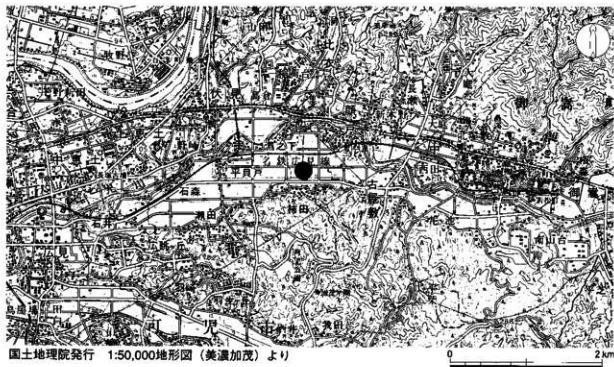


図2 調査地点位置図

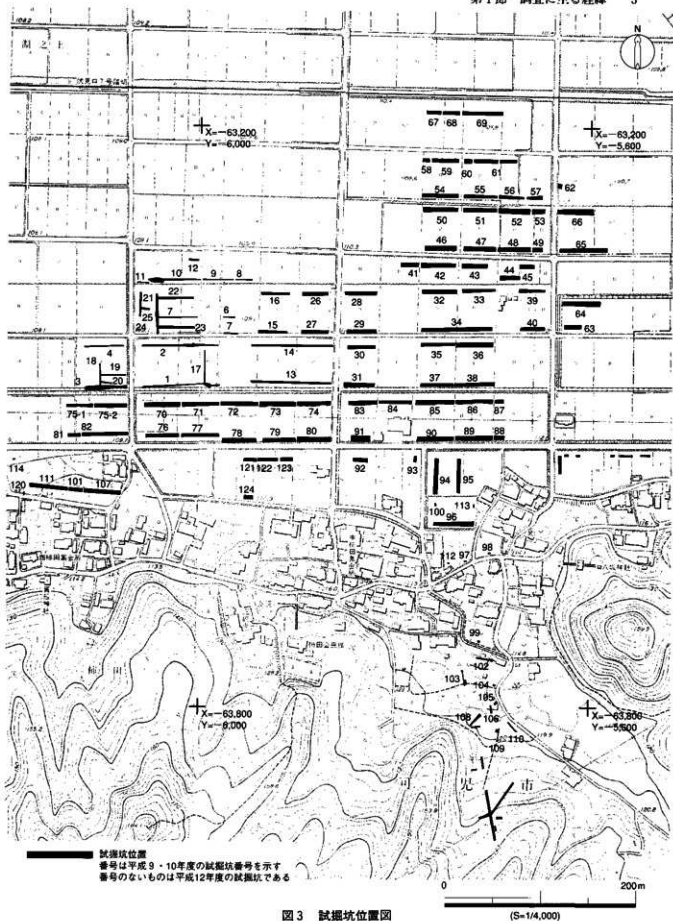


図3 試掘坑位置図

第2節 調査の経過と方法

本調査を実施するに当たり、建設省との事前協議により自動車道の本線部分を先行して調査し、遺跡周辺に広がる亜炭坑の充填工事と発掘調査が重ならないようにすることとなった。そのため、年度毎にまとまった範囲の調査は不可能となり、平成12年度では調査地点間が最大で約800m離れていたこともあった。

調査地点数及び調査面積は平成11年度が18地点40,000㎡、平成12年度が26地点30,428㎡、平成13年度が8地点8,300㎡であり、合計52地点78,728㎡である。現地調査の終了時点における出土遺物のコンテナ数は、土器が1,672箱(平成11年度：850箱、平成12年度：703箱、平成13年度：119箱)、木製品が2,401箱(平成11年度：996箱、平成12年度：437箱、平成13年度：968箱)である。なお、コンテナの大きさは長さ59cm、幅39cm、深さ10cmであり、木製品などの長いものはすべてその大きさに換算した。

調査区周辺には水田が広がっており、調査地点が道路や用水などにより細かく分かれていたことから、1ブロックごとに1つの地点名を付した。地点名は「A地点」「I地点」というようにカタカナ1文字を基本とし、報告書作成時においてブロックごとに「A地区」「B地区」と変更し、地区内にある地点ごとに「A1地点」「A2地点」と付した(図5)。また、遺跡周辺の東西700m、南北1000mの範囲を国土座標を基準に東西100m、南北500mに割り付け(大グリッド)、北西から北東に向けてA～G、南西から南東に向けてH～Nのアルファベットを付した。大グリッド内は5m四方で割り付け(小グリッド)、西から東に向けてA～T、北から南に向けて01～99の算用数字を付した。グリッド名は大グリッドのアルファベット、小グリッドのアルファベットと算用数字を連続して「AA01」「GT99」とし、その呼称は北西角の枕番号を用いた(図4・附図1)。

表土掘削は主に重機を使用した。掘削と同時に調査区内から濁水が排出されたため、掘削した表土を用いて調査地点付近に沈砂池を設け、そこに溜まった上澄みを排水した。また、土層確認と調査区内の排水を兼ねて、各地点の周縁部は溝状に深く掘り下げた。

遺構掘削は基本的に人力で行ったが、流路の上層などで出土遺物が少ない場合は重機を併用した。

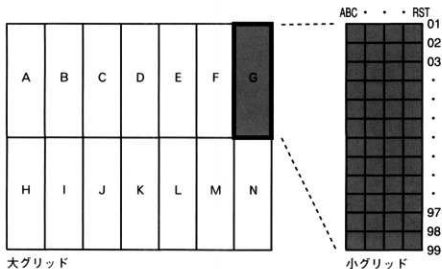


図4 グリッド構式図

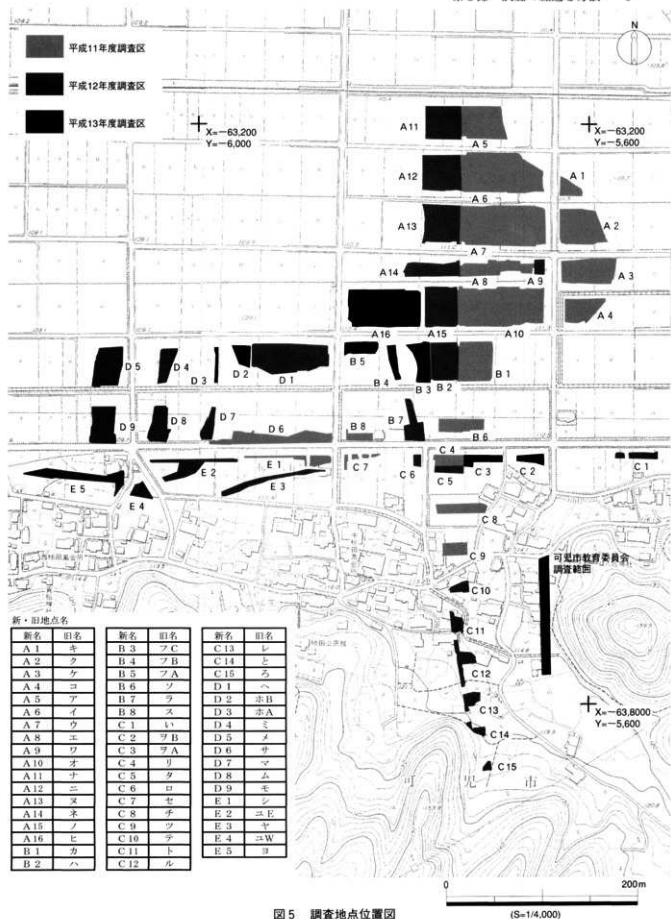


図5 調査地点位置図

流路の堆積は複雑である場合が多いので、トレンチ掘削にて土層を大きく2～3層に分け、層毎に遺物を取り上げながら掘削を行った。掘立柱建物跡や柱列などの柱穴は、検出後に約5cm掘削し、柱痕跡を確認した後に掘り込み面を含めて断ち切りを行い、土層図を作成した。その他の穴は半截後に深さと土色を記載し完掘した。道路状遺構は検出時の埋土の状況を観察し、波板状凹凸面などがみられた場合は記録を残してから基底部まで掘削した。水田畦畔はⅢ層・Ⅳ層・Ⅴa層・Ⅴc層・Ⅵ層の上面で検出した。Ⅲ層上面では、平成11・13年度はⅡ層中で畦畔を検出し畦畔を土手状に残して周辺を掘削したが、平成12年度はⅢ層上面において畦畔基底部の検出のみに止めた。また、Ⅳ～Ⅵ層の畦畔は土層断面よりも平面の方が検出しやすかった。水制遺構は流路埋土と盛土の識別を平面で把握することが極めて困難であり、断面観察において盛土の存在に気づいたこともあった。平面で盛土を検出した場合は盛土を残して掘削し、記録を残してから盛土を除去した。なお、遺構番号は調査時において「A1」「A2」というように各地点で通番とし、報告書作成時において遺構の性格から「SB1」「SK1」などと変更した。

出土遺物の取り上げは遺構・包含層ともにグリッド単位が主であったが、遺構出土のもので竪穴住居跡や土坑・流路などの特筆すべき遺物、祭祀に係わる遺物などはトータルステーションの遺物取り上げシステムを使用した。木製品は調査時に乾燥しないように濡れたタオルやビニールで保護し、取り上げ時に破損しないように慎重に取り扱った。また、細片でも木簡の破片などが出土する可能性があったことから、加工痕があるものはすべて取り上げた。多量に出土した杭などの土木材も同様にすべて取り上げ、現地調査の1次整理において長さや加工状況などを記録した。

図化作業は遺構の平面図と断面図を中心にを行い、包含層出土の土器や遺物が出土していないピットや土坑は文字や写真の記録のみとした。水制遺構は構造が複雑であったため、同一箇所を5回以上図画化したこともあった。また、試掘確認調査の結果から複数面の調査が予想されたため、各地点の調査区外周の1～2壁面の土層図を図化し、常に層位を検討するために壁面はブルーシートで覆い、乾燥しないようにした。

自然科学分析は、現地調査で水田耕作土のプラント・オパール分析や花粉分析、井戸や溝に堆積した土の花粉分析や種子同定、水制遺構に用いられた礎の種別分析や土木材の樹種同定、焼失家屋の炭化材樹種同定、竪穴住居跡の熱残留磁気測定、網代の放射性炭素年代測定、編物の赤外分光分析(FT-IR分析)などを実施した。2次整理作業においては、動物遺体同定、石器使用痕分析、土器の胎土分析、漆製品の塗膜分析、木製品の樹種同定などを実施した。なお、現地調査で出土した葎や網代などの特筆すべき大型遺物は、発泡ウレタンで固めて取り上げた後に保存処理を実施した。

土器の洗浄・注記、木製品のランク分け・台帳作成などの1次整理作業は、発掘現場にて平成11年度から13年度まで実施した。接合・実測・トレースなどの2次整理作業は平成12年度から開始した。平成12年度は土器の接合と実測作業を、平成13・14年度は土器の接合、土器・木製品・石器の実測、遺構図版作成、文章執筆などを行った。平成15年度は遺物トレース及び土器のカウント、文章執筆が主であり、後半には遺物の収納作業を行った。平成16年度は主に編集作業を実施した。

発掘調査及び整理作業の体制は以下の通りである。

理事長	村木光男(平成11年度)、服部卓郎(平成12～14年度)、 日比治男(平成15・16年度)
-----	--

副理事長兼事務局長	高橋宏之（平成15・16年度）
副理事長	平光明彦（平成15・16年度）
専務理事兼事務局長	原隆男（平成11・12年度）、成戸宏二（平成13・14年度）
常務理事兼所長	福田安昭（平成15・16年度）
常務理事兼経営部長	二山晃（平成11・12年度）、福田安昭（平成13・14年度）
経営部次長兼経営課長	坂東隆（平成11・12年度）、福田照行（平成13・14年度）
経営課長	川瀬崇敏（平成15・16年度）
調査部長	山元敏治（平成11年度）、高橋幸仁（平成12年度）、武藤貞昭（平成13～15年度）、川部誠（平成16年度）
調査部次長	高橋幸仁（平成11年度）、武藤貞昭（平成12年度）、片桐隆彦（平成13・14年度）
担当調査課長	片桐隆彦（平成11・12年度）、飯沼暢康（平成12年度）、柘植卓伸（平成13年度）、高木徳彦（平成13～15年度）、藤岡比呂志（平成16年度）
担当調査員	堀真（平成11～13年度）、藤岡比呂志（平成11・12年度）、笹木幸司（平成11～14年度）、早野壽人（平成11・12年度）、高屋嘉文（平成11年度）、高木徳彦（平成11・12年度）、林芳樹（平成11・12年度）、後藤慎二（平成11年度）、青木健太郎（平成11年度）、野村元次（平成11・12年度）、澤村雄一郎（平成11・12年度）、近藤大典（平成11～15年度）、長谷川幸志（平成11年度）、鈴木隆雄（平成12～13年度）、河瀬実浩（平成12年度）、小野木学（平成12～16年度）、鶴飼高男（平成13年度）、伊藤利巳（平成13年度）、松岡千年（平成14年度）、山内裕行（平成15年度）、平田篤志（平成15年度）
整理補助調査員	田中旨徳（平成11～13年度）、河村千寿（平成13年度）
現地作業従事者	（平成11年度）青木修、朝倉明美、安宅邦子、飯尾かをる、飯田重夫、生駒朝子、生駒勝美、生駒治、生駒豊子、生駒寛、伊佐治勝美、伊佐治庸三、石黒真由美、市川修、市原豊、伊藤智鷹、伊藤守、伊藤善雄、井上実、今井安輝子、今井啓介、今井長治郎、今尾一明、岩崎賢治、岩瀬多喜男、岩田秋夫、岩田昭子、岩田都夫、岩田稔、宇野京子、梅田常磐、押井正行、太田美代治、大塚由美子、大山敏郎、大脇泰一、岡本剛、小川みどり、奥村かなゑ、奥村圭子、奥村芳一、小栗虎一、尾関勇三、小田原洋子、加木屋澄子、片桐小夜子、加藤恵子、加納幸三、川合津加恵、川合伸子、河野勇士、木下昭平、木村しま子、工藤菊千代、熊澤喜三郎、桑原正文、薫田由紀子、交告幸夫、五木田かち子、興道子、小島鋭夫、小出鎮、後藤慶治、小林文男、駒島薫、斉藤富雄、坂下盈彦、佐合久孝、佐々木一、佐々木すみ子、佐々木豊、笹栗洋子、佐藤和江、佐藤鋼二郎、佐藤武夫、佐藤千寿子、佐藤文男、柴田竜彦、嶋木八州男、清水孝昭、白木美和子、城座喜代子、新藤実雄、菅原和郎、杉谷淳、鈴木二郎、鈴木敏子、鈴木吉彦、須田良子、関口春男、瀬ノ上一彦、糟谷幸子、高井昌子、高久裕子、高野勉、高橋恭三、鷹見明美、田上八郎、田川研二、竹内桂子、竹村春男、田中加代子、田辺美智代、谷口純一、田端豊、多和田伴子、塚本和恵、柘植富貴男、戸田義昭、

富田隆子、富田レイ子、中嶋成美、中嶋吉文、長田民子、永田秀美、仲柴間智史、中野青平、中村光嗣、新美貴美子、西尾多嘉子、西堀正邦、野口アイ子、野中照夫、長谷川照美、原弘之、平井信義、平田アヤ子、平田鐘次、平光進、福田快彦、藤井智美、藤崎工、藤田順一、藤原守、船橋久美子、堀田焯子、前田正枝、松田義博、松本元治、三浦正芳、水野喜久二、水野耕治、宮川正徳、三輪誠治、村井好子、村田初音、矢崎久子、安江健、安田栄学、藪下烈、横山美代江、吉岡夕紀子、吉田津多子、吉田尚史、鑑家徳芳、若尾忠男、渡辺真紀子、渡辺美年子、渡辺由紀、渡邊民平、箭野欣一

整理作業従事者 秋良初枝、家岡久美、石原美帆、市橋美栄、伊藤好子、乾生子、今尾さち子、今津理、岩崎いつわ、岩田のり子、大野美和子、小木曾美智、小澤真紀子、春日井典子、加藤久枝、加藤里佳、加納加代子、木下晴代、國井悦子、後藤幸子、酒衛成功、菅原祐子、高田桂子、高橋紀美、竹部泉、棚橋絹代、谷口美奈子、常富由美子、中島律子、丹羽香、丹羽和代、野尻みどり、野々村みさと、橋本法子、蜂矢由美、原幸子、日置美香、樋口弘子、日比野登美子、広瀬みどり、堀孝浩、堀三恵、松久三香、三輪典子、村瀬俊哉、藪下賀代子、山口百合子、山下恭子、山田純子、山田弘子、山本裕子



1 表土掘削風景



2 遺構掘削風景



3 測量風景



4 現地説明会風景

発掘調査 日誌抄

平成11年度

- 5月24日 調査開始。
6月28日 1次整理作業開始。
6月30日 大雨により調査区大半が水没(～1日)。
7月26日 川辺町立川辺中学校生徒1名体験学習。
8月2日 A7地点にて石製紡錘車出土。A4地点のIV層上面にてSH1・SA1検出。
8月5日 小学生5・6年生を対象としたタイムスリップ探検隊による発掘体験と整理作業体験実施。
8月6日 SD15より勾玉出土。SB1より小玉が多数出土。
8月24日 SD18の検出を終了し、中世の方形区画溝であることが判明。
9月10日 第1回空掘(9地点)。
9月28日 A10地点の掘立柱建物跡群検出開始。
10月11日 A2・A3地点にて多数の木制遺構を検出。
10月13日 B1地点にて弥生中期の竪穴住居跡群検出。
10月20日 A10地点にて白色砂の盛土検出(SD46)。道路遺構ないし広場と認識。
10月22日 SW14より馬鍬出土。
10月28日 第2回空掘(3地点)。
11月2日 A5地点にて竪穴住居跡群検出。
11月5日 SD18の昆虫遺体同定のための土壌サンプル採取。
11月8日 SD18より「仁王会」木簡など出土。
11月10日 坪地の道路遺構(SD1)検出。
11月11日 第3回空掘(2地点)。
11月17日 南山大学教授伊藤秋男氏による現地指導。
11月18日 A8地点にて掘立柱建物跡群検出。
11月19日 奈良国立文化財研究所松村恵司氏による現地指導。
11月26日 三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導。SK52の検出が終了し、山茶碗が多数出土。
12月8日 第4回空掘(4地点)。
12月10日 SD208より人形代出土。以後、馬・舟などの形代が出土する。
12月11日 現地説明会実施。参加者約400名。
12月16日 道路遺構(SD1)掘削。8世紀の須恵器が出土し、古代の坪地の道路と認識。
12月17日 SW37より畦畔補強材として茅負出土。
12月20日 国際日本文化研究センター教授宇野隆夫氏による現地指導。
12月24日 SK52周縁部より杭列検出。

- 1月17日 SE1より山茶碗や木製品が多数出土。
1月18日 SB7より石燈丁3枚が重なって出土。
1月26日 第5回空掘(3地点)。
1月27日 NR95よりナスピ型壺とともに人形代出土。
1月29日 NR13より管玉と大足出土。
1月31日 SB10より銅鏃出土。A11地点にて弥生中期の水田畦畔検出。
2月3日 第6回空掘(5地点)。
2月9日 奈良国立文化財研究所高橋克壽氏による現地視察。
2月10日 第7回空掘(3地点)。
2月15日 SW30検出。大規模な木制遺構であることを確認。
2月17日 SB9の柱穴内より石燈丁出土。
2月18日 第8回空掘(1地点)。SW37より矢板列、網代などが出土。
2月21日 SD15より土師器壺、高杯などが集中して出土。
2月22日 NR5より弥生中期の土器とともに鉄・泥除・整弁・横槌・盤などの木製品がまとまって出土。C9地点にて古代の掘立柱建物跡群検出。
2月25日 第9回空掘(2地点)。SB2床面より管玉出土。
2月28日 SK40より縄文土器出土。
2月29日 第10回空掘(6地点)。
3月7日 第11回空掘(8地点)(～8日)。
3月10日 調査終了。
3月24日 1次整理作業終了。

平成12年度

- 7月3日 調査開始。
7月5日 A15地点にて道路遺構(SD46)検出。
7月11日 B2地点で畝状遺構検出。
7月13日 各務原市立中央中学校生徒24名体験学習(～14日)。
7月28日 第1回空掘(17地点)。
8月1日 小学生5・6年生を対象としたタイムスリップ探検隊による発掘体験と整理作業体験実施。
8月8日 坪地溝(SD252など)を検出。
8月10日 可見市立中部中学校生徒1名体験学習。
8月22日 A12地点の道路遺構と同一遺構面にある畦畔の検出終了。
8月28日 E5地点にて竪穴住居跡群を検出。
9月5日 SK109より伊勢型鍋や箸などが出土。土器埋納遺構と認識。
9月12日 大雨により調査区水没(～13日)。
9月20日 A11地点にて遺存状態のよい木制遺構

- (SW25)検出。
- 10月4日 第2回空撮(14地点)。
- 10月6日 南山大学教授伊藤秋男氏による現地指導。
- 10月17日 NR112より一木造りの糸巻き状木製品出土。
- 10月19日 各務原市立中央中学校生徒21名体験学習。
- 10月27日 愛知県シルバーサービス振興会40名現地見学。
- 11月6日 三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導。
- 11月8日 南山大学教授伊藤秋男氏による現地指導。
- 11月9日 NR119より把手付き盤出土。
- 11月10日 愛知教育大学名誉教授水野時二氏による現地指導。
- 11月19日 D1地点にて弥生後期の水田畦畔検出。
- 11月24日 第3回空撮(9地点)。
- 11月30日 NR89より扉出土。NR79より土師器や須恵器が多量に出土。
- 12月6日 SB17にて炭化材多数出土。規模が大きい焼失家屋であることが判明。
- 12月19日 第4回空撮(12地点)。
- 12月20日 京都大学大学院教授上原真人氏による現地指導。NR86より須恵器とともに完形の陶器出土。
- 12月21日 NR57より人形代出土。
- 12月22日 NR57より美濃国刻印須恵器出土。
- 1月10日 国際日本文化研究センター教授宇野隆夫氏による現地指導。
- 1月16日 奈良女子大学大学院教授塩瀬和雄氏による現地指導。
- 1月18日 南山大学教授伊藤秋男氏による現地指導。NR106より人形代、馬形代、刀形代などが出土する。
- 2月8日 第5回空撮(8地点)。
- 2月10日 現地説明会実施。参加者556名。
- 2月14日 NR59より台付甕とともに二又鍬と槽出土。
- 2月20日 A11地点にて弥生中期の水田畦畔検出。
- 2月21日 E5地点にて竪穴住居跡群直下よりSH50を検出。
- 2月27日 第6回空撮(10地点)。
- 3月5日 御嵩町兼山町学校組合立共和中学校生徒85名現場見学。
- 3月9日 調査終了。
- 3月23日 1次整理作業終了。

- 平成13年度
- 5月21日 調査開始。
- 6月28日 NR29の護岸礫群検出。
- 7月6日 SW43より体部外面に墨書がある山茶碗出土。
- 7月23日 NR28より美濃国刻印須恵器出土。
- 7月24日 SW43の石材鑑定実施。
- 7月25日 山梨文化財研究所畑大介氏による現地指導。
- 7月26日 同志社大学鶴柄俊氏による現地視察。
- 7月30日 国際日本文化研究センター教授宇野隆夫氏による現地指導。
- 7月31日 第1回空撮(4地点)。
- 8月2日 トレンチ調査にてSW55の網代検出。
- 9月7日 第2回空撮(5地点)。
- 10月3日 第3回空撮(3地点)。
- 10月4日 SD100より多数の木製品や土師器が出土し始める。
- 10月12日 各務原市立中央中学校生徒15名体験学習。
- 11月7日 SW54より人形代出土。
- 11月9日 第4回空撮(5地点)。
- 11月12日 現場における1次整理作業開始。
- 11月15日 奈良文化財研究所箱崎和久氏による現地指導。
- 11月20日 SW55の網代の全貌が明らかとなる。
- 11月22日 SH30上面で炭化物と山茶碗集積検出。
- 11月26日 国際日本文化研究センター教授宇野隆夫氏による現地指導。
- 11月28日 南山大学教授伊藤秋男氏による現地指導。
- 11月29日 京都女子大学教授川本重雄氏による現地指導。
- 12月5日 SW72より刃と柄が装着された鍬と梯子出土。
- 12月18日 第5回空撮(5地点)。
- 12月22日 現地説明会実施。参加者341名。
- 1月18日 NR122より土師器と木製品が多数出土し始める。
- 1月31日 第6回空撮(6地点)。
- 2月4日 御嵩町兼山町学校組合立共和中学校生徒31名体験学習。
- 2月13日 葎・網代の取り上げ作業実施(～15日)。
- 2月21日 第7回空撮(3地点)。
- 3月1日 SW76内に構造材が多数あることが判明。
- 3月8日 調査終了。
- 3月14日 1次整理作業終了。
- 3月25日 現場撤収。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

本遺跡は可見川により形成された沖積平野上、及び遺跡の南側に展開する浅間丘陵地の扇状地上に位置する。可見川は流路総延長26.2kmで、水源が瑞浪市にあり、可見市にて木曾川に合流している。当遺跡付近では東から西へ屈曲して流れており、過去に数回氾濫し、その度に河道が変化している。そのため、現在でも旧河道の痕跡と自然堤防が至るところで確認できる。可見川によって形成された沖積平野は面積が広く、その勾配は緩い。これは、可見川の河口付近に木曾川泥流が堆積して埋没谷が形成されたためと考えられている。沖積平野の北側には御嵩山地、南側には浅間丘陵地が東西方向に延びている。これらの山地・丘陵地は大部分が傾斜地20°以上の斜面で構成され、丘陵全体が緩斜面でその高度は260～350mである。その基盤となる地質は、「中村層」「平牧層」とよばれる凝灰質砂岩を主として泥岩、礫岩、チャート、塊状砂岩などから成り、亜炭層を挟み込んでいる(図6)。

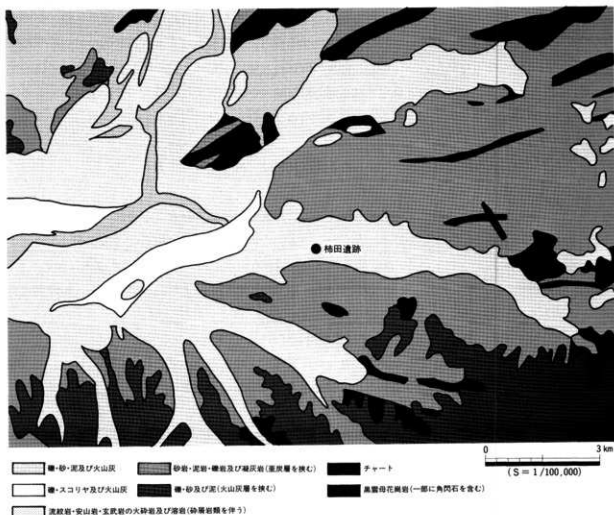


図6 遺跡周辺の地質図

第2節 歴史的環境

周辺の歴史（中世室町時代まで） 柿田遺跡の所在する可見市及び可見郡御嵩町は、古代においては美濃国可見郡に属する。可見郡は、従来、正倉院文書中の天平勝宝2年(750)4月22日美濃国司解に「可見郡駅家郷」(『大日本古文書』所収)とあるのを初見としたが、1998年奈良県明日香村飛鳥池遺跡から出土した丁丑年(天武天皇6年:677)の紀年を持つ木簡に「加尔許久々利五十戸」(奈文研1998)とあって、7世紀後半には行政区画として存在したことが明らかとなった。平安時代に編纂された『和名類聚抄』(以下、『和名抄』と略称する)には各国の郡及び郷名が記載されているが、可見郡には可見・郡家・日里・大井・矢集・駅家・池田の7郷がみえる。柿田遺跡は、『大日本地名辞書⁴¹⁾』や蘆田伊人氏の明知荘の荘域に関する研究(蘆田1913)を参考にすると、郡家郷内に存在すると考えられる。郡家郷という郷名は、『和名抄』によると全国に15、美濃国内では大野・厚見と可見郡の3箇所に見える。郡の行政拠点である郡家に由来する郷名であると考えられ、郡家郷内に存在すると推定される柿田遺跡周辺に、可見郡郡家があった可能性が高いといえる。また『延喜兵部省式』諸国駅伝条⁴²⁾(新訂増補国史大系本による。以下、以外の出典は特に記す)や郷名に駅家郷がみえるように、可見郡には駅家が存在した。駅家は駅路に設定された施設である。美濃国は東山道に属していたが、駅家の存在から可見郡内を東山道が通過していたことがわかる。今のところ、可見郡内における東山道の痕跡やルートは、地名・地図などをもとにした歴史地理学的検討、発掘調査による考古学的検討のいずれによっても明らかになっていない。しかし、郡家の置かれた場所が交通と深い関わりのあることには通説化しており、郡家郷の地と推定される御嵩町字顔戸を通過して江戸時代の中山道があることから、東山道が同ルートであったとする説が穏当であろう。柿田遺跡近辺を東山道が通過していたことは間違いなさそうである。

さて以上の他に古代可見郡について知られる主な史料は、次のとおりである。

『日本書紀』景行天皇4年2月甲子条⁴³⁾

ここには景行天皇が美濃国泳宮に行幸し、そこで崇神天皇が尾張大海女媛との間に儲けた八坂入彦命の女子、八坂入姫を娶るまでの伝承が記されている。この泳宮の場所は地名に「久々利」が残ることから可見郡内に比定されている。比定通り可見郡に関わる伝承であった場合、このように伝えられ、また『日本書紀』に採録されたことは、『日本書紀』編纂時、もしくはそれ以前における大和政権と当地との関わり的一端を示しているのではないだろうか。

『類聚国史』巻85 延暦19年(800)4月乙酉条(17日)

ここに見える美濃国司の報告のなかで、可見郡は賀茂・土岐・惠奈郡とともに「居山谷際。土地塊塊。雖比郡有年。而損荒常多」、すなわち山谷際にあって土地は痩せ、豊年といえども損荒は常に多いと表現されている。

天喜2年(1054)2月23日官宣旨案(『平安遺文』古文書編第3巻 1963)

「可見郡瓶前之駅」と出てくる。この駅名はこのみの記述で、先述した『延喜式』などの駅家との関係は詳細は不明である。

以上、特に可見郡に限ったことではなく、多くの地方がそうであるように古代の様子を知る史料は非常に少ない。景行天皇4年の記事から大和政権と関わった勢力のある地と評価するか(大和ではな

く尾張との関わりとしてもよい)、延暦19年の記事から荒廃した地域像を導き出すかなど、極端な地域像となりかねない状態である。発掘によって垣間見られる姿が、古代における柿田周辺の可見郡をかかう大きな資料となることが期待される。

なお可見郡内に居住した古代氏族であるが、断片的に古い順に物部(前述飛鳥池木簡)、守部(前述天平勝宝2年文書)、長谷部(『日本三代実録』貞観5年(863)9月13日条)等の氏名が伝わり、縣名から矢集氏、池田氏の存在が推測されている⁴⁴。郡領氏族については未詳であるが、承暦2年(1078)12月22日大宰大貳宅解并左京職等證判(『平安遺文』)に郡判を加えた人物として「主帳壬生」、「郡目代秦」がみえる。

さて可見郡内には、明知・帷・荏戸・久々利・大井戸の各荘園が知られる。先述した蘆田氏の研究を参考にすると柿田遺跡は明知荘内に立地し、調査で明らかになった遺構・遺物の一部は明知荘時代に属する。明知荘は、柿田遺跡を考える上で非常に重要な位置にある。そこで、簡単に明知荘について文献からわかる展開をみてみたい。

明知荘は、「明地」「明知」「明智」と表記されるが、史料上では12世紀前半までは「明地」、12世紀後半から15世紀中頃までは「明知」、「明知」と少し重なるが15世紀中頃以降は「明智」とみえる。本書では、アケチノショウの表記にあたって、特定史料の引用時以外は、調査によって確認できた主たる遺構群と同時期の史料にみえる「明知」を用い、明知荘とすることにする。

明知荘の史料上の初見は、承暦2年(1078)12月22日大宰大貳宅解并左京職等證判(『平安遺文』)である。これにより、藤原実頼(900-970。10世紀中頃の摂関)の荘園で彼の子孫に伝領されていたこと、所在と四至、不輸の地であったこと、近代は荒廃していたことなどがわかる。所在と四至については、

(前略)

在美濃国可見郡四〔白カ〕理・郡家兩郷

四至西至美濃水口河原、東至藤原山、南至伊香、北至御嵩

(後略)

とみえる。蘆田伊人氏によると、

今の中村の西境より、西西南の方、廣見村に亘り、今渡町の東部に連なる、北は、可見河を以て、伏見村と境し、南は、山によりて平牧村と隣す、東西約四十五六町、南北十四五町の、可見河に沿へる狭長の地区を占め、下恵土の一部と、柿田・澁上・平貝戸・瀬田・石森・石井・小豆田・伊香等の八大字を、其域内に包含し、中村の大字顔戸の一部をも、亦之を統へ居りしもの、ごとし

とされている(蘆田1913)。現在の地名でみると御嵩町大字顔戸から可見市広見にかけての可見川の左岸にあたる(一部右岸に及ぶ)。蘆田氏の比定には特に異論もなく、おそらくその通りであろう。柿田遺跡は、その比定地内においてはかなり東端に近い場所になるが、最も大きな耕地面積を確保できる場所に位置している。

明知荘は、その後、藤原通俊の時に石清水八幡宮護国寺第23代別当頼清に伝えられる。そして頼清の子、光清の代になった、天永3年(1112)白河院によって石清水内に大塔が建立されるが、元永元年(1118)にこの大塔に関わる仏燈堂油料に明知荘の地利が充てられることになる。そのことを記す

元永元年12月28日官宣旨（『平安遺文』）によると、この時あらためて四至傍示が打たれ、また不輪祖田として認められている。石清水八幡宮大塔院領として荘園の経営が再出発したようである。なお大塔院では僧侶6口が毎日、法華経1巻の説誦と仁王講一座を勤めていたが、それは明知荘からの料物によっている⁹³。

建久7年（1196）11月美濃国明知荘檢注状（『平安遺文』）によると、明知荘は総じて187町6段300歩あり、そのうち荒田・損田が75町余りあることがわかる。また同文書には預所源、下司藤原、公文僧、預物部の署名が見える。

明知荘は、大塔院領として、以後、曲折はあるが護国寺別当に伝えられる。その伝領過程を記す文書が残っているが、嘉禎三年（1237）の文書以降、応永20年（1413）までの史料がなく、その間は伝領過程のみならず明知荘の推移もよくわからない。

応永20年9月10日美濃国明知上下郷領家職契状案（『平安遺文』）によると、明知荘は上郷と下郷に区分されるようになっている。またこのころの史料は年貢の徴取をめぐるものが多く、それが次第に困難になっていった様子がわかる。

以上は、明知荘に関わって石清水に残る文書からみた明知荘の展開であるが、その他土岐氏の一族が明智に入り土岐明智を称したこと、顔戸八幡神社*棟札（長祿3年：1459）に「地頭御代官妙椿上人」（可児町1980）と当時権勢をふるった斎藤妙椿が見えることから、そのころには斎藤氏の支配下に置かれていたことなどが知られる。斎藤妙椿は、柿田遺跡の北方の顔戸城に隠居していたことでも知られており、明知荘が拠点の一つであったことがうかがえる。

顔戸南遺跡・金ヶ崎遺跡・前山2号古墳・杉ヶ洞古墳群の調査 柿田遺跡の調査は、東海環状自動車道建設に伴い行われたが、同事業により北接する顔戸南遺跡、遺跡の南部にある前山古墳群、杉ヶ洞古墳群、遺跡の北、可児川を挟んで対岸にある金ヶ崎遺跡の発掘調査を当センターで実施している。いずれの遺跡の成果も今回の柿田遺跡の調査内容と深く関わるため、ここで簡単に各遺跡の概要をまとめておきたい。

顔戸南遺跡は、平成9年度に発掘調査を行い、平成12年（2000）3月に報告書を刊行した。調査によって古墳時代、古代、中世の3時期にわたる遺構群を確認した。古墳時代は水田と集落跡、古代～中世は条里型地割に伴う道路状遺構と水田、集落跡がみつきり、特に古墳時代ではしからみ状遺構（本書では水制遺構）、古代では道路状遺構の発見が貴重な成果となった。また溝・自然流路内から大量の土器とともに木製品が出土し、遺跡周辺のみならず県内ではこれまであまり発見例がなかっただけに注目された。柿田遺跡の調査に際しては、上記の成果に対し、各時期の遺構群の面的な広がりや遺物の質的增加など、そして大面積の調査による広範囲の歴史の変遷が明らかになることが期待された。

金ヶ崎遺跡は、平成12年度に発掘調査を行い、平成15年（2003）3月に報告書を刊行した。調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡や方形周溝墓・前方後方形周溝墓、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中近世墓群が見つかった。とくに弥生時代末～古墳時代初頭の墓の様相が判明したことは、遺跡の西でこれまで確認されていた前方後方墳で構成される伏見古墳群、墳丘長が約73mに達する長塚古墳（前方後円墳）を含む前波古墳群への変遷を知る上で大きな成果となった。また113基に及んだ中近世墓群も、その時代の社会を考える上で貴重な成果となった。柿田遺跡では確認できなかった各時代の墓の様相が明らかとなっており、その成果とあわせることで周辺の社会のあり方を復

原する材料を得たといえよう。

前山2号古墳は、平成12年度に発掘調査を行い、その結果、古墳時代後期（6世紀後半）の横穴式石室を主体部とする円墳であることがわかった。石室からは玉類、耳環、鉄製品、須恵器など出土した。

杉ヶ洞古墳群は、5基からなる古墳群で1号古墳は昭和48年（1973）に可見町教育委員会によって発掘調査が行われており、当センターでは平成12年度に3号古墳と新たに発見された5号古墳の発掘調査を行った。3号古墳は古墳時代後期（6世紀末～7世紀初頭）の横穴式石室を主体部とする円墳で、石室からは金環、馬具、刀子、鉄鎌などが出土した。5号古墳は古墳時代後期（7世紀前半）の横穴式石室を主体部とする円墳で、石室からは金環、刀子、鉄鎌などが出土した。前山2号古墳、杉ヶ洞古墳群ともに柿田遺跡とは近接した位置にあり、時期的にも重なることからその被葬者像は柿田遺跡の古墳時代後期を理解する上でも重要である。

周辺の遺跡 柿田遺跡は、A区の一部が可見郡御嵩町、残りの部分が可見市に属する。『改訂版岐阜県遺跡地図』（1990）によると、御嵩町には240を、可見市には340をそれぞれ超える遺跡が記されている。以下、それらの遺跡の内、柿田遺跡周辺に限り各時代毎に主な遺跡をみてみたい。

旧石器時代の遺跡は、柿田遺跡周辺ではいまだ発見されていない。なお金ヶ崎遺跡では発掘調査によってナイフ型石器1点が出土している。

縄文時代については、集落遺跡は見つかっていないが、顔戸南遺跡において縄文後晩期の土器が埋まっていた土坑を確認している。

弥生時代については、金ヶ崎遺跡で竪穴住居跡や方形周溝墓が見つかった。この他、可見市瀬田の神崎山遺跡では弥生後期の盛土を伴う方形土坑が発見され、そこから土器とともに石砲丁が出土した。また、可見市久々利からは後期の突線紐5式銅鐸が出土している。

古墳時代については、顔戸南遺跡の調査によって弥生時代末～古墳時代前半の集落跡や水田が明らかになっている。古墳は、図7のように当遺跡南北の丘陵上に数多く確認されている。南側の丘陵では先述した杉ヶ洞古墳群の一部の他、神崎山古墳が発掘調査されている。6世紀～7世紀前半に属する円墳がほとんどと考えられ、柿田遺跡における同時期の遺構・遺物と強い関わりがある。

古代は、顔戸南遺跡で条里地割の坪境となる道路状遺構の発見、金ヶ崎遺跡の掘立柱建物跡などがある。柿田遺跡の調査においても顔戸南遺跡で発見された道路状遺構の延長が確認できること、またその造成時期をうかがうような資料がみつかることが期待された。

中世は、顔戸南遺跡で水田が、金ヶ崎遺跡では中世墓群などが確認できた。また柿田遺跡の北方には発掘調査は行われていないが顔戸城跡がある。

- * 1 吉田東伍(1900)では、「願戸」は郡家の遺称とし、同地を『和名抄』の可見郡郡家郷の地に比定している。柿田遺跡の北部を含む北側(御嵩町側)の字名は「願戸」である。
- * 2 駅馬は8疋、伝馬は4疋と規定されている。
- * 3 「万葉集」にも同様の伝承を伝える歌がある。
- * 4 『濃飛両国通史』。なお長瀬仁氏は賀茂郡に盤踞するカモ県主はもと可見郡を根拠地とし、後、賀茂郡に移ったし(長瀬1979)、また尾関章氏は可見郡の郡名をワニ氏に由来する可能性を考えている(尾関1998)が、いずれも史料的には確証はない。
- * 5 その史的意義については、上島亨「中世宗教支配秩序の形成」『新しい歴史学のために』[242・3合併号 2001 参照。柿田遺跡出土の「仁王会」木簡についても言及されている。
- * 6 願戸八幡神社は、創建を10世紀前半と伝えるが、その所伝は疑わしく、おそらく明知荘が石清水八幡宮護国寺の所領となった後、荘園の鎮守として勧請されたと考えられる。

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名(時代)	番号	遺跡名(時代)	番号	遺跡名(時代)
1	柿田遺跡(縄文～近世)	28	七ツ塚古墳群(古墳)	55	真名田古墳(古墳)
2	野中古墳(古墳)	29	粘り塚古墳(古墳)	56	鈴ヶ森古墳(古墳)
3	西寺山古墳(古墳)	30	大洞白山塚古墳(古墳)	57	雷神山古墳(古墳)
4	長塚古墳(古墳)	31	年事ヶ平1～2号古墳(古墳)	58	山の神古墳(古墳)
5	長畑1号～2号古墳(古墳)	32	稲荷山古墳群(古墳)	59	今井白山神社1～4号古墳(古墳)
6	新町墓地古墳(古墳)	33	青木横穴墓(古墳)	60	宝塚古墳(古墳)
7	浦畑遺跡(中世～近世)	34	金ヶ崎遺跡(弥生～近世)	61	天神塚古墳(古墳)
8	上恵土城跡(中世)	35	比衣金ヶ崎古窯跡群(平安)	62	天神ヶ森古墳(古墳)
9	桐野2号古墳(古墳)	36	市瀬1～6号古墳(古墳)	63	キッコノ洞古墳(古墳)
10	桐野1号古墳(古墳)	37	比衣丸山古墳(古墳)	64	禪堂平西古墳(古墳)
11	小貝土1号古墳(古墳)	38	打越古墳群(古墳)	65	愚溪寺天神山古墳(古墳)
12	生沢古墳(古墳)	39	陣ヶ峰群集墳(古墳)	66	禪堂平古墳(古墳)
13	大塚古墳群(古墳)	40	坂本天神山古墳(古墳)	67	愚溪寺稲荷古墳(古墳)
14	伏見狐塚古墳(古墳)	41	諏訪神社古墳(古墳)	68	願戸南遺跡
15	覚根古墳(古墳)	42	坂本古墳群(古墳)	69	願戸山ノ神遺跡(弥生・古墳)
16	東寺山1号古墳(古墳)	43	願戸城跡(中世)	70	柿田古墳(古墳)
17	東寺山2号古墳(古墳)	44	花塚古墳(古墳)	71	前山古墳群(古墳)
18	新免知古墳群(古墳)	45	願戸藤塚古墳(古墳)	72	杉ヶ洞古墳群(古墳)
19	山田横穴1号～7号古墳(古墳)	46	新木野古窟跡(平安)	73	北ヶ洞2号古墳(古墳)
20	伏見白山神社古墳(古墳)	47	恵観寺古墳群(古墳)	74	北ヶ洞1号古墳(古墳)
21	伏見庵寺(白鳳)	48	庚申塚古墳(古墳)	75	馬乗洞古窟跡(古墳)
22	伏見寺東古窟跡(奈良・平安)	49	大平山ノ上古墳(古墳)	76	柏之木経塚(近世)
23	高倉山古墳(古墳)	50	神宮古墳(古墳)	77	大王寺南古墳(古墳)
24	檢下古墳(古墳)	51	長瀬山古墳(古墳)	78	大王寺古墳(古墳)
25	神崎山古墳(古墳)	52	新木野群集墳(古墳)	79	池西古墳(古墳)
26	しゃもじ塚古墳(古墳)	53	新木野古墳(古墳)	80	天神ヶ森古墳(古墳)
27	菓本古墳(古墳)	54	菟淵池古墳(古墳)	81	柿田前山遺跡(古墳～中世)

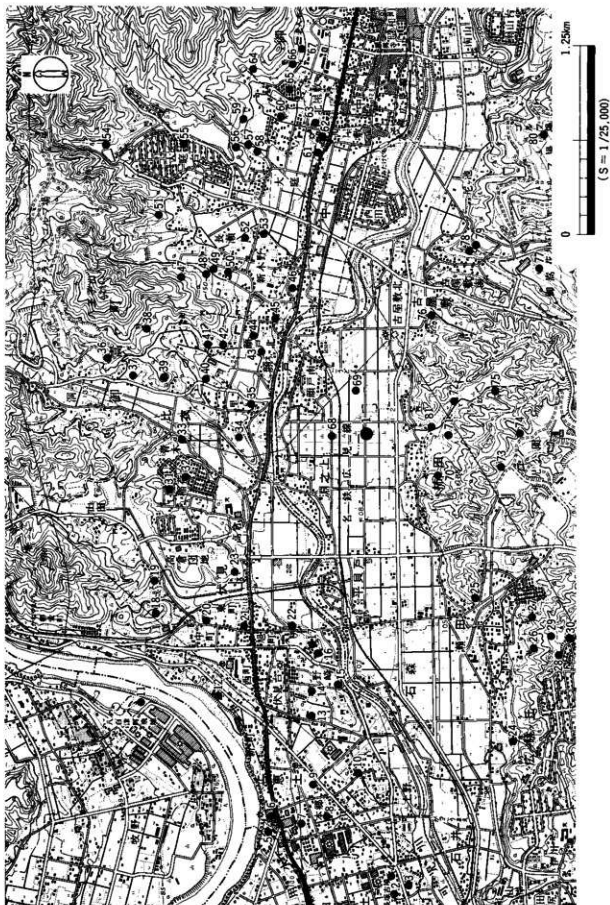


图7 周边遺跡分布图

第3章 基本層序

基本層序は主に平成11年度の調査地点を基準としてI層からX層までを設定し、各層内において層相の違いからa、bなどに細分した。

当遺跡は主に可見川によって形成された氾濫原堆積層と、南の丘陵より運ばれた扇状地性堆積層から成る。両者の大きな違いは基盤となる地山の層相の差であり、前者は灰白色粘土(Ⅷ層)、後者は灰黄褐色～暗青灰色粘土(Ⅸ層)で、後者に砂岩粒が多く含まれる。Ⅸ層は調査成果と、第8章第9節で使用した字絵図を比較した結果、その範囲は主に南側の丘陵裾部よりさらに北側まで広がっていることが明らかとなった(図10)。このⅨ層の北限ライン付近は標高が最も低くなり、Ⅱb層、Ⅲb層、Ⅴb層など、氾濫原側でみられない土が堆積する。

各地点の基本層序は表3の通りである。しかし、同一層名を付してある場合でも、距離が離れた地点の層相は異なることがあるため、後述する各層の記載には「模式地」として、層相、土色、包含物を記した地点名を示した。遺跡全体の基本層序(表2)では、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』(趙1995)に従い、検出遺構を上面検出遺構、下面検出遺構、地層内検出遺構の3種類に分けて示した。遺構確認面はⅡa、Ⅱb～Ⅲa、Ⅳb、Ⅳc、Ⅳd、Ⅴa、Ⅴb、Ⅵa、Ⅵb、Ⅶb、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹの各層上面である。なお、各地点により堆積状況や遺構検出が異なるため、A8地点、A12地点、A16地点の層序模式図を図9に示した。また、各地点の遺構確認面(調査面)と層位の関係を表4に示した。

以下、I a層から順に記載する。

I a層(褐灰色砂質シルト:10YR5/1)

平均層厚は20cmで、直径5mm程度の円礫と微砂を少量含む。この層は主に近現代の水田耕作土であり、層中には鉄分斑が多くみられる。A5地点を模式地とし、近現代に畑地であった地点では黒色シルトが、また宅地であった地点では礫の盛土がある。遺物は灰釉系陶器と瀬戸美濃連房が出土している。

I b層(褐灰色シルト:10YR5/1)

平均層厚は15cmで、直径2～3mm程度の礫を少量含む。この層は主に近現代の水田敷土であり、層直上にはマンガン斑が集積している。A5地点を模式地とし、近現代に畑地や宅地であった地点以外の大半の場所で確認できる。遺物は灰釉系陶器と瀬戸美濃連房が出土している。

Ⅱa層(黄灰色シルト:2.5Y6/1)

平均層厚は10cmで、粗砂と直径約3mmの小礫を幾つか含む。この層は主に江戸時代の水田耕作土であり、層直上にはI a層から垂下した鉄分斑が集積している。A5地点を模式地とし、丘陵及び近世に宅地であった地点以外の場所で確認できる。遺物は灰釉系陶器と瀬戸美濃連房が多く出土している。

Ⅱb層(オリープ黒色シルト:5Y3/2)

平均層厚は5cmで、粗砂と直径約3mmの小礫を全体的に含む。この層は主に中世後期の水田耕作土であり、層直上にはⅡa層から垂下した鉄分斑が集積している。A16地点を模式地とし、主にB～D区などの扇状地性堆積の外縁部に広がる。遺物は中世後期の灰釉系陶器が多く出土し、瀬戸美濃大瀧

がわずかに含まれる。なお、III a 層とは同時異相の関係にある。

III a 層 (暗灰黄色～灰色シルト：2.5Y4/1-2)

平均層厚は5cmで、粗砂と直径約3mmの小礫を全体的に含む。この層は主に中世後期の水田耕作土であり、層直上にはII a 層から垂下した鉄分斑が集積している。A 5 地点を模式地とし、氾濫原堆積の北東側にあるA区に広がる。遺物は中世後期の灰釉系陶器が多く出土している。

III b 層 (オリーブ黒色粘土：5Y3/1)

平均層厚は5cmで、白色砂岩粒、粗砂を全体的に含む。この層は粘性が極めて高く、白色砂岩粒が含まれることから識別が容易である。D 8 地点を模式地とし、主にB～D区などの扇状地性堆積の外縁部に広がる。遺物は中世後期の灰釉系陶器が多く出土している。

IV a 層 (黒褐色シルト：2.5Y3/1)

平均層厚は10cmで、直径約3mmの小礫をわずかに含む。D 9 地点を模式地とし、近現代において畑地であった地点を中心に広がる。遺物は土師器や須恵器、灰釉系陶器などが混在して出土している。

IV b 層 (青灰色シルト：5B5/1)

平均層厚は5cmで、長さ3cm程度の角礫を含む。この層はA区における方形区画内の盛土層であり、層直上には炭化物が0.5～1.0cmの厚さで堆積している。A 8 地点を模式地とし、A14地点まで広がる。遺物は中世前期の灰釉系陶器が多く出土している。

IV c 層 (褐灰色粘土：10YR6/1)

平均層厚は15cmで、粗砂を全体的に含む。この層は主に古代～中世初頭の水田耕作土であり、上面から柱穴や竪穴住居跡などが多く掘り込まれている。A12地点を模式地とし、部分的ではあるが調査区全域にわたって広がる。遺物は須恵器や土師器、灰釉陶器などが出土している。

IV d 層 (黒色粘土：5Y2/1)

平均層厚は5cmで、粗砂と砂岩粒を全体的に含む。この層は水田耕作土として使用されておらず、上面から柱穴や竪穴住居跡、溝跡などが掘り込まれている。C 2 地点を模式地とし、C 1 地点とC 9 地点で確認できた。遺物は古代の須恵器や土師器が出土している。

V a 層 (黒～オリーブ黒色粘土：2.5Y3/2、7.5Y2/1)

平均層厚は5cmで、砂礫をほとんど含まない粘性の高い粘土である。この層は古墳時代の自然流路の最終埋土であり、水田耕作土として使用されていない。A 1 地点を模式地とし、主に氾濫原堆積がみられる地点に広がる。遺物は古墳時代～古代の須恵器や土師器が出土している。

V b 層 (灰色シルト：5Y5/1)

平均層厚は10cmで、微砂を全体的に含む。この層はA16地点、D 1～D 3 地点などで古墳時代後期の水田耕作土として使用されている。A16地点を模式地とし、主に扇状地性堆積の外縁部や氾濫原堆積の中央付近に広がる。遺物は古墳時代の須恵器や土師器がわずかに出土している。

VI a 層 (暗オリーブ褐色粘土：2.5Y3/3)

平均層厚は5cmで、微砂を少量含む。この層は弥生時代後期の水田耕作土であり、上面には微砂層が堆積していた。D 1 地点を模式地とし、D 2・D 3 地点に広がる。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器がわずかに出土している。

VI b 層 (灰色シルト：N5/1)

平均層厚は5cmで、微砂をほとんど含まない。この層は弥生時代中期の水田耕作土である。A11地点を模式地とし、A5・B1地点に広がる。遺物は弥生時代中期の土器がわずかに出土している。

VII a 層 (灰オリーブ色粘土：5Y5/2)

平均層厚は5cmで、直径3cm程度の礫と粗砂を含む。A7地点を模式地とし、A2・A3・A10地点に広がる。遺物は縄文時代中期の土器がわずかに出土している。

VII b 層 (黄灰色シルト：2.5Y4/1)

平均層厚は3cmで、直径3cm程度の礫と粗砂を多く含む。A16地点のみで確認できた。遺物は縄文時代中期の土器がわずかに出土している。

VIII 層 (灰白色粘土：10YR7/1)

平均層厚は15cmで、微砂を含まない。この層は氾濫原における地山であり多くの遺構が掘り込まれる。A7地点を模式地とし、調査区の北側に広がる。

IX 層 (灰黄褐色～暗青灰色粘土：10YR4/1-2、5B4/1)

平均層厚は15cmで、砂岩粒を多く含む。この層は扇状地における地山であり多くの遺構が掘り込まれる。B6地点を模式地とし、調査区の南側に広がる。

X 層 (砂礫)

層厚は50cm以上で、主に砂礫から成る。この層は縄文時代より古い段階の流路埋土であり、主に調査区北側に広がる。

表2 遺跡全体の基本層序

層名	層相	主な検出遺構	主な出土遺物	時期
I a 層	褐灰色砂質シルト		瀬戸美濃連房・灰輪系陶器	近現代
I b 層	褐灰色シルト		瀬戸美濃連房・灰輪系陶器	近現代
II a 層	黄灰色シルト	← 掘立柱建物跡、溝跡	瀬戸美濃連房・灰輪系陶器	中世後期以降
II b 層	オリーブ黒色シルト	← 掘立柱建物跡、畝状遺構、 △掘立柱建物跡	瀬戸美濃大窯・灰輪系陶器	中世後期
III a 層	暗灰黄色～灰色シルト	↓ 掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡 △掘立柱建物跡、道路状遺構	灰輪系陶器	中世後期
III b 層	オリーブ黒色シルト	↓ 掘立柱建物跡、溝跡	灰輪系陶器	中世後期
IV a 層	黒褐色シルト	↓ 掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡	灰輪系陶器	中世前期
IV b 層	青灰色シルト	← 水田面	灰輪系陶器	中世前期
IV c 層	褐灰色粘土		灰輪陶器・須恵器	古代～中世初頭
IV d 層	黒色シルト		須恵器・土師器	古代
V a 層	黒～オリーブ黒色粘土	← 掘立柱建物跡、竪穴住居跡	須恵器・土師器	古墳後半～古代
V b 層	灰色粘土	← 掘立柱建物跡、竪穴住居跡	須恵器・土師器	古墳前半～後半
VI a 層	暗オリーブ褐色粘土	← 水田面 ↓ 流路跡	弥生土器	弥生後期～古墳初頭
VI b 層	灰色シルト	← 水田面	弥生土器	弥生中期
VII a 層	灰オリーブ粘土	↓ 土坑墓	縄文土器	縄文中期
VII b 層	黄灰色シルト	↓ 土坑、ピット	縄文土器	縄文中期
VIII 層	灰白色粘土			
IX 層	灰黄褐色～暗青灰色粘土			
X 層	砂礫			

←：上面検出遺構 ↓：下面検出遺構 △：地層内検出遺構

表3 各地点の基本層序

地点名	I a	I b	II a	II b	III a	III b	IV a	IV b	IV c	IV d	V a	V b	VI a	VI b	VII a	VII b	VIII	IX	X
A 1	●	●	●		●						●						●		●
A 2	●	●	●		●				●		●				●		●		●
A 3	●	●	●		●										●		●		●
A 4	●	●	●		●						●						●		●
A 5・11	●	●	●		●				●		●		●	●			●		●
A 6・12	●	●	●		●				●		●						●		●
A 7・13	●	●	●		●										●		●		●
A 8・9・14	●	●	●		●			●	●								●		●
A 10・15	●	●	●		●										●		●		●
A 16	●	●	●	●					●			●				●			●
B 1	●	●	●	●	●				●		●			●			●		●
B 2	●	●	●	●					●								●		●
B 3	●	●	●	●					●								●		●
B 4	●	●	●	●					●		●						●		●
B 5	●	●	●	●					●			●					●		●
B 6	●	●	●	●		●												●	●
B 7	●	●	●	●		●											●	●	●
B 8	●	●	●	●		●			●			●					●		●
C 1	●	●	●		●	●				●							●		●
C 2	●	●	●		●	●				●							●		●
C 3	●																		●
C 4	●	●	●																●
C 5	●	●	●																●
C 6	●	●	●	●		●													●
C 7	●	●	●	●		●			●			●							●
C 8	●	●	●	●					●										●
C 9	●	●	●	●		●			●	●		●							●
C 10	●	●	●	●					●			●							●
C 11~14	●																		●
C 15	●		●	●					●			●							●
D 1・2	●	●	●	●					●				●				●		●
D 3	●	●	●	●					●			●	●				●		●
D 4・5	●	●	●	●					●		●						●		●
D 6	●	●	●	●		●			●			●					●	●	●
D 7	●	●	●	●					●										●
D 8	●	●	●	●		●													●
D 9	●	●	●	●		●	●										●	●	●
E 1	●	●	●	●		●			●			●					●	●	●
E 2	●		●	●			●												●
E 3	●	●	●	●					●								●		●
E 4	●	●	●												●				●
E 5	●		●				●												●

●：存在する層を示す

表4 調査面と層位の関係

地点名	調査面	検出層
A 1	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層上面
A 2	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 3	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 4	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	V a層・VII層上面
A 5	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 6	第1調査面	III a層上面
	第2調査面(1)	VII層・X層上面
	第2調査面(2)	VII層・X層上面
A 7	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 8	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	IV b層・IV c層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
A 9	第1調査面	VII層上面
	第3調査面(2)	VII層上面
A 10	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	V a層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
A 11	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 12	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	VII層・X層上面
A 13	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層・X層上面
A 14	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	IV b層・IV c層上面
	第3調査面	VII層上面
A 15	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	VII層上面
A 16	第1調査面(1)	II b層上面
	第1調査面(2)	II b層上面
	第1調査面(3)	II b層上面
	第2調査面(1)	IV c層上面
	第2調査面(2)	IV c層上面
	第3調査面	V b層上面
B 1	第1調査面	VII層上面
	第2調査面	II a層・III a層上面
	第3調査面	VII層上面
	第4調査面(2)	VII層上面
B 2	第1調査面	II b層・III a層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
	第3調査面(2)	VII層上面
B 3	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	VII層上面
B 4	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	VII層上面
B 5	第1調査面	II b層上面
	第2調査面(1)	VII層上面
	第2調査面(2)	VII層上面
	第2調査面(3)	VII層上面
B 6	第1調査面	IX層上面
	第2調査面	IX層上面
B 7	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	VII層・IX層上面
B 8	第1調査面(1)	IX層上面
	第1調査面(2)	IX層上面
	第1調査面(3)	IX層上面

地点名	調査面	検出層
C 1	第1調査面	III a層上面
	第2調査面	IV d層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
C 2	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	VII層上面
C 3	第1調査面	IX層上面
C 4	第1調査面	IX層上面
C 5	第1調査面	IX層上面
C 6	第1調査面	II b層上面
C 7	第1調査面	IX層上面
	第2調査面	IX層上面
C 8	第1調査面	IX層上面
C 9	第1調査面(1)	V b層・IX層上面
	第1調査面(2)	IX層上面
C 10	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IX層上面
C 11	第1調査面	IX層上面
C 12	第1調査面	IX層上面
C 13	第1調査面(1)	IX層上面
C 14	第1調査面	IX層上面
	第1調査面(2)	IX層上面
D 1	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	V b層・VI a層上面
	第4調査面	VII層上面
D 2	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	V b層上面
	第4調査面	VI a層上面
	第5調査面	VII層上面
D 3	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面	V b層上面
	第4調査面	VI a層上面
	第5調査面	VII層上面
D 4	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
D 5	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面(2)	VII層上面
D 6	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	V b層上面
	第3調査面(1)	VII層上面
D 7	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV c層上面
	第3調査面(2)	VII層上面
D 8	第1調査面	III a層上面
	第2調査面(1)	IX層上面
	第2調査面(2)	IX層上面
D 9	第1調査面	II b層上面
	第2調査面(1)	VII層・IX層上面
	第2調査面(2)	VII層・IX層上面
E 1	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	VII層上面
E 2	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	IV b層上面
	第3調査面	IX層上面
E 3	第1調査面	II b層上面
	第2調査面	VII層・IX層上面
E 4	第1調査面	IX層上面
E 5	第1調査面	IX層上面

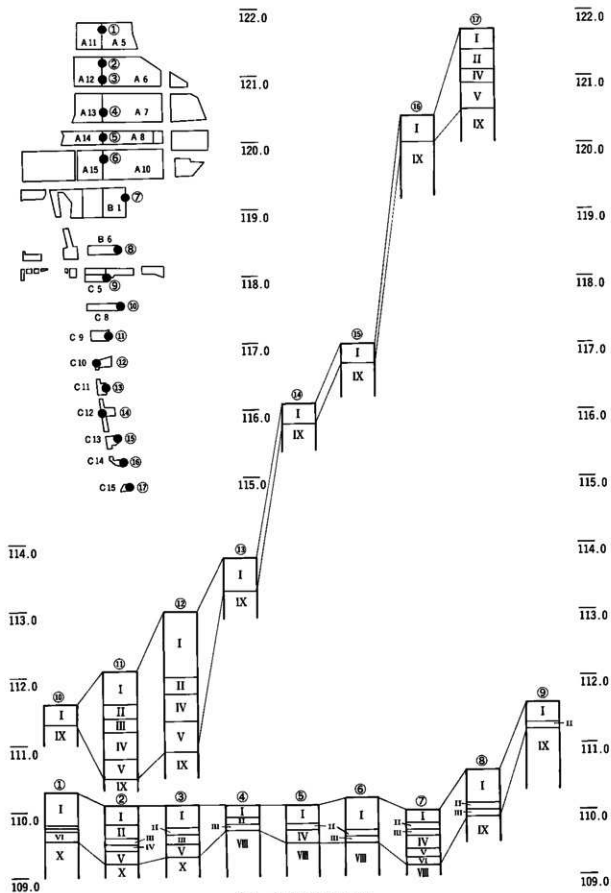


図8 地点間の層位関係

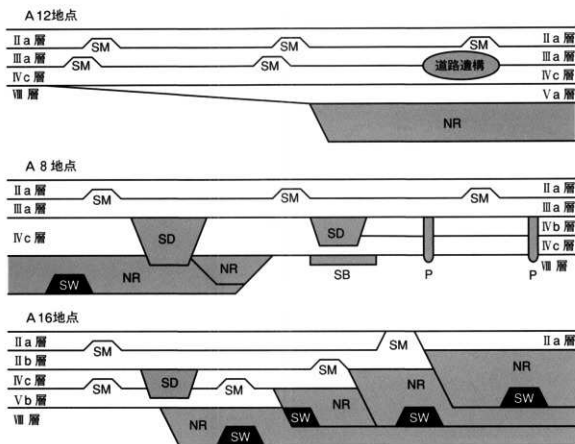


図9 層序模式図

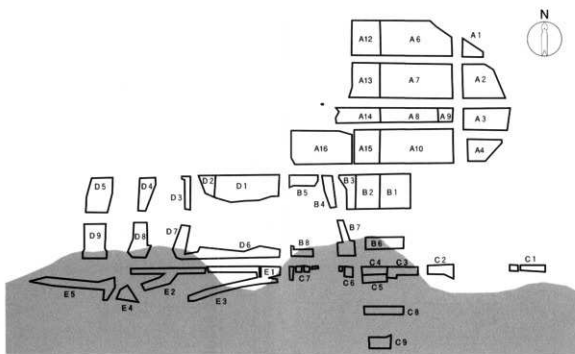


図10 Ⅰ層の範囲

トーンはⅠ層の範囲を示す

第4章 遺構・遺物の概要

第1節 時期区分

調査によって判明した遺構・遺物は縄文時代から近現代までほとんどの時代を網羅している。遺跡の各時代の変遷を明確に位置づけるため、便宜上、この報告書では表5のようにⅠ期からⅧ期までの時期区分を行った。これは各時期毎に基準となる土器の種別における近年の編年をもとに、調査で判明した柿田遺跡における遺構・遺物の変遷をみながら行った。基準とした土器の種別は、Ⅰ期は縄文土器、Ⅱ期は弥生土器、Ⅲ期は土師器、Ⅳ期は須恵器、Ⅴ期は須恵器・灰軸陶器、Ⅵ期は灰軸系陶器、Ⅶ期は灰軸系陶器・大窯、Ⅷ期は近世瀬戸窯である。また各時期は、土器編年と遺構・遺物の状態から、さらに細分した。

時期区分の際に参照した土器編年の主な典拠は以下のとおりである。

〈縄文土器〉

- 泉拓良 1998 「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』3
 1998 「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』3
 泉拓良他 1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』4
 玉田芳英 1989 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4

〈弥生土器・土師器（古墳時代）〉

- 赤塚次郎 1992 「山中式土器について」『山中遺跡』
 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』
 赤塚次郎 1996 「廻間式土器」『廻間遺跡』
 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ式・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』
 赤塚次郎 2002 「八王子古宮式土器について」『八王子遺跡』
 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」
 『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
 加納俊介・石黒立人 2002 「弥生土器の様式と編年—東海編—」

〈土師器（古代・中世）〉

- 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996 「鍋と甕 そのデザイン」

〈須恵器・灰軸陶器〉

- 斎藤孝正 1995 「東海西部（愛知・岐阜）」・「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」
 『須恵器集成図録』第3巻 東日本編Ⅰ
 渡辺博人 1984 「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」各務原市教育委員会
 渡辺博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋形の型式設定とその編年試案—」
 『美濃の考古学』創刊号

〈灰軸系陶器〉

- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

多治見市教育委員会 2001 『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』

(常滑)

中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」」

『全国シンポジウム「中世常滑焼をおいて資料集」』日本福祉大学知多半島総合研究所

(古瀬戸・大窯・連房)

藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動向」『研究紀要』第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐・岡本直久 2002 「江戸時代の瀬戸窯業」『江戸時代の瀬戸窯』

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

これらの編年研究をもとにした本書の時期区分は表5であるが、若干の補足説明を加える。

Ⅲ期とⅣ期は、柿田遺跡における須恵器の出現によって分けた。したがって、土師器によっては、それだけでⅢ期ともⅣ期とも判断のつかない場合、須恵器の供伴の有無で遺構の時期を決定した。なお調査によって出土した須恵器は東山48号窯式併行と判断されるものが最古である。

時代呼称は、実年代観をもとにおおまかに歴史学上の呼称をあてはめた。

表5 時期区分一覧

時期	土器 編年	実年代	時代
I-1期	船元・里木、咲畑・醍醐、中津・福田KⅡ		縄文中・後期
I-2期	凸帯文		縄文晩期
Ⅱ-1期	美濃Ⅰ期(櫻王・水神平)		弥生前期
Ⅱ-2期	美濃Ⅱ～Ⅳ期(朝日・貝田町・高蔵)		弥生中期
Ⅱ-3期	美濃Ⅴ期(山中)	1世紀前半～2世紀後半	弥生後期
Ⅱ-4期	美濃Ⅵ期(週間Ⅰ)～週間Ⅱ・Ⅲ式	2世紀初頭～4世紀前半	弥生末～古墳前期
Ⅲ-1期	松河戸式	4世紀後半～5世紀前葉	古墳前半
Ⅲ-2期	宇田Ⅰ式	5世紀中葉	
Ⅳ-1期	東山48～東山Ⅱ	5世紀後半	古墳後半
Ⅳ-2期	東山61～東山44	6世紀	
Ⅳ-3期	東山50	7世紀前葉	
V-1期	美濃須衛Ⅲ期	7世紀中葉～後葉	古代
V-2期	美濃須衛Ⅳ～Ⅴ期	8世紀初頭～9世紀前葉	
V-3期	黒笹90号～百代寺窯式	9世紀中葉～11世紀前半	
Ⅵ-1期	第3～5型式	11世紀後半～13世紀前葉	中世前期
Ⅵ-2期	白土原Ⅰ号窯式	13世紀中葉	
Ⅶ-1期	明和Ⅰ号窯式～大谷洞14号窯式	13世紀後葉～14世紀末葉	中世後期
Ⅶ-2期	大洞東Ⅰ号窯式～生田2号窯式	15世紀初頭～15世紀後葉	
Ⅶ-3期	大窯第1～4段階	15世紀末葉～16世紀末葉	
Ⅷ-1期	江戸時代瀬戸窯第1～2段階	17世紀～18世紀中葉	近世
Ⅷ-2期	江戸時代瀬戸窯第3段階	18世紀後葉～19世紀中葉	
Ⅷ-3期		19世紀後葉～20世紀前半	近代

第2節 遺構の概要

第1項 遺構概要

検出した遺構をそれぞれ何であるか解釈するにあたっては、大まかに次のような条件を備えているかどうかによって判断した。なお、遺構名称の後に「跡」をつけた遺構は、本来上屋構造があると想定される遺構（建物や柱列など）で、発掘調査で検出できなかったものを示す。水田跡は畦畔底部のみ検出し、畦の高まりが確認できなかったものが含まれるため、一括して「水田跡」とした。

竪穴住居跡（略号はSB） 竪穴状に地面を掘り込み、平坦な底面を床面とし（貼り床の場合もある）、おおむね4本の主柱によって屋根を支える構造を持つ建物を竪穴住居跡と認定した。床面中央付近に地床炉を持つものと、一辺の壁面に設置したカマドを持つものがある。また柱穴以外にも床面にいくつかの穴を確認できるものがあり、一般的な認識から貯蔵穴と判断したものもあるが、多くの穴は意味を特定できていない。なお、竪穴住居跡内で検出した遺構は、各住居単位で通し番号を付し、炉跡、カマドはSC、柱穴はP、土坑はSKとした。

なおこのような遺構を全て住居跡とすることについては近年批判もあるが、ここでは一般的な認識から全て竪穴住居跡とした。

掘立柱建物跡（略号はSH） 掘立柱によって造られた建物で、側柱建物と総柱建物の2種類を確認した。柱穴の検出段階から掘立柱建物跡と認識して調査することに力を注ぎ成果を上げたが、平面図上で柱の並びや周囲の遺構との関係などから、発掘調査後に建物であったと認識したものもある。柱穴は残りの良いものであれば柱根を確認することができた。また自然流路の埋土上など軟弱な地盤に建てられた建物の柱穴では、柱の下に礎や角材、丁寧なものでは礎板が据えられていた。建築時に柱穴に遺物を埋納したと考えられるものも見つかった。なお、今回の調査では平地住居として認識したものはない。

柱列跡（略号はSA） 建物ではないが、掘立柱が列をなしている場合それとした。調査方針や認識、柱穴の状況は掘立柱建物跡に同じである。

ビット（略号はP） 穴状遺構のうち便宜上、直径0.5m以下をビット、以上を土坑とした。また明らかに建物の柱穴と考えられるものもビットとした。建物の柱穴以外で、単独に存在するビットはその性格が不明のものがほとんどである。

土坑（略号はSK） 穴状遺構の一種で、ビットとの区別は上記の通りである。ビットと同様に性格が不明であるものが多いが、埋土に炭化物が多量に入るものや土器が埋納されていると判断できるものなど特徴的な土坑も存在する。

集石遺構（略号はSI） 礎が平面的、あるいは垂直的にまとまって検出できたもの。土坑を伴うものもある。

井戸（略号はSE） 穴状遺構で、深い円筒形の形状を示し、その他一般的な概念から井戸跡と判断されたものをそれとした。

水田跡（略号はST、畦畔はSM） 層序毎に分析によってプラントオーバーが含まれる層を確認し、遺構として区画する畦畔状遺構を検出した面を水田と認識した。

溝（略号はSD） 素掘溝と護岸施設を伴った溝の2種類を確認した。溝と自然流路の認識の違いは、

溝が人によって造成されたと判断されるものに対し、自然流路はそうでないものである。なお溝ではないが、溝状の掘形の内部に砂を充填するなどして造作された道路遺構（ないしは道路状遺構）についても、便宜上、SDの略号を用いた。

自然流路（略号はNR） 自然流路には水制遺構を伴うこともある。この場合、人による規制があるので完全な自然状態ではないが、水路全体が造成されたわけではないので自然流路として報告する。自然流路からは、隣接する集落から廃棄されたと考えられる遺物が多く出土した。このことから、調査で確認した自然流路の多くは、生活に密着したものであることがわかった。

水制遺構（略号はSW） 溝・自然流路内において「しがらみ」「しがらみ状遺構」あるいは「堰」「護岸施設」「堤防」などとこれまで呼称された遺構の総称である。調査では木組み（石組みを伴うこともある）として検出することが多く、残りの良いものでは盛土が見つかった。

上記の遺構は、縄文時代から近世までの各時代にわたる。各時期毎の遺構の内容とその数を掲載したものを中心にまとめたのが表6である。本報告書において集落は、それを取り巻く溝・自然流路などを除くと、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・ビット・土坑などからなるが、時期により構成要素が違ってくる。

なお、第5章の各遺構の出土遺物の名称については、第5分冊の例言を参照されたい。

表6 時期別遺構検出数

遺構種類	略号	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	多時期	時期不明	合計
竪穴住居跡	SB	0	39	21	9	13	0	0	0	0	0	82
掘立柱建物跡	SH	0	0	2	4	7	33	3	0	0	1	50
柱列跡	SA	0	0	3	0	5	23	9	0	0	28	68
ビット	P	0	1	30	39	70	572	97	45	9	3708	4571
土坑	SK	8	4	10	1	6	60	7	7	1	44	148
焼土	SC	0	0	0	1	0	1	0	0	0	9	11
築石遺構	SI	2	0	0	0	0	1	1	0	0	1	5
土器集積	SU	0	1	4	1	0	1	0	0	0	0	7
井戸	SE	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
水田跡	ST	0	16	0	21	3	6	164	0	4	9	223
畦畔	SM	0	24	0	46	7	19	317	12	8	2	435
溝	SD	0	9	19	11	13	86	44	4	45	46	277
自然流路	NR	3	4	6	10	8	14	8	2	76	0	131
水制遺構	SW	0	7	17	28	5	10	17	1	6	3	94
合計		13	105	112	171	137	829	667	71	149	3842	6096

第2項 水制遺構

水制遺構とは、一般的に「しがらみ」、「しがらみ状遺構」、「灌漑施設」などと呼称される遺構である。これらの遺構は機能が明らかな場合は「堰」「護岸施設」「堤防」などの名称を用いることがあるが、「堰と堤防」、「護岸施設と堤防」など、どちらともいえない機能を有する遺構も少なくない。当遺跡では94箇所で杭などの土木材を使用した治水、利水に関連する遺構を検出しており、それぞれの機能は限定できるものとできないものがある。しかし、いずれも水流を調整しているもの（Water Control）といえることから、本書では「水制遺構」と呼称して報告する。

1 水制遺構の記載方法

水制遺構に関する事実記載項目について、現在では確立されたものが少ないため、本報告では以下の項目に従い記述する。しかし、各項目をすべて現地で確認できていないので、記載できない項目もあった。

表7 水制遺構の記載項目

記載項目	詳 細
位置	A 河川内、B 溝内、C その他
周辺の流路の状況	A 分岐する溝の有無と関連性、B 水流の変化、C 流路の規模（幅と深さ）、D 流路の断面形態
規模	残存していた長さ・幅・高さ
内部構造と法面構造	断面図・見透図による全体把握 A 盛り土の有無、B 杭などの土木材の有無と設置方法、C 構造材の有無と種類、D 砂礫・土木材・粘土の組み合わせ状況、E 埋土のしまり具合、F 洗掘状況、G 増圧の有無
周辺の流路埋土	A 川表方向の埋土、B 川裏方向の埋土、C 両者（A・B）の違い、D 構築前の砂礫の堆積状況、E 河床と漏水防止の関係
改築・改修	A 改築・改修工程、B 改修位置（前後左右）、C 改修による水流変化
消失理由	A 不慮廃棄（洪水など）、B 自然廃棄、C その他
出土遺物	A 土木材転用遺物の量、B 水制遺構内及び周辺の遺物集中箇所的位置、C 自然廃棄か人為廃棄かの検討、D 遺物のローリングの有無、E 祭祀性の確認
時期	A 流路の掘削時期、B 水制遺構の設置時期、C 改築・改修時期、D 廃絶時期、E 流路埋没時期

2 用語の定義

(1) 水制遺構の名称 (図11)

表法面・表法先……水が流れている側の面とその下端部

裏法面・裏法先……水が流れていない側の面とその下端部

馬路……堤防の上面

敷……堤防の下面

川表方向・川裏方向……表法面と裏法面が位置する方向

斜杭……表法面と裏法面に斜めに打ち込まれている、ないしは据えられている木

直立杭……ほぼ垂直に打ち込まれている木

横木……斜杭の打ち込まれた方向に直交する、水平に設置された木

縦木……斜杭の打ち込まれた方向に平行する、水平に設置された木

(2) 構造材

構造材……水制遺構の盛土内に人為的に設置された材。材の種類により構造材Aと構造材Bに分類する。

構造材A……アシなどの草本類。スギなどの樹皮も含む。なお、「敷葉層」は構造材Aが水平堆積で幾層もある状況を示す。

構造材B……樹枝。基本的に葉がついていたと考えられる。

(3) 埋土の表記

〈砂礫〉

およそ直径3mm以上を礫、2mm以下を砂とし、礫は砂岩やチャートなど、必要に応じて種類まで記入した。砂は大きく粗砂、中砂、細砂の3つに分けた。シルトや粘土中に含まれる砂は粗砂と細砂の2つに分け、砂が帯状に堆積している場合は粗砂、中砂、細砂の3つに分けた。中砂と細砂の見極めは難しいので、粗砂でない砂で、砂の大きさが2つに分かれる場合のみに「中砂」という用語を使用した。なお、それぞれの大きさの目安は、粗砂が直径0.5～2mm、中砂が直径0.25～0.5mm、細砂が直径0.25mm以下である。

〈土〉

土の名称は可能な限り粘土とシルトの2つだけに統一した。その区別は、粘土が指でひも状にした時に伸びて切れないもの、シルトが指でひも状にした時に切れ目が入るか、ちぎれてしまうものである。

(4) その他

水制遺構の規模は、「長さ」が横木と同じ方向の長さ、「幅」が縦木と同じ方向の長さ、「高さ」は盛土の残存高を示す。なお、発掘調査時における水制遺構の構成材の略号は、横木：MYK、縦木：MTK、斜杭：MSG、直立杭：MTG、矢板：MYT、構造材：MKZ、盛土内の雑木：MZBとした。

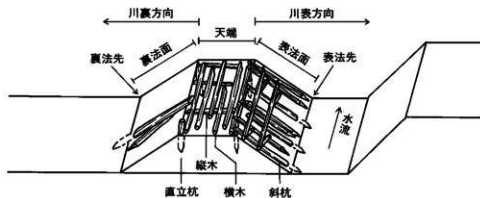


図11 水制遺構の構造材と部位の名称

第3節 遺物の概要

今回の調査では、遺物として土器、木製品、石器、金属製品、動植物遺体などが出土した*1。発掘調査終了時における出土点数とコンテナ数*2は、土器が414,298点(1,672箱)、木製品が22,436点(2,401箱)、石器が279点(17箱)、金属製品が71点(4箱)、動植物遺体は約50箱である。

土器の内訳は縄文土器が76点(土器全体の0.02%、以下同様)、弥生土器が8,714点(2.10%)、土師器が179,650点(43.36%)、須恵器が27,381点(6.61%)、灰釉陶器が3,634点(0.88%)、灰釉系陶器が178,132点(43.00%)、中国磁器が741点(0.18%)、中世土師器が2,835点(0.68%)、その他の中近世陶器が13,177点(3.18%)、その他の土器が67点(0.02%)である。このように、土師器と灰釉系陶器が40%以上と多く、他は10%未満である。出土した遺構は自然流路、溝、竪穴住居跡の順に多いが、全土器の半数以上は包含層からの出土である。土器の時代は縄文時代から近現代までであり、特に古墳時代と中世前期の遺物が多い。

木製品の内訳は農具、工具、紡織具、漁撈具、運搬具、馬具、服飾・装身具、調理具、発火具、容器、籠籠物、家具、祭祀具、楽器・遊戯具、雑具、用途不明品、土木材、木簡、建築部材などである。そのうち、土木材が13,324点(59.39%)で最も多く、次に用途不明品4,628点(20.63%)、雑具2,195点(9.78%)の順に多い。杭や横木などの土木材の多い理由として、当遺跡では94基もの水制遺構を検出し、その大半を取り上げたためである。出土した遺構は自然流路や溝、水制遺構が圧倒的に多く、他に井戸や柱穴などがある。木製品が出土した遺構の時期は弥生時代から近現代までであり、そのうち古墳時代の遺構が最も多く、縄文時代の遺構からの出土は確認できなかった。

石器の内訳は狩猟具、土掘具、除草具、収穫具、調理具、伐採・加工具、祭祀具などである。そのうち、狩猟具、土掘具、収穫具、加工具などが多く、とりわけ弥生時代の収穫具がまとまって出土している点が注目できる。出土した遺構は自然流路、竪穴住居跡の順に多く、土器のように包含層からの出土は少ない。石器が出土した遺構の時期は弥生時代から室町時代までであり、そのうち弥生時代から古墳時代の遺構が最も多い。

金属製品の内訳は鉄、斧、釘、刀子、銭貨などである。そのうち、弥生時代の竪穴住居跡から出土した銅鍔や、古墳時代の木製農具に装着される鉄斧や鋤先などが注目される。

動植物遺体のうち、動物遺体はウマ、イヌの骨などが包含層から出土しているが、時期の特定はできない。植物遺体は第7章で記すように、種子や炭化材、水制遺構の構築材である構造材などがある。そのうち、主なものはサンプルデータとして水漬けで保管してある。昆虫遺体は第7章第17節で記すとおりであり、植物遺体と同じくサンプルデータを保管してある。

*1 遺物の名称は、土器・土製品はすべて「土器」、木器・木製品はすべて「木製品」、石器・石製品はすべて「石器」、金属・金属製品はすべて「金属製品」とした。

*2 通常のコンテナの大きさは、長さ59cm、幅39cm、深さ10cmであり、木製品用の長いコンテナは、およその容量比で通常の大きさに換算した。また、動植物遺体の大半は、タッパーにて保管していたので、コンテナ数は概数である。

第4節 土器の概要

出土した土器は、破片数で約41万点である。種別は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、灰釉糸陶器、中国磁器、常滑・古瀬戸・大窯・連房などの陶器に分けられ、ほぼ全時代にわたる。表8は土器編年対照表である。大まかな年代観が示してあるので参照されたい。本節では、各種別における分類とその時期について述べる。なお「種別」や「器種」などの語の使用をめぐっては、その語義論からいくつかの見解が出されているが、今回の報告にあたっては特に留意しないこととした。また年代の呼称については、例えば8世紀は「8c」と、その中を前半・後半あるいは初頭・前葉・中葉・後葉・末葉（記述にあたっては例えば「初頭」は「初」、「中葉」は「中」とすることがある）に分けた。土器1点から厳密に年代を決めることはできないが、おおむねそのあたりという意味で記してある。その他、類推されたい。

縄文土器 76点出土した（接合後の破片数。以下同じ）。散発的な出土状況であるため、例えば各時期の様相などといった全体像を示すことはできない。器種は確認できたものは全て深鉢であった。時期は中期中葉～後期初頭、晩期の2時期に分けられる。

弥生土器 8,714点出土した。なお弥生時代末～古墳時代初頭の土器について、どちらに分類するか明確でないものが多かったため、破片数は山中式（本書ではII-3期、すなわち弥生時代後期）以前を弥生土器、廻間式（本書ではII-4期、すなわち弥生時代末～古墳時代初頭）から古墳時代の土師器としてカウントした。したがって、ここで示した弥生土器の破片数は、山中式までのものである。

土師器 179,650点出土した。土師器の破片数は、廻間式から古墳時代、古代、中世までのものを含む。一見してそれぞれの時代に属すると判断できるものや、出土した遺構の時期から判断できるものもあるが、多くの破片において分類することが困難で各時代毎の数値を示しても誤差が含まれる可能性が高いと判断したため、ここでは一括した数値を示した。

弥生土器と土師器（V期まで）については連続する諸特徴があることから分類は同時に行った。器種は次のようにした。以下、図12～16に掲げた模式図をみながら述べたい。なおVI期以降の土師器は、中世土師器として別に述べる。

① **甕** 口縁部径に頸部径が比較的近く、体部が深い器形。おもに煮沸具として使用されたと推測される口縁部の形状から分類し、調整方法や底部形態などで細分した。なお底部形態には次のようなものがある。この底部形態は、鉢・壺などにも共通してみられるものもある。

平底

- 1：文字通り平らな底。
- 2：中央が内にやや窪むもの。
- 3：リング状のもの。

台付

- 1：器壁が薄いもの。
- 2：器壁が薄く、端部内面に折り返すもの。斐F（S字甕）の底部。
- 3：器壁の厚いもの。

丸底

- 1: 体部と底部の境に稜がみられないもの。
- 2: 体部と底部の境に稜がみられるもの。

変A (条痕文系甕) 口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲部を持たない深鉢型の器形。おもに条痕調整を施す。底部形態は平底2である。

- 1: 棒状工具による条痕調整を器表面に施すもの。おもにII-2期に属する。
- 2: ハケ状工具による条痕調整を器表面に施すもの。おもにII-3~4期に属する。
- 3: 条痕は2によるが、1や2が口縁部が外反するのに対し、直立気味に開く器形。II-4~III-1に属する。

変B (短頸甕) 口縁部が短く、体部長が口縁部径に近いもの。底部形態がわかる資料では、平底1~3を確認している。II-2~IV期までである。

- 1: 口縁端部を面取りし、ハケ調整を器表面に施すもの。おもにII-2期に属する。
- 2: 口縁端部を面取りし、板ナデやナデ調整を器表面に施すもの。おもにII-2~4期に属する。
- 3: 口縁端部を面取りせず、ハケ調整・ナデ調整・板ナデ調整を施すもの。ハケ調整に見える板ナデ調整を施すものもある。口縁部が直立気味のものとく字形に開くものがあるが一括した。III期~IV期に属する。

変C (く字甕) 口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲部を持ち、断面形がく字形を呈するもので口縁部がBに比較して長いもの。底部は平底2・平底3・台付2・丸底2がある。II~V期までである。

- 1: 口縁端部を面取りするもの。底部は台付2である。ハケ調整を主体にナデ調整を器表面に施す。おもにII-3~III-1期に属する。
- 2: 口縁端部を面取りしないもの。底部は台付2である。ナデ調整もしくは板ナデ調整を器表面に施す。II-4~III期に属する。
- 3: 口縁部を面取りしないもの。底部は平底2・3である。体部が卵形もしくはやや縦長の球形である。おもにナデ・板ナデ調整を器表面に施す。ハケ調整もしくはハケ状に見える板ナデ調整を施すものもある。III期に属する。
- 4: 口縁部がハ字状に開く、丸底1のもの。ハケ調整・板ナデ調整を器表面に、内面にケズリ調整を施す。丸底1である。布留式の甕に類似する。III-1期に属する。

変D (長頸甕) 口縁部から体部にかけてが、変Cに比べ屈曲が弱く、口縁部がやや直立気味のもの。底部は平底2・平底3・台付2がある。

- 1: 口縁端部を面取りするもの。底部は台付2である。ナデ調整もしくは板ナデ調整を施す。II-3~III-1期に属する。
- 2: 口縁部面取りをしないもの。底部は平底2・平底3・台付2である。ハケ調整・ナデ調整・板ナデ調整を施す。板ナデ調整はハケ調整に見えるものもある。II-3~V-1期に属する。
- 3: ほぼ2と同じであるが、口縁部が中程で折れ外反気味になるもの。底部は平底3である。II-4~V-1期に属する。
- 4: 口縁部が開き気味で、体部が長く長胴化したもの。底部は平底2・3である。板ナデ調整・

ハケ状に見える板ナデ調整・ハケ調整を施したものがあつた。Ⅲ～Ⅴ二期に属する。

5: 諸特徴は1～4と同じであるが、口縁部が中程で内側に屈曲するもの。Ⅱ-4～Ⅳ期に属する。

6: 体部が小さく、口縁部がやや直立気味に開くもの。平底1である。板ナデ調整を施す。Ⅲ期に属する。器形は変A3に似る。

変E (受け口状口縁変) 口縁部が受け口状になるもの。Ⅱ-3～4期に属する

変F (S字状口縁変) 口縁部がS字状になるもの。底部は台付1である。Ⅱ-4～Ⅳ-1期に属する。細分についてはおもに『週間遺跡』(1990)によつた。なお0類は確認していない。

1: A類。Ⅱ-4期に属する。

2: B類。Ⅱ-4期に属する。

3: C類。Ⅱ-4期に属する。

4: D類。Ⅲ-1期に属する。

5: いわゆる山陰系口縁部を持つもの。Ⅱ-4～Ⅲ-1期に属する。

6: 宇田式。Ⅲ-2～Ⅳ-1期に属する。

変G (有段口縁変) 口縁部が有段になるもの。丸底1である。ナデもしくは板ナデ調整を施す。Ⅲ-1期に属する。大型と小型がある。

変H (小型長頸平底変) 頸部が長く、体部が箱形で短いもの。底部は平底1～3である。板ナデ調整を施す。ハケ調整に見える板ナデ調整を施すものもある。Ⅲ～Ⅳ期に属する。

変I (直立有段口縁変) 口縁部が有段で、上段が直立気味で横線を施すもの。北陸地方の月影式に似ている。Ⅱ-4期に属する。

変J (短頸広口変) 口縁部が短く、開いたもの。Ⅴ期に属する。

②鉢 口縁部径に比較して全高が同じ、もしくは小さい器形。

鉢A (深鉢) 体部から頸部にかけて緩やかにくびれ口縁部が開くもの。Ⅱ-2期に属する。

鉢B (く字鉢) 口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲部を持ち、頸部断面形がく字形を呈するもの。底部は平底、中央が内側にやや窪む平底、丸底がある。

1: 口縁部が受け口状で、体部最大径が口縁部径とほぼ同じか大きいもの。口縁部・体部上段に多条沈線や列点文を施すものがある。底部形態は平底、中央が内側にやや窪む平底がある。Ⅱ-3期に属する。

2: 口縁部が受け口状もしくはやや内湾し、体部最大径が口縁部径より同じか小さいもの。丸底である。Ⅱ-3～4期に属するが、Ⅱ-4期が中心である。

3: 口縁部が2よりも長いもの。体部最大径が口縁部径より小さく、丸底である。Ⅱ-4～Ⅲ-1期に属する。

鉢C (台付鉢) 台付の鉢。口縁部は比較的短く、頸部は断面く字形である。Ⅱ-3～Ⅳ-2期に属する。

鉢D (く字平底鉢) 頸部断面形がく字形で、底部が平底のもの。平底1と平底3がほとんどであるが、平底を意識した丸底のものがある。Ⅱ-4～Ⅳ-1期に属する。

- 鉢E (有孔鉢) 体部から口縁部がほぼまっすぐに開くもので底部に穿孔を有するもの。甔として使用されたと推測される。II-4~IV-1期に属する。
- 鉢F (小型短頸鉢) 口縁部を外側に屈曲させた小型の鉢。II-4~IV期に属する。
- 鉢G (小型丸底鉢) 丸底の小型の鉢。
- 1: 長頸のもの。III-1期に属する。
 - 2: 有段口縁のもの。III-1期に属する。
- 鉢H (八字形丸底鉢) 口縁部がハ字形に大きく開き、底部形態が丸底のもの。中型・小型がある。III期に属する。
- 鉢I (小型鉢) 小型の鉢。杯型のものも含むが、便宜上、鉢とした。
- 1: 口縁部から体部にかけて段を持つもの。II-4~IV-1期に属する。
 - 2: 浅く丸底で杯型のもの。III-IV-2期に属する。
 - 3: 平底のもの。II-3~IV期に属する。
- 鉢J (大型片口鉢) 大型で、口縁部がまっすぐに立ち上がるもの。IV期に属する。
- 鉢K (長胴鉢) 胴が長く、ここでいう鉢としては分類しがたいが、便宜上、鉢とした。増壙型である。III~IV期に属する。
- ③ 鍋 古代以前では清輝型鍋がある。
- ④ 甔 IV~V期に属する。
- ⑤ 壺 口縁部径に比較し頸部径が狭い器形。底部形態は平底・丸底で、平底が多く、まれに台付になるものもある。主に貯蔵具として使用されたと考えられているが、煮沸に使用する場合もあった。
- 壺A (太頸壺) 体部から口縁部にかけて弓なりに外反するもの。口縁端部を面取りし装飾を加えるものが多い。II-2期に属する。
- 壺B (細頸壺) 細長い頸部を持つもの。
- 1: 口縁部が受け口状になるもの。II-2期に属する。
 - 2: 口縁部がいわゆる袋状になるもの。II-2期に属する。
 - 3: 口縁部が受け口状で、外側に横線文が施されたもの。II-2期に属する。
- 壺C (広口壺) 口縁部から体部にかけて断面く字形に屈曲するもの。大型のものが多い。
- 1: 端部を面取りし、多条沈線を施すもの。端部を垂下させたものもある。装飾性が高く、口縁部内面には矢羽根状に列点文を、体部上段には横位の多条沈線と波状文や列点文を組み合わせて施したものが多くみられる。台付のものもある。また赤色塗彩したいわゆるパレス式土器を含む。II-2~III-1期に属する。
 - 2: 1と同様の特徴を備えるが、口縁部内面に段を設けるもの。口縁端部に貼り付け文を施すものもある。体部上段の文様が波状文に変わり鋸歯状の列点文となるものが多い。赤色塗彩したパレス式土器を含む。II-4期に属する。

- 3: 端部を面取りするが、無装飾のもの。II-3~III期に属するが、II-4期に多い。
- 4: 口縁部に特に装飾のない大型の壺。II-4~IV-2期に属する。III期に多い。
- 5: 4に似るが、口縁部が短いもの。II-4~IV期に属する。

壺D (長頸壺) 胴部に比して口縁部が長いもの。

- 1: 口縁部上端部外側に横線を施すもの。いわゆるひさご壺を含む。II-4期に属する。
- 2: 無文のもの。II-4~III-1期に属する。
- 3: 1・2と同形であるが、首がやや短いもの。文様や赤色塗彩されるなど装飾性が高いものが多い。II-4期に属する。

壺E (直口壺) 口縁部がやや開き気味にまっすぐ作られたもの。底部形態は平底もしくは丸底で丸底の場合でもやや平底を意識したものもみられる。広口壺に似るものもあるが、広口壺に比べ小型で薄い。

- 1: 体部が上下に長い球形のもの。II-4~III期に属する。
- 2: 体部が上下にややつぶれた球形のもの。II-3~IV期に属する。
- 3: 台付のもの。II-4期に属する。

壺F (短頸壺) 上下にややつぶれた体部を持ち、体部に比して口縁が短いもの。

- 1: 口縁部がほぼ直立するもの。端部に多条沈線を巡らすものや赤色塗彩したものがある。II-4~III-1期に属する。
- 2: 口縁部が外側に屈曲し、断面形がく字状になるもの。口縁部はまっすぐなものとやや受け口状になったものがある。II-4~III-1期に属するがII-4期が中心である。
- 3: 1・2に比較してやや首が長く、口縁部が受け口状になるもの。口縁部外側に多条沈線を巡らせる。II-3期に属する。
- 4: 小型で球形の体部を持つもの。II-4~III-1期に属する。

壺G (二重口縁壺) 二重口縁を持つもの。II-4~III期に属する。

- 1: 口縁部上段が外反するもの。III-1期に多い。
- 2: 口縁部上段が直立するもの。III-1期に多い。

壺H (有段口縁壺) 有段口縁を持つ大・中型のもの。

- 1: 上段が外反するもので柳ヶ坪型文を施すもの。III-1期に属する。
- 2: 上段が外反するもので無文のもの。III期に属する。
- 3: 上段が直口気味のもの。III期~IV期に属する。
- 4: 3に似るが、外面に稜状の段を設けただけのもの。III期に属する。

壺I (小型有段口縁壺) 小型で有段口縁をもつもの。壺Hと比較して下段が非常に短い。底部形態は丸底もしくは丸底を意識した平底である。II-4~III-1期に属する。

壺J (無頸壺) 口縁部が内傾するもの。大型のものと小型のものがあり、前者はII-2期、後者はII-4~III期に属する。

壺蓋 確認したものは、いずれもII-4期である。

⑥小型壺 小型の壺。

小型壺A (小型平底壺) 底部形態が平底のもの。

- 1: 体部が球形のもので、口縁部が体部に比較して長く、口縁部径が体部最大径よりも大きいもの。II-4~IV期に属する。
- 2: 体部が球形のもので、口縁部が1に比べ短く、口縁部径が体部最大径と同じかもしくは小さいもの。II-4~IV-2期に属する。
- 3: 体部が卵形のもの。III~IV期に属する。
- 4: 文様を施すもの。II-3~4期に属する。

小型壺B (小型丸底壺) 底部形態が丸底のもの。

- 1: 口縁部が体部に比較して長く、口縁部径が体部最大径よりも大きいもの。III-1期に属する。
- 2: 口縁部が比べ短く、口縁部径が体部最大径と同じかもしくは小さいもの。III~IV期に属する。

⑦器台 浅く開いた受け部に脚部が付く器形。

器台A (大型受け部器台) 脚部径と同じかそれより大きい径の受け部を持つもの。

- 1: 受け部が外反気味で、筒状の脚柱部を持つもの。口縁端部を面取りし、多条沈線や貼り付け文を施すものもある。また脚柱部に多条沈線を施すものもある。II-3~4期に属する。
- 2: 受け部および脚裾部が内湾気味で、筒状の脚柱部を持つもの。II-3期に属する。
- 3: 受け部および脚裾部がやや内湾気味で、受け部から脚部がすぐに開くもの。II-4期に属する。
- 4: 受け部および脚裾部が内湾気味で、筒状の脚柱部を持ち、口縁端部を垂下させそこに多条沈線を施すもの。II-4期に属する。

器台B (条痕文系器台) 脚柱部が太く、赤茶色の胎土に特徴づけられたもの。II-3~4期に属する。

器台C (小型受け部器台) 脚部に比較し受け部が小さく、受け部が内湾気味のもの。II-4期に属する。

器台D (特殊器台) 北陸型のいわゆる特殊器台に似たもの。II-4期に属する。

器台E (小型器台) 小型で脚部に比較して受け部が小さく、受け部基部から直接ハ字状に開く脚部がとりつくもの。III~IV-1期に属する。

⑧高杯 杯部に脚部が付く器形。

高杯A (外反高杯) 杯部が屈折して段を持ちその上段が外反し、脚柱部から脚裾部にかけて逆ハ字状に広がるもの。II-3期に属する。

高杯B (椀形高杯) 杯部が椀形で、脚部がAに同じもの。II-3~III-1期に属する。

高杯C (ワイングラス形高杯) 杯部がワイングラス形で、脚部がAに同じもの。II-3期に属する。

高杯D (有段高杯) 杯部が屈折して段を持ち上段が内湾気味もしくは直線的に開くもの。II-4期に属する。

- 1: 杯部が深いもの。

- 2: 杯部が1に比較して浅いもの。
- 3: 口縁部内面を折り返して肥厚し、多条沈線を施すもの。
- 3: 杯部外面に多条沈線を施すもの。

高杯E (屈折脚有段高杯) 脚部が中程で屈折して裾部が逆ハ字状に開き、杯部が段を持つもの。
おもにⅢ-1期に属する。

- 1: 杯部が大型で浅いもの。
- 2: 杯部が1に比較して小型のもの。
- 3: はほぼ1に同じであるが、杯部が外反するもの。
- 4: 脚部の屈折が弱いもの。

高杯F (屈折脚碗形高杯) 脚部が屈折して裾部が内湾気味もしくは逆ハ字状に開き、杯部が碗形のもの。

- 1: 脚裾部が内湾気味のもの。Ⅲ-2-Ⅳ-1期に属する。
- 2: 脚裾部が逆ハ字状に開くもの。Ⅲ-2期に属する。
- 3: 杯部が浅く、段が明瞭でないもの。脚部は1に同じ。Ⅳ-1期に属する。
- 4: 口縁部が外側に屈曲するもの。脚部は1に同じ。Ⅲ-2-Ⅳ-3期に属する。

高杯G (垂下稜高杯) 杯部の中程に垂下稜をつける大型の高杯。Ⅲ-2-Ⅳ-2期に属する。

- 1: 杯部が有段のもの。
- 2: 杯部が碗形のもの。
- 3: 垂下稜が段状になったもの。脚部は2に同じ。

⑨手捏ね Ⅲ-Ⅳ期に属する。

須恵器 27,381点出土した。ここでいう須恵器は、古墳時代から古代にかけてのものである。

器種は次のように分類した。

杯蓋 A: 立ち上がりがあり受け部を持つ杯身にともなう蓋。

B: かえりのある蓋

C: 口縁端部を折り返す、もしくは直載する蓋。

杯身 次の三種がある。

立ち上がりがあり受け部を持つ杯身 (杯身と呼称)。

無台杯。

有台杯。

碗 無台碗、有台碗がある。

高杯 有蓋、無蓋、盤形がある。

盤 無台盤、有台盤、高台盤、大盤がある。

甕 おおむね球形の体部に広口の口縁部がつく。

鉢 口縁部が屈折する。

壺 甕と相似形で甕に比べ小型のものや、長頸壺、短頸壺がある。

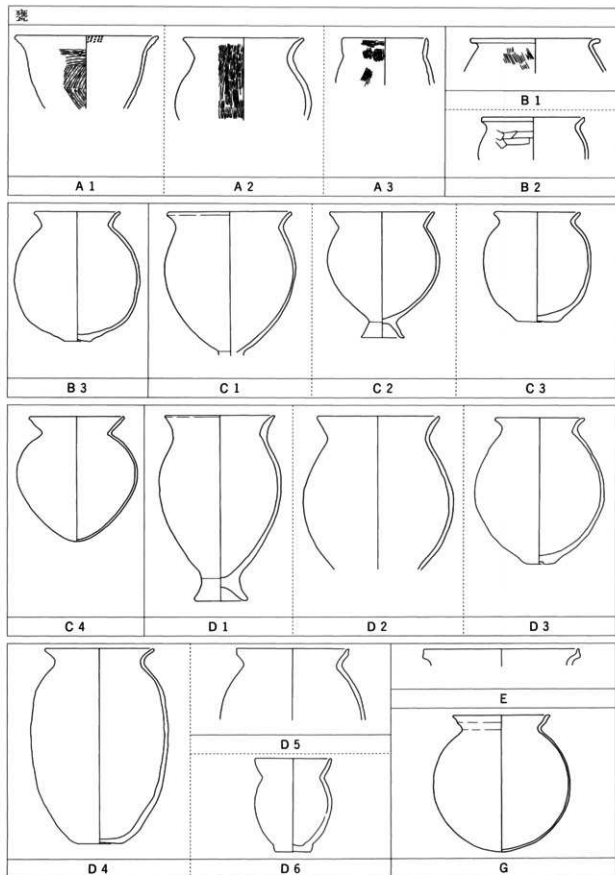


图12 弥生土器・土器分類(1)

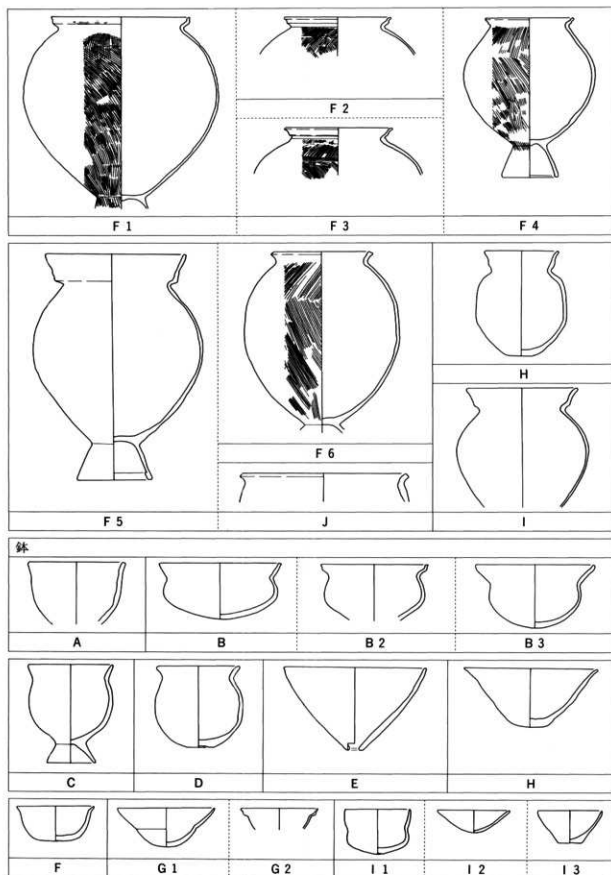


図13 弥生土器・土器分類(2)

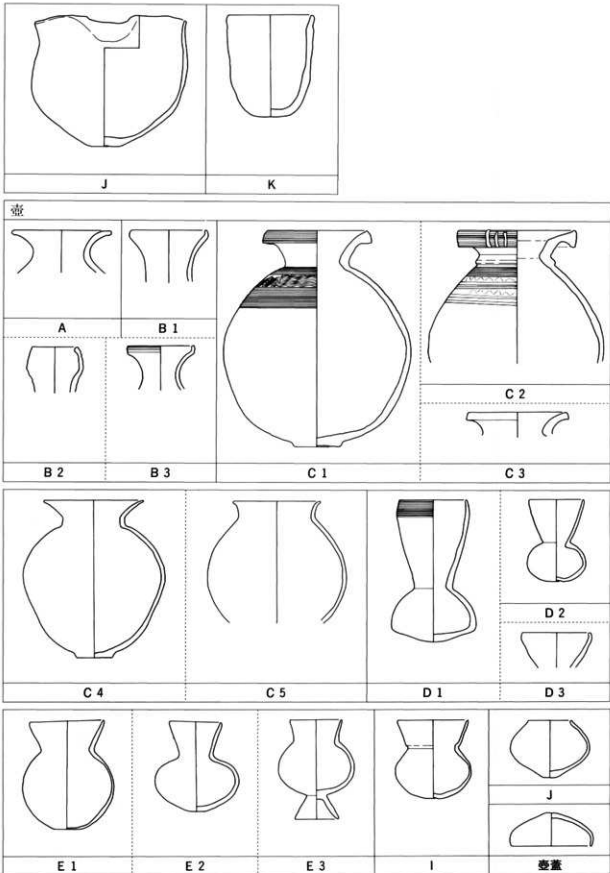


図14 弥生土器・土器分類(3)

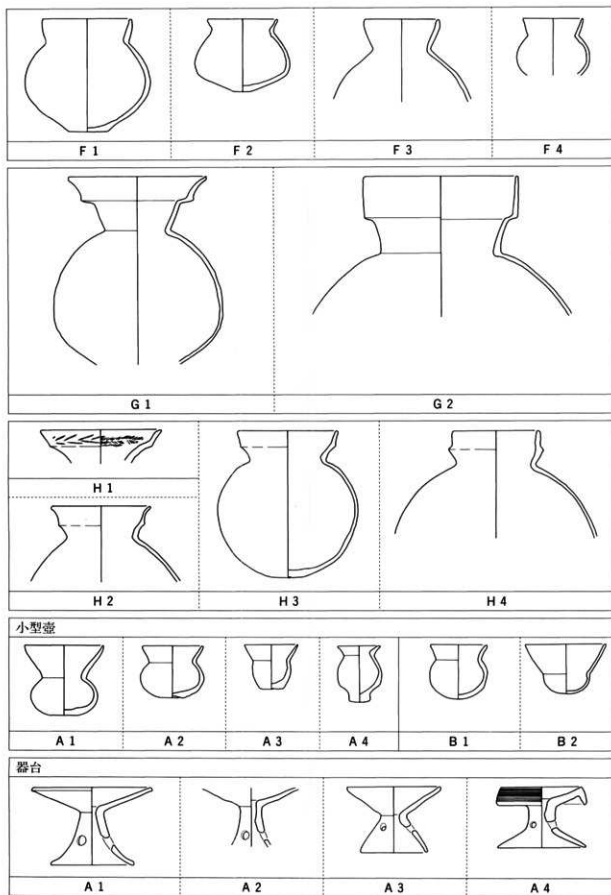


図15 弥生土器・土器分類(4)

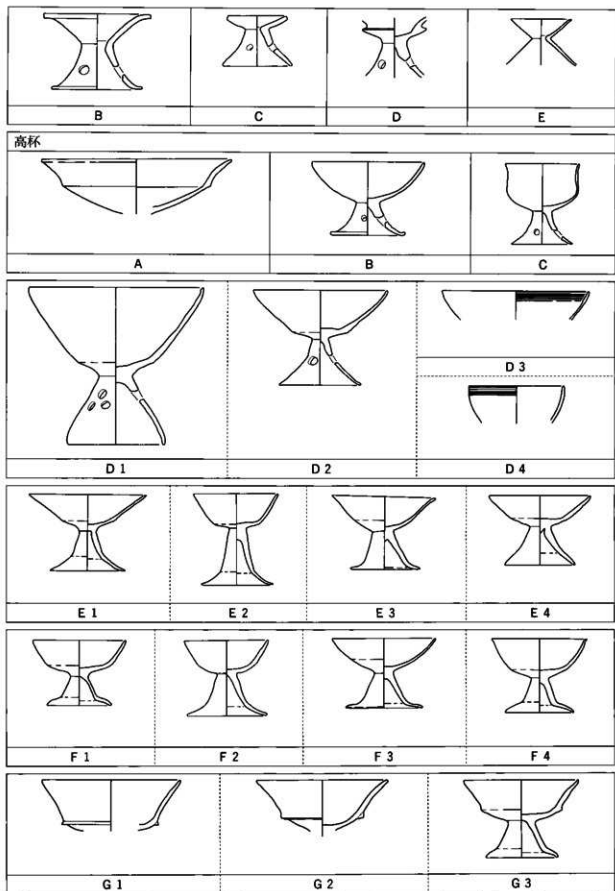


図16 弥生土器・土器分類(5)

瓶 提瓶、横瓶、平瓶、長頸瓶、フラスコ瓶がある。

罍 樽型罍も1点であるが確認した。

その他 上記の器種に当てはまらないものは、その都度名称を記す。

灰釉陶器 3,634点出土した。器種は次のように分類した。

瓶 長頸瓶がある。

碗 高台のつく通常の碗、輪花碗がある。

皿 段皿とそうでない皿がある。

その他、上記の器種に当てはまらないもの、その都度名称を記す。

灰釉系陶器 いわゆる「山茶碗」の名称で一般的に使用されている陶器である。従来より、「山茶碗」、「灰釉系陶器」、「白瓷系陶器」などと呼ばれているが、今回の調査ではいわゆる山茶碗で焼成された壺や瓶、入子、子持器台などが出土しているため、灰釉陶器を除いた広義の意味で「灰釉系陶器」という用語を使用する。178,132点出土した。墨書のある灰釉系陶器を825点確認した。なお墨書表記については後掲の凡例を参照されたい。

灰釉系陶器は「尾張型」「澁美・湖西型」「東遠型」「東濃型」「美濃須衛型」というように産地別に5類型が設定されている(藤澤良祐1994)。そのため、本来ならば「尾張型灰釉系陶器」というように「○○型灰釉系陶器」とするのが望ましい。しかし、美濃須衛型のは胎土が砂質で、初期の東濃型山茶碗や尾張型山茶碗の碗・皿と胎土だけでは区別できないものが含まれている。そのため、今回、灰釉系陶器の産地分類は「均質手」と「荒肌手」という見た目と肌触りを主とした分類とし、均質手灰釉系陶器を「灰釉系陶器K」、荒肌手灰釉系陶器を「灰釉系陶器A」とした。なお、灰釉系陶器Kは主に東濃型で、一部美濃須衛型が含まれている可能性がある。また、灰釉系陶器Aは主に尾張型である。また本文中で、第4型式や第5型式のように型式名で述べた場合は、原則として「荒肌手」、浅間窯下1号～窯洞1号窯式や白土原1号窯式のように窯式名で述べた場合は、原則として「均質手」である。

今回出土した灰釉系陶器の主な器種は、碗・皿・鉢・壺・瓶・入子・子持器台などがある。そのうち、屋敷地や水田の遺物組成や存続時期を把握するために、碗と皿を以下のようにして既存の分類に従った。

①灰釉系陶器K 碗

矢戸上野2号窯期 : 高台は高く、外面が直立する三角高台。回転系切り痕はナデ消しが多い。

谷迫間2号窯期 : 高台端部が外側にへの字状に開く。また、台形状を呈する。

浅間窯下1～窯洞1号窯期 : 底部は扁平で厚手。高台は低く、底部との接面積が広い。

白土原1号窯期 : 底部内面外縁に明瞭な輪状の窪みがある。

明和1号窯期 : 底部内面の静止指ナデが顕著になる。

大畑大洞4号窯期 : 底部内面は窪まない。高台幅が前段階より細くなる。

大谷洞14号窯期 : 底部内面が窪むものと窪まないものがある。高台は底部周縁にある。

大洞東1号窯期 : 高台が底部周縁より内側に入る。底部内面の静止指ナデはないものが多

い。

脇之島3～生田2号窯期：無高台。

②灰釉系陶器K 皿

西坂1号窯期：高台は高く、外面が直立する三角高台。回転糸切り痕はナデ消しが多い。

谷迫間2号窯期：高台端部が外側にハの字状に開く。また、台形状を呈する。

浅間窯下1～窯洞1号窯期：無高台。底径は小さく厚手である。底部が突出するものもある。

白土原1号窯期：無高台。底径はやや大きく薄手となる。体部は2段の回転ナデが施されるものが多い。

明和1号窯期以降：無高台で、薄手のもの。

なお、本文中で型式名を記載する場合は「西坂1」「谷迫間2」とし、「号窯期」は割愛する場合もある。

③灰釉系陶器A 碗

第3型式：高台は高く、外面が直立する三角高台。回転糸切り痕はナデ消しが多い。

第4型式：高台は外側が直立気味～内傾、内側がかなり内傾する三角高台。

第5型式：底・体部は緩やかにつながる。高台は低い。

第6型式：底部内面外縁に明瞭な輪状の窪みがある。底部内面に静止指ナデ調整。

第7型式：底部内面と体部内面の境に角ゴテ痕あり。

第8型式：無高台

④灰釉系陶器A 皿

第3型式：高台は高く、外面が直立する三角高台。回転糸切り痕はナデ消しが多い。

第4型式：高台は外側が直立気味～内傾、内側がかなり内傾する三角高台。

第5型式：無高台。底径は小さく厚手である。底部が突出するものもある。

第6型式以降：無高台。底径はやや大きく薄手となる。

中国磁器 今回の調査では、青磁や白磁などの中国磁器が741点出土した。これほどの量が出土した遺跡は県内ではほとんどなく、他県の状況と容易に比較できるようにするため、現在一般的に使用されている既存の分類（横田賢次郎・森田勉1978、森田勉1982、上田秀夫1997）に従った。以下、青磁、白磁、青白磁の順に説明する。

1. 青磁

同安窯系青磁

細分をせず、碗と皿の分類のみとした。

龍泉窯系青磁（図17参照）

①碗

劃花文碗を主体とした一群（I-1～4類）。

I-1類：高台が断面四角形で、内外面とも無文。

I-2類：高台が断面四角形で、体部内面に草花文、ないしは花文様を描く（I-3類もI-2類に含める）。

I-4類：2本の沈線により体部内面を5分割し、その中に飛雲文を、内面見込みにキノコ状の文様を3個片彫りしたもの。口縁部に輪花があるものとなないものがある。

連弁文碗を一括した一群（I-6、A、B類）。

I-6類：体部外面に縦の欄目を入れ、片彫りで連弁文を一周させるもの。

A類：断面三角形の高台をもつ鑄連弁文碗。高台先端を除いて全面に施釉され、露胎部との境は赤色に発色する。

B-I類：断面四角形の高台をもつ鑄連弁文碗（旧I-5類）。

B-II類：片切りの大きな粗略な連弁文碗。

B-III類：片彫り、もしくは丸彫りによって連弁を表現したもの。

B-IV類：へら先による細線の線描連弁文をもつもの。

その他（C～E類）

C類：雷文帯碗を主体とした一群。

D類：内外面無文端反碗。

E類：内外面無文直口碗。全面施釉で高台内を丸く釉剥ぎする例が多い。

②皿

A類：劃花文皿。底部内面に劃花文を有する（森田・横田I類）。

B類：連弁文折縁皿。体部内外面に連弁文をもつ（森田・横田III-4類）。

C類：無文折縁皿（森田・横田III-2・3類を含む）。

D類：腰折皿（森田・横田III-1類）。

E類：直口皿。無文。体部が丸みを帯びる。

F類：端反皿。無文。口縁部が外反する。

G類：稜花皿。口縁部に稜花形の刻みがあり、腰折で口縁部が外反し、内面に構描波状文をもつ。

③その他の器種

香炉などが出土している。

2. 白磁（図18参照）

①碗

II類：高台は外面が直、内面が斜めで、口縁部に小さな玉縁をもつ。

IV類：口縁部に大きな玉縁をもつ。

V類：細く高い高台をもち、口縁部は外反する。

VIII類：見込みの軸を輪状にカキ取るもの。

IX類：口縁部に軸がかからない、口禿のもの。

C群：端反碗。

B群：枢府磁系。

②皿

III類：高台をもつもの。

IV～VI類：平底を呈するもの。

VIII類：平底を呈するもので、体部が屈曲し、底部内面に草花文をもつもの。

IX類：口縁部に軸がかからない、口禿のもの。

D群：袂り高台、底部内面に溶着痕を残す。

E群：端反皿の一群。

③その他

四耳壺が出土している。

3. 青白磁

①合子

平形合子蓋・身、壺形合子蓋・身、などがある。

②その他

碗の破片が出土している。

中世土師器 2,835点出土した。皿と煮沸具に分けて以下に述べる。

①皿

出土数が少なく遺存状態も良好でないため、最小限の分類に止めた。なお、小野木学1997、井川祥子1997を参考とした。

I類：ロクロ成形による土師器皿

II類：非ロクロ成形による土師器皿

II-A類：体部が内湾気味に立ち上がり、外面に横ナデを施すもの。中世前期の京都の土師器皿を模倣したもの。小野木分類A1a、B1a、B2a類。

II-B類：体部が内湾気味に立ち上がり、外面に横ナデを施すもの。中世前期の京都の土師器皿に原型を求めにくいもの。小野木分類A2a～A2e、B2c・B2d類。

II-C類：体部が直線的、あるいは外反し、外面に横ナデを施すもの。中世後期の京都の土師器皿を模倣したもの。井川分類A・B系統。

II-D類：体部が内湾気味に立ち上がり、体部外面に横ナデを施さないもの。中世後期の京都の土師器皿に原型を求めにくいもの。井川分類C系統。

②煮沸具 (図19)

いわゆる伊勢型鍋 (南伊勢系鍋) が幾つか出土している。

A類：口縁部の折り返しが短いもの。

B類：口縁部の折り返しが長いもの。

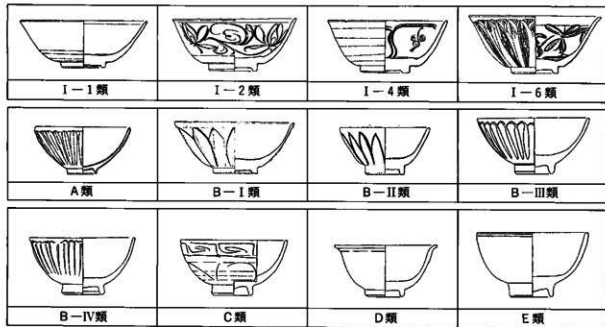
B-1類：折り返し上面のナデが弱いため、上面が膨らむもの。

B-2類：折り返し上面のナデが強いため、上面が窪むもの。

なお、羽釜は出土数が少ないため、細分はしない。

中近世陶器 13,177点出土した。美濃須衛陶器、常滑陶器、瓦質土器、古瀬戸陶器、大窯陶器、連房陶磁器、肥前磁器、産地不明陶器、瓦、土製品などがあり、出土量の多い常滑陶器や瀬戸美濃陶器(古瀬戸・大窯・連房)は、いずれも既存の分類と年代観(中野晴久1994、藤澤良祐1997・2002、藤澤良祐・岡本直久2002)に従った。

龍泉窯系青磁碗分類



龍泉窯系青磁皿分類

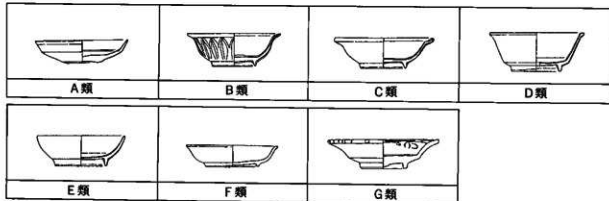
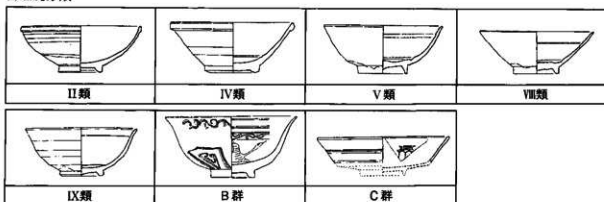


図17 青磁分類 (S=1/5)

白磁碗分類



白磁皿分類

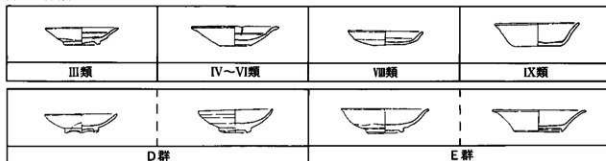


図18 白磁分類 (S=1/5)

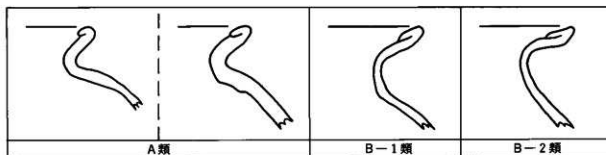


図19 中世土師器煮沸具分類 (S=1/2)

墨書釈文の符号表記 凡例

『木簡研究』において木簡表記に使用されている符号を参照し、以下の通りとした。

「 」 文字方向の上下に対し、底部墨書の場合は底部上下端、体部墨書の場合は口縁部・底部端が残存していることを示す。

□□□ 欠損文字、釈読不能文字のうち字数が推定できるもの。

[] 欠損文字、釈読不能文字のうち字数の数えられないもの。

× 前後に文字が続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

() 校訂に関する注で、本文に置き換わるべき文字を含むもの。

() 説明注。

カ 編者が加えた注で疑問が残るもの。

表8 土器編年対照表

時期区分		各種別編年表				西暦	時代区分
I	1	《縄文土器》					縄文中・後期
		船元・黒木式	灰畑・鹿瀬式				
		中津・福田ⅤⅢ式					
		緑帯文					
		門籠文系					
	2	西日本磨研	《弥生土器・土師器》				縄文晩期
		凸帯文系	美濃Ⅰ	尾張			弥生前期
II	1		美濃Ⅱ	朝日式			弥生中期
	2		美濃Ⅲ	日田町式			弥生後期
	3		美濃Ⅳ	高藏式			弥生末～古墳初期
	4		美濃Ⅴ	山中式			
III	1			《須恵器・灰釉陶器》			400
	2		松河Ⅰ式	埴坂窯	美濃Ⅷ南窯		
IV	1		宇田式	城山12			500
				東山11			
				東山61			
	2			東山44	蘇原6		
				東山50	須磨65		600
V	1			岩崎17古	尾崎大平2		700
				岩崎17新	尾崎大平1		
				岩崎41	旗原河		
				高藏寺2	長瀬1～2		
				岩崎25	福田山15		
				嶋津32	福田山14		
				折戸10古	福田山12		
				折戸10新	福田山13		
				井ヶ谷28			
				黒部14.1	福田山1		
			黒部14.2	福田山2			
			黒部90.1	福田山3			
			黒部90.2				
			折戸53.1				
			折戸53.2				
			東山72				
			百代寺.1				
			百代寺.2				
VI	1				《灰釉系陶器》		1100
					尾張型	東濃型	
					第3型式	大戸上野2	
					第4型式	谷田四2	
					第5型式	浅間堂下1	
					丸石		
					密洞.1		
	2				第6型式	白土原1	
					第7型式	明和1	
VII	1					古瀬戸前期	1300
					第8型式	大畑大洞4	
					第9型式	大谷洞14	
	2					第10型式	
					第11型式	脇之島3	
						牛田2	1400
	3						1500
						大室1	
						大室2	
						大室3	
						大室4	
VIII	1					連房第1段階	1600
						連房第2段階	1700
	2					連房第3段階	1800
	3						1900

※各種別毎の編年対定や年代観については、第4章第1節であげた研究に原因としてよった。作表の都合上、例えば西暦の上限・下限が土器型式のそれに表上で合致しているようにみえるが、実際はそうではない。その他、細かい点については問題もあろうが、相推された。

第5節 木製品の概要

第1項 分類

当遺跡より木製品は22,436点出土した。その分類は、奈良国立文化財研究所「木器集成図録 近畿原始篇」を主に参考として、表9のように行ったが、以下の点のみ変更した。

農具	えぶり：その機能が起耕ではないので鍬と分けた。 大足：沈下防止のためのものではないと判断し、田下駄とは別とした。
食事具	箸：いわゆる箸のような形を呈したものを一括した。両端ないしは片方のみ尖るものがある。断面は円形～多角形状であるものが多い。
容器	甕ほか：製作工程を示した割物・挽物という分類もあるが、ここでは容器の名称を用いた。 曲物：折敷と呼称される側板の低い容器も曲物の一つとして報告した。 漆製品：製品名がわかるものは各分類に分け、製品名が不明なもの（例えば板材など）を漆製品とした。
雑具	火付け木：片方または両端に燃やした痕がある材を示す。ただし、燃やした痕がなくても、形態が似ていて出土遺構が同じものは火付け木とした。なお、祭祀具に分類されることもあるが、今回は雑具とした。
用途不明品	板状・棒状木製品：板状・棒状を呈し用途が定かでないもの。なお、有孔板状木製品や有頭棒状木製品など細かな分類ができる物は本文中で分類した。また、角材は建築部材の可能性もあるが、その用途が定かでないものは用途不明品とした。 その他：板状とも棒状ともいえない用途不明品。加工した痕跡のある端材もここに入る。
土木材	芯材：木製遺構を構成する材を示す。
建築部材	柱根・礎板：柱根は建築部材の柱に入れるべきだろうが、柱穴出土という出土状況がはっきりしていることから単独で分類した。 横架材：建築部材のうち最も種類の多い材であり、継手・仕口方法により細分した。

第2項 出土遺構概要（表10）

木製品が出土した遺構は木製遺構が最も多く、全体に占める比率は4割以上である。次いで、自然流路、溝の順で出土量が多く、この3種類の遺構から全体の8割以上の木製品が出土している。これらの遺構から出土した木製品は大半が土木材であるが、土木材を除外して遺構毎の比率を算出しても、自然流路と溝から全体の9割以上の木製品が出土していることになる。つまり、木製品に関してみれば、自然流路や溝からの出土が圧倒的に多いことがわかる。

次に製品毎の出土傾向を概観する。食事具は、自然流路や溝よりも土坑や井戸からの出土数が多い。これは箸の出土数が土坑と井戸から多いことに起因する。雑具の内訳は9割以上が火付け木であるが、自然流路とともに溝、包含層からの出土が目立つ。ここでいう包含層とは水田耕作土を示し、出土状況は横位で出土したものが大半で、土に刺さった状態で確認できたものはわずかである。しかし、静岡県上土遺跡のように祭祀性を追求できるような出土例があること（矢田勝他1996）や、当遺跡に隣接する願戸南遺跡のように道路遺構周辺からの出土が目立つ事例があることから、当遺跡において雑

表9 木製品の分類

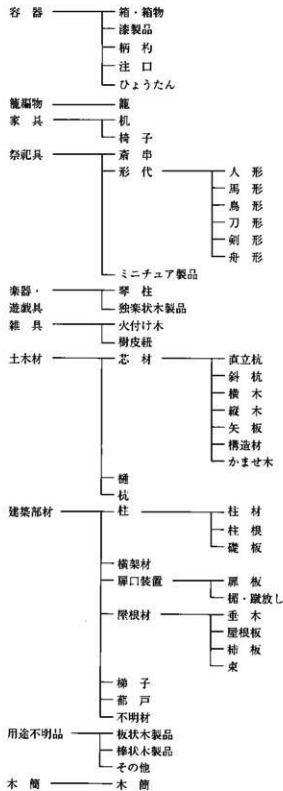


表10 遺構別木製品出土点数一覧

遺構時期 器種	遺構時期										
	壁穴住居跡	土坑	井戸	土器集積	ピット	畦畔	溝	自然流路	水制遺構	包含層	合計
農具	0	1	3	0	0	0	59	140	31	16	250
未製品	0	0	1	0	0	0	4	6	0	1	12
工具	0	0	0	0	3	0	3	5	2	0	13
紡織具	0	0	0	0	1	1	3	10	2	3	20
漁撈具	0	0	0	0	0	0	2	3	1	0	6
運搬具	0	1	0	0	0	0	1	8	1	2	13
武器・馬具	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	5
服飾具	0	4	4	0	1	3	9	11	7	8	47
食事具	0	29	48	0	14	0	18	24	2	8	143
発火具	0	0	0	0	0	0	2	3	2	1	8
容器	0	7	17	0	1	1	66	123	36	23	274
籠・網代	0	0	2	0	0	2	1	5	12	2	24
家具	0	0	0	0	0	0	6	5	0	2	13
祭祀具	0	0	1	0	1	1	25	57	11	9	105
楽器	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3
雑具	1	165	31	1	38	17	501	777	53	611	2195
土木材	1	29	52	0	56	488	1148	2092	9085	373	13324
用途不明	3	136	156	11	172	71	1050	1631	498	900	4628
木簡	0	1	0	0	0	0	5	1	0	0	7
建築部材	0	1	4	0	8	15	78	127	150	21	404
柱根・礎板	16	1	1	0	257	0	5	5	2	40	327
自然木	0	67	43	0	17	5	125	149	88	121	615
合計	21	442	364	12	569	604	3114	5186	9983	2141	22436

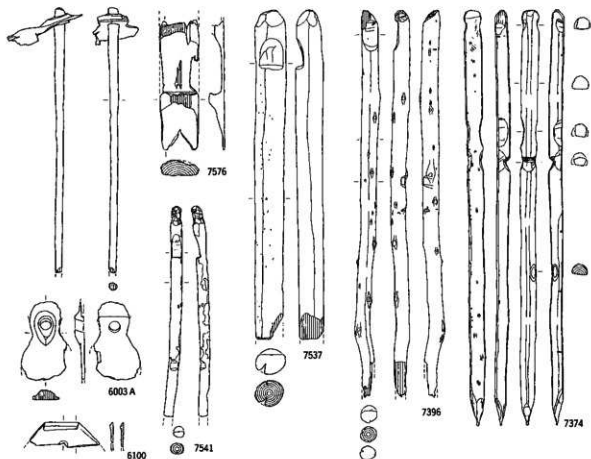
表11 時期別木製品出土点数一覧

遺構時期 器種	遺構時期							合計
	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	
農具	2	24	33	25	10	2	0	96
未製品	0	0	1	0	1	0	0	2
工具	0	1	1	2	1	0	0	5
紡織具	1	0	0	5	3	2	0	11
漁撈具	0	0	1	1	0	0	0	2
運搬具	0	1	2	4	1	0	0	8
武器・馬具	0	0	0	1	1	1	0	3
服飾具	0	0	7	4	15	8	0	34
食事具	1	0	8	8	98	14	0	129
発火具	0	0	1	3	1	0	0	5
容器	0	2	24	75	62	22	1	186
籠・網代	0	1	16	1	2	2	0	22
家具	0	1	0	1	0	1	0	3
祭祀具	1	5	11	41	3	6	0	67
楽器	0	0	0	0	1	0	0	1
雑具	13	5	54	476	257	74	1	880
土木材	382	1736	3337	694	695	4491	138	11473
用途不明	88	188	502	598	576	396	9	2357
木簡	0	0	0	0	7	0	0	7
建築部材	5	40	132	21	28	41	0	267
柱根・礎板	2	13	15	6	164	7	4	211
自然木	22	18	77	22	113	56	3	311
合計	517	2035	4222	1988	2039	5123	156	16080

具のみ包含層からの出土比率が高いということは十分に留意すべきであろう。また、建築部材の出土数が最も多いのは水制遺構である。このことは、建築部材が水制遺構の土木材として転用されていたことが極めて多かったことを示しており、逆に、転用されているからこそ、建築部材の全容が明らかにくく、当時の建物の復原が難しいことを示しているといえる。

第3項 木製品の一括出土遺構

第6章第2節の木製品の項では分類ごとに記載するため、ここでは遺構出土の木製品について概観する。しかし、木製品は先述したように水制遺構、自然流路、溝からの出土が多く、自然流路は多時期の遺物が混在している可能性が高いため、水制遺構と溝出土の木製品に限定する。なお、時期は遺構出土の土器から判断しており、表11の数値は遺構の時期が一時期に限定できたもののみ算出し、複数期にまたがる遺構出土の木製品はカウントしていない。

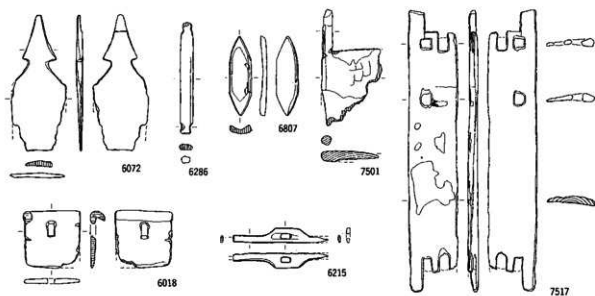


SW72 (Ⅲ期)

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
7576	建築部材	樑子		1/16
6003A	農具	直柄鍬	平鍬	1/12
6100	農具	泥除け		1/12
7374	建築部材	横架材	横架材5	1/16

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
7396	建築部材	横架材	横架材5	1/16
7537	建築部材	屋根材	垂木	1/16
7541	建築部材	屋根材	垂木	1/16

図20 遺構出土木製品1 (SW72)



SW62 (IV期)

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺	実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6215	農具	大足	足板横枠	1/16	6807	祭祀具	形代	舟形	1/8
6072	農具	曲柄鍬	ナスビ形平鍬	1/12	7501	建築部材	扉口装置	扉	1/16
6018	農具	直柄鍬	横鍬	1/12	7517	建築部材	扉口装置	欄・版敷し	1/16
6286	運搬具	付札状木製品		1/8					

図21 遺構出土木製品2 (SW62)

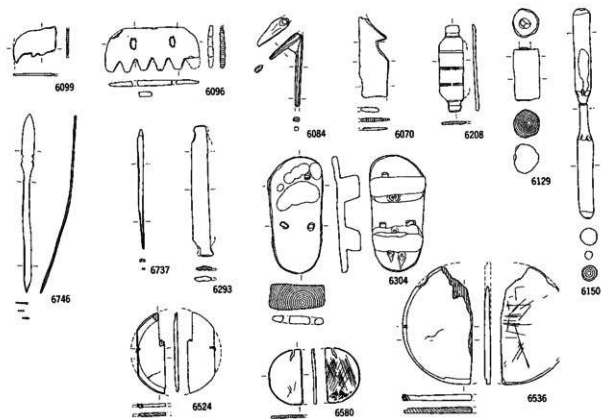
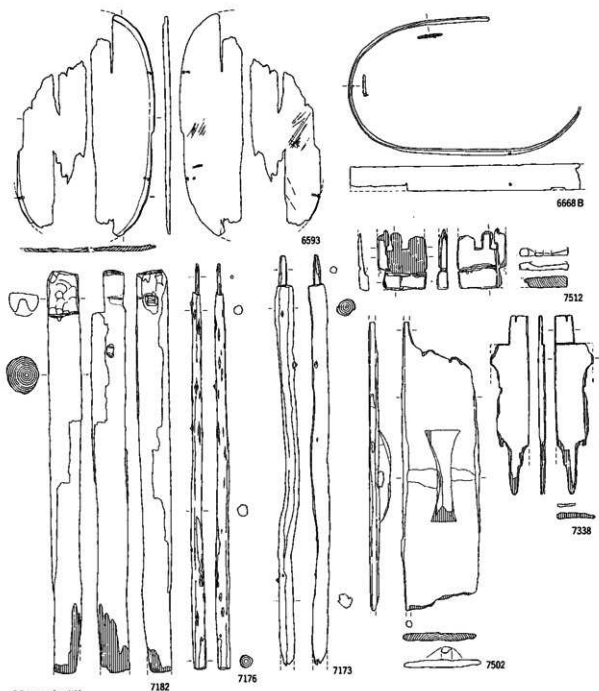


図22 遺構出土木製品3 (SD107)

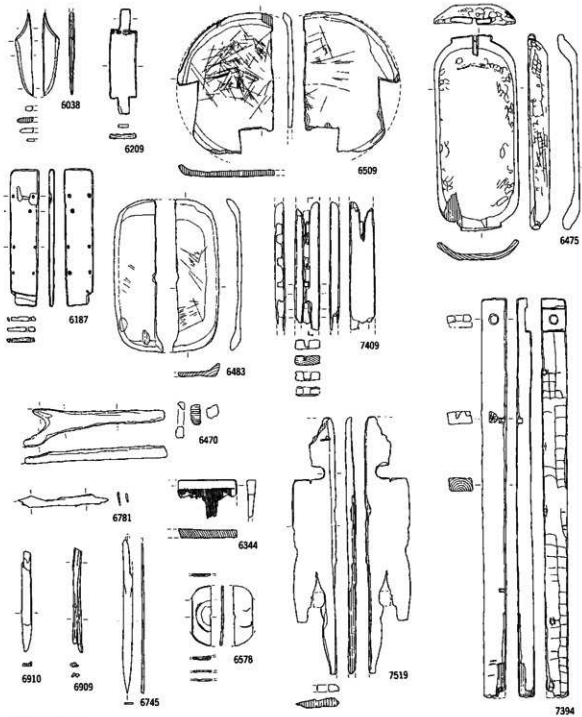


SD107 (IV期)

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6293	運搬具	付丸状木製品		1/8
7338	建築部材	横架材	横架材1	1/16
7502	建築部材	扉口装置	扉	1/16
7512	建築部材	扉口装置	榫・扉放し	1/16
7176	建築部材	柱	柱材	1/16
7173	建築部材	柱	柱材	1/16
7182	建築部材	柱	柱材	1/16
6737	祭祀具	斎串		1/8
6746	祭祀具	斎串		1/8
6084	農具	柄	藤柄	1/12
6096	農具	えより		1/12

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6208	農具	大足	足板	1/16
6099	農具	泥除け		1/12
6070	農具	曲柄鍬	ナスビ形平鍬	1/12
6129	農具	横柄		1/12
6150	農具	整片		1/16
6304	服飾・装身具	下駄	連雲下駄	1/8
6524	容器	曲物身	凹形曲物底板	1/10
6536	容器	曲物身	凹形曲物底板	1/10
6580	容器	曲物身	凹形曲物底板	1/10
6593	容器	曲物身	種凹形曲物底板	1/10
6668B	容器	曲物身	曲物圓板	1/10

図23 遺構出土木製品4 (SD107)

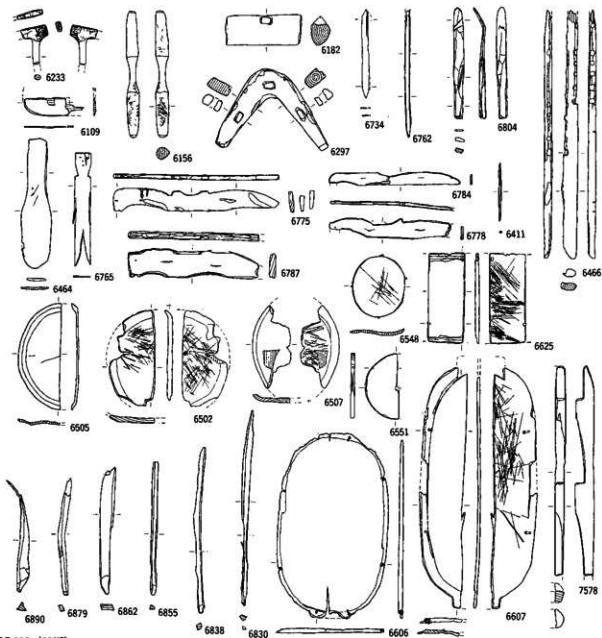


SW87 (V期)

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
7409	建築部材	横架材	横架材 6	1/16
7394	建築部材	横架材	横架材 5	1/16
7519	建築部材	扉口装束	柄・履放し	1/16
6745	建築部材	竈串		1/8
6781	祭具	形代	馬形	1/8
6909	祭具	火付竹木		1/8
6910	祭具	火付竹木		1/8
6209	農具	大足	足板	1/16

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6038	農具	曲柄鍬	平鍬	1/12
6187	農具	田下駄	輪カンジキ型 田下駄	1/12
6470	祭火具	火きり弓		1/8
6344	服飾・装身具	櫛		1/4
6509	容器	甕		1/8
6483	容器	樽・甕		1/16
6475	容器	樽・甕		1/16
6578	容器	曲物身	円形曲物底板	1/10

図24 遺構出土木製品5 (SW87)



SD208 (V期)

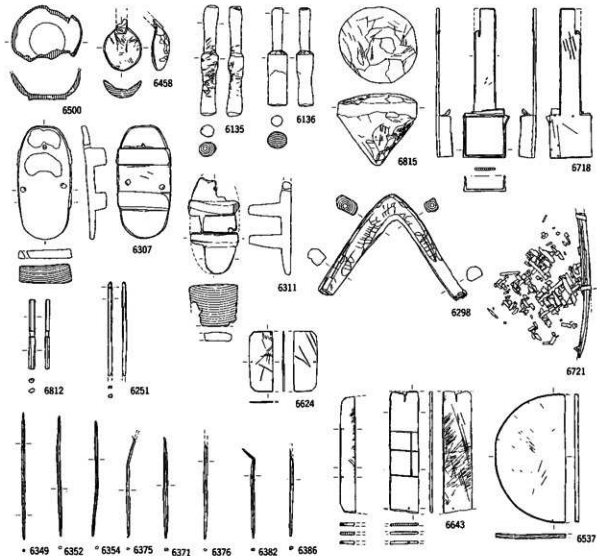
実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
7578	建築部材	梯子		1/16
6233	工具	斧柄		1/12
6765	祭祀具	形代	人形	1/8
6804	祭祀具	形代	人形	1/8
6787	祭祀具	形代	馬形	1/8
6778	祭祀具	形代	馬形	1/8
6775	祭祀具	形代	馬形	1/8
6784	祭祀具	形代	馬形	1/8
6734	祭祀具	形代	馬形	1/8
6762	祭祀具	形代	馬形	1/8
6879	雑具	火付行木		1/8
6830	雑具	火付行木		1/8
6838	雑具	火付行木		1/8
6855	雑具	火付行木		1/8
6862	雑具	火付行木		1/8
6890	雑具	火付行木		1/8

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6411	調理具	箸		1/8
6464	調理具	杓子状木製品		1/8
6109	農具	泥除け		1/12
6156	農具	整片		1/16
6182	農具	木鎌		1/8
6466	祭火具	火きり臼		1/8
6297	武器・農具	鞍		1/8
6505	容器	皿		1/8
6502	容器	皿		1/8
6507	容器	皿		1/8
6548	容器	曲物身	凹形曲物底板	1/10
6551	容器	曲物身	凹形曲物底板	1/10
6625	容器	曲物身	方形曲物底板	1/10
6606	容器	曲物身	耳付横凹形曲物底板	1/10
6607	容器	曲物身	耳付横凹形曲物底板	1/10

図25 遺構出土木製品6 (SD208)

II期に限定できる遺構出土の木製品は少ない。農具、紡織具、食事具、祭祀具などが出土している。
 III期に限定できる遺構出土の木製品は比較的多く、農具や建築部材の出土数が目立つ。代表的な遺構としてSW72を挙げた(図20)。SW72では、直柄鍬の歯と柄が装着して出土しており、泥除も出土している。また、垂木、横架材、梯子などの建築部材も出土している。

IV期に限定できる遺構出土の木製品は多く、農具や服飾具、容器、網代、建築部材の出土数が目立



SE 1 (VI期)

実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺	実測番号	製品名1	製品名2	製品名3	縮尺
6721	籠箱物	籠		1/8	6382	調理具	箸		1/8
6815	楽器・遊戲具	独奏杖木製品		1/6	6136	農具	横鋤		1/12
6251	工具	木針		1/8	6135	農具	横鋤		1/12
6812	祭祀具	ミニチュア製品	ミニチュア堅片	1/6	6298	武器・馬具	鞍		1/8
6458	調理具	箸		1/8	6311	服飾・装身具	下駄	連歯下駄	1/8
6371	調理具	箸		1/8	6307	服飾・装身具	下駄	連歯下駄	1/8
6386	調理具	箸		1/8	6718	容器	柄杓		1/8
6352	調理具	箸		1/8	6537	容器	曲物身	円形曲物底板	1/10
6354	調理具	箸		1/8	6632	容器	曲物身	方形曲物底板	1/10
6376	調理具	箸		1/8	6624	容器	曲物身	方形曲物底板	1/10
6375	調理具	箸		1/8	6643	容器	曲物身	方形曲物底板	1/10
6349	調理具	箸		1/8	6500	容器	柄	漆器碗	1/8

図26 遺構出土木製品7 (SE 1)

つ。IV期の段階で新たに出土する器種として服飾具の下駄や、容器の曲物、網代などがあり、建築部材が多いのは、水制遺構の検出数に比例しているといえる。代表的な遺構としてSW62とSD107を挙げた(図22~23)。SW62では、鉄製のU字型鋸先が装着されるナスビ形平鋸や、泥除が装着される横鋸が出土している。戸口装置は扉板と榑・蹴放しが出土しているが、扉板は大半が焼失している。また、当遺跡において形代はIV期以降に出現するが、SW72では舟形代が出土している。SD107ではほとんどの器種が出土しており、とりわけ建築部材は掘立柱建物用の2種類の柱と戸口装置がまとまって出土しており注目できる。

V期に限定できる遺構出土の木製品も多く、農具や容器、祭祀具、雑具の出土数が目立つ。容器は曲物の出土数がIV期より増加している点の特徴である。形代はV期の出土数が最も多く、当遺跡付近で小規模な献やまじないの儀式を行っていたことを裏付ける資料といえる。また、雑具、とりわけ火付け木の出土数がV期の段階で激増する点も注目できよう。代表的な遺構としてSW87とSD208を挙げた(図24・25)。両遺構ともに形代と挽物の容器が出土しており、形代は馬形が、挽物は皿の出土数が多いといえる。

VI期に限定できる遺構出土の木製品も多く、服飾具や食事具、容器、雑具の出土数が目立つ。食事具の比率が高いのは、VI期において居住域が調査区全域に展開しており、その廃棄坑や埋納遺構を幾つか検出したためと思われる。代表的な遺構としてSE1を挙げた(図26)。SE1からは食事具である漆器椀、匙、箸などがあり、木製品以外の食器(灰釉系陶器の碗・皿など)との関連が注目できる。また、独楽状木製品や轆、全面漆塗りの柄杓、籠、線刻のある方形曲物底板など、特殊な遺物も出土している。SE1は屋敷地内の唯一の井戸であり、祭祀的な様相もあるのであろうか。

VII期に限定できる遺構出土の木製品も多いが、大半は土木材で他器種の出土数は乏しい。

VIII期は、この時期に限定できる遺構が少ないため、それに伴う木製品も少ない。

第4項 木製品の取り上げから整理・収納まで

当遺跡の出土遺物の一特徴として、出土した木製品の多さが挙げられる。その出土点数は杭などの土木材を含め、22,436点である。多くの遺跡では木製品は腐ってなくなってしまうが、当遺跡では比較的短期間で埋没したと思われる自然流路が幾つかあり、その中に良好な形で木製品が多数埋没していたことと、地下水位が高く土中の木製品が無酸素状態にあり腐敗を免れたため多数の木製品が出土した。

このように多数の木製品が出土した遺跡は、岐阜県ではこれまでに例がない。そこで本項では、木製品を調査していった経過を報告する。

1 発掘調査中の木製品の取り上げ

水制遺構を構成する土木材以外の木製品は、以下のことを念頭に置いて取り上げにあたった。

- A 出土時の状況を記録する。
- B 数個体をまとめず、単独で取り上げる。
- C 破損・変形を防ぐよう保管する。

Aについて：木製品が出土したとき、出土状況図を作成する手法がよくとられる。当遺跡において木製品は自然流路内からの出土がほとんどであり、廃棄された状態を留めていない場合が多い。

また、夥しい数の出土木製品のすべてを凶化することは時間的にも無理があるため、出土状況を示す写真をできるだけ撮影することでその代わりとした。このため、木製品を実測する際に出土状況時に立ち戻って接合関係を確認できた。

Bについて：木製品は取り上げ時、または取り上げ後によく破損する。従って、出土した木製品は同一個体と思われるものだけをよく吟味して取り上げることとした。木製品が丈夫な場合でも、破損したものがどの個体に属するかわからないときが往々にしてあったので、遺物取り上げ時には別個体を混ぜない方がよいと思われる。

Cについて：水分量の多い土中から出土した木製品は、空气中にさらされる状態になったときから脱水が始まり変形し始める。従って、できるだけ早く取り上げることが肝要だが、それがかなわぬ時は、濡れタオルなどをかぶせたり、じょうろで水を掛けたりしなければならぬ。また、早く取り上げられたとしても、出土木製品は常に水に浸かった状態しておかなければならないため、保管時には蓋のできる食品用タッパーを使ったり、重ね積みしたコンテナの最上部に蓋をしたりする（ビニールをかぶせるだけでもずいぶん効果は見られる）などの措置をするとよいと思われる。大型の土木材などは、保管容器に入りきらぬため事務所脇にビニールシートで仮設プールを作りそこに仮置きした。

2 木製品整理作業の経過

発掘調査で取り上げられた木製品は、以下のような過程を経て整理していった。なお、具体的な作業内容については、次項を参照されたい。

平成12年度：本発掘調査の2年目である。前年度及び当該年度出土分の木製品、約12,000点の一次整理作業を開始した。

平成13年度：本発掘調査の3年目である。当該年度に出土した約10,000点の木製品の一次整理作業を行った。また、実測作業を中心とした二次整理作業も開始し、実測が終了したものの中から抽出して写真撮影を行った。特に重要性の高い木製品は保存処理を施した。

平成14年度：本発掘調査及び一次整理作業が終了し、出土木製品の全容がほぼ明らかになった。木製品の二次整理作業は二年目を迎え、人員を増強して実測作業をほぼ終わらせた。前年度同様、実測が終了したものの中から抽出して写真撮影を行った。特に重要性の高い木製品は保存処理を施した。

平成15年度：遺物のトレース作業を行い、保存処理を実施した遺物を中心に木製品の集合写真を撮影した。

3 木製品の整理方法

ここでは、具体的にどのような作業過程を経てきたかを記載する。

(1) 一次整理作業

当センターでは、これまでも木製品の出土した遺跡を調査してきた。しかし、木製品の取り上げから整理・保管までの一貫した方法は残念ながら確立されていなかった。そこで、当遺跡における夥しい数の木製品を整理していくにあたり、取り上げから整理・保管までの手順を明確にした。本項では、木製品の一次整理を行った平成12～13年度の実践を、反省点を含め以下に述べることにする。

一次整理は以下のような流れで進められる。

①洗浄

先述したように発掘現場で取り上げた木製品は、コンテナ等に水漬けの状態で行ったん保管した。それを地点毎に取り出し洗浄していったが、土木材など大型のものは特注の水槽(L510×W110×H36:単位cm)で洗浄した。洗浄は整理事業員が行ったが、速日取り上げられてくる多数の土木材などに対応するため数人の発掘作業員を当番制にして洗浄にあたったこともある。

洗浄中は、柔らかいブラシ(豚毛ブラシ)・筆などを用いて、木目の方向に沿って一方方向のみ動かすなど傷がつかないように配慮した。特に重要なものについては調査員が洗浄した。洗浄後は、後の作業がしやすいようコンテナに少数ずつ入れ、平積みにした。

②ラベル確認

平積みされた木製品一つ一つに整理番号を通番で付し、番号を記入した新たなラベルを結びつけた。その際、割れているものはバラバラにならないよう一破片ずつラベルに1/3、2/3、3/3などと記入をしておいた。

③台帳記入・計測

計測する整理事業員は、整理番号の付けられた木製品を観察し、その結果を手書きで台帳に記載した。記載内容は以下の通りである。

整理番号	一次整理時に付した番号
製品名	曲物底板などの器種名。調査員が決定する。
ランク	次項に示す4つのランク。調査員が決定する。
遺構名	出土した遺構名
層位	出土した層位
法量	長さ・幅・厚さの最大値を記す。丸木材の場合は、幅や厚さの代わりとして直径を記す。
備考	「炭化している」「漆が付着している」など気付いたことを記載する。
分類	杭などの土木材は、後述のようにランク分けによって取捨選択されるため、以下のような観点で分類した(図28)。なお、この分類法は長野県石川糸里遺跡(白井直之1997)の報告を引用・改変したものである。

木取り

I類：丸木芯持ち材

II類：割り材……II-1類：単なる割り材(1/2以下)

II-2類：芯部側を削り角状にする(1/2以下)。

II-3類：木肌側を削り角状にする(1/2以下)。

II-4類：半割り材(1/2程度)

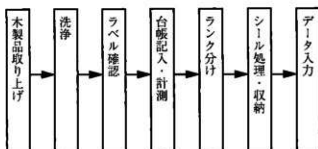


図27 一次整理の流れ

Ⅲ類：角材

Ⅳ類：板材（転用材）

先端の形状

- A：周縁方向から比較的鋭角に先端を削り出したもの
- B：周縁方向から比較的鈍角に先端を削り出したもの
- C：1～2方向もしくは片面から比較的鋭角に先端を削り出したもの
- D：1～2方向もしくは片面から比較的鈍角に先端を削り出したもの

加工状況

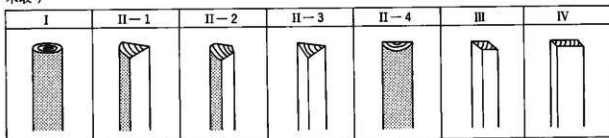
- a：削り面に数度にわたる緻密な削り痕を残すもの
- b：単純な削り痕を残すもの

※ a・bの区別は腐食の度合いや観察者の観点によって変化する。そのため、客観性に欠けるが、記録として残した方がよいと考えた。

④ランク分け

計測・分類の完了した木製品に対して、調査員が製品名とランクを決定した。ランク分けすることによって、その後の二次整理がスムーズに運んだ。なお、ランクは以下の観点に沿って決定した。

木取り



先端の形状と加工状況

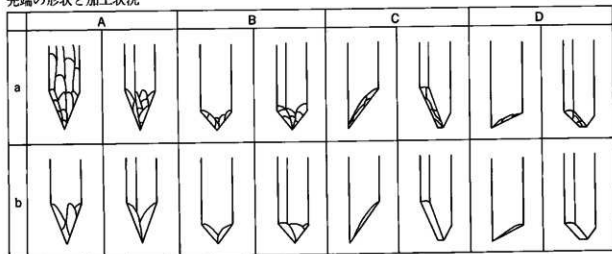


図28 杭の分類

A：実測の対象とすべきもの。

→製品名がわかるもの、用途不明品だが方形孔や円形孔など特殊な加工が施されているもの、残存率の高いものなど。

B：実測するかどうか再検討して判断するもの。

→製品名がわかるが残存率が低いものなどで、最終的には二次整理担当者が判断する。

C：実測しないが、保管しておくもの。

→加工痕のある板材や棒状材など。また、土木材のうち全体形がよくわかるものなど。

D：実測せず、樹種同定のサンプルを取るために一部分のみを切って保管するもの。

→土木材や自然木など。

※Dランクのように、土木材とはいえ出土遺物を破壊してしまうことには、非難の声があるかもしれないが、当遺跡の場合土木材をすべて実測または保管しておくことは事実上不可能であった。そこで土木材のうち良品のものは極力A・Bランクに回し、記録を残そうとした。また、実物をCランクとして保存することで、この欠点を少しでも補うこととした。

⑤シール処理・収納

これほど多くの木製品を、二次整理までの間水漬けしておくことは、場所的にも金銭的にも、そして木製品自体にとっても問題があると判断した。そのため、一次整理を終えた木製品は、食品のバックにもよく使用されている脱気シーラーを用いて真空に近い状態にまで空気を抜き、バック詰めにした。その際、ラベルは記入事項が見えるように入れ一緒にシールした。しかしながら、シールすると壊れそうなもの（たとえば、薄手のものや立体的なものなど）や重要性の高いもの、長大なものについては処理をせず、水漬けのままとした。また、④でDランクと判断されたものは、約5cmの長さに折り取ったものだけをシールした。

収納する際、シール処理されたものは複数コンテナに入れた。また、シールされていないものは単独でコンテナなどに入れた。いずれの場合でも、出土地点・ランクごとに分別収納していった。また、コンテナの側面には地点ごとに通番としたコンテナ番号を付し、収納されているものの整理番号を列挙したラベルを貼り付け、収納台帳を作製した。

⑥データ入力

手書きの計測台帳と収納台帳のデータを、表計算ソフトを用いて一次整理台帳に移管した。

(2) 二次整理作業

①抽出

A・Bランク品については、実際に実測対象とするものを再度選び出した。Bランクは約半数を実測した。

②実測

まず第一に、シール処理を施されず水漬け状態のままのAランク品から始めることにした。その後、シールされているAランク品、Bランク品へと順次実測をしていった。

実測の前には、デジタルカメラによる写真撮影を行い、コンピューターにデータ入力しサムネイル形式で確認できるようにした。こうしておくことで、1：実測中・後の破損にあたっては破損前の状態を確認できた、2：写真撮影や保存処理の対象とする木製品の抽出に利用できた、などの利点があっ

た。保存処理の際には、両像データにより処理業者との意思の共通を図った。

実測は、原則として手書きにより実寸大で行った。用紙は、通常使われる方眼紙では濡れて伸びるため、CAD などにも使われるセクションフィルムを用いた。

③ 仮収納

実測が済んだ木製品はコンテナ等に入れ、外側に実測番号・製品名を明記したテープを貼付し仮収納した。この時、写真撮影や保存処理などの対象物はすぐに取り出せるよう区別しておいた。

④ 写真撮影

実測したもののうち、残存率の高いもの、形態の特殊なもの、遺物の時代性などを考慮して選び出し、写真撮影を行った。写真は、ものの形が捉えやすい俯瞰撮影と、ものの質感を表現するための立面撮影を併用した。

⑤ 保存処理

写真撮影したもののうち、特に残存率のよいものなどについては保存処理を施した。保存処理は基本的には実測終了後に実施したが、十数破片に割れている個体については法量が多少変化することに目をつぶり保存処理後に実測した。

⑥ 収納

保存処理を施したものについては、温湿度の管理できる小部屋に収納するのが望ましい。その他のものについては、報告書掲載・未掲載に分け一点ごとにシール処理を施し、コンテナに入れ大部屋に収納した。いずれも、コンテナの側面には収納されている遺物が検索できるように通番を付した。

⑦ 樹種同定

実測遺物についてはすべて樹種同定を行い、器種毎の木材利用傾向を探ろうとした。また、多数出土した土木材についても、木制遺構との関連を考慮して抽出し樹種同定を実施した。結果については第7章第5節を参照されたい。

⑧ トレース・版組

トレースは報告書に掲載する2倍の大きさに実施した。遺物実測は原寸で実施し、トレースする大きさまでの縮小率が高くなってしまうので、大型木製品の縮小コピーは外注した。遺物版組は、遺構に関係なく器種分類項目を優先して実施した。そのため、異なる時代であっても同一図版内にあることがある。遺物の出土遺構を検索するには、第5分冊の観察表を参照されたい。

第6節 石器の概要

1 分類

製作技術を重視し、打製・磨製石器、礫塊石器、その他に分類した。打製・磨製石器には石鏃、磨製石鏃、石錐、スクレイパー類、くさび形石器、打製石斧、磨製石斧、扁平片刃石斧、粗製刃器、石庖丁、大型板状石器、石核、剥片、RF、UFなど、礫塊石器は打欠石鏃、敲石類、石皿、台石、砥石など、その他の石器は石棒、紡錘車、勾玉、管玉、白玉、双孔円盤などである。それぞれの出土点数は表12のとおりであり、合計497点の石器類が出土した。

これらを用途・機能別にみた場合、工具、農具、祭祀具の順に出土数が多い。工具は砥石と打製石斧が多く、砥石の大半は中世に属する。農具は稲作に関連する粗製刃器と石庖丁の出土が多く、当遺跡の特徴といえる。

表12 石器類出土点数一覧

石器名	点数	石器名	点数	石器名	点数
石鏃	27	石庖丁	16	砥石	42
磨製石鏃	1	大型板状石器	7	石棒	1
石錐	3	石核	6	紡錘車	2
スクレイパー類	22	剥片	210	勾玉	5
くさび形石器	1	RF	12	管玉	5
打製石斧	38	UF	14	管玉未製品	1
磨製石斧	2	打欠石鏃	1	白玉	25
扁平片刃石斧	1	敲・甲・磨石類	5	双孔円盤	1
扁平片刃石斧未製品	1	石皿	2	その他の搬入石材	9
粗製刃器	33	台石	1	その他の石器	3
				合計	497

2 出土遺構概要

石器が出土した位置は、包含層中よりも遺構内の方が多い(表13)。包含層では中世以降の遺物が多く含まれるII層中からの出土が多く、大半は後世の開墾などにより下層から巻き上げられた遺物といえる。遺構別では、自然流路と竪穴住居跡の出土が多い。自然流路からは、低地及び丘陵地を問わず調査区全域にわたって石器が出土している。竪穴住居跡出土の石器58点のうち、20点はSB1出土の白玉であり、残り38点のうち20点はA5・A11地点のII-4期(弥生時代末～古墳時代初頭)の竪穴住居跡からの出土である。

表13 石器類出土遺構一覧

包含層名	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	合計
出土点数	17	8	8	3	4	6	46
遺構種類: 竪穴住居跡	ビット	土坑	井戸	集石遺構	水出跡		
出土点数	58	6	5	2	1	2	
遺構種類	溝	自然流路	水制遺構				合計
出土点数	32	64	5				175

3 遺構一括資料

第6章第3節の石器の項で分類ごとに記載するため、ここでは遺構出土の石器について簡単に述べる。しかし、石器は先述したように自然流路からの出土が多く、流路は多時期の遺物が混在している

ため一括性に乏しい。そのため、土坑と竪穴住居跡出土の一拵石器とその時期について述べる。

SB7：石鐮丁が3枚重なって出土した。8075は紐通しの孔がなく、8087は1つの貫通孔とその周囲3箇所に未通道の穿孔がある。8088は2箇所に貫通孔がある。8088が一番上、8087が真ん中、8075が一番下に位置していた。供伴土器はII-3期である。

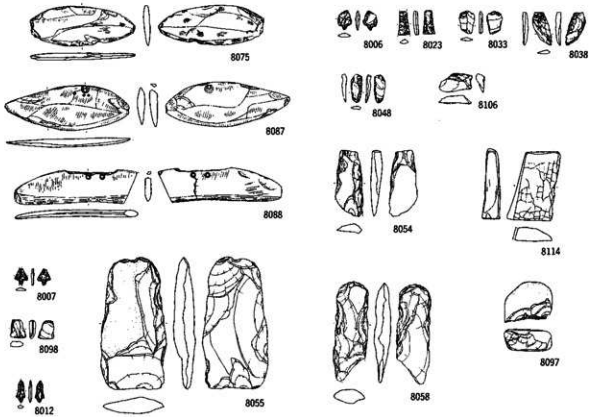
SB21：石鐮2点(8006・8023)、スクレイパー3点(8033・8038・8048)、UF1点(8016)、合計6点の石器が出土した。供伴土器はII-3期である。

SB52：石鐮2点(8007・8012)、RF1点(8098)、打製石斧1点(8055)、合計4点の石器が出土した。供伴土器はII-2期である。

SB77：砥石1点(8115)と粗製刃器1点、合計2点が出土した。供伴土器はII-4期である。

SB23：打製石斧1点(8054)と砥石1点(8114)、合計2点が出土した。供伴土器はIII-1期である。

SK8：打製石斧2点(8058)と石核1点(8097)、石皿1点、合計4点が出土した。供伴土器はI-1期である。



8075・8087・8088：SB7、8006・8023・8033・8038・8048・8106：SB21、

8054・8114：SB23、8007・8012・8055・8098：SB52、8058・8097：SK8

スケールはすべて1/5

図29 遺構出土石器

第7節 金属製品の概要

1 分類

金属製品は、銭貨を除く金属製品と銭貨とに大別し、さらに前者について材質および用途・機能を観点として、銅鏃、鉄鏃、鉄斧、鉄釘、紡織具、棒状鉄製品、農具、刀子、その他に分類した。なお、紡織具では紡錘車の芯が、農具では鍬鏃先・鏃・馬鍬の刃が出土した。また、その他としては、不明鉄製品・管・煙管・鉛玉・焼夷弾・戸車の破片などがある。それぞれの出土点数を表14に示した。

金属製品の出土点数は合計71点であり、多量に出土した土器・木製品の点数に比べて格段に少ない。それは、この土地が低湿地であり、金属製品の腐食が進行し易く、遺物が残存し難い環境であったためと推測できる。

2 出土遺構の概要

金属製品が出土した位置は表15及び表16のとおりである。

銭貨を除く金属製品の出土位置を地点別(表15)に見ると、A16地点が目立って多く、全体の20.9%を占めている。

また、表16から分かるように、包含層と遺構とでは出土点数が相半ばしているが、鉄斧・農具など比較的大きな遺物は遺構からの出土が多い。これは、後世の擾乱によって遺物が巻き上げられた場合、大きなものほどその際に取り除かれる可能性が高かったためであろう。包含層では、II層中からの出土が多いが、それらの多くは鉛玉や真鍮製の煙管など近世以降の遺物といえる。一方、遺構では、自然流路や溝からの出土点数が多い。

次に銭貨についてみると、やはりA16地点からの出土が多く、銭貨全体の35.7%を占めている(表15)。

表16をみると、層位の判別ができる包含層からの出土銭は12点であるが、渡来銭ではI層中から出土した北宋銭1点を除いて、すべてがII層以下からの出土である。反対に寛永銭では、文銭1点がII層中から出土しているのみである。

一方、遺構からの出土銭は10点ある。そのうち渡来銭は、すべて中世の遺構から出土している。また、中世の遺構である自然流路(NR29)からは寛永通寶3点と桐一銭青銅貨(大正年銘)2点が出土しているが、この遺構上には明治期以後の水路があったため混入したものと考えられる。

3 一括資料

金属製品も木製品と同じように自然流路、溝からの出土が多い。前述のように自然流路の遺物は一括性が問われるが、NR29は共伴する土器からⅦ期にはほぼ限定できると判断したので下記に示した。

NR29: 鉄釘3点、金串(鉄製)1点が出土した。供伴土器はⅦ期である。このほか、近代以降の混入と思われる前述の銭貨5点と戸車(鉄製)1点が出土している。

SD229: 鏃1点、鉄釘1点、渡来銭1点が出土した。供伴土器はⅥ～Ⅶ期である。

SD18: 鉄斧1点、渡来銭1点が出土した。供伴土器はⅥ期である。

表14 金属製品出土点数一覧

金属製品名(鉄貨以外)	点数	金属製品名(鉄貨以外)	点数	金属製品名(鉄貨)	点数
銅鏃	3	馬鏃	2	青銅	1
鉄鏃	5	刀子	5	北次鉄	13
鉄斧	1	不明鉄製品	1	明鉄	1
鉄釘	8	鑿(銅製)	1	穴鉄	15
紡錘車の芯	1	煙管(高輪製)	1	不明銅鉄	2
棒状鉄製品	2	銅玉	4	寛永通寶(古)	3
鐵砲先	2	焼夷弾の破片(2)	1	寛永通寶(背文銭)	1
鐵	4	口章(鉄製)	1	寛永通寶(新)	4
		合計	43	近世の銭	8
				近代銭	3
				辨一銭背割貨(大正年銭)	28
				合計	28

表15 地点別の金属製品出土点数一覧

	鉄貨を除く金属製品										鉄貨				合計
	銅鏃	鉄鏃	鉄斧	鉄釘	紡織具	棒状鉄製品	農具	刀子	その他	合計	渡来銭	不明銅鉄	近世の銭	近代銭	
A2				1						1					0
A3		1								1	1	1			2
A4									1	1					0
A5	1									1					0
A6									1	1					0
A7	1		1							2	2	1	1		4
A10									1	1			1		1
A11	1									1					0
A13										0	1				1
A15										0			1		1
A16				4		1	2	1	1	9	4		4	3	11
B1									1	1					0
B4								1		1					0
B5									1	1					0
C2		1								1					0
C7				1						1					0
C10		1								1					0
C11					1					1					0
D5							1			1	1				0
D6		1					2			4					0
D7										0	1				1
D8										1					0
D9				1			1	1		3	1				1
E1						1		2	3	6	2		1		3
E4										0	2				2
E5		1					2			3					0
合計	3	5	1	8	1	2	8	5	10	43	15	2	8	3	28

表16 層位・遺構別の金属製品出土点数一覧

①鉄貨を除く金属製品

	銅鏃	鉄鏃	鉄斧	鉄釘	紡織具	棒状鉄製品	農具	刀子	その他	合計
包含層					2	1		1	6	10
II層									1	1
III層			1				2	1	4	4
IV層			1		1		1		3	3
V層										0
不明・その他									1	1
遺構			2	1						3
竪穴住居跡								1		1
ピット								3		3
溝	1	1	1	1					1	8
自然流路			1		4			1	3	11
水制遺構									1	1
合計	3	5	1	8	1	2	8	5	10	43

②鉄貨

	層位	渡来銭			不明銅鉄(穴銭)	近世の銭		近代銭	合計	
		青銅	北次鉄	明鉄		古寛永	背文銭			
包含層	I層		1			1			2	
	II層		4	1	2		1		8	
	III層	1							2	
	IV層								0	
	V層								0	
	不明・その他		2			2		1	6	
遺構	竪穴住居跡								0	
	ピット								0	
	溝		4						4	
	自然流路						3	2	5	
	水制遺構		1						1	
合計		1	13	1	2	3	1	4	3	28

第5章 遺構

第1節 I期（縄文時代）の遺構

I期の遺構として、土坑7基、自然流路3条を以下に報告する。

第1項 土坑

SK8（図版1） A3地点 GA50

平面形は東西に長い不整形で、長軸1.6m以上、短軸約1.3mである。西側半分をSK9に切られる。

遺物は石器が4点出土した。本遺構の時期は、SK9同様、I-1期と考えられる。

SK9（図版1） A3地点 GB50

平面形は不整形で最大径約1.3mである。南端をIII期～IV期の流路であるNR3に切られる。

遺物は縄文土器が9点、土師器が2点出土した。肉眼観察から同一個体と考えられる破片が多く、個体数としては10個体は上回らないと考えられる。本遺構の時期は、出土した土器からI-1期と考えられる。

SK40（図版1） A10地点 EP56

平面形は円形で、直径0.7mである。NR21が湾曲する内側、流路内につきだしたように見える部分に存在するが、NR21はIV期の流路であり、縄文時代も同様の立地にあったかは不明である。

遺物は縄文土器が1点出土した。本遺構の時期は、出土した土器からI-1期と考えられる。

SK57（図版2、写真図版16） A16地点 DN53

断面形が浅い皿状を呈する土坑であり、埋土中に炭化物などはみられなかった。

遺物は縄文土器が1点出土した。本遺構の時期はI期と考えられる。

SK60（図版2） A16地点 DM53

断面形が浅い皿状を呈する土坑であり、北側は調査区外に延びている。埋土中に炭化物などはみられなかった。

本遺構の時期はI期と考えられる。

第2項 集石遺構

SI1・2（図版2） A16地点 DN53

SI1は長さ約1.6m、幅約1.0mの範囲内に広がる礫群、SI2はSI1の北側にある円礫である。SI1・2の周囲には縄文土器が散在して出土したが、礫に伴う掘り込みは確認できなかった。礫には被熱痕はなかったが、SI2の円礫には使用痕が認められた。なお、SI1直下には河床礫が隆起していることから、SI1もその一部かもしれない。

SI2の遺物は縄文土器が6点出土した。本遺構の時期はI期と考えられる。

第3項 自然流路

NR49 (図版3、写真図版16) A16地点 DK53~DM54

幅2m、深さ0.15mで、長さ約6mにわたり検出した。北端は調査区外へ延び、南端はNR40に切られている。水流の方向は不明であるが、地形からみると南東から北西への流れが想定できる。断面形は皿状を呈するが、底面の幅が広い。埋土は上下2層に分かれ、いずれも円礫を多く含む。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が5点、土師器が2点、灰釉系陶器系が4点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が1点出土した。縄文土器以外は混入であり、本遺構の時期はI期と考えられる。

NR63 (図版3、写真図版16) B3地点 EE68~EH68

幅約9m、深さ約0.8mで、長さ約15mにわたり検出した。東西端は調査区外へ延びている。水流の方向は不明であるが、地形からみると北東から南西への流れが想定できる。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫である。

遺物は縄文土器が2点、土師器が3点出土した。本遺構の時期はI期と考えられる。

NR116 (附図20、写真図版16) E2地点 BS88~BT90

幅約10m、深さ約1.0mで、長さ約13mにわたり検出した。南北端は調査区外へ延びている。水流の方向は不明であるが、地形からみると南から北への流れが想定できる。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫である。

遺物は流路底面より石器が1点出土した。本遺構はII~III期の溝であるSD241に切られることから、その時期はI期と考えられる。

第2節 II期（弥生時代～古墳時代初頭）の遺構

II期の遺構として、竪穴住居跡39軒、土坑2基、水田跡3地点、溝7条、自然流路3条、水制遺構7基を以下に報告する。

第1項 竪穴住居跡

SB4（図版6、写真図版19） A5地点ET20

平面形は北側の肩が確認できなかつたため、隅丸方形か長方形か不明である。南壁付近で貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を検出した。その他に、ビット1基を確認したが、その性格は不明である。壁溝は確認できなかつた。

遺物は土師器が58点出土した。本遺構の時期は、出土遺物よりII期と考えられる。

SB5（図版6） A5地点ET21

平面形は不明である。SB4床面において、東側の肩をわずかに検出し、炉跡（SC1）と貯蔵穴（SK1）もみられたことから、竪穴住居跡と判断した。

本遺構の時期は、周辺の状況からII期と考えられる。

SB6（図版7、写真図版19） A5地点ET21

平面形は南側の肩が確認できなかつたため、隅丸方形か長方形か不明である。ビット（P1・2）は位置関係から主柱穴と考えられる。南壁付近で貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を確認した。その他に、ビット1基（P3）を確認したが、その性格は不明である。壁溝は確認できなかつた。

遺物は弥生土器が2点、土師器が12点、石器が2点出土した。土坑（SK1）から条痕文系の雙底部が出土し、1層から条痕文系の甕・台付甕・磨石が出土した。本遺構の時期は出土遺物からII期と考えられる。

SB7（図版8・9、写真図版20・21） A5地点ET21

平面形は東西に長い隅丸方形である。住居跡床面東寄りで地床炉（SC1・2）を確認した。主柱穴4基（P1～P4）、南壁付近で貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を確認した。この他、床面でビット1基（P5）を確認したが、その性格は不明である。壁溝はSK1部分でとぎれるが、全周しており、北東のコーナー付近では床面が土手状に盛り上がっていた。住居北西隅の床面から石庖丁が、3枚重なった状況で出土した。このうち125には穿孔1孔と途中でやめた痕跡が3孔、126には穿孔2孔があり、127には穿孔が施されていなかった。これらはいずれも使用痕が確認できる（第7章第9節参照）。また住居南東隅の床面から、高杯が重なって出土している。

遺物は弥生土器が139点、石器が3点出土した。本遺構の時期は出土遺物からII期と考えられる。

SB8（図版10・11、写真図版22） A5地点ER21

平面形は隅丸方形である。地床炉・貯蔵穴は確認できなかつた。主柱穴4基（P1～P4）を確認した。この他、床面でビット2基（P5・6）を確認したが、その性格は不明である。壁溝は2箇所ととぎれるが、全周していたと考えられる。貼り床が確認でき、その直上には、炭化物が広がっていた。焼失家屋の可能性はある。

遺物は土師器が92点出土した。本遺構の時期は、有稜高杯が出土していることからII期と考えられ

る。

SB9（図版12、写真図版22・23） A5地点EQ18

平面形は東西に長い隅丸方形である。住居跡床面東寄りで地床炉を確認した。主柱穴4基（P1～P4）、貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を確認した。この他、床面でビット1基（P6）を確認したが、その性格は不明である。また、P1は床面より3cm上面で検出でき、外側に向かって掘り込みが傾いていた。このことから柱材が住居の廃絶後、一定期間残されていたことが想定できる。壁溝は確認できなかった。この住居跡の埋土2層の中央部には、10cm×5cmくらいの、楕円形を呈する黄褐色土の混入が多くみられた。これは、人が歩いたことによってできた窪みと考えられる。この住居が埋没した後に人が入ったか、住居が焼失した後に人が物を取るために入ったことなどが想定できよう。

遺物は弥生土器が349点、石器が2点出土した。北東隅から甕、南東隅から器台・壺、南西隅から高杯が床面直上から出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB10（図版13・14、写真図版5・24・25） A5地点EP21

平面形は南北に長い隅丸方形である。住居跡床面南寄り、住居の軸線と炉石の向きがやや異なる地床炉を確認した。主柱穴4基（P1・3・4・6）を確認した。この他、床面でビット2基（P2・5）を確認したが、その性格は不明である。壁溝は全周していた。床面直上には炭化材が散乱していた。大型の部材は確認できなかったものの草本類の炭化物も多かったことから、焼失家屋と考えられる。

遺物は弥生土器が61点、金属器が1点出土した。金属器は銅鏃であり、埋土中からの出土である。銅鏃が出土したため住居跡の埋土をすべて水洗選別したが、他の微細遺物は確認できなかった。本遺構の時期は出土遺物からII期と考えられる。

SB11（図版15、写真図版26・27） A5地点EP21

平面形は東西に長い隅丸方形である。住居跡床面東寄りで地床炉を、南壁付近で貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を確認した。主柱穴は4基（P1～4）であり、そのうち、P4から石庖丁が出土した。その他、床面でビット3基（P6～8）を確認したが、その性格は不明である。壁溝は確認できなかった。

遺物は弥生土器が25点・石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土土器からII期と考えられる。

SB12（図版16、写真図版27） A5地点EO15

平面形は方形であるが、西側が攪乱で確認できない上、中央部が試掘坑により破壊されているため、長方形か正方形かはよくわからない。地床炉は確認できなかった。南壁付近で確認した貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK1）を確認した。主柱穴2基（P1・P2）の他、土坑1基（SK2）を確認したが、その性格は不明である。壁溝はSK1部分でとぎれるが、全周していたと考えられる。

遺物は弥生土器が216点、土師器が1点、古代の須恵器甕杯が1点、灰軸陶器が1点、灰軸采陶器が26点、石器が1点出土した。高杯・甕・鉢が埋土の北東部に集中して出土したほか、土坑（SK1）からも出土した。本遺構の時期は出土遺物からII期と考えられる。

SB13（図版17、写真図版29） A11地点EN17

平面形は東西に長い隅丸方形である。住居跡床面中央付近で川原石を炉石に用いた、地床炉を確認した。主柱穴4基（P1～P4）、この他、床面でビット5基を確認したが、その性格は不明である。

貼り床・壁溝はなかった。

遺物は弥生土器が408点、石器が2点出土した。本遺構の時期は出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB14 (図版18、写真図版28) A11地点 EN19

東側は攪乱に切られるものの、平面形は東西に長い隅丸方形と考えられる。住居跡床面中央付近で川原石を炉石に用いた、地床炉を確認した。主柱穴4基(P1～P4)、この他、床面でビット1基・土坑1基を確認したが、その性格は不明である。貼り床・壁溝はなかった。

遺物は弥生土器が276点、石器が1点出土した。本遺構の時期は出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB15 (図版19、写真図版29) A11地点 EL16

平面形は東西にやや長い隅丸方形である。住居跡床面中央付近で川原石を炉石に用いた地床炉を確認した。ビット6基(P1～6)を確認したが、いずれが主柱穴かは不明である。北・東・西側に壁溝が巡る。

遺物は弥生土器が142点、石器が1点出土した。本遺構の時期は出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB16 (図版20、写真図版30・31) A11地点 EK18

平面形は東西に長い隅丸長方形である。住居跡床面中央付近で川原石を炉石に用いた地床炉を確認した。炉石の周囲には住居の外側にむかって焼土が広がっており、焚き口は南東側であったことがわかる。ビットは5基確認し、そのうちP1～4が主柱穴となり、P2基底部に柱根が残存していた。SK1は南壁沿いにある楕円形状を呈する土坑であるが、その性格は不明である。壁溝は全周しており、途切れていない。埋土は大きく2層に分かれるが、下層が地山に類似する土であることから、貼り床が存在していた可能性が高い。

遺物は弥生土器が226点出土した。本遺構の時期は、出土遺物よりⅡ期と考えられる。

SB17 (図版21・22、写真図版31) A11地点 EI21

平面形はほぼ隅丸方形であり、南コーナーを攪乱に切られる。主柱穴4基(P1～P4)、この他、床面でビット3基(P5～7)を確認したが、その性格は不明である。なお、床面全体に炭化物が堆積し、その中に多量の炭化材が散乱していた。これらの炭化材は床面の中央付近に向かって倒れていることから、柱材や垂木と考えられ、この竪穴住居跡は焼失家屋であると判断できる。地床炉・貼り床は確認できず、壁溝は全周する。

遺物は弥生土器が266点、石器が1点出土した。本遺構の時期は出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB18 (図版23、写真図版32) A11地点 EJ21

平面形は隅丸方形であろうが東側がやや広がっており、SB19の西側を切っている。浅いながらも主柱穴2基(P1～2)、この他、非常に小さいビット8基を確認したが、その性格は不明である。北・西・東側の壁に接するように土坑3基(SK1～3)を確認した。また、埋土内には炭化物が混入していた。地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物は弥生土器が396点、石器が1点出土した。本遺構の時期は出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB19 (図版23) A11地点 EJ21

平面形は隅丸正方形で西側をSB18に切られている。浅いながらも主柱穴2基(P1～2)、この他、非常に小さいビット7基を確認したが、その性格は不明である。埋土内には炭化物が混入していた。地床炉・貼り床は確認できなかった。

本遺構の時期は、周囲の状況からII期と考えられる。

SB20（図版24、写真図版32） A11地点 E115

北側は攪乱に切られるものの、平面形は隅丸方形と考えられる。ピット3基（P1・2ほか）を確認したが、その性格は不明である。壁溝地床炉・貼り床・壁溝はなかった。

遺物は弥生土器が83点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB21（図版25、写真図版33） A11地点 EG16

平面形は東西に長い隅丸長方形である。北東側の床面が被熱しており炉石が2個確認できた。地床炉と考えられる。主柱穴4基（P1～4）を確認した。北のコーナーから東・西両方向に向かって壁溝が伸びている。貼り床は確認できなかった。

遺物は弥生土器が62点、石器が7点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB25（図版26・27、写真図版34・36） A7地点 FB41

SB26を切り、SD17に切られているため、平面形はよくわからないが、隅丸長方形と考えられる。床面の中央部付近に川原石を炉石として用いた地床炉を確認した。ピットを3基（P1～3）確認したが、主柱穴ははっきりしない。また床面には炭化物が広がり、炭化材も散乱していた。この炭化材は床面の中央へ向かって倒れているため、この竪穴住居跡は焼失家屋であると判断できる。貼床は確認したが、カマド・壁溝は確認できなかった。遺物は縄文土器が4点、土師器が476点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB26（図版28） A7地点 FC40

SB27・SD17を切り、SB25に切られているため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。床面の中央部付近に川原石を炉石とした地床炉を確認した。ピットを4基（P1～4）確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が90点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いからII期と考えられる。

SB27（図版28） A7地点 FC40

SB27・SD17に切られているため平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。主柱穴・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が9点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いからII期と考えられる。

SB28（図版29、写真図版34） A7地点 FB42

SD15・18に切られているが、平面形は隅丸正方形である。ピットを6基（P1～4ほか）を確認したが、主柱穴ははっきりしない。また土坑（SK1）を確認した。貼床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が707点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB29（図版30・31、写真図版35） A7地点 FA39

SB30に切られているが、平面形は隅丸長方形である。床面の中央部付近には地床炉を確認した。ピットを2基（P1・2）を確認したが、主柱穴ははっきりしない。また土坑（SK1）を確認した。床面には炭化物が広がり、炭化材も散乱していた。この炭化材は床面の中央へ向かって倒れているため、この竪穴住居跡は焼失家屋であると判断できる。

遺物は土師器が127点が出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB34 (図版32) A7地点FA43

SB35を切り、南側の一部を攪乱に切られているが、平面形は隅丸長方形と考えられる。床面中央部付近には地床炉が確認できた。ビット8基(P1~8)を確認したが、支柱穴ははっきりしない。カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は縄文土器が1点、土師器が107点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB35 (図版32・33、写真図版36) A7地点FA43

SB34に床面の大部分を切られている。南側の一部を攪乱に切られているが、平面形は隅丸長方形で考えられる。床面中央部付近には地床炉が確認できた。ビット6基(P1~6)を確認したが、支柱穴ははっきりしない。土坑1基(SK1)を確認した。北・西のコーナー付近で壁溝を確認し、貼床を確認した。カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が43点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB40 (図版34・35、写真図版37) A7地点ES40

SB38・41に北側のコーナーと、南側の中央部をわずかに切られている。また中央部をSD18によって東西に切られている。平面形は東西方向が非常に長い隅丸長方形と判断できる。床面北東側には川原石を炉石に用いた地床炉が確認できた。ビット3基(P1~3)を確認したが、支柱穴ははっきりしない。土坑1基(SK1)を確認した。北・南の一部を除いて壁溝を確認した。

遺物は土師器が206点、木器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB41 (図版36、写真図版38) A7地点ES41

SB40をわずかに切っている。また中央部をSD18によって東西に切られている。平面形は隅丸正方形と判断できる。ビット7基(P1~7)を確認したが、支柱穴ははっきりしない。底面に炭の堆積のある土坑1基(SK1)を確認した。壁溝が全体に巡っている。地床炉は確認できなかった。

遺物は土師器が130点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いからII期と考えられる。

SB42 (図版37、写真図版39・41) A7地点EQ38

平面形は隅丸正方形と判断できる。床面の中央部付近に地床炉を確認した。ビット2基(P1・2)を確認したが、支柱穴ははっきりしない。土坑1基(SK1)を確認した。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が314点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB44 (図版38、写真図版55) A7地点EN37

西側を攪乱に切られているが、平面形は隅丸正方形と判断できる。床面の中央部付近で浅く掘り込まれた地床炉を確認した。ビットは1基(P1)検出したが、支柱穴かどうかははっきりしない。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が282点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB45 (図版39、写真図版38・41) A8地点FB48

平面形は東西に長い隅丸長方形と判断できる。ビット13基(P1~13)を確認したが、深さや位置的な問題のあるものが多く、支柱穴ははっきりしない。ところどころ途切れるものの壁溝が確認できた。

遺物は土師器が405点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が1点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からII期と考えられる。

SB46（図版40、写真図版40・41） A 8地点 FA50

南側の大半は調査区外であるが、平面形は隅丸方形と判断できる。炉石は転落していたものの地床炉が確認できた。主柱穴1基（P1）を確認した。このほかにピット1基を確認したがその性格は不明である。壁溝は確認できなかった。また、床面には焼土や炭片が所々に広がっていた。焼失家屋の可能性もある。

遺物は土師器が196点、中世土師器が6点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB47（図版41、写真図版41） A 8地点 ES49

平面形は東西に長い隅丸長方形と判断できる。床面の中央部付近から、炉石に川原石を用いた、地床炉を確認した。ピット5基（P1～5）を確認した。P1を除いた4本が、主柱穴と考えられる。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が146点、中世土師器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB48（図版42・43、写真図版56・57） A10地点 FJ55

平面形はほぼ隅丸方形と判断できる。床面中央部付近に地床炉があり、断面形がすり鉢状を呈する主柱穴4基（P1～4）を確認した。壁溝は全周する。床面には焼土・炭屑が全体的に確認できることから焼失家屋と確認できる。

遺物は土師器が66点、その他の須恵器が7点、木器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB52（図版45・46、写真図版42） B11地点 EM70

平面形は東西にやや長い隅丸方形である。住居跡床面南寄りで地床炉を確認した。主柱穴は4基（P1～P4）である。このうちのP1からは弥生土器の壺の頸部が出土した。壁溝はなかった。SB53に上層を切られている。

遺物は弥生土器が203点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が2点、石器が4点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅡ-2期と考えられる。

SB53（図版45） B1地点 EM70

床面検出が困難であったため平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。地床炉・柱穴・壁溝は確認できなかった。SB52の上層を切っている。

本遺構の時期は、周囲の状況からⅡ期と考えられる。

SB67（図版212、写真図版43・44） E5地点 AJ90

床面の大部分が調査区外のため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。住居跡床面の南西寄りで被熱した盛土を確認した。地床炉と考えられる。ピット7基を確認したがいずれが主柱穴かははっきりしない。南東方向に壁溝が確認できた。

遺物は土師器が189点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が20点、灰釉系陶器が4点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅡ期と考えられる。

SB73（図版44） E5地点 AN91

遺構の大部分が調査区外のため平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ピット6基を

確認したが（P1～4・6・7）、いずれが主柱穴かは不明である。検出した部分では壁溝が全周している。

遺物は土師器が10点出土した。本遺構の時期はピット出土の遺物よりⅡ-4期と考えられる。

SB74（図版44、写真図版43） E5地点 AN91

北側の床面が削平されているため平面形はよくわからないが、壁溝の状況から隅丸方形と考えられる。主柱穴4基（P1～4）を確認したが、いずれも浅い。

本遺構の時期は、周囲の状況からⅡ期と考えられる。

第2項 土坑

SK50（図版46、写真図版45） B1地点 EN70

北側をSD54、南側をSD53に切られるため原形は不明である。現状では壁の残る東西幅が約3.3m確認できる。

遺物は弥生土器が185点出土した。本遺構の時期は出土した土器からⅡ期と判断される。

SK138（図版46、写真図版45） E5地点 AO92

長方形を呈する土坑であり、立ち上がりも比較的急である。埋土中には炭化物がわずかにみられ、底面から土師器が数点出土した。土坑の形状から、墓であった可能性がある。

遺物は土師器が23点出土した。本遺構の時期は出土した土器からⅡ期と判断される。

第3項 水田跡

A5・11地点（図版47、写真図版45）

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はⅤa層中で見え始め、Ⅴb層上面を田面としたが、畦畔の検出は極めて困難であった。検出本数は東西11条、南北10条であるが、畦畔の方向は規則的ではない。そのうち、SM324は調査区南壁から北に向かい、西に屈曲して直線的に延びていることから、この畦畔が基軸となっていた可能性が高い。水田形態は不定形のもが多く、平均面積は7.35㎡である。水田耕作土の上下層の分析の結果、図版D30の6・7層においてプラント・オパールが多数検出されたことから、田面がもう1枚存在していた可能性もある。なお、明確な水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

遺物は、畦畔脇やⅤb層からは弥生土器が出土していることから、本遺構の時期はⅡ-2期と考えられる。

D1地点（図版48、写真図版45）

地形の傾斜は西高東低である。畦畔は洪水砂中に見え始め、Ⅵa層上面を田面とした。田面は洪水砂で覆われていたので、検出は比較的容易であった。検出本数は北東～南西2条、北西～南東1条である。水田形態は長方形であり、SM391・393と平行しているSD156も水田に伴う溝の可能性が高い。なお、SD164はSM392を切っている。水田耕作土からはプラント・オパールが多数検出され、調査結果と一致した分析結果を得た。なお、明確な水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

出土遺物は、洪水砂直下より弥生土器が出土していることから、本遺構の時期はⅡ-3期と考えら

れる。

第4項 溝

SD8 (図版49) A11地点 EG21～EH22

幅約0.6m、深さ0.1mの素掘溝で、約7mにわたり確認した。溝のすぐ北側にはII期のSB17があり、ほぼ軸を平行させている。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、SB17と同時期とすると、II期と考えられる。

SD14 (図版99) A7地点 EQ37～FB43

幅約0.4m、深さ約0.3mの素掘溝で、約42mにわたり確認した。SB42・SB39・SB38・SD15・SD18に切られる。このうちSB38・SB39・SD15はIII期、SD18はVI期である。

遺物は土師器が3点、灰釉系陶器が1点出土したが、いずれも混入と考えられる。本遺構の時期は、他遺構との切り合いからII期と考えられる。

SD31 (図版103、写真図版245) A8地点 FB47～FE48

幅約0.5mの素掘溝で、約15mにわたり確認した。中央付近で2本に分かれるが、切り合いは確認できず時期差があるかどうかは不明である。東から西に延びるが、西ではほぼ直角に北に折れる。折れる部分はSB45 (II期)に、東端はNR3 (III～IV期)にそれぞれ切られている。

遺物は土師器が23点出土した。本遺構の時期は、切り合うSB45がII期、NR3がIV期であり、この切り合いと遺物からII期と考えられる。

SD73 (図版52) A16地点 EA57～EC55

幅2.0～4.5m、深さ0.4mで、長さ12.6mにわたり検出した。北端はNR29に、南端はNR34に切られている。水流の方向は不明であるが、地形からみると北東から南西への流れが想定でき、NR51と一連の遺構と考えられる。埋土はNR51と同様に板状の木片や小枝を多く含むシルト～粘土が主体であった。

遺物は弥生土器が10点、土師器が14点、灰釉系陶器が21点、木器が7点出土した。本遺構の時期はII～2期と考えられる。

SD156 (図版48) D1地点 CO67～CQ64

長さ16.5m、幅0.7m、深さ0.3mの南西から北東方向に延びる溝で、南端は削平されており、北端は調査区外に延びる。断面形は皿状を呈し、埋土は砂混じりの粘土である。

遺物は土師器が3点、灰釉系陶器が1点出土したが、灰釉系陶器は混入である。SM391・393と同様の方向に延びることと出土遺物から、本遺構の時期はII期の可能性が考えられる。

SD231 (図版49、写真図版44) E3地点 DE89～DG87

幅約1.5mの素掘溝で、約14mにわたり確認した。南はSD234に切れ、北は調査区外である。埋土は3層に分けられ、状況から常時水が流れていたようではなく、また埋没にあたっては人為的に埋められた可能性がある。溝の性格は不明である。

遺物は土師器602点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が59点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が6点、その他の中近世陶器が1点、木器が30点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、最下層の土器 (II～4期) と上の方から出土した土器 (IV期以降) の時期幅があるが、埋没状況からII～4

期に掘削されたと考えられる。

SD234 (図版50) E 3地点 DC89～DE89

幅約3.0mの素掘溝で、約10mにわたり確認した。中央付近はSD235に切れ、東西端は調査区外に延びている。埋土下層には砂礫とシルトのラミナが発達し、最下層は小礫を多く含むシルトであることから、常時流水があったと考えられる。なお、流路底面にはSW95が設置されている。

遺物は土師器が498点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が14点、灰釉系陶器が2点、木器が245点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物よりⅡ期と考えられる。

第5項 自然流路

NR25 (図版51、写真図版18) B 1地点 ER69～ET64

南側をNR24に切れ、北に向かって途中から東側は調査区外に延びている。確認できる箇所、幅約7m、深さ約1mで、約22mにわたり確認した。

本遺構の時期は、周囲の状況からⅡ期と考えられる。

NR51 (図版52、写真図版18) A16地点 ED54～EE55

幅4.0m、深さ約1mで、長さ7.5mにわたり検出した。東端は調査区外へ延び、上部はNR29に切られている。水流の方向は不明であるが、地形からみると北東から南西への流れが想定できる。埋土は板状の木片や小枝を多く含むシルト～粘土が主体で、流路底面では板状の木片がとりわけ多く出土し、それとともに弥生土器が出土した。

遺物は弥生土器が68点、土師器が53点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器が18点、その他の中近世陶器が1点、木器が19点出土した。本遺構の時期はⅡ-2期と考えられる。

NR123 (附図17) D 1地点 CR64～CR69

幅9m、深さ0.5m、長さ28mにわたり検出したが、北端は調査区外に延び、南端はSD155やNR82に切られる。断面は浅い皿状を呈し、その肩は不明瞭である。

本遺構の時期は周囲の状況から、Ⅱ期と考えられる。

第6項 水制遺構

SW76 (図版53～58、写真図版46・47) C 2地点 FF87～FG87

NR122の西法面に位置し、北側は調査区外まで延びている。

NR122は南から北に向かって水が流れており、深さは約1.3mで断面形は皿状を呈する。NR122の西側の上端は調査区外に位置しC 3地点は丘陵の先端部に位置するため、NR122は谷地形の最北端になると思われる。

SW76の規模は長さ約4m、幅約3mである。

内部構造は斜杭と横木、盛土、構造材Aなどから成る。横木は直径10cm前後のものが2本、内部構造の上部にほぼ水平に据えられており、その下に斜杭が合掌型に組まれている。川表側の斜杭は直径5cm前後のものが20°～30°の角度で、川裏方向の斜杭は直径8cm前後のものが50°～60°の角度でそれぞれ打ち込まれている。その西側、つまり川表側は構造材Aを含む粘土層で被覆している。

構造材Aは層厚2～4mmで、場所によっては8枚の重なりを確認した。1枚毎の大きさはおよそ長

軸1.5m、短軸0.5mほどで、その方向は基本的に東側が東高西低に（斜杭に沿うように）、西側が西高東低にそれぞれ敷かれており、ヨシなどの草本類を方向をそろえて帯状に置いただけで、東側で編みである箇所は確認できなかった。しかし、南側の構造材は幅約4mmを1束とする帯が編みであるようにもみえ、網代が敷かれていた可能性もある。なお、この上から紐孔を有する小壺が横位で出土した。構造材Aには直径3～5cmの斜杭が打ち込まれ、さらに直径3～5cm、長さ40cmほどの縦木が上に据えられていた箇所もあった。また、構造材A間には主に粗砂を含む粘土が充填されており、斜杭の杭先付近や斜杭と流路の法面間では地山を含むブロック状の土が幾つか確認できた。最も下にある構造材Aは地山であるVIII層上面に敷かれていた。なお、盛土より東側は黒色粘土が筋状に入る河川堆積層（無遺物層）であり、旧流路の一部を再掘削して盛土が構築されたことがわかる。

遺物は土師器が159点、木器が87点出土した。SW76内には土木材として転用された農具などは比較的少なかった。また、盛土内から出土した土器から本遺構の時期はII～3期と考えられる。

SW78（図版59、写真図版48） D 3 地点 CD69～CD70

NR88の北法面より北側に延びる杭列であり、0.6～1.0m間隔で6本確認した。杭はいずれも直立杭であるが、その性格は不明である。遺構の時期はSW79と同じII～III期と思われるが、SW79と同様にIII期の水田耕作土にバックされているため、ここではII期の水制遺構とする。

SW79（図版59、写真図版48） D 3 地点 CC70～CD70

NR88内に位置し、ここから分岐する溝などは不明である。

NR88は幅約4m、深さ約0.7mで、断面形は浅い皿状を呈する。水は東から西に向かって流れており、埋土の主体はSW79の川表、川裏方向ともに黒褐色粘土である。なお、SW79はNR88が0.1m程度堆積した後に構築されている。

SW79の規模は長さ約4m、幅約2mで、西側は調査区外へ延びている。その内部構造は直立杭と横木、盛土から成る。横木は4本確認でき、いずれも長さ約200cm、直径約8cmで、流路に直交するように水平に据えられていた。直立杭は15本以上確認でき、いずれも横木に接している。盛土は植物遺体を多く含む黒色粘土であり、横木を中心として幅0.8mの範囲で確認した。

本遺構の出土遺物はない。NR88からの遺物は木器が145点出土した。そのため、遺構の時期はII～III期としかたないが、SW79はIII期の水田耕作土にバックされているため、ここではII期の水制遺構とする。

SW83（図版61） D 5 地点 BC67～BE68

NR119内に位置し、ここから分岐する溝などは確認できていない。NR119は北東から南西に向かって水が流れており、BA70付近でNR120が合流する。また、その規模は幅5m～12m、深さ約1.2mを測り、断面逆台形状を呈する。

SW83の規模は東西約7.8m、南北約7.2mであり盛土は確認できなかった。

SW83に伴う杭は、NR119の北肩立ち上がり部に東西方向に並ぶ5～6本の直立杭と、流路方向に直交するように南北方向に8本程度の直立杭がある。南北方向の杭は約0.8m間隔で打ち込まれており、杭頭が西へ大きく傾いているものもあった。また、杭列の東側では横木も確認でき、西側では多くの雑木がみられた。

杭列前後の堆積は、検出面では川表方向に灰色粘土、川裏方向に粗砂が約3cm程度堆積しており、

その下に砂礫が約10cm堆積し、その下は河床礫であった。このように杭列前後の堆積は検出面でわずかに異なるのみであり、その理由は定かではない。

この遺構に伴う土木材は大半が流失しており、杭も大きく傾いていることから、水流により破壊されたと考えられる。

遺物は木器が62点出土した。全体の様相より遺構の時期はⅡ期と考えられる。

SW84 (図版60) D 5 地点 BD72

NR121の南肩付近に位置するが、調査区東端であるためその性格は不明である。

規模は、東西約1.2m、南北約3.4mであり、盛土は確認できなかった。

内部構造は横木と縦木から成り、杭は確認できなかった。横木はNR121の上端ラインに沿って、長さ2m前後のものが7本以上据えられており、いずれも河床面から0.5m以上浮いていた。

遺物は土師器が3点、木器が37点出土した。本遺構の時期はSW83と同じくⅡ期と考えられる。

SW90 (図版62、写真図版48) D 8 地点 BM79～BM80

NR111内に位置し、調査区東壁際で検出したために分岐する溝などの有無は不明である。NR111は東から西へと水が流れているが、上層と北側をNR110に切られているため詳細は不明である。

SW90の規模は東西約1.8m、南北約4.2mであり、盛土の有無は不明である。

内部構造は横木と縦木、直立杭から成る。横木は長さ200cm前後のものが3本以上南北方向に据えられており、その東西方向に縦木があった。直立杭は横木の東側に多い。これらの土木材の設置位置や水流方向を加味すると、この遺構の川表方向は東と考えられる。

遺物は土師器が40点、その他の須臾器が1点、木器が58点出土した。本遺構の時期はNR111と同時期であることからⅡ～Ⅲ期と考えられるが、SW90付近ではⅡ期の遺物が目立つので、とりあえずⅡ期とする。

SW95 (図版63・64、写真図版47) E 1 地点 DC89

SD234内に位置し、SD234の中央付近がSD235に切られることで、SW95も一部破壊されている。SD234は東から西に水が流れており、幅1.5m以上、深さ0.7mを測り、底面は南岸側が深い。また、SW95から分岐する溝などは確認できていない。

SW95の前後では、地山の高さが東側が西側より約10cm高い。また、東側では砂礫層がみられたが、西側ではシルト主体の堆積であり、杭列前後では明らかに堆積差がみられた。そして、東側で砂礫堆積がみられたことは、流水方向が東から西という見解に一致し、杭列により流れが滞っていたことがわかる。

SW95は直立杭から成り、長さ約3.6mの範囲で検出した。直立杭は20本弱で長さ60～90cmほど遺存しており、いずれも地山である灰白色粘土まで深く打ち込まれている。これらは流路の方向に対して直角気味に打ち込まれ、南端ほど密である。また、北端にも1本直立杭があることから、本来は流路を堰き止めるように列状に存在していたものと思われる。なお、杭列に伴う盛土はなく、遺構の時期はSD234出土遺物よりⅡ期と思われる。

第3節 III期（古墳時代前半）の遺構

III期の遺構として、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡2棟、柱列跡3基、土坑21基、溝24条、自然流路3条、水制遺構18基を以下に報告する。

第1項 竪穴住居跡

SB2（図版67、写真図版50） A3地点

平面形は隅丸方形である。床面の中央北寄りに地床炉があり、焼土の広がりが見られたが、掘り込みは確認できなかった。ビット7基（P1～7）を確認し、そのうちP1～4が主柱穴となるが、掘り込みは比較的浅い。SK1は住居の北壁に位置し、底面に白色粘土ブロックが見られたが、その性格は定かでない。なお、壁溝と貼り床は確認できなかった。

埋土は基本的に周縁部から中央部へと皿状の堆積をしており、床面直上において多量の炭化物が確認できたことから、焼失家屋の可能性がある。

遺物は土師器が1851点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB3（図版68、写真図版51） A3地点

平面形は隅丸方形であり、南東角をSB2に切られている。床面では周溝を東側半分と西壁においてわずかに確認したが、柱穴などはみられなかった。埋土は単層であり、炭化物をわずかに含む。

遺物は土師器が175点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB22（図版69、写真図版51） A7地点 FI38

平面形は隅丸方形である。床面の北東よりに炉石を持つ地床炉があり、被熱部分と炭化物の広がりが確認できた。ビット3基（P1～3）を確認したが、その性格は不明である。壁溝は確認できなかった。なお、P371・376は上層の掘立柱建物の柱穴痕である。

埋土は西方向は基本的に1層であるが床面の一部に硬化した埋土が広がっていた。貼り床の可能性が高い。

遺物は土師器が107点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB23（図版70） A7地点 AD42

平面形は東西に長い隅丸長方形で、SB24を切り、SD18に切られている。床面の中央部付近に炉がある。また、南西側のSD18に切られている部分が被熱しているが、この性格はよくわからない。ビット2基（P1・2）を確認したが、いずれが主柱穴かははっきりしない。

遺物は土師器が313点、石器が2点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB24（図版70） A7地点 FD41

床面のほとんどをSB23・SD18に切られているが、平面形は隅丸方形と考えられる。主柱穴・地床炉・貼り床は確認できなかった。

遺物は土師器が16点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB30（図版30・31、写真図版36） A7地点 FB39

SB29を切り、SD16に切られているが、平面形は隅丸長方形と考えられる。床面は東方向でははっきり確認できたが、西方向ではほとんど確認できなかった。ビットを3基（P1～3）を確認したが、

主柱穴ははっきりしない。また底部に炭化物の堆積した土坑（SK1）を確認した。貼床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が26点出土した。本遺構の時期は、出土した土器型式からⅢ期と考えられる。

SB31（図版71・72、写真図版53） A7地点FA40

SB32の東側を切っている。平面形は北東側がやや広がる隅丸方形と考えられる。住居跡床面の西寄り川原石を炉石に用いた地床炉がある。主柱穴3基（P1・2、SK3）と、土坑2基を確認した。東方向のコーナーの部分に壁溝が確認できた。

遺物は土師器が167点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いから、Ⅲ期と考えられる。

SB32（図版71・72） A7地点FA40

SB31に東側を大きく切られているが、平面形は東西にやや長い隅丸方形と考えられる。この竪穴住居跡を切るSB31の床面で地床炉を確認した。主柱穴4基（P1～4）を確認したが、このうちP1は地床炉と同様SB31の床面で確認したものである。土坑1基を確認した。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が54点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いから、Ⅲ期と考えられる。

SB33（図版73、写真図版52） A7地点ET40

平面形はほぼ隅丸方形である。住居跡床面の中央部付近で地床炉を確認した。ピット7基を確認し、このうちのP1～4を主柱穴としたが、P1のほかにP5からも柱の残存があり、このピットも一時期は柱穴として用いられたと考えられる。浅い土坑3基（SK1～3）を確認した。ところどころ断片的に壁溝が確認できた。

遺物は土師器が102点、灰釉系陶器が2点、木器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

SB36（図版74、写真図版37） A7地点ET42

平面形は南北に長い隅丸長方形である。ピットを1基（P1）を確認したが、主柱穴ははっきりしない。壁溝は南約半分で確認した。

遺物は土師器が35点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

SB38（図版75・76、写真図版53・54） A7地点ER39

SB40の北側のコーナーを切っている。平面形はほぼ隅丸正方形である。床面の北西よりに地床炉がある。主柱穴4基（P1～4）を確認した。またピット2基（P5・6）を確認したが、その性格は不明である。土坑3基を確認し（SK1～3）このうちの1基は床面に炭化物を含んでいる。北西側と南東側の一部を除いて壁溝が伸びている。貼り床が確認でき、また、この竪穴住居跡からは埋土には屋根材の一部や炭化物が広がっており焼失家屋と考えられる。

遺物は土師器が417点、灰釉系陶器が4点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

SB39（図版77・78、写真図版82・83） A7地点ER39

平面形はほぼ隅丸方形である。床面のやや西よりと東よりに地床炉がある。主柱穴4基（P1～4）

を確認し、いずれも柱材の一部が残っていた。土坑4基を確認し、床面からは焼土や炭片のほか、柱材も確認されている。しかし焦土や炭片が床面全体には広がっていないことから焼失家屋であるか否かは不明である。

遺物は土師器1422点、その他の須恵器3点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB43（図版79・80、写真図版55） A7地点 EP38

平面形は南北に長い隅丸長方形である。床面のやや西よりと中央部付近に地床炉がある。主柱穴4基（P1～4）を確認したが、このうちの2基（P1・2）は位置的には問題がないが、非常に浅いものである。土坑4基を確認し（SK1～4）、壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が180点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB49（図版81） A10地点 EQ53

SB50を切り、SK42に切られている。地床炉・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

本遺構の時期は、周囲の状況からIII期と考えられる。

SB50（図版81・82、写真図版57） A10地点 EQ54

SB49・SK42・43・SD48に切られている。南西側のコーナーは床面のみしか確認できていないが、平面形は東西に長い隅丸長方形と考えられる。床面の南東よりに地床炉がある。ビット10基（P1～10）を確認したが、このうちの2基（P8・10）は柱の打ち込まれたしっかりしたものであるものの、位置的に問題があり、主柱穴とは断定できない。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が1点、木器が3点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB51（図版80、写真図版57） B1地点 EM70

南側の大部分を攪乱に切られているが、平面形は隅丸方形と考えられる。ビット1基（P1）、土坑1基を確認したが、その性格は不明である。地床炉、壁溝は確認できなかった。

遺物は弥生土器が26点、灰釉系陶器が1点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB57（図版83） B3地点 EG67

主柱穴4本と焼土を含む土坑2基を確認したため竪穴住居跡とした。

本遺構の時期は、周囲の状況からIII期と考えられる。

SB58（図版84・85） B5地点 DL65

平面形は東西に長い隅丸方形である。ビット13基を確認し、そのうちP1723・1724には柱根が残存していた。しかし、いずれも主柱穴かは不明である。壁溝は確認できなかった。なお床面の一部には多量の炭化物が残っているため焼失家屋の可能性が高い。

遺物は土師器が29点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB59（図版82、写真図版57） C4地点 EL87

遺構の大部分が調査区外にあるため平面形よくわからないが、隅丸方形と考えられる。主柱穴1基（P2）の他に、床面でビット8基（P1・3～9）を確認した。

遺物は土師器が46点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIII期と考えられる。

SB64 (図版145、写真図版85) E 5地点 AJ91

北側の大部分がSB63・66に切られていたため平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビット9基(P1~9)を確認したが、いずれが主柱穴かは不明である。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器118点、その他の須恵器が3点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

SB70 (図版214) C 9地点 EN16

北側をSB81に、東側をSB69に切られているが、隅丸方形と考えられる。ビット(P1~4)を確認したが、いずれが主柱穴かは不明である。壁溝・カマドは確認できなかった。

遺物は弥生土器が2点、土師器が60点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が4点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が2点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

SB72 (図版86、写真図版58) E 5地点 BD93

平面形は東西に長い隅丸方形であるが、南側のコーナーはやや角張っている。ビット6基(P1~6)を確認したがいずれが主柱穴かは不明である。北・東・南側に一部途切れてはいるものの壁溝を確認した。また南の竪穴の立ち上がりに沿うように土坑(SK1)が確認され、壁溝はこの土坑によって切られ、それより西方には伸びない。この土坑は貯蔵穴と考えられるがそれを立証する確証は得られなかった。

遺物は土師器が18点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からⅢ期と考えられる。

第2項 掘立柱建物跡

SH6 (図版87、写真図版59) A 7地点 F138

桁行2間(約4.4m)、梁行2間(約3.5m)の東西棟である。柱間は桁行側が梁行側に比べやや広い(最大で約0.6m)。掘形は円形で、断面は逆台形と半円形のものがある。柱根は残っていなかった。P371とP374はSB22の床面で検出した。このことからSH6廃絶後、SB22が建てられたと考えられる。P374は埋土に砂が込められ他のビットとは違う様相で、故意に埋め戻したような感じを受けた。

遺物は土師器がP371・P372・P373・P376から合計7点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SH31 (図版92、写真図版142) C 3地点 FB87~FC87

東西、南北各1間分の検出であるが、ビットが周辺のものに比較し大きくしっかりしていることから建物の柱穴と判断できた。掘形は円形で、柱根は残存していない。

遺物は土師器がP1853・P1854から合計6点出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からⅢ-Ⅰ期と考えられる。

第3項 柱列跡

SA5 (図版88) A 7地点 FH37

2間の柱列。掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物はP379から土師器2点が出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられ

る。

SA 6（図版88） A 7地点 FH37

2間の柱列。掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況や周囲の状況からIII期と考えられる。

SA32（図版88） C 4地点 EL87～EL88

3間（約4.2m）の柱列である。南側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。掘形は円形である。

遺物はP1921～P1923から土師器が合計17点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からIII-1期と考えられる。

第4項 土坑

SK 1（図版89、写真図版59） A 1地点 FP31

調査区の東端で検出したため、一部のみしか確認できなかった。現状では平面形は隅丸方形で、断面形は中央に向かってなだらかに傾斜している。土坑内には、中央西壁寄りに焼土とその下に不整形な掘り込み、またやや離れてピットを1基確認した。

遺物は土師器が279点出土した。本遺構の時期は、遺物からIII期と考えられる。

SK12（図版90、写真図版59） A 6地点 FJ31

平面形は南北にやや長い円形で、断面形は少し深い皿状である。埋土には炭化物を多く含み、1層下部には炭化物層があった。

遺物は土師器が189点出土した。本遺構の時期は、遺物からIII期と考えられる。

SK13（図版91） A 6地点 FC30

平面形は不整形で、断面形は深い皿状である。

遺物は土師器が1点出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SK15（図版91） A 7地点 FG38

平面形は不整形で、断面形は皿状である。底面にくぼみが目立つ。埋土上層には炭が混じる。

本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

SK16（図版91） A 7地点 FG38

平面形は円形で、断面形は皿状である。NR13に向かって傾斜していくところに存在する。すぐ北側の陸地部分にSK15がある。何らかの関わりの可能性もあるが、その性格は不明である。

遺物は土師器が3点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SK17（図版91） A 7地点 FA40

平面形は方形で、断面形は逆台形である。SB31・SB32を切っている。埋土には炭が混じる。

遺物は土師器が15点出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SK18（図版91） A 7地点 ET38

平面形は長楕円形で、断面形は皿状である。

遺物は土師器が73点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SK21（図版90） A 7地点 ER37

平面形はやや角のある円形で、断面形は逆台形である。SB37に南東隅を切られている。

遺物は土師器が47点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK22 (図版92、写真図版60) A7地点 ER38

平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形である。埋土中には炭や粘土がブロック状に入る。

遺物は土師器が128点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK23 (図版92) A7地点 EP38

平面形は方形で、断面形は逆台形である。埋土には炭が混じる。

遺物は土師器が3点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK24 (図版92) A7地点 EQ38

平面形は円形で、断面形は逆台形である。埋土には炭が混じる。

遺物は土師器が16点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK25 (図版92) A7地点 FI39

平面形は円形で、断面形は逆台形である。

遺物は土師器が3点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK26 (図版92) A7地点 EQ39

平面形は円形で、断面形は半円形である。埋土の下層は礫の混じる砂利層である。

遺物は土師器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SK33 (図版93) A10地点 FB55

平面形は円形で、断面形は逆台形である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK34 (図版93) A10地点 FB57

平面形は長方形で、断面形は逆台形である。肩は垂直気味に立ち上がり、埋土中に薄く炭化物の層が確認できた。形状と埋土の特徴から墓の可能性もある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK36 (図版92) A10地点 FD59

平面形は円形で、断面形は逆台形である。直径1.05m、深さ0.67mと規模が大きいが、埋土が単層であることから、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK37 (図版93) A10地点 FC59

平面形は円形で、断面形は逆台形である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK38 (図版93) A10地点 FB58

平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。東側の壁がややオーバーハング気味になっている。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK39 (図版93) A10地点 FA58

平面形は円形で、断面形は逆台形である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SK42 (図版93) A10地点 EQ53

平面形は楕円形で、断面形は皿状である。SB49とSB50を切っている。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

SK118 (図版94、写真図版60) D5地点 BD72

北東側をSD202に切られ、東側と南側の一部が調査区外となるため平面形は明確ではないが長方形になる可能性が高い。埋土中には土器がまとまって出土した場所が3箇所あった。性格は不明である。

遺物は土師器が14点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からIII-1期と考えられる。

第5項 溝

SD2 (図版97、写真図版61) A2地点 FR39~GC39

幅約0.4m、深さ約0.3mの素掘溝で、約26mにわたり確認した。途中1箇所とぎれた箇所があるが、同一のものとして判断できる。

遺物は土師器が90点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

SD3 (図版97・98、写真図版61) A2地点・A7地点 FI36~GE42

A2、A7地点間で約15mの未調査部分があるが、溝の肩の延長線が結ぶることと、埋土の状況が似ていることから同一の溝と判断した。幅約2m、深さ約0.5mの素掘溝で、約80mにわたり確認した。西側半分は覆層地山面に掘り込まれているが、東側はNR1の埋土に掘り込まれている。西側は深さが一定しているが、NR1埋土に掘り込まれた部分は幅、深さも一定していない。A7地点FJ38付近ではほぼ直交してSD13が分岐している。

遺物は弥生土器が1点、土師器が655点、須恵器が8点、木器が6点出土した。出土状況から弥生土器・須恵器は混入と考えられる。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SD4 (図版97・98) A2地点 GC40~GC41

調査区の東端で検出したため、溝の幅や長さは不明である。深さは約0.6mである。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

SD6 (図版95、写真図版61) A5地点 FA22~FC18

幅約0.5m、深さ0.2mの北流する素掘溝で、約22mにわたり確認した。NR5の埋土に掘り込まれている。

本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

SD9 (図版96) A6地点 FD28~FE32

幅約0.5m、深さ約0.3m、長さ約23mの素掘溝である。SD10から分かれNR7につながる。溝底のレベルは北側より南側が低くなっている。

遺物は弥生土器2点、土師器が322点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられる。

SD10 (図版96) A6地点 FD27~FD32

幅約1.2m、深さ約0.3m、長さ約25mの素掘溝である。北でNR6につながり、途中からSD9が分かれる。溝底のレベルは南側の広がった部分に比べ北のNR6に接続する部分が低いため、北流し

ていたと考えられる。

遺物は土師器が714点、須恵器が2点、灰釉系陶器が5点出土した。出土状況から須恵器・灰釉系陶器は混入と考えられる。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SD11 (図版96) A 6地点 ET28～FB27

幅約0.4m、深さ約0.2m、長さ約11mの素掘溝である。北流してNR7につながる。

遺物は土師器が3点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SD13 (図版97、写真図版61) A 7地点 FJ37～FK37

幅約2m、深さ約0.5mの素掘溝で、約6mにわたり確認した。SD3から直交して分岐している。

遺物は土師器が31点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SD15 (図版99・100、写真図版62・63) A 7地点 EN38～FE44

幅約2m、深さ約0.7mの素掘溝で、約57mにわたり確認した。西端はNR14につながる。同時期のNR14の底部は、SD15の底部と比べ約0.7m低い。東端は調査区外であるが、NR13につながると考えられる。埋土は大きく上層と下層に分けられるが、いずれも粘質土であり、上層には大量の土器と炭が混じる。中央やや西寄りでは上層の底部付近から約5mにわたり土器が集中的に出土した(SU1：図版100)。埋土上層の底にある土器集中の存在から、溝は2回に分けて埋まったと考えられる。また集中して出土した土器の多くは残存状況が良好で、一般に美濃地方山間部では出土量の少ないS字甕が目立つなど、遺跡全体の中では特異な器種構成となっている。竪穴住居跡出土の土器群を日常的と仮定するならば、非日常的と仮定することもできる。SU1以外に2箇所、SU1よりも範囲が狭いが、土器集中区を確認した。表17にみえるように、土器は溝全体にまんべんなくあるだけでなく、EQ・ER・ET・FB列に特に多い。先述の土器集中はEP～ER列に存在する。このほか、溝の中央ET41付近では、底面に長さ約30cm、直径約10cmの木棒がやや傾いてはいるが立った状態で見つかった。性格はよくわからないが、柱状と見ることもでき溝を渡るための橋の橋脚の可能性もあると考えられるが不明である。

遺物は弥生土器が1点、土師器が13679点、灰釉系陶器が9点、木器が2点、石器が2点出土した。弥生土器・灰釉系陶器は混入と考えられる。勾玉はEQ39で、溝の検出時に出土した。埋土の最上層に属する。銅鏃は溝の底から出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ-1期と考えられる。

表17 SD15土師器破片数

	EN列	EO列	EP列	EQ列	ER列	ES列	ET列	FA列	FB列	FC列	FD列
上層	270	382	973	1554	2872	947	1703	307	1848	180	107
下層	146	36	410	125	230	329	259	80	150	27	74

SD16 (図版99・101、写真図版64) A 7地点 FB39～FC38

幅約1.5m、長さ約5mの素掘溝で、北東側はNR13に接続する。南側から北側に向けて傾斜しており、比高差は約0.3mである。埋土の状況からSD16埋没後にNR13が埋没したことがわかる。溝の性格は不明である。

遺物は土師器69点、その他の須恵器が5点出土した。各層位毎の内訳は、1層から土師器14点、須

恵器2点、2層から土師器36点、須恵器1点、4・5層から土師器10点、須恵器2点である。本遺構は、出土遺物からIV—2期に埋まったと考えられ、機能した時期については、後述のSD17での考え方と同様にIII期からと推定できる。

SD17（図版99・101・102） A7地点 FB40～FC39

台形の平面形で、台形底部を奥壁に、台形頂部をNR13に開く形になる。奥壁の幅約3.2m、NR13への開口部は幅約1.7m、深さは奥部分で約0.4m、開口部付近で約1.2mである。最下層に幅約0.8mの深い部分があり、中央付近から奥壁に向けて溝状に掘られ、先端は奥壁を抜けている。SD17は、SB25・SB26・SB27・SB30を切っている。埋土は大きく3層に分けられ、上層は最終埋土でNR13の最上層に続く。下層は溝状の部分の埋土である。中層の2層と3層との境には一部植物遺体（主に葉）集積層が確認でき、奥壁から約3mほど開口部に向かってひろがっていた。中層はNR13の埋土に切られており、SD17廃絶後しばらくNR13は流れていたことがわかる。最終埋土を共有することから、廃絶後しばらく窪地のような状態であったことが推測される。SD17は立地や、奥壁からNR13へ緩やかなスロープ状になっている形状などから、船着き場の可能性が考えられる。

遺物は土師器が534点、その他の須恵器が4点、木器が1点出土した。各層毎の内訳は、1層から土師器149点、須恵器1点、2層から土師器37点、須恵器1点、3層から土師器35点、4層から土師器19点、5層から土師器7点、須恵器1点、6層から土師器142点、7層から土師器1点、10層から土師器14点である。

SD17が切る遺構は、全てII期と考えられる。埋土中の遺物はIV期に属し、また接続するNR1もIV期に埋まりつつある。船着き場と考えた場合、埋まっていたは用をなさない。以上の他遺構との関係から、本遺構の時期は、III期に掘削され機能し、IV—2期に埋まったと考えられる。

SD22（図版102、写真図版64） A7・A13地点 EG37～EP44

幅約2.5m、深さ約0.6mの素掘溝で、約42mにわたり確認した。始点は不明であるが、北でNR14に接続する。NR14接続部から南に約30m付近で北にSD27が分流する。埋土から1回の改修が認められ、当初は北側が掘削され、その後、南側に掘り直されたようである。

遺物は土師器が146点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が10点、その他の中近世陶器が1点、木器が4点出土した。須恵器・陶器は混入と考えられる。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられるが、II期に遡る可能性もある。

SD25（図版102） A13地点 EM39

幅約0.2m、深さ約0.5m、長さ約3mの素掘溝である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、よくわからないが検出状況からIII期と考えられる。

SD27（図版102） A13地点

幅約0.3m、深さ約0.1mの素掘溝で、約8mにわたり確認した。SD22から分岐する。北端はVI期のSD18に破壊される。

遺物は土師器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIII期と考えられるが、SD22との関係からII期に遡る可能性もある。

SD28（図版102） A13地点 EM43

幅約0.4m、深さ約0.1m、長さ5mの素掘溝である。

遺物は土師器が4点、灰釉系陶器が1点出土した。灰釉系陶器は混入と考えられる。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD29 (図版102) A13地点 EG41~EH41

幅約1.2m、深さ約0.2mの素掘溝で、約6mにわたり確認した。西端は調査区外に延びる。

遺物は土師器が1点出土した。

本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SD32 (図版103) A8地点 EN50~EP48

幅約0.5m、深さ約0.1mの素掘溝で、約15mにわたり確認した。北端、南端ともに調査区外である。北端近くでSD34を切り、中央付近でSD33が合流する。またA15地点で検出したSD49は、SD32の延長線上で、方向もほぼ同じことから同一の溝であった可能性がある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD33 (図版103) A8地点 EO49~EP48

幅約0.2m、深さ約0.1m、長さ7mの素掘溝である。南端はSD32に合流する。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD34 (図版103) A8地点 EP48~EP50

幅約1.1m、深さ約0.2mの素掘溝で、約13mにわたり確認した。北端と南端は調査区外である。北端付近でSD32に切られる。

遺物は土師器74点、その他の中近世陶器が12点出土した。灰釉系陶器は混入であろう。本遺構の時期は、検出状況からや遺物からⅢ期と考えられる。

SD48 (図版103・104、写真図版245) A10地点 EN53~FA53

幅約0.7m、深さ約0.2mの素掘溝で、長さ約38mにわたり確認した。東端は調査区外で、西端は確認していない。中央付近でSB50を切る。

遺物は土師器99点が出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からⅢ期と考えられる。

SD49 (図版103、104、写真図版245) A15地点 EK56~EM53

幅約1.2m、深さ約0.1mの素掘溝で、長さ約20mにわたり確認した。北端は調査区外で、南端はNR20に切られる。またA8地点で検出したSD32は、SD49の延長線上にあり、方向もほぼ同じことから同一の溝であった可能性がある。

遺物は木器が2点出土した。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD50 (図版104) B1地点 ER68

幅約1.1m、深さ約0.5m、長さ4mの素掘溝である。西でNR24に合流する。

遺物は土師器が22点、その他の須恵器が4点、灰釉陶器1点出土した。須恵器・灰釉陶器は混入であろう。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD53 (図版104) B1地点 EN70~EO70

幅約2m、深さ約0.3mの素掘溝で、約6mにわたり検出した。SK50を切り、SD52、NR23に切られる。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からⅢ期と考えられる。

SD54 (図版104) B1地点 EN70

幅約2m、深さ約0.4m、長さ5mの素掘溝である。SK50を切る。

遺物は土師器が1点、灰軸系陶器が4点が出土した。灰軸系陶器は混入であろう。本遺構の時期は、検出状況からIII期と考えられる。

第6項 自然流路

NR52（図版457、写真図版94） A16地点 DR60～DT59

幅約3m、深さ約1mで、長さ約9mにわたり検出した。流路の大半はNR48に切られている。水流の方向は不明であるが、地形からみると北東から南西への流れが想定できる。埋土は砂礫や粘土であり、NR52内においても最低1回の掘り返しを確認できた（図版192）。なお、底面北端には直径約20cmの太い材があり、その南側で脚付きの木製盤（掲載番号6479）が逆位で出土した。

遺物は弥生土器が1点、土師器が21点、その他の須恵器が2点、灰軸陶器が1点、灰軸系陶器が8点、木器が4点出土した。本遺構の時期はIII期と考えられる。

NR53（図457） A16地点 DT61～EC60

幅約8m、深さ約0.8mで、長さ約12mにわたり検出した。流路の大半はNR48に切られている。水流の方向は不明であるが、地形からみると北東から南西への流れが想定できる。埋土は砂礫が主体であり、流路底面において西南西から東北東にむいた流木が幾つか出土した。そして、それらの間から土師器が少量出土した。流路の上端の方向から考えて、NR52と同一流路の可能性もある。

遺物は弥生土器が4点、土師器が104点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が2点、灰軸陶器が1点、木器が52点出土した。本遺構の時期はIII期と考えられる。

NR66（図版492） B5地点 DJ66～DP64

幅約12m、深さ約1mで、長さ18mにわたり検出した。水流の方向は北から南であり、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面にSW72が設けられている。

遺物は土師器が24点、その他の須恵器杯蓋が1点、木器が47点出土した。本遺構の時期はIII期と考えられる。

第7項 水制遺構

A2地点の水制遺構（図版105・106）

A2地点の水制遺構としてSW1～4・35・36の6基がある。これらは調査時においてすべてNR1内にある水制遺構として認識していたが、調査後に実施した検討の結果、NR1内に数本の分流があることが判明した（図179）。また、断面図の検討の結果、水制遺構に伴う盛土状の高まりが数箇所確認でき、それに伴うNR1の分流埋土がある程度識別できた（図180）。

すなわち、SW36とNR1-1・1-2、SW4・35とNR1-3、SW2・3とNR1-4、SW1とNR1-5が同時存在で、この順番で水制遺構と流路が構築されていった可能性が想定できた。このうち、NR1-5、NR1-6は、溝の文章でSD3として記載してある。以下、この仮説に従いA2地点の水制遺構について述べる。なお、A2地点の水制遺構は大半がIII期に属するため、小項でまとめて報告する。

SW1（図版105・108・110、写真図版65・66） A2地点 EB43～ED43

NR1内に位置する。SW1がある箇所のNR1は南東から北西にかけて水が流れており、SW1によりNR1—5へ導水している。なお、SW1の南側は調査区外に延びている。

SW1の規模は長さ10.8m以上、幅8.1mである。盛土は幅約7.5mにわたり確認できたが、中央部分が大きく抉れており、そこにはラミナが発達した砂礫層が堆積している。これは、SW1廃絶後の洗掘作用によるものと思われる。また、斜杭の方向や水流方向から判断して川表方向は東といえる。

内部構造は縦木と横木、直立杭、斜杭、盛土から成る。盛土は川表方向から馬踏まで施されており、川裏方向では確認できなかった。その埋土は粗砂や直径10cmの円礫から成り、黒褐色シルトが部分的に入るもので、馬踏では構造材Aが面的に確認できた。盛土の規模は川表方向の河床から馬踏まで幅9.2m、高さ0.7mを測る。

内部の芯材は西側と東側で2つに分かれる。西側は南南東から北北西にむけて掘えられた横木とそれに直交する縦木が主体となる。横木は長いもので480cm以上、縦木は長いもので350cmであり、直径はいずれも10cm以下である。確認できた横木と縦木は、まず河床に縦木があり、その上に横木、縦木、横木と格子状に組み合っており、横木と縦木のセットが最低2段は存在していたといえる。直立杭はそれらの間に打ち込まれており、補助的な役割をもっている。東側は南南東から北北西にむけて掘えられた横木とそれに直交する斜杭が主体となる。横木は10本前後確認でき、長いものは長さ450cmである。その前面には無数の斜杭が打ち込まれており、いずれも杭先を東に向けている。このように西側では盛土の芯を、東側では水流を意識したつくりとなっている。なお、東側の芯材は調査区東壁に延びているものもあるため、数回の補修が行われていたと思われる。

SW1は砂礫で覆われている(図版470)ことから、洪水などにより埋没したといえる。内部構造では鉄などの転用材はあまりみられず、大半が杭や横木であった。また、杭間からⅢ期の直口壺がほぼ完形で出土している。

遺物は土師器が18点、木器が249点出土した。杭間出土の完形の土器の時期から判断して、本遺構の構築年代はⅢ期といえる。

SW2 (図版105・109・110) A2地点 EA43~EB42

NR1内に位置する。SW2がある箇所のNR1は南東から西にかけて水が流れており、SW2によりNR1—4へ導水している。なお、SW2の南側は調査区外に延びている。

SW2の規模は長さ7.5m以上、幅5.0mであり、盛土の有無は確認していない。また、斜杭の方向や水流方向から判断して川表方向は東といえる。

内部構造は縦木と横木、斜杭から成る。流路底面にはSW1と同様に横木、縦木、横木の格子状の組み合わせが確認でき、それより上位の横木の上から川表・川裏方向に斜杭を打ち込んでいる。内部構造の遺存状況は悪いが、その構造がよく理解できる例である。

SW2は砂礫で覆われていることや遺存状況が悪いことから、洪水などにより埋没したといえる。内部構造では鉄などの転用材はあまりみられず、大半が杭や横木であった。

遺物は土師器が2点、木器が121点出土した。本遺構の時期は、SW1以前でしかもSW1に極めて近い時期といえることから、Ⅲ期と考えられる。

SW3 (図版105・111, 写真図版67) A2地点 FQ40~FR41

NR1内に位置する。SW3がある箇所のNR1は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW

3付近からSD3へと水が流れている。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は北といえる。

SW36の規模は長さ6.3m、幅2.0mである。

内部構造は横木と斜杭、盛土から成る。盛土はその基底部にあたる黒褐色シルトが一部残っていたのみである。盛土上面には横木が5本東西方向に据えられ、その上に斜杭が杭先を北に向けて10本以上打ち込まれていた。斜杭は約60°と20～30°の角度のものがあり、前者は横木の固定、後者は盛土法面補強の用途が想定できる。なお、斜杭の西側には長さ230cmの横架材が出土しており、盛土の構築物として転用されたと思われる。

遺物は土師器が63点出土した。本遺構は、SW1・2と同じ流路に伴う水制遺構と考えられることから、その時期はⅢ期といえる。

SW4（図版105・111） A2地点FR41～FS41

NR1内に位置する。SW4がある箇所のNR1は南東から北西にかけて水が流れていたと想定され、SW4付近からNR1-3・SD3へと導水している。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW36の規模は長さ6.0m、幅4.0mであるが、流水により大半が破壊されている。

内部構造は横木と縦木、斜杭、盛土から成る。盛土は図版107（I-I'）の19層であり、粗砂と円礫、黒色シルトで構成され、構造物Aの集積層と思われる粘土層もみられる。盛土の基底面付近には横木と縦木が確認でき、その上部で斜杭が杭先を北東に向けて打ち込まれている。この盛土に伴う流路埋土は6層と18層であり、流路の北法面には拳大の円礫が貼ってあった（図版69）。この円礫は黒色シルト上に位置し大きさが均一で面をそろえているため、明らかに人為的なものといえる。この場所は水衝部に相当することから、より強固な構築にしたと思われる。

本遺構は、SW36の直後に構築されていると考えられるので、その時期はⅢ期といえる。

SW35（図版105） A2地点FT42

NR1内に位置する。SW35付近は東から西にかけて水が流れており、SW35付近からNR1-3へ導水している。

SW35の規模は長さ5.3m、幅3.3mであり、盛土の有無は確認していない。また、水流方向から判断して川表方向は東といえる。

内部構造は横木、直立杭、倒木から成る。倒木は根元から樹幹までが残っており、根元を北にして据えられ、その南側に横木と直立杭がわずかに確認できた。

本遺構は、SW4への水衝緩和の役割があると想定できることから、その時期はSW4と同じくⅢ期といえる。

SW36（図版105・111、写真図版75） A2地点FQ42～FR41

NR1内に位置する。SW36がある箇所のNR1は東から西にかけて水が流れており、SW36付近からNR1-2へ導水している。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は東といえる。

SW36の規模は長さ6.4m、幅1.8mであり、さらに南側までのびていた可能性が高い。

内部構造は横木と斜杭、盛土から成る。盛土は粗砂と拳大の円礫が主体で、砂礫中には構造物Aの集積層と思われる粘土層が筋状に入る。盛土の基底面付近には横木と縦木が確認でき、その上部で直径約20cmの太い横木が据えられ、その前面には斜杭が10本前後、杭先を東に向けて打ち込まれている。

盛土はおそらく FQ41～FQ42まで張り出している地山の灰白色粘土につながっており、SW36は導水機能と護岸機能を兼ねていたと思われる。

本遺構は、A7地点のNR13下層②の埋土中に構築されていた可能性が高いため、その時期はⅢ期と考えられる。

SW30 (図112～119、写真図版72・73) A8地点 FD49～FG48

NR3内に位置し、南西側は調査区外に延び、北東側はSW32に連結している。SW30付近から分岐する溝などは確認できていないが、水流方向からみてSW30からA10地点のSD48に導水していた可能性が高い。SW30の前後の堆積はいずれも砂礫が主体であり、数回の掘り返しが確認できた。

SW30の規模は長さ14m以上、幅約2.5mであり、盛土を伴い最低でも3回の作り替えが認められる(古い段階より第1次盛土、第2次盛土、第3次盛土とする)。盛土の幅は第1次盛土から第3次盛土まではほぼ一定で約2.5mで、高さは第1次盛土が約0.4m、第2次盛土が約0.8m、第3次盛土が1.0mを測る。盛土の改築関係の識別は、それに伴う川表方向の流路埋土と盛土の切り合い関係から想定している。

SW30の内部構造は、直立杭と斜杭、横木、盛土から成る。横木は直径8cm前後、長さ200～400cmのものか20本前後、南西から東北東に向けて掘えられ、その南側に無数の斜杭が打ち込まれている。横木間には直立杭がランダムにあり、横木の北側に斜杭はほとんどない。斜杭の角度は30～60°で、大半は地山である灰白色粘土まで打ち込まれている。また、斜杭の南側には構築材A(敷葉層)を横方向に隙間なく並べている箇所も確認できた。斜杭の向きや流水方向などから判断して、川表方向は南側といえる。

第1次盛土は旧流路の埋土上に構築されており、表法尻は地山である灰白色粘土上に位置する。旧流路の深さは検出面からの深さが約1.8mで、約0.6m流路埋土が堆積した後第1次盛土が構築されている。盛土は砂礫が主体で、基底面と馬路に敷葉層が認められた。そして、馬路中央部分には掘り込みがあり、その埋土は砂礫と植物遺体を含むシルトであった。第1次盛土の川表方向の河床レベルは108.000m、馬路レベルは109.200mであり、その比高差は1.2mである。

第2次盛土も砂礫が主体で、馬路に敷葉層が認められた。そして、馬路中央部分には掘り込みがあり、その埋土は砂礫と植物遺体を含むシルトであった。シルト中の植物遺体は第1次盛土よりも多い。第2次盛土の川表方向の河床レベルは108.400m、馬路レベルは109.300mであり、その比高差は0.9mである。第2次盛土に伴う流路埋土は完全に盛土を覆っており、黒褐色シルトと微砂のラミナが発達している。おそらく、第2次盛土埋設から第3次盛土構築までには一定期間の安定期があったと思われる。

第3次盛土も砂礫が主体で、馬路に敷葉層が認められた。そして、馬路中央部分にはわずかに掘り込みがあり、その埋土はシルトであった。第3次盛土の川表方向の河床レベルは108.500m、馬路レベルは109.500mであり、その比高差は1.0mである。第3次盛土に伴う川表方向の流路は第2次盛土に伴う流路埋土を再掘削しており、東側はほぼ垂直に掘り込まれている。

このように盛土は川表方向を中心に改築が行われており、川裏方向の埋土がどの段階に伴うものか定かではない。また、盛土内には土木材の他に木銼などの転用材がわずかにみられた。

遺物は土師器が39点、その他の須恵器が1点、木器が488点出土した。SW30の時期は盛土内出土遺

物からIII期といえる。

SW31（図版112・113・120、写真図版101） A 8地点 FF49～FG50

NR3内に位置するが、内部構造の方向や横木のレベルなどから判断してNR3-2に伴う可能性が高い。NR3-2は大半が調査区外に位置するため、その規模は定かでないが、水は東から西へ流れていたと考えられる。そして、SW31は南北方向に構築されていることから、流路に直交していた可能性が高い。

SW31の規模は長さ約3.5m、幅約1.8mであり、明確な盛土は確認できなかった。その内部構造は横木と斜杭、直立杭から成る。斜杭は横木に接しており、大半が杭先を東に向けている。水流方向と斜杭の向きから判断して川表方向は東側といえよう。川裏方向は川表方向よりも約0.3m下がっていることから、洗掘作用を受けたかもしれない。

遺物は土師器が31点、その他の須恵器が2点、木器が41点出土した。本遺構の時期はIII～IV期と考えられるが、NR3-2に伴うのであればIV期といえる。

SW32（図版112・113・121、写真図版74） A 8地点 FG48～FI49

NR3-3内に位置し、盛土を伴う。

NR3-3は基底面しか捉えられなかったが、断面図（図版116）でみるかぎり、深さ約1.2mを測る。水は南東から北西に向かって流れており、SW32はその南岸にある護岸施設に該当する。

SW32は直立杭と盛土から成る。直立杭は列をなして打ち込まれており、調査区東壁から北壁まで直線的に延びる。北壁からは杭の密度がやや粗となるが、南西側に延びてSW30まで続いている。これらに伴う盛土は東壁においてのみ確認でき、平面ではみられなかった。盛土は南側がNR3-1によって切られているが、概ね地山である灰白色粘土上に構築されている。

遺物は土師器が61点、木器が67点出土した。本遺構の時期はSW30と同じくIII期である。

SW33（図版112・120、写真図版74・75） A 9地点 FI49

NR3-3内に位置し、SW32と連続する。

SW33は長さ約1.5m、幅約1.0mの規模である。横木が南東から北西に向けて3本据えられ、その上に杭先を東側に向けた斜杭を3～4本検出した。また、流路の岸に沿って直立杭が3本みられ、これらはSW32からの続きといえる。横木と斜杭はSW32では確認できなかった、岸に沿って盛られた護岸施設の内部構造といえる。なお、本遺構の時期はSW32と同じくIII期である。

A13地点の水制遺構（図版122）

A13地点の水制遺構としてSW24～29の6基がある。これらはすべてNR14内にある水制遺構であり、盛土が残る水制遺構から出土する遺物がIII期のみであったため、調査の段階ではすべてIII期の遺構として認識していた。そのため、調査中の見解を重視し、ここではすべてIII期の遺構として報告することにするが、NR14からはII期とIV期の遺物が少量含まれるため、遺構の時期をII～IV期として捉えるのが妥当かもしれない。

SW24（図123、写真図版67） A13地点 EG37～EH37

NR14が二股に分岐する箇所に、北西方向の流路を塞ぐように設けられている。NR14は幅8～10m、深さ約1.6mで、断面形は浅い皿状を呈し、南東から北西に向かって水が流れていたと考えられる。

SW24は長さ約1.5m、幅約0.6mの規模であり、盛土は確認できなかった。

内部構造は直立杭と矢板から成る。これらは北西から南東方向に、つまり NR14の流れに平行するように地山まで密に打ち込まれており、杭付近には円礫がわずかに確認できた。直立杭は幅約10cmで、長さが約60cm遺存しており、これらの土木材は直径5～10mmの小礫に埋没していた。

遺物は木器が44点出土した。本遺構の時期は NR14と同じくⅡ～Ⅳ期と考えられる。

SW25 (図版124～126、写真図版68～70) A13地点 EI37～EJ37

NR14がEJ38で二股に分かれ、そのうち北北西方向に延びる幅約5m、深さ約0.7mの流路内に、流路の方向に直交して構築されている。この流路は南東から北西に向かって水が流れており、SW25付近から分岐する溝などは確認できなかった。

SW25の規模は長さ5.2m、幅2.0mであり、盛土の高さは約1m遺存していた。

内部構造は直立杭と斜杭、横木、構造材A、盛土から成る。その構築過程は以下のとおりである。まず、基礎となる直立杭を約1m間隔で地山である灰白色粘土に打ち込む。そして、長さ約150cmの斜杭を盛土の法面に0.7～1.0m間隔で据え、その上に横木を置く。横木は直径約10cm、長さ約400cmのものが6本据えられ、その上に構造材Aを横木に直交するように隙間なく並べる。構造材Aの上には斜杭が約0.6m間隔で打ち込まれ、さらにその上に横木に平行するように構造材Aを隙間なく並べている。そして、最後に粘土被覆を行う。杭の向きや水流方向から考えて、川表方向は南東側である。

盛土は川裏方向が砂と構造材Aを含むシルトの互層堆積、川表方向側が構造材Aを多く含むシルトである。旧地形が若干盛り上がっている箇所に構造材Aを含むシルトを盛り、その背面の窪地にシルトと砂礫を交互に盛る形態で、盛土の長さは約4.2mとなる。なお、本遺構は川表・川裏方向ともに砂礫で覆われており、両者の違いはほとんどなかった。

遺物は土師器が85点、木器が105点出土した。遺構の時期は NR14と同じくⅡ～Ⅳ期の期間内であり、盛土内からはⅢ期の遺物しか出土していないことから、Ⅲ期と考える。

SW26 (図版127～129、写真図版70) A13地点 EI38～EJ38

NR14がEJ38で二股に分かれる突端部に位置する。NR14は幅8～10m、深さ約1.6mで、断面形は浅い皿状を呈し、南東から北西に向かって水が流れていたと考えられる。そして、SW26が構築された時点では、その南側の流路が砂礫で埋没していた可能性が高く、SW26は主に北側の流路を意識して構築されている(図135)。

SW26の規模は長さ4.5m、幅3.0mである。

内部構造は直立杭と斜杭、縦木、横木、盛土から成り、その構築過程は以下のとおりである。まず、底面に長さ約3mの横木を流路と同じ方向に置き、その上に縦木を置く。縦木は直径約6cm、長さ約100cmのものが3本遺存していた。縦木の上には直径10～20cm、長さ約450cmの太くて長い横木を置き、直立杭で固定する。その後、砂礫を盛って、その上から斜杭を合掌型に打ち込む。斜杭は北法面のものに比べ南法面の方が太くて、その遺存本数も多い。

盛土は河川堆積の高まり部分の北法面に施されている。そして、粗砂と小礫が主体で全体的にしまりがあり、構造材Aが部分的に入る。法況は河川堆積層の上までしかないが、本来地山である灰白色粘土まで延びていたと考えられる。盛土の位置や流水方向から判断してSW26の川表方向は北側と考えられ、川裏方向の砂礫の堆積や盛土を切るような堆積層(図C134の17～19層)は、NR14の洗掘作用によるものと理解した。

なお、SW26は砂礫で覆われていたために自然廃棄といえる。

遺物は土師器が32点、木器が118点出土した。本遺構の時期はNR14と同じくⅡ～Ⅳ期の期間内であり、盛土内からはⅢ期の遺物しか出土していないことから、Ⅲ期と考える。

SW27（図版130、写真図版67） A13地点 EL38～EM38

NR14の下層の流路内に位置しており、NR14底面より約0.5m浮いている。NR14の下層流路内にSW27が入り、その流路はEL列で方向を変えるか、あるいは取束している。そして、本遺構の川表方向は杭の向きから北側といえるため、本遺構は水溜のための施設の可能性がある。この流路は検出面からの深さが0.4mで断面皿状を呈し、上層は砂礫層、下層は植物遺体を含むシルトである。砂礫層は層厚が厚く礫がやや大きいため、洪水などで一気に埋まったものと理解した。

SW27は長さ約5.2m、幅約1.6mを測り、盛土は確認できなかった。その内部構造は、直径約8cmの横木を東西方向に据え、その上に杭先を北に向けた斜杭を約20°の角度で数本据えるものであり、形態的には片合掌型となる。斜杭の角度がかなり緩いのは、流路が洪水などで倒壊したためと推測できる。

遺物は土師器が42点、木器が74点出土した。本遺構の時期はNR14と同じくⅡ～Ⅳ期と考えられる。

SW28（図版131） A13地点 EG36～EH36

NR14の南法面に位置し、ここから分岐する溝などは確認できていない。南東から北西に向かって流れていたNR14が西へ方向を変化する場所に位置し、西側にはSW29がある。

SW28は長さ約6m、幅約2.5mを測り、盛土は確認できなかった。横木が数本流路とはほぼ同じ方向に据えられ、それらの間に直立杭や斜杭が打ち込まれている。横木は長いもので3.5mを測るが、横木すべてが水平というわけではなく、不定方向に傾いている。この遺構は直立杭と横木がみられることから水制遺構としたが、東側の杭がみられない範囲は横木の自然堆積の可能性も否定できない。

遺物は土師器が11点、木器が124点出土した。本遺構の時期はNR14と同じくⅡ～Ⅳ期と考えられる。

SW29（図版131） A13地点 EG36～EG37

NR14内に位置し、ここから分岐する溝などは確認できていない。NR14は西へ向かって水が流れており、流路の方向に直交して構築されている。

SW29の規模は長さ約2.5m、幅約1.5mであり、これに伴う盛土は確認していない。内部構造は、長さ1.3mの横木を南北方向に据え、その東側に斜杭が10本弱打ち込まれている。斜杭は杭頭を西に傾け、その角度は40～50°である。SW29の土木材ははずすと、地山である灰白色粘土が段になっていることが判明した。斜杭の杭先が打ち込まれている箇所と川裏方向側では約40cmの比高差があり、人為的に河床を掘って段を形成しその法面を利用してSW29が構築された可能性が高い。

遺物は土師器が5点、木器が39点出土した。本遺構の時期はNR14と同じくⅡ～Ⅳ期と考えられる。

SW71（図版137、写真図版75） B5地点 DN64～DO64

NR65内に位置し、北側は破壊されている。

NR65は北から南に向かって流れる流路であり、幅約5mで、断面形態は皿状を呈する。SW71は流路の中央から西側で検出でき、そこから分岐する溝などは確認できなかった。

SW71の規模は長さ3.3m、幅2.8mである。

内部構造は斜杭と横木から成る。斜杭は流路に直交する方向に約10本打ち込まれており、いずれも杭頭が南に傾斜している。また、斜杭列の南側には長さ100cm以上、直径8cm前後の縦木が5本並んで

いた。斜杭の向きから北からの水流に対する機能が想定できるが、盛土が確認できなかったため詳細は不明である。

遺物は土師器が21点、木器が21点出土した。本遺構の時期は NR65と同じくⅢ期と考えられる。

SW72 (図版132～136、写真図版77・78) B5地点 DL67～DN65

NR66内に位置し、SW72の南側はさらに調査区外に延びている。NR66は北から南に向かって流れる流路であり、幅約12m、深さ約1mで、断面形は浅い皿状を呈する。

SW72の規模は長さ約11m、幅約6mである。SW72の東側の流路基底面は標高約107.000m、西側の流路基底面は標高約107.500mであり、両者では約0.5mの比高差がある。また、東側の方が流路幅が広いことから、東側に主流があったことはほぼ間違いなく、SW72の杭や構造材Aの位置から判断して、SW72の川表方向は南東側といえる。しかし、これが北から南へ流れる流路 NR66に平行して据えられた護岸施設となるか、あるいは調査区外に存在しているかもしれない東から西へ流れる流路に直交気味に据えられた堤防状遺構になるのかは定かでない。なお、SW72の西側は砂礫がわずかに混じる黒褐色粘土が主体、東側が砂礫主体の埋土であり、SW72の構築により、その川裏方向は止水状態であったと思われる。

SW72は盛土と、横木、斜杭、直立杭の内部構造から成り、最低1回の作り替えが確認できた(第1次盛土と第2次盛土)。

第1次盛土は敷幅約5mであり、上部に南西から北東に向けて据えられた3本の横木を有する。横木の東側では横木の上から据えられた斜杭が数本確認できたが、それらに伴う構造材はみられなかった。また、横木の西側では横木の上から据えられた縦木が数本確認でき、横木よりわずかに離れて直径10～15cmの太い斜杭が杭頭を東に向けて3本確認できた。横木を解体していくと、盛土基底部付近でも横木と縦木の組み合わせが確認できた。これらは直径10cm前後の太い材であり、最低でも縦横縦横の4回の組み合わせが確認できた。盛土は砂礫と粘土から成り、地山である青灰色粘土が数箇所ブロック状に確認できた。第1次盛土の表面は流失しているので定かでないが、その内部構造が、縦木と横木を格子状に組んでいく工法を有することに特徴があるといえる。

第2次盛土は第1次盛土の東側に、第1次盛土を覆うように構築されていた。第2次盛土の芯は、南西から北東に向けて据えられた横木と、それに伴う斜杭、その下に位置する縦木から成る。横木の大きさは長さ3m以上、直径12cm程度である。横木の東側には、杭頭を西にして横木に据えたように15本以上の斜杭が検出され、その上面には構造材Aが敷かれていた。斜杭は直径5～8cm程度で、約20°の角度で打ち込まれていた。構造材Aはヨシなどの草本類であり、斜杭に平行するように方向をそろえて帯状に置いただけで、東ねて編みである箇所は確認できなかった。横木の西側には杭頭を東にして横木に据えたように3本以上の斜杭が検出でき、これらは直径10cm前後とやや太く、その角度は約20°であった。なお、横木検出面、及び盛土掘削中において、長さ10～15cmの円礫が数個かたまって出土した。横木検出面のものは、横木の東側に位置し、構造材Aに覆われていた。盛土中のものは、縦木の間に数個単位で置かれたものや、横木の補助杭周辺に幾つか確認できた。これらは、明らかにSW72に伴うものであり、わずかではあるが、盛土に円礫を使用していたといえる。このように第2次盛土の内部構造は合掌型に組んであるといえ、その川表方向に構造材Aを敷き、盛土内に円礫を入れるというものであった。なお、盛土は第1次とほぼ同じ様相であった。

盛土内には土木材とともに梯子や農具などの転用材が幾つか確認でき、SW72の川裏方向からは黒色粘土中より完形に近い土器が数点出土した。遺物は土師器が12点、木器が354点出土した。盛土中の土器からみて、本遺構の時期はIII期といえる。

第4節 IV期（古墳時代後半）の遺構

IV期の遺構として、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟、土坑3基、水田跡4地点、溝7条、自然流路8条、水制遺構29基を以下に報告する。

第1項 竪穴住居跡

SB1（図版139・140、写真図版79・80） A2地点 FP43

平面形は、南側約半分を試掘トレンチによって破壊されているため正確には不明であるが、隅丸方形と考えられる。北側の壁面に作り付けカマド（SC1）が1基ある。ほぼ基底部のみの検出であるが、左右の袖部は若干の高まりを残していた。焚口の前面に灰の詰まった浅いくぼみがあり、灰を掻き出したものと思われる。なお、灰の中から被熱した小動物の骨片が出土している。焚口を挟んで反対側が燃焼室で中央やや焚口寄りに立柱石を確認した。立柱石の奥側が煙道部と思われるが、壁を切り込むなどの明確な造作は確認できなかった。燃焼部、焚口前面のくぼみの埋土を見ると、カマド部材と思われる土がブロック状に入り、その上に灰層があることが観察された。この堆積状況から、一度天井が崩落したが、その後補修して使用していることが推定された。カマドの周りには直径30～60cmのビット2基と土坑1基、直径10cm強のビット3基を確認した。位置からカマドに関係のあるものと思われる。主柱穴は3基（P1～3）確認した。このうちP2は柱根が残存していた。この他、ビット3基を検出したが、位置付けは不明である。

遺物は土師器が127点、古代の須恵器蓋杯が22点、木器が3点、白玉が20点出土した。白玉はカマドの東側と床面中央南西寄りにおいて出土した。また、焼けた部材や炭も確認され、焼失家屋であった可能性が示唆される。本遺構の時期は、須恵器の年代よりIV-1期と考えられる。

SB37（図版141・142、写真図版10・80・81） A7地点 ES38

平面形はほぼ隅丸方形である。床面中央部付近には地床炉（SC1）が確認できたほか、北側の壁面の中央部付近に被熱した細長い土盛りを確認した。これは類カマドと考えられ、この竪穴住居跡には地床炉と類カマドの過渡期の調理加熱施設が作られていた。ビットを10基（P1～10）を確認したが、主柱穴は柱根がしっかり残ったP1・5・8・11と考えられる。貼床を確認し、土師器片を多く含む2基の土坑（SK1・2）を確認した。壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が1336点、その他の須恵器が29点、灰軸系陶器が1点、木器が3点出土した。本遺構の時期は、出土した須恵器の杯身・杯蓋・高杯の年代観からIV-1期と考えられる。

SB60（図版143、写真図版84） C8地点 EI97

北側は調査区外に延び、西側は掘乱により切られているが、隅丸方形と考えられる。床面の南東よりには円礫を据えた炉跡（SC1）があり、南東角には深さ0.5mの円形を呈する土坑を確認した。

遺物は土師器が51点、その他の須恵器が5点、灰軸系陶器が1点が出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIV期と考えられる。

SB61（図版144、写真図版84） C9地点 EN106

北西側をSB62に切られているが、隅丸方形と考えられる。床面の南西側には炉跡と考えられる土坑を確認した。ビット（P1～13）を確認したが、いずれが主柱穴かは不明である。壁溝は2条あり、

このうち内側の壁溝が炉跡と考えられる土坑に切られていることから、この竪穴住居跡は建て替えが行われていたと考えられる。

遺物は土師器が8点、古代の須恵器蓋杯1点、その他の須恵器が3点、木器が1点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIV期と考えられる。

SB62 (図版144) C 9 地点 EN

SB61の北東側を切って造られているが、隅丸方形と考えられる。南東側にはカマドのような施設を確認した。主柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が10点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、SB61を切っているためIV期以降と判断できる。

SB63 (図版145、写真図版85・86) E 5 地点 AJ91

西側をSB65に、北側をSB66にそれぞれ切られているが、東西にやや長い隅丸方形である。床床炉・カマドは確認できなかった。ピット(P1~11)を確認したが、いずれが主柱穴かは不明である。

遺物は土師器が373点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が16点、灰輪系陶器が1点、木器が2点出土した。本遺構の時期は、床面直上から出土した須恵器の杯蓋からIV期と考えられる。

SB66 (図版145) E 5 地点 AJ90

SB63の北側を切って造られているが、床面の広がり確認できない。隅丸方形と考えられる。北東側には竪穴の肩を切るように土坑があるが、この竪穴住居跡に伴うものかは不明である。カマド・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

本遺構の時期は、SB61を切っているためIV期以降と判断できる。

SB75 (図版146、写真図版86) E 5 地点 AG91

SB71・77に切られている。東側のコーナーのみしか確認できなかったが、床面には炭化物が広がり、土師器・須恵器・フイゴの羽口が出土したことから、鍛冶関連施設の可能性もある。カマド・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が27点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が6点、輪羽口が1点出土した。本遺構の時期は、出土した須恵器の杯身・杯蓋からIV期と考えられる。

SB76 (図版146、写真図版85) E 5 地点 AG91

SB71・77に切られている。また北西側のコーナーは上層の削平によってはっきりしない。ピット4基を確認したが、いずれが主柱穴かははっきりしない。貼り床・カマド・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が35点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が3点、灰輪系陶器が3点出土した。本遺構の時期は、出土遺物とSB71・77に切られていることからIV期と考えられる。

第2項 掘立柱建物跡

SH5 (図版148) A 6 地点 FD30

1×1間で、南北が約2.2m、東西が約1.65mである。柱掘形は円形で、すべて柱根が残存していた。竪穴住居跡の主柱穴の可能性はある。

遺物はP352から土師器が4点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からは明確ではないが、

古墳時代のものの可能性が最も考えられることからここで報告する。

SH7 (図版148、写真図版87) A7地点 FG40

桁行2間(約3.25m)、梁行2間(約3.35m)の東西棟である。梁行の中央の柱がやや外側に張り出していることから近接棟持ち柱建物の可能性がある。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。建物は、NR13かⅢ-2期に埋まり、その後中州状になった部分に建てられている。

遺物はP407から土師器1点が出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からIV期と考えられる。

SH32 (図版149、写真図版87) C5地点 EJ89~EK89

桁行4間(約5.75m)、梁行3間(約4.35m)の東西棟である。西梁行では中央の柱穴を確認していないため、コ字形の柱列の可能性もある。柱掘形は円形で、P2011・P2013・P2015・P2016・P2017には柱根が残存しており、P2006・P2009・P2010では柱痕跡を確認した。

遺物はP2006・P2007・P2010・P2011・P2012・P2014から土師器が16点、その他の須恵器が2点、P2006・P2007・P2015・P2016から木器が合計6点出土した。本遺構の時期は、土器からはIV-2期と考えられるが、V期以降となる可能性もある。

SH50 (図版150、写真図版88) E5地点 AH91~AJ92

桁行4間(約6.85m)、梁行2間(約4.05m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P4109には柱根が残存し、P4108では柱痕跡が確認できた。P4102・P4103はSB83の、P4113はSB69の、P4104・P4105はSB65の床面で、P4106はSB65のカマドの下でそれぞれ検出した。このことから3遺構の変遷は、SH50→SB69→SB65・SB83となる。

遺物は土師器がP4104・P4107~P4110・P4112・P4113から合計77点、木器がP4109・P4110・P4111から合計3点出土した。本遺構の時期は、土器からIV-2期と考えられる。

第3項 土坑

SK7 (図版151、写真図版88) A3地点 FP49

平面形・断面形ともに不整形で、埋土には炭化物が多く含まれていた。土坑の周りには礫が集中していた。

本遺構の時期は、周囲の遺構の様子からIV期の可能性が高いと考えられる。

SK86 (図版151) C8地点 EI98

平面形は円形と思われるが北側をSD125に切られる。断面形はやや深い皿状である。性格は不明である。

遺物は土師器が1点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からIV-1期と考えられる。

SC3 (図版151、写真図版88) C5地点 EI91

C5地点の調査区西端で検出された焼土である。長さ約20cmの角礫が2個並んで出土し、その西側に炭化物と焼土が薄く堆積していた。焼土直下は、比熱によりベース面が変色していたことから、この場所が火処であったことは間違いない。なお、焼土の周囲は長さ2.0mの不整形の浅い掘り込みがある。

遺物は土師器が12点、6世紀代と考えられる須恵器片が1点出土した。そのため、本遺構の時期はとりあえずIV期とする。

第4項 水田跡

A16地点(図版152、写真図版89)

地形の傾斜はほぼ平坦である。畦畔はIVc層中で見え始め、Va層上面を田面としたが、畦畔の検出は極めて困難であった。検出本数は東西11条、南北6条である。周囲には自然流路が巡っており、水田はその微高地上に立地している。水田部の周縁には比較的太い畦畔(SM357・358・367・371・375)があり、中央には細い畦畔がある。また、水田区画も周縁部ほど広く、中央が狭い。水田形態は周縁が不定形、中央が長方形であり、中央の畦畔には長辺に該当する畦畔に水口が設置されている。中央部の水田面積は平均5.4㎡で弥生時代のものより小さいことから、いわゆる極小水田に属すると考えられる。なお、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

出土遺物は、VIa層から土師器片が2点出土したにすぎない。しかし、同一遺構面に設置されたSW55は、明らかに水田部を意識した護岸施設であるので、本遺構の時期はSW55と同じくIV-2期と考えられる。

D1～3地点(図版153・154、写真図版90)

地形の傾斜はほぼ平坦である。畦畔はIVc層中で見え始め、Vb層上面を田面としたが、畦畔の検出は極めて困難であった。検出本数は東西21条、南北4条と東西方向のものが圧倒的に多いが、これらが基軸となるかは定かでない。水田形態は概ね東西方向に長い長方形であり、短辺は約3mである。なお、畦畔に伴う埋納遺物は出土していない。

出土遺物は、VIb層から土師器が出土した。出土遺物より、本遺構の時期はIV期と考えられる。

第4項 溝

SD72(図版156、写真図版91) A16地点 EB61～EC60

幅0.3m、深さ0.2m、長さ6.4mにわたり検出した。南西から北東に延びる溝で、北端はNR34に切れ、南端は調査区外に延びている。溝の底面はほぼ水平であるため水流の方向は不明で、埋土はいずれも粘土で最上層において微砂がわずかに確認できた。本遺構は小区画水田の東端に位置しているため、水田の取水、あるいは排水溝としての機能が想定できる。

本遺構の時期は遺構面の状況からIV期と考えられる。

SD93(図版448、写真図版91) B5地点 DP64～DP66

幅約2m、深さ0.5mで、長さ約11mにわたり検出した。南北端は調査区外に延びている。断面形は皿状を呈し、水流の方向は北から南と思われるが、埋土はいずれも粘土であることや溝自体が蛇行していることなどから、水流はほとんどなかったと思われる。

遺物は土師器が33点、灰釉系陶器が5点、その他の中近世陶器が1点、木器が9点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

SD132(図版453・454) C9地点 EJ05～EK05

幅約0.5m以上の素掘溝で、約4mにわたり確認した。西と北は調査区外である。溝の性格は不明で

ある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からIV期と考えられる。

SD133 (図版453・454) C 9 地点 EJ05~EK05

幅約2.5m以上の素掘溝で、約2mにわたり確認した。西と北は調査区外である。溝の性格は不明である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況からIV期と考えられる。

SD245 (図版155) E 3 地点 CI93~CJ94

幅0.5m、深さ0.2mで、長さ7mにわたり検出した。やや屈曲しながら南北方向に延びる溝で両端は調査区外に続く。断面形は半円形を呈し、幅・深さ・断面形はあまり変化しない。埋土は2層に分かれる。

遺物は土師器が3点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

SD246 (図版155) E 3 地点 CJ93~CK92

幅2.5m、深さ0.2mで、長さ6mにわたり検出した。やや屈曲しながら南北方向に延びる溝で両端は調査区外に続く。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は1層である。

遺物は出土していないが、周囲の状況からIV期と考えられる。

第5項 自然流路

NR84 (図版157) D 1 地点 CS66~CT66

幅3.5m、深さ1.2m、長さ3mにわたり検出したが、肩の一部分のみの検出であるので全容は不明である。東側をNR81に切られる。南西側は浅く北西側は深い。

遺物は土師器が4点、木器が2点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

NR85 (図版157) D 1 地点 CS67~CS68

幅5m、深さ0.4m、長さ4.5mにわたり検出したが、肩の一部分のみの検出であるので全容は不明である。東側をNR81に切られる。隣接するNR84との境界が、上層調査時の試掘坑で破壊されているため先後関係は不明である。断面は浅いすり鉢状を呈する。

遺物は土師器が8点、その他の須恵器が1点、木器が1点出土した。本遺構の時期は検出状況からIV期と考えられる。

NR43 (図版156、写真図版92) A 16 地点 DR60~EA58

幅3~5m、深さ約0.4mで、長さ約15mにわたり検出した。流路の大半はNR34・35に切られている。水流の方向はSW55の方向からみて東から西への流れが想定でき、検出した部分はSW55を埋没させた砂層と、砂層上に堆積した粘土層である(図版W62)。

遺物は弥生土器が2点、土師器が176点、古代の須恵器蓋杯が52点、その他の須恵器が74点、灰釉陶器が25点、灰釉系陶器が433点、中国磁器が4点、その他の中近世陶器が23点、木器が103点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

NR44 (図版156、写真図版169) A 16 地点 DS58~EA58

幅約1m、深さ約0.2mで、長さ約10mにわたり検出した。流路の大半はNR34に切られているため埋土の一部を検出したにすぎない。水流の方向はSW55の方向からみて東から西、ないしは北東から

南西への流れが想定できる。

遺物はその他の須恵器が4点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が8点、木器が6点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

NR45 (図版156、写真図版92) A16地点 DQ59-DP60

幅1.2~4.0m、深さ0.4mで、長さ約8mにわたり検出した。西端はNR28により切られている。水流の方向は北東から南西であり、南西端では流路幅が最も狭く底面に網代が確認できた。また、流路底面はSW57・SW59による構造材Aが貼り付けられており、人為的に導水された流路といえる。

遺物は土師器が10点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が6点、木器が7点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

NR48 (図版457、写真図版93・94) A16地点 DT58-DT61

幅約2m、深さ約0.8mで、長さ約9mにわたり検出した。流路内にSW62とSW63があり、SW62により2方向に分水されている。流水の方向やSW62・63との関係はSW62参照を参照されたい。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が13点、土師器が202点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が9点、灰釉系陶器が21点、その他の中近世陶器が8点、木器が177点、石器が1点出土した。本遺構の時期はIV期と考えられる。

NR89 (図版494・495、写真図版237・238) D4地点 BL70-BN69

NR89は幅約4.0m、深さ約0.8mで、断面形は浅い皿状を呈し、水は東から西へと流れている。NR94との合流点にはSW80が設置されていた。

遺物は土師器が35点、その他の須恵器が2点、木器が82点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からIV期と考えられる。

NR103 (図版230) D6地点 DA82-DC83

最大幅約7m、深さ約1.2mで、約10mにわたり確認した。NR95・NR96・NR97の下流部分にあたる。西岸については、SD208によって破壊されているため詳細は不明である。埋土などの状況は、NR99と同様である。

遺物は木器が40点出土した。本遺構の時期は、NR95と同じく、IV-2~V-1期と考えられる。

第6項 水制遺構

A3地点の水制遺構 (図版158・159)

A3地点の水制遺構としてSW5~16の12基がある。これらは調査時においてすべてNR2内にある水制遺構として認識していたが、調査後に実施した検討の結果、NR2内に数本の分流があることが判明した(図181)。また、断面図の検討の結果、水制遺構に伴う盛り土の高まりが数箇所確認でき、それに伴うNR1の分流埋土がある程度識別できた(図182)。

すなわち、SW7とNR2-1、SW15とNR2-2、SW10・14とNR2-3、SW8・12・14とNR2-4、SW6・13とNR2-5が同時存在で、この順番で水制遺構と流路が構築されていった可能性が想定できた。以下、この仮説に従い、A3地点の水制遺構について述べる。なお、A3地点の水制遺構は大半がIV期に属するため、ここでまとめて報告する。

SW5 (図版161) A3地点 FC47-FQ48

NR 2内に位置する。SW 5がある箇所の NR 2は南東から北西にかけて水が流れていたと想定され、SW 7・SW15などから導水された水が流れ込む。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は南東といえる。

SW 5の規模は長さ約8m、幅約4mである。

内部構造は横木と縦木、斜杭から成り、盛土の有無は確認していない。FC47～FC48にかけて根と樹幹の下部が残っている倒木があり、その南側に流路に直交する横木と斜杭がある。また、NR 2北法面付近には隙間なく並べられた横木が5本程度あり、直立杭で固定されている。これらの横木は粘土で覆われており、その上面に流路埋土である砂礫が堆積していることから、横木は盛土で被覆されていた可能性が高い。

遺物は弥生土器が1点、土師器が81点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が4点、木器が93点出土した。本遺構の時期は、NR 2と同じくⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SW 6 (図版162、写真図版95) A 3地点 FQ48～FS50

NR 2内に位置する。SW 6がある箇所の NR 2は南東から北西にかけて水が流れていたと想定され、SW13から導水された水が流れ込む。構造材Aや水流方向から判断して、川表方向は北といえる。

SW 6の規模は長さ13.0m、幅約4.5mである。

内部構造は横木と縦木、直立杭、構造材A、盛土から成る。芯構造は横木が主体であり、直立杭が横木の補助杭として使用されている。横木はFQ48付近に集中しており、南東方向に向かって継続し、突端ではSW13の盛土端にみられた段につながっている。FS49では横木が南西から北東に、つまり水流方向に直角に据えられており、その前後に直立杭がみられることから堰が存在していたかもしれない。盛土は黒褐色粘土や粗砂などから成り、構造材Aが数枚確認できた。構造材AはNR 2—5の底面から法面に敷かれ、一部遺構検出面まで延びていた。

本遺構の時期は、SW13と同じくⅣ期である。

SW 7 (図版163) A 3地点 FQ49～FQ51

NR 2内に位置する。SW 7がある箇所の NR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW 7からNR 2—1、NR 2—6へ導水されていたと考えられる。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は東といえる。

SW 6の規模は長さ9.5m、幅7.1mである。

内部構造は横木と縦木、直立杭、斜杭から成る。横木は南北ないし南南東から北北西にむけて据えられ、大半が馬路に近い位置にあり長さ200～300cmのものが多く、斜杭は横木の上から川表・川裏方向に打ち込まれており、川表方向側が打ち込み角度が急である。盛土の有無は確認していないが、SW 7はFD49まで延びている地山からの突塊的な用途が考えられるため、当然盛土は存在していたと思われる。

遺物は土師器が11点出土した。本遺構の時期は、A 3地点全体の水制遺構の構築順序から想定してⅢ期以前といえる。

SW 8 (図版164・166、写真図版96) A 3地点 GC51～GD52

NR 2内に位置する。SW 8がある箇所の NR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW 8よりNR 2—4に導水していたと考えられる。斜杭や構造材A、水流方向から判断して、川表方向

は東～北東といえる。

SW 8の規模は長さ10m以上、幅約1.5mで、南端は調査区外に延びている。

内部構造は横木と縦木、直立杭、斜杭、盛土から成る。盛土は直径10～15cmの円礫と粗砂が主体であり、GC50とGD52において盛土内部に構造材Aが確認できた。GC50のものは横木に直交するように南北方向に敷き、その上に東西方向、その上に南北方向と、幅の狭い草本類を交互に隙間なく重ねて敷いており、GD52のものは横木に直交するように東西方向に樹皮などの幅の広い材を隙間なく敷いている。本来はおそらく盛土全面にわたり構造材Aが敷かれていたと考えられる。GD52では横木の東側で綾編みの網代が確認できたが（写真図版96）、使用した樹種は不明である。また、同じくGD52では構造材Aの下に構造材Bが横木に平行して設置されており、その上から直立杭が打ち込まれていた。なお、盛土の敷幅は調査区南壁では約2mを測る。芯材は横木とその前後に打ち込まれた斜杭、直立杭であり、全体的には片合掌型を呈する。斜杭は川表方向が圧倒的に多く、横木は斜杭の西側に位置するものが多い。また、構造材Bは斜杭の東側に設置されていた。

遺物は土師器が136点、その他の須恵器が6点、木器が146点、石器が1点出土した。本遺構からは芯材間より土師器高杯がほぼ完形で出土していることから、その時期はIV期といえる。

SW 9（図版165・166） A 3地点 GC52～GC53

NR 2内に位置する。SW 9がある箇所NR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW 9より北西か北東に導水していたと考えられる。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は東といえる。

SW 9の規模は長さ約4m、幅2.5m以上で、南端は調査区外に延びている。

内部構造は横木と斜杭から成り、盛土は確認できなかった。SW 9の西端には又木が水平に据えられ、その東側に斜杭が杭先を東に向けて丁寧に打ち込まれていた。その東側には横木や縦木が幾つかみられたが、明確に直立杭などで固定されているものは確認できなかった。

遺物は土師器が29点、その他の須恵器が1点、木器が48点出土した。本遺構の時期はIII～IV期であるが、堆積状況からみてSW 8とSW10以前には構築されていたと思われる。

SW10（図版165・166、写真図版96） A 3地点 GC51～GC52

NR 2内に位置する。SW10がある箇所NR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW10・11よりNR 2—3に導水していたと考えられる。構造材Aや水流方向から判断して、川表方向は東といえる。

SW10の規模は長さ3.5m以上、幅約1mで、南端は調査区外に延びている。

内部構造は横木と直立杭、構造材Aから成り、盛土は確認できなかった。横木は直径8～10cmのものが2本南北方向に据えられ、その西側には横木に接して直立杭が5本打ち込まれ、東側には構造材Aが横木に直交するように東西方向に隙間なく敷かれていた。

本遺構は土層の切り合い関係からSW 8以前に構築されており、その時期はIII～IV期と考えられる。

SW11（図版165） A 3地点 GB51～GC52

NR 2内に位置する。SW11がある箇所NR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW10・11よりNR 2—3に導水していたと考えられる。SW10との関連や水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW11の規模は長さ5.9m、幅1.4mで、盛土の有無は確認していない。

内部構造は横木と直立杭から成り、盛土は確認できなかった。横木は長さ200~400cm、直径8~10cmのものが4本以上南東から北西方向に据えられ、その南側に横木に接して直立杭が4本以上打ち込まれていた。

遺物は土師器が61点、その他の須恵器が1点、木器が152点出土した。本遺構は設置位置と内部構造がSW10と同一であることから一連の水制遺構と考えられ、その時期はSW10と同様Ⅲ~Ⅳ期と考えられる。

SW12 (図版172、写真図版100) A 3地点 GA50~GB50

NR 2内に位置する。SW12がある箇所のNR 2はおおよそ東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW12はSW 8により導水されたNR 2-4の南岸に位置する。そのため、SW12の川表方向は北といえる。

SW12の規模は長さ約5m、幅約1.5mで、西側はSW14と連結していた可能性が高い。

内部構造は横木と直立杭から成り、盛土の有無は確認していない。横木は長さ約400cm、直径約15cmの大きなものが1本東西方向に据えられ、その前後に直立杭が数本打ち込まれていた。

遺物は土師器が18点、木器が10点出土した。本遺構はSW 8・14と一連の水制遺構と考えられることから、その時期はⅢ~Ⅳ期と考えられる。

SW13 (図版167・170、写真図版97) A 3地点 FT51~GB52

NR 2内に位置する。SW13がある箇所のNR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW13よりNR 2-5に導水していたと考えられる。構造材Aや水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW13の規模は長さ16.5m以上、幅2.1m以上で、南端は調査区外に延びている。

内部構造は横木と直立杭、構造材A、盛土から成る。盛土は粗砂、小礫、シルトなどから構成され、GA52~GB52の盛土内の層間には構造材Aが横木に直交する方向で隙間なく面的に敷かれていた。芯材は横木と直立杭を主体とする。横木は長さ300~400cmのものが多く、南東から北西にかけて緩い弧を描くように密に設置されており、その高さはほぼ一定である。横木の間には直立杭が、角度が強い斜杭が打ち込まれており、その配置の規則性は見いだせなかった。また、横木の下には縦木や短い横木などがあった。

遺物は土師器が97点、その他の須恵器が7点、木器が396点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、横木直下から出土した埴輪型から判断してⅣ期といえる。

SW14 (図版168~170、写真図版97~99) A 3地点 FS49~GA50

NR 2内に位置する。SW15がある箇所のNR 2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW14へはSW10・11からNR 2-3へ導水され、SW14西端より自然に水出域へ水を送っていたと考えられる。斜杭や構造材A、水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW14の規模は長さ13.7m、幅約2.5mである。

内部構造は横木と縦木、直立杭、斜杭、盛土から成る。盛土は粘土と粗砂が主体で、粗砂の上には構造材Aが2~3枚面的に確認できた(図版169)。構造材AはSW14の北法面からNR 2-3の流路底面と北法面まで、つまりNR 2-3の底面すべてに流路に直交する方向に敷かれており、流路底面

からSW14への透水防止の役割があったと考えられる。また、構造物Aの下には直径2cm程度の構造物Bが東西方向に隙間なく設置されていた。芯材は横木とその前後に打ち込まれた斜杭、直立杭であり、全体的には合掌型を呈する。斜杭の角度は川表方向が50~70°、川裏方向が40~50°で、川表方向の傾斜が強い。

遺物は弥生土器が1点、土師器が185点、その他の須恵器が12点、木器が287点、石器が1点出土した。本遺構では、横木に転用材として馬鍬や横架材が使用されていた。また、その時期は芯材間より出土した遺物やA3地点全体の水制遺構の変遷から想定してIII~IV期と考えられる。

SW15 (図版171、写真図版99・100) A3地点 FR49~FT52

NR2内に位置する。SW15がある箇所NR2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW15からNR2-2、NR2-6へ導水されていたと考えられる。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW15の規模は長さ17.8m、幅6.8mであり、南側はさらに調査区外へ延びている。

内部構造は横木と縦木、直立杭、斜杭、盛土から成る。盛土の有無は確認していないが、写真でみる限りは粗砂と粘土による盛土の高まりが認められる。芯材は南東から北西にむけて据えられた横木とそれに直交する縦木が主体となる。横木は長いもので400cm以上、縦木は長いもので350cmであり、直径はいずれも10cm以下である。確認できた横木と縦木は、まず河床に縦木があり、その上に横木、縦木、横木と格子状に組み合っており、横木と縦木のセットが最低3段は存在していたといえる。直立杭はそれらの間に打ち込まれており、補助的な役割をもっている。川表方向の法面には斜杭が杭先を北東にむけて打ち込まれており、北側より南側の方が残りがよかった。

遺物は縄文土器が1点、土師器が26点、木器が99点出土した。本遺構の時期は、芯材間より出土した遺物からIII期といえる。

SW16 (図版172) A3地点 FR51~FR52

NR2内に位置する。SW16がある箇所NR2は東から西にかけて水が流れていたと想定され、SW16から北西方向に流れを変えていたと思われる。斜杭や水流方向から判断して、川表方向は北東といえる。

SW16の規模は長さ4.3m、幅1.8mである。

内部構造は横木と縦木、斜杭から成り、盛土の有無は確認できていない。横木は南東から北西にむけて据えられ、その東側に斜杭が杭先を東に向けて数本打ち込まれている。

遺物は土師器が5点、木器が31点出土した。本遺構は図版160(I-I')の1層中に構築されており、土層の堆積状況から判断してSW6よりは新しいといえるため、その時期はIV期以降といえる。

SW22 (図版173) A7地点 FJ40

NR13内に位置する。流路検出面において4本の杭列を検出したが、流路に伴うものか判断できない。杭はいずれも長さ50~70cmの直立杭であり、0.2~0.4m間隔で打ち込まれている。

遺物は木器が3点出土した。本遺構の時期はNR13と同じくIV期といえる。

SW23 (図版174、写真図版101) A7地点 FF42~FG43

NR13内に位置し、ここから分岐する溝などは確認できていない。SW23が位置する付近のNR13は幅7.4mで断面形は皿状を呈し、水は南東から北西に流れている。

SW23は長さ6.8m、幅3.5mであり、盛土は確認できていない。

内部構造は横木と斜杭から成り、長さ約2mの横木を3本流路に直角に据え、その両側に杭先を南に向けた斜杭を数本打ち込むという簡易な構造である。斜杭の方向や水流方向から判断して川表方向は南側といえ、川表方向と川裏方向の比高差は約0.3mあり、そのような旧地形の段差を利用してSW23が構築されている。なお、SW23の南側にある股木や長さ350cmの丸木材もSW23の構築物と思われるが、NR13の埋土が砂礫主体であることから、SW23の内部構造は大半が消失している可能性が高い。

遺物は木器が44点出土した。本遺構の時期はNR13と同じくIV期といえる。

SW34 (図版197、写真図版101) B1地点 ER68~ER69

NR24の東岸に位置する。NR24は深さ約1mで断面形が皿状を呈する流路であり、西側はNR23に切られ、東側でNR28を切る。SW34はNR24がNR28を切る位置に構築されていることから、NR24の岸が崩落しやすい位置に設けられた護岸施設と考えられる。

SW34の規模は長さ約8m、幅約2.5mであり、盛土の有無は不明である。

内部構造は、直立杭と横木から成り、長さ200~300cmの横木を数本岸に沿って据え、それらを直立杭で固定するだけの簡易な構造である。

本遺構の時期はNR24と同じくIV期といえる。

SW38 (図版205、写真図版101) D4地点 BM70~BN71

検出時ではNR89が南東方向に張り出したようなプランを確認し、埋土を掘削すると杭などの土木材が出土した。そのため、SW38とNR89は同時期の一連の遺構と認識した。

SW38は幅約1.2m、長さ約2.0m、深さ約0.2mの土坑状の穴であり、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は粘性の高い粘土であり、砂礫層は確認できなかった。SW38の中央付近には直径3cm程度の細い杭が東西方向に17本打ち込まれており、杭列より南側では幅5~10cmの樹皮が数枚東西方向に敷いていた。この遺構の底面は灰白色粘土で北に向かって緩やかに傾斜していることから、杭列は水溜のような機能を有していた可能性がある。

遺物は木器が79点出土した。本遺構出土の遺物は極端に少ないが、NR89と同一埋土であることから考えて、本遺構の時期はIV期と考えられる。

SW55 (図版175~184、写真図版8・9・102~109) A16地点 DS58~EB59

NR44内に位置する。東側と西側は古代~中世の流路であるSD60・NR34などに削られて消滅している。SW55が位置する場所は小区画水田を検出した微高地の北辺部であり、SW55はNR44と微高地の境にある護岸施設といえる。なお、NR44は大半が後世の流路で消失しているため、その規模や形状は定かでない。

SW55の規模は東西約15m、南北約3mで、微高地の北辺を取り巻くように帯状に検出できた。SW55を覆っている土は基本的に古代~中世の流路埋土である砂礫層であり、盛土に確実に伴う遺物の認定が検出当初は困難であった。そのため、平成13年度の現地説明会資料ではSW55をV期の遺構としているが限りである。

SW55の盛土は、SW63の盛土の上あるいはSW63を埋めた砂礫層の上に構築されている。SW55の盛土は南側に杭などの土木材を芯とし砂礫を主体に盛ってある部分と、その両側の構造材Aや網代を

含む粘土層主体の部分に分かれる。

粘土層中の構造材Aは盛土底面より馬路付近まで何層かに分かれて設置されている(図版180)。DT58では、構造材Aが2~3枚を交互に重ねて敷いてあり、草本類を帯状に置いただけで束ねて編んである箇所は確認できなかった。そして、その下から網代が出土した。この箇所では構造材Aと網代の間に植物遺体をととても多く含む粘土があり、この土は極めて粘性が高く透水性が低い。また、東網代を断ち割ると、網代の下にも構造材Aが確認できた。構造材Aは約3cm間隔で4~5層認められ、大半が水流方向に対して直交して帯状に置いただけで、束ねて編んである箇所は確認できなかった。また、その傾斜角度は様々であり、網代とは全く逆の北高南低のものもあった。また、法尻では、東網代の下で太い横木が検出できた。網代下に構造材Aがあることから、網代自体も構造材Aの一つとして使用されていた可能性が高い。なお、東網代を断ち割った結果、東網代は同じ編み方の網代が2枚重ねてあることが判明した。なお、構造材Bはほとんど確認できなかったが、根が付いたままの木の子や加工痕のない雑木、シュロ(棕櫚)の毛などは幾つかみられた。

網代は盛土内の中程と底面付近で、東・西・北の3箇所で見出された(図版177)。西網代は東西約3.5m、南北約2.6mの範囲内で5枚の網代が、東網代は東西約1.8m、南北約1.1mの範囲内で2枚の網代が、北網代は東西約0.6m、南北約0.4mの範囲内で1枚の網代が、それぞれ確認できた。西網代は網代1本1本の幅が約1.5cmで、3本越え、3本潜り、1本送りの綾編みで、東・北網代は網代1本1本の幅が約2.5cmで、3本越え、3本潜り、1本送りの綾編みで、それぞれ編まれており、網代の材質はいずれもヒノキであった。また、網代編みの端がわかる部分では、いずれも内側に折り返されていた。このうち、西網代の一部を切り取り、保存処理を実施した。なお、網代は編み方を数回変化させており(図C79)、本来は装飾性が意図されていた可能性がある。

西網代は砂礫直上に敷かれていた。この砂礫はSW63の西側を流れてNR48に繋がる流路埋土であり、西網代は盛土の基底部に敷かれていたといえる。また、東網代は前述したように網代の上下に構造材Aが確認できたことから、盛土内の構造材Aと同様の用途で敷かれたものと理解した。網代は盛土の流失防止などの用途が想定できたため、粘土被覆の後に突き固めている可能性を考えて網代のエレベーション図を数枚作成した(図版181~183)。しかし、平面でも断面でもそのような痕跡は確認できなかった。

盛土の芯となる土木材は杭と横木である。杭は直立杭か、杭頭をわずかに南に傾ける斜杭が主体であり、概ね岸側に多く打ち込まれ、川側の密度は低かった。横木は最低でも5列確認できたが、杭と横木が必ず対応しているわけではなく、杭の位置は比較的ランダムであった。これは、杭の役割が横木の補助と構造材Aを止めるため、の二者があるため、両者の識別ができないためかもしれない。また、EB59では斜杭が約35°でほぼ均等に打ち込まれ、その上下に横木が確認できる箇所もあった。盛土北側の杭先は地山である青灰色粘土まで打ち込まれており、盛土は地山直上まで施されていた場所もあった。つまり、流路底面から盛土上面までは粘土層が表面に露出していることになり、漏水防止を意図していると思われる。なお、盛土構築以前の旧流路の肩に対して垂直に打ち込むような杭は全くみられなかった。

また、杭と杭の間には曲物底板などの製品を土木材の転用として置いている箇所もある。写真図版109の曲物底板は網代の上に据えられていたことから、網代を敷きその上から杭を打ち込み曲物底板を

杭間に置いたと考えられる。また、網代を貫いていない杭もあり、杭先のレベルから杭の打ち込みが数回にわたり行われたことがわかる。なお、SW55内には、曲物底板の他に岡や鐵の柄など、いろいろな器種の木製品が土木材として転用されていた。

この盛土の特徴として、盛土全体が土木材を芯とする砂礫部分と構造材Aや網代を含む粘土部分に分かれていること、構造材Aを数cm間隔で密に敷いていること、構造材Aとともに網代を使用していることなどがある。

遺物は弥生土器が5点、土師器が51点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が8点、その他の中近世陶器が1点、木器が715点、石器が95点出土した。盛土の時期は出土遺物が少ないので言及したが、東網代付近で網代を覆っていた土の中より、完形に近い須恵器壺が出土し、出土状況から判断して網代が敷かれた直後に須恵器が置かれたと考えられる。また、網代自体の放射性炭素分析(第7章第1節参照)の結果なども考慮して、この遺構はIV-2期と考えた。

SW57~59(図版185~189、写真図版110・111) A16地点 DP61~DQ59

南からSW58・SW57・NR45・SW59と並んでおり、SW57と58は同一盛土の南北方向の法面にある木制遺構で、SW59はNR45を挟んでSW57と向かい合う木制遺構である。

NR45はNR44より分岐した溝と想定できるが、VI期の遺構であるNR35に切られているため定かでない。また、SW59は北部分をSW61に切られている。

NR45は断面皿状を呈する溝であり、その埋土は植物遺体を含む粘土が主体であり、水流はほとんどなかったか、極めて緩いものであったと想定できる。また、基底部には巨木が2本南北方向に横たわっており、その間には植物遺体を多量に含む黒褐色粘土がつまっていた。西の巨木より西側は基底面のレベルが上がり、そこで網代が検出できた。

SW58は長さ約5.5m、SW57は長さ約6.5m、幅約1.3m、SW59は長さ約5.0m、幅約1.2mを測る。SW57とSW58は約1.5m離れているが、その間は自然地形を利用した盛土である。図版186-3層が古墳前期の流路埋土(NR53)であり、その上面から北法面にかけて地山である灰白色粘土ブロックを含む盛土が施され、その北にSW57が構築されている。土層からは、盛土の北側をより強固に作ったことがわかる。SW59に伴う盛土は断面では馬路幅約2.0m、敷幅約3.8mを測るが、平面では調査の認識不足で確認できなかった。その埋土は砂礫を含む粘土が主体であり、基底部付近には構造材Aの集積層が確認できた。なお、自然堆積層である28層上面は凹凸が顕著にみられたことから、盛土を突き固めているかもしれない。

SW58は直立杭から成る。0.3~0.5m間隔で直線的に打ち込まれており、部分的に杭に沿う横木も確認できた。

SW57は斜杭と横木を芯とする。検出時では、これらの土木材の前面に構造材Aが確認できた。構造材AはSW57の法面からNR45底面に並び、さらにSW59法面まで達している(図版186-13層)。そして、斜杭と同じ方向に隣りなく敷かれており、斜杭や横木を完全に覆っていた。なお、構造材AはSW57内には全く確認できなかったことから、この遺構では土木材を覆っただけとなる。斜杭と横木は極めて密に設置されていた。その構造は、基本的に斜杭を据え、その上に横木を置き、それを補助杭で止める、という工程の繰り返しである。斜杭の長さは100cm前後のものが多く、約60°の角度で地山である灰白色粘土まで打ち込まれていた。横木は馬路から法面までレベルを逸えては水平に据え

であり、長さは200～300cmを測る。

SW59もSW57と同様に斜杭と横木を芯とするが、密度はSW57より低い。その作り方はSW57と同じであるが、横木の川表方向側に直立杭を数本打ち込むことで横木を支えている点が異なっている。また、SW59も断面観察の結果、法面から流路底面まで構造材Aが敷かれていた。

SW57とSW59は東側で約4m、西側で約2m離れており、水流方向は東から西なので、水の出口付近が最も狭かったことになる。そして、SW57とSW59が最も近づく箇所で網代を3枚検出した。網代は構造材Aよりも高い位置で検出でき、構造材Aとの間には砂礫層が認められた。網代は北と南の2箇所検出でき、北網代は2枚重なっていた。その規模は北網代が長軸0.4m、短軸0.3m、南網代が長軸0.3m、短軸0.2mを測る。編み方はいずれも2本越え、2本潜り、1本送りの綾編みで1本あたりの幅は1.5～2.0cmを測り、材質はヒノキである。なお、網代3枚はいずれも同一のものではないと思われる。

網代はNR45内の水を排出する箇所に敷かれており、NR45はほとんど止水状態であったことや網代の部分の流路基底部が高くなること、などから考えると、上澄みの水が網代の上を通過していた可能性が高くなり、これらの遺構の性格は濾過を意図するものの可能性が指摘できる。

遺物はSW57から土師器が16点、灰釉系陶器が1点、木器が203点、SW58から土師器が3点、木器が33点出土した。なお、出土遺物は極めて少ないが、盛土内出土より遺構の時期はIV-2期といえる。SW62（図版192～196、写真図版10・112～114） A16地点 DQ61～DT60

この遺構は北東から南西に向かって流れるNR48内に位置し、この遺構により、水はNR48bとNR48cに分岐している。NR48b・NR48cの断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は砂礫が主体であった。また、NR48aからNR48bが分岐する付近の流路底面北側には横木が数本みられたが、杭などは確認できなかった。NR48cでは、DT60において杭列が流路部分まで延びていることから、堰状の杭列が存在していたか、あるいは盛土がもう少し東側へせり出していたと思われる。なお、A16地点の南壁の土層（図C95～C97）では、NR48bの底面レベルが107.200m、NR48cの底面レベルが107.500mで、約0.3mの比高差がある。このことから、本来NR48はNR48aからNR48bへの流れが主であり、SW62機能時にNR48cに流れがあるとすれば、NR48bのどこかで水を堰き止めて水位を上げていたことが想定できる。

SW62の規模は、東西約12m、南北約5mであり、盛土はさらに南側（調査区外）へ延びている。盛土の検出は比較的容易であり、NR48b底面とSW62馬路の比高差は約1.1mである。SW62の内部構造は杭と横木から成り、DR60とDS61～ST61の大きく2群があるようにみえるが、平面観察や埋土の状況から2群の切り合い関係は確認できなかった。なお、SW62とSW59は同一線上に位置しているが、検出面が異なるので全く別の遺構である。

盛土は杭と横木を芯とし、構造材Aや粘土を盛り土に使用している。DR61では、盛土掘削中に長軸約0.8m、短軸約0.5mの範囲で青灰色粘土を検出した。粘土中には砂岩粒が混在することから、盛土の一部と理解した。また、盛土の法面には盛土中の構造材Aや杭などがみえていたことから、水流によりかなり法面が抉られたと思われる。

横木は馬路直下で10本以上が東西方向に平行に並べられており、その間に斜杭が杭頭を南に傾けて約60～80°の角度で打ち込まれていた。横木は直径4～6cmのものが大半であるが、検出の最南端のもの

のは直径約10cmと太く、それに伴う斜杭も直径10cm以上の太いものか10本前後確認できた。斜杭は北側のものほど角度が90°に近くなることから、本来は直立杭であったものが、土圧や水圧などで傾いたのかもしれない。また、横木の直下には長さ30cm程度の製材が幾つか確認でき、横木のレベルをそろえる、あるいは横木の沈下防止など意図があったと思われる。なお、横木は盛土基底面でも数本確認できた。

盛土中には、層厚約1cmの構造材Aが5～10cm間隔で丁寧に敷かれていた。構造材Aは草本類を方向をそろえて帯状に置いただけで、束ねて編みである箇所は確認できなかった。また、構造材と構造材の間は粘土ブロックが混在する粗砂が充填してあった。構造材Aは大半が水平であったが、盛土の北法面付近では南高北低の傾斜であり、法面付近に据えられていた板材なども同様の傾斜であった。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が1点、土師器が76点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が4点、灰釉系陶器が2点、中世土師器が1点、木器が619点出土した。なお、杭などの土木材とともに、建築部材や農具などが幾つか転用されていた。遺構の時期は杭間より出土した遺物からIV-1期と考えられる。

SW63 (図版190、写真図版115・116) A16地点 DT58-EA58

NR48内に位置し、SW55の前身となる水制遺構である。NR48は北側がNR41に切られているが、おそらく北東から南西に向かう水流であったと思われ、SW63西側では南北方向に流れる幅約1mの溝状の落ち込みが確認できた(図版190では溝の西上端が図示されている)。

遺構の規模は東西約5.5m、南北約4.0mで、盛土を伴う。盛土は粘土が主体であり、小枝や植物遺体、粘土ブロックなどが多く含まれていたが、面的に広がる構造材Aは確認できなかった。

盛土の芯は杭と横木から成る。北側には斜杭と横木が、南側には縦木が多くみられ、その断面形は合掌型に類似する。中央付近には直径15cm程度の太い斜杭が約1.5m間隔で打ち込まれており、SW55西側部の南側まで同様の杭が列状に確認できたことから、本来は盛土の規模が大きかったと思われる。南側の縦木は角度が30°前後であり、打ち込まれたものでなく、据えられたものと理解した。中央付近の横木2本はいずれも長さ約260cmの柱材で、その北側には有孔板材や扉材もあり、建築部材を多く転用している。

遺物は弥生土器が5点、土師器が18点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が2点、木器が319点出土した。この遺構の時期は出土遺物が少ないため定かでないが、SW55以前に構築され、SW62と同時期かそれ以前に存在していたと思われるため、IV-2期といえる。

SW65 (図版198、写真図版116) B2地点 EM67

NR59内に位置し、さらに東側に延びていたと考えられる。NR59はNR58と同一流路であり、幅は約6mで断面形は浅い皿状を呈する。そして、南東から北西にむかって水が流れており、SW65の川裏方向には中州状の高まりを形成している。

SW65の規模は長さ約2.0m、幅約1.3mである。

内部構造は横木と斜杭、直立杭から成る。直径7cm前後の横木4本が流路に直交して据えられ、その上に斜杭が杭先を南に向けて打ち込まれている。直立杭はいずれも横木に接していることから、横木を支える補助杭として機能していたと考えられる。NR59の水流方向や斜杭の位置などから、川表方向は南東といえるが、SW65付近から分岐する溝などの存在は不明である。また、盛土の有無は不明で

あり、本遺構の時期は NR59の出土遺物から判断してIV期と考えられる。

SW73（図版199～203、写真図版118・119） B 8 地点 DK83～DK84

SD107内に位置する水制遺構であり、数回の作り替えが確認できた。SD107は本来東から西に湾曲して流れる自然流路である（図版200：掘削3段階）が、その後北に溝を掘削し、北と南西方向へ水の流れ（同掘削2段階）、最後は北への流れが主で南西方向は従（同掘削1段階）、という水流変化をたどる。以下、掘削1段階より順に説明する。

掘削1段階では、幅約3mの溝が南東から北西に向かい、SW73-3で北に向きを変えており、この流れが主流であったと思われる（溝の断面は図版202の調査区南壁で図示）。SW73-3より南西側は図面では溝として表現されているが本来は盛土であり、盛土の北西側に幅約1mの溝が存在していた（溝の断面は図版201の調査区西壁で図示）。SW73-1は長さ240cmの横木の東側に直立杭を3本、西側に1本打ち込みんでいる。横木の下には縦木がみられ、長さ20～30cmの円礫も数個確認できた。SW73-2は長さ200cmの横木の西側に直立杭を4本程打ち込んでおり、SW73-3は長さ240cmの横木の東西側に直立杭を各3～4本打ち込んでいる。これらはいずれも断面で盛土が確認されており、盛土に伴う内部構造と理解できる。なお、SW73-4、SW73-5はこの段階では砂岩粒や植物遺体が入る粘土から成る盛土のみ確認した。

掘削2段階では、盛土SW73-4の一部とSW73-5を除去した状態である。南西方向に延びる溝は幅約2.8mを測り、砂礫により埋没していた。また、SW73-4下の東側からは横木が2本出土し、横木の西側には横木に接して直立杭が打ち込まれていた。この横木と直立杭はいずれも掘削1段階の盛土に伴うものである。

掘削3段階はSW73-4の盛土をすべて除去した状態である。北東から南西方向にむいた横木が数本出土したが、これらが人為的に設置されたものか否かの判断はできなかった。

なお、遺構の時期は掘削1段階の溝がIV-3期、掘削2・3段階の溝や自然流路がIV-2期であることから、SW73はIV-2～3期といえる。

SW74（図版204、写真図版116） C 1 地点 GK87

NR68底面に位置し、北側は調査区外まで延びている。NR68は幅約3mの溝で断面逆台形を呈し、南から北へ流れ調査区内で東へ屈曲している。

SW74は直立杭が南北方向に7本並んだ状態で検出でき、杭に伴う盛土の有無は不明である。杭の直径はいずれも約10cmであり、溝底面まで打ち込まれている。本遺構の時期はNR68の出土遺物から判断してIV期と考えられる。

SW80（図版205、写真図版116） D 4 地点 BM70～BO70

SW80はNR89の南肩部に打ち込まれた直立杭と、NR94とNR89が合流する箇所には設けられた水制遺構から成る。

NR89は幅約4.0m、深さ約0.8mで、断面形は浅い皿状を呈し、水は東から西へと流れている。その南側に直径2～4cmの細い直立杭が約30本列状に打ち込まれていた。

NR94とNR89が合流する箇所には10数本の直立杭とともに横木が据えてあった。直立杭の大半は杭先を一方から削るだけの簡易なもので、流路基底部までは届いていなかった。そのため、流路が2分の1から3分の1程度埋没してから打ち込まれたと思われる。

NR94は土坑状の穴であり、埋土は粘土主体であったため水流方向は不明である。また、NR94とNR89が合流する箇所は土木材の前後には植物遺体を多く含む黒褐色粘土が堆積しており、杭列前後の堆積層の差が確認できなかった。そのため、杭列がどの方向からの水流を意識して作られたかは不明である。

なお、この箇所では杭列の北側で土師器1個体が潰れた状態で出土し、土器を除去すると種子が幾つか出土した。また、須恵器壺の口縁部破片も出土した。須恵器の時期から、本遺構はIV期と考えられる。

SW85 (図版206・207、写真図版118・119) D5地点 BA69

NR119とNR120が合流する付近に位置し、ここから分岐する溝などは確認できていない。NR119は北東から南西に向かって水が流れ、NR120は南東から西に向かって水が流れており、いずれも断面逆台形状を呈する。

SW85の規模は、南北約2.8m、東西約1.0mを測り、NR119の水流方向に対して直交、NR120の水流方向に対して平行に設置されている。

SW85は直立杭のみから成る。杭は直径3～4cmのものと、直径1cm程度の細いものに分かれる。前者は直立気味に打ち込まれるものが5～6本あり、東側に杭頭が傾いているものが1本ある。また、後者は大半が杭頭を東側に傾けている。なお、雑木が杭列の西側で検出できたが、水制遺構には関連しないものと理解した。杭の打ち込み面は、図版206の7層上面であり、河床礫より30～40cm程堆積した後に杭が打ち込まれたことになる。明確な盛土は確認できなかったが、土層図の3層はその可能性があり、5層が盛土前後の窪みとなるかもしれない。

SW85の川表方向は、杭頭の向きや杭列の方向などから判断して西側といえ、その役割はNR120の流れを意識しているといえる。

遺物は土師器が1点、木器が124点出土した。本遺構の時期はNR119と同じでIV期と考えられる。

SW93 (図版208・209、写真図版117) D9地点 AS78～BA77

NR112とSD230が合流する箇所に位置し、北側は調査区外となる。NR112は東から西に向かって水が流れ、SD230の水流方向は不明である。両者はいずれも断面皿状を呈し、その底面の比高差は約0.3mである。

SW93の規模は、南北約2.8m、東西約2.6mを測り、NR112の法面に盛土は確認できなかった。

SW93は直立杭と横木、雑木から成る。直立杭はNR112の北側の先端に沿って列状に打ち込まれるものと、SD230内で東西方向に打ち込まれるものの2列がある。横木はNR112の流路の先端に流路の向きに平行して数本まとめて設置されており、杭の前後に絡めてあるものもあった。このことから、横木は杭を打ち込んでから設置されたことになる。

SD230の埋土は粗砂が帯状に入る粘土が主体であることから、基本的に自然堆積である。しかし、図110の3層や10層のように植物遺体や砂をブロック状に含む層もみられることから、部分的に埋めている可能性が指摘できる。SD230内では杭とともに長さ50～60cmの雑木が2つ出土しており、これらは意図的に廃棄された可能性もある。

なお、SW93には転用材がほとんどなく、遺構の時期はNR112と同じでIV期と考えられる。

SW96 (図版210、写真図版119) E1地点 DE87～DE88

SD233内に位置し、盛土は確認できなかった。SD233西側には地山である灰白色粘土が畦状に盛り上がっており、SW96の南北方向の杭列はこの高まりの護岸施設の可能性もある。SD233は地形からみて北から南西方向へ水が流れていたといえ、南端でSD235に切られる。SW96から分岐する溝は不明であるが、畦状の高まりが途切れる箇所がSW96に近いことから、あるいはここから水田域へ導水していた可能性もある。

SW96は東西約2.0m、南北約3.5mの範囲内で検出した。SD233に直交するように矢板と直立杭を打ち込んでいるが、その間隔は不規則で、密度は低い。また、畦状の高まりの東側にも杭列と矢板があり、これらとともに扉や横架材も出土している。

なお、本遺構の周辺からは須恵器杯身が完形で2個体出土しており、遺構の時期はIV期と考えられる。

第5節 V期(古代)の遺構

V期の遺構として、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡7棟、柱列跡1基、水田跡1地点、溝9条、自然流路5条、水制遺構5基を以下に報告する。

第1項 竪穴住居跡

SB65 (図版212、写真図版120・122) E5地点 AJ91

平面形は東西に長い隅丸方形である。東側に粘質土で作られたカマドの片裾が確認でき、この周りに炭化物が広がっていた。主柱穴は2基(P1・2)であるが南側の主柱穴ははっきりしない。その他にビット7基を確認したがその性格は不明である。土坑は4基(SK1~4)を確認し、このうち竪穴住居の入り口方向にあたるSK1は貯蔵穴である可能性が高い。壁溝がほぼ完全に確認でき、この中から土師器の薄片が多量に見出されたがその理由ははっきりしない。床面は砂岩の岩盤であるが、この下層は黒色の粘土層である。なお床面の南東隅には、この竪穴住居跡によって切られたSB64の床面を確認することができたほか、掘立柱建物の柱穴の上にカマドの盛り土が見られるために、SH50はこの竪穴住居跡に先行するものと考えられる。

遺物は土師器が667点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が45点、灰釉采陶器が9点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いからV期と考えられる。

SB68 (図版212) E5地点 AI91

SB67を切っている。南東のコーナーのみしか残っていないため、平面形はよくわからないが隅丸方形と考えられる。カマド・貼り床・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

本遺構の時期は、周囲の状況からV期と考えられる。

SB69 (図版213、写真図版120・122) E5地点 AI91

SB70・83・84を切り、SB65に切られており、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビットを12基確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼り床は確認できたが、カマドと壁溝はみられなかった。

遺物は弥生土器が1点、土師器が597点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が73点、灰釉陶器が3点、灰釉采陶器が42点、石器が3点出土した。本遺構の時期は、出土した須恵器の杯身・高杯の年代観によってV期と考えられる。

SB71 (図版215、写真図版121) E5地点 AG90

SB75・77の東側を切っている。ビット6基を確認し、このうちP3・6は主柱穴の可能性が高い。SK1・2はこの竪穴住居跡に伴う土坑であるが、その性格は不明である。南西方向には壁溝が確認できた。

遺物は土師器が138点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が20点、灰釉采陶器が6点、その他の中近世陶器が2点、製塩土器が1点、石器が1点出土した。出土遺物は多時期に及び混入も多いものと考えられるが、V期の竪穴住居跡であるSB75・77を切っていることから、本遺構はV期と考えられる。

SB77 (図版146、写真図版44) E5地点 AG91

SB75-76を切り、SB71に切られている。ビット6基を確認したが、いずれが主柱穴かははっきりしない。床面には炭化物が部分的にみられた。貼り床・カマド・主柱穴・壁溝は確認できなかった。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が1点、土師器が546点、古代の須恵器蓋杯が15点、その他の須恵器が43点、石器が2点出土した。本遺構の時期は、出土した須恵器からV期と考えられる。

SB78 (図版216、写真図版121) E 5地点 AE91

SB82-85を切り、SB79に切られ、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビットを2基確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が169点、古代の須恵器蓋杯が7点、その他の須恵器が21点出土した。本遺構の時期は、出土遺物によってV期と考えられる。

SB79 (図版216) E 5地点 AE91

SB78・82・85を切り、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビットを2基確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が290点、その他の須恵器が32点、灰釉系陶器が3点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からV期と考えられる。

SB80 (図版216、写真図版122) E 5地点 AD91

遺構の大部分が調査区外にあるため平面形よくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビット2基を確認したが、主柱穴ではない。貼り床が確認できたが、カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が40点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が3点、灰釉系陶器が3点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からV期と考えられる。

SB81 (図版214、写真図版58) E 5地点 AH90

床面のほとんどが調査区外にあるため、平面形はよくわからない。南側にカマドの火処と考えられる箇所を確認でき、この下部には焼土・炭化物が広がっていた。ビットは3基確認し、このうちP1は主柱穴の可能性が高い。壁溝はカマドの部分で切れている他は、ほぼ完全に確認できた。

遺物は土師器が162点、古代の須恵器蓋杯が11点、その他の須恵器が18点、灰釉陶器が2点、灰釉系陶器が12点出土した。本遺構の時期は、出土遺物と遺構の切り合いからV期と考えられる。

SB82 (図版216、写真図版122) E 5地点 AE91

SB78・79・85に切られ、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビットを4基確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

本遺構の時期は、周囲の状況からV期と考えられる。

SB54 (図版213、写真図版122) E 5地点 AI91

SB83-84を切っており、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ビットを1基確認したが、主柱穴ははっきりしない。貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は土師器が52点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が6点、灰釉系陶器が1点出土し

た。本遺構の時期は、出土遺物からV期と考えられる。

SB55 (図版213) E 5 地点 AI90

SB69を切り、SB81に切られ、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。ピットを3基確認したが、支柱穴ははっきりしない。貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

遺物は石器が2点出土した。本遺構の時期は、出土遺物からV期と考えられる。

SB56 (図版216) E 5 地点 AE91

SB82を切り、SB78・79に切られ、さらに北側の床面は調査区外となるため、平面形はよくわからないが、隅丸方形と考えられる。支柱穴・貼り床・カマド・壁溝は確認できなかった。

本遺構の時期は、周囲の状況からV期と考えられる。

第2項 掘立柱建物跡

SH 1 (図版217、写真図版123) A 4 地点 GB56~GC57

桁行3間(約6.0m)、梁行2間(3.6m)の東西棟である。北辺・南辺ともに中央に擾乱があるため不明であるが、桁行は4間であった可能性もある。柱掘形は円形で、断面形は確認できたものはすべて逆台形である。P126は柱の下には石が、P128は木片が置かれており、礎板の役目を果たしていたと考えられる。

遺物は土師器が5点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が3点出土している。本遺構の時期は、P124出土の須恵器蓋から、V-2期と考えられる。

SH 2 (図版217) A 4 地点 FP55~FQ56

東西4間(約5.4m)、南北1間を検出し、それ以北は試掘トレンチによって不明である。桁行4間の東西棟になるか、梁行4間の南北棟になるかは現状では判断できない。柱掘形は円形である。

遺物は土師器が1点出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からV-2期と考えられる。

SH33 (図版218) C 9 地点 EN06~EO07

桁行5間以上(約8.4m以上)、梁行2間(約4.0mと推定)の東西棟である。北西隅柱をSD126に破壊され、東梁行は調査区外となっている。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。北西隅でSH36・SH37と重なるか前後関係は不明である。SD126・SD132の位置から考えるとSH33が後出と推測される。P2064・P2074がV期のSB61を切っている。SH34とは主軸がほぼそろう、また南側柱筋もほぼ通ることから同時期のものと考えられる。

遺物はP2064・P2065・P2066・P2067・P2068・P2070・P2071・P2072・P2074から土師器が23点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が6点、P2065・P2066・P2070・P2071から木器が合計9点出土している。本遺構の時期は、出土遺物からV-3期と考えられる。

SH34 (図版219) C 9 地点 EK06~EM07

桁行5間(約8.8m)、梁行2間(約5.0mと推定)の東西棟である。南辺西隅に南北1間(約1.1m)、東西2間(約3.6m)の張り出しをもつ。柱掘形は円形で、柱根は残存していない。北西隅柱、北東隅柱及びそれから2間分の柱をSD126に破壊される。東側でSH36・SH37と重なるが、SH33と同様の理由からSH34が後出と考えられる。SH33とは同時期と考えられる。

遺物はP2082・P2087から土師器が4点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が1点出土した。灰釉系陶器は出土状況から混入と考えられる。本遺構の時期は、土器やSH33との関係からV-3期と考えられる。

SH35 (図版221) C9地点 EM07~EN06

桁行2間以上(約2.9m以上)、梁行2間以上(約2.6m以上)の東西棟である。北側をSD126に破壊され、西側は調査区外である。柱掘形は円形で、柱根は残存していない。

遺物は古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、SD126に切られることからそれ以前で、土器からV-2期と考えられる。

SH36 (図版220) C9地点 EM07~EN06

桁行5間(約7.2m)、梁行推定2間(約4.0m)の東西棟である。北側はSD126に破壊され、西側はNR76の影響で柱穴が確認できなかった。桁行についてはそれ以上西で柱穴が確認できなかったことから5間と判断し、梁行については同地点の同じ時期に属すSH33・SH34から2間と推定した。柱掘形は円形で、柱根は残存していない。ほぼ同位置にSH37が、西側に重なってSH34、東側にSH33がある。SH33・SH34との関係はそこで述べたようにSH36が先行すると考えられる。SH37とはビットの切り合いなどの判断材料を欠くことから決定できないが、位置とほぼ同様の規模から、どちらかがどちらかの建て替えの可能性が考えられる。

遺物はP2094・P2098・P2099から土師器が6点、その他の須恵器が1点、P2093から木器が1点出土した。本遺構の時期は、SD126に切られることやSH33・SH34との関係からV-2期と考えられる。

SH37 (図版220) C9地点 EL07~EN06

桁行5間(約8.15m)、梁行推定2間(約2.2m以上)の東西棟である。北側はSD126に破壊され、西側はNR76の影響で柱穴が確認できなかった。規模についてはSH36と同じ推定を行った。柱掘形は円形で、柱根は残存していない。ほぼ同位置にSH36が、西側に重なってSH34、東側にSH33がある。先後関係についてはSH36で述べたとおりである。

遺物はP2101・P2105・P2106・P2107から土師器が6点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、SD126に切られることやSH33・SH34との関係からV-2期と考えられる。

第3項 柱列跡

SA3 (図版221) A4地点 GC56・GC57

南北柱列で、3間分(約6.0m)確認した。柱掘形は円形で、断面形は方形である。柱根、柱痕跡は確認していない。

遺物は各ビットから土師器が7点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が1点、灰釉陶器が1点出土している。本遺構の時期は、検出状況や遺物からV-2期と考えられる。

第4項 水田跡

A12地点 (図版222・写真図版127)

地形の傾斜はほぼ平坦である。畦畔はIII a層中で見え始めIV c層上面を田面としたが、畦畔の検出

は極めて困難であった。検出本数は東西4条、南北2条である。SM352は南北に直線的に延びており、東西畦畔はSM352を境としてずれていることから、南北畦畔が基軸といえる。なお、SD12は道路遺構であり、大畦畔としても機能していたと考えられる。

出土遺物は、IVc層から土師器233点、須恵器14点、灰釉系陶器碗・皿が20点出土した。IVc層からの出土遺物は土師器や須恵器が主体であることや、畦畔検出面が8世紀の遺構であるSD12と同一面であることから、本遺構の時期はV期と考えられる。

SD207 (図版223、写真図版129) D6地点 DD82~DE85

東側に畦畔を伴う溝であるが、畦畔は断面で確認したのみである。検出した規模は長さ10.5m、幅1.0~1.6mで断面皿状を呈し、埋土(図C56-7~9層)は砂とシルトの混合土である。溝北側の検出は比較的容易であったが、南側はSD208の埋土上面より掘り込まれているため、困難であった。

この溝の東西側には畦畔がある。畦畔の平面形は確認できなかったが、その芯材を平面で検出し土層断面で存在を確認した。東側畦畔(図C56-5層)は砂礫が入る粘土より成り、その芯材と思われる杭が0.7~0.8m間隔で直線的に並んで検出できた。西側畦畔(図C56-6層)は砂岩粒が入る粘土より成り、その芯材には杭や横木が使用されていた。杭は直立杭と斜杭があり、斜杭は一部合掌型のように杭先を交差しているものもみられた。いずれの畦畔も、敷幅は土層断面で約1.0mを測る。

第5項 溝

SD1・SD12 (図版224・225、写真図版124~128) SD1:A1・A6・A12地点 EG32~FS33、SD12:A12地点 EK25~EK33

本遺構は、検出状況や埋土の状況が北接する顔戸南遺跡SD19とよく似ており、またSD12は顔戸南遺跡SD19の延長線上に位置することからも、同様に道路遺構と考えられる。遺構の性格は、すでに「顔戸南遺跡」で指摘されているが、その位置が近年の耕地整理前の条里地割の坪境線にあててくることから、条里の環境を示す遺構と判断される。

SD1は、幅約2mで、断続的に約162mにわたり確認した。約0.3mほど、断面皿状に掘り窪め、そこに粘土混じりの白砂を充填している。白砂は固く締まっていた。また所々に数十cmの木片を含む。掘形底面はあまり滑らかでなく、くぼみが多く見られる。

SD12は、幅約4.5mで、約36mにわたり確認した。遺構の状況は、SD1とほぼ同様である。直交する部分の観察から、埋土がほとんど同じであるので判然としなが、SD12がSD1を切っているように見えた。しかし、遺物の年代に大きな差異がないことから、この切り合いは構築順序を表す可能性が高い。

遺物はSD1からは土師器が1205点、古代の須恵器が20点、その他の須恵器が18点、灰釉系陶器が12点、その他の中近世陶器が1点、木器が29点出土した。直上にVII期以降の大畦畔(SM55)があるため、灰釉系陶器などは混入と考えられる。SD12からは土師器97点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が20点、灰釉系陶器が1点、木器が17点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からV-2期と考えられる。

C9地点の溝群 (図版453)

C9地点調査区北約半分では、複数回にわたり掘削された溝が確認できた。溝南側には掘立柱建物

跡があり、それらの建物との関係も含め溝の変遷の概略は次のとおりである。

第1段階 SD133・SD132。切り合いからSD133はSD132よりも古い。時期は不明であるが、検出状況からSB61・SB62・NR77と同時期と考えられることから、IV期の可能性が高い。

第2段階 SD126古・SD131。正確な位置を把握できなかったがSD126はこの段階では南岸はもう少し北にあった。SH33～SH37はこの段階に属する。V-2～3期である。

第3段階 SD126新。

第4段階 SD130。VIまたはVII期に属する。南側は水田化している。

SD126 (図版453・454、写真図版247) C9地点 EJ06～EO05

大きく2段階に分けて確認できた。それぞれ新・古と呼称し述べる。SD126新は幅約3mの素掘溝で、約30mにわたり確認した。やや蛇行しながら西から東に流れている。溝の性格は不明である。SD126古は幅推定約3mの素掘溝で、約30mにわたり確認した。調査時の所見によると、南岸は図版453に示した完掘状況よりも北側、網で示したあたりにあった。この段階には溝の南側にSH33～SH37が相次いで建てられている。SD126は、建物群廃絶後南に流れを広げたと考えられる。またNR77を切る。溝の性格は不明であるが、建物群のすぐ北側にあることからそれらと密接な関係を有していたと思われる。

遺物は新古あわせて土師器が259点、古代の須恵器蓋杯が543点、その他の須恵器が865点、灰釉陶器が5点、灰釉系陶器が8点、その他の中近世陶器が1点、木器が7点、石器が2点出土した。本遺構は、遺物や周囲の状況からV期と考えられる。

SD129 (図版453) C9地点 EN07～EN08

幅約0.7mの素掘溝で、約2.2mにわたり確認した。南はSK91に切られる。溝の性格は不明である。

遺物は土師器が90点、古代の須恵器蓋杯が26点、その他の須恵器70点、灰釉系陶器が2点出土した。本遺構の時期は、遺物や周囲の状況からV期と考えられる。

SD131 (図版453・454) C9地点 EJ06～EL05

幅約1.8mの素掘溝で、約7mにわたり確認した。西と北は調査区外である。溝の性格は不明である。

遺物は土師器が8点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が5点、灰釉系陶器が2点、木器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物や周囲の状況からV期と考えられる。

SD211 (図版226) D7地点 CA84～CB83

幅4.5m、深さ0.3mで、長さ4.5mにわたり検出した。ほぼ南北方向に流れる溝で、両端は試掘トレンチなどで破壊されている。断面は浅い皿状を呈するが、東側は浅く西端付近はやや深い。埋土は上下2層に分かれる粘土である。

遺物は出土していないが、検出状況から本遺構の時期はV期と考えられる。

SD212・214 (図版226) D7地点 BT82～CA83

この2本の溝は試掘トレンチを挟んでいるが同一のものと思われる。この試掘坑を含めた全長は8m、幅0.9m、深さ0.2mに達する。BT82付近で2本が合流し、やがてSD213に切られる。断面は浅い皿状を呈し、埋土は1～2層である。

検出状況から本遺構の時期はV期と考えられる。

第6項 自然流路

NR37 (図版227) A16地点 DK57~DP58

幅約6m、深さ0.5mで、長さ約25mにわたり検出した。西端は調査区外に延び、東~南側はNR38、SD60により切られている。水流の方向は東から西であり、流路内にはSW51・53・54がある。SW51は盛土を有する堤的な施設で、SW53・54は簡易な水制遺構でいずれも北西方向に導水している。つまり、当時の本流はSD60などの下に位置しており、SW51によりNR37に導水されていた可能性が考えられる。

遺物は弥生土器が8点、土師器が154点、古代の須恵器蓋杯が25点、その他の須恵器が51点、灰釉陶器が10点、灰釉系陶器が72点、その他の中近世陶器が4点、木器が118点出土した。本遺構の時期はV期と考えられる。

NR78 (図版228) C10地点 LO13~LP15

幅7m、深さ0.3m、長さ9mにわたり検出したが、肩の一部分のみの検出であるので幅は不明である。水流の方向は不明であるが、地形からみると南東から北西への流れが想定できる。断面形は皿状を呈し、深さはほぼ一定である。埋土は上下2層に分かれ砂粒を多く含む。

本遺構の時期はV期と考えられる。

NR95 (図版229、写真図版130) D6地点

幅約5.5m、深さ約1.0m、長約33mにわたり検出したが、肩の一部分のみの検出であるので幅は不明である。水流の方向は大きく東から西である。断面形は上方が皿状、下方が逆台形を呈し、肩が垂直気味に立ち上がることから、護岸施設が存在していた可能性がある。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が1点、土師器が813点、古代の須恵器蓋杯が19点、その他の須恵器が223点、灰釉系陶器が1点、陶丸が1点、木器が239点、石器が1点出土した。本遺構の時期はV期と考えられる。

NR106 (図版506・507、写真図版130) D7地点 CC77~CC81

幅20m、深さ1.4m、長さ8mにわたり検出したが、北岸は調査区外に延びているため全幅は不明である。また、最上層は南岸を乗り越え地上に薄くあふれ出ている。埋土は上下2層に分けられ、上層はVI期、下層はV期と考えられる。CB81~CC81付近に南岸が確認でき、そこにSW87が、やや離れてSW88が構築されている。SW87・88はV期に属し、その近辺から馬形をはじめとした木製祭祀具が数多く出土した。

遺物は土師器が729点、古代の須恵器蓋杯が173点、その他の須恵器が334点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器866点、中世土器が1点、その他の中近世土器が15点出土した。

NR113 (図版231) D7地点 CC77~CC81

幅4m、深さ0.3m、長さ14mにわたり検出した。下層には砂礫が堆積し、上層は粘土が主体である。流路底面には長さ6m以上の丸太材が流水方向に平行して出土したが、杭などにより固定されてはいなかった。

遺物は土師器が39点、その他の須恵器が1点、木器が17点出土した。出土遺物から、本遺構の時期はV期と考えられる。

第7項 水制遺構

SW51 (図版233~235、写真図版131・132) A16地点 DN58~DO58

NR37内に位置し、分岐する溝などは不明である。

検出時は粘土が帯状にみえ、その北側に砂質シルトが、南側に砂礫層があり、断面観察でカマボコ状に粘土の盛り上がりを確認できたため盛土と認識した。盛土部分を残して掘削を開始すると、盛土の芯と思われる横木や杭が幾つも検出できた。そのため、この盛土は水流により少しずつ抉られていったと解釈した。

盛土は第1次盛土と第2次盛土に分かれる。第1次盛土は検出した長さが約8m、敷幅約2.1m、高さ約0.4mで、粘土を主体とする。第2次盛土も粘土を主体とし、両者の間には砂礫のラミナ層が確認できた。盛土の中央には長さ約2.5mと3.4mの横木が2本据えられており、その周りに横木や雑木が多く検出できた。また、盛土内からは曲物底板などの転用材も多く出土したが、これらは水平のものや垂直に立っているものなど様々であった。杭は横木などと比べて数が少なく、基本的に横木の補助杭のみがみられた。

遺物は土師器が2点、古代の須恵器蓋杯が2点、木器が132点出土した。盛土は流路埋土により埋没しているため自然に廃棄されたといえ、その時期は第1次盛土基底部より出土したほぼ完形の須恵器杯身よりV期といえる。

SW53 (図版232、写真図版133) A16地点 DM57

NR37内に位置し、分岐する溝などは不明である。

SW53の規模は長さ約3mで、杭列の状況から川表側は杭列の南側と思われる。

この遺構は基本的に直立杭と横木から成る。直立杭は5~10本程度検出でき、いずれも横木に平行して直線的に打ち込まれていた。横木は直径3cm程度のものが数本確認できたにすぎない。平面掘削では盛土の存在が確認できなかったが、土層観察の結果、杭と横木を中心として砂と粘土から成る盛土が確認できた。また、杭列の北側において構造材A・Bの集積層も確認できた。

遺物は土師器が15点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が3点、木器が69点出土した。盛土は流路埋土により埋没しているため自然に廃棄されたといえ、その時期は土層観察用畦の盛土内の出土遺物から考えてV期といえる。

SW54 (図版236、写真図版133) A16地点 DL58

NR39内に位置する。地山が溝状に落ち込んでいる箇所に、落ち込みの方向に直交するように杭列と板材が打ち込まれていたため、水制遺構と判断した。

SW54の規模は長さ約5mであり、盛土は確認できなかった。

内部構造は、直立杭と構造材Bから成る。直立杭が東西方向にランダムに打ち込まれ、その南側に水平方向に設置された構造材Bの集積がみられた。溝と杭列の関係から川表方向は北と想定でき、全体的に極めて簡易な水制遺構であるといえる。なお、杭列の東端では人形代が出土したが、付近に焼土や炭化物集積は確認できなかったので、祭祀的様相は不明である。

遺物は木器が40点出土した。遺構の時期は形代の出土から考えてV期といえる。

SW87 (図版238、写真図版134) D7地点 CB81~CC80

NR106内に位置し、北側をSD210に切られているため、分岐する溝などの有無は不明である。NR106

は幅6m以上の流路で断面形は浅い皿状を呈し、水は東から西へと流れている。水制遺構の川表方向には粘土が厚く堆積していたことから、水制遺構により一定期間止水状態であったと思われる。

SW87は東西約2.5m、南北約6.0mであり、盛土の有無は不明である。

内部構造には杭などの土木材を多用しており、横木の川裏方向に直立杭を打ち、川表方向に斜杭を約20cm間隔に並べる構造で、形態的には片合掌型といえる。また、土木材とともに楕円形曲物底板や整弁、建築部材なども多く転用されていた。

この遺構付近では多数の須恵器とともに人形代、馬形代、刀形代などが出土しており、周辺での祭祀行為が想定される。

遺物は土師器が123点、古代の須恵器蓋杯が9点、その他の須恵器が36点、灰釉系陶器が8点、その他の中近世陶器が1点、木器が279点出土した。遺構の時期は出土遺物からV期である。

SW88 (図版237、写真図版135) D7地点 CB79

NR106内に位置し、調査区西壁際で検出したために分岐する溝などの有無は不明である。NR106は幅6m以上の流路で断面形は浅い皿状を呈し、水は東から西へと流れている。

SW88は東西約2.0m、南北約4.5mであり、盛土の有無は不明である。

内部構造は横木が多く、杭は極端に少ない。横木は南北方向に据えられたものの上に、東西方向のものがかつており、補助杭で固定されていた。また、横木には建築部材が転用されており、これらとともに馬形代などが出土した。

この遺構付近では多数の須恵器とともに馬形代などが出土しており、SW87と同様に周辺での祭祀行為が想定される。

遺物は土師器が74点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が4点、灰釉系陶器が1点、その他の中近世陶器が1点出土した。なお、遺構の時期は出土遺物からV期である。

第6節 VI期(中世前期)の遺構

VI期の遺構として、掘立柱建物跡33棟、柱列跡25基、ビット1基、土坑10基、井戸3基、水田跡4地点、溝56条、自然流路10条、木製遺構4基を以下に報告する。

第1項 掘立柱建物跡

SH3 (図版241・写真図版136) A4地点 FQ56~FR57

桁行4間(約5.4m)、梁行3間(約3.65m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P178では掘形底面に木片が置かれており、礎板の役目を果たしていたと考えられる。

遺物はP180・P185・P188から土師器が6点出土した。すべて土師器である。本遺構の時期は、検出状況や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH4 (図版241) A4地点 FP56~FP57

桁行1間以上、梁行3間(約3.7m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P208とP209には柱根が残存していた。P208の柱は、掘形底面よりも深い位置に柱下端部があった。

遺物はP207から古代の須恵器蓋杯1点、P212から土師器2点が出土している。本遺構の時期は、検出状況や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

屋敷地内の掘立柱建物跡(附図4・6) A7~A10地点にかけて溝(SD18)に囲まれた方形の屋敷地が見つかった。屋敷地の中にはVI-1期~VII-1期にかけて、SH8~SH13の6棟の掘立柱建物が復原できた。建物跡は、切り合いと柱根の残存状況などから、①SH11・SH12(VI-1~2期)→②SH9・SH10(VI-2期)→③SH8(VII期)で、SH13は時期不明である(なお屋敷地及びその周辺の建物をはじめとする遺構の変遷についての詳細は、第8章第8節参照)。このうち、屋敷地に属する建物は、①・②である。このほか、A8地点では建物として捉えきれなかったビットが数多くあるが、現状では建物としてまとめられたのは6棟である。

SH9 (図版242・243、写真図版138) A8地点 EO47~EQ49

桁行6間(約14.9m)、梁行2間(約4.6m)以上の総柱建物で、東西に主軸をとる。建物は平成10年度試掘トレンチによって北側が不明であり、南側2間分を確認したのみであるが、同トレンチの北壁に梁行方向で柱筋の通る柱穴が見つかった。柱穴は一連のものと考えられることから、建物跡は梁行4間で、中央2間(柱間約2.5m)、南北両側1間ずつ(柱間各約2.1m)に復原ができる。よって、SH9は桁行6間、梁行4間(約9.2m)以上の総柱建物であったと考えられる。柱掘形は円形で、P662~P669・P673には柱根が残存していた。SH9は、検出状況や柱根の残存状況などからSH11の建て替えと考えられる。屋敷地内においては、主屋的な位置づけとなる。

遺物はP658・P660~P677から出土した。灰釉系陶器をP665・P666を除く全てで、土師器をP661・P663~P672・P674・P675で、陶器をP665で、青磁をP664で、中世土師器小皿をP664・P672・P675で、そして灰釉系陶器の蓋をP677で確認した。その点数は土師器が57点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が98点、中国磁器が1点である。時期的には、VI-1期~VII-1期までの遺物が入るが、出土状況からVII-1期のものは後の混入と判断できる。最もまとまって出土した時期は、VI-2期である。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI-2期と考えられる。廃絶については同時期内と推測さ

れる。

SH10 (図版244、写真図版138) A 8 地点 EO49~EP50

桁行2間(約4.4m)、梁行2間(約4.1m)の南北棟で、東側、北側にそれぞれ1間×2間の張り出しを持つ。柱掘形は円形で、P863・P864・P865には柱根が残存していた。屋敷地においては、主屋的なSH11に対し、副屋的な位置づけとなる。

遺物はP854・P856・P858・P860・P862~P865から出土した。灰釉系陶器をP854以外の全てで、土師器をP856・P865で、陶器をP854で確認した。その点数は土師器が3点、灰釉系陶器が12点、その他の中近世陶器が1点である。時期的には、VI-1期~VI-2期までである。本遺構は、柱筋が通るSH11の理解と遺物からVI-1期に建てられ、VI-2期にSH12に建て替えられたと考えられる。

SH11 (図版245・246、写真図版138) A 8 地点 EN47~EQ49

桁行6間(約15.2m)、梁行2間(約4.2m)以上の総柱建物で、東西に主軸をとる。建物はSH9と同様に平成10年度試掘トレンチの影響で北側が不明であり、梁行2間分の確認である。しかしSH11はSH9の前身建物と考えられ、また桁行の規模も同様であることなどから、梁行4間(約8.4m)以上であったと推測される。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。P661からは、灰釉系陶器(VI-1期)がまとめて出土している。屋敷地においては、主屋的な位置づけとなる。

遺物はP678・P680・P682~P689・P691・P694~P696から出土した。灰釉系陶器を全てで、土師器をP695以外の全てで、須恵器をP685で、陶器をP678・P681で、白磁をP681・P691で確認した。その点数は土師器が42点、灰釉系陶器69点、中国磁器5点、中世土師器17点、その他の中近世陶器7点である。時期的には、VI-1期~VII-1期が入るが、出土状況からVII-1期は混入と考えられる。P661の灰釉系陶器はSH9への建て替えの際に埋納されたと考えられる。本遺構は、検出状況や遺物の出土状況、屋敷地全体の理解(第8章第8節参照)からVI-1期に建てられVI-2期にSH9に建て替えられたと考えられる。

SH12 (図版247・248、写真図版138) A 8 地点 EN49~EO50

桁行2間(約4.4m)、梁行2間(約3.6m)の総柱建物で、南北に主軸をとり、西側、北側に1間×2間の張り出しを持つ。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。屋敷地においては柱筋の通るSH9の副屋的な位置づけとなる。

遺物はP870~P873・P875~P882・P884から出土した。灰釉系陶器を全てで、土師器をP872・P875・P876・P879・P882で、青磁をP872・P873で確認した。その点数は土師器が9点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が35点、中国磁器が3点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が3点である。時期的には、VI-1期~VII-1期が入るが、出土状況からVII-1期は混入と考えられる。本遺構は、SH9と同様に、検出状況や遺物からVI-2期に建てられ、同期内に廃絶したと考えられる。

SH13 (図版248) A 8 地点 EP48~EQ49

桁行3間(約5.35m)、梁行1間(約2.5m)の東西棟である。柱掘形は円形で柱根は残存していない。

遺物はP643・P647・P648から出土した。灰釉系陶器をP647・P648で、土師器をP643・P648で確認した。その点数は土師器が5点、灰釉系陶器が7点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が2点である。遺物はVI-1期であるが、同時期にはSH11もしくはSH9が同じ場所に建っている。

屋敷の主屋であるSH11もしくはSH9の前に建っていたとは考えがたいことから、SH9廃絶後の建物であると推測される。周囲の状況からVI-2期と思われるが、VII-1期に下る可能性もある。

SH14 (図版249、写真図版136) A14地点 ED50~EE50

東西3間(約5.85m)、南北1間(約1.5m)分確認したが、南側は調査区外となるため、まだ延びる可能性があるのであれば総柱建物となる。柱掘形は円形で、P995には柱根が残存していた。

遺物はP991~P994で出土した。土師器・灰釉系陶器を全てで、須恵器をP991で確認した。その点数は土師器が22点、古代の須恵器蓋杯11点、灰釉系陶器8点、中世土師器が1点である。本遺構の時期は、遺物からVI-1期と考えられる。

SH15 (図版251・252) A10地点 FJ54~FK55

桁行6間(約6.35m)、梁行4間(約5.5m)の東西棟である。東端については調査区外であり、まだ延びる可能性がある。北西隅に1間分の張り出しがある。桁行は北側、南側ともに柱間が一定しない。柱掘形は円形で、P1089~P1092・P1094・P1095・P1097・P1099~P1102・P1104に柱根が残存していた。

遺物はP1094・P1095から土師器が2点、P1090からその他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI期と考えられる。

SH16 (図版250) A10地点 FH54~FI54

桁行3間(約4.2m)、梁行2間(約4.5m)の東西棟である。北桁行の中央間の柱位置がやや不自然である。柱掘形は円形で、P1109、P1112~P1115には柱根が残存していた。

遺物は、P1108・P1112から出土した。灰釉系陶器・土師器を確認した。その点数は土師器が10点、その他の須恵器が2点である。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI期と考えられる。

SH17 (図版252・253、写真図版139) A10地点 FH55~FH56

桁行4間(約6.6m)、梁行3間(約4.1m)の南北棟である。柱掘形は円形で、P1137・P1138・P1140~P1142・P1145~P1147には柱根が残存していた。P1148は柱根、掘形がなかったが、柱位置に扁平な石が置かれていた。

遺物は、P1137・P1140~P1144・P1146・P1147・P1149・P1150・P1248から出土した。灰釉系陶器をP1147・P1150で、土師器をP1137・P1141~P1144・P1147・P1149・P1150で、須恵器をP1140・P1142・P1143・P1146・P1149で、灰釉陶器をP1147・P1150で確認した。その点数は土師器が22点、その他の須恵器が11点、灰釉系陶器が2点である。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI-2期と考えられる。

SH18 (図版254・256、写真図版139) A10地点 FH57~FI57

桁行4間(約6.4m)、梁行3間(約4.7m)の南北棟である。建物の中央付近に約3.0mの柱間がある。屋内棟持柱になると考えられる。柱掘形は円形で、P1163・P1165・P1167~P1172・P1175~P1176には柱根が残存していた。

遺物は、P1170・P1171・P1175・P1263から出土した。灰釉系陶器をP1170・P1263で、土師器をP1171・P1175・P1263で、須恵器をP1175・P1263で、陶器をP1263で確認した。その点数は土師器が3点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器7点、その他の中世陶器が1点である。南西隅柱P1170の掘形からは、灰釉系陶器碗が伏せた状態で見つかり埋納してあったと考えられる。本遺構の

時期は、P1170の埋納灰軸系陶器からVI-1期と考えられる。

SH18のほぼ同じ位置にSH19がある。SH18のピットがSH19のそれを切っていることから、SH18が新しいと考えられる。両者はほぼ同じ位置、同じ規模で建てられていることから、SH18はSH19の立替と判断できる。

SH18の南西側には軸をそろえてSA21・SA22・SA23がある。SH18に対する塙の可能性があり、そうであるとする建物の正面は南西を向いていたと判断できる。

SH19 (図版255・256) A10地点 FH57~FI57

桁行3間(約6.3m)、梁行3間もしくは2間(約4.4m)の南北棟である。同じ位置にはほぼ同じ規模で立つことから、SH18と密接な関係があると考えられ、切り合いからSH19はSH18の前進建物であると判断できる。しかし、構造については相違があるようで、桁行がSH18では4間であるのに対し北から2番目の柱を欠く3間となっている。また梁行についても南側ではSH18の柱(P1168・P1169)以外の柱穴が見つかっておらず、また北側でもSH18の柱(P1175・P1176)の位置に柱穴が見つかっていない。北桁行では中央にP1177が見つかっており、2間になる可能性もあるが、南側では対の位置に柱が確認できなかった。現状ではP1177を活かして梁行2間とするか、あるいはSH18のP1168・P1169・P1175・P1176を、SH19から使用し続けたと考え梁行3間とするか、判断はつかない。なおSH19もSH18同様、屋内棟持ち柱建物になると考えられる。柱掘形は円形で、P1177・P1179・P1180・P1181・P1183・P1297・P1354には柱根が残存していた。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、SH18との関係からVI-1期と考えられる。

SH20 (図版257) A10地点 FH59~FJ60

桁行6間(約8.1m)、梁行2間(約3.5m)の東西棟である。北桁行の中央間で、小さいピットが両側の柱寄りに1基ずつあり、性格は不明であるが興味深い構造となる。なお西南隅と東南隅柱が見つからないが、調査区の端であることから試掘トレンチの影響で発見できなかったと考えられる。柱掘形は円形で、P1201・P1203~P1205・P1207~P1210・P1213には柱根が残存していた。

遺物は、P1200・P1206・P1210・P1213・P1214から出土した。灰軸系陶器をP1206・P1213で、土師器をP1200・P1210で、須恵器をP1200で確認した。その点数は土師器が13点、その他の須恵器が1点、灰軸系陶器が4点、その他の中近世陶器が1点である。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI期と考えられる。

SH21 (図版258・259、写真図版140) A10地点 FG58~FH60

桁行8間以上(約10.9m以上)、梁行2間(約3.35m)の長大な南北棟である。柱掘形は円形で全てに柱根が残存していた。

遺物は、P1232~P1236・P1238・P1240・P1241・P1243・P1249・P1250から出土した。灰軸系陶器をP1233・P1235・P1236・P1238・P1240・P1250で、土師器を全てで、須恵器をP1233・P1236・P1249・P1250で確認した。その点数は土師器が17点、その他の須恵器が4点、灰軸系陶器が12点である。本遺構の時期は、検出や遺物からVI期と考えられる。

SH22 (図版259・260) A10地点 FE55~FG57

桁行4間(8.4m)、梁行3間(8.3m)の総柱建物である。柱掘形は円形で、柱根が残存していなかったが、P1265・P1273・P1280で柱痕跡を確認した。

遺物はP1264～P1266・P1272から灰釉系陶器が14点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI-2期と考えられる。

SH25 (図版261) A10地点 FJ56～FK56

桁行3間以上(約3.6m以上)、梁行3間(約4.3m)の東西棟と考えられる。東側は調査区外であり、桁行方向の規模は不明である。柱掘形は円形で、P1131・P1132は柱根が残存しており、P1134・P1135で柱痕跡を確認した。

遺物はP1135からその他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物は出土していないが建物の主軸方向がSH15やSH16などの同様であることから、VI期と考えられる。

SH26 (図版262) A10地点 FF60～FG60

桁行5間(約5.9m)、梁行1間以上(約1.35m以上)の東西棟である。南側は試掘トレンチの影響で不明である。柱掘形は円形で、柱根は残存していない。

遺物はP1252～P1255出土した。灰釉系陶器をP1252で、土師器をP1253～P1255で確認した。その点数は土師器が4点、灰釉系陶器が1点である。本遺構の時期は、遺物からVI期と考えられる。

SH27 (図版263) B2地点 EH66～EI67

桁行3間(約7.5m)、梁行2間(約4.2m)の総柱建物で、東西に主軸をとる。柱掘形は円形である。ほぼ同じ位置にSH28があるが、前後関係は不明である。

遺物はP1547・P1555から土師器が1点、灰釉系陶器1点出土した。本遺構の時期は、遺物や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH28 (図版264) B2地点 EH66～ES67

桁行3間(約9.6m)、梁行2間(約6.15m)の総柱建物で、東西に主軸をとる。柱掘形は円形である。南側中央間に1間分の張り出しがある。また建物の東西と南辺を囲うようにSD74が、建物とSD74との間に2間の塀と考えられる柱列が東西にある。ほぼ同じ位置にSH27があるが、前後関係は不明である。

遺物はP1564・P1568・P1569・P1572・P1573から土師器が3点、灰釉系陶器が9点、P1563・P1564・P1567・P1572・P1573から木製品が7点出土した。本遺構の時期は、遺物や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH30 (図版265、写真図版142) C2地点 FH88～FI88

桁行3間(約3.45m)、梁行1間(約2.8m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P1812・P1813・P1817・P1818には柱根が残存しており、P1815では柱痕跡を確認した。検出面直上では炭層が広がり、木材や灰釉系陶器が出土したが、検出状況からSH30に関係すると考えられる。またSH30のすぐ北側で検出したP1831には灰釉系陶器小皿が埋納したような状況で出土している。

遺物はP1812から土師器が2点、P1811・P1812・P1813・P1816・P1817・P1818から木製品が9点出土した。本遺構の時期は、検出面直上で検出した炭層出土の灰釉系陶器などからVI期と考えられる。

D1地点の掘立柱建物群 (図版266)

D1地点西側では多くのピットを検出したが、それらは埋土の状況や並びから掘立柱建物跡6棟、柱列跡19基に認識できた。これらは大きく次の4群にまとめることができる。第1群はSH38を中心

にした一群で、SH38を二重に囲むSA35・SA36、南西に建つSH39、位置からSH38と密接に関わりと考えられるSH43、建物の可能性のあるSA37からなる。第2群はSH40を中心にした一群で、SH40を部分的に囲むSA41・SA42・SA56とSH40の南西にあるSH41・SH42からなる。第3群と第4群はいずれも南北方向の長い柱列であるが、柱穴の状況からSA44・SA50からなる第3群と、それ以外の柱列からなる第4群に分けられる。

それぞれの先後関係は、第2群のSA42の柱穴が第1群のSH38の柱穴を切っていることから、第1群→第2群となることがわかる。それらと第3群・第4群との関係は、切り合いなどからは不明であるが、第3群・第4群が水田耕作に関わる施設の可能性が考えられることから、第1群・第2群の廃絶後、この場所が水田化した後の遺構と推測することができる。したがって、第1群→第2群→第3群・第4群という先後関係が考えられる。本節ではVI期に属する第1群と第2群について述べる。

次に各群の性格であるが、第3群・第4群については上記したとおりである。第1群については中心となるSH38がSA35・SA36（一本柱塼と考えられる）によって二重に囲われているが、このような形態は神社建築に見られる。現状では第1群が神社建築であったかどうかは不明であるが、一つの可能性として考えておきたい。第2群は、第1群の建物に比べると、規模や柱穴の大きさが明らかに見劣りする。しかし、建物配置はよく似ており、第1群から性格を引き継いだ可能性はある。

SH38 (図版267・268、写真図版140) D1地点 CO65~CC66

桁行3間(約7.2m)、梁行3間(約7.2m)の東西棟である。西辺北側1間分がやや間延びしているが、ほぼ正方形の建物である。中央やや南寄りにP3026がある。柱筋には乗らないが位置的に見て建物と密接な間わりのある柱穴と考えられる。柱掘形は円形で、P2487には柱根が残存し、P2489では柱痕跡が確認できた。柱掘形の規模が遺跡全体の中でも比較的大きく、残存していた柱根も直径約30cmと大型である。建物内中央やや北寄りにSH43がある。柱筋が通ることからSH38に伴う可能性が考えられる。SA35・SA36はSH38を囲う塼であると考えられる。建物の全面、東西方向に軸を描いてあるSD147も位置的に見てSH38に伴うと考えられる。P2486、P2487がSA42のP2474、P2475にそれぞれ切られる。

遺物はP2478~P2484・P2486・P2488・P2489から土器が18点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器29点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が1点、P2483・P2485・P2486・P2487・P2488から木製品が11点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH39 (図版269・270、写真図版141) D1地点 CM66~CN69

桁行5間(約12.2m)、梁行2間(約4.75m)の南北棟である。柱掘形は円形で、P2503には柱根が残存し、P2493・P2494・P2495・P2498・P2499・P2502では柱痕跡を確認した。SH39は位置的に見てSH38に伴うと考えられる。P2499、P2501がSH41のP2522、P2644にそれぞれ切られる。またSH39はSK112を切っている。

遺物は全ての柱穴から土師器が11点、灰釉系陶器が37点、中世土師器が2点、P2495・P2496・P2498・P2501・P2502・P2503から木製品が7点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH40 (図版271・272、写真図版141) D1地点 CO67~CQ67

桁行4間(約10.3m)、梁行2間(約4.5m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P2504・P2505・

P2986・P2511・P2512・P2514・P2515には柱根が残存し、P2513では柱痕跡が確認できた。建物の北側約1.9mの位置に東西方向の軸をそろえたSA42が、東側と西側にはそれぞれ2m程の位置に南北方向の軸をそろえたSA41・SA56がある。位置関係や軸がそろうことからSH40に付属する施設と考えられる。また西側にあるSH41・SH42は位置的にみてSH40に関連する建物と判断できる。またSH40は、SK113・SD146・SD147を切っている。

遺物はP2504～P2506・P2509・P2512～P2515から土師器が4点、灰釉系陶器が34点、P2504・P2505・P2511・P2512・P2514・P2986から木製品が6点出土した。本遺構の時期は土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH41（図版273） D1地点CM66～CN69

桁行4間（約8.55m）、梁行1間（約4.05m）の南北棟である。南側1間分の柱間がそれ以北に比較し狭くなっている。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。SH41は、北辺の柱筋がSH38を囲うSA36の南辺に通ることや、SH38に対する位置関係から、SH38に付属する施設と考えられる。ほぼ同じ位置にSH39とSH42があるが、SH39はSH41のP2499・P2501が切っていることから、SH39→SH41であったことがわかる。SH42とは切り合いが確認できず先後関係は不明であるが、同じ位置にあり、両者ともSH40に関連すると考えられることから、建物の規模は違うがどちらかがどちらかの建て替えであると推測される。またSK112を切っている。

遺物はP2518～P2520・P2524・P2525から土師器が3点、灰釉系陶器が8点、P2518から木製品が1点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH42（図版274） D1地点CM67～CN69

桁行3間（約7.4m）、梁行1間（約6.0m）の南北棟である。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。SH42と周囲の建物との関係は、SH40・SH41で述べたとおりである。SK112を切っている。

遺物はP2526～P2528・P2530・P2531・P2533から土師器が1点、灰釉系陶器が6点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が1点、P2526・P2528から木製品が2点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH43（図版275） D1地点CP65

東西1間（約2.5m）、南北1間（約1.8m）の建物である。柱掘形は円形で、南側の2基が大きく、北側は小さい。柱根は残存していなかったが、P2537には柱痕跡が確認できた。位置的に見てSH38に関わる施設の可能性があると考えられる。

遺物はP2536から灰釉系陶器が4点、P2536から木製品が2点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SH44（図版276、写真図版142） D3地点CJ68～CJ69

2間（約3.5m）、2間（約5.1m）の総柱建物で、東西に主軸をとる。北側中央の柱穴を確認していない。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物はP3091・P3092から土師器が2点、灰釉系陶器が2点出土した。本遺構の時期は、土器からVI-2期と考えられる。

D9地点掘立柱建物群（図版277）

D9地点ではピットを多量に検出し、そこから掘立柱建物跡3棟、柱列7基が認識できた。そのう

ちVI期に属するものとしては、掘立柱建物跡3棟と柱列SA61～SA64がある。これらVI期の建物を含むピット群は、北側を流れるNR112と東側に掘削されたSD222に区画された範囲内にあり、井戸(SE2)1基と伴うと考えられる。建物3棟共存していたのではなく、ほぼ同じ場所に建て替えられている。柱穴の切り合いからSH47→SH45→SH46となる。SH47からSH45に建て替えた時に位置を西にずらす、SH45とSH46はほぼ同じ位置にある。同時期のA8地点を中心とする屋敷地、D1地点の掘立柱建物群とは、建物の規模やその周囲の遺構の状況から性格を異にすると考えられる。

SH45 (図版278) D9地点 AR83～AT84

桁行5間(約9.25m)、梁行3間(約4.65m)の東西棟である。北東隅柱はNR112によって破壊され不明である。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。P3338がSH47のP3364を切り、P3340・P3341・P3342・P3344がSH46の柱穴に切られる。またP3337がSK124を切る。

遺物はP3336・P3342・P3345～P3347から土師器が1点、灰釉系陶器が6点出土した。本遺構の時期は、土器からVI-1期と考えられる。

SH46 (図版279) D9地点 AR83～AT84

桁行5間(約9.75m)、梁行3間(約4.3m)の東西棟である。西側の中央2基分の柱穴は確認できなかったが、南北辺の延長上に柱穴がないことやSH45を参考に桁行5間と考えた。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。P3354がSH47のP3364を、P3356・P3357・P3358・P3360がSH46の柱穴を切る。またP3352がSK124を切る。

遺物はP3349・P3350・P3356・P3358から土師器が1点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が3点、中世土師器が1点出土した。本遺構の時期は、土器からVI-1期と考えられる。

SH47 (図版280) D9地点 AS83～BA84

桁行4間(約9.1m)、梁行1間(約3.6m)の東西棟である。柱掘形は円形で、P3369には柱根が残存していた。P3362がSH45のP3338、SH46のP3354に切られている。

遺物はP3362・P3364・P3366・P3367・P3369から土師器が6点、灰釉系陶器が4点、その他の中近世陶器が1点、P3362・P3363・P3367から木製品が5点出土した。本遺構の時期は、土器からVI-1期と考えられる。

SH48 (図版281) E1地点 DE88～DF88

東西1間(約2.3m)、南北1間(約2.05m)で、南辺のみ中央に柱穴をもつ。柱掘形は円形で、全てに柱根が残存していた。P4002がSD231の埋土に掘り込まれている。

遺物はP4000～P4003から木器が5点出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からVI期と考えられる。

SH49 (図版282、写真図版142) E2地点 BN91～BP91

桁行4間(約6.4m)、梁行1間(約3.9m)の東西棟である。北辺と西辺は調査区外である。南辺と東辺は何れも柱列の延長上にそれ以上柱穴が続かないことから判断した。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物はP4033・P4035・P4036から土師器が4点、灰釉系陶器が1点、P4035から木製品が1点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI期と考えられる。

第2項 柱列跡

SA4（図版289） A4地点FS57

2間（約2.85m）の柱列跡である。南側に祝乱があるため不明であるが、南に延びる建物の北側柱になる可能性もある。柱掘形は円形で、全てに柱根が残存していた。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、柱根が残存している例はVI期以降の建物に多いことから、VI期に属すると判断した。

A7地点の柱列（図版283）

A7地点におけるVI期の柱列跡としては、SA7～SA11までの5基が見つかった。いずれもSD18に囲まれた屋敷地に属する施設である。

SA7（図版283） A7地点ES42～ES43

3間（約6.55m）柱列である。屋敷地の区画溝SD18と約4m南に平行して掘られたSD19との間に位置する。柱掘形は円形で、P457・P458・P460には柱根が残存していた。

遺物はP457・P459から灰釉系陶器が2点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI期と考えられる。

SA8（図版283） A7地点ER42～ET42

北側2間、東で南に1間分曲がる柱列跡である。北辺はSA11と軸をそろえ、SA9・SA10とやや南北に位置はずれるが軸をそろえる。その位置関係から屋敷の中心部を囲う塚と考えられる。東辺はまだ南に延びる可能性がある。柱掘形は円形である。

遺物はP471から縄文土器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況や周囲の遺構の状況からVI期と考えられる。

SA10（図版283・284） A7地点EO43～EQ43

4間（約9.8m）柱列跡である。性格はSA8と同様であろう。柱掘形は円形で、P498では柱根を、P496・P497では柱痕跡を確認した。

遺物はP496・P497・P499から灰釉系陶器が5点、土師器が20点、P498からその他の中近世陶器が1点出土した。本遺構の時期は、P498の常滑の大甕が12世紀後半のものであり、位置関係から屋敷に伴うと考えられるので、主屋建て替え後のVI-2期に属すると判断できる。

SA11（図版283） A7地点ER43

1間（約0.95m）柱列跡である。柱掘形は円形で、P473では柱根を、P472では柱痕跡を確認した。SA11はSA8の延長線上にあり、西側SA10の延長線上には同じ1間のSA9がある。

遺物はP473から土師器が3点出土した。本遺構の時期は、位置関係からSA8と同様にVI-2期と考えられる。

A8地点の柱列（図版285）

A8地点におけるVI期の柱列跡は、SA12～SA17までの6基が見つかった。このうち、主軸の方向などからSA12・SA16はSD18に囲まれた屋敷地に属する施設と考えられる。それ以外については不明である。

SA12（図版285） A8地点FB48～FB49

3間（約5.45m）の柱列跡である。柱掘形は円形で、P560には柱根が残存していた。

遺物はP559から土師器が1点出土した。本遺構の時期は、位置関係や主軸方向から屋敷地に付属すると思われ、VI-2期と考えられる。

SA14 (図版285) A8地点 EN49~EO48

南側2間以上(約7m以上)、東で北に直角に曲がり2間以上(約5m以上)続く柱列跡である。柱掘形は円形で、P651・P654には柱根が残存していた。

遺物はP653からその他の中近世陶器が1点出土した。本遺構の時期は、屋敷地の主屋であるSH9(SH11)と重なるという位置関係から、屋敷廃絶後と考えられる。本節(VI期)で説明するが、VII期に下る可能性もある。

SA17 (図版285) A8地点 EN48~EN50

4間(約8.8m)の柱列跡である。柱掘形は円形で、P991には柱根が残存していた。

遺物はP655~P657から灰釉系陶器が46点、P655~P657から土師器が12点、P655・P656から中世土師器が4点出土した。本遺構の時期は、位置関係から屋敷廃絶後と考えられる。SA14と同様に、本節(VI期)で説明しているが、VII期に下る可能性もある。

SA18 (図版287) A14地点 ED48~EF49

東西5間(約9.75m)、東西両端から北に直角に2間分(約3.7m)延びるコ字形の柱列跡である。柱掘形は円形である。

遺物はP970・P971から灰釉系陶器が1点、土師器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物からVI-2期と考えられる。

SA19 (図版287) A14地点 ED49~EE49

3間(約6.0m)の柱列跡である。柱掘形は円形である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況や周囲の状況からVI期と考えられる。

SA20 (図版290) A14地点 EC50~EE50

6間(約10.25m)の柱列跡で、SH14に重なる位置にある。柱掘形は円形である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出状況や周囲の状況からVI期と考えられる。

SA21~SA23 (図版288・289) A10地点東側で検出したVI期の柱列跡で、位置関係からSH18(SH19)に付属する可能性が高い。SA21がSH18から約2.6m離れて桁行方向に平行に、SA22・SA23がさらに約4m離れて南北方向に並列して存在する。

SA21 (図版288) A10地点 FH57~FH58

3間(約4.7m)の柱列跡である。柱掘形は円形で、P1220・P1221には柱痕跡が確認できた。

遺物はP1218から土師器1点が出土した。本遺構の時期は、SH18に伴うと思われることから、VI-1期と考えられる。

SA22 (図版288・289) A10地点 FG56~FG57

3間(約4.3m)の柱列跡である。柱掘形は円形で、全てに柱根が残存していた。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、SA21と同様にVI-1期と考えられる。

SA23 (図版288) A10地点 FG58~FG59

3間(約4.8m)の柱列跡である。柱掘形は円形で、P1229には柱根が残存していた。

遺物はP1230から土師器が2点出土した。本遺構の時期は、SA21と同様にVI-1期と考えられる。

SA27（図版290） A16地点 DR59～DR60

4間（約8.6m）の柱列跡である。南側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。柱掘形は円形で、P1464・1465で柱痕跡を確認した。

遺物はP1467から灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI期と考えられる。

D1地点の柱列跡群（図版266）

D1地点西側では多くのピットを検出したが、それらは埋土の状況や並びから掘立柱建物跡6棟、柱列跡19基に認識できた。これらは大きく4群に分けられるが、各群の構成と時期、性格などについては本節第1項に述べたのでそちらを参照されたい。

SA35・SA36（図版291・292） D1地点 CO65～CO67

SA35・SA36はともにSH38を囲むと考えられる柱列跡で、塀と考えられる。SA35は、西側がL字形、南側が逆L字形で、南辺は各1間で中央部分が抜けている。北側については調査区外となるためまだ延びる可能性がある。西側は5間（約13.35m）で南辺1間（約2.2m）、東側は5間（約13.45m）で南辺1間（約2.5m）となる。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

SA36は、コ字状の柱列で南辺中央が抜けている。西側は、西辺1間（約3.25m）、南辺2間（約3.2m）である。東側は、東辺1間（約3.2m）、南辺2間（約3.4m）である。両側ともに南辺隅の柱間が狭い。柱掘形は円形で、P2441・P2442・P2446には柱根は残存していた。

遺物は土器（弥生土器・土師器・灰釉系陶器）がSA35P2329・P2330・P2333・P2336、SA36P2440・P2441・P2443～P2447から、木製品（柱礎板・用途不明品）がSA36P2441・P2442・P2444・P2446から出土した。その点数は弥生土器が1点、土師器が15点、その他の須恵器が10点、灰釉系陶器が48点、その他の中近世陶器2点、木製品が6点である。本遺構の時期は、検出状況からVI期と考えられる。

SA37（図版292） D1地点 CO68～CO69

2間（約4.5m）の柱列跡である。南側にSK110があるが、このため柱列ではなく建物の北辺となる可能性もある。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物は全てのピットから土師器が2点、灰釉系陶器が8点出土した。本遺構の時期は、土器と周囲の状況からVI期と考えられる。

SA41・SA42・SA56（図版293） D1地点 CO66～CR67

位置関係からSH40に関連するもので、それを囲む塀であったと考えられる。SA41はSH40の東側にある南北塀で、約3.2mである。柱穴が一定間隔に掘られているのではなく、軸線上に窪んだ部分が連続しているという状況で、やや特殊な構造を有している。SH40（約2.6m）を挟んで対の位置にあるSA56も同様の構造である。

SA42は、3間（約5.6m）の柱列でSH40の東西軸に沿い、建物の西寄りの位置にある。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかったが、P2475では柱痕跡が確認できた。

遺物は木製品（柱礎板）がP2476から出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からVI期と考えられる。

D9地点柱列群（図版277）

D9地点ではビットを多量に検出し、そこから掘立柱建物跡3棟、柱列7基が認識できた。そのうちVI期に属するものとしては、掘立柱建物跡3棟と柱列SA61～SA64がある。これらVI期の建物群の構成や先後関係については本節第1項を参照されたい。

SA61～SA64 (図版294) D9地点 AR82～BB82

掘立柱建物跡の北側、NR112の南側に4条の柱列跡を確認した。SA61とSA62、SA63とSA64の南北並列の2組に分けられる。いずれも3間で、SA61(約6.7m)、SA62(約6.7m)、SA63(約7.4m)、SA64(約7.5m)である。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。位置関係からD9地点の掘立柱群の北側を区画する施設と考えられる。

遺物はSA61P3298・P3299からその他の中近世陶器が2点、SA62P3304から土師器が2点、SA63P3307から灰釉系陶器が2点、SA64P3311・P3312から灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が1点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVI-1期と考えられる。

第3項 ビット

P2571 (図版295、写真図版135) D1地点 CM64

検出時において、灰釉系陶器碗が内面を上にして出土した。埋土は3層に分かれ、どの層にも炭化物やブロック土がみられたことから、人為的に埋められた後に土器を埋納した可能性が高い。

遺物は土師器が1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

第4項 土坑

SK28 (図版296) A14地点 EG49

平面形は不整形円形で、断面形は擋鉢状である。埋土には植物遺体が多く混じる。

遺物は土師器が3点、灰釉系陶器が30点、その他の須恵器が1点、木製品が4点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI-1期と考えられる。

SK29 (図版296、写真図版144) A14地点 EF50

平面形は円形で、断面形は擋鉢状である。埋土には炭・木片・植物遺体が混じる。

遺物は木製品が7点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVI-1期と考えられる。

SK32 (図版296) A10地点 FC58～FD59

平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

遺物は土師器5点、その他の須恵器が3点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器碗が34点出土した。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI-2期と考えられる。

SK43 (図版297) A10地点 EQ54

平面形は楕円形で、断面形は逆台形であるが、一部2段になっている。埋土は、一部植物遺体が薄く層状にはいる。

遺物は土師器が1点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況からVI期と考えられ、須恵器は混入と判断される。

SK44 (図版297、写真図版144) A15地点 EK53

平面形は不整形で、断面形はゆるい擋鉢状である。

遺物は土師器9点、古代の須恵器蓋杯が5点、灰釉系陶器26点、中国磁器1点、中世土師器1点、その他の中近世陶器が5点、木製品が14点出土した。灰釉系陶器は完形が多い。本遺構の時期は、検出状況や遺物からVI—2期と考えられる。

SK46（図版297、写真図版145） B1地点 EO69～EO70

平面形は不整形形で、断面形は不整形な逆台形である。埋土上層には多数の礫が混じる。

遺物はその他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況からVI期と考えられ、須恵器は混入と判断される。

SK52（図版298～300、写真図版146） A8地点 EQ48～ER50

方形部分（以下、方形土坑と呼称）とその周辺に広がる不整形な部分（以下、不整形土坑と呼称）からなる。方形土坑が不整形土坑を切っていることから2段階に分けられる。

方形土坑は、北辺と西辺、東辺の北側が残っていた。方形土坑の深さは深いところで約0.4mである。土坑の壁に沿って杭が確認でき、また残存状態の良い北辺西側と西辺北側では杭列に沿って横木が確認できた。一方、北辺では断面図（E—E'）の6層が、板状のものが腐食した層と推測される。このことから方形土坑は、壁際に杭が打ち込まれ、その間に壁に沿って横木もしくは板材が差し込まれるという構造であったと考えられる。規模は、検出した杭の位置から東西約3.8m、南北約6.0mに復原できる。埋土は、残存状態の良い北半では、最上層の砂層が全体を覆い、次に粘土層、そして礫混じりの粘土層が確認できた。砂層と粘土層の間には直径1～2cmの小枝が不規則に広がり、一部炭化物が集中する部分も見られた。南半は砂層・粘土層は残っていなかった。杭列は砂層上面から打ち込まれていた。

不整形土坑は、中心部分に方形土坑が造られているため、詳細は不明である。埋土はシルトである。

全体的に見ると、南半は破壊が著しく原形をとどめていない。残存状況の良い北半から埋没に至る過程を復原すると、不整形土坑埋没後、方形土坑が造られる。方形土坑廃絶後は窪地状であったようで、そこを埋める土中（覆土）には木材が投げ込まれていた。ただし、覆土の範囲は方形土坑の範囲からやや南東側にずれており、その部分の方形土坑の残存状況が悪いことから考えると、新たに若干掘り窪め、木材などを廃棄した可能性もある。

SH9のP658・P659、SH11のP679は、不整形土坑上面で検出した。SA13のP607・P1441～P1445は方形土坑上面で検出した。不整形土坑からは土器がほとんど出土していない。以上のことからSK52と周囲の遺構の関係は、まず不整形土坑が存在する。不整形土坑が埋まってからSH11が建てられ、その東側に不整形土坑を切って方形土坑が造成される。SH11と方形土坑は、柱筋が約1.5m離れ主軸がほぼそろっていることから、共存した可能性が高い。SH11と方形土坑の廃絶後、SH9が建てられ、その東側にSA13が造成される。SH11と方形土坑は、柱筋が約1.4m離れ主軸がほぼそろっていることから、これらも共存した可能性が高い。SH11・SH9はVI期の屋敷地の建物であり、SK52もその屋敷内にあることから、屋敷地に密接に関わる施設であると考えられる。

遺物は土師器186点、その他の須恵器が9点、灰釉系陶器碗が4432点、中国磁器が19点、中世土師器が158点、その他の中近世陶器が122点、陶丸が1点、木製品が242点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物からVI—2期に埋没したと考えられる。造成は、SH11より以前となるのでVI—1期になる。

SK107 (図版301、写真図版145) C15地点 ES31~ES32

平面形は南北に長いやや不整形な方形で、断面形は皿状である。埋土中には数cm~数10cmの礫が大量に含まれていた。性格は不明である。

遺物は土師器91点、古代の須恵器蓋杯が15点、その他の須恵器が40点、灰釉陶器17点、灰釉系陶器78点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が2点、木製品が2点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVI-1期と考えられる。

SK109 (図版295、写真図版147) D1地点 CM68

SH39・41・42の西側にある土器埋納遺構であり、P2356に切られる。遺構検出時において灰釉系陶器が潰れた状態で出土した。遺物出土状況1は検出面から約2cm掘削した図であり、灰釉系陶器碗・皿がほぼ水平に出土した。遺物出土状況2は検出面から約15cm掘削した図であり、土師器鍋(伊勢型鍋)が潰れて出土し、その周囲に草本類が燃えたような炭化物の集積が確認できた。遺物出土状況3は遺物出土状況2の土師器鍋の小破片を取り除いた状態である。遺物出土状況4は検出面から約45cm掘削した図であり、灰釉系陶器皿が2枚重なって出土し、周囲に箸が数本据えられていた。遺物出土状況5は検出面から約55cm掘削した図であり、灰釉系陶器皿1枚と碗2個が正位で出土し、その周囲から箸が数本出土した。遺物出土状況6は検出面から約65cm掘削した土坑の底面の状態であり、灰釉系陶器碗1枚が正位で出土した。埋土は粘土が主体であり、焼土や炭化物を多く含むブロック土が幾つか確認できたことから、人為的に埋められたことは間違いない。また、完形の遺物はいずれも内面を上にして出土し、箸もほぼ水平に出土していることから、これらの遺物は廃棄されたものでなく人為的に置いたものであるといえることから、この遺構を土器埋納遺構と判断した。

遺物は土師器が8点、灰釉系陶器41点、中世土師器が5点、その他の中近世陶器が2点、木製品が30点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVI-1期と考えられる。

SK115 (図版302) D1地点 BD72CN67~CO68

南北方向の長方形土坑で、断面形は皿状である。SA35・SA39に切られる。性格は不明であるが、後述するように位置関係からSH38を中心とした建物群と関係があると考えられる。

遺物は土師器が51点、その他の須恵器が4点、灰釉系陶器が159点、中国磁器が3点、中世土師器が3点、その他の中近世陶器が7点、鞆羽口が1点、木製品が1点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVI-1期と考えられる。上述したようにSH38を囲む堺SA35に切られるが、長軸の方向はSH38などと同じであり、遺物にもそれほど時期差がない。これらのことと、その位置などからSH38を中心とした建物群の造営に関わって形成された土坑であった可能性が考えられる。

第5項 井戸

SE1 (図版303、写真図版148・149) A8地点 ET48

径約2.3m、深さ約0.9mの素掘井戸である。方形区画の内郭の東端に位置する井戸であり、一度埋没した後に再掘削されている。検出時において再掘削部分のみ炭化物が入る黒褐色粘土が広がっていた。再掘削部分の底面には、灰釉系陶器碗・皿などが多くは内面を上にして出土した。また、上層には比較的大きな礫がみられた。

SE1上層では、大半の遺物が残りが良く遺構周縁部に斜めに傾いて出土していることから、埋土が

没んでいるところへ周囲からゆっくりと廃棄されたと考えられる。上層の遺物群を取り上げると、その下から樹枝などが面的に広がっていた。樹枝の間からは灰釉系陶器の破片が多く出土し、なかには編み物などもみられた。底面は円形で平坦であり、長さ約1mの棒状材が5本重なった状態で横位で出土し、部分的に杭として打ち込まれていたものもあった。

本遺構は規模が大きく深いことから井戸としたが、砂礫などの帯水層を掘り抜いていないことや、掘削時に湧水などがみられなかったことから、井戸と断定するにはいささか疑問も残る。

遺物は土師器10点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器が507点、中国磁器が5点、中世土師器が12点、その他の中近世陶器が9点、木製品が331点出土した。本遺構の時期は、遺物からVI-1期に掘削され、VI-2期に廃絶したと考えられる。

SE2（図版304、写真図版150～152） D9地点 BB84

居住域の東端に位置する井戸である。検出時は隅丸長方形を呈し、約5cm掘削した段階で北西角に井戸の木製側板が出土した。側板は北・西・南側は井戸の周縁に遺存していたが、東側は井戸内部に崩落していた。また、西側の側板に沿って長さ5cm程度の円礫が据えられていた。井戸内にはSE1のように多量な遺物はなかったが、長さ30～50cmの円礫が3つ出土した。これらに比熱などの痕跡はみられなかった。井戸側面の上方には、北西隅と南西隅、北東隅に細い杭が打ち込まれていた。これらは上部が腐食しており井戸の側板と標高が異なることから、井戸上部の構造物に伴うものと考えられる。井戸底には直径51cm、高さ30cmの円形曲物が据えられ、その周囲には長さ10cm程度の円礫が詰め込まれていた。これらは曲物を固定するとともに、曲物内に入る水を濾過する用途があったと考えられる。なお、図版304右下の5・6層が帯水層であり、曲物上面の標高は帯水層の上面に対応する。

遺物は土師器が19点、その他の須恵器が2点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器が270点、中国磁器が1点、中世土師器が14点、その他の中近世陶器が5点、木製品が29点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SE3（図版305、写真図版153） E5地点 AS90

区画溝上に位置する。検出面より約15cm下で虫のサナギリしき殻が15個出土した。遺物は検出面から底面までほぼ均一に出土したが、SE1のように密集していない。検出面より約30cm掘削した時点で、長さ20～50cmの円礫と角礫が井戸周縁に沿って並んで出土し、その内側に棒状材が東西方向にほぼ水平に据えられていた。それらより下は粘性が極めて高い黒色粘土が堆積しており、常に湧水していた。

本遺構は規模が大きく、調査時に随時湧水していたことから井戸としたが、比較的浅く、掘り形もすり鉢状を呈することから断定はできない。

遺物は土師器が65点、古代の須恵器蓋杯が8点、その他の須恵器が7点、灰釉系陶器が160点、中国磁器が1点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が7点、木製品が4点、石器が2点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

第6項 水田跡

D2・3地点 (図版306)

地形の傾斜はほぼ平坦であり、IVc層上面を田面とした。検出本数は東西4条であるが、SD167も水田に伴う溝である可能性が高い。

出土遺物は、耕作土であるIVc層より灰釉系陶器碗・皿が51点出土した。そのため本遺構の時期はVI期と考えられるが、SM394はVI期の掘立柱建物跡であるSH44に切られるため、水田はそれ以前に営まれていたことになる。

D4・5地点 (図版307・写真図版154)

地形の傾斜はほぼ平坦であり、IVc層上面を田面とした。検出本数は東西5条、南北6条である。D4地点のSM421~425は畦畔の間隔が極めて狭いことから、畑として使用されていた可能性もある。

出土遺物は、耕作土であるIVc層より灰釉系陶器碗・皿が615点出土した。そのため本遺構の時期はVI期と考えられる。

第7項 溝

屋敷地に伴う溝 (SD18・SD19・SD21・SD30・SD43) (図版308)

A8地点で検出した大型掘立柱建物跡SH9 (SH11)を中心とした屋敷地に関わる溝である。SD18・SD43は屋敷を囲う区画溝である。SD19・SD21・SD30は、区画溝SD18・SD43の内側、掘立柱建物群の外側にあり区画溝に平行している。溝の規模は大きく違うが、屋敷は溝によって二重に囲まれている。仮に内側を内区、外側を外区とした場合、内区は東西約35m以上、南北約42m以上で、外区は屋敷全体と同じ意味となるが、東西約64m、南北約69mとなる。SD18北辺西端で溝は切れてしまうが、その位置は推定条里地割線とほぼ一致し、南辺は推定条里地割線の約3m南になる。西辺・南辺はほぼ条里地割に規制されていたと考えられる。

SD18 (図版309、写真図版154~156) A7・A8・A13地点 EK41~FD49

屋敷地を囲う素掘溝である。北辺は主軸をN-0°とし、やや東で南に振る。溝は心々で約64mにわたり掘削されていた。東端で直角に南折し、延長はA8地点で部分的に確認できた。東辺の主軸はN-90°で、南で西にやや振る。後述するSD43は、やや西にずれるが南北方向の溝が南で直角に西に折れることから、SD18と同一のものと判断できる。北東角と南東角の距離は心々で約69mである。

北辺は幅約1.6m、深さ約0.4mで、東辺は幅約1.2m、深さ約0.6mである。断面形は逆台形である。北辺では西端付近と東端で比高差が約0.3mとなり西が低く、東辺では中央A8地点でやや深いが北端と南端で比高差が約0.2mとなり北が低い。北辺中央付近では北壁から溝中央に向けて、幅約2.0m、長さ約0.6m、高さ約0.2mの方形の張り出しが確認できた。ほぼ屋敷の中軸線上にあたることや、その構造から区画溝SD18を渡るための施設の基部の可能性が考えられるが、詳細は不明である。埋土は、植物遺体を多く含む粘土が主体である。A7地点では、SD18内にIIIa層(VII期の水田層)、IIa層(VIII期以降の水田層)が落ち込んでいた。これは植物遺体を多く含む埋土が土圧で陥没したためと考えられる。埋土中には、植物遺体の他、植物の種子化石や昆虫遺体が多く残存しており、屋敷周辺の環境を復原する上で多くの情報が得られた(分析の結果は第7章参照)。

遺物は土師器が559点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が8点、灰釉陶器が1点、灰釉系

陶器が327点、中世土師器が31点、その他の中近世陶器が14点、木製品が126点、石器が1点出土した。古墳時代の土師器は、溝が古墳時代の竪穴住居や溝を壊して造られていることからそこからの流れ込みと判断できる。本遺構の時期は、遺物からVI-2期に埋没したと判断でき、掘削は明確なことはないが屋敷の成立時VI-1期と考えられる。

SD19（図版309） A7地点 EN42-E42

幅約0.5m、深さ約0.2mの素掘の東西溝で、約33mにわたり確認した。主軸はN-0°で、ほぼSD18に平行する。

遺物は土師器6点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器が22点、中世土師器が5点、その他の中近世陶器が5点出土した。VII期の灰釉系陶器が入るがいずれも小破片で、VI-2期のものがままとまっている。溝は残存状態が悪く、このことからVII期のものは混入と考えられる。本遺構の時期は、周囲の状況や遺物からVI-2期に埋没したと考えられる。

SD21（図版309） A7地点 EN42-E042

幅約0.5m、深さ約0.1mの素掘の東西溝で、約6mにわたり確認した。主軸はN-0°で、ほぼSD18・SD19に平行する。

遺物は土師器5点、灰釉系陶器が5点、中国磁器が1点出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からVI-2期と考えられる。

SD30（図版308、写真図版156） A7地点 ET47-50

幅約0.4m、深さ約0.1mの素掘の南北溝で、約15mにわたり確認した。主軸はN-0°で、ほぼSD18に平行する。

遺物は土師器が5点、灰釉系陶器が12点、木製品が1点出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からVI期と考えられる。

SD35（図版309、写真図版157） A14地点 EC41-EF41

幅約0.5m、深さ約0.1mの素掘溝で、約29mにわたり確認した。逆コ字形に掘削されている。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出位置と軸の方向からVI期と考えられる。

SD43（図版308） A10地点 FA55-FC54

幅約0.6m、深さ約0.1mの素掘溝で、約15.5mにわたり確認した。直角に曲がり、南北軸はN-5°Eで、東西軸はN-87°Wである。A7・A8で検出したSD18から見ると南北軸がやや西に振れているが、延長と考えられる。とても残存状況が悪く、調査時には同一の溝との認識はなかった。

遺物は土師器が69点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が79点出土した。VII期の灰釉系陶器が混じるが、VI-2期のものがままとまっている。溝の残存状態からVII期のものは混入と考えられる。本遺構の時期は、SD18と同様に、VI-1期に掘削されVI-2期に埋没したと考えられる。

SD44・45（図版455） A10地点 EO55-EQ57

SD44・SD45はほぼ屋敷地中軸線に平行して約3.5m離れて存在する。その位置関係から屋敷地から南に延びる道路の両側溝と考えられる。残存状況が悪く、路面は確認できていない。東側溝SD44は、幅約0.4m、深さ約0.05mの素掘溝で約5mにわたり確認した。SD45は、幅約0.6m、深さ約0.1mの素掘溝で約11.5mにわたり確認した。両者とも埋土は砂である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、屋敷地に伴うと判断できることから、VI-1～2期と考

えられる。

SD47 (図版455、写真図版159) A10・A15地点 EK57~ES59

幅約4mの素掘溝で、約39mにわたり確認した。南東から北西に向かって流れていたと考えられる。東でやや南に折れている。南東端とA15地点側の南肩はNR20によって破壊されている。また廃絶後上部にSD46が構築されている。

遺物は土師器が18点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が15点、灰軸系陶器が1点、灰軸系陶器が88点、その他の中近世陶器が6点、石器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物からVI-2期に埋没したと考えられる。埋没時が屋敷地の廃絶時と重なり、屋敷地から南に延びる道路も溝の手前で終わっていることなどから、屋敷地と密接な関係がうかがえ、このことから本遺構の掘削はVI-1期の可能性が考えられる。

SD60 (図版310・311、写真図版159・160) A16地点 DL60~EF60

幅4~5m、深さ約1mで、長さ約78mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びている。断面形は箱型を呈し、水流の方向は東から西である。流路の中央付近にはSW49があり、SD63へと導水していることから、ある時期は用水としての機能を有していたと思われる。SD60が掘り込まれる土はNR34・35の埋土でSD60の埋土と類似していることや、NR28・29の水流のあふれによりSD60の検出面の凹凸が顕著であったことなどから、その検出は極めて困難であった。SD60の埋土は直径3~5cmの円礫を多く含む砂礫が主体で、洪水などにより短期間で埋まったと考えられる。砂礫の上層には植物遺体を層状に含む粘土が堆積しており、洪水後は河道がNR28・29へ移動し、SD60の箇所は大きな窪みになっていたと考えられる。

遺物は土師器が3点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が7点、灰軸系陶器が72点、中世土師器が1点、木製品が118点出土した。本遺構の時期はVI-2期と考えられる。

SD61 (図版311、写真図版161) A16地点 DR60~EB59

幅0.8m、深さ0.3~0.4mで、長さ約20mにわたり検出した。東西端はNR34に切られている。断面形は逆台形を呈し、水流の方向は底面の標高からみて東から西といえる。埋土は粘土かシルトが主体で、最下層においてラミナ層が確認できたことから、緩やかな流れがあったといえる。なお、西端にあるSD71は、埋土が砂礫主体であることから別遺構である。

本遺構の時期はVI-1期と考えられる。

SD69 (図版332、写真図版161・162) A16地点 EB56~ED56

幅約1.1m、深さ約0.3mで、長さ約6mにわたり検出した。南端はNR34に連結し、北端はNR29に切られている。断面形は皿状を呈し、水流の方向は溝内にあるSW56の向きからみて北から南といえる。埋土は砂礫が主体であるが、大半はSW56を構築するために人為的に埋められている。

遺物は弥生土器が1点、土師器が8点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が8点、灰軸系陶器が178点、中国磁器が2点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が7点、木製品が26点出土した。本遺構の時期はVI-1期と考えられる。

SD70 (図版311、写真図版169) A16地点 EB57

幅0.6~1.2m、深さ約0.2mで、長さ約3mにわたり検出した。北端はSD60より分岐し、南端はNR34に連結している。断面形は皿状を呈し、水流の方向はSD69と同じく北から南といえる。SD69から分

岐する箇所には立木があり、その南側では数個の円礫がまとまって出土した。円礫の上面レベルはランダムであるが、礫の周囲には樹皮が散見でき、灰釉系陶器も一定量出土したことから、円礫は意図的に据えられた可能性がある。

本遺構の時期はVI-1期と考えられる。

SD102 (図版312) B 6 地点 EL82~EO81

幅約3.5m、長さ約14mの素掘溝である。南西から北東方向に流れ、北東で自然地形の谷部に注いでいる。溝の性格は不明である。

遺物は土師器が41点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が6点、灰釉系陶器が31点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が5点、木製品が2点、石器が1点出土した。本遺構は、出土遺物からVI期以降と考えられる。

SD103 (図版312) B 6 地点 EK80~81

幅約1.5mの素掘溝で、約10mにわたり確認した。南西から北東方向に流れ、北は調査区外に延びている。溝の性格は不明である。

遺物は出土していない。本遺構は、検出面や周囲の状況からVI期以降と考えられる。

SD104 (図版312、写真図版163) B 6 地点 EL82~EO81

幅約0.5mの素掘溝で、約3mにわたり確認した。南は調査区外に延びている。南東から北西方向の谷地形に沿って掘削されている。溝の性格は不明である。

遺物は土師器が1点、灰釉系陶器が1点、木製品が1点出土した。本遺構は、出土遺物からVI期以降と考えられる。

SD130 (図版453・454) C 9 地点 EJ05~EN05

幅約1.5m以上の素掘溝で、約22mにわたり確認した。北は調査区外である。中程に直角に南に延びる部分があるが、南に広がる水田部分への取水口の可能性がある。溝の性格は、水田に関わると考えられる。

遺物は土師器が29点、古代の須恵器蓋杯が77点、その他の須恵器が161点、灰釉陶器が20点、灰釉系陶器が60点出土した。本遺構の時期は、遺物や周囲の状況からVIまたはVII期と考えられる。

SD140 (図版313) D 1 地点 CP64

幅0.2m、長さ3.5mで東西方向に延びる溝である。検出時点ではプランが不明瞭な上に、一掻きすると消えてしまうほど浅かったため、遺構であるという認識がやや薄かった。

遺物は出土していないが、SH38と軸を同じくすることから本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD141・142 (図版313、写真図版163) D 1 地点 CN67

2本とも南北方向に延びる溝で、本来は1本であった可能性がある。SD141は長さ1.4m、幅0.4m、深さ0.3mで、SD142は長さ0.7m、幅0.3m、深さ0.1mである。

遺物はSD141からの灰釉系陶器が4点、SD142からの土師器が1点、灰釉系陶器が2点である。

SH40と軸を同じくすることから本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD143 (図版313) D 1 地点 CM66~CN66

長さ4.2m、幅0.6m、深さ0.05mの東西方向に延びる浅い溝である。

遺物は土師器が14点、灰釉系陶器が4点、中世土師器が1点、鋳型が1点出土した。SH39と軸を同じくすることから本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD144・154 (図版313) D 1 地点 CQ66~CS67

SD144は長さ5m、幅0.4m、深さ0.03mの溝で、ほぼ東西方向に延びるが東部はやや「へ」の字状に屈曲する。SK113に切られるように見えるが、不明瞭である。SD154は長さ4.7m、幅0.5m、深さ0.04mの東西方向に延びる断続的な溝である。これらは一連のものと考えられる。

遺物はSD154から土師器が2点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が7点出土した。SD144からは出土していない。本地点の多くの溝と同様に東西方向に延びることから本遺構の時期はVI期の可能性がある。

SD145・146 (図版314) D 1 地点 CQ67

2本ともほぼ南北方向に延びる浅い溝だが、南端はやや西に屈曲しSD145がSD146に接する形となる。長さ約2.5m、幅約0.5m、深さ0.05mとほぼ同じ規模である。

遺物はSD145から灰釉系陶器が1点、SD146から土師器が1点、灰釉系陶器3点出土した。本地点の多くの溝と同様に南北方向に延びることから本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD147・148 (図版314) D 1 地点 CO66~CQ67

2本とも東西方向に延びる浅い溝で、SD147がSD148を切るようであるが、その境は不明瞭である。SD147は長さ9m、幅0.9m、深さ0.06mをはかる。一方SD148は長さ約4m、幅0.4m、深さ0.09mで西端をP2719やP2981に切られる。

遺物はSD147から土師器が26点、灰釉系陶器が128点、中国磁器が1点、中世土師器が2点、SD148からその他の須恵器が1点、灰釉系陶器が8点、中世土師器が5点出土した。本地点の多くの溝と同様に東西方向に延びることから本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD149 (図版314) D 1 地点 CN68

長さ4m、幅0.7m、深さ0.1mの南北方向に延びる溝である。浅い溝であるが灰釉系陶器が多く出土した。特記すべき遺物として轆の羽口などの鍛冶関連遺物があるが、それらに伴う遺構は確認できなかった。また、SH39と軸を同じくすることから何らかの関連が考えられる。

遺物は土師器が16点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が54点、中世土師器が5点、その他の中世近世陶器が1点、轆羽口2点が出土した。本遺構の時期はVI期と思われる。

SD150 (図版313) D 1 地点 CM68~69

長さ2.2m、幅0.5m、深さ0.07mの南北方向に延びる浅い溝である。遺物は出土しなかったが、SH39・41・42と軸を同じくすることから何らかの関連が考えられ、本遺構の時期はVI期の可能性がある。

SD151 (図版314) D 1 地点 CM69

長さ4m、幅0.4m、深さ0.1mの東西方向に延びる浅い溝である。

遺物は土師器が4点、灰釉系陶器が10点出土した。SH42と軸を同じくすることから考えて本遺構の時期はVI期の可能性が考えられる。

SD153 (図版315、写真図版163) D 1 地点 DE69~DG66

長さ16m、幅3.4m、深さ0.8mの南西から北東方向に延びる溝である。断面形は深い皿状を呈し、

埋土は砂混じりの粘土が主である。直線的に掘削されており掘り肩が明瞭であるが、南岸側は最上層がややあふれている。

遺物は土師器が10点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器が18点、木製品が1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD158 (図版314) D 1 地点 CP67~CQ67

長さ2m、幅0.2m、深さ0.05mの東西方向に延びる浅い溝である。断面形はU字状を呈する。

遺物は土師器が3点、灰釉系陶器が3点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD161 (附図18) D 1 地点 CP70~CQ70

深さ0.4mであるが、はっきりと溝とは呼べないような不定形で、長さ約8mにわたり検出した。南側の大部分をSD155に、西端をSK116に切られる。断面形は深い皿状を呈し、埋土は粘性の高い粘土である。

遺物はその他の須恵器が1点、灰釉系陶器が17点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD213 (図版226) D 7 地点 CA82~CC82

長さ11.5m、幅1.5m、深さ0.15mで、緩やかに弧を描きながら東西方向に延び、西端は調査区外に及ぶ。断面は浅い皿状を呈し、埋土は粘土である。この溝から数m離れた北側に、やはり弧状を為す杭列が確認できたが、両者の関係は不明である。

遺物は土師器が1点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD222・223 (図版316、写真図版163) D 9 地点 BB82~BC85

いずれも一連の溝であり、幅約1m、深さ約0.2mで、長さ約17mにわたり検出した。北端はSD229に連結し、南端は調査区外に延びている。水流の方向は南から北で、断面形は皿状を呈し、埋土は礫や炭化物を含む粘土である。この溝は居住域の東端に該当し、建物と方位がほぼ一致することから区画溝と考えられる。

遺物はSD222から土師器が26点、灰釉系陶器が33点、中国磁器が2点、中世土師器が5点、その他の中近世陶器が2点、木製品が1点、SD223から弥生土器が1点、土師器が215点、その他の須恵器が16点、灰釉陶器が23点、灰釉系陶器が1572点、中国磁器が3点、中世土師器が22点、その他の中近世陶器が98点、木製品が6点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD224 (図版316) D 9 地点 AT82~BC82

幅約1m、深さ約0.2mで、長さ約15mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、東端は調査区外に延び、西端は削平されている。断面形は皿状を呈し、埋土は褐灰色粘土の単層である。この溝は大半のピットを切っていることから、居住域廃絶後に掘削された可能性が高い。

遺物は出土していない。本遺構の時期はVI~VII期と考えられる。

SD229 (図版316、写真図版164) D 9 地点 AR79~BC81

幅12~14m、深さ約0.8mで、長さ24mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びている。断面形は逆台形を呈し、水流の方向は東から西である。D 8 地点 NR110と一連であるが、SD229は上端が直線的であることや、法面を掘削して整地していることから溝とした。埋土は微砂~シルトが主体であり、SD223と連結する箇所には拳大の円礫(河床礫)が無数に露出し、溝の下端が大きく湾曲していた。また、溝中央付近の南法尻には直径20~30cmの円礫がまとまって出土した。なお、この溝はVII期にお

いて再掘削されており、SW68はその溝に伴う。

遺物は土師器が111点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が111点、灰釉陶器が65点、灰釉系陶器が3542点、中世土師器が12点、その他の中近世陶器が32点、木製品が24点、石器が3点出土した。再掘削された溝からは灰釉系陶器とともに近現代陶磁器が多数出土した。そのため、掘削時がVI期で埋没時がVII期以降と考えられる。

SD238 (図版317、写真図版163) E 2 地点 BP88~BP92

幅0.4~1.0m、深さ0.1~0.2mで、長さ19.5mにわたり検出した。真北に延びる直線的な溝で、南北端は調査区外に延びている。水流の方向は溝底面が南高北低であることから、南から北である。断面形は皿状を呈し、埋土は底面に粗砂、上層に粘土が堆積していた。この溝は、すぐ西側にあるSH49と軸方向や時期が一致していることから、SH49に伴う区画溝である可能性が高い。

遺物は土師器が85点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が4点、灰釉系陶器が33点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が2点、木製品が2点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD239・240・244 (図版317) E 2 地点 BP88~CF88

SD239は長さ約6m、深さ約0.1m、SD240は長さ約10m、幅約0.4m、深さ約0.1m、SD244は長さ約33m、幅0.4~1.0m、深さ約0.1mである。いずれも東西方向に延びる溝であり、両端は削平されているが、SD240とSD244は同一の溝である可能性が高い。水流の方向は不明であるが、いずれの溝もSD238と同時存在であることから、水は流れていたと考えられる。断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。これらの溝は、区画溝であるSD238に直交していることや、2条が平行していることなどから、SH49の区画溝であるとともに、水田に伴う水路の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD243 (附図19) E 2 地点 CF88

幅2.5m、深さ約0.6mで、長さ3.5mにわたり検出した。真北に延びる直線的な溝で、南、北、東端は調査区外に延びている。この溝はE 3 地点SD247、D 6 地点SD206と同一の溝である可能性が高い。水流の方向は溝底面が南高北低であることから、南から北である。断面形は逆台形を呈し、埋土は底面に粗砂、上層に粘土が堆積していた。また、近世(19世紀頃)に再掘削されている。なお、この溝は坪境に位置する溝である。

遺物は土師器が6点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が8点、灰釉陶器1点、灰釉系陶器が47点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が26点出土した。本遺構の時期は掘削時がVI期、埋没時がVII期以降と考えられる。

SD250 (図版318) E 4 地点 BG94~BG95

幅1.0m、深さ約0.2mで、長さ8.4mにわたり検出した。真北に延びる直線的な溝で、南端は調査区外に延び、北端は削平されている。水流の方向は溝底面が南高北低であることや、SD252からの導水を考えると南から北といえる。断面形は皿状を呈し、埋土は粗砂や砂岩粒を含む粘土が主体である。溝の途中には直径1.0m、深さ0.7mの円形土坑があり、埋土下層には粘性の高い黒褐色粘土が堆積していた。SD252内のSI4により導水された水が、この土坑に一時的に溜められた可能性が高い。

遺物は土師器が8点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が5点、灰釉系陶器が11点出土し

た。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD251 (図版318) E 4 地点 BF95~BG95

長さ2.0m、幅0.6m、深さ0.2mの東西に延びる溝で、西端はSD252に、東端はSD250にそれぞれ連結する。この溝はSD252内のSI4により導水された水がSD250へ通じるための導水溝であることから、水流の方向は東から西といえる。断面形は皿状を呈し、埋土は砂礫を含む粘土である。

遺物は土師器が3点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器7点、その他の中近世陶器が1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD252 (図版318~322、写真図版164~166) E 4 地点 BF94~BF95

幅3.5m以上、深さ0.6mで、長さ6.0mにわたり検出した。真北に延びる直線的な溝で、南、北、西端は調査区外に延びている。水流の方向は溝底面が南高北低であることから南から北といえる。断面形は逆台形~箱形を呈し、埋土は最下層に砂岩粒や微砂を含むシルト、上層は粘土であった。溝内には集石遺構であるSI3とSI4が検出でき、その性格はSI3が祭祀関連、SI4が水制遺構である。なお、SI4によりSD250・251へ導水している。

遺物は土師器が98点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が37点、灰釉陶器が39点、灰釉系陶器が2331点、中国磁器が4点、中世土師器が17点、その他の中近世陶器が227点、木製品が87点、石器が2点出土した。出土遺物の位置をみると、大半が溝の東側に偏っていることから、これらの遺物は主に東側の居住域(SH49など)から投棄されたといえる。また、SI4の礫内からはVI期の遺物が多く出土し、SI3上面からはVII期の土師器皿が出土した。そのため、本遺構の掘削時期はVI期、埋没時期はVII期と考えられる。

SD252-SI3 (図版320) E 4 地点 BF95~BF96

長さ約6m、幅約3mの範囲内で検出した集石遺構である。長さ20~30cmの扁平な円礫が数個、面をそろえて敷かれており、その上から土師器皿が小破片に割れて出土した。円礫は中央部付近にはなく、この部分には深さ約0.1mの円形の掘り込みがあった。その埋土は黒色粘土の単層であり、出土遺物はなかった。SI3周辺からは他に土師器皿3枚やVII期の灰釉系陶器が出土している。円礫を丁寧に配置していることや土師器皿の存在から、本遺構は何らかの祭祀関連施設と考えられる。

本遺構の時期はVII期と考えられる。

SD252-SI4 (図版321) E 4 地点 BF94~BF95

長さ約11m、幅約7mの範囲内で検出した集石遺構である。長さ20~50cmの円礫や角礫が数個と小礫から拳大の円礫が多数ランダムに検出され、その下から直立杭が出土した。断面観察において礫上面において硬化層が確認できたことから、本遺構は水制遺構に伴う集石といえる。

これらの礫は溝底面に配置されており、礫上面の比高は南高北低であった。その上にはシルトから粘土が盛土として積み重ねられ、図版319の5層はとても硬くしまっていた。盛土の範囲はおよそSD251以北であることから、SI4からSD251へと導水していたといえる。礫のうち直径30cm以上のものは南辺に位置していることから、水衝部により大きな礫を配したといえる。礫の下からは直立杭が高密度で出土した。直立杭の杭頭は大半が腐食していたが、杭先は地山である灰色粘土まで打ち込まれていた。杭の配置は東西方向の2~3列の列が基本となり、その間は比較的ランダムである。また、南辺に位置する杭列は巨石の内側に位置していることから、最も水表側にある構造物は礫であったといえる。

礎群の底面付近からは灰釉系陶器仏供や銭貨、完形の灰釉系陶器などが出土し、他の遺物と同様にVI期に属することから、本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD253 (図版318) E 4 地点 BG93～B194

幅約1.5m、深さ約0.1mで、長さ約11mにわたり検出した。東西に延びる溝で、東端は調査区外に延び、西端は削平されている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土の単層であった。

遺物は土師器が24点、その他の須恵器が2点、灰釉系陶器が52点、その他の中近世陶器が1点、木製品1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD254 (図版323、写真図版167) E 5 地点 AO91～AR91

幅0.5～1.0m、深さ約0.2mで、長さ約16mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、西端は調査区外に延び、東端は取束している。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。溝の屈曲部付近では灰釉系陶器が5個体まとまって出土した。なお、SD254とSE3は切り合わない。

遺物は土師器が63点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が10点、灰釉系陶器が38点、その他の中近世陶器が3点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD255 (図版323、写真図版166) E 5 地点 BB92～BD92

幅約2m、深さ約0.2mで、長さ8.8mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、西端はSD257と連結し、東端は削平されている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、溝底面は凹凸が顕著であった。なお、SD255、SD258・SD259の南側には、畦畔に伴うと考えられる杭列がほぼ平行にあることから、これらの溝も同様に、水田耕作に関連するものと思われる。

遺物は土師器が104点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が10点、灰釉陶器4点、灰釉系陶器90点、中国磁器2点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が8点、木製品が4点出土した。

本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD257・258 (図版323) E 5 地点 BA92～BB92

SD257は長さ2.5m、幅約0.2m、深さ約0.1m、SD258は長さ2.0m、幅約0.2m、深さ約0.1mで、いずれも東西方向に延びる溝である。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土である。これらの溝はSD255と同様に、水田耕作に関連するものと思われる。

いずれの遺構も時期はVI期と考えられる。

SD259 (図版323、写真図版167) E 5 地点 AT91～AT92

幅約0.3m、深さ約0.1mで、長さ約5mにわたり検出した。屈曲する溝で、東西端は削平されている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。なお、本遺構はSD277に切られる。

遺物は土師器が33点、その他の須恵器が3点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が36点、中世土師器が1点、木製品が3点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD271 (図版323、写真図版183) E 5 地点 AL90～AH90

長さ約8mにわたり検出した。幅約4.6m、深さ約0.8mの南北方向に延びる溝で、南北端は調査区外に延びている。水流の方向は不明であり、断面形は逆台形を呈し、底面は東西法尻がさらに溝状に

掘り込まれている。埋土は粘土が主体であるが、底面には砂礫がまとまって堆積していた。

遺物は土師器が135点、古代の須恵器蓋杯が37点、その他の須恵器が92点、灰釉陶器が7点、灰釉系陶器が235点、その他の中近世陶器が17点出土した。本遺構の時期はVI～VII期と考えられる。

SD276 (図版323) E 5 地点 AP91～AS91

幅0.8m、深さ約0.2mで、長さ12.3mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、東端は取束し、西端は調査区外に延びている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。埋土の様相や溝の方向などから、SD277と一連の溝である可能性が高い。なお、本遺構は SE 3、SD281・282を切る。

遺物は土師器が32点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が17点、灰釉陶器が2点、灰釉系陶器が104点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が6点、木製品が2点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD277 (図版323) E 5 地点 AS91～AT91

幅約0.4～1.0m、深さ約0.1mで、長さ約5mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、東西端は削平されている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。なお、本遺構はSD259を切り、SE 3とは切り合わない。

遺物は土師器が46点、その他の須恵器が46点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が70点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が3点、木製品が1点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

SD281・282 (図版323) E 5 地点 AR91～AS91

いずれも幅約0.5m、深さ約0.1mで、長さ約1mにわたり検出した。南北方向に延びる溝で、北端は調査区外に延びている。水流の方向は不明であり、断面形は皿状を呈し、埋土は粘土である。なお、SD281はSD276に切られ、SD282はSE 3に切られるか、同時存在である。

遺物はSD281からその他の須恵器が1点、灰釉系陶器が1点、SD282から灰釉系陶器が1点出土した。いずれの遺構も時期はVI期と考えられる。

第8項 自然流路

NR22・23 (図版324・325) A15・B1 地点 EG58～EP71

幅8～12m、深さ0.9mで、途中未調査区域を含んで長さ約90mにわたり検出した。南端は調査区外に延び、西端はNR34・35に続く。断面形は皿状を呈し、水流の方向は南から西である。流路はB1地点の南から北に流れ、途中で西南西に屈曲し、NR22へと繋がる。この流路の埋土は砂礫やシルトが主体であり、流路の大半が埋没した後に、流路の中央部分に溝を再掘削している。この溝は立ち上がり比較急であることから、矢板などで護岸していたかもしれない。また、埋土が直径2～5cmの円礫を含む砂礫主体であり、洪水によって一気に埋没したと考えられる。これらの状況は、A16地点のNR34・35・SD60と同一であることから、少なくとも200m以上にわたり用水を再掘削し、すぐに洪水により埋没してしまったといえる。

遺物は弥生土器が1点、土師器が15点、古代の須恵器蓋杯が11点、その他の須恵器が44点、灰釉陶器が14点、灰釉系陶器が311点、中国磁器が2点、その他の中近世陶器が15点、木製品が9点出土した。本遺構の時期はVI～I期と考えられる。

NR34・35 (図版310、写真図版169) A16地点 DK59～EF60

幅8～15m、深さ0.9mで、長さ約78mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びている。断面形は皿状を呈し、水流の方向は東から西である。流路の中央付近にはSW60・61があり、SW60の東側がNR34、西側がNR35である。この流路の埋土は砂礫やシルトが主体であり、流路の大半が埋没した後、流路の中央部分に溝(SD60)を再掘削している。

遺物はNR34から弥生土器が2点、土師器が71点、古代の須恵器蓋杯が17点、その他の須恵器が51点、灰軸陶器が3点、灰軸系陶器が45点、その他の中近世陶器が3点、木製品が5点、石器が1点、NR35からは土師器が5点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が3点、灰軸陶器が1点、灰軸系陶器が48点、その他の中近世陶器が4点、木製品が7点出土した。本遺構の時期はVI-1期と考えられる。

NR57 (図版326、写真図版169) B3地点 EG64～EH64

NR23と同一の流路であり、EG64で流路南側に5本の直立杭を検出した。杭は流路に沿って打ち込まれていることから、流路に沿って存在していた可能性が高い畦畔状の高まりに伴う杭と思われる。

本遺構の時期はVI期と考えられる。

NR62・64 (図版326、写真図版170) B3地点 EE71～EH72、B4地点 DT71～EB71

NR62・64は同一の流路であり、NR62は長さ15.0m、NR64は長さ6.5mを検出し、いずれも東、西、南方向は調査区外に延びている。NR64は幅4m以上、深さ1.0mであり、NR62は北端のみ検出できたため、大きさは不明である。流路の北法面の傾斜は急で、南法面の傾斜は緩やかであり、その断面形は三角形に近い。NR62の北法面には直立杭が数本ランダムに、またNR64の北法尻には直立杭は直線的に6本打ち込まれていたことから、流路の法面には護岸施設が存在していたと思われる。流路底面には砂礫が多くあることから水は一定量流れていたと考えられ、その方向は東から西である。

遺物はNR62から灰軸系陶器2点、その他の中近世陶器が1点、木製品が10点、NR64からは土師器が3点、その他の須恵器が2点、灰軸陶器が2点、灰軸系陶器が115点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が12点、木製品が24点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

NR80・81 (附図18、写真図版170) D1地点 CT64～DA70

幅24m、深さ1.5m、長さ27mにわたり検出したが、南北端は調査区外に延びている。水流の方向は不明である。断面形は深い皿状を呈し、東岸は西岸に比べてやや緩やかである。掘削は一括して行ったが、ほぼ中央の島状に盛り上がった部分より西は遺物の様相がやや古いことから、CT69～DA70付近をNR81とした。しかし、その境界は不明瞭である。

遺物はNR80から土師器が5点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が9点、灰軸陶器が11点、灰軸系陶器139点、その他の中近世陶器が9点、木製品が1点、NR81から土師器が8点、その他の須恵器が1点、灰軸陶器が1点、灰軸系陶器が47点、その他の中近世陶器が2点、木製品が2点出土した。本遺構の時期はVI期と考えられる。

NR99 (図版509) D6地点 DL83～DM84

最大幅約5m、深さ約0.7mで、約10mにわたり確認した。ほぼ真っ直ぐに北流する。埋土は上下2層に大きく分けられる。下層掘削中に斜行する杭列を確認したが、その部分より南側では流路の肩の様子が違っていた。

遺物は弥生土器が1点、土師器6点、木製品出土した。本遺構の時期は、検出面からVI～VII期と考えられる。

第9項 水制遺構

SW49（図版327・328、写真図版171） A16地点 DS57

SD60内に位置し、SW49付近でSD60からSD63が分岐する。SD60は幅5～6m、深さ約1mの溝で、断面逆台形を呈し、埋土の半分以上が洪水砂と想定される砂礫である。

SW49の規模は長さ3.6mであり、盛土がわずかに確認できた。

内部構造は直立杭と斜杭、構造材Bから成る。杭は、長さ80～120cm、直径5～8cm程度で、0.3～0.4m間隔で直線的に打ち込まれていた。また大半は直立杭で、その前面に斜杭がわずかに確認できた。

SW49周辺の埋土は、盛土と盛土構築前後のSD60の堆積層に分かれ、図版328の埋土1～3・7～11層はSW49機能時のSD60の埋土、4～6・12層が盛土、その他はSW49構築以前のSD60の埋土である。杭を打ち込む際に、杭周辺の土が打ち込む圧力のため杭にむかって緩やかに下降している状況から判断して、杭の打ち込み面は13層上面といえる。SW49構築以後の埋土をみると、SW49の東側で標高107.900～108.000m、西側で標高108.300～108.400mであり、その比高差は0.3～0.4m前後である。盛土の上層は粘土ないしシルトが主体で、5層中には直径1cm程度の構造材Bの集積が溝に直交する方向でみられ、その上に直径3cm程度の小礫が検出できた。また、12層は14層と類似した砂礫の中に粘土が入る層であることから、周辺の土を集めて盛土とした可能性がある。SW49構築以前の埋土は約0.5m堆積しており、SD60に砂礫が2分の1から3分の2程度埋まった後にSW49が作られたことがわかる。

遺物は木製品が23点出土した。SW49はSD60の埋土から判断して洪水によって機能しなくなったといえ、その時期はSD60の出土遺物からVI～2期である。

SW56（図版330～332、写真図版171） A16地点 EC57～ED56

SD69内に位置する。SD69はSW43から分岐する溝であり、NR41へと流れ込む。SW43内には後述するように乱杭列とともに堰状遺構を検出しており、導水方向がSD69に向いていることから分岐点では堰が設けられていた可能性が高い。また、盛土を除去すると、盛土部分を中心に直径3m程度の掘り込みが確認できた（図版331）。そのため、盛土を施す前段階では、水溜状の遺構が存在していたと考えられる。なお、SD69は幅約1.1m、深さ約0.3mで、盛土は南北約4.5m、東西約3.5mの範囲内に施され、遺存高は約0.4mである。

内部構造は粘土と砂礫、人頭大の礫、及び葎戸から成る。盛土は先述した水溜状の遺構を埋めるように成されており、基底部には横木が数本確認でき、横木の上には十数個の角礫群が東西方向に並んで検出された。横木はすべて礫群に直交する向きに水平に据えられており、横木が含まれる層には地山である灰白色粘土ブロックが含まれていた。また、礫群の両側の粘土は極めて粘性が高く、木の株や葎木も幾つかみられた。葎戸は盛土の北端（SW56の最も川表側）において、約60°の角度で据えられていた。葎戸の長さは約1.5m、高さは約0.4mであり、西側は欠落していた。また、葎戸の背面の盛土内には直径1～2cmの細長い小枝（構造材B）が幾つか検出された。葎戸の遺存状態は極めて良好であったが、葎戸の補助杭と思われる細い杭が数本あり、その内の1本が葎戸を突き抜けていた。

盛土の北側には、直径3cm程度の礫を含む砂礫層が広がっていた(図版330)。また、砂礫層の北側には灰色粘土と有機物を含む粘土が交互に堆積しており、その境は断面図にあるようにはほぼ垂直であった。このことから、盛土が洪水などで埋没した後に、砂礫層前面に矢板などの構造物が置かれ、その後水流があまりない状態が続いたものと理解した。盛土を埋めた洪水砂は図版330の5・13・30層に対応し、これらは同一埋土と認識できたので、この盛土が完全に洪水などにより埋没したといえる。なお、図版330の2・3層はSW43構築以前の洪水砂であることから、SD60のあふれ土と理解した。

遺物は弥生土器が1点、土師器が3点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が71点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が1点、木製品が17点出土した。遺構の時期は、SW56の盛土内から第5型式の灰釉系陶器が出土していることからVI-1期といえる。

SW60・61(図版333~338、写真図版172・173) A16地点 DQ60~DS57

NR41及びNR35の基底部に位置し、水制遺構より分岐する溝などは確認できなかった。また、SW60は北側をSD60により破壊されており、SW61はSW59を切っている。

SW60・61上面には砂礫層が約1m堆積しており、基本的に河川堆積により埋没しているといえる(図版334)。また、洪水などにより破壊されたためか、杭などの遺存状況は悪く、盛土も確認できなかった。そして、杭列前後の堆積も顕著な変化がみられなかった。

SW60は直立杭と横木から成り、南北約10m、東西約4mの規模である。流路の南側に沿って直立杭と横木があり、北側には長さ約6.2m、直径約0.3mの倒木がある。流水が少ない時は倒木付近で滞水し、南へ向きを変えてSW61方向へと流れていたと思われる。そのため、SW60内の水流方向に直交する横木は、SW61へ至る水流緩和の意図もあったかもしれない。

SW61は南北約10m、東西約7mの規模である。これは主に杭と横木、構造材Bから成り、水流により崩壊したためか遺存状況はあまり良くなかったが、南側は斜杭や構造材Bが比較的良好に残っていた。斜杭は杭頭をいずれも西に向けており、横木の東側から打ち込まれている。また、構造材Bは斜杭の上に東西方向に据えられていた。構造材Bはいずれも枝が遺存しており、枝の先端を下に向けていた。また、SW61は全体的に西側にわずかに湾曲しており、土木材の向きから考えても東からの流れを意識して構築されているといえる。杭列は南側の岸まで延びていることから完全に水流を止める役割があり、機能的には堰といえるであろう。杭列の前面には、長さ約8m、幅1mの巨大な樹木を検出した。これは広葉樹であり明確な加工痕は確認できなかったが、SW61の土木材と一連の構築物といえる。

SW60・61付近では、他の水制遺構と異なり完形に近い遺物が目立って出土した(図版333)。それらの大半は流路の南立ち上がり付近に集中しており、大半が灰釉系陶器であったがSW60付近では灰釉陶器碗の底部内面に「今」字の刻書があるものや耳皿も出土した。また、SW60と61の間からは木製品が集中して出土した箇所もある。ここでは、大小の下駄2枚と鳥形代が並んで出土し(図版335)、その直下より箸と杓子状木製品がみつかった。付近に焼土や炭化物は確認できなかったが、杓子状木製品や鳥形代などの存在や、完形の陶磁器が多数出土している状況から考えて何らかの祭祀行為がなされたと想定したい。

遺物はSW60から弥生土器が3点、土師器が14点、古代の須恵器蓋杯が6点、その他の須恵器が13点、灰釉陶器が7点、灰釉系陶器が75点、その他の中近世陶器が8点、木製品が71点、SW61から弥生

土器が3点、土師器が13点、その他の須恵器が6点、灰釉陶器が3点、灰釉系陶器が37点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が3点、木製品が151点出土した。遺構の時期は出土遺物からVI-1期と考えられる。

第7節 VII期（中世後期）の遺構

VII期の遺構として、掘立柱建物跡3棟、柱列跡7基、土坑4基、水田跡36地点、溝9条、自然流路7条、水制遺構11基を以下に報告する。

第1項 掘立柱建物跡

SH8（図版340） A8地点 EP49～EQ50

桁行4間（約7.2m）、梁行3間（約6.4m）の総柱建物で、南北方向に主軸をとる。西北隅に1間の張り出しを持ち、北東隅1間分を欠く。柱掘形は円形で、柱根は一つも残存していなかった。

遺物はP621・P626・P628～P631・P633～P638から灰釉系陶器が34点で、P630・P634・P636から土師器が5点、P630から中国磁器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物からVII-1期と考えられる。

SH23（図版341、写真図版174） A10地点 FA59～FB58

2間（約3.8m）×2間（約3.6m）の総柱建物である。柱掘形は円形で、P1327で柱痕跡を確認した以外は全て柱根が残存していた。

遺物はP1325・P1326・P1328・P1329・P1331・P1332から出土した。灰釉系陶器をP1236を除いた全てで、土師器をP1329・P1332で、須恵器をP1326で、陶器をP1325で、青磁をP1329で確認した。その点数は土師器が2点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が32点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が1点である。VI-1～VII-1期の遺物が混じるが、VII-1期がまとまっている。本遺構の時期は、遺物からVII-1期と考えられる。

SH24（図版342） A10地点 ES58～ET58

2間（約4.1m）×2間（約3.7m）の総柱建物と考えられるが、北西隅柱を欠く。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。P1347はSD46の掘形底面で検出した。

遺物はP1341・P1342・P1346から土師器が5点、P1345からその他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期は、遺物は出土していないが、周囲の状況からVI～VII期に属すると思われ、類似するSH23からみてVII-1期と考えておきたい。

第2項 柱列跡

SA25（図版343、写真図版174） A16地点 DK55～DO56

9間（22.0m）の柱列跡である。西側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。柱掘形は円形で、P1448～P1450・P1452～P1454・P1456で柱痕跡を確認した。SW43から西に続く道路状遺構SD58にはほぼ並行して存在する。

遺物はP1448・P1449から灰釉系陶器が5点出土した。本遺構の時期は、土器や周囲の状況からVII-2期と考えられる。

SA33（図版344、写真図版174） C13地点 LQ36～LO38

15間（16.0m）の柱列跡である。北側・南側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。柱掘形は円形で、P2263・P2269・P2270・P2272～P2274で柱痕跡を確認した。約4.5m東にはほぼ軸を揃

えて SA34がある。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、周囲の状況からVII期と考えられる。

SA44 (図版345) D 1 地点 CL64～CM69

9間 (24.0m) の柱列跡である。北側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。柱掘形は円形で、底面にはすべて川原石を用いた根石、ないしは礎盤が確認できた。なお、P2356はVI期の土器埋納遺構である SK109を切る。

遺物は土師器が6点、その他の須恵器が1点、灰釉系陶器が12点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が1点出土した。本遺構の時期は、周囲の状況からVII期と考えられる。

SA50 (図版346) D 1 地点 CR64～CS70

10間 (28.7m) の柱列跡である。北側・南側は調査区外となるため、まだ続く可能性がある。柱掘形は円形で、大半の遺構の底面に川原石を用いた根石が確認でき、P2397には柱根が残っていた。

遺物はP2388～P2390・P2392・P2393・P2395～P2398から弥生土器が1点、土師器が8点、灰釉系陶器が20点、その他の中近世陶器が1点、P2397から木製品が1点出土した。本遺構時期は、土器と周囲の状況からVII期と考えられる。

SA58 (図版347) D 3 地点 CH65～CH68

6間 (約15.75m) の柱列跡である。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物はP3078から土師器が2点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構時期は、検出状況からVII期と考えられる。

SA67 (図版348) D 3 地点 AR77～BA78

5間 (約13.25m) の柱列跡である。柱掘形は円形で、柱根は残存していなかった。

遺物はP3332から灰釉系陶器が1点出土した。本遺構時期は、土器と周囲の状況からVII-1期と考えられる。

SA69 (図版349) E 1 地点 DF83～DG83

3間 (約6.4m) の柱列跡である。柱掘形は円形で、P3996・P3998・P3999には柱根が残存した。

遺物はP3999から灰釉系陶器が1点、全てのピットから木製品が4点出土した。本遺構時期は、検出状況からVII期と考えられる。

第3項 土坑

SK77 (図版350) C 1 地点 GI87

平面形は北側が調査区外となるかやや不整形な円形と考えられ、断面形は皿状である。性格は不明である。

遺物は土師器が5点、灰釉系陶器が31点、その他の中近世陶器が3点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVII期と考えられる。

SK105 (図版350) C 13 地点 LQ36

平面形は東西方向の楕円形で、断面形は皿状である。中心やや西寄りに礎が置かれたいた。性格は不明である。

遺物は土師器が19点、その他の須恵器が8点、灰釉系陶器が16点出土した。本遺構の時期は、検出

状況と遺物からⅦ期と考えられる。

SK110 (図版350) D1地点 CO68~CQ68

平面形は東西方向のやや不整形な長方形で、断面形は皿状である。SK115を切る。性格は不明であるが、多時期にまたがる土器の出土状況からゴミ穴のようなものの可能性が考えられる。

遺物は土器が4点、その他の須恵器が1点、灰軸系陶器が330点、中国磁器が1点、中世土器が1点、その他の中近世陶器が23点、木製品が11点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からⅦ期と考えられる。

SK116 (図版351) D1地点 CO69~CP70

平面形は楕円形で、断面形は半円形である。埋土中には多くの土器や木製品が含まれていた。SD161・SD163を切っている。埋土中の様子から廃棄土坑と考えられる。

遺物は弥生土器が1点、土器が64点、その他の須恵器が1点、灰軸陶器が6点、灰軸系陶器が294点、中世土器が9点、その他の中近世陶器が7点、木製品が115点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からⅦ期と考えられる。

第4項 水田跡

Ⅶ期の水田跡は柿田遺跡の大半の調査区で最初に検出される。表土層と明治期の水田耕作土を除去していく過程でⅡa層・Ⅱb層中より畦畔がみえはじめ、Ⅱb層・Ⅲa層上面が水田耕作土上面となる。また、これらの土層にはプラント・オブールも多量に含まれており(第7章第13節参照)、調査によって得られた結果と自然科学分析結果が合致している。

図版352にⅦ期の水田跡全体図を掲載したが、氾濫源側の残りがよく、扇状地性堆積物上では畦畔の痕跡がほとんど確認できなかった。また、A1・A6・A12地点などのように、表層の条里型地割の坪境と大畦畔がほぼ一致する地点があることから、各地点毎のⅦ期の水田跡と表層の条里型地割を並列して1枚の図版に掲載し、両者が容易に比較できるように心掛けた。なお、本報告書で述べる「表層の条里型地割」とは昭和24年の米軍撮影時の水田地割を示し、掲載した図は米軍が撮影した写真から平面図を作成したものである。

以下、各地点毎に説明する。

A5・11地点 (図版353、写真図版175)

地形の傾斜は東高西低であり、南東隅は下層の砂礫層が隆起に伴い水田面も高くなっている。畦畔はⅡa層中で見え始め、Ⅲa層上面を田面とした。検出本数は東西9条、南北6条である。そのうち、SM27とSM28・30は2条並列しているが、検出レベルがわずかに異なることから季節毎の畦畔の作り替えにより、古い時期の畦畔が遺存していた可能性が高い。また、SM30以西では南北畦畔を基軸とするが、以東では東西畦畔を基軸としている。なお、SM30は表層の条里型地割の坪境に位置する。水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

A1・6・12 (図版354・355、写真図版175)

地形の傾斜は東高西低であり、南東隅は下層の砂礫層が隆起に伴い水田面も高くなっている。畦畔はⅡa層中で見え始め、Ⅲa層上面を田面とした。検出本数は東西18条、南北14条である。そのうち、

SM53とSM58は2条並列しているが、検出レベルがわずかに異なることから季節毎の畦畔の作り替えにより、古い時期の畦畔が遺存していた可能性が高い。しかし、SM47とSM48、SM60とSM62、SM45とSM46は同時存在か否かは検証できない。SM49以西では南北畦畔を基軸とするが、以東では東西畦畔を基軸としている。なお、SM49は表層の条里型地割の南北坪境に、SM1・55は東西坪境に位置する。これらは、いずれもⅤ期（8世紀）の道路遺構上面に造られており、SM49付近の田面が高いのは道路遺構の盛土の影響である。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

A 2・7・13地点（図版356・357、写真図版175）

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はⅡa層中で見え始め、Ⅲa層上面を田面とした。検出本数は東西21条、南北30条である。そのうち、SM87とSM88、SM84とSM85は2条並列しているが、検出レベルがわずかに異なることから季節毎の畦畔の作り替えにより、古い時期の畦畔が遺存していた可能性が高い。また、A13地点では畦畔が湾曲しているものの南北畦畔を基軸としており、A 2・7地点では東西畦畔を基軸とする。A 2地点南側では表層の条里型地割にほぼ対応する位置で畦畔が検出されたが、北側ではそれらが確認できなかった。SM96は表層の条里型地割の坪境に位置するが、北側には延びていない。水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

A 3・8・9・14地点（図版358・359、写真図版175）

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はⅡa層中で見え始め、Ⅲa層上面を田面とした。検出本数は東西12条、南北11条である。そのうち、SM13とSM15、SM19・20とSM16は畦畔が切り合って検出された。A 8地点東側では畦畔の方向が真北から若干傾いているが、これらは下層の流路の影響で田面が流路部分のみ窪んでいたためと思われる。A14地点のSM20以西では南北畦畔を基軸とし、A 3地点では東西畦畔を基軸とする。大半の畦畔が表層の条里型地割にほぼ対応する位置で検出されたが、畦畔の方向が真北から若干傾いている箇所は対応しない。SM14とSM15、SM122とSM123の畦畔がわずかにずれていることから、水口であった可能性がある。なお、田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

A 10・15・16地点（図版360～363、写真図版175・176）

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はⅡa層ないしはⅡb層中で見え始め、Ⅱb層ないしはⅢa層上面を田面とした。検出本数は東西9条、南北12条である。そのうち、SM148・149・151付近は検出時に砂質シルトが広がっており、NR29から溢れた洪水砂が畦畔脇に堆積していたと考えられる。また、SM147はⅥ期の用水脇の大畦畔で、Ⅶ期まで遺存していたものである。SM150は幅約2.0mの大畦畔で、NR28に接しており、NR28底面と畦畔天端の比高差は約1.0mである。畦畔の天端脇には杭列が打ち込まれており、NR28内にも畦畔への水の浸食を防ぐために水制遺構が設置されている。この地点では、南北方向の畦畔はほぼ真北を向くが、東西方向の畦畔は明らかに地形に応じて設置されている。A10地点では東西方向の畦畔が基軸となる。大半の畦畔が表層の条里型地割にほぼ対応する位置で検出され、大畦畔であるSM150は、調査区壁面で観察する限り明治時代の大畦畔の直下に位置している。SM130とSM131は畦畔の高さかほぼ同じであるが部分的に重複していることから、水口であった可能性がある。A10地点のSM130とSM128の間には南北方向の細い溝が数条検出されたことから、これ

らは田面造成時における痕跡かもしれない。なお、SM150内では比較的残りのよい瀬戸美濃大窯製品が出土している。これは、流路内の破片と接合しているが、畦畔に伴う埋納遺物の可能性も否定できない。

B 1～3 地点 (図版364、写真図版177)

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西9条、南北12条である。B 2・3地点では東西畦畔が基軸であるが、B 1地点ではSM171のように南北畦畔を基軸とするものや、VI期の流路際の畦畔を基軸とするものがある。大半の畦畔は表層の条里型地割にはほぼ対応する位置で検出されたが、VI期の流路内は畦畔がまだ造営されていない。この流路部分が窪んでいたとするならば、SM167とSM168・169の畦畔の切れ目は尻水口となる。SM178とSM179、SM182とSM183は畦畔が並列しており、それらの北側のSM177には畦畔の切れ目がみられることから、畦畔間の溝状の窪みが水路であった可能性もある。なお、畦畔に伴う埋納遺物は出土していない。

B 4・5 地点 (図版365・366、写真図版178・179)

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西6条、南北7条である。基軸は大畦畔であるSM198であり、そこから直交するように小畦畔が延びている。なおSM198は、A16地点の大畦畔であるSM150と同一畦畔である可能性が高く、畦畔の先端幅は0.8～1.0m、下端幅は1.8～2.0mである。

畦畔先端には、水田へ導水するための取水溝と考えられる深さ0.1～0.2mの浅い溝がある。取水溝に接続する水口を5箇所で見出し、水田1筆につき1箇所到大畦畔から延びる水口が設置されていたことになる。取水溝の底面レベルは南西が高く北東が低いため、南側から導水していたと考えられる。また、畦畔下場の両側に浅い溝を検出した。これは畦畔補修のための土を畦畔脇から取るために穿たれた溝の可能性が高く、取水溝に近すぎることから排水溝ではないと考えられる。なお、大畦畔先端と法面には杭以外の小さなFe斑紋が無数にあり、これを草の根に染みこんだ水分痕跡とするならば、畦畔は草で覆われていたとも考えられる。

大半の畦畔は表層の条里型地割にはほぼ対応する位置で検出されたが、表層条里の畦畔よりも本数が多い。SM193とSM198の断面を図版365に掲載したが、いずれもVII期の畦畔直上に明治期の畦畔が造られている状況がわかる。SM202は畦畔が切れており、北から南への微砂の流れが確認できたことから、水口であった可能性が高い。なお、畦畔に伴う埋納遺物は出土していない。

B 7・8・C 6・7 地点 (図版367、写真図版179)

地形の傾斜は東高西低であり、B 8地点は表土直下がIX層で畦畔を検出できなかった。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西6条、南北5条である。そのうち、SM221・222は他の畦畔より幅が広く、SM222は表層の条里型地割の坪境に相当するため、大畦畔となる可能性がある。B 7地点では東西畦畔を基軸とするが、他地点は定かでない。大半の畦畔は、表層の条里型地割にはほぼ対応する位置で検出された。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

D 1・2 地点 (図版368、写真図版180)

地形はほぼ水平であるが、西側が若干下がる。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とし

た。検出本数は東西6条、南北9条である。そのうち、SM245~247は表層の条里型地割の坪境に位置し、その東側に柱列跡が検出された。また、D1地点の畦畔はVII期の流路上に位置することから、その時期はVII-3期か、あるいは近現代まで下る可能性がある。表層の条里型地割とはあまり対応しておらず、検出した坪境の畦畔も若干西にずれており、むしろ柱列跡が条里型地割の位置にほぼ対応している。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

D3・6・7地点 (図版369、写真図版180)

地形はほぼ水平である。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西6条、南北2条である。そのうちSM284は用水脇にある大畦畔であり、杭や横木などの土木材を芯とする構造であった(第7項SW37・86参照)。この用水と大畦畔は、表層の条里型地割においてもほぼ同じ位置で確認できる。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

D4・8地点 (図版370、写真図版180)

地形は南高北低であり、南端では畦畔は検出できなかった。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西5条、南北3条である。そのうち、D8地点の畦畔は、VII期の流路上に位置するため、その時期はVII-3期か、あるいは近現代まで下る可能性がある。D4地点の畦畔は表層の条里型地割とはほぼ対応するが、D8地点は対応しない。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

D5・9地点 (図版371、写真図版180)

地形は南高北低であり、南端では畦畔は検出できなかった。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西9条、南北6条である。D5地点の南東隅ではほぼ等間隔に溝状遺構が検出されたことから、この部分のみ畑として使用されていた可能性もある。検出した畦畔の大半は、表層の条里型地割とはほぼ対応する。D9地点の南端は畦畔が検出されなかったが、昭和20年代も畑地であり、水田として利用されていない。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

E1・2・3地点 (図版372・373)

地形の傾斜は東高西低である。畦畔はII a層中で見え始め、II b層上面を田面とした。検出本数は東西5条、南北22条である。そのうち、SM296とSM306は大畦畔であり、表層の条里型地割においても道として表記されている。基軸は定かでないが、E1地点では東西の大畦畔を、E3地点では南北の坪境に相当する溝SD247を基準にしているかもしれない。検出した畦畔の大半は、表層の条里型地割とはほぼ対応する。なお、SM30は表層の条里型地割の坪境に位置する。水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

第5項 溝

SD46 (図版455、写真図版158・159) A10・A15地点 EK57~ES58

最大幅約10m、深さ約0.6mで、約85mにわたり確認した。SD47埋没後に造られている。埋土上層は、白色の砂層で固く締まっている。当初、VI期の屋敷跡に付属する道路状遺構と考えたが、出土した遺

物などから屋敷廃絶後に造成されたものと認識を改めた。中央部、VI期の屋敷跡から南にまっすぐ延びる道の延長線部分がやや盛り上がっている。SD47埋没後、まだ屋敷の南面の南北道路が機能している時期にSD46は造成されたと考えられる。性格は不明であるが、上層の砂層の様子が、時期は違うが顔戸南遺跡の道路状遺構や本遺跡SD12などに似ていることから、同じ様な工法で造られた道路の可能性が考えられる。なおA10地点では、SD46廃絶後にIII層の水田が形成されている。水田の形成時期を考える上で、本遺構の時期は重要である。

遺物は土師器が21点、その他の須恵器が7点、灰軸陶器が1点、灰軸系陶器が287点、その他の中近世陶器が7点、木製品が2点出土した。本遺構の時期は、土器からVII-2期と考えられる。

SD59 (附図9) A16地点 DO55~DP56

幅約0.4m、深さ約0.2mで、長さ約8mにわたり検出した。南端はNR31ないしはNR28と連結し、北端は不明である。断面形は皿状を呈し、水流の方向は底面レベルから判断して北から南である。北端は道路状遺構であるSD58の南法尻に位置することから、その排水を目的に掘削された溝の可能性が。また、南端はSW64の東側に位置する。

遺物はその他の須恵器が1点、灰軸陶器が1点、灰軸系陶器が42点、その他の中近世陶器が6点、木製品が1点出土した。本遺構の時期はVII期と考えられる。

SD109 (図版374) C1地点 GI87~GI88

幅約0.4mの素掘溝で、約6mにわたり確認した。南は調査区外に延びており、北で東西方向の溝SD113につながる。溝の性格は、水田耕作に伴うものの可能性が考えられる。

遺物は土師器が102点、その他の須恵器が6点出土した。本遺構は、遺物や周囲の状況からVII期と考えられる。

SD110 (図版374) C1地点 GJ87~GJ88

幅約0.4mの素掘溝で、約4mにわたり確認した。南は調査区外に延びている。溝の性格は、SD109と同様に水田耕作に関わるものの可能性が考えられる。

遺物は灰軸系陶器が1点出土した。本遺構は、遺物や周囲の状況からVII期と考えられる。

SD111 (図版374) C1地点 GJ87~GK87

幅約0.4mの素掘溝で、約8mにわたり確認した。浅い溝で、東端は確認できていない。溝の性格は、SD109と同様に水田耕作に関わるものの可能性が考えられる。

遺物は出土していない。本遺構は、周囲の状況からVII期と考えられる。

SD121 (図版374) C6地点 EE89

幅約0.6mの素掘溝で、約1.5mにわたり確認した。北は試掘トレンチによって破壊されている。溝の性格は不明である。

遺物は出土していない。本遺構は、周囲の状況からVII期と考えられる。

SD122 (図版374) C6地点 ED89~EE90

幅約0.5m、長さ約3mの素掘溝である。溝の性格は不明である。

遺物は出土していない。本遺構は、周囲の状況からVII期と考えられる。

SD205 (図版375、写真図版182) D6地点 CE84~CF84

幅約2m以上の素掘溝で、約10mにわたり確認した。北は調査区外で、中央は試掘トレンチで破壊

されている。埋土は上下2層に分けられる。同時に存在するSD204・SD206との関係を解明する調査は、試掘トレンチの影響で困難を極めたが、北流するSD206とSD204が合流しSD205となると考えられる。SD204は、畦畔脇に掘削された溝である。溝の性格は、水田耕作に關係する用水路と考えられる。

遺物は土師器が26点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が15点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器197点、中国磁器が1点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が51点、瓦が1点、木製品が2点出土した。本遺構の時期は、一連であるSD204からVII-2期と考えられる。

SD206 (図版375、写真図版182) D 6地点 CG84~CG85

幅約2m以上の条掘溝で、約10mにわたり確認した。南は調査区外で、北端は試掘トレンチで破壊されている。同時に存在するSD204・SD205との関係は、SD205で述べたとおりである。溝の性格は、水田耕作に關係する用水路と考えられる。

遺物は土師器が52点、古代の須恵器蓋杯が5点、その他の須恵器が26点、灰釉陶器が3点、灰釉系陶器が134点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が17点、瓦が2点、木製品が3点出土した。本遺構の時期は、一連であるSD204からVII-2期と考えられる。

第6項 自然流路

NR20 (図版376、写真図版184) A10・15地点 EN58~FE60

幅約12m、深さ約1mで、長さ約75mにわたり検出した。南端は調査区外へ延び、西端はNR29に繋がる。水流の方向は南東から北西であり、断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫ないしは粘土であった。この流路は近世末に用水として再掘削されており、昭和40年代の耕地整理で最終的に埋没した。

遺物は弥生土器が4点、土師器が56点、古代の須恵器蓋杯が7点、その他の須恵器が21点、灰釉陶器が17点、灰釉系陶器が812点、中国磁器が3点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が157点、木製品が5点、石器が2点出土した。なお、本遺構の掘削開始時期はVII期である。

NR28 (図版378、写真図版183) A16地点 DN61~EA56

幅約11m、深さ約1mで、長さ約33mにわたり検出した。南端は調査区外へ延び、北端はSW43によりNR29と分断されている。水流の方向は北東から南西であり、流路内にはSW39・40・44・45が設置されている。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫ないしは粘土であった。DO~DP列においては、SD56とNR31に伴う畦畔状の高まりが断面観察で確認できたことから、NR28の埋土が水田耕作土として利用されていたといえる。

遺物は弥生土器が1点、土師器が60点、古代の須恵器蓋杯が24点、その他の須恵器が62点、灰釉陶器28点、灰釉系陶器が2788点、中国磁器が13点、中世土師器が20点、その他の中近世陶器が275点、木製品が143点、石器が1点出土した。土師器と須恵器は混入である。なお、本遺構の時期はVII期と考えられる。

NR29 (図版379~381、写真図版183・186・225) A16地点 DK54~EE56

DP~EF列までは幅6~10m、深さ約1m、DKからDP列までは幅約4m、深さ約0.5mで、長さ75mにわたり検出した。東から西に流れる流路である。A16地点では長さ約75mを検出したが、A

15、A10、B1地点に連続していることから地域一帯を流れていた基幹水路であったと思われる。また、NR29とNR28は本来一連の流路であったが、SW43の構築に伴い分断されている。

NR29南肩の検出ラインの識別は、地山である明灰色粘土と流路埋土の砂礫との境、及びSW43の盛土である砂礫や粘土と流路埋土との境であった。SW43盛土の砂礫と流路埋土の砂礫は見ただけでは区別ができなかったが、盛土の砂礫は移植ゴテでは掘削できないほど硬質であったことから、その識別は比較的容易であった。流路の北肩のベース土は地山であるVII層と遺物を含まない流路の河床礫であり、流路埋土とは大きく異なるため検出は比較的容易であった。

流路の断面形は概ね皿状を呈する。埋土の上層は江戸時代から明治時代にかけて掘削された用水によって切られ、そこからビニールやU字溝などが出土したことから耕地整理時に完全に埋められたと思われる。この近現代の用水の立ち上がり部には太い直立杭が打ち込まれていたが、図化せずに写真撮影のみにとどめた。流路埋土は砂礫層が主体であり、部分的にシルトや粘土が入る。

DK-DO列の流路の立ち上がり部には、杭が約1m間隔に20-30°の角度で打ち込まれており、その上に横木が据えられていた。また、DP53-DP54にかけて直径20cm程度の芯持ち材が枠状に組まれていた。これらはいずれも明治時代の用水に伴うものであり、枠状施設にあたる場所は地籍図で橋が表現されている箇所に対応している。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が1点、土師器が60点、古代の須恵器蓋杯が9点、その他の須恵器が80点、灰軸陶器が30点、灰軸系陶器が3469点、中国磁器が12点、中世土師器が5点、その他の中近世陶器が520点、陶丸が1点、籾羽口1点、木製品が291点、石器が1点出土した。本遺構の時期はVII期と考えられる。

NR31 (図版378、写真図版183・185) A16地点 DN61-EB56

幅2-4m、深さ約0.8mで、長さ約52mにわたり検出した。NR28の埋土を掘削して作られており、北端はNR29より分岐し南端は調査区外へ延びている。水流の方向は北東から南西であり、流路内にはSW64が設置されている。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫であった。DO59では流路の西法尻で杭が出土し、その西側で畦畔状の高まりが断面観察で認められた。

遺物は土師器が19点、古代の須恵器蓋杯が6点、その他の須恵器が24点、灰軸陶器が18点、灰軸系陶器1376点、中国磁器が4点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が50点、木製品が6点、出土した。土師器と須恵器は混入である。なお、本遺構の時期はVII-3期と考えられる。

NR33 (図版378) A16地点 DT56-EC57

幅0.6-1.0m、深さ約0.2mで、長さ約13mにわたり検出した。西端はNR28に連結する。水流の方向は東から西であり、NR28との合流点ではNR28の上端がわずかに膨らみ、周辺より若干広い平坦面を作り出している。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は黒色粘土であった。また、NR33の南側には杭列(SW48)があり、NR33とはほぼ平行していることから一連の遺構と考えられる。

遺物は土師器が1点、その他の須恵器が1点、灰軸系陶器が20点、その他の中近世陶器が1点出土した。本遺構の時期はVII期と考えられる。

NR40 (図版378、写真図版186) A16地点 DK54-DO54

幅約2m、深さ約0.3mで、長さ20mにわたり検出した。東から西に流れる直線的な流路であり、西端は調査区外へ延びている。断面形は皿状を呈し、埋土は上層の粘土層、下層の砂礫層の大きく2層

に分けられる。東端は NR29に連結しており、連結部には直立杭が5本みられたことから堰であったと思われる。DK~DM列にかけては溝の南北の立ち上がり付近で杭列が検出された。杭はいずれも直立杭であり、その間隔は0.2~0.5mである。溝の南肩は地山であるVII期で、北肩は盛土であり、盛土は構造材Bをわずかに含む黒色粘土で5~10cm程度の厚みであった。これは NR40に10cm前後の砂礫が堆積した後に構築されている。

本遺構の時期はVII-1期と考えられる。

NR110（図版377） D 8地点 BJ80~BM77

幅5m、深さ約0.6mで、長さ14mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びる。水流の方向は北東から南西であり、南岸に SW89、北岸に SW92などの護岸施設を有する。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫であった。本遺構は流路の底面付近しか把握できなかったが、調査区中央付近以北では地表面から約0.5~1.0m下で砂礫層から灰釉系陶器が出土していたため、流路の幅はかなり広がったと思われる。

遺物は土師器が12点、その他の須恵器が13点、灰釉陶器が13点、灰釉系陶器が284点、中国磁器が2点、その他の中近世陶器が8点、木製品が2点出土した。SW89・92の構築時期がVII期であるので、本遺構もVII期には確実に存在していたといえるが、VI期の流路をVII期において掘削しなおしている可能性もある。そのため、本遺構の時期はVI~VII期と考えられる。

第7項 水制遺構

SW43（図版382~423、附図21・22、写真図版15・189~218） A16地点 DK54~EE56

NR29とNR28の境に位置し、NR29からNR28への水流を分断して、主としてNR29へ導水している。NR29とNR28は幅約11.0m、深さ約1.0mの流路であり、SW43により分水される範囲（DK54~DO54）は幅約4.0m、深さ約0.7mである。流路の断面形態はどの地点でも概ね皿状を呈する。SW43全体が流路にどれほどの砂礫が堆積した後に構築されたかは検証できないが、部分的には約0.6mの砂礫の高まりを利用して構築されている事実から、SD60からNR28・29の位置に河道が移動した後に一定量の砂礫が堆積し、その後構築されたといえる。なお、DK列~DO列、EC列~EF列は基本的に流路の肩に、またDP列~EB列は流路内に盛土が築かれており、盛土基底部の土は前者がしまりのよい灰白色粘土、後者が砂礫となる。

SW43の規模は検出した長さが約75m、第1次盛土は最大値で高さ1.2m、数幅3.6m、第2次盛土は最大値で高さ1.7m、馬路幅2.5m、数幅4.8mを測る。

内部構造はDK列~DO列、DP列~EB列、EC列~EF列の3箇所異なる。

DK列~DO列はNR40を埋めて構築されており、基本的に杭などの土木材や構造材を用いず砂礫層のみの盛土である。

DP列~EB列は流路内に設置されており、複雑な内部構造を有する。そして、土層の断面観察から大半の場所で2時期の盛土とそれに伴う流路埋土が確認できたことから、最初の盛土を第1次盛土、改築した盛土を第2次盛土とした。第1次盛土は粘土かシルトを主体とし、層間に構造材A・Bを敷き、砂礫を部分的に入れる構造である。基底部は横木と縦木を置き、その上に斜杭を据える、あるいは打ち込んでいる。直立杭は基底部の上に粘土層を充填してから列状に打ち込まれている。第2次盛

土は直径10～15cmの円礫を含む砂礫を主体とし、層間に構造材Aや粘土を入れる。また、検出面では構造材A・Bが極めて密に敷かれている場所もみられ、法尻では直径10cm程度の粘土ブロックが数個固まって確認できた。杭は列状に打ち込まれた直立杭を基本とし、杭の大半は枝が伸びる方向を杭先としていた。なお、第1次盛土と第2次盛土の境には流路埋土が入り込む箇所が数箇所でも確認できたことから、第1次盛土が河川堆積で埋没した後に第2次盛土を再構築したことがわかる。また、第1次盛土は南側を、第2次盛土は北側をそれぞれ強固に構築していることから、第1次盛土の川表方向は南、第2次盛土の川表方向は北といえ、改築の際に流路の主流を変えた可能性が指摘できる。

EC列～EF列は流路の南肩に構築されている。DP列～EB列のように第1次盛土と第2次盛土には分けられなく、基本的に第2次盛土と同じ構造である。しかし、VI期の段階で溝(SD69)が存在していた箇所には長さ30～50cm程度の角礫と円礫を1～3段積み並べて埋め殺しとし、盛土をより強固にしていた。

SW43の川表・川裏方向の堆積物は基本的に砂礫である。通常、水制遺構の川裏方向は止水状態となるため粘土質の堆積がみられるが、SW43はNR28方向へも導水していたために前後に砂礫が堆積した可能性がある。なお、洪水により粘土質の堆積が流された可能性も考えられるが、盛土の崩壊が著しくないことから考えると、前後の砂礫の堆積はSW43前後に水流が存在していたためと考えた方が妥当である。また、SW43全体を被覆しているのは砂礫層であり、最終的には河川堆積により埋没したといえる。

遺物は弥生土器が1点、土師器が23点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他の須恵器が18点、灰軸陶器が8点、灰軸系陶器が363点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が13点、木製品が2856点、石器が1点出土した。出土遺物は灰軸系陶器Kが圧倒的に多く、他に須恵器・土器などがある。第一次盛土から出土した灰軸系陶器碗は、ほぼ完形で底面に特殊な墨書がみられるものや、底部に焼成後穿孔を施したのも出土している。第2次盛土からは灰軸系陶器Kが逆位で5枚重なって出土した(図版422)。検出面では灰軸系陶器の周囲の土がわずかに紫色に変色していたため、周囲で火を使用した行為が行われた可能性がある。また、灰軸系陶器の周囲に掘り込みが確認できなかったことから、盛土完成間近の段階で灰軸系陶器を5枚据え、その後盛土をしたと思われる。

出土遺物の時期は、第1次盛土に伴うものがおよそVII-1期で、第2次盛土に伴うものがおよそVII-2期である。

以下に各グリッド毎の平面と土層断面の様相を記す。

【DK～DP列(図版384～392)】

NR40を埋めて構築された箇所である。

掘削1段階：馬踏幅0.5～0.6m、数幅約1.6mで検出面では微砂が多くみられる箇所と直径3mm程度の小礫に微砂がわずかに入る箇所があった。古代の道路状遺構の埋土と同様の微砂が直線的に延びていることから、道路の工法を意識して構築された堤防と思われる。この盛土はNR40がある程度埋まってから約0.15m盛っている。なお、検出面でみられる杭列は、いずれもNR40に伴う護岸施設である。

掘削2段階：DO54においてNR29からNR40が分岐することが判明した。分岐点には直立杭が4本残っていたが、その用途は不明である。NR40の南北法面には直立杭が0.2～0.5m間隔で打ち込まれており、杭列に伴う粘土による盛土も一部確認できた。SW43の盛土を除去していくと、構造材Bや小礫

が幾つか確認でき、盛土を構築する以前のNR29の南側の上端が確認できた。なお、この段階でDO55において、5枚重なった灰釉系陶器が出土した。

掘削3段階：多数の直立杭とともに横木、縦木、円礫、構造材A、構造材Bなどを検出した。直立杭の密度は極めて高いが、DP列以东にみられるような長い横木はなかった。横木や縦木は直径3cm前後の細いものが多いが、DO55では南西から北東方向に据えられた太い横木が数本みられた。構造材は枝が残っている構造材Bが多いが、基底面で構造材A（樹皮）が水平に据えられ、その上から直立杭が打ち込まれている箇所もあった。なお、杭間からはⅦ-1期に属する灰釉系陶器が完形で2個体出土した。

【DP～DQ列（図版393～395）】

掘削1段階：検出時において暗青灰色粘土の盛土上面に拳大の礫が多数あり、その北側法面に一列の杭列と枝付きの構造材Bが、南側法尻には横木が2本みられた。この横木や礫、構造材Bが岸まで入り込んでいたことから、この段階で堤防がさらに西まで延びていることが判明し、岸端は約0.3m幅で灰色粘土が貼り付けてあった（J-J'）ことから、この部分のみ整地していることが明らかとなった。なお、岸上端とSW43との比高差は約0.2mであった。

掘削2段階：円礫が平面的に検出された。礫自体は扁平な面をそろえているわけではないが、全体的にみるとほぼ水平に据えられている。

掘削3段階：掘削2段階の円礫を除去すると、小礫混じりのシルトがひろがり、構造材Bが盛土北側にみられた。構造材Bの中には幅約40cmの樹皮もみられ、構造材として使用されていたと思われる。また、直径約30cmの木の株もみられた。なお、この段階で南法面の横木が浮いたので除去すると、横木を止めるための直立杭が数本確認できた。

掘削4段階：構造材Bを除去すると、再び円礫群がみられた。円礫の密度は比較的高く、木の株が2箇所を確認できた。また、杭列が3列確認できた。

掘削5段階：円礫群を除去すると、下から小礫と粗砂から構成される砂礫層を検出し、円礫はほとんどみられなくなった。砂礫層上面には構造材A・Bが東側を中心に検出でき、掘削6段階では西側を中心に構造材A・Bが広がっていたことから、構造材集積に若干の比高差があったといえる。また、南側の横木に接する斜杭はいずれも杭頭を南に向けており、その密度は極めて高い。構造材は斜杭の上に斜杭の打ち込み角度に平行して敷かれていた。なお、この段階で横木と斜杭の間からは完形の灰釉系陶器が出土した。

掘削6段階：堤体南側に横木が2列検出でき、それぞれに斜杭が組み合っていた。構造材集積は西側で検出でき、いずれも斜杭の上に敷かれており、粘土で被覆してあった。西端には木の株がみられたが掘削していくと浮いてしまったため、構造材として入れられたと思われる。

掘削7段階：構造材を除去すると、横木の上から打ち込まれた斜杭の全貌が明らかとなった。掘削6段階でみられた2列の横木のうち、北側の横木が南側の横木に伴う斜杭の上ののっていることから、南側の横木と斜杭を設置してから北側の横木と斜杭を設置したことがわかる。南側の横木は西に、北側の横木は東にそれぞれ延びていることから、この堤防は西から東へ順番に構築されたことがわかる。また、斜杭と横木の間にも構造材Bがみられた。これは横木と同じ方向に据えられており、横木の位置から堤防基部まで連続して敷かれていた。

掘削8段階：DR～DS列の掘削5段階と同様である。

【DR～DS列（図版396～398）】

掘削1段階：検出時には法面に数本の杭頭と小礫が、馬踏には長さ約280cmの横木がみられた。それ以外は粘土の被覆層が遺存していた。

掘削2段階：盛土中央部には直径5mm程度の小礫と粗砂が主体となる砂礫層があり、その北側に杭列と構造材Bを含む砂質シルト、その北側に拳大の礫列がみえ、礫列の上には構造材Bが被さっている箇所もあった。南法面側は直径5cm程度のやや大きな礫と小礫が主体で、中央部の砂礫層との境には直径15cm程度の横木が埋もれていた。この横木と掘削第1段階の横木の比高差は約70cmである。

掘削3段階：斜杭が30～40cm間隔で打ち込まれ、その上に構造材Bが被覆されていた。構造材はやや太いものを斜杭と同じ方向に設置し、その上に細かいものを直交して被しており、構造材には葉が遺存しているものもあった。また、堤防基部にあたる箇所でも、構造材Bが堤防の向きに直交するように据えられていた。なお、構造材の下端には構造材の上に拳大の円礫が幾つかみられ、粘土で被覆されていた。

掘削4段階：構造材Bを除去すると、杭先を南法面に向けた斜杭と斜杭の上に横木を検出した。その下には不定方向に置かれた構造材Bと面をそろえた円礫があった。さらにその下には、杭先を北側に向けた斜杭（あるいは縦木）が横木の上に据えられており、横木の堤体側には拳大の円礫が密に詰めてあった。この斜杭の杭頭は堤体の中央部まで延びておらず、円礫群にわずかにかかる程度であった。

掘削5段階：堤防基部の状況である。直径15cm程度の太い横木が3～4本平行して据えられ、横木に直交して直径15cm程度の縦木が横木の上に置かれていた。堤体内面に位置する横木はシルトに、外面に位置する横木は砂礫に埋もれており、横木は直立杭で固定されていた。横木の間は人頭大から拳大の円礫を含む砂礫層で、その上に構造材Bが確認できた。横木の長さは最大で8.75mを測る。DR55の杭があるあたりは横木が4本平行しており、その下からはほぼ完形の灰軸系陶器が2つ内底面を上にして出土した。

【DS～DT列（図版399・400）】

掘削1段階：馬踏東側において構造材A・Bの集積を検出した。これは幅約3.3×0.8mの範囲内に広がっており、大半は堤防の方向に平行して据えられていた。また、馬踏西側では礫群を検出したが、その上面レベルは均一でなかった。

掘削2段階：盛土を掘削していくと、盛土の中央部分に礫群、その北側に1列の杭列、その北側に砂質シルトが帯状に検出された。礫群の間には構造材Bが見え隠れしていた。礫は敷かれた様子でなく、詰め込んだような印象である。また、構造材Bの集積層より約17cm下のところから底部に穿孔がある灰軸系陶器が割れた状態で出土した。この灰軸系陶器の穿孔部付近に杭が打ち込まれていたことから、杭の打撃により割れたかもしれない。灰軸系陶器を除去すると、直下より燃えた植物遺体があり、その一部が灰軸系陶器に附着していた。

掘削3段階：横木と横木の上に杭先を北にむけた斜杭を検出した。これらの様相はDR～DS列に類似する。

【EA列盛土部分（図版400）】

掘削1段階：検出当初は粘土層の中にまばらに礫がみえていた。その後拳大の礫が隙間なく検出でき、その間に杭頭がみえた。

掘削2段階：礫をはずすと、流れに並行した方向で草本類がみえ、その下に水流に直交する草本類と小枝を検出した。そして、草本類の下には粘土層があった。杭はいずれも直立杭でランダムに配置され、杭の間に礫が隙間なくあった。このことから、杭を打ち込んでから礫を充填したと想定した。草本類（構造材A）と小枝（構造材B）は、構造材Bの上に向きをえて2層に構造材Aが被覆されていた。基底には長さ約450cm、直径約10cmの横木があり、水平でなく西高東低の傾斜で据えられていた。また、掘削1段階で検出した盛土の南東法面に沿って杭列を検出した。これは、NR31の流路北肩に相当するため、護岸も兼ねていると思われる。

掘削3段階：横木が長いことが明らかとなり、その北側で東側から連続して設置された構造材Bが検出できた。構造材Bは直径1cm程度の細長い小枝で高さ20cmほど検出され、杭列を縫うようにしがらみ状に設置されていた。また、斜杭が横木の上に据えられていた。

【EA～EB列の盛土のない部分（図版401・402）】

掘削1・2段階：構造材B（直径1.0～2.5mmの細い木）を水流の方向に並行して据えてある。この木は約4m検出し、大半は枝を払い落としてなかった。また、その上にシュロ（棕櫚）の毛が敷いてある箇所や斜杭がNR29側に打ち込まれている箇所もあった。この場所は盛土や礫集積がないことから、分水地点と認識した。

掘削3段階：掘削1段階の構造材Bを除去すると、さらに下に構造材がみられた。上部と同様に大半が枝付きで、水流の方向に並行して据えてあった。これらは直径2cm程度の細い杭で固定されており、構造材に直交するように長さ約180cmの縦木がみられた。縦木は構造材間に据えられており、その間には粘土が充填してあった。

【EB列～EC列（図版403・404）】

掘削1段階：NR29上端より約12cm掘削した時点で構造材Bの集積を検出した。材は直径5～20cmで大半はNR29上端ラインに平行している。その下部には上端ラインに直交する方向に構造材Bがみられたが、その数は少なかった。これらの構造材は長さ30～50cm程度の礫列の上に存在していた。

掘削2段階：南肩を広げると、さらに構造材Bの集積が続き、杭列が東側に延びていった。構造材集積はVII層直上に位置していることから、堤防基底部に構造材を敷き、その後盛土を施したことがわかる。

【EC列～EF列（図版405・406）】

掘削1段階：長さ30～50cm程度の角礫と円礫を1～3段積み並べ、その間に直立杭や直径10～15cmの横木を芯材としていた。礫の平坦面の向きは不定であり、礫の上に構造材Bがみられたことから礫は埋め殺しであったと思われる。礫のうち、人頭大のものは20個あり、材質はチャート7、花崗岩5、濃飛流紋岩類5、砂岩2、安山岩1であった。最も多いチャートは柿田遺跡の北側丘陵地にみられるものである。

掘削2段階：礫列の南側の盛土を除去すると2列の杭列が検出された。杭は大半が直立杭で、杭頭のレベルは盛土中に取り、盛土の検出面でみえるものや、盛土敷上面まで打ち込まれているものはほとんど確認できなかった。杭先は地山とした明灰色粘土まで打ち込まれ、その下の砂礫層上面でと

まっているものが多かった。また、杭頭と同レベルで構造材Bが杭列の内側に2列据えられていた。杭列間は約2.0mである。礫列を除去するとその下からも杭が多数出土した。礫列のすぐ北側と南側では、北側の方が圧倒的に杭の数が多く、つまり、盛土の川表方向の方に杭をより多く打ち込んだといえる。また、礫の下からは板材や構造材もみられた。流路底面の杭は一見ランダムに見えるが、NR29の上端ラインより20~30°北に傾いたラインに沿って杭が3列打ち込まれており、水流調整がなされていたと思われる。なお、礫の裏込として直径3cm以下の小礫を含む砂礫が断面で確認できた。

【EC54~EE55、NR29内北側杭列（図版403~406）】

NR29の北側立ち上がり付近で検出した杭列である。杭は直線的に数列並ぶが、ED54の河床礫が露出している箇所になると極端に本数が少なくなる。杭が直立杭か、杭頭を若干南に傾斜させるもののみであり、杭に伴う盛土は確認できなかった。これらの杭列はNR29底面よりも若干浮いているものが多いことや、杭自体が南側の杭列よりも長く残存していることから、明治の用水に伴う杭列の可能性もある。

【ED56（図版422）】

合掌型に組んである水制遺構であり、構造や規模から堰といえる。表法面に4本、裏法面に1本の斜杭があり、馬路と表法尻に横木がある。杭間の内部は砂礫であり、縦木もわずかに確認できた。この堰はSD69方面に水を導水していることから、VI期の遺構と考えられる。

【盛土の堆積状況】

A-A'とB-B'（図版407）は角礫列と盛土との関係を示している。A-A'では第1次盛土が20~30cm程堆積している。盛土の上面約10cmは移植ゴテでは掘削できないほど硬化していた。また、第2次盛土との層境は凸凹であり、第1次盛土内において大きく3層に層境が明瞭に分かれた。硬化層や凹凸の存在などから、土を盛っては突き固める作業をしていたことがわかる。これはB-B'でも同様であった。第1次盛土は基本的に砂礫とシルト、あるいは粘土の互層堆積である。砂礫は直径5mm以下の礫と直径10~30mmの礫に分けられ、シルトの堆積が薄い。なお、構造材Bが部分的に入る。第2次盛土は層厚5~15cm程度であり、粘土ないしはシルトが主体で小礫がわずかに入る。そして、構造材Bが高南北の傾斜で面的に敷かれていた。なお、角礫列は第2次盛土の底面、ないしは盛土中に存在し、盛土の芯材として使用されている。

E-E'（図版409）は第1次盛土がすべて粘土かシルトであり、構造材A・Bを多く含む。また、堤防構築前は南側が大きく窪んでいたらしく、そこを植物遺体や砂礫を混ぜたシルトで埋め、シルト層の間に構造材Bを含む層が存在する。なお、第1次盛土と第2次盛土の間には砂礫層が存在し、なかにはラミナが確認できたことから、この地点では第1次盛土が洪水で完全に埋没した後に、新たに第2次盛土を構築したことがわかる。第2次盛土は構造材A・Bの両方が使用されており、構造材Aの敷かれた密度は極めて高い（図版402）。

F-F'（図版410）では盛土と流路の関係がよくわかる。第1次盛土は北法面よりも南法面の方が横木や杭などの配置が多く、より強固となっている。そして、盛土の南側には幅4m以上の流路がある。第2次盛土の段階では、第1次盛土の馬路から北法面にかけて補強されており、北法面には礫が多く用いられている。そして盛土の南北側に流路があり、南側の流路（NR29）は堤体に接するが、北側の流路（NR31）は堤体から離れたところを流れている。また、流路底面レベルはNR28よりNR29の方

が深い。

G-G'(図版411)は盛土が最も良好に残っていた場所である。堤防構築前は堤体中央部分にあたる箇所がわずかに盛り上がっており、その南北側が窪んでいたと想定される。その窪みを埋めるために第1次盛土として、粘土と構造材Bを交互に充填し、その上に砂礫層を被覆している。第1次盛土の南側には、盛土の時期の流路埋土である砂礫層が厚く堆積している。この砂礫層は下層が直径3cm以下の小礫と微砂、シルトのラミナ堆積層であり、上層は直径3~8cmのやや大きな円礫を含むことから、堤防機能時は流れが安定し豊富な水量であり、洪水により第1次盛土の堤防の機能が低下したと思われる。第2次盛土の下部は主として直径10~15cmの円礫を多く含む砂礫層から成り、部分的に構造材Bを含む粘土層が入る。また、北法尻付近には直径10cm程度の粘土ブロックが幾つか固まって検出され、堤体南側でもわずかにみられた。この粘土ブロックは概ね俵のような形状であり、最大のもので長さ17cmを測る。そして、叩いても割れない程堅くなく、丁寧に掘削すればその形状は保たれる程度のしまり具合であった。おそらく、手のひらで粘土を固めたものを盛土に入れ込んだ痕跡かと思われる。第2次盛土の上部は砂礫層の間に構造材Bを含む粘土層があり、馬路には構造材Aがみられた。

H-H'(図版412)は堤防構築前に深さ0.6m程の窪みがあり、そこを構造材Bを多く含む粘土で充填している。ここでは構造材Bとともにシュロ(棕櫚)の毛が带状に多数検出された(図412-14層)。上層は砂礫層と粘土層の互層堆積であり上層部には直径10~20cmの円礫を多く含む。この断面では第1次盛土と第2次盛土の明確な識別ができなかったが、杭の先端レベルが107.7m前後のものと108.1m前後のものがあることから、他の箇所と同様に最低1回の盛土の改築を行っていると思われる。そして、上段の杭列は砂礫層(5層)を貫いていることから、上段の杭列を打ち込んだ後に砂礫層を盛った可能性があることから、第1次盛土と第2次盛土の境は5層と6・7層の境としてもよいかもしいない。

I-I'(図版413)・K-K'(図版414)は道路状遺構(SD58)とそれに伴う流路埋土(NR29)の関係を示している。DO-DK列ではNR29が幕末から明治にかけての用水に大きく削平されており、その用水の最終埋土(図版380の36層)にはガラスやビニールが混じることから耕地整理前まで存続していたと考えられる。SD58は基本的に粘土と粗砂から成り、粗砂は箭状に不定方向に延びていた。

J-J'(図版414)はSW43の第2次盛土とNR28の流路埋土の関係を示している。図414の1~4・11層が第2次盛土、15~24層がNR28埋土であり、間に攪乱(13・14層)が入る。11層は第2次盛土の法面にあり、しまりのよい粘土であることから、堤体の粘土被覆の痕跡と思われる。

SW39・40・44・45(図版382・424・425、写真図版188) A16地点 DO60~DQ58

NR28内に位置し、NR28が大畦畔(SM150)の西側を流れる箇所、大畦畔から流路に張り出すように設置されている。

規模はSW44が2.1m、SW45が3.9m、SW40が約5.4m、SW39が約4.1mでいずれも杭と構造材から構成されていた。

盛土は平面では確認できなかったが、土層観察用畦でSW39前後に粘土層の高まりが確認できたので、盛土が存在していた可能性がある(図版425の14・16層)。一方、SW39の西部に設定した土層観察用畦では、杭の前後は微砂と砂質シルトのラミナ層がみられ、盛土は確認できなかった。これらか

ら、本来杭列のまわりに粘土による盛土が存在していたが、水流により流されたと想定できる。また、SW44・45は微砂と黒色シルトのラミナ層で埋没しており、杭前後の土層の違いは確認できなかった。しかし、杭列の周囲は下層が砂層、上層が粘土層であり、粘土層の厚みは10～15cm程確認できたことから、盛土が存在していた可能性もある。なお、杭列周囲や盛土内に拳大の円礫が幾つか確認できたことから、盛土として礫を使用していたかもしれない。

いずれの杭列も杭は直立杭であり、直線的な列でなく若干互い違いに打ち込まれており、その間に直径5～30mmの細い枝(構造材B)が横方向に設置されていた。構造材は長いもので長さ180cmもあり、大半が枝付きのまま設置されているが、本来枝が伸びていた方向を一定方向に向けるのではなくランダムであった。また、構造材は多い箇所では4段積み重ねられており、近世のしがらに類似している。杭は80～110cm程の長さで、最も長いものは140cmを測る。そして、河床から0.6～1.0mも打ち込んであった。なお、杭間は30～40cm間隔である。それぞれの杭列の主軸は、SW44がN124°W、SW45・40がN120°W、SW39がN103°Wであり、北から南に向かって水流方向に対する角度が急になっている。これにより、杭列は護岸とともに緩やかに水流方向を変化させていたことが想定できる。

これらの杭列は砂礫に埋没していたことから自然に廃棄されたと思われる。

遺物はSW39から木製品が34点、SW40からその他の須恵器が1点、灰釉系陶器が3点、木製品が63点、SW44から灰釉系陶器が6点、その他の中近世陶器が1点、木製品が30点、SW45からその他の須恵器が1点、灰釉系陶器が6点、その他の中近世陶器が2点、木製品が28点出土した。杭列基底部からは完形に近いⅦ期前半の灰釉系陶器が出土している。また、周辺の状況からSW43の第1次盛土と同時期に存在していた可能性が高く、杭列の時期はⅦ-1・2期と想定される。

SW37・86 (図版428～433、写真図版187・220・221) D 6地点 CG83～C182

SW37はⅢ層上面で検出した北東から南西へ延びる大畦畔であり、SW37の東側には溝(SD204)がある。また、SW86はⅣ層上面で検出した北東から南西へ流れる流路(NR100)の西肩にある護岸施設である。両遺構は検出した遺構面は異なるが、同一場所・同一方向に作られていることから、一連の構造物といえる。

SW37

SW37周辺の水流方向はSD204が北から南へ、SD206が南から北であり、両者がSD205に合流して西方向へ流れる。そのため、SW37は調査区西壁から西方向へ延びていると思われる。なお、SD204は幅約2.1m、深さ約0.45mで断面形は皿状を呈する。

SW37は盛土と直立杭を中心とした内部構造から成る。盛土の規模は検出した長さ12.8m、敷幅約2.1m、馬路幅約1.0m、高さ約0.45mであり、盛土は砂礫や砂岩粒を含むシルトないしは粘土が主体となる。

盛土は直立杭と横木を芯とし、構造材を部分的に使用している。調査区北壁際では盛土の中央付近に長さ260cmの建築部材(茅葺)を設置し、直立杭で固定していた。また南西側では盛土の中央付近に2列、東法尻付近に1列、合計3列の杭列が確認でき、盛土中央付近の西側の杭は大半が直立杭、東側の杭は斜杭と直立杭がみられ、法尻の杭は大半が直立杭であった。西側の杭列の間には構造材Bが密に設置されており、長さ約260cmで枝付きのものもみられた。また、SD204の東側にも2列の杭列がみられたことから、東側にも畦畔が存在していたと思われる。

SW37は最低1回の改修を行っており、図版431の第4次盛土(㉑)と第5次盛土(㉓)が該当する。第4次盛土は面的な広がりをもつことから、この時期に大規模な水田開発が実施された可能性が指摘できる。第5次盛土は第4次盛土の法面を覆うように設置され、図版431のB-B'、C-C'でみられるようにSD204の底面まで及んでいる。SD204の基盤層が砂であることから、溝内からの漏水防止を意図したと思われる。

遺物は出土しなかった。盛土の時期は盛土内出土遺物からみてVII期後半と思われる。

SW86

SW86はNR100の西面を構成する護岸施設である。NR100は幅2.8~8.0m、深さ0.8m以上の流路で、断面形は逆台形、ないしは皿状を呈する。流路の幅は北東側が狭く、南西に向かうにつれて広がり、その埋土は大半が砂礫であったが、調査区北壁付近のみ層厚0.6m以上の人為的な埋戻し土が確認できた。これは砂礫や地山ブロックが混在するシルトを主とし、層間には草敷が認められるものであり、明らかに止水を意図している。

SW86は杭や横木、矢板などを芯とする内部構造を有する盛土であり、最低2回の改築が確認できた。第1次盛土は粘土ないしはシルトから成り、内部構造をもたない。第2次盛土は第1次盛土に伴う流路埋土の上に構築されており、内部構造として杭や横木を有する(図版434・435)。内部構造は、まず長さ約400cmの又木を法面に据え、その上か又木に交差するように横木を置き、その川表側に斜杭を密に設置している。横木は又木を固定し、横木自身は直立杭で固定されている(図版435)。また、斜杭は極めて密に打ち込まれており、その角度は約60°である。斜杭の川表側にはさらに横木と斜杭を芯とする盛土がみられ(図版434)、盛土の土層観察では断続が確認できなかったことから、第2次盛土の内部構造は又木→横木→斜杭→横木→斜杭という順序で構築されたと思われる。第3次盛土は第2次盛土と第2次盛土の流路埋土の上に構築されており、内部構造として矢板列を有し、層間に網代や薄板を使用している。図版434の網代と矢板列は図版431のA-A'の⑦層内で検出した。網代は幅5~6cmの薄板を平織りで編んだものであり黒褐色粘土で被覆されていた。また網代のように編んではいないが、薄板の集積層が2~3箇所を確認できた。矢板列は長さ60~70cm、幅20~30cmの屋根材を50~60°の角度で隙間なく並べてあるもので、その上端は直径約20cmの横木に接していた。なお、第2次盛土の③と④、第3次盛土の⑥と⑦をそれぞれ分けた理由は層境が明瞭であったためであり、改修の可能性が考えられる。なお、盛土の時期はNR100出土遺物の最新時期からみて、VII-1期と思われる。

SW47(図版427、写真図版219) A16地点 DS56~EA56

NR28の南法面に位置し、ここでNR33の水がNR28へ流れ込む。

SW47の規模は長さ約16m、幅2mで、盛土は確認できなかった。

内部構造は直立杭と構造材Bから成る。直立杭は約16mの間で確認でき、東側はSW43と連結している。また大半が直立杭であり、いずれも流路の肩である灰白色粘土(VII層)に打ち込まれている。DT56~EA56までは約0.5m間隔で列をなして打ち込まれているが、DS56~DT56では打ち込まれている間隔や向きに規則性がみられない。これはDT列付近が、NR33の水流がNR28に合流する水衝部にあたるため、より強固に直立杭を打ち込んだ結果と考えられる。

構造材BはDS56とDT56において溝の肩の最上部で検出した。いずれも灰白色粘土(VII層)直上で

流路に平行するように据えられており、粗砂層で覆われていた。構造材の存在から盛土があったと思われるが、洪水などにより流失したと考えられる。また、杭を打ち込んだ基盤となる灰白色粘土は他の場所と比較して硬化していることから、盛土を突き固めていた可能性も考えられる。

遺物は弥生土器が1点、土師器が76点、古代の須恵器蓋杯が77点、その他の須恵器が245点、灰釉陶器が66点、灰釉系陶器が925点、中国磁器が6点、中世土師器が4点、その他の中近世陶器が93点、木製品が288点出土した。本遺構の時期はSW43の第1次盛土と同時期のⅦ-1期と思われる。

SW64 (図版426、写真図版219) A16地点 DP56~DR56

NR31内に位置し、礫列の東側からSD59が北西に延びる。NR31は幅約2~3mの溝であるが、SW47のあたりで幅が約5mと太くなる。その断面形態は皿状を呈し、杭列周囲の堆積は砂礫のみであった。

杭列は南北に2列検出した。杭列の長さはいずれも4~5mであり、杭はいずれも丸木芯持ち材かみかん割り材の直立杭である。杭列間は約3mであり、杭列が機能していた時期は杭列間に水流があったと思われる。杭のうち3本(M1~M3)は直径が10cm以上で、この杭列内では目立って大きい。なお、杭列は礫の西側には延びない。構造材Bは流路の法面と肩上面において黒色粘土中より出土した。これは、南西から北東に向いているものが多く、大きさは太いもので直径1.5cm、細いもので直径0.5cmで、すべて枝が付いていた。

また、人頭大の礫が幅1.0~1.5mの範囲内で南北方向に(杭列に直交するように)直線的に並んで検出できた。礫は直径20cm前後のものが多く、円礫と角礫が混じる。この礫列の東西には、このような大きな礫がみられないことから、この場所に人為的に置かれたものと理解した。なお、この礫列の上段と下段の比高差は約0.2mである。礫150点の材質の内訳はチャート79、砂岩58、花崗斑岩10、礫岩1、花崗岩2である。

なお、SW47は明治時代の地籍図では道に該当している。そして、調査では礫が一定幅で直線的に据えられ、太い杭が並んでいたことから、木制遺構か、橋状遺構の可能性が考えられる。本遺構の時期は出土遺物や流路の切り合い関係などからⅦ-2期と思われる。

SW89 (図版437、写真図版222) D8地点 BL78~BM78

NR110の南肩に位置する護岸施設であり、ここから分岐する溝などは確認できていない。NR110は北東から南西に向かって水が流れており、幅5m~6m、深さ約0.5mを測る。

SW89の規模は東西約5.2m、南北約1.3mであり盛土を有する。盛土は東側の残りがよく、西側は水流により抉られたためか残りが悪かった。

盛土の芯構造は直立杭と横木、円礫から成る。盛土は自然堆積層(図版437の7・8層)の法面に構築されており、直立杭を0.2~0.3m間隔で東西方向に直線的に3列打ち込み、南側の杭列間に円礫を充填し、北側の杭列間に雑木を置き、粘土で被覆する、という構造を有する。円礫は直径10~20cmのものが大半で、密に据えられている箇所と、全くない箇所がみられた。

遺物は土師器が34点、その他の須恵器が6点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が15点、その他の中近世陶器が1点、木製品が171点出土した。SW89内には建築部材の転用品などはほとんどなく、ほぼ土木材や礫のみで構成されている。また、盛土内の出土遺物から、本遺構の時期はⅦ期と考えられる。

SW92 (図版436、写真図版222) D8地点 BK78~BL77

NR110の北肩に位置する護岸施設であり、ここから分岐する溝などは確認できていない。NR110は北東から南西に向かって水が流れており、幅5m～6m、深さ約0.5mを測る。

SW92の規模は東西約3m、南北約1mであり盛土の有無は確認できなかった。

流路の法面には直立杭がランダムに打ち込まれており、立ち上がり部には木の株が確認できた。また、直径15～40cm程度の円礫が流路法面から底面にかけて杭とともに出土したことから、本来はSW89と同様に盛土が施されていたと思われる。

遺物は出土しなかった。SW89と同時期であることから、本遺構の時期はVII期と考えられる。

第8節 VIII期（近現代）の遺構

VIII期の遺構として、土坑4基、水田跡1地点、溝1条、自然流路1条、水制遺構1基を以下に報告する。

第1項 土坑

SK66（図版440、写真図版226） B3地点 EG71

平面形は方形で、断面形は逆台形である。埋土は5層に分けられたが、上から2層目は約2～5cmの厚みで、植物が炭化した状態であった。性格は不明である。

遺物は灰軸系陶器が3点、その他の中近世陶器が2点、木製品が4点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVIII期と考えられる。

SK149～151（図版438～440、写真図版226） C11地点 LN20～LN23

平面形は長方形で、断面形は皿状の土坑で、形や位置関係から同様のものと思われるが、性格は不明である。SK150は北側が調査区外となり、SK151は南側が削平されて残存していない。

遺物はSK149からは土師器4点、灰軸系陶器14点、その他の中近世陶器が8点、SK150からは土師器1点、灰軸系陶器が4点、その他の中近世陶器が4点が、SK151からは灰軸系陶器が3点、その他の中近世陶器が6点出土した。本遺構の時期は、検出状況と遺物からVIII期と考えられる。

第2項 水田跡

B1地点（図版441、写真図版223）

地形の傾斜は南高北低である。畦畔は洪水砂で覆われており、II a層上面を田面とした。検出本数は北西～南東6条、北東～南西4条である。そのうち、SM438は3箇所まで切れているが、これは水口ではなく、切れ目において南から北への砂礫の流れが確認できたことから、洪水による畦畔の破壊と考えられる。また、II b層上面における畦畔とほぼ同じ位置に畦畔が造成されており、VII期において流路跡として窪んでいた箇所にも畦畔が延びている。なお、田面には洪水砂を埋土とする足跡が多数検出された。なお、水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

第3項 溝

SD56（図版442、写真図版224） A16地点 DN60～DS55

幅1.0～1.5m、深さ約0.4mで、長さ約27mにわたり検出した。南端は調査区外に延び、北側は不明である。この溝はNR28・31の埋土上に掘削されており、検出は比較的容易であった。断面形は皿状を呈し、水流の方向は北東から南西である。埋土は粗砂と細砂が主体であり、粘土や植物遺体をわずかに含む。なお、DO59では流路の東法尻で杭列が出土し、その西側で畦畔状の高まりが断面観察で認められた。

遺物は土師器が5点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が5点、灰軸系陶器が300点、中世土師器が13点、その他の中近世陶器が51点、木製品が21点出土した。最新の遺物から判断して本遺構

の時期はⅧ期と考えられる。

第4項 自然流路

NR71（図版443、写真図版224） C3地点 EO88～ET88

幅1.0～1.5m、深さ約0.15mで、長さ27.5mにわたり検出した。西、南端は調査区外に延びる。水流の方向は地形から判断して東から西であり、C4地点のSD118と一連である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は粘土かシルトであった。流路南法面には横木が数本据えられ斜杭で固定されていたことから、D9地点のSD229と同様に護岸施設の用途が想定できる。また、流路内には拳～人頭大の円礫が数個廃棄されていた。

遺物は土師器が19点、その他の須恵器が7点、灰軸系陶が70点、木製品が110点出土した。本遺構の時期はⅧ期と考えられる。

第5項 水制遺構

SW68（図版444・445、写真図版226） D9地点 AR80～BC81

SD229内に位置する。SW68はSD229内が再掘削された底面の一端に設けられた横木と直立杭であることから護岸施設といえる。この溝は東から西へと水が流れ、上端幅4.1m、下端幅約1.2m、深さ約1.4mであり、断面逆台形を呈する。

横木や杭は約24mにわたり検出され、横木は主に溝底面の北側に据えられていた。南側には横木がみられなかったが、溝の立ち上がりかほぼ垂直であることから南側にも据えられていた可能性がある。北側の芯となる横木は3本で、西側が長さ374cm、中央が長さ383cm、東側が長さ384cmで、直径はいずれも12cm前後である。横木の先端はいずれも接しており、横木の南側に直立した補助杭がある。補助杭は横木1本に対して両端各1本と中央2本、計4本打ち込まれており、その長さは50～70cmを測る。また、横木の上から杭先を北に向けた斜杭が打ち込まれている。横木の北側には幅50～60cmで灰色粘土が充填されており（図版445）、溝の裏込め土と認識できる。なお、この遺構の土木材は大半が全面炭化しているという特徴がある。

遺物は木製品が12点出土した。遺構の時期は溝の出土遺物からⅧ—3期といえる。

第9節 多時期にまたがる遺構

多時期にまたがる遺構として、水田跡2地点、溝24条、自然流路39条、水制遺構5基を以下に報告する。

第1項 水田跡

D2・3地点 (図版446)

地形の傾斜はほぼ平坦である。畦畔はVb層中より見え始め、VIa層上面を田面とした。畦畔はD3地点のみで検出したが、D2地点においてもD3地点と同様の層序が認められたために、D2地点の不定方向に延びる溝も水田に伴う可能性がある。検出本数は東西5条のみであり、約3m間隔に造られており、その形状は長方形であったと考えられる。なお、明確な水口や田面の工具痕は確認できず、水回りを推定できる遺構も検出していない。また、畦畔に伴う埋納遺物も出土していない。

水田に伴う出土遺物はない。しかし、下層の流路と水制遺構がII期であることと、上層(Vb層)よりIII期の土師器が出土していることから、本遺構の時期はII～III期と考えられる。

第2項 溝

SD100 (図版448・492・493、写真図版245) B5地点 DJ66～DL66

幅3.5m、深さ0.7mで、長さ8.5mにわたり検出した。南、西端は調査区外に延びている。断面形は皿状を呈し、水流の方向は南東から西と思われる。埋土は上下2層に大きく分かれる。上層では木製の扉や椅子などが出土し、下層では流木とともに完形の土師器壺、甕などが数個体出土し、土器とともに刀形代も出土した。なお、土器や木製品集積の付近には炭化物集積などの特異な状況は確認できなかった。

遺物は弥生土器が5点、土師器が93点、その他の須恵器が1点、木製品152点出土した。本遺構の時期はIII～IV-1期と考えられる。

SD134 (図版452) C11地点 LL22～LM20

幅6.5m、深さ1.7mで、長さ6mにわたり検出した。南西から北東方向に延びる溝で両端は調査区外に及ぶ。断面形は逆台形状を呈し、底部北側はさらに一段低くなっている。

遺物は土師器が826点、古代の須恵器蓋杯が45点、その他の須恵器が186点、灰釉陶器が33点、灰釉系陶器が343点、その他の中近世陶器が11点、木製品が1点、石器が1点出土した。本遺構の時期はIII～VI期と考えられる。

SD155 (附図18) D1地点 CP69～CS68

幅3m、深さ1m、長さ40mにわたり検出した。南西から北東方向に延び DA66付近ではほぼ真北に向きを変える。南北両端は調査区外に延びる。断面形は逆台形状を呈し、埋土は砂混じりの粘土である。昭和における耕地整理前まで機能していたが、灰釉系陶器を数多く含むため、その掘削時期はVI期までさかのぼると思われる。しかしながら、平面的にその範囲を確認することはできなかった。

遺物は土師器が4点、その他の須恵器が4点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器が205点、中世土師器が3点、その他の中近世陶器が89点、木製品が2点出土した。本遺構の時期はVI～VII期と考えられる。

SD160 (附図18) D 1地点 CQ66~CR64

長さ11.5m、幅0.6m、深さ0.07mの南北方向に延びる溝で、北端は調査区外に延びる。断面は浅い皿状を呈し、埋土は砂を多く含む粘土である。

遺物は弥生土器11点、土師器が23点出土した。また、II期の畦畔であるSM392を切っていることから本遺構の時期はII~III期と考えられる。

SD162・166 (附図18) D 1地点 CL64~CL68

SD162は長さ20.5m、幅0.5~1.5m、深さ0.15mのほぼ南北方向に延びる浅い溝であり、北端は調査区外に続く。SD166はこれと同一のものと思われ、長さ1.7m、幅0.3mである。この一連の溝は幅が一定ではなく、プランも不明瞭であったが、CL64付近では浅い皿状の断面が明瞭であった。

遺物はSD162から弥生土器が19点、土師器が45点、灰釉系陶器が2点、石器が1点出土した。SD166からは出土しなかった。灰釉系陶器は混入である。IV期の水田畦畔の下層より検出されたことから、本遺構の時期はII~III期と考えられる。

SD164 (附図18) D 1地点 CR65~CS64

2本に分かれているが合わせると長さ4.5mに達し、幅0.7m、深さ0.1mの浅い溝である。断面形は皿状を呈し、埋土は粘土混じりの砂である。

遺物は土師器が3点出土した。II期の水田畦畔を切ることから、SD160とほぼ同時期のII~III期と考えることもできる。

SD165 (附図18) D 1地点 CN70

長さ2.7m、幅0.3m、深さ0.1mの北西から南東方向に延びる浅い溝である。断面は浅い皿状を呈し、埋土は砂混じりの粘土である。

遺物は出土していない。周囲の状況から、本遺構の時期はIV期以前であると思われる。

SD203 (図版496・498、写真図版247) D 5地点 AS72~AT73

幅5m以上、深さ約0.8mで、長さ約5mにわたり検出した。南、西端は調査区外に延びている。水流の方向は南東から北西であり、SD230と一連の溝である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土は微砂を多く含むシルトが主体である。

遺物は土師器が4点、灰釉系陶器が2点、その他の中近世陶器が2点、木製品が3点出土した。本遺構の時期はIII~IV期と考えられる。

SD210 (図版507) D 7地点 CB77~CB79

幅6.5m、深さ2mで、長さ10mにわたり検出した。東西方向から南北方向に屈曲する溝であり、両端は調査区外に延びる。断面形は逆台形状を呈し、埋土は砂質粘土である。

遺物は縄文土器が1点、弥生土器が1点、土師器が152点、古代の須恵器蓋杯が21点、その他の須恵器が71点、灰釉陶器が22点、灰釉系陶器が771点、中国磁器が1点、その他の中近世陶器が45点、木製品が74点出土した。本遺構の下層にあるNR106・107にまでやや達している可能性がある。本遺構の時期はVI~VII期と考えられる。

SD215・216 (図版499) D 8地点 BD83~BL84

いずれの溝も幅約1m、深さ約0.2mで、長さ6~7mにわたり検出した。北端はNR109に連結し、南端は削平されている。SD215からSD216までの距離がNR109と近似することや、南端が削平されて

いることなどから考えると、これらがすべて同一の溝（流路）であった可能性が高い。なお、溝の断面形は皿状を呈し、水流の方向は東から北である。

本遺構の時期はⅢ～Ⅳ―1期と考えられる。

SD221 (図版449、写真図版247) D 9地点 BA85～BC84

幅1.5m、深さ0.3～0.4mで、長さ6.0mにわたり検出した。南、東端は調査区外に延びている。断面形は皿状を呈し、埋土は上下2層に大きく分かれ、上層では灰釉系陶器や灰釉陶器が出土し、下層では土師器や須恵器が出土した。埋土は上下層ともに粘土であり、水流はほとんどなかったと思われる。

遺物は土師器が547点、古代の須恵器蓋杯が5点、その他の須恵器が11点、灰釉陶器が6点、灰釉系陶器が116点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が6点、木製品が16点、石器が2点出土した。上層の遺物は明らかに混入であるので、本遺構の時期はⅢ～Ⅳ―1期と考えられる。

SD230 (図版449) D 9地点 AS77～AT77

幅2.0m、深さ約0.4mで、長さ1.5mにわたり検出した。南端は NR112に連結し、北端は調査区外に延びている。水流の方向は南東から北西であり、D 5地点 SD203と一連の溝である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土は微砂を多く含むシルトが主体である。また、溝内には SW93の杭と横木があることや埋土中に粘土塊がみられたことから、上層は人為的に埋められた可能性がある。

遺物は土師器が12点、その他の須恵器が1点、石器が1点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD241 (図版447) E 2地点 BS90～BT90

幅1.2m、深さ約0.2mで、長さ5.0mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、西端は削平され、東端は調査区外に延びている。水流の方向は不明であるが、底面の標高は東が低い。断面形は皿状を呈し、埋土は砂岩粒を多く含むシルトが主体で、視認できる大きさの種子が幾つか出土した。検出時は溝のラインが不定形を呈していたことから、上部はかなり削平されている可能性が高い。

遺物は木製品が5点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

SD242 (図版447、写真図版246) E 2地点 CD88～CE88

幅0.8m、深さ約0.2mで、長さ7.0mにわたり検出した。南東から北西に延びる溝で、東西端は調査区外に延びている。断面形は皿状を呈し、埋土は砂岩粒を多く含むシルトが主体であることから、水流はほとんどなかったと思われる。土器とともに木片や炭化物、植物遺体が出土している。

遺物は土師器が337点、灰釉系陶器が2点、木製品が5点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

SD247 (附図19) E 3地点 CH93～CH95

幅3m、深さ1mで、長さ9mにわたり検出した。南北方向に延びる溝で両端は調査区外に続く。昭和における耕地整理前まで機能していたが、西法面を掘削したところ灰釉系陶器が数多く出土したことから、その起源はⅥ期までさかのぼると考えられる。また、護岸のための2列の杭列も確認できた。

遺物は木製品が63点出土した。本遺構の時期はⅥ～Ⅶ期と考えられる。

SD262 (図版451) E 5地点 AK90～AK92

幅0.4m、深さ0.3mで、長さ8.5mにわたり検出した。南北に延びる直線的な溝で、南北端は調査区外に延びている。断面形は箱形を呈し、底面は北高南低である。埋土は黒色粘土が主体であることから水流はほとんどなかったと考えられる。

遺物は土師器が145点、その他の須恵器が3点、灰軸系陶器が1点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD265 (図版451、写真図版247) E 5 地点 AN92～AQ92

幅0.4m、深さ0.4mで、長さ14.5mにわたり検出した。南西から北東に延びる溝で、西端は調査区外に延び、東端は削平されている。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は黒色粘土が主体であることから水流はほとんどなかったと考えられる。

遺物は土師器が114点、その他の須恵器が9点、灰軸系陶器が4点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD278 (図版451) E 5 地点 AH90～AH91

幅0.3m、深さ0.2mで、長さ3.0mにわたり検出した。南北に延びる溝で、南端は調査区外に延び、北端は削平されている。断面形は箱形を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は黒色粘土が主体であることから水流はほとんどなかったと考えられる。なお、本遺構はSB69を切る。

遺物は土師器が19点、古代の須恵器蓋杯が1点、灰軸系陶器が1点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD279 (図版451) E 5 地点 AH91～AH92

幅0.4m、深さ0.1mで、長さ5.0mにわたり検出した。南北に延びる溝で、南端は調査区外に延び、北端は削平されている。断面形は皿状を呈し、底面は南高北低である。埋土は褐灰色粘土が主体であることから水流はほとんどなかったと考えられる。なお、本遺構はSB70を切る。

遺物は土師器が14点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が3点、灰軸系陶器が1点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD280 (図版451) E 5 地点 AF90～AF91

幅0.2～0.6m、深さ0.1mで、長さ5.0mにわたり検出した。南北に延びる溝で、南北端は調査区外に延びる。断面形は皿状を呈し、底面は南高北低である。埋土は黒褐色粘土の単層であることから水流はほとんどなかったと考えられる。なお、本遺構はSB76・77を切る。

遺物は土師器が45点、古代の須恵器蓋杯が4点、その他の須恵器が1点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

SD283 (図版450、写真図版248) E 5 地点 AS92～AT92

幅約3m、深さ0.7～1.0mで、長さ6.5mにわたり検出した。南北に延びる溝で、南北端は調査区外に延びる。断面形は皿状を呈し、埋土は植物遺体を多く含む粘土が主体であることから、一定期間止水状態であったといえる。この溝は調査区中央付近で途切れていることから、溝というよりは規模の大きな土坑が2基並列していると捉えた方が妥当かもしれない。なお、調査時において、この溝は地山を土橋状に残して掘削したものと考えたが、その根拠はない。

遺物は土師器が2083点、古代の須恵器蓋杯が7点、その他の須恵器が56点、灰軸系陶器が18点、中世土師器が3点、木製品が48点、石器が2点出土した。上層では土師器とともにⅣ期の須恵器が出土

し、下層ではⅢ期の土師器が主に出土したことから、本遺構の掘削時期はⅢ期で、Ⅳ期に埋没したと考えられる。

SD287 (図版451) E 5 地点 AJ91-AK91

幅0.2m、深さ0.1mで、長さ5.5mにわたり検出した。ほぼ直角に屈曲する溝で、両端は削平されている。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土の単層であることから水流はほとんどなかったと考えられる。溝の幅や直角に屈曲する形態から、竪穴住居跡の周溝の可能性が高い。なお、本遺構はSB63・64の床面にて検出した溝である。

遺物は土師器が5点出土した。本遺構の時期はⅢ-Ⅳ期と考えられる。

第3項 自然流路

NR1・NR13 (図版107・470-479、写真図版227・230・231) A 2・7・13地点 EK36-GD43

幅約20m以上、深さ約2.3mで、A 2地点とA 7地点間約10mの未調査部分を含め、約170mにわたり確認した。南東から北西に流れる。発掘調査の経緯から、A 2地点内をNR1、A 7・A 13地点内をNR13として報告する。またA 6地点のNR9は、その位置からNR13の一部の可能性が高い。

流路は、深部にまで調査のおよんだNR13のA 7地点における堆積状況とそれぞれの層から出土した遺物によって、次のように埋没していったと考えられる(適宜、NR1との対応関係を述べる)。なお、大きく前半(Ⅱ-Ⅲ期)と後半(Ⅳ-Ⅰ期)の流路に大別できるが、前半が下層、後半が上層の埋土に対応する。出土した土器で、まとめて確認できる時期の古いのはⅡ-Ⅲ期である。しかし、そのみを包含する層は確認できなかった。Ⅱ-Ⅳ期には、A 7地点EQ37-FA38にその時期以前のみを包含する層(図版472-下層③)を部分的に確認した。A 7地点中央付近より東、A 2地点にかけての地区では、下層②(図版476-479参照)が確認できるが、ここからは主にⅢ-Ⅰ期の土器が出土する。この層はNR1下層とした層(図版473-475)の一部に対応すると考えられるが、NR1の調査では次に述べる下層①と下層②の区別がつけられていないため、明確な対応関係は不明である。下層①は下層②上にあり、A 7地点中央付近から東で確認できた。全体に均一な砂質土である。Ⅲ-Ⅱ期の土器が出土する。この時点で前半の流路は大部分が一且埋まったようで、後半の流路は下層①(深い場所では下層②に及ぶ)を切って流れている。流路後半期には、下層①は中州状に残存し、中州上にはⅣ-Ⅰ期にA 7地点でSH 6が、A 2地点でSB 1がそれぞれ建てられている。なおA 2地点でNR1の北岸に沿って確認したSD 3は、NR1下層を掘削しているが、それがA 7地点のどの層に対応するかはよくわからない。流路は前半期(Ⅲ-Ⅱ期以前)に比べ、後半期(Ⅳ-Ⅰ期)は規模が小さくなっている。上層③からはⅢ-Ⅱ期-Ⅳ-Ⅰ期の土器がまとめて出土しているが、続くⅣ-Ⅱ期の土器は含まない。上層①・②は上層③のみならず流路域全体を覆って堆積している。粘性の高い土で、Ⅳ-Ⅱ期以降の土器が出土する。この時期には流路としては機能しておらず、流路埋没後の湿地のような状態であったと考えられる。NR1上層とした層(図版473-475)は、A 7地点の上層①-③を含むが、どの層が対応するかは確認できなかった。なおNR1の一部(FT42周辺)でⅣ-Ⅱ期の須恵器がまとめて出土しており、発掘調査では確認していないが、その時期の流路もしくはその他の遺構があった可能性がある。A 7地点中央付近で確認した船着き場の可能性のあるSD17は、Ⅲ-Ⅱ期に掘削され、Ⅳ-Ⅰ期に埋没したと認識している。ただし、SD17の最上層は下層③(Ⅳ-Ⅰ期)に切

られている。SD17埋没後まもなく NR13も埋没したと考えられる。

NR1・NR13内には次の水制遺構が確認できた。A2地点 NR1内では SW1～SW4・SW35・SW36が、A7地点 NR13内で SW22・SW23がある。各水制遺構と流路との関係については、各水制遺構の文章を参照されたい。

遺物は NR1 から縄文土器が1点、弥生土器が7点、土師器が2924点、その他の須恵器が17点、灰軸系陶器が1点、その他の中近世陶器が1点、木製品が188点、石器が1点、NR13から弥生土器が7点、土師器が9221点、その他の須恵器が23点、灰軸系陶器が20点、木製品が54点、石器が4点出土した。灰軸系陶器は混入である。本遺構の時期は、流路として機能したのはⅡ-3～Ⅳ-1期で、大きく前半(Ⅱ-3～Ⅲ-2期)と後半(Ⅳ-1期)に分けられる。最終的にⅣ-2期に埋没し、それ以降おそらくⅤ期の条里地割ができる時期を下限にそれまでは湿地状の窪地であったと考えられる。

NR2・3 (図版160・483～489、写真図版92・227・229) A3・A8・A9地点 FJ47～FQ48

NR2とNR3は、A3地点で西方向と北西方向に分岐するように検出し、別の流れと認識していたが、調査の進展により本来は同じ流路で時期毎の変遷を捉えていたことがわかった。その変遷を簡単にみると、①NR2・3全体を流れる段階、②水制遺構を多用し本流をNR2とした段階、③NR3を本流とした段階となる。A3地点でNR2とNR3を分け、A9地点にかけて細長い中州状に残る部分は、時期的には①～②の間で、①の埋土によって形成されたと考えられる(図版486の古い流路埋土が①にあたる)。①～③の時期については、出土した土器から①はⅢ期以前、②はⅣ-1期、③はⅣ-2期を中心に部分的にⅤ-1期まで残ると考えられる。

NR2は、幅約6m以上、深さ約1.8mで、約85mにわたり確認した。SW5～16が造られている。水制遺構とそれによる流れの変遷についての詳細は、前述している。

遺物は NR2 から縄文土器が1点、土師器が495点、その他の須恵器が27点、灰軸系陶器が4点、木製品が35点、石器が1点出土した。NR3は、幅約15m、深さ約1.3mで、約110mにわたり確認した。なお NR3は、A8・9地点では複雑な埋没過程を確認しており、A3地点とは大きく様相を異にしているため、ここでは分けて説明する。A3地点では、NR2廃絶後、NR3に本流が移るが、水制遺構などは確認されていない。

A8地点では、SW30～32を確認しているが、時期的にはⅢ期、①の段階のものと考えられる。この部分の流れの変遷は水制遺構と密接に関係する。

遺物は NR3 から縄文土器が3点、弥生土器が5点、土師器が2325点、古代の須恵器蓋杯が6点、その他の須恵器が196点、灰軸系陶器が3点、木製品が123点、石器が3点出土した。

NR4 (図版459～461、写真図版17) A5地点 EQ15～FC17

幅約7～8m、深さ約0.9mで、約27mにわたり確認した。東から西に流れ、調査区東端から約20m付近で北西に大きく曲がる。東端でNR5を切っている。埋土から2時期に分かれ埋没したことがわかる。

遺物は土師器が412点、その他の須恵器が1点、瓦が1点、木製品が83点、石器が1点出土した。土器は、Ⅱ-3期～Ⅲ-2期が混じる。本遺構は、各時期別の遺物の出土状況から、Ⅱ-4期～Ⅲ-1期に最も人と関わりがあったと考えられる。

NR5 (図版459・461、写真図版17) A5地点 FB18～FD22

幅約12m以上、深さ約1.2mで、長さ約25mにわたり確認した。北流すると考えられ、東側・南側は調査区外、北端はNR4に切られる。埋土は2時期に分けられる。埋没後SD6が掘られている。

遺物は弥生土器点が166点、灰軸系陶器が1点、木製品が25点出土した。灰軸系陶器は混入である。土器は、II-2期～III-1期が混じる。本遺構は、各時期別の出土状況から、II-2期～II-4期に最も人と関わりがあった時期と考えられる。

NR6 (図版462・463、写真図版229) A6地点FD26～FK30

幅約10m以上、深さ約1.1mで、約40mにわたり確認した。南東から北西に流れると考えられる。東側、北側は調査区外で、東から約35m付近でSD10と接する。埋土は大きく2層に分けられる。SD10と接する付近(A-A')ではさらに下にもう1層確認できる。中央やや北寄り調査区北端部分にはSW19が、対岸にはSW20がある。中央付近では流れに直交する状態で直径約1.2mの流木が見つまっている。

遺物は土師器が855点、その他の須恵器が62点、灰軸系陶器が18点、中国磁器が1点、木製品が10点出土した。灰軸系陶器は混入である。土器はIII-1期を中心に、II-3期が極少量、III-2期～IV期が断片的に少量混じるが、各時期別の出土状況からIII-1期が最も人と関わりがあった時期と考えられる。

NR7 (図版462) A6地点FB27～FC29

最大幅約3.5m、深さ約0.5m、長さ約12mで、北流してNR8に接続する。北側ではSD11が直交する。幅が最大になる部分よりやや北寄りにSW21がある。SW21は杭列である。

遺物は土師器が553点が出土した。土器はII-3期～III-1期が混じるが、各時期の出土状況からII-3期が最も人と関わりがあった時期と考えられる。

NR8 (図版462・464・465) A6・A12地点EI25～FB27

最大幅7m、深さ約1.2mで、約67mにわたり検出した。東から西へ蛇行しながら流れていたと考えられる。埋土は大きく2時期に分けられる。中央付近で南に折れすぐに北西に曲がるが、この部分の流れは古段階ではもう少し緩やかであったようである(図版462参照)。A12地点で、NR10を切る。NR10はNR8の古い段階の埋土の可能性もあるが、A6地点側の調査でその存在が明確にできなかったことから、別の流路として報告する。

遺物は弥生土器が9点、土師器が1265点、その他の須恵器が10点、灰軸系陶器が5点、木製品が27点、石器が1点出土した。土器は、II-4期～IV-2期にわたるが、III-1期が最も多く、検出状況と合わせてこの時期に最も人と関わりがあったと考えられる。

NR10 (図版465・468・469) A12地点EJ25～EN29

最大幅約7m、深さ約0.5mで、約23mにわたり確認した。ほぼNR8の流れと同じ方向に流れており、NR8で述べたように本来同じ流路の時期差の可能性もあるが、ここでは別の流路として報告する。NR8及びNR10はNR11の埋土を切って流れている。流路内からはSW17・18を確認した。埋土中に土器溜まり(SU1・SU2)が確認できた。SU1(図版468)はIII-1期、SU2(図版469)はII-4期である。

遺物は弥生土器5点、土師器が753点、その他の須恵器が2点、灰軸系陶器が1点、木製品が19点出土した。須恵器・灰軸系陶器は混入である。土器は、II-3期～III-1期が混じるがII-4期が最も

多く、検出状況と合わせてこの時期に最も人と関わりがあったと考えられる。

NR11 (図版465~467) A12地点

幅約30m以上で、約40mにわたり確認した。西向きに流れていたと考えられる。北端でNR8・NR10に切られる。隣接するB1地点から続くが、B1地点側は調査していない。

遺物は木製品が49点出土した。

NR12 (図版470~472) A12地点 EF31~EH33

幅約7m以上、深さ約0.8mで、約15mにわたり確認した。南東から北東に流れていたと考えられ、その方向から南接するA13地点 NR14の下流の可能性がある。

遺物は土師器が551点、木製品が2点出土した。本遺構の時期は、II~III期と考えられる。

NR14 (図版470・471・480・481、写真図版232・233) A7・A13地点 EI36~ES43

最大幅約14m、深さ約1.1mで、約65mにわたり確認した。南東から北東に流れていたと考えられる。A7地点において、NR15とSD20(IV-2期)に切られる。またA7地点で、III-1期の溝であるSD15が接続する。調査時の所見から、流路の下層埋土とSD15が接続し、上層埋土はSD15埋土を切っていたと考えられる。下流部、A13地点においてNR14に伴う木製遺構として、SW24~29の6基がある。各木製遺構と、NR14との関係については本章第3節を参照されたい。

遺物は縄文土器が2点、弥生土器が4点、土師器が1645点、その他の須恵器が8点、灰釉系陶器が9点、木製品が65点、石器が1点出土した。灰釉系陶器は混入である。本遺構の時期は、出土した土器と他遺構との切り合い関係から、III期~IV-1期にかけて流れ、IV-2期のSD20に切られることからそれまでに埋没したと考えられる。周囲の状況からIII期が最も人と関わりがあった時期と判断できる。

NR15・16 (図版470・471・480・482) A7・A13地点 EG37~EQ43

最大幅約6m、最大深約0.9mで、約60mにわたり確認した。NR15とNR16はSD22によって分断されるが、流れの方向から同じ流路と考えられるのでここでまとめて報告する。流れは南東から北西と考えられる。A7地点において溜まり状に広がり、深いところでは約0.9mに達するが、A13地点側では約0.5mで一定し、A13地点西端付近では約0.2mと浅くなる。また浅い所とその付近ではさらに浅い溜まり状の広がりが、本流の付近にみられる。NR14を切り、SD20・SD22に切られる。

遺物はNR15から土師器が7点、石器が1点、NR16から土師器が9点出土した。本遺構の時期は、土器と他遺構との切り合い関係から、III期~IV-1期と考えられる。

NR21 (図版483・490・491、写真図版234) A10地点 EN57~FJ53

幅約7m、深さ約1.3mで、約86mにわたり確認した。位置や時期からNR3の下流側である可能性が高い。蛇行しながら北東から南西に流れるが、中世の流路NR20に切れ、その先は不明である。埋土は、大きく上層と下層に分けられるが、流路の幅が変わるのみで河道の変化はない。EP57で検出したSK40は、流路の法面から見つかったI-1期の土坑である。

遺物は弥生土器が3点、土師器が481点、その他の須恵器が128点、灰釉系陶器が5点、木製品が54点、石器が1点出土した。灰釉系陶器は混入である。土器はII期からIV-3期まで混じるが、IV-2期の須恵器がまとまってみられる。本遺構の時期は、土器からIII期~IV期、特にIV-2期が中心となると考えられる。

NR65 (図版492~493、写真図版235) B 5地点 DN64~DO66

幅約5m、深さ約0.4mで、長さ約10mにわたり検出した。南北端は調査区外に延びる。水流の方向は北から南であり、A16地点のNR48がSW62により分岐された溝(NR48b)と一連である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫であった。流路内にはSW71が流路に直交するように設置されていたが、その性格は不明である。また、流路西側では流路に沿って枕列(SW70)を検出したことから、流路際には畦畔があった可能性がある。

遺物は土師器が124点、灰釉系陶器が2点、木製品が140点出土した。本遺構の時期はIII~IV期と考えられる。

NR66 (図版492) B 5地点 DJ66~DP64

幅約5m、深さ約1mで、長さ約20mにわたり検出した。南、北、西端は調査区外に延びる。水流の方向は北から南であり、A16地点のNR48と一連である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫であった。流路内にはSW72が南北方向に設置されており、その川表方向が東であることから、南東から別の流路が流れ込んでいた可能性が考えられる。

遺物は土師器が24点、その他の須恵器が1点、木製品が47点出土した。本遺構の時期はIII期と考えられる。

NR67 (図版492、写真図版235) B 5地点 DJ66~DP64

幅約5m、深さ約1mで、長さ約20mにわたり検出した。南、北、西端は調査区外に延びる。水流の方向は北から南であり、A16地点のNR52・53と一連である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、埋土の大半は砂礫であった。

遺物は弥生土器が1点、土師器が4点、木製品が29点出土した。本遺構の時期はII~III期と考えられる。

NR79 (図版508、写真図版236) C13地点 LO37~LR38

幅13m、深さ0.8m、長さ18mにわたり検出したが、南端は調査区外に延びるためその全幅は不明である。断面は深い皿状を呈し、底面はほぼ平坦であるが南に向けてやや下っている。

調査範囲が狭いにも関わらず遺物は大量に出土した。

遺物は土師器が5406点、古代の須恵器蓋鉢が577点、その他の須恵器が2239点、灰釉陶器が999点、灰釉系陶器が1505点、中国磁器1点、中世土師器が1点、その他の中近世陶器が17点、土鏝が2点、石器が2点出土した。本遺構の時期はIII~VI期と考えられる。

NR82 (図版505、写真図版238) D1地点 CR70~CS69

幅4m、深さ0.7m、長さ13mにわたり検出した。西へ行くほど徐々に浅くなりSD155に切られる。東へ行くほど徐々に狭く深くなり、NR81に切られる。底面の高低差から水流の方向は西から東と考えられる。

遺物は土師器が78点、その他の須恵器が11点、灰釉系陶器が6点、その他の中近世陶器が2点、木製品が18点出土した。灰釉系陶器は混入である。本遺構の時期は検出状況からIII~IV期と考えられる。

NR83 (図版505) D1地点 CS70~CT69

幅4m、深さ1m、長さ6mにわたり検出したが、肩の一部分のみの検出であるので幅は不明である。深さはほぼ一定だが、西側は若干浅く調査区外に延びる。東はやや深く、NR81に切られる。底面

の高低差から水流の方向は西から東と考えられる。なお、NR81に切られる付近で木の密集した部分を検出したが、人為的痕跡を確認できなかった。

遺物は土師器が53点、その他の須恵器が14点、灰軸陶器が2点、灰軸系陶器が2点、木製品が18点出土した。灰軸系陶器は混入である。本遺構の時期は検出状況からⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR86 (図版504、写真図版237) D 1地点 DC65～DG69

幅14m、深さ1.3m、長さ21mにわたり検出したが、北岸はごく一部確認できたにとどまるのでその全容は不明である。水流の方向は東から西が想定されるが、本地点より上流部は二股に分かれていたと思われ、南進・西進してきたそれぞれの流路はDE65・66付近で合流する。水制遺構は確認できなかったが、長さ5m前後の大木が流路に直交するように出土したことから、何らかの水制遺構が構築されていたことが考えられる。

遺物は弥生土器が8点、土師器が646点、その他の須恵器が15点、灰軸系陶器が6点、木製品が188点、石器が3点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。なお、木製品は扉や罫をはじめとして数多く出土している。

NR87 (附図18) D 1地点 DF69～DG68

幅2m、深さ1m、長さ7mにわたり検出したが、西岸はごく一部確認できたにとどまるのでその全容は不明である。水流の方向は、底部の高低差から南から北であると考えられ、北側はNR86に切られる。

遺物は土師器が1点出土した。本遺構の時期はその検出状況からⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR88 (図版458) D 3地点 CC69～CD70

幅約8m、深さ0.5～0.8mで、長さ約4mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びる。水流の方向は東から西であり、D 2地点のSD170と一連である可能性が高い。断面形は皿状を呈し、中央部分が逆台形状に深くなる。埋土の大半は粘土であり、砂礫がラミナ状にわずかに入るため、緩やかな流れであったと思われる。流路内にはSW79が南南東から北北西にむけて設置されているが、その用途は定かでない。

遺物は弥生土器が1点、土師器が5点、灰軸系陶器が1点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

NR89 (図版494・495、写真図版237・238) D 4地点 BL70～BN69

幅3.5～4.0m、深さ約1mで、長さ約13mにわたり検出した。東西端は調査区外に延びる。水流の方向は東から西であり、NR94との境にはSW80が位置する。断面形は逆台形を呈し、法面の傾斜が急であることやNR91・92を切っていることなどから、人為的に掘削された溝である可能性もある。埋土は大半が粘土であり、最下層は植物遺体を多量に含むシルト中に微砂のラミナがみられたことから、水量が一定量ある安定した環境であったと考えられる。また、流路東端では扉が出土した。

遺物は土師器が35点、その他の須恵器が2点、木製品が82点出土した。本遺構の時期はⅣ期と考えられる。

NR90 (図版494・495、写真図版239) D 4地点 BL66～BL69

幅9m以上、深さ約0.7mで、長さ19mにわたり検出した。西端は調査区外に延び、南端はNR89に切られる。水流の方向は不明である。断面形は逆台形を呈し、東法面の傾斜が比較的急であった。断

面観察の結果、最低でも1回の掘り返しが認められ、そこには長さ約300cmの流木などがみられた。また、最下層からは判り物の盤が出土した。

遺物は土師器が14点、中世土師器が1点、木製品が12点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

NR91 (図版494・495) D 4地点 BL70～BN71

幅3.0～6.0m、深さ約1mで、長さ約11mにわたり検出した。東西端は調査区外に延び、中央はNR89に切られる。水流の方向は東から西である。断面形は皿状を呈し、埋土の大半が微砂を多く含むシルトであった。中央部分がNR89に切られているため詳細は定かでないが、埋土中からは流木が多数出土した。また、本遺構はNR92がある程度埋没してから掘り返した流路で、NR90と同様であることから、比較的広範囲で流路の再掘削をした可能性が指摘できる。

遺物は土師器が3点、木製品が2点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

NR107 (図版506・507) D 7地点 CA81～CC77

NR107は、NR106の南岸及び底部付近のみ埋土が残存していた。従って、その全容は不明である。

遺物は弥生土器が1点、土師器が687点、古代の須恵器蓋杯が19点、その他の須恵器が164点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が35点、その他の中近世陶器が5点、木製品が73点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR109 (図版499) D 8地点 BJ82～BK83

幅4.5m、深さ約0.6mで、長さ約4mにわたり検出した。北端はNR110と、南端はSD215・216と連結する。水流の方向は南から北であり、断面形は皿状を呈する。埋土は上層が粘土、下層が砂岩粒を多く含む砂礫であるため、丘陵から土砂が運ばれてきたと考えられる。NR111との関係は不明であるが、最も河床が低いのは調査区中央付近であるため、NR109北端から東へ水が流れ、調査区中央付近で西へ流れたと思われる。

遺物は弥生土器が1点、土師器が1007点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が241点、灰釉陶器が1点、灰釉系陶器が1点、その他の中近世陶器が5点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

NR112 (図版449・500、写真図版239・240) D 9地点 AR79～BC77

幅4～9m、深さ約0.9mで、長さ約26mにわたり検出した。北、東、西端は調査区外に延びている。水流の方向は東から西であり、断面形は皿状を呈する。埋土は砂礫ないしはシルトが主体であり、断面観察の結果最低1回の掘り返しを確認し、古段階がSD230が機能している時期、新段階がSD230が埋められた時期に対応すると考えた。SD230と連結する場所にはSW93が設置されており、護岸としての機能が想定できる。また、SW93の西側の河床において0.2～0.3mの段があったが、その意味は不明である。なお、糸巻状木製品(掲載番号6270)は流路新段階の底面において出土した。

遺物は土師器が2417点、古代の須恵器蓋杯が15点、その他の須恵器が118点、灰釉陶器が16点、灰釉系陶器が50点、その他の中近世陶器が10点、木製品が473点、石器が8点出土した。本遺構の時期はⅡ～Ⅲ期と考えられる。

NR114 (図版501) E 1地点 CP87～CQ88

最大幅約8m、深さ約0.6mで、約4mにわたり確認した。北流すると考えられる。西岸に比べ東岸

は緩やかである。

遺物は木製品が6点出土した。本遺構の時期は、検出面からⅡ～Ⅳ期と考えられる。

NR115 (図版501) E 1地点 CK87～CO87

幅約3m以上、深さ約0.5mで、約23mにわたり確認した。蛇行しながら西流すると考えられる。埋土の状況などは、NR114に似る。

遺物は土師器が2点、木製品2点出土した。本遺構の時期は、検出面からⅡ～Ⅳ期と考えられる。

NR117 (図版502) E 3地点 CM92～CP92

幅20m、深さ0.6m、長さ4.5mにわたり検出したが、調査区が細長いため南北両端は調査区外に延びている。断面は浅い皿状を呈し、水流の方向は地形から考えて南から北と思われる。埋土は上下2層に分かれ、下層は植物遺体を多く含む。

遺物は土師器が133点、その他の須恵器が1点、灰軸系陶器が21点、その他の中近世陶器が2点、木製品が81点出土した。灰軸系陶器は混入である。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR118 (図版503) E 3地点 CR91～CT92

深さ0.8mで、長さ4.5mにわたり検出した。幅は南が狭く14m、北は広く30mを数える。調査区が細長いため南北両端は調査区外に延びている。断面は浅い皿状を呈し、水流の方向は地形から考えて南から北と思われる。流路ほぼ中央のCT列は、底部が若干盛り上がりながら北へ広がっていくので、NR118は2本に分かれる可能性もある。埋土には植物遺体を多く含む層がある。

遺物は土師器が336点、古代の須恵器蓋杯が2点、その他の須恵器が41点、灰軸系陶器が5点、その他の中近世陶器が2点、木製品が57点出土した。灰軸系陶器は混入である。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR119 (図版496～498、写真図版241～243) D 5地点 AS70～BE66

幅約5.5m、深さ約1.2mで、長さ約31mにわたり検出した。東西端は調査区外に延び、中央付近にSW85が設置されている。水流の方向は東から西である。断面形は皿状を呈し、埋土の大半が粘土であるが下層には植物遺体を多く含んでいた。なお、SW85前後の堆積の差異はほとんどない。SW85の機能は定かでないが、流路の中央付近が北側に張り出していることから水溜りのものが想定できるかもしれない。

遺物は土師器が191点、古代の須恵器蓋杯が1点、その他の須恵器が16点、灰軸系陶器が1点、灰軸系陶器が86点、中世土師器が2点、その他の中近世陶器が2点、木製品が123点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR120 (図版496～498) D 5地点 BA70～BE72

幅5.5～9.0m、深さ約0.8mで、長さ約19mにわたり検出した。東端は調査区外に延び、西端はNR119に連結する。水流の方向は東から西であり、河床の高さはNR119よりも0.2～0.4m高い。断面形は皿状を呈し、埋土中には植物遺体を多く粘土と砂礫のラミナ堆積が発達していた。また、流路底面において把手付盤(掲載番号6491)が逆位で出土した。

遺物は土師器が44点、その他の須恵器が1点、灰軸系陶器が5点、木製品が65点出土した。本遺構の時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。

NR121 (図版496～498、写真図版242) D 5地点 AS70～BE66

幅約5.5～13.0m、深さ約1.2mで、長さ約50mにわたり検出した。東西端は調査区外に延び、北側の流路底面にSW83が、南側の南法面にSW84が設置されている。水流の方向は東から西であり、2本の流路がD5地点の中央付近で合流し1本となる。断面形は皿状を呈し、埋土は北側の流路が粘土主体、南側の流路が砂礫主体であり、南側の水量が豊富であったことがわかる。

遺物は弥生土器が10点、土師器が1156点、その他の須恵器が4点、灰釉系陶器が4点、木製品が117点、石器が1点出土した。本遺構の時期はII-3～III期と考えられる。

NR122 (図版53・58、写真図版244) C2地点 FF87～FH88

幅7m以上、深さ約0.7mで、長さ約9mにわたり検出した。南、北、西端は調査区外に延びる。水流の方向は南から北であり、東法面にはSW76が設置されている。この流路は最低1回の掘り返しがあり、古段階のものは断面形が皿状、新段階のものは逆台形を呈し、埋土はいずれも砂礫が主体であった。

遺物は弥生土器が2点、土師器が1872点、木製品が41点出土した。新段階の流路からはIII～IV期の土師器が、また古段階の流路からはII期の土師器が出土している。また、木製品は鋤・鍬の未製品や把手付盤、梯子など数・種類ともに多く出土している。

第4項 水制遺構

SW17 (図版512・513) A12地点 EL26

NR10内に位置し、北側の埋土はNR8に切られている。NR10は幅5m以上の流路であり、水は東から西へと流れている。また、ここから分岐する溝などは確認していないが、SW17より南東側に長さ約3.5m、幅約2.0mの落ち込みがあり、SW17と関連すると思われる。

SW17は長さ約2.5mの規模であり、盛土の有無は確認していない。中央付近に長さ約270cmの湾曲した丸太材が据えられ、その前後に斜杭を数本打ち込んだ簡易なつくりであり、川表方向は東といえる。

遺物は木製品が9点出土した。本遺構の時期はNR10と同じくII～IV期といえる。

SW18 (図版512・513) A12地点 EN27

NR8内に位置し、ここから分岐する溝などは確認していない。NR8は幅約2.5mで断面皿状を呈する流路であり、水は東から西へと流れている。

SW18の規模は長さ約2mであり、NR8の流路幅が狭くなる箇所を設置されている。直径0.2m、長さ160cmの丸太材を流路に垂直に据え、その南側に斜杭を数本打ち込む簡易なつくりであり、川表方向は南といえる。

遺物は土師器が7点出土した。なお、本遺構の時期はNR8と同じくII～IV期といえる。

SW19 (図版510、写真図版249) A6地点 FE25～FF26

NR6内に位置し北側が調査区北端となるため、ここから分岐する溝などは不明である。NR6は幅10m以上、深さ約1.2mで断面形は皿状を呈し、水は東から西へと流れている。

SW19の内部構造は、横木と直立杭から成り、盛土の有無は確認できていない。横木は直径約20cm、長さ550～600cmの大きな丸太材を流路に平行して据えており、その南側に直立杭を数本打ち込むことで横木を固定している。付近にある雑木は、盛土があるならば盛土の芯材とも考えられるが、詳細は定かでない。

遺物は木製品が1点出土した。本遺構の時期は NR6 と同じく II～IV期といえる。

SW20 (図版511、写真図版249) A 6 地点 FC26～FD25

NR 6 内に位置し、ここから分岐する溝などは不明である。NR 6 は幅10m以上、深さ約1.2mで断面形は皿状を呈する。水は東から西へと流れており、SW20付近でA 5 地点の NR 5 と合流している。

SW20の規模は長さ4.5m、幅約2mであり、盛土の有無は確認できていない。

SW20の内部構造は直立杭と横木から成る。その構築過程は以下のとおりである。長さ360cmの縦木を南北方向に据え、その上に東西方向に横木を数本置く。縦木や横木は部分的に直立杭で固定されている。そして、横木の南側、つまり川表方向に長さ40～50cmの直立杭を極めて密に打ち込む、というものである。

遺物は木製品が35点出土した。本遺構の時期は NR 6 と同じく II～IV期といえる。

SW21 (図版511) A 6 地点 FB27～FC27

NR 7 内に位置する。SW21付近のみ東西3.4m、南北9.4mの範囲内で浅く溝状に窪んでおり、SW21はその中央付近に並ぶ杭列である。杭は直径2～3cmと細く、長さは30～50cmほど遺存しており、約0.3m間隔で打ち込まれていた。杭列前後の堆積状況や盛土の有無は確認できていない。

遺物は木製品が8点出土した。本遺構の時期は NR 7 と同じく II～IV期といえる。

第10節 時期不明の遺構

時期不明の遺構として、掘立柱建物跡1棟、土坑5基、溝9条を以下に報告する。

第1項 掘立柱建物跡

SH29 (図版514) B 8地点 DO83~DP83

桁行2間以上(約3.9m以上)、梁行1間(約2.2m)の南北棟である。北側は調査区外である。柱掘形は円形である。

遺物はP1767から土師器が2点出土した。本遺構の時期は、不明である。

第2項 土坑

SK71・72 (図版515) B 5地点

平面形はSK71が円形、SK72が不定形を呈する。掘形はいずれも浅いが、SK72の埋土はいろいろな土が混在している。

本遺構の時期は、不明である。

SK91 (図版515) C 9地点

平面形は円形を呈する。直径1.2m、深さ0.4mのやや大型の土坑であるが、埋土は単層であった。

遺物は土師器が17点、古代の須恵器蓋杯が3点、その他須恵器が2点出土した。本遺構の時期は、不明である。

SK106 (図版515) C 14地点

平面形は楕円形を呈する。長さ1.20mを測り、中央に柱痕跡が残る。

本遺構の時期は、不明である。

SK120 (図版515) D 8地点

平面形は不定形を呈する。長さ1.65mを測るが掘り込みは浅く、溝と連結している。

本遺構の時期は、不明である。

第3項 溝

SD119 (図版514) C 5地点 EL88~EL89

幅約2.5mの素掘溝で、約5mにわたり確認した。北は調査区外に延びている。溝の性格は不明である。

遺物は古代の須恵器蓋杯が1点、灰釉系陶器1点、その他の中近世陶器2点が出土したが、本遺構の時期は不明である。

SD128 (図版453) C 9地点 EM07~EM08

幅約0.4mの素掘溝で、約2.5mにわたり確認した。南は調査区外である。溝の性格は不明である。

遺物は出土していないため、本遺構の時期は不明である。

SD135 (附図13) C 11地点 LN21~23

幅0.5m、深さ0.38mで、長さ10mにわたり検出した。ほぼ南北方向に延びる溝で、北端は調査区外

に延びる。断面形は半円形を呈し、埋土は小礫を含む砂質粘土である。

遺物は出土していないため、本遺構の時期は不明である。

SD136 (附図13) C11地点 LO21~23

幅0.5m、深さ0.24mで、長さ6.5mにわたり検出した。調査区の東端で検出したためその全容は不明であり、溝かどうかも疑問が残る。

遺物は出土していないため、本遺構の時期は不明である。

SD137 (図版516) C12地点 EO29

幅0.8m、深さ0.3mで、長さ7.5mにわたり検出した。東西方向から南北方向に屈曲する溝で、北端は調査区外に延びる。

遺物は土師器が2点、灰釉系陶器が4点出土した。本遺構の時期は不明である。

SD138 (図版516) C12地点 EN33

幅0.7m、深さ0.2mで、長さ1.7mにわたり検出した。東西方向に延びる溝で、その東端は試掘坑に切られ、西端は調査区外に延びている。断面は逆台形状を呈する。

遺物は出土していないため、本遺構の時期は不明である。

SD152 (附図18) D1地点 CO69

長さ3m、幅0.3m、深さ0.03mの南東から北西方向に延びる溝である。平面形が不明瞭な上に、一掻きすると消えてしまうほど浅く、遺物も出土していない。本遺構の時期は不明である。

SD159 (附図18) D1地点 CT66

長さ2.5m、幅0.6m、深さ0.05mの浅い溝で、北西から南東方向に延びる溝である。南北両端はNR758・759に切られている。

遺物は灰釉系陶器が1点、その他の中近世陶器2点が出土した。灰釉系陶器は混入の可能性が高い。本遺構の時期は不明である。

SD163 (附図18) D1地点 CP69~CQ69

長さ7m、幅1.5m、深さ0.15mの不定形の浅い溝で、西端をSK116に切られる。

遺物は弥生土器が3点、土師器が4点、その他の須恵器が1点、灰釉陶器が1点出土した。本遺構の時期は不明である。

第6章 遺物

第1節 土器

ここでは各時期に属する遺構出土及び包含層出土で図版に掲載したものについて述べる。各時期及び種別毎の土器概要については、第4章第4節土器概要に、各遺構出土の土器の概要及び遺構の時期決定については第5章遺構本文にそれぞれ記載してあるので、重複をさげここでは述べない。また第5分冊には種別毎の破片数を示した。

第1項 1期

SK9 (図版1) 破片数11点中3点図示した(1~3)。1は口縁部外面に口縁に平行した沈線が1条入る以外は無文の深鉢である。沈線下の口縁部表面が剥離しており、意図的に打ち欠いた可能性もあるがよくわからない。3は深鉢の底部であるが、中央に直径約2cmの円形の穿孔がある。2と3は咲畑・醍醐式第2様式b期に該当し、縄文時代中期のものと判断される。出土状況から1も同様の時期であろう。

SK40 (図版1) 破片数1点中1点図示した(4)。深鉢の胴部片で、咲畑・醍醐第2様式b期に該当し、縄文時代中期のものと判断される。

SI2 (図版1) 破片数6点中1点図示した(5)。深鉢の口縁部片で、咲畑・醍醐第1様式a期に該当し、縄文時代中期のものと判断される。

NR63 (図版1) 破片数5点中2点図示した(6・7)。6は深鉢の胴部片である。緑帯文土器第1様式c期に該当し、縄文時代後期のものと推測されるが小破片のため確証はない。7は無文の深鉢の胴部片と思われる。

包含層 (図版1) 2点図示した(8・9)。8は深鉢の胴部片で、船元・里木第4様式に該当し、縄文時代中期のものと判断される。9は深鉢の口縁部片で、縄文時代晩期のものと推測される。

第2項 II期

SB6 (図版2) 破片数14点中2点図示した(10・11)。10は台付甕の底部である。11は条痕を施した甕A2である。いずれもII-3期に属すると思われる。

SB7 (図版2) 破片数139点中3点図示した(12~14)。12・13は条痕文系の甕A2である。14は高杯Aで、二次焼成を受けている。いずれもII-3期に属すると判断される。

SB8 (図版2) 破片数92点中3点図示した(15~17)。15は甕D5、16は高杯B、17は高杯Dの脚部である。いずれもII-4期に属すると判断される。

SB9 (図版2) 破片数349点中14点図示した(18~31)。18と19は同一個体で、器台の口縁部と脚端部になる可能性がある。20は甕B2、21は甕の底部で平底2である。22は小型壺である。23は壺の体部で外面全面に赤色塗彩している。24・28はハケ条痕を施した甕A2である。25は甕C1と思われる。26・27は受け口状口縁の甕Eで、外面に列点文を施している。29は高杯Aである。30・31は高杯Cである。いずれもII-3期に属すると判断される。

SB10 (図版2) 破片数61点中3点図示した(32~34)。32は高杯もしくは器台の脚であるが、内面に二次焼成を受け、内面に炭化物が付着している。33は壺C1で、強く被熱している。34は甕C1である。いずれもII-3期に属すると判断される。

SB12 (図版3) 破片数251点中9点図示した(35~43)。35は台部を欠くが鉢Cと判断される。36は甕C1である。37は壺F、38は鉢B、39は鉢I3である。40は高杯D、41は高杯B、42は器台A1もしくはA2の脚柱部で、外面に炭化物が付着している。43は器種の判別がしづらいが、台付壺の台部の可能性がある。外面に赤色塗彩している。40のみII-4期、それ以外はII-3期に属すると判断される。

SB13 (図版4) 破片数183点中14点図示した(54~67)。54・55・56は甕C1である。57は甕Eの口縁部で、外面に列点文を施している。58は壺C1で、内面に赤色塗彩している。59は内面に三角浮文を貼り付けた壺の口縁部で壺Aに分類でき、II-2期に属すると判断される。60は器台A2、61・66は器台A1もしくはA2の脚柱部である。62・63は高杯A、64は高杯Bである。65は高杯Aの脚部と判断できる。67は器台Bの条痕文系器台である。59以外はII-3期に属すると判断される。

SB14 (図版3) 破片数276点中4点図示した(44~47)。44は甕底部で、台付3である。45は小型壺である。46は鉢B3である。47は高杯D1である。いずれもII-4期に属すると判断される。

SB15 (図版3) 破片数142点中1点図示した(48)。48は甕C1で、II-3期に属すると判断される。

SB16 (図版3) 破片数226点中5点図示した(49~53)。49は壺の頸部から胴部にかけての破片で頸部に列点文を施す。50は甕B2、51は甕C1である。52は甕の底部で、台付3である。53は高杯A-Cの脚部と考えられる。いずれもII-3期に属すると思われるが、49はよくわからない。

SB17 (図版4) 破片数266点中7点図示した(68~76)。68・69は甕D1である。70は高杯Aで、波状文を施す。71は鉢Bと思われるが、甕の可能性もある。72は高杯Aの脚柱部である。73・74は甕底部で、いずれも台付3である。75は壺の底部で、平底2、底部外面に布目圧痕が残る。76は壺C1で、体部外面に赤色塗彩が部分的に残存する。

SB18 (図版5) 破片数396点中12点図示した(77~88)。77は甕D1、78は甕F1、79は甕底部で台付3と思われる。80・81は鉢B2と思われる。82は器台A1、83は器台Bである。84は壺C2で、赤

色塗彩の痕跡が残る。85は壺の体部片である。86は高杯D1の杯部片である。87・88は鉢B2である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB20 (図版5) 破片数83点中1点図示した(89)。89は器台もしくは高杯の脚部片で、Ⅱ-3期またはⅡ-4期に属すると思われる。

SB25 (図版5) 破片数481点中3点図示した(90~92)。90は高杯D1で、二次焼成を受け、外面に煤が付着する。91は壺C5、92は壺の胴部片である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB26 (図版5) 破片数90点中1点図示した(93)。93は台付甕の底部片である。Ⅱ-4期に属すると思われる。

SB28 (図版6) 破片数707点中14点図示した(98~111)。98は鉢Fである。99~101は甕底部で、99・100は台付3、101は台付1である。102は壺の口縁部片で内外面に赤色塗彩する。103は壺C1もしくはC2の体部片で、外面に赤色塗彩する。104は壺の胴部片で、105は底部片である。106は口縁部内面を肥厚し多条沈線を施す高杯D3、107・108は高杯D1の杯部片、109は高杯Dの脚部である。110は器台Aの脚柱部、111は器台A4である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB29 (図版5) 破片数127点中4点図示した(94~97)。94・96・97は高杯D1である。95は壺Cの胴部である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB34 (図版6) 破片数108点中1点図示した(112)。甕の底部で、台付3である。Ⅱ-4期に属すると思われる。

SB35 (図版6) 破片数43点中5点図示した(113~117)。113は高杯の脚部と思われる。114・115は小型壺A1である。116は壺C1で、他に比べて小型である。117は壺D2である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB40 (図版6) 破片数206点中7点図示した(118~124)。118は甕B2、119は甕の底部で台付3である。121は壺の蓋で、122は壺の胴部片で壺Dと思われる。120・123は高杯Dの脚部で、124は高杯の脚部片と思われる。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB41 (図版6) 破片数134点中3点図示した(125~127)。125は壺C、126は小型壺である。127は高杯Eで、Ⅲ-1期に属すると思われる。126はSB41を切るSD15からの混じり込みの可能性がある。127以外はⅡ-4期に属すると思われる。

SB42 (図版6) 破片数314点中2点図示した(128・129)。128は分類できない壺、129は底部に孔をあけた鉢Eである。いずれもⅡ-4期に属すると思われる。

SB44 (図版6) 破片数282点中1点図示した(130)。130は甕D2の口縁部片である。Ⅱ期に属すると思われるがよくわからない。

SB45 (図版7) 破片数407点中13点図示した(131~143)。131は甕D2、132は甕F3である。137は甕底部で、台付1である。133は壺C1、134・135・141は壺C3、142は壺Cの胴部片、140・143は壺の底部片である。135には赤色顔料の痕跡が確認できる。138・139は口縁部に棒状浮文を貼り付けたもので同一個体の可能性が高い。壺G二重口縁壺の口縁上段の可能性があるが判然としない。136は小型壺A1である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB46 (図版7) 破片数202点中4点図示した(144~147)。144は甕C2もしくはC3、145は鉢Bである。146は脚部に横線を巡らせた高杯Aのものと思われ、Ⅱ-3期に属する。147は高杯Dである。

146以外はⅡ-4期に属すると判断される。

SB47 (図版7) 破片数147点中3点図示した(148~150)。148は器台A1、149は壺Dと思われ、150は甕D2である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB48 (図版7) 破片数73点中3点図示した(151~153)。151は甕E、152は器台A、153は甕底部で台付2である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

SB52 (図版7) 破片数206点中2点図示した(154・155)。154・155は壺Bの頸部片である。いずれもⅡ-2期に属する。

SB67 (図版7) 破片数215点中6点図示した(156~161)。156~159が土師器、160・161は須恵器である。156は壺の頸部片でⅡ期に属すると思われる。157は高杯D1、158は高杯Dの脚部片でⅡ-4期に属すると判断される。159は高杯Eの脚部片で、Ⅲ-1期に属すると判断される。160は須恵器無蓋高杯、161は高杯の脚部片で、いずれもⅣ-2~3期に属し、6cm末~7cm前に位置づけられる。遺構は、検出状況からⅡ期と考えられ、出土した土器からⅡ-4期と判断される。したがって須恵器は混じり込みと考えられる。

SB73 (図版7) 破片数10点中3点図示した(162~164)。162は台付甕の底部片、163は鉢Bの体部片、164は器台の脚部である。いずれもⅡ-4期に属すると考えられる。

P1591 (図版8) B2地点EJ70にあるビットで、破片数1点中1点図示した(165)。165は甕A1で、Ⅱ-2期に属すると判断される。

P4536 (図版8) E5地点AJ90にあるビットで、破片数10点中1点図示した(166)。166は壺Dの体部片で、Ⅱ-4期に属すると判断される。

SK14 (図版8) A6地点ET31にある長径0.6mの楕円形の土坑で、破片数12点中1点図示した(168)。168は甕C2で、Ⅱ-4期に属すると思われる。

SK50 (図版8) 破片数185点中7点図示した(173~179)。173~175は甕A1、176は甕A1の底部で布目圧痕が残る。177は壺A、178・179は壺の頸部である。いずれもⅡ-2期に属すると判断される。

SK138 (図版8) 破片数23点中1点図示した(167)。167は壺Cの破片でⅡ期に属すると思われる。

SK139 (図版8) 破片数14点中4点図示した(169~172)。169は甕底部で台付3、170は甕F3である。171は高杯の脚部と思われ、172は高杯Dの脚部である。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。

水田跡 (図版8) Ⅱ期と判断される遺構面において水田跡が検出されたのは、A5・11地点とD1地点である。ここに図示した土器は、その水田跡の畦畔及び田面に該当する土層から出土した土器である。180~187はA11地点の水田跡から出土したもので、いずれも甕A1である。188はD1地点の水田跡から出土したもので、甕A1である。いずれもⅡ-2期に属すると判断できる。

SD73 (図版8) 破片数45点中5点図示した(189~193)。189~191は弥生土器、192・193は灰釉系陶器である。189は弥生土器壺B1、190は壺の底部平底2、191は壺の体部で、いずれもⅡ-2期に属すると判断される。192は灰釉系陶器谷辺間2号窯式の小皿、193は灰釉系陶器浅間窯下1号~窯洞1号窯式の小皿で、いずれもⅥ-1期に属する。遺構は検出状況からⅡ-2期と考えられ、灰釉系陶器の2点は上層に属するⅥ期からの混じり込みと判断される。

SD162 (図版8) 破片数66点中2点図示した(194・195)。194は甕A1、195は壺Aである。いずれもⅡ-2期に属すると判断される。

SD231 (図版9) 破片数672点中7点図示した(196~202)。196~198は土師器、199~202は須恵器である。196は甕F3、197は高杯Dの脚部で、いずれもII-4期に属すると判断される。198は高杯Eの脚部で、III-1期に属すると判断される。199は須恵器把手付片口鍋で、IV-1~2期に属する。二次焼成を受け、内面に煤が付着しており、煮炊きに使用したことがわかる。軟質な焼き上がりで、煮炊きに耐えうるような工夫と思われる。200は須恵器杯蓋A、201・202は杯身で、いずれもIV-2期に属し、200は6c前半、201は6c初、202は6c後半に位置づけられる。202は底部外面にヘラ記号がある。遺構は埋没状況から、II-4期に掘削され、IV期以降に埋没したと考えられる。

SD234 (図版9) 破片数515点中17点図示した(203~219)。203~218は土師器、219は須恵器である。203・204と台付3の206は甕F3、205は口縁部を欠くが甕F3と思われる。207は甕D2、208は甕D2、209は甕D3である。210は甕Gである。211は口縁部を欠くが壺E、214は小型壺B1、215は小分類不明の小型壺である。216は器台Cである。212は高杯E2、217は高杯Dの脚部、213と218は小分類に当てはまらない高杯である。II-4期に属するものは203・204・205・206・216・217で、III-1期に属するものは210・212・213・214である。それ以外はII-4期~III-1期に属すると思われる。219は須恵器無蓋高杯で、IV-3期に属し7c初に位置づけられる。

NR25 (図版9) 破片数48点中4点図示した(220~223)。220は甕A1の底部で、布目圧痕が残る。221は鉢A、222は壺A、223は壺B1である。いずれもII-2期に属すると判断される。

NR51 (図版10) 破片数142点中4点図示した(224~227)。224・225は弥生土器、226は須恵器、227は灰釉系陶器である。224は甕A1、225は壺B1で口縁部に棒状浮文を貼り付ける。いずれもII-2期に属すると判断される。226は須恵器杯蓋Aで、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。227は灰釉系陶器皿で、VI-2期白土原1号窯式である。遺構の時期はII-2期であり、須恵器・灰釉系陶器は上層の遺構からの混じり込みであろう。

NR61 (図版10) 破片数83点中21点図示した(228~248)。228・229・231~235は甕A1である。235の底部外面には布目圧痕が残る。230は甕B1である。236・237は壺B2、238は壺B3である。239・240・242~248は壺の体部片で、II-2期に属すると判断される。241は壺C1で、II-3期に属すると思われる。241以外はII-2期に属すると判断される。

NR70 (図版10) 破片数120点中6点図示した(249~254)。249は縄文土器、250~254は弥生土器である。249は口縁部に1条突帯を巡らした深鉢で、I-2期に属すると思われる。250・251は壺A、252は壺B3、253は壺Bの頸部片である。いずれもII-2期に属すると判断される。254は高杯A~Cの脚部で、II-3期に属すると判断される。

SW76 (図版11) 破片数159点中4点図示した(255~258)。255・257は甕C2もしくはC3、256は甕D3、258は甕F3である。いずれもII-4期に属すると判断される。遺構はII-2期と考えられ、図示した土器は混じり込みと思われる。

SW90 (図版11) 破片数41点中4点図示した(259~262)。259~261は土師器、262は須恵器である。259は壺の体部片でII-4期に属すると思われる。260は甕D4で、IV-3~V-1期に属すると思われる。261は高杯Eの脚部と思われ、III-1期に属する。262は須恵器無蓋高杯で、IV-1期に属し5c後半に位置づけられる。遺構はNR111内にあり、そのことからII~III期、中でもII期の遺物が多いことからII期と考えられる。260・261は上層から混じり込みと判断される。

包含層(図版12~14) 82点図示した。II-3期以前の弥生土器破片数は8,717点である。II-4期についてはIII-1期と判別しにくいものが多いため、土師器としてカウントしたので上記の破片数には含まれていない。263~277は甕A 1で、II-2期に属すると判断される。278は甕Eで、II-4期に属すると思われる。279は甕F 1、280・281は甕F 3で、II-4期に属すると判断される。282は甕C 2もしくはC 3、283・289は甕C 2で、II-4期に属すると思われる。284は甕Dに類するがよくわからず、II期としたが他時期の可能性もある。285は鉢と思われるがよくわからず、II-3期に属するのではないかと考えられる。286は鉢Bの口縁部、288は鉢Bの体部で、287は鉢I 1である。いずれもII-4期に属すると思われる。290~293は壺A、294・295は壺B 1、296は壺B 2、297~300は壺B 3で、II-2期に属すると判断される。301~309はII-2期の壺の頸部及び体部片である。305は頸部に突帯を1条巡らし、その突帯上に斜格子状に沈線を施す。310・311は壺C 1で、II-3期に属すると思われる。312は壺C 3で、II-4期に属すると思われる。313は壺C 2で外面を赤色塗彩し、II-4期に属すると判断される。314・316・317は壺C 1もしくはC 2の体部片で、II-4期に属すると思われる。317は体部中央の列点文より下に赤色塗彩する。315は壺C 1もしくはC 2の脚部で、II-3期に属すると思われる。内外面ともに赤色塗彩した痕跡が残る。318は壺C 4で、II-4期に属すると思われる。体部上段にへら書きで、何かが描かれているが、その意味するところは不明である。319は壺の体部片で、II-3もしくは4期に属すると思われる。322は壺D 1で、II-4期に属すると判断される。320は壺E 1、323は壺E 2で、320はII-3期、323はII-4期に属すると判断される。321は壺F 1で、頸部直上に孔が穿たれている。II-4期に属すると判断される。324は器台A 1、327・328は器台Cの脚部と思われ、329は器台Dである。324はII-3期、327~329はII-4期に属すると判断される。325は高杯A、326は高杯B、330・331・333は高杯A~Cの脚部で、いずれもII-3期に属すると判断される。325は外面を赤色塗彩する。341は高杯D 1、340は高杯D 3、332・334・335~339・342は高杯Dの脚部で、いずれもII-4期に属すると判断される。

第3項 III期

SB2 (図版15) 破片数1851点中15点図示した(343~357)。343は甕C2もしくはC3、344・346は甕D2、345は甕D3、347は甕F6である。甕F6はいわゆる宇田甕で、柿田遺跡での出土例は珍しい。348は小型壺A2、349は底部が欠けているがおそらく小型壺A2であろう。350は高杯F2、351~354は高杯の杯部で、351は高杯F、352・353は高杯E、354は高杯G3である。355~357は高杯EもしくはFの脚部である。352・353のようにIII-1期の属するものも含むが、おおむねIII-2期以降のもので、須恵器を含まないことから、III-2期に属すると判断される。

SB3 (図版15) 破片数175点中1点図示した(358)。358はいわゆる柳ヶ坪型壺で壺H1、III-1期に属すると判断される。

SB22 (図版15) 破片数107点中2点図示した(359・360)。いずれも甕Gで、III-1期に属すると判断される。

SB23 (図版15) 破片数313点中5点図示した(361~365)。361は甕A2もしくはA3の頸部片で、II-4~III-1期に属すると思われる。362は瓶の底部である。363は高杯Fの杯部、364・365は高杯Fの脚部である。361以外は、いずれもIII-2~IV-1期で、共伴土器に須恵器を含まないことからIII-2期に属すると思われる。

SB30 (図版15) 破片数26点中1点図示した(366)。366は甕F4で、III-1期に属すると判断される。

SB31 (図版15) 破片数167点中7点図示した(367~373)。367・368は甕の口縁部で、甕CもしくはDである。370は壺C4、371はC3、369・373は壺の底部片である。372は高杯D4で、II-4期に属すると判断される。372以外はIII期に属すると思われる。遺構は検出状況や共伴土器に須恵器を含まないことからIII期に属すると考えられ、372は混じり込みと思われる。

SB32 (図版15) 破片数54点中3点図示した(374~376)。374は壺C1で内面に赤色塗彩する。II-4期に属すると判断される。376は甕底部台付3である。375は壺かと思われるが、甕もしくは鉢の口縁部片の可能性がある。375・376はIII期に属すると思われるが、II-4期の可能性もある。遺構は検出状況や未掲載土器からIII期と考えられ、掲載した土器は混じり込みの可能性が高い。

SB33 (図版16) 破片数104点中3点図示した(377~379)。377は壺かと思われるが鉢の可能性もある。378は高杯の杯部と思われる。379は横方向に穿孔を持つ壺蓋のつまみ部と思われる。いずれもIII期に属すると思われるが、379はII期にさかのぼる可能性が高い。遺構は検出状況や未掲載を含む土器からIII期と考えられる。

SB38 (図版16) 破片数421点中3点図示した(380~382)。380は甕C2もしくはC3、381は小型壺の口縁部片、382は高杯E1である。いずれもIII-1期に属すると判断される。

SB39 (図版16) 破片数1425点中14点図示した(383~396)。383は甕C2もしくはC3、384は甕D5、385は甕D3である。386は小型壺A2、387は底部を欠くが小型壺B1の可能性もある。388は鉢I2、390は壺C1、391は筒状にはなっていないが、全体の形から器台と考えられる。389は高杯の杯部もしくは鉢Fである。395は高杯E1、392は高杯Eの杯部、393・394は脚部である。396は器台A3である。396はII-4期、以外はIII-1期に属すると判断される。395は竪穴住居跡の北東隅に掘られたSK2から出土している。

SB43 (図版16) 破片数180点中3点図示した(397~399)。397は甕F4、398は甕F4の台部(台付

2)、399は高杯Eの杯部である。いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

SB50 (図版16) 破片数1点中1点図示した(402)。402は高杯の杯部と思われ、Ⅲ期に属すると考えられる。

SB51 (図版16) 破片数27点中1点図示した(400)。400は壺Aで、Ⅱ-2期に属すると判断される。遺構は未掲載土器からⅢ期と考えられ、400は混じり込みと判断される。

SB59 (図版16) 破片数48点中2点図示した(403・404)。403は土師器高杯EもしくはFの脚部で、Ⅲ期に属すると判断される。404は須恵器壺の口縁部片で、Ⅳ-1期に属し5c後半に位置づけられる。遺構は検出状況や未掲載遺物を含む土器からⅢ期と考えられる。404は混入であろう。

SB64 (図版16) 破片数123点中1点図示した(401)。401は甕B3で、Ⅲ期に属すると思われる。

SB70 (図版16) 破片数71点中1点図示した(405)。405は甕F4の頸部片で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

SH6 (図版16) 破片数7点中1点図示した(408)。408は甕の体部片である。遺構は検出状況からSB22(Ⅲ-1期)以前である。未掲載土器も含めⅡ-4期にさかのぼるものがなかったため、Ⅲ-1期に属すると考えられる。

P361 (図版16) 破片数1点中1点図示した(407)。407は高杯F4で、Ⅲ-2期もしくはⅣ-1期に属すると思われる。

P453 (図版16) 破片数4点中1点図示した(406)。406は甕底部台付1で、Ⅲ期に属すると思われる。

P502 (図版17) 破片数111点中2点図示した(409・410)。409は甕F4、410は壺底部平底1である。いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

P1730 (図版17) 破片数2点中1点図示した(411)。411は高杯Eの口縁部片で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

P1882 (図版17) 破片数13点中2点図示した(414・415)。414は甕C2もしくはC3で、415は高杯Eの脚部である。いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

P1887 (図版17) 破片数2点中1点図示した(412)。412は高杯EもしくはFの脚部でⅢ期に属すると判断される。

P1953 (図版17) 破片数3点中1点図示した(413)。413は高杯E1の口縁部片で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

P1994 (図版17) 破片数32点中1点図示した(417)。417は甕B3で、Ⅲ期に属すると判断される。

P3022 (図版17) 破片数1点中1点図示した(416)。416は甕B3で、Ⅲ期に属すると思われる。

SK1 (図版17) 破片数279点中2点図示した(418・419)。418・419は甕D2で、Ⅲ期に属すると思われる。

SK12 (図版17) 破片数189点中3点図示した(420~422)。420は小型壺B1、421は甕D1、422は高杯E1の口縁部で、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

SK15 (図版17) 破片数1点中1点図示した(425)。425は高杯EもしくはFの脚部片で、Ⅲ期に属すると判断される。

SK21 (図版17) 破片数47点中2点図示した(423・424)。423は高杯Fの杯部、424は脚部で、共伴土

器に須恵器を含まないことからⅢ-2期に属すると思われる。

SK22 (図版17) 破片数128点中3点図示した(427~429)。427は甕D3、428は高杯Fの脚部、429は鉢Dである。いずれも共伴土器に須恵器を含まないことからⅢ-2期に属すると判断される。

SK24 (図版17) 破片数16点中1点図示した(426)。426は甕底部平底3で、Ⅲ期に属すると思われる。

SK25 (図版17) 破片数3点中1点図示した(430)。430は高杯Eの杯部で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

SK85 (図版17) 破片数11点中1点図示した(431)。431は小型壺の口縁部と思われ、Ⅲ期に属すると考えられる。

SK118 (図版17) 破片数128点中5点図示した(432~436)。432は壺E1、433は甕C3、434~435は小型壺A2、436は鉢I2で、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

SK140 (図版17) 破片数19点中1点図示した(437)。437は甕D2で、Ⅲ期に属すると思われる。

SU4 (図版17) 破片数1点中1点図示した(438)。438は高杯E2で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

SU5 (図版17) 破片数15点中1点図示した(440)。440は壺の体部片で底部は平底2である。共伴する土器からⅢ期と思われる。

SU6 (図版17) 破片数1点中1点図示した(439)。439は高杯F1でⅢ-2~Ⅳ-1期に属するが、出土状況や須恵器が共伴しないことからⅢ-2期に属すると判断される。

SD2 (図版18) 破片数91点中3点図示した(441~443)。441は甕D2で、Ⅲ期に属すると思われる。442は高杯F、443は分類不明の脚部片で、いずれもⅢ-2期に属すると判断される。

SD3 (図版18) 破片数664点中26点図示した(444~469)。444~468は土師器、469は須恵器である。445は甕D1、444・446は甕D3、447は甕G、448は甕底部台付3、449・450は甕底部台付2である。いずれもⅢ-1期に属すると判断される。451は鉢Hで、Ⅲ期に属すると思われる。452は壺C3、453は壺C4、454は壺D1、456は壺H1、457は壺Gと思われる。454がⅡ-4期に属する以外は、Ⅲ-1期を中心としたⅢ期に属すると判断される。458は胎土や調整から壺の体部片と思われるが、へら書きで文様が施されている。文様は魚のようにも見えるがよくわからない。Ⅲ-1期に属すると思われる。455・459は小型壺で、Ⅲ-1期に属すると思われる。460~464は高杯の杯部で、464が高杯E1となる以外は高杯E3である。465は高杯Eの脚部である。いずれもⅢ-1期に属すると判断される。466は高杯Dの脚部で、Ⅱ-4期に属すると判断される。467は破片なので全体がよくわからないが、角状の把手的なものを持つ内傾口縁の壺かと思われる。468は把手を持つ内傾口縁の壺と思われる。把手の反対側の体部中央に「○」とへら書きがある。467・468はよく被熱している。468の形状は長野県森將軍塚古墳の後円部裾から出土し、甕型土製品とされているものに似ており、共伴土器から祭祀的要素が強いと考えられている(更埴市森將軍塚古墳館 佐藤信之氏のご教示による)。467・468も遺跡内では他に例のない形であり、祭祀的なものという可能性が考えられる。いずれもⅢ-1期に属すると思われる。469は須恵器杯身で、Ⅵ-2期に属し6世紀初頭に位置づけられる。

SD6 (図版19) 破片数1点中点1点図示した(470)。470は甕Cもしくは甕Dの口縁部片で、Ⅲ期に属すると思われる。

SD9 (図版19) 破片数327点中点2点図示した(471・472)。471は甕D2、472は甕底部台付1で、い

ずれもⅢ期に属すると判断される。

SD10 (図版19) 破片数721点中点4点図示した(473~476)。473は甕D 2、474は甕D 3、475は鉢C、476は高杯E 4である。476はⅢ-1期、以外はⅢ-1期を中心にしたⅢ期に属すると判断される。

SD13 (図版19) 破片数31点中点1点図示した(477)。477は甕C 3で、Ⅲ期-1に属すると判断される。

SD15 (図版19-25) 破片数13,689点中126点図示した(478~603)。478~602は土師器、603は須恵器である。以下、特に注記したものを以外はすべてⅢ-1期に属すると判断される。478・479は甕A 3である。480~482・487は甕C 2もしくはC 3、483~486は布留式系の甕C 4である。489・492・493は甕D 2、488・490・491は甕D 3である。494は甕F 2でⅡ-4期に属すると判断される。495~512は甕F 4、513~518は甕底部台付2で甕F 4のものと判断でき、519・520は甕F 5である。521~534は近江系の甕Gである。535は壺に分類できるかと思われるがよくわからない。胎土や調整からⅢ-1期に属すると思われる。536は壺F 2で、頸部に1箇所穿孔がある。537・538は底部に孔を開けた鉢E、540・541は鉢G 1、539は鉢G 2、542は鉢I 3である。543は壺C 1で、Ⅱ-4期に属すると思われる。545・546・549は壺C 4もしくは壺Eであるが、大型であることから壺C 4と思われる。550は壺C 4である。547・548は壺D 2である。551・552・554は壺E 1、553もおそらく壺E 1であろう。555・556は柳ヶ坪型文を施した壺H 1、557・558・561は壺H 2である。559は壺I、560は壺の底部片で外面を赤色塗彩する。Ⅱ-4期に属すると思われる。562~570は小型壺B 1、571~575は小型壺の破片であるが、おそらくいずれも小型壺B 1であろう。576は器台AでⅡ-4期に属すると判断できる。577・578は器台Eである。581・582は高杯D 1、583は高杯D 2、579・580は高杯Dの脚部で、いずれもⅡ-4期に属すると判断できる。584~594・596・597は高杯E 2、595・598は高杯E 3、599は高杯E 4、600~602は高杯Eの脚部である。603は須恵器杯蓋Aで、Ⅳ-1期に属し5世紀末に位置づけられる。遺構は検出状況や、未掲載土器を含め本遺構出土土器のほとんどがⅢ-1期に属すると判断されることから、Ⅲ-1期に掘削され同期の間に埋没したと考えられる。Ⅱ-4期に属する土器は、溝の掘削によって分断されたその時期の竪穴住居跡(例えばSB28やSB40)などから混じり込んだものと考えられる。またⅣ期の須恵器は埋土最上面で出土したことから、溝埋没後の混じり込みと判断される。

SD16 (図版25) 破片数74点中点3点図示した(604~606)。604は甕底部台付、605は高杯EもしくはFの脚部で、いずれもⅢ期~Ⅳ-1期に属すると思われる。606は須恵器杯蓋Aで、Ⅳ-1期に属し5世紀末に位置づけられる。

SD17 (図版25) 破片数538点中8点図示した(607~614)。607は甕D 2、608は鉢でおそらく鉢Eと思われる。いずれもⅢ期~Ⅳ-1期に属すると思われる。609は高杯F 1もしくはF 2、610~613は高杯F 1の脚部で、Ⅲ-2~Ⅳ-1期に属すると判断される。614は須恵器杯身で、Ⅳ-1期に属し5世紀末に位置づけられる。

SD22 (図版25) 破片数158点中7点図示した(615~621)。615は壺C 1で、Ⅱ-4期に属すると思われる。616は甕F 5で、Ⅲ-1期に属すると判断される。617は高杯Eの脚部で、内面に煤が付着する。Ⅲ-1期に属すると判断される。618は壺C 3で、赤色塗彩の痕跡が残る。Ⅲ期に属すると思われる。619は壺F 1で、口縁部に2つ1組の穿孔があり、外面を赤色塗彩する。620は壺蓋である。619・620はⅡ-4期に属すると判断される。621は壺Jで、Ⅲ期に属すると思われる。

SD50 (図版25) 破片数27点中2点図示した(622~623)。622はⅡ-1期に属すると思われる壺の頸

破片である。623は中世土師器の高台を有する皿でVI期に属すると判断される。遺構は検出状況や未掲載遺物からIII期に属すると考えられ、623は混入したものと判断される。

SD53(図版25) 破片数1点中1点図示した(624)。624は甕A1で、II-2期に属すると判断される。遺構は検出状況からIII期に属すると考えられる。

SD217(図版25) 破片数32点中3点図示した(625~627)。625は甕D2、626は壺H2、627は壺F2で、いずれもIII-1期に属すると思われる。

SD235(図版26) 破片数261点中25点図示した(635~649)。635・636は甕C2もしくはC3、637・642・643は布留式系の甕C4である。638は甕F4、647は甕F5、639・640は甕底部台付2で甕F4の底部と思われる。641は甕Gで、644は台付甕の体部である。645は鉢G2、646は器台E、648は壺E、649は高杯Eである。いずれもIII-1期に属すると判断される。

NR24(図版26・27) 破片数153点中16点図示した(650~665)。650~663は弥生土器、664・665は土師器である。650~656は甕A1である。654~656は甕A1の底部で平底1、体部外面に布目圧痕が残る。657は甕底部台付1で、II期と思われるがよくわからない。661は壺B3で、659・660・662・663は壺の頸部~体部である。657以外はII-2期に属すると判断される。658は甕D2で、III-2期に属すると判断される。664は高杯F2、665は高杯F4で、III-2~IV-1期に属するが、共伴土器に須恵器がないことからIII-2期のものと判断される。

NR59(図版27) 破片数506点中15点図示した(666~680)。666~669・673は弥生土器、670~672・674~680は土師器である。666は甕A1の頸部片、668は口縁部外面に1条突帯を巡らす内傾口縁の壺、667・669・673は壺の頸部片である。いずれもII-2期に属すると判断される。670・671は甕F4でIII-1期に属し、680は甕C2、672は甕底部台付1でIII期に属すると判断される。674は壺H2でIII-1期の属すると思われる。675・676は高杯Eの脚部でIII-1期に、677~679は手捏でIII期にそれぞれ属すると思われる。

NR60(図版25) 破片数75点中7点図示した(628~634)。628~630は甕A1で、II-2期に属すると判断される。630の底部外面には布目圧痕の痕跡が残る。631は甕F3、632は甕F3の胴部片で、II-4期に属すると判断される。633は甕底部台付3でII-4~III-1期に属すると思われる。634はII-2期の壺の頸部片である。

NR75(図版27) 破片数140点中7点図示した(681~687)。681は甕D2、682は甕F4、683・684は鉢I2、685は壺C3、686は高杯EもしくはFの脚部、687は小型壺A3である。いずれもIII-1期に属すると判断される。

NR111(図版28) 破片数58点中3点図示した(688~690)。688は壺I、689は台付甕の底部で甕F、690は高杯Dである。690はII-4期、以外はII-4~III-1期に属すると思われる。

SW1(図版28) 破片数18点中10点図示した(694~703)。694は甕D2、695は甕F4、696は甕Gで、いずれもIII-1期に属すると判断される。698は壺Jで外面に赤色塗彩し、II-4期に属すると判断される。699は小型壺A2、700は小型壺A1でIII-1期に属すると判断される。701は器台Cで、II-4期に属すると判断される。697は高杯Eの杯部、702は高杯DでII-4期に、703は高杯Eの脚部でIII-1期にそれぞれ属すると判断される。

SW2(図版28) 破片数3点中3点図示した(691~693)。691は鉢Bの口縁部、692は高杯D1で、

脚部の付け根部に横線が4条施されている。いずれもⅡ-4期に属すると判断される。693は高杯Eの脚部で、Ⅲ-1期に属すると判断される。

SW25 (図版28) 破片数85点中1点図示した(704)。704は壺C3で、Ⅱ-4期に属する。

SW28 (図版28) 破片数11点中2点図示した(705・706)。705は甕C2もしくは3、706は甕Gで、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。

SW30 (図版28) 破片数40点中2点図示した(707・708)。高杯の杯部片で、707は高杯F1もしくは2、708は高杯F4で、Ⅲ-2~Ⅳ-1期に属するが、共伴遺物に古代の須恵器1点があるのみで、遺構の検出状況と合わせるとⅢ-2期に属すると考えられる。

SW32 (図版28) 破片数61点中2点図示した(709・710)。709は甕底部丸底1でⅢ~Ⅳ-2期と思われる。710は高杯F1の脚部と思われる。Ⅲ-2~Ⅳ-1期に属すると判断されるが、共伴土器に須恵器がないことからⅢ-2期のものと考えられる。遺構はⅢ期と考えられることから、709は混入の可能性がある。

包含層(図版29・30) Ⅲ期と判断できる土師器50点図示した(711~760)。711~713は甕C2もしくは3、717は布留式系の甕C4、714・715・718~720・722・やや口縁部が短い727は甕D2、716は甕F4、721は甕F5、728は甕Hである。723~726は甕底部で、723が台付2、724・726が台付1、725が平底3である。729は鉢C、730・734・735は鉢D、731・733は鉢CもしくはD、732は鉢F、736は鉢I3である。737~740は壺C4、741は壺E、742・743は壺H2である。737は口縁端部を外側に折り返したためらしい例である。744は小型壺A1、745は小型壺B2である。746・747は手捏ねである。ただし747は外面を磨いており、壺Jとしてもよいかもしれない。748は器台Eである。751は高杯E1、749・750は高杯E2である。752は杯部に段がないが高杯Eの一種と思われる。753は杯部の上段が外反するもので分類にないが、胎土や調整からⅢ期と判断した。754・755・760は高杯Fで、Ⅳ-1期にまでかかるがここで報告する。758・759は高杯EもしくはFの脚部である。756・757は手捏ねである。

第4項 IV期

SB1 (図版31) 破片数149点中12点図示した(761~772)。761~767は土師器、768~772は須恵器である。761・762は土師器甕C2もしくはC3、763は甕底部平底1、766は甕底部平底3、764は高杯G3、765は高杯F1、767は壺底部九底2で、須恵器によってIV-1期に属し、5c末に位置づけられる。768・769は須恵器杯蓋A、770~772は杯身である。須恵器はいずれもIV-1期に属し、5c末に位置づけられる。

SB37 (図版31・32) 破片数1366点中23点図示した(773~795)。773~789は土師器、790~795は須恵器である。773は土師器甕F2で、II-4期に属すると判断される。774・775は甕D2、778は甕D3、776は甕底部平底3、777は甕底部平底2、779は鉢E、780は鉢F、781は壺底部平底1、782は鉢D、783は鉢J、784は小型壺、785~787、789は高杯Fの脚部と思われ、788は土製紡錘車である。790~792は須恵器杯蓋A、793・794は杯身、795は有蓋高杯である。須恵器はいずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。773以外の土師器も須恵器と同時期であろう。773はSB37の北側がNR13のII-4期の埋土部分に掘り込まれていることから、そこからの混じり込みと考えられる。

SB60 (図版32) 破片数57点中3点図示した(796~798)。796は土師器甕D2、797は高杯Fの脚部と思われ、いずれも須恵器からIV-2~3期に属すると考えられる。798は須恵器高杯の脚部で、IV-2~3期に属し6c末~7c前半に位置づけられる。

SB63 (図版32) 破片数391点中5点図示した(799~803)。799~800は土師器、801~803は須恵器である。799は土師器甕D4、800は壺底部九底2で、須恵器からIV-3期に属すると考えられる。801・802は須恵器杯蓋A、803は杯身で、いずれもIV-3期に属し7c初~前に位置づけられる。

SB75 (図版32) 破片数36点中7点図示した(804~810)。804~806は土師器、806~809は須恵器、810は轆羽口である。804は土師器甕D1、805は甕D4、806は甕底部平底で、いずれも須恵器からIV-2期に属すると考えられる。807は須恵器杯蓋Aで、IV-3期に属し7c初に位置づけられる。808は杯身で、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。809は高杯の杯部片で、IV-2期に属し6cに位置づけられる。杯部外面に、自然釉によってはっきりとは見えないが、波状文が施されている。810は轆羽口である。

SH32 (図版32) 破片数18点中1点図示した(811)。811は甕D4で、IV期に属すると思われる。遺構は未掲載も含めた土器からIV期と考えられるが、それ以降の可能性もある。

P1732 (図版32) 破片数8点中2点図示した(812・813)。812は土師器高杯G3で、須恵器からIV-1期に属すると考えられる。813は須恵器杯身でIV-1期に属し5c末に位置づけられる。

P2157 (図版32) 破片数2点中1点図示した(814)。814は須恵器甕でIV-2期に属し6c後半に位置づけられる。

SU7 (図版32) 破片数1点中1点図示した(815)。815は須恵器高杯の脚部でIV-2期に属し6c後半に位置づけられる。

SD78 (図版32・33) 破片数点中24点図示した(817~840)。818・819・822は弥生土器、817・820・821・823~834は土師器、835~840は須恵器である。818は弥生土器壺A、819は壺体部片で、いずれもII-2期に属すると判断できる。817は口縁部を欠く土師器壺E、820は壺G2で、いずれもIII期に属すると思われる。822は弥生土器甕A1の底部で、II-2期に属すると判断できる。821は土師器甕D

4、829は甕D3で、821はIV-2期に、829はIV-1~2期にそれぞれ属すると思われる。823は鉢Jであるが、瓶の可能性もある。IV-1~2期に属すると思われる。824は瓶の底部、825は鉢I2、826・827は小型壺A、828は手捏ね、831は高杯F4、830・832~834は高杯Fの脚部で、いずれもIV-1~2期に属すると思われる。835・836は須恵器杯蓋Aで、835はIV-1期に属し5c末に、836はIV-2期に属し6c初にそれぞれ位置づけられる。837・838は杯身で、いずれもIV-2期に属し、837は6c初、838は6c前葉にそれぞれ位置づけられる。839は無蓋高杯で、IV-2期に属し6c前半に位置づけられる。840は甕の口縁部でIV-1期に属し、5c末に位置づけられる。

SD107 (図版33~35) 破片数108点中46点図示した(841~886)。841は弥生土器、842~874は土師器、875~886は須恵器である。841は弥生土器壺B1で、II-2期に属すると判断される。842は土師器壺C2で、II-4期に属すると思われる。843は壺E、844は壺H1、845は壺C4、846は壺Gと思われ、844・846はIII-1期に、それら以外はIII期に属すると判断される。847は甕D1でIV期に属すると思われる、848・854は甕D2でIV-2期に属すると判断される。849は布留式系の甕C4で、III-1期に属すると判断される。855~857は甕F3でII-4期に、858・859は甕F4でIII-1期に属すると判断される。850~852は甕底部で、850は平底3でIV期に、851は台付1、852は台付3でIII-IV期に属すると思われる。860は甕B3で、IV期に属すると思われる。853は小型壺A2で、IV-1~2期に属すると思われる。862は鉢Kで、861は口縁部のみであるが、862に似ることから鉢Kと考えられ、IV期に属すると思われる。869は鉢F、870は鉢I2で、872~874は鉢I3、いずれもIV期に属すると思われる。863・864・866・867・871は高杯F、いずれもIII-2~IV-2期に属すると思われる。865は高杯G2でIII-IV期に属すると思われる。868は北陸系の特殊器台の器台Dで、II-4期に属すると判断される。

875・876は須恵器杯蓋Aで、IV-2期に属し6c初に位置づけられる。877は杯蓋Cで、V-2期に属し8c中~後半に位置づけられる。878・879は杯身で、いずれも底部外面にヘラ記号を持つ。IV-2期に属し6c中に位置づけられる。880・881は高杯の脚部で、880はIV-2期に属し6c中に、881はIV-2~3期に属し6c末~7c初にそれぞれ位置づけられる。882~884は甕で、いずれもIV-2期に属し、882は6c後半、883は6c初、884は6c末にそれぞれ位置づけられる。885は提瓶で現状では2箇所把手があるが本来3方に付くもので、IV-2~3期に属し6c末~7c初に位置づけられる。886は壺で、IV-2~3期に属し6c末~7c初に位置づけられる。

SD209 (図版32) 破片数21点中1点図示した(816)。816は須恵器甕の口縁部と考えられ、IV-2期に属すると判断でき、6c後半に位置づけられる。

SD233 (図版35) 破片数1950点中14点図示した(887~900)。887~891は土師器、892~900は須恵器である。887・888は土師器甕D4、889・891は甕B3で、いずれもIV-2~3期に属すると思われる。891は底部外面に木葉状痕が残る。890は高杯Eの脚部で、III-1期に属すると判断される。893は須恵器杯蓋Aで、IV-3期に属し7c初に位置づけられる。894~896は杯身で、894・895はIV-2期に属し前者が6c中、後者が6c後半、896はIV-3期に属し7c前半にそれぞれ位置づけられる。892は甕で、IV-2~3期に属し6c末~7c初に位置づけられる。897は直口壺、898・899は広口壺で、いずれもIV-2期に属し6c前半に位置づけられる。898・899は現状では接点がないが、同一個体の可能性がある。897の底部外面位にはヘラ記号が認められる。900は杯蓋Cで、V-1期に属し7c後葉に位置づけられる。

NR43 (図版36) 破片数789点中14点図示した(905~918)。905~907は土師器、908~911は須恵器、912~917は灰釉系陶器、918は白磁である。905は土師器高杯F1の脚部、906は小型壺A、907は手捏ねで、いずれもIII-2~IV-1期に属すると思われる。908は須恵器杯身でIV-2期に属し、6c前半に位置づけられる。909は長頸瓶の口縁部、910は無台杯、911は有台杯で、910はV-1~2期に属し7c後半~8c初に、909・911はいずれもV-2期に属し9c前に位置づけられる。911は底部外面に「田万」の墨書がある。912~915は灰釉系陶器碗、916・917は皿で、916は谷迫間2号窯式、912・913・917は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に属し、914・915は白土原1号窯式でVI-2期に属すると判断される。912は内面に墨が付着しており、915は内外面に煤が付着している。918は白磁IV類の碗で、VI-1期に属し12cに位置づけられる。遺構はIV期に属すると考えられ、V期・VI期の土器はNR43を切る、NR34やNR35からの混じり込みと思われる。

NR44 (図版35) 破片数12点中2点図示した(901・902)。901は須恵器無蓋高杯で、IV-1期に属し5c後半に位置づけられる。902は有台杯で、V-2期に属し8c後葉に位置づけられる。遺構は検出状況や未掲載を含む土器からIV期と考えられ、902はNR44埋没後の遺構からの混じり込みと思われる。

NR45 (図版35) 破片数17点中1点図示した(903)。903は土師器高杯Fの脚部で、IV期に属すると思われる。

NR50 (図版35) 破片数8点中1点図示した(904)。904は土師器手捏ねで、IV期に属すると思われる。

NR58 (図版36・37) 破片数999点中35点図示した(921~955)。921・922・936・937は弥生土器、923~925・927~935・938~948は土師器、949~955は須恵器である。921・922は弥生土器甕A1で、II-2期に属すると判断される。923は土師器甕D4、924・925・928は甕D2、927は甕F6、926は甕底部平底1、935は平底1で長嗣化した甕の体部である。927はいわゆる宇田式甕で柿田遺跡では出土が珍しく、III-2~IV-1期に、それ以外の甕はIV-1~2期に属すると思われる。929は鉢と思われるが、高杯の可能性もある。930・931・933は鉢Dと思われ、932は鉢F、934は鉢I3で、いずれもIV期1~2に属すると思われる。936は弥生土器壺A、937は壺の頸部片で、いずれもII-2期に属すると判断される。938は壺C1で、II-4期に属すると思われる。939は壺C4、940は壺E、941~943は壺Eの体部で、いずれもIV-1~2期に属すると思われる。944~946は高杯Fの脚部、947・948は手捏ねで、いずれもIV-1~2期に属すると思われる。950は須恵器杯蓋A、951は杯身、952は有蓋高杯、949は高杯脚部で、いずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。952は杯部と脚部の粘土が違っており興味深い。953は杯蓋A、954・955は杯身で、いずれもIV-2期に属し6c初~前葉に位置づけられる。

NR84 (図版36) 破片数4点中2点図示した(919・920)。919は土師器甕D3でIV-1~2期に属すると思われる。920は須恵器杯身で、IV-2期に属し6c前に位置づけられる。

SW5・6 (図版37) 1点図示した(956)。956は土師器甕2で、IV期に属すると思われる。

SW8 (図版37) 破片数142点中2点図示した(957・958)。957は土師器甕F4で、III-1期に属すると判断される。958は須恵器壺で、IV-2期に属し6c初に位置づけられる。

SW9 (図版37) 破片数30点中1点図示した(959)。959は土師器甕D4で、IV-2期に属すると判断される。

SW11 (図版37) 破片数62点中2点図示した(961・962)。961は須恵器樽型壺の側面部と思われ、IV

—1期に属し5c後半に位置づけられる。962は土師器高杯Fで、IV—1期に属すると思われる。

SW12 (図版37) 破片数18点中1点図示した(960)。960は土師器甕F3で、II—4期に属すると判断される。

SW13 (図版38) 破片数104点中6点図示した(963~968)。963~966は土師器、967~968は須恵器である。963は土師器甕F4、964は壺Iで、いずれもIII—1期に属すると思われる。965は甕D4、966は鉢I3で、いずれもIV—1~2期に属すると思われる。967は須恵器杯蓋AでIV—1期に属し5c末に、968は杯身でIV—2期に属し6c初に、それぞれ位置づけられる。

SW14 (図版38) 破片数198点中3点図示した(969~971)。969は土師器高杯F、970は土師器甕底部台付2で、969はIV—1~2期に、970はII—4期に、それぞれ属すると思われる。971は須恵器杯蓋Aで、IV—2期に属し6c初に位置づけられる。

SW31 (図版38) 破片数33点中5点図示した(972~976)。972は土師器甕D2、974・976は甕D4、975は小型壺Bで、いずれもIV—1~2期に属すると思われる。973は須恵器杯蓋Aで、IV—1期に属し5c末に位置づけられる。

SW55 (図版38) 破片数67点中4点図示した(977~980)。977は須恵器杯身で、IV—1期に属し5c末に位置づけられる。978は高杯脚部で、IV—3期に属し7c前半に位置づけられる。979は短頸壺で、IV—2~3期に属し6c末~7c前半に位置づけられる。底部にはへラ記号がある。980は有台杯で、V—1期に属し7c後半に位置づけられる。

SW57 (図版38) 破片数17点中1点図示した(981)。981は灰釉系陶器碗で、谷辺間2号窯式でVI—1期に属すると判断される。

SW58 (図版38) 破片数3点中1点図示した(982)。982は土師器甕D2で、III—2~IV—1期に属すると思われる。

SW62 (図版38) 破片数86点中5点図示した(985~989)。985は土師器鉢F、986は高杯G1と思われる、989は高杯F3、988は手捏ねで、いずれもIV—1期に属すると思われる。987は須恵器杯蓋Aで、IV—1期に属し5c末に位置づけられる。

SW63 (図版38) 破片数26点中2点図示した(983~984)。983は須恵器杯蓋A、984は杯身で、983はIV—2期に属し6c前半に、984はIV—3期に属し7c前半にそれぞれ位置づけられる。

包含層 (図版39~41) IV期と判断される土器106点を図示した(990~1095)。990~1018は土師器、1019~1095は須恵器である。990~994は土師器甕D4、995~997・1000は甕D2、998は甕D3、999は甕D5、1003は甕B3、1004は甕底部台付3である。1001は鉢D、1005は鉢E、1006・1007は鉢I3である。1002は甕である。1008は高杯G1、1009・1010は高杯Fの脚部、1011は壺、1012~1018は手捏ねである。

1019~1022・1030・1040~1046・1060・1061は須恵器杯蓋、1023~1029・1031~1034・1047~1054・1056~1059・1062~1064・1065は杯身、1035~1039・1055・1066~1067は高杯、1069・1071は壺の蓋、1070・1072は直口壺、1090~1092・1095は広口壺、1073~1077・1081は鉢、1078~1080は提瓶もしくは横瓶、1089は提瓶、1082~1088は甕、1093・1094は器種不明である。1034・1056・1057・1070・1088にはへラ記号がある。IV—1期に属し5c末に位置づけられるものは、1019~1028・1030~1040である。IV—2期に属し、6c初に位置づけられるものは1029・1048・1049・1055・1089、6c前に位置

づけられるものは1041・1042・1050・1095、6c中に位置づけられるものは1043・1044・1051・1053、6c後に位置づけられるものは1046・1047・1056・1070・1071・1082・1083・1086・1092、6c末に位置づけられるものは1052・1058・1084、6cに位置づけられるものは1073・1078・1079・1090・1091である。IV-2～3期に属し6c末～7c前に位置づけられるものは1045・1054・1059・1072・1077・1088、6～7cに位置づけられるものは1080・1081である。IV-3期に属し7c前半に位置づけられるものは1057・1060～1065・1067・1068・1076・1087である。1093・1094は所属時期不明である。

第5項 V期

SB65 (図版42) 破片数722点中1点図示した(1096)。1096は土師器高杯の脚部で、Ⅱ-4~Ⅲ期に属すると思われる。

SB68 (図版42) 破片数1点中1点図示した(1105)。1105は土師器壺C1もしくは2の口縁端部が垂下した部分の破片と思われる。Ⅱ-4期に属すると思われる。

SB69 (図版42) 破片数719点中3点図示した(1097~1100)。1097は土師器甕F3でⅡ-4期に属すると判断される。1098は須恵器杯身で、Ⅳ-2期に属し6c後半に位置づけられる。1099は無台杯で、Ⅴ-2期に属し8c前半に位置づけられる。1100は器種・時期ともに不明である。

SB71 (図版42) 破片数169点中2点図示した(1101・1102)。1101は土師器甕Gで、Ⅲ-1期に属すると判断される。1102は須恵器無台杯で、Ⅴ-1~2期に属し7c末~8c初に位置づけられる。なお製塩土器が1点出土しているが、図化できる状態ではなかったため示すことができなかった。

SB76 (図版42) 破片数42点中2点図示した(1103・1104)。1103は須恵器杯蓋A、1104は杯身で、1103はⅤ-1期に属し7c後半に、1104はⅣ-3期に属し7c前半に位置づけられる。

SB77 (図版42) 破片数606点中15点図示した(1111~1125)。1111は弥生土器、1112~1117は土師器、1118~1125は須恵器である。1111は弥生土器甕B2で、Ⅱ-2もしくは3期に属すると思われる。1112は土師器甕D4、1114は甕で、いずれもⅣ-2~Ⅴ-1期に属すると思われる。1113は甕F4、1115・1116は高杯Eの脚部で、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。1117は高杯Dの脚部で、Ⅱ-4期に属すると判断される。1118・1119は須恵器杯蓋Aで、1118はⅣ-1期に属し5c末に、1119はⅣ-2期に属し6c後半に位置づけられる。1120~1122は杯身で、1120はⅣ-2期に属し6c後半に、1121はⅣ-2~3期に属し6c末~7c初に、1122はⅣ-3期に属し7c前半にそれぞれ位置づけられる。1123は杯蓋と思われるが無蓋高杯の可能性もある。杯蓋であればⅣ-2期に属し6c前半に位置づけられる。1124・1125は高杯の脚部で、いずれもⅣ-3期に属し、1124は7c初に、1125は7c前半に位置づけられる。

SB78 (図版42) 破片数197点中4点図示した(1106~1109)。1106は甕D4で、Ⅳ-2~3期に属すると思われる。1107は高杯Eの脚部で、Ⅲ-1期に属すると判断される。1108・1109は須恵器高杯の脚部で、1108はⅤ-1期に属し7c後半に、1109はⅣ-2~3期に属し6c末~7c初にそれぞれ位置づけられる。

SB79 (図版42) 破片数325点中3点図示した(1126~1128)。1126は土師器甕D4で、Ⅴ-1期に属すると思われる。1127は須恵器無台杯、1128は甕の口縁部で、1127はⅤ-1期に属し7c後半に、1128はⅣ-2~Ⅴ-1期に属し6~7cに位置づけられる。

SB81 (図版42) 破片数205点中1点図示した(1110)。1110は土師器甕D2もしくは4で、所属時期はよくわからない。

SH1 (図版42) 破片数9点中1点図示した(1129)。1129は須恵器杯蓋Cで、Ⅴ-2期に属し9c初に位置づけられる。内面全面に墨が付着しており、碗に転用された可能性がある。

SH33 (図版42) 破片数33点中2点図示した(1130・1131)。1130は須恵器杯蓋Cで、Ⅴ-2期に属し9c初に位置づけられる。1131は灰軸陶器碗で、Ⅴ-3期に属し10c前半に位置づけられる。

SH34 (図版42) 破片数6点中1点図示した(1133)。1133は須恵器杯蓋Aで、Ⅳ-2期に属し6c中

に位置づけられる。

SH35 (図版42) 破片数2点中1点図示した(1132)。1132は須恵器有台杯で、V-2期に属し8c末に位置づけられる。

SA3 (図版42) 破片数12点中3点図示した(1137~1139)。1137は須恵器杯蓋C、1138は無台杯、1139は把手付有台杯で、いずれもV-2期に属し9c初に位置づけられる。1138は底部外面にヘラ記号及び墨書がある。墨書は複数字確認できるが釈読は不能である。

P140 (図版42) 破片数2点中1点図示した(1134)。1134は須恵器杯蓋Cで、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。

P2112 (図版42) 破片数1点中1点図示した(1135)。1135は須恵器有台杯で、V-2期に属し8c前半に位置づけられる。

P2114 (図版42) 破片数4点中1点図示した(1136)。1136は須恵器無台杯で、V-2期に属し8cに位置づけられる。

P2147 (図版43) 破片数31点中3点図示した(1140~1142)。1140は須恵器杯蓋C、1141・1142は無台杯で、いずれもV-2期に属し、1140は8c、1141・1142は8c末~9c初に位置づけられる。1142の底部外面にはヘラ記号がある。

P2156 (図版43) 破片数4点中1点図示した(1143)。1143は土師器鉢Dで、V期に属すると思われる。

P4499 (図版43) 破片数6点中1点図示した(1144)。1144は灰釉陶器碗で、V-3期に属し10c前半に位置づけられる。

SK63 (図版43) 破片数5点中1点図示した(1149)。1149は須恵器無台盤で、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。

SK89 (図版43) 破片数6点中2点図示した(1147・1148)。1147は須恵器杯蓋C、1148は鉢の口縁部で、いずれもV-2期に属し8c中葉~後葉に位置づけられる。

SK92 (図版43) 破片数5点中2点図示した(1152・1153)。1152は須恵器甗で、IV-3期に属し7c初に位置づけられる。底部外面にヘラ記号がある。1153は杯蓋Cで、V-1~2期に属し7c末~8c初に位置づけられる。

SK93 (図版43) 破片数3点中1点図示した(1150)。1150は土製紡錘車である。遺構は検出状況や土器からV期と考えられ、そのことから1150もV期として報告する。

SK147 (図版43) 破片数13点中1点図示した(1151)。1151は須恵器杯蓋Cで、V-1期に属し7c末に位置づけられる。

SK148 (図版43) 破片数297点中2点図示した(1145・1146)。1145は須恵器甗で、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。1146は灰釉陶器皿で、V-3期に属し10c前半に位置づけられる。

SD1 (図版43) 破片数1256点中9点図示した(1154~1162)。1154は土師器甗EでII-4期に属すると判断される。1155は甗D4でV-1~2期に属すると判断される。1158は須恵器杯蓋C、1156・1157は無台杯、1159~1161は有台杯、1162はフラスコ型瓶である。1158はV-1~2期に属し7c末~8c初に、1156はV-1期に属し7c後半に、1157・1159~1161はV-2期に属し8c前半に、1162はIV-2~3期に属し6c末~7c前半にそれぞれ位置づけられる。1156・1158の底部外面には墨書が

あり、釈文は1156は不詳であるが、1158は「干」と読める。土器が割れているため不明であるが、まだ下に文字が続くと思われる。1157の底部外面にはヘラ記号がある。

SD12 (図版43) 破片数122点中7点図示した(1163~1169)。1163は須恵器大型無台杯、1164・1165は鉢、1166は無台杯、1167は有台杯で、いずれもV-2~3期に属し7c後半~8c初に位置づけられる。1167の高台は欠損している。1168は土師器鉢Dで、V-1~2期に属すると思われる。1169は土師器壺C1で、II-3期に属すると思われる。外面を赤色塗彩する。

SD79 (図版44) 破片数11点中3点図示した(1170~1172)。1170は土師器手捏ねで、IV期に属すると思われる。1171は灰釉陶器碗で、V-3期に属し9c後半に位置づけられる。1172は須恵器長頸壺で、V-2期に属し8c末~9c初に位置づけられる。

SD80 (図版44) 破片数22点中2点図示した(1173・1174)。1173は弥生土器壺の頸部で、II-2期に属すると思われる。1174は須恵器杯蓋Cで、V-2期に属し8c末に位置づけられる。天井部内面に墨が付着しており、碗に転用された可能性がある。

SD207 (図版44) 破片数617点中8点図示した(1175~1182)。1175は須恵器杯蓋A、1176は有台杯、1177は台付提瓶もしくは台付壺の台部、1178は器種不明、1181は提瓶、1182は甕である。1175はIV-2期に属し6c前に、1178はV期に属し、1181・1182はV-1期に属し7c後半に、1177はIV-3~V-1期に属し6c末~7c初に、1176はV-2期に属し8c後半にそれぞれ位置づけられる。1176は体部中程で内側に一段入る有台杯であるが、現状では上段部が欠けている。1179・1180は土師器甕D4で、V-1~2期に属すると思われる。

SD208 (図版45) 破片数1856点中29点図示した(1197~1225)。1197~1206は土師器、1207・1209~1225は須恵器、1208は輪覆口である。1197~1201は土師器甕D4、1202は分類にない甕、1203・1204は甕底部で、1203は平底1、1204は平底2、1205は瓶の把手で、いずれもV-1~2期に属すると思われる。1206は器種不明であるが、共存土器からV期に属すると考えられる。1209は須恵器杯身でV-1期に属し7c中に位置づけられる。1210は欠損したかえりの痕跡が確認できることから杯蓋Bで、V-1期に属し7c後半に位置づけられる。天井部外面にはヘラ書き文字が確実なものが2字、残画らしきものも含めると4字確認できる。文字は欠損しているがつまみ部分方向に文字上を置いて記す。確認できる2字の内向かって右側が「都」、左側が判然としないが「成」に二字である。1211~1213は無台杯で、1211・1212はV-1期に属し7c後半に、1213はV-1~2期に属し7c後半~8c初にそれぞれ位置づけられる。1212は底部外面には墨書があるが、釈読できない。1216~1220は有台杯で、いずれもV-1~2期に属し、1216・1218は7c後半~8c初、1217・1219・1220は7c末~8c初にそれぞれ位置づけられる。1216は底部外面に墨が付着しており、碗に転用された可能性がある。1214は甕で、IV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。1215はミニチュア短頸壺、1221~1223は高杯の脚部、1207は鉢、1224は盤、1225は甕で、いずれもV-1期に属し7c後半に位置づけられる。

SD232 (図版44) 破片数292点中3点図示した(1183~1185)。1183は須恵器長頸壺、1184は有台杯で、いずれもV-2期に属し、1183は8cに、1184は8c末~9c初に位置づけられる。1185は甕D4でV-2期に属すると思われる。

NR37 (図版44) 破片数324点中4点図示した(1186~1189)。1186は土師器高杯Fの脚部で、III-2~IV-1期に属すると判断される。1187は注口部が欠損しているが、須恵器片口有台鉢で、V-2期

に属し8c末に位置づけられる。1188は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に属すると判断される。1189は須恵器甕で、IV-2期に属し6cに位置づけられる。

NR38(図版44) 破片数167点中5点図示した(1190~1194)。1190は土師器高杯Fの脚部でIII-2~IV-1期に属すると判断される。1191は須恵器杯身で、IV-2期に属し6c前半に位置づけられる。1192・1193は灰釉系陶器碗で、1196は西坂1号窯式、1197は浅間窯下1号～窯洞1号窯式で、いずれもVI-1期に属する。1194は須恵器無台杯で、V-1~2期に属し7c末~8c初に位置づけられる。

NR39(図版44) 破片数16点中1点図示した(1195)。1195は須恵器無蓋高杯で、IV-2~3期に属し6c末~7c初に位置づけられる。

NR76(図版44) 破片数101点中1点図示した(1196)。1196は土師器甕Jで、V-2期に属すると思われる。

NR95(図版46) 破片数1059点中24点図示した(1226~1249)。1242は弥生土器、1241・1243・1244・1246~1248は土師器、1226~1240・1245は須恵器、1249は陶丸である。1226~1229は須恵器杯蓋Aで、1226・1227はIV-2期に属し、1226は6c初、1227は6c中、1228・1229はIV-3期に属し7c初にそれぞれ位置づけられる。1230~1232は杯身で、1230・1231はIV-2期に属し6c初に、1232はIV-3期に属し7c初にそれぞれ位置づけられる。1233は有蓋高杯の蓋で、IV-2期に属し6c初に位置づけられる。体部内面に明らかに筆によってつけられた墨痕がある。内面が摩滅していることから蓋以外に転用されたと思われる。墨痕はその際についた可能性がある。1234は壺もしくは甕で、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。1237は高杯で、IV-2期に属し6c前半に位置づけられる。1235・1236・1238は鉢、1239は提瓶の体部片で、いずれもIV-2期に属し6c後半に位置づけられる。1240は直口壺の底部で、IV期に属すると思われる。1245は横瓶で、IV-3期に属し7c前半に位置づけられる。1242は弥生土器壺の頸部片で、II-2期に属すると判断される。1241は土師器高杯Dの脚部、1244は台付壺の台部と思われる。いずれもII-4期に属すると判断される。1243・1246は鉢B3、1247は甕D4、1248は鉢I3で、1243・1246はIV-2~V-1期に、1247はIV-3~V-1期に、1248はIV期にそれぞれ属すると判断される。1248の底部外面には木葉痕が残り、内面に煤が付着する。

NR96(図版47) 破片数482点中17点図示した(1250~1266)。1250は縄文土器、1251~1259は土師器、1260~1266は須恵器である。1250は縄文土器浅鉢であると思われる、I-2期に属すると思われる。1251・1254は土師器甕D4で、IV-3~V-1期に属すると思われる。1252・1253は甕F4で、III-1期に属すると判断される。1255・1259は高杯の脚部Fと考えられ、IV-2期に属すると思われる。1256は壺C2、1257は壺Eで、いずれもII-4期に属すると思われる。1258は鉢Iに分類されるが、やや異質である。IV期に属すると思われる。1260・1261は須恵器無台杯で、いずれもV-1期に属し7c後半に位置づけられる。1261の底部外面にはへら記号がある。1262は有蓋高杯蓋、1264は短頸壺、1265・1266は甕で、いずれもIV-2期に属し6c後半に位置づけられる。1266の底部外面にはへら記号がある。1263は杯身で、IV-3期に属し7c前半に位置づけられる。

NR103(図版48) 破片数点中19点図示した(1281~1299)。1289~1295・1298・1299は土師器、1281~1288・1296・1297は須恵器である。1281~1283は須恵器杯蓋Aで、1281はIV-2期に属し6c中に、1282・1283はIV-3期に属し7c初にそれぞれ位置づけられる。1285・1286は杯身で、1285はIV-2期に属し6c中に、1286はIV-3期に属し7c初にそれぞれ位置づけられる。1286の底部外面

にはヘラ記号がある。1287は高杯、1284は壺蓋、1288はミニチュア鉢、1296・1297は壺で、1287はIV-2~3期に属し6c後半~7c初に、1284はIV-3期に属し7c前半に、1288はIV-3~V-1期に属し7cに、1296・1297はIV-2期に属し6c後半にそれぞれ位置づけられる。1289は土師器高杯G1、1292・1293は高杯Fの脚部で、1289はIII~IV-2期に、1292・1293はIII-2~IV-1期に属すると思われる。1290は壺底部平底1、1291は瓶の把手で、1294は壺Eの体部で、いずれもIII~IV-1期に属すると思われる。1290の底部外面には木葉痕が残る。1295は鉢B3で、1299は大型の鉢B3で、いずれもIV期に属すると思われる。1298は甕F4で、III-1期に属すると判断される。

NR113 (図版47) 破片数39点中5点図示した(1267~1271)。1267は弥生土器壺C1で、II-3期に属すると判断される。1269は土師器壺C1、1271は壺C1もしくはC2の頸部、1268は加工土盤、1270は甕底部台付3で、いずれもII-4期に属すると思われる。

SW51 (図版47) 破片数4点中3点図示した(1272~1274)。1272は土師器甕の体部片で、調整などからV-1~2期に属すると思われる。1273は須恵器無台杯、1274は無台盤で、1273はV-1~2期に属し7c末~8c初に、1274はV-2期に属し8c前半にそれぞれ位置づけられる。

SW87 (図版47) 破片数177点中4点図示した(1277~1280)。1277は甕D4、1278は壺F4、1279は高杯Fの脚部で、1277はV-1~2期、1278はIII期、1279はIII-2~IV-1期にそれぞれ属すると思われる。1280は須恵器甕で、IV-3~V-1期に属し6c末~7c前半に位置づけられる。

SW88 (図版47) 破片数81点中2点図示した(1275・1276)。1275は須恵器杯蓋Aで、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。1276は土師器鉢Fで、IV-1期に属すると思われる。

包含層 (図版49~52) 127点図示した(1300~1426)。1300~1305は土師器、1306~1388は須恵器、1389・1390は瓦、1391~1424は灰釉陶器、1425・1426は緑釉陶器である。1300・1302は土師器甕D4、1301は大型の甕Jで、1300・1302はV-1期に属し、1301はV-1~2期に属すると思われる。1303~1305は清輝型鋼で、V-3期~VI-1期に属すると判断される。

1306・1307は須恵器短頸壺、1308は広口壺、1309は大型瓶、1310・1311はミニチュア短頸壺、1312・1313は長頸瓶、1314・1318・1319は平瓶、1315は円面硯、1316・1317は鉢、1320は杯蓋A、1321は杯身、1322は杯蓋B、1323~1330・1332~1336は杯蓋C、1331・1337・1338は金属器写しの蓋、1339~1349・1351・1352は無台杯、1350・1353は鉄鉢写しの無台杯、1354~1373・1381は有台杯、1374・1375・1382は樹型有台杯、1376・1377は有台盤、1383は高台盤、1387・1388は有台盤もしくは高台盤、1385・1386は金属器写しの碗、1378・1379は高杯、1384は高台皿、1380は器種不明である。1310は灰釉陶器の可能性もある。1381は片口有台杯になる可能性もある。V-1期に属し、7c後半に位置づけられるものは1313・1314・1317・1319・1321・1378・1379・1386、7c末に位置づけられるものは1312・1318・1320・1322・1353・1356、7cに位置づけられるものは1307・1308である。V-1~2期に属し、7c末~8c初に位置づけられるものは1339~1345・1349・1350、7c後半~8c前半に位置づけられるものは1383である。V-2期に属し、8c前半に位置づけられるものは1325~1328・1331~1333・1346~1348・1358~1360・1374・1385・1387、8c中に位置づけられるものは1351、8c後半に位置づけられるものは1306・1324・1329・1330・1334・1335・1357・1361・1365・1368・1369・1372・1373、8c末~9c初ないし前に位置づけられるものは1352・1362・1384、8cに位置づけられるものは1311・1315・1323・1336・1337・1363・1364・1375、9c初に位置づけられるものは1355・1366・1367・

1371、9c前に位置づけられるものは1338・1370・1376・1377、9cに位置づけられるものは1309・1310、時期不明は1382・1388である。1322は天井部外面に、1331は天井部内面に、1349は底部外面に、1353は体部外面にへら記号がある。1371の底部外面にはへら記号があり、また部分的に墨が付着している。1322・1324・1333は天井部内面に、1345・1364・1370は墨が付着しており、硯に転用された可能性がある。1332は2破片に墨が付着しており、割れた後に部分的に硯に転用された可能性がある。1377は内外面に所々墨が付く。1383は皿底部内面に墨が付着する。1341は体部内面に横方向の帯状に漆が付着している。1344は体部内面中程に横方向の帯状に漆が付着している。1352は口縁部の内外面の一部に漆が付着しており、灯明皿に使用された可能性がある。

1389・1390はいわゆる布目瓦で、1389は平瓦、1390は切り製斗瓦である。いずれも模骨痕が確認出来ることから、V-1～2期8c前半以前に位置づけられる。

1391～1404は灰釉陶器碗で、V-3期に属し、1391・1399～1401は9c後半、1392・1393・1402・1403は10c前半、1395・1396は10c後半、1394・1397・1398・1404は11c前半にそれぞれ位置づけられる。1404は内面に墨が付着し、硯に転用された可能性がある。1406～1414は皿、1415は段皿、1416は白磁を写した皿で、1406・1407・1413・1414は10c前半、1411・1415は10c後半、1408・1412は11c前半、1409・1410は10c後半～11c前半にそれぞれ位置づけられる。1410は底部外面に墨が付着しており、硯に転用された可能性がある。1417は甕、1418～1424は壺で、V-3期に属すると判断される。1420には花文がへら書きされている。1425・1426は緑釉陶器である。いずれもV-2～3期に属し9cのものと思われる。

第6項 VI期

SH9 (図版53) 破片数180点中21点図示した(1427~1447)。1440が中世土師器、それ以外は灰釉系陶器である。1427・1428・1432・1434・1435・1443・1445は灰釉系陶器碗で、1427・1428・1432・1434は5型式VI-1期に、1435・1443・1445は白土原1号窯式VI-2期に属する。1429・1430・1433・1436~1438・1441・1444・1446・1447は皿で、1429・1430・1433・1436・1447は5型式VI-1期に、1437~1439・1441・1446は白土原1号窯式VI-2期に属する。1431は仏供、1442は蓋で、いずれもVI-1期に属すると考えられる。1427は底部外面に墨書があり、釈文は「+」と思われる。1430は底部外面に花押状の墨書がある。1439は底部外面に墨書があり、女に四点墨点が配され、呪的な内容と考えられる。1447は底体部外面全面と、底部内面に墨書がある。底部外面の墨書は単純な文字ではなく、呪符木簡などに見られる道教的な記号にみえ、体部には判然としないが10~12個記号のようなものが記されている。底部内面の墨書の内容はよくわからない。何らかの呪いに用いたものと考えられる。1440は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると思われる。

SH10 (図版53) 破片数16点中2点図示した(1448-1449)。1448は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると判断される。1449は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

SH11 (図版53) 破片数140点中17点図示した(1450~1466)。1450・1451・1455~1457・1460・1464・1465は灰釉系陶器、1458・1461~1463・1466は中世土師器、1452~1454・1459は青磁である。1455・1456・1464は灰釉系陶器碗で、1455・1456が浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属し、1464は口縁部~体部のみで判然としないが同時期のものと考えられる。1450・1451・1457・1460・1465・1467・1468は皿で、1450が谷迫間2号窯式、1451・1460・1465が浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属し、1457が白土原1号窯式VI-2期に属する。1457の底部外面には墨書があり、六曜文が記されている。中世土師器はすべてII-B類の皿でVI期に属すると思われる。1459は同安窯系の青磁碗でVI期に属する。1452は龍泉窯系の碗I-4類でVI期に属する。1454は龍泉窯系の碗B-I類でVI-2期に属すると思われる。1453は龍泉窯系の碗で、分類は不詳であるがVI-1期に属すると思われる。

SH12 (図版53) 破片数52点中2点図示した(1467-1468)。いずれも灰釉系陶器皿で、1467が白土原1号窯式VI-2期に、1468が浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期にそれぞれ属する。

SH13 (図版53) 破片数15点中1点図示した(1469)。1469は陶器三筋壺で、VI期に属すると思われる。

SH14 (図版53) 破片数42点中2点図示した(1470-1471)。1470は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。意図的かどうかの判断はできないが高台が完全に欠けている。1471は中世土師器皿I類で、VI期に属すると思われる。底部に穿孔が施されている。

SH17 (図版54) 破片数36点中1点図示した(1478)。1478は須恵器杯蓋Aで、IV-2期に属し6c中に位置づけられる。

SH18 (図版53) 破片数13点中1点図示した(1472)。1472は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SH21 (図版54) 破片数33点中1点図示した(1479)。1479は須恵器杯身で、IV-2期に属し6c前に位置づけられる。

SH22 (図版53) 破片数14点中5点図示した(1473~1477)。1473・1474・1476・1477は灰釉系陶器碗、1475は皿で、1476が谷迫間2号窯式、以外は浅間窯下1号~窯洞1号窯式、いずれもVI-1期に属

る。1475は外面に、1476は内外面に炭化物が付着する。いずれも二次焼成を受けている。

SH28 (図版54) 破片数12点中1点図示した(1480)。1480は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SH38 (図版54) 破片数51点中3点図示した(1481~1483)。1481~1483はいずれも灰釉系陶器である。1481は碗であるが、やや形状が一般的でなく、時期も不明である。1482は白磁IV期を写した玉緑碗で、VI期に属すると思われる。1483は碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。

SH39 (図版54) 破片数54点中1点図示した(1484)。1484は灰釉系陶器皿で、4型式VI-1期に属する。

SH42 (図版54) 破片数9点中1点図示した(1485)。1485は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SH43 (図版54) 破片数4点中1点図示した(1486)。1486は灰釉系陶器碗で、4型式VI-1期に属する。

SH47 (図版54) 破片数11点中2点図示した(1487・1488)。1487・1488は灰釉系陶器碗で、いずれも谷迫間2号窯式VI-1期に属する。1488は底部外面に墨書があり、釈文は「#」である。

SA7 (図版54) 破片数2点中1点図示した(1489)。1489は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。体部外面に墨痕のようなものが々と付着する。

SA10 (図版54) 破片数2点中2点図示した(1490・1497)。1490は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。1497は常滑の大甕で、2型式12c後半に位置づけられると判断される。体部外面には押印が横方向に4列確認できる。破片はSA10のP499ばかりでなく、周辺の包含層からも確認された。ピット内の出土状況は、掘形底面近くにあり、柱の根固めとしての役割があった可能性がある。このことから割れた後、一部がP499へ、残りは周辺に散乱していたような状況が想像できる。

SA20 (図版54) 破片数19点中3点図示した(1491~1493)。いずれも灰釉系陶器で、1491は入子、1492は碗、1493は皿である。1491はVI期に、1492は5型式VI-1期に、1493は谷迫間2号窯式VI-1期に属する。

SA35 (図版54) 破片数55点中1点図示した(1494)。1494は灰釉系陶器碗で、大畑大洞4号窯式VII-1期に属する。ただし遺構は検出状況や未掲載遺物からVI期に属すると考えられ、1494は混じり込みであると思われる。

SA37 (図版54) 破片数10点中2点図示した(1495・1496)。いずれも灰釉系陶器で、1495は皿で谷迫間2号窯式VI-1期に、1496は碗で明和1号窯式VII-1期に属する。遺構は検出状況や未掲載遺物からVI期に属すると考えられ、1496は混じり込みであると思われる。

SA65 (図版54) 破片数30点中1点図示した(1498)。1498は灰釉系陶器皿で、5型式VI-1期に属する。底部内面に墨が付着することから転用碗の可能性もある。

P483 (図版54) 破片数1点中1点図示した(1499)。1499は灰釉系陶器碗で、時期は不明である。

P563 (図版54) 破片数22点中1点図示した(1500)。1500は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

P590 (図版54) 破片数2点中1点図示した(1501)。1501は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

- P 650 (図版54) 破片数3点中1点図示した (1502)。1502は灰釉系陶器碗で、4型式VI-1期に属する。
- P 651 (図版54) 破片数1点中1点図示した (1503)。1503は灰釉系陶器皿で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。
- P 654 (図版54) 破片数2点中2点図示した (1505・1506)。いずれも灰釉系陶器で、1505が皿、1506が碗で白土原1号窯式VI-2期に属する。
- P 655 (図版54) 破片数1点中1点図示した (1504)。1504は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると判断される。
- P 700 (図版54) 破片数8点中2点図示した (1509・1510)。いずれも灰釉系陶器で、1509は碗、1510は皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。1510は底部外面に墨痕らしきものが付着するがよくわからない。
- P 703 (図版54) 破片数4点中1点図示した (1507)。1507は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。
- P 719 (図版54) 破片数1点中1点図示した (1511)。1511は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。底部外面に墨書がある。1文字記号状に記されている。また内面に煤が付着する。
- P 721 (図版54) 破片数2点中1点図示した (1508)。1508は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。
- P 724 (図版54) 破片数7点中1点図示した (1512)。1512は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。
- P 753 (図版54) 破片数6点中1点図示した (1513)。1513は中世土師器皿I類で、VI-1期に属すると思われる。
- P 762 (図版54) 破片数1点中1点図示した (1517)。1517は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。
- P 772 (図版54) 破片数15点中2点図示した (1515・1516)。1515は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。1516は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると思われる。
- P 794 (図版54) 破片数5点中1点図示した (1514)。1514は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。底部外面に墨書がある。土器が割れているため釈読が困難であるが、1文字目の様子、2文字目が縦方向とそれと交わる横方向の線が残っていることから、他の例と比べると「いわ」の可能性が高い。
- P 912 (図版55) 破片数3点中1点図示した (1518)。1518は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。複数字あるように見えるが釈読できない。
- P 914 (図版55) 破片数3点中2点図示した (1519・1520)。いずれも灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。1519はSH10のP696と接合関係がある。
- P 915 (図版55) 破片数2点中1点図示した (1521)。1521は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると思われる。
- P 919 (図版55) 破片数1点中1点図示した (1522)。1522は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

P 923 (図版55) 破片数1点中1点図示した(1523)。1523は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「いわ」である。

P 925 (図版55) 破片数2点中2点図示した(1524・1525)。1524は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。1525は碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「上」である。

P 927 (図版55) 破片数3点中1点図示した(1526)。1526は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P 928 (図版55) 破片数15点中2点図示した(1527・1528)。1527は中世土師器煮沸具で、伊勢型鍋B-2類である。VI期に属し13c前半に位置づけられる。1528は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

P 940 (図版55) 破片数6点中2点図示した(1529・1530)。いずれも灰釉系陶器で、1529は皿、1530は碗で、VI期に属すると思われる。

P 979 (図版55) 破片数1点中1点図示した(1531)。1531は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。

P 998 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1532)。1532は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。全面に煤が付着している。

P 1001 (図版55) 破片数3点中1点図示した(1533)。1533は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると思われる。

P 1002 (図版55) 破片数2点中2点図示した(1534・1535)。1534は中世土師器皿I類で、VI期に属すると思われる。1535は灰釉系陶器皿で、5型式VI-1期に属する。

P 1006 (図版55) 破片数13点中1点図示した(1536)。1536は古瀬戸後期の甕と考えられ、VII-1・2期に属すると思われる。高台がついており、付け根部分に3箇所孔が開けられている。

P 1007 (図版55) 破片数2点中2点図示した(1538・1539)。いずれも灰釉系陶器碗で、1538は5型式、1539は谷迫間2号窯式、VI-1期に属する。

P 1011 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1537)。1537は灰釉系陶器碗で、5型式と思われるがよくわからない。

P 1023 (図版55) 破片数8点中2点図示した(1540・1542)。1540は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。内面に煤が付着する。1543は片口鉢で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P 1187 (図版55) 破片数3点中1点図示した(1547)。1547は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。

P 1301 (図版55) 破片数1点中1点図示した(1541)。1541は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P 1315 (図版55) 破片数5点中2点図示した(1543・1544)。いずれも灰釉系陶器で、1542碗、1544は皿、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P 1367 (図版55) 破片数4点中1点図示した(1545)。1545は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

- P 1531 (図版55) 破片数8点中2点図示した(1546・1548)。1546は弥生土器台付鉢の台部と思われる。円孔があり、円孔の下には台部端に沿って横線が4条巡る。II-2期に属すると判断される。1548は弥生土器甕B1で、II-2期に属すると判断される。
- P 1625 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1550)。1550は中世土師器煮沸具で、伊勢型鍋B-1類である。VI期に属すると思われる。
- P 1759 (図版55) 破片数3点中1点図示した(1549)。1549は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。
- P 1806 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1555)。1555は灰釉系陶器碗で、VI期に属すると思われる。
- P 1831 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1556)。1556は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。内面に墨が付着しており、転用碗の可能性が考えられる。
- P 2558 (図版55) 破片数3点中1点図示した(1551)。1551は灰釉系陶器碗で、大畑大洞4号窯式VII-1期に属する。底部外面に墨書がある。記号状で「㊦」状に記される。遺構は検出状況からVI期と考えられ、したがって1551は混じり込みの可能性がある。
- P 2571 (図版55) 破片数1点中1点図示した(1553)。1553は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。
- P 2581 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1557)。1557は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。
- P 2605 (図版55) 破片数4点中1点図示した(1552)。1552は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。
- P 2734 (図版55) 破片数1点中1点図示した(1558)。1558は青磁碗で、龍泉窯系I-4類である。VI-1期に属すると判断される。
- P 3253 (図版55) 破片数8点中1点図示した(1559)。1559は灰釉系陶器碗で、明和1号窯式VII-1期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「+」である。遺構は検出状況や未掲載土器からVI期と考えられ、1559は混じり込みの可能性がある。
- P 3383 (図版55) 破片数2点中1点図示した(1560)。1560は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。
- P 3390 (図版55) 破片数93点中1点図示した(1554)。1554は灰釉系陶器碗で、明和1号窯式VII-1期に属する。遺構は検出状況や未掲載土器からVI期に属すると考えられ、したがって1554は混じり込みと思われる。
- P 3437 (図版56) 破片数19点中1点図示した(1565)。1565は中世土師器I類の碗で、VI-1期に属すると思われる。
- P 3478 (図版56) 破片数4点中1点図示した(1566)。1566中世土師器I類の皿で、VI-1期に属すると思われる。
- P 3445 (図版56) 破片数12点中3点図示した(1561~1563)。1561は中世土師器I類の碗で、VI-1期に属すると思われる。1562・1563は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。1563は底部外面に墨書がある。釈文は「大」である。また二次焼成を受け、内外面ともに炭化物が付着する。

- P 3453 (図版56) 破片数15点中1点図示した(1573)。1573は灰釉系陶器鉢で、VI-1期に属する。一部に煤が付着する。
- P 3471 (図版56) 破片数1点中1点図示した(1572)。1572は常滑の壺で、VI-1期に属し2型式12c後半に位置づけられると思われる。
- P 3475 (図版56) 破片数2点中1点図示した(1564)。1564は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。
- P 3485 (図版56) 破片数9点中1点図示した(1568)。1568は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。
- P 3486 (図版56) 破片数11点中1点図示した(1567)。1567は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部に穿孔がある。
- P 3495 (図版56) 破片数719点中3点図示した(1569~1571)。1569は須恵器杯蓋で、IV-2期に属し6c後半に位置づけられる。これは口径26cm前後の超大型の杯蓋の可能性はある。1570は土師器甕底部台付2で、II-4期~III-1期に属すると判断される。1571は灰釉陶器碗で、V-3期に属し10c前半に位置づけられる。
- P 3505 (図版56) 破片数3点中1点図示した(1574)。1574は土師器高杯Fの脚部で、III-2~IV-1期に属すると判断される。
- P 3539 (図版56) 破片数14点中1点図示した(1575)。1575は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。
- P 3565 (図版56) 破片数2点中1点図示した(1576)。1576は灰釉系陶器碗で、明和1号窯式VII-1期に属する。遺構は検出状況からVI期と考えられる。
- P 3571 (図版56) 破片数11点中1点図示した(1577)。1577は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。
- P 3574 (図版56) 破片数2点中1点図示した(1578)。1578は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。
- P 3582 (図版56) 破片数5点中1点図示した(1579)。1580は中世土師器I類の皿で、VI-1期に属すると思われる。内面に漆のようなものが付着する。
- P 3601 (図版56) 破片数2点中1点図示した(1582)。1582は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。
- P 3615 (図版56) 破片数4点中1点図示した(1580-1581)。1580は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「ミろく」である。1581は皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「ミく三」である。文字が乱れており、「ミろく」の写し間違いの可能性もあると思われるが確証はない。内面に墨が付着しており、転用碗の可能性はある。
- P 3637 (図版56) 破片数4点中1点図示した(1583)。1583は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。文字の下半が割れており判読できないが、文字の形状が1447・5054で呪いの記号としたものに似る。
- P 3642 (図版56) 破片数8点中2点図示した(1584・1585)。1584は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号

～窯洞1号窯式VI-1期に属する。1585は同安窯系青磁碗で、VI-1期に属する。

P3651 (図版56) 破片数36点中1点図示した (1586)。1586は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

P3655 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1587)。1587は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3656 (図版56) 破片数9点中1点図示した (1588)。1588は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3690 (図版56) 破片数17点中1点図示した (1589)。1589は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3704 (図版56) 破片数8点中1点図示した (1591-1592)。いずれも中世土師器皿で、1591はI類、1592はII-B類である。VI期に属すると思われる。

P3725 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1594)。1594は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3732 (図版56) 破片数2点中1点図示した (1590)。1590は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3735 (図版56) 破片数6点中1点図示した (1596-1599)。1596-1598は灰釉系陶器で、1596-1597は皿、1598は碗である。いずれも浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。1599は陶器壺で、肩部に沈線が2条巡る。VI期に属すると思われる。

P3737 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1593)。1593は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

P3763 (図版56) 破片数2点中1点図示した (1595)。1595は灰釉陶器碗で、V-3期に属し9世紀中～後半に位置づけられる。

P3802 (図版56) 破片数19点中1点図示した (1605)。1605は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3834 (図版56) 破片数2点中1点図示した (1606)。1606は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3837 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1600)。1600は輪羽口で、両端部は失われているが、形状から端部に近いと思われる。遺構はVI期に属する。

P3840 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1603)。1603は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3849 (図版56) 破片数1点中1点図示した (1602)。1602は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

P3904 (図版56) 破片数4点中1点図示した (1601)。1601は灰釉系陶器小壺蓋で、VI期に属すると思われる。

P3960 (図版56) 破片数4点中1点図示した (1604)。1604は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。内外面に煤が付着する。

P4090 (図版56) 破片数10点中1点図示した (1607-1608)。いずれも灰釉系陶器碗で、浅間窯下1

号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。1608は底部外面に墨書がある。釈文は「=」である。

SK2(図版57) 破片数1点中1点図示した(1609)。1609は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。内面に炭化物が付着する。

SK28(図版57) 破片数34点中1点図示した(1610)。1610は中世土師器1類の皿で、VI-1期に属する。

SK29(図版57) 破片数39点中3点図示した(1611～1613)。いずれも灰釉系陶器皿である。1611は4型式、1612は西坂1号窯式、1613は3型式でVI-1期に属する。1611の内面には降灰が付着する。

SK30(図版57) 破片数7点中6点図示した(1617～1622)。1617・1618はいずれも灰釉系陶器碗である。1617が谷迫間2号窯式、1618が4型式で、VI-1期に属する。1618の底部外面には墨書がある。釈文は「×」もしくは「+」である。1619～1622は中世土師器I類の碗で、VI-1期に属すると思われる。1622には高台がつく。いずれもきめの細かい胎土で、白色である。

SK32(図版57) 破片数43点中3点図示した(1614～1616)。いずれも灰釉系陶器である。1614・1615は皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。1616は壺と思われ、VI期に属すると考えられる。

SK44(図版57・58) 破片数47点中29点図示した(1623～1651)。1637が青磁、1651が陶器の他はすべて灰釉系陶器である。1623は灰釉系陶器蓋で、白土原1号窯式VI-2期に属する。内面に炭化物が付着する。1624～1636・1639～1647は碗で、1624・1641・1642が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に、1625～1636・1639・1640・1643～1647が白土原1号窯式VI-2期にそれぞれ属する。1638・1648～1650は皿で、いずれも白土原1号窯式VI-2期に属する。1639～1650は底部外面に墨書がある。1639・1640は「きく」と記される。1641は草書体状に複数字記されるが釈読できない。1642は「+」、1643は「一」と記される。1644は欠けていて全体がわからないが、記号状かと思われる。1645は「いわ」である。1646は墨痕が残るが、文字には見えない。1647は高台に直交して棒線を四方向に記している。意味はよくわからないが呪いの名ものであろうか。1648は花押状に記されている。1649・1650は「上」である。1629が外面に、1631は内面に炭化物が付着し、1634は一部比熱しており内外面に炭化物が付着している。1637は龍泉窯系B-I類の碗で、VI期に属する。1651は陶器の鉢で、現存で2箇所縦に沈線が入っている。VI期に属する。

SK52(図版58・59) 破片数4927点中64点図示した(1652～1716)。1652～1661・1663～1696・1713～1716は灰釉系陶器、1662は土鉢、1697は白磁、1698は陶器、1699～1704は青磁、1705～1712は中世土師器である。1652～1661・1688・1689・1693は灰釉系陶器碗で、1652・1653・1689が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に、それ以外が白土原1号窯式VI-2期に属する。1663～1686・1691・1692・1694～1696は皿で、1663・1664・1691・1694が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期、それ以外が白土原1号窯式VI-2期に属する。1687は入子、1690は片口碗でいずれもVI期に属すると思われる。1713～1716は片口鉢で、1713が5型式、1714が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に、1715が白土原1号窯式VI-2期に、1716が明和1号窯式VII-1期にそれぞれ属する。1688・1689・1691～1696の底部外面には墨書がある。1688は2文字記され、ひらがなと思われる。1689は略押状に、1691は記号状に記される。1692は六曜文である。1693は墨点が、1694は花押状に記される。1695は1文字目が「や」、2文字目が「く」に似るが、おそらく漢字を崩したかと思われる。もとの漢字は不明である。1696

は「一」と記される。1663の口縁部内外面の一部には墨が付着している。1664は外面の一部と内面全面に墨が付着し、内面の摩滅がよくわかることから転用碗と考えられる。1666は底部中央が焼成時に割れている。1697は白磁IX類の碗で、VI期に属する。1698は古瀬戸前期に位置づけられVI期に属する。1699～1704の青磁はすべて龍泉窯系である。1699はI-4類の碗、1700・1701・1703はB-1類の碗、1702はB-1類の小碗、1704はB-II類の碗である。1700がVII-1期、1702がVI～VII期にかけてのものになる以外は、すべてVI期に属する。1705～1710は中世土師器皿II-B類で、VI期に属すると思われる。1711・1712は伊勢型鍋B-2類で、VI期に属すると判断される。

SK107 (図版59) 破片数245点中8点図示した(1717～1724)。1717は須恵器、1718は灰釉陶器、それ以外は灰釉系陶器である。1717は須恵器無台杯で、V-1～2期に属し7c末～8c初に位置づけられる。1718は灰釉陶器皿で、V-3期に属し9c後半に位置づけられる。1719～1723は灰釉系陶器碗、1724は皿で、いずれも谷迫間2号窯式VI-1期に属する。1722・1723は炭化物が付着する。

SK108 (図版59) 破片数2点中1点図示した(1725)。1725は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。底部外面に墨書がある。墨点が記される。

SK109 (図版60) 破片数56点中13点図示した(1726～1738)。1726～1735までが灰釉系陶器、1736～1738が中世土師器である。灰釉系陶器はいずれも浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に属する。1726～1729が碗、1730～1735が皿である。1728・1729は底部外面に墨書がある。いずれも記号状である。1726は外面に炭化物が付着し、高台が欠けている。1736・1737は中世土師器II-B類の皿、1738は伊勢型鍋B-2類で、いずれもVI期に属すると思われる。

SK112 (図版60) 破片数74点中1点図示した(1739)。1739は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SK126 (図版60) 破片数2点中2点図示した(1740・1741)。いずれも灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。

SE 1 (図版60・61) 破片数545点中34点図示した(1742～1775)。1742～1760・1764～1769が灰釉系陶器、1761～1763が青磁、1770～1775が中世土師器である。灰釉系陶器はすべて浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に属する。1742～1754・1764～1767は碗、1755～1760・1768・1769は皿である。1764～1769の底部外面には墨書がある。1764・1766・1768は花押状が、1765が略押状、1767が「いわ」、1769が記号状である。1742は二次焼成を受け、内外面ともに炭化物が付着する。1761～1763は龍泉窯系の青磁碗で、1761がI-2類、1762・1763がI-4類で、VI～VII-1期に属する。1770～1775はII-B類の皿で、VI期に属すると思われる。1770の底部外面には墨書がある。釈文は「つ」である。

SE 2 (図版61) 破片数315点中6点図示した(1776～1781)。いずれも灰釉系陶器で、1777が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期になる以外は、白土原1号窯式VI-2期に属する。1776～1780が碗、1781が皿である。1777～1780には墨書がある。1777は底部外面と体部外面に墨書があり、底部外面の字形が呪符的な形に見えることから、呪いに用いたと思われる。1778・1780は記号状で、1780は4949などと形状が似ている。1779は「一」である。

SE 3 (図版61) 破片数250点中17点図示した(1782～1798)。1782～1787・1789～1797は灰釉系陶器、1788は中世土師器、1798は青磁である。灰釉系陶器はいずれも浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に属する。1782～1787・1789～1794は碗、1795～1797は皿である。1793の底部外面には墨書がある

が、大半が割れているため内容は不明である。1789には炭化物が付着する。1788は中世土師器伊勢型鍋B-2類で、VI期に属すると思われる。1798は龍泉窯系の青磁碗I-2類で、VI期に属すると思われる。

SU3 (図版62) 破片数184点中5点図示した(1799~1803)。すべて灰軸系陶器で、VI-1期に属する。1802が浅間窯下1号~窯洞1号窯式、それ以外は5型式である。1799は碗、1800~1802は皿である。1799の底部外面には墨が付着し、摩滅していることから転用碗と考えられる。1803は子持ち器台で、VI期に属すると思われる。

SD18 (図版62~63) 破片数941点中51点図示した(1804~1854)。1804~1812・1814~1833はSD18内に落ち込んでいたII・III層から取り上げたものであり、それ以外がSD18の埋土の土器である(SD18の埋土の状況については遺構本文参照)。II・III層の土器は、SD18に囲まれていたVI期の屋敷地内の遺物を多く含んでいた。1804~1813・1815~1817・1824~1832・1834~1854が灰軸系陶器、1818・1823が白磁、1819~1821が陶器、1814・1833が中世土師器である。1804~1813・1822・1834~1838・1842・1843・1845~1848・1850~1853が灰軸系陶器碗、1815~1817・1825~1832・1839~1841・1849・1854が皿、1824が片口鉢、1844が碗型鉢である。1804~1807・1809・1810・1822・1834・1842~1847・1849~1852・1854が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、1808・1811・1812・1815・1817・1825~1832・1835~1841・1848・1853が白土原1号窯式でVI-2期に、1816が明和1号窯式、1824が7型式でVII-1期にそれぞれ属する。1813・1822・1841~1843・1850~1854の底部外面には墨書がある。1813・1851は記号状、1822は「井」、1841は「きく」、1842は花押状、1843は「大」、1850は「岩□」、1852~1854は「いわ」である。1838の底部外面には墨が付着し、転用碗の可能性がある。1845は割れているため確証はないが、底部穿孔の可能性がある。1818は白磁IX類の皿でVII期に、1823は四耳壺でVI-1期に属すると判断される。1819~1821は常滑の甕で、1819がVI-2期、以外はVI-1期に属すると判断される。1821には押印が3段確認できる。1814・1833は中世土師器II-B類の皿で、VI期に属すると思われる。

SD19 (図版63) 破片数41点中7点図示した(1855~1861)。1855~1857は灰軸系陶器、1858~1861は中世土師器である。1855・1856は灰軸系陶器碗で、1855は時期不明、1856は4型式VI-1期に属する。1857は皿で白土原1号窯式VI-2期に属する。1858~1861は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

SD20 (図版63) 破片数113点中5点図示した(1862~1866)。いずれも灰軸系陶器で、1862~1864が碗、1865・1866が皿である。1862が谷迫間2号窯式、1864が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、1863・1865・1866が白土原1号窯式VI-2期に属する。1863は二次焼成を受け、口縁部~体部内外面に煤が付着している。

SD35 (図版63) 破片数42点中3点図示した(1867~1869)。1867・1868は灰軸系陶器碗で、1867が5型式、1868が4型式でいずれもVI-1期に属する。1867の底部内面には煤が付着している。1869は中世土師器と思われるが、痛みが激しく詳細は不明である。

SD43 (図版64) 破片数149点中8点図示した(1870~1877)。いずれも灰軸系陶器で、1870~1875は碗、1876・1877は皿である。1870・1871・1873・1874・1876はVI-1期浅間窯下1号~窯洞1号窯式、1872・1875・1877はVI-2期白土原1号窯式である。

SD47 (図版64) 破片数129点中2点図示した(1878・1879)。1878は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。口縁部の一部を片口状に作っている。底部外面に墨書がある。釈読はできないが、かな状の文字が複数字記されている。1879は土師器甕D5で、III~IV期に属すると思われる。

SD60 (図版64・65) 破片数85点中44点図示した(1880~1923)。1880~1882が土師器、1883~1891・1883が須恵器、1882が灰釉陶器、1894が中世土師器、1895~1918・1920~1923が灰釉系陶器、1919が青磁である。1880は土師器鉢FでIV期に、1881・1882は高杯でIII期に属すると思われる。1880は内外面に炭化物が付着する。1883~1885は須恵器杯身で、1883がIV-1期に属し5c末に、1884・1885はIV-2期に属し6c初にそれぞれ位置づけられる。1886は三方一段透かしの脚部を持つ無蓋高杯で、IV-2期に属し6c前葉に位置づけられる。1887は甕で、V-2期に属し8c前葉に位置づけられる。1888・1889は有台杯、1890は片口有台鉢で、いずれもV-2期、1888は8c後半、1889・1890は8c末~9c前に位置づけられる。1891は壺で、IV-3~V-1期に属し、7cに位置づけられる。1893は甕の底部で、V-2期に属すると思われる。体部外面下方にへら書き文字がある。2文字確認できるが1文字目の大半は欠けている。2文字目は「升」のように見える。1892は灰釉陶器壺でV-3期に属する。1894は中世土師器の羽釜で、VI期に属すると思われる。1895~1909・1920~1923は灰釉系陶器碗で、1895は4型式、1896~1904が谷迫間2号窯式、1905~1909・1920~1923が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に属する。1920~1922は底部外面に墨書がある。1920は花押状、1921は「ミろく」と記され、1922は割れて内容がわからない。1921の「ミろく」は「ミ」の3画目と「ろ」の1画目が重なっており、また「く」も入りが長く「く」のように見えない。「ミろく」墨書は7点確認したが、たとえば1578は文字として正確であるが、本例のように文字として正確でないものもある。写して書いたのであろうか。1902・1904には煤が付着している。1910~1917は皿で、1910~1912が谷迫間2号窯式、1913~1915が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、1916・1917が白土原1号窯式でVI-2期に属する。1918は花瓶の台部で、VI期に属すると思われる。1919は同安窯系青磁の碗で、VI期に属する。

SD69 (図版65) 破片数206点中7点図示した(1924~1930)。1924・1925が須恵器、1926・1927・1930が灰釉系陶器、1928が白磁、1929は中世土師器である。1924は須恵器杯蓋A、1925は杯身で、いずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。1926・1927は灰釉系陶器碗、1930は皿で、いずれも浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。1926は内外面に炭化物が付着する。1928は白磁II類の碗で、VI期に属すると判断される。1929は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

SD70 (図版65) 破片数17点中1点図示した(1931)。1931は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。内外面に煤が付着する。

SD102 (図版66) 破片数85点中3点図示した(1935~1937)。1935・1936は灰釉系陶器碗で、1935は時期不明、1936は明和1号窯式VII-1期に属する。1937は龍泉窯系青磁B-1類の碗で、VI~VII期に属する。遺構はVI期に属するが、VII期の遺物も混じるようである。

SD103 (図版65) 破片数3点中3点図示した(1932~1934)。いずれも灰釉系陶器碗で、1933が西坂1号窯式、1932・1934が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に属する。

SD112 (図版66) 破片数17点中1点図示した(1938)。1938は灰釉系陶器皿で、5型式VI-1期に属する。

SD145 (図版66) 破片数1点中1点図示した(1940)。1940は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。

SD147 (図版66) 破片数157点中1点図示した(1939)。1939は灰釉系陶器皿で、4型式VI-1期に属する。

SD148 (図版66) 破片数14点中1点図示した(1941)。1941は灰釉系陶器碗で、5型式VI-1期に属する。

SD149 (図版66) 破片数79点中4点図示した(1944~1947)。1944・1945はいずれも灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。1946・1947は種の羽口である。

SD153 (図版66) 破片数32点中4点図示した(1948~1951)。いずれも灰釉系陶器で、1948・1949は碗、1950は壺、1951は皿である。1949は西坂1号窯式、1948は谷迫間2号窯式、1950・1951は浅間窯下1号~窯洞1号窯式で、いずれもVI-1期に属する。1948の内面全面には煤が付着する。1949は片口碗の可能性はある。

SD155 (図版66) 破片数309点中5点図示した(1952~1956)。1953が灰釉系陶器、それ以外は陶器である。1953は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。1952は大窯の摺鉢で、VII-3期に属する。1954は志野丸皿、大窯4でVII-3期に属する。1955は水注の把手で、VII-1期に属し古瀬戸中期に位置づけられる。1956は瓶子で、VII期に属し古瀬戸後期に位置づけられる。遺構はVI期であるが、VII期のものが混じるようである。

SD161 (図版66) 破片数18点中2点図示した(1942・1943)。いずれも灰釉系陶器で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。1942は皿で、体部外面の一部、内面の全面に漆が付着する。1943は碗で、体部外面に煤が付着する。また内面は墨が付着し摩滅していることから転用碗であったと考えられる。

SD218 (図版66) 破片数176点中6点図示した(1957~1962)。1957~1961が土師器、1962が灰釉系陶器である。1957は土師器甕D2、1958は甕C2もしくはC3で、III~IV-2期に属すると思われる。1959は器台C、1960は高杯Dで、II-4期に属すると判断される。1961は高杯Eの脚部で、III-1期に属すると判断される。1962は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

SD222 (図版66) 破片数68点中8点図示した(1963~1970)。1963~1966が灰釉系陶器、1967・1968・1970が中世土師器、1969が青磁である。1963~1966は皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。1967・1968・1970は中世土師器II-B類の皿で、VI~VII期に属すると思われる。1969は龍泉窯系青磁III類の杯で、VI-2~VII期に属する。

SD223 (図版66) 破片数1950点中10点図示した(1971~1980)。1971~1980は灰釉系陶器で、1971・1972・1978・1979が碗、1973~1977が皿である。1971・1973・1978は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、それ以外は白土原1号窯式でVI-2期に属する。1978・1979の底部外面には墨書がある。1978は「の」とあり略押状の一種と思われる。1979は「の」に似るが書き出し部分が円弧の上部に突き出すもので、やはり略押状の一種と考えられる。1971の底部には焼成時のひび割れがある。1980は灰釉系陶器片口鉢の片口部分で、時期は不明である。

SD238 (図版67) 破片数126点中3点図示した(1981~1983)。1981・1982は灰釉系陶器で、いずれも5型式VI-1期に属し、1981が碗、1982が皿である。1983は灰釉系陶器の鉢で、VI-1期に属すると判断される。美濃須瀬産の可能性はある。

SD252(図版67) 破片数2805点中19点図示した(1984~2002)。1984~1998が灰釉系陶器、1999~2002が中世土師器である。1984~1992が灰釉系陶器碗、1993~1998が皿である。1984・1985は谷迫間2号窯式、1989は4型式、1986・1987・1990・1993~1995は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、1988・1991・1996~1998は白土原1号窯式でVI-2期に、1992は明和1号窯式でVII-1期に属する。1992は底部外面に墨書がある。釈文は「平」である。1987の底部は焼成時にひび割れている。1999~2002は中世土師器II-B類の皿で、VI期に属すると思われる。

SD254(図版67) 破片数118点中4点図示した(2003~2006)。いずれも灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SD255(図版67) 破片数220点中8点図示した(2007~2014)。2007~2012が灰釉系陶器、2013が青磁、2014が中世土師器である。2007・2009~2011は灰釉系陶器碗、2008・2012は皿である。2007・2008・2012が浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、2009~2011が白土原1号窯式でVI-2期に属する。2009の底部外面には判読できないが墨書がある。また2012の底部外面には墨が付着するが、意図的についたようではない。2013は同安窯系青磁の碗で、VI-1期に属すると判断される。2014は中世土師器伊勢型鍋B-2類で、VI~VII-1期に属すると思われる。

SD259(図版67) 破片数74点中2点図示した(2015~2016)。いずれも灰釉系陶器で、2015が明和1号窯式VII-1期に、2016がVII-1~2期明和1号窯式以降に属する。2015は碗、2016は皿である。2016の底部外面には墨書がある。釈文は「+」である。遺構はVI期と考えられるので、これらは混じり込みと思われる。

SD266(図版67) 破片数284点中1点図示した(2017)。2017は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

SD276(図版67) 破片数163点中4点図示した(2018~2021)。2018・2020は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に、2019は皿で白土原1号窯式VI-2期にそれぞれ属する。2020は無高台の碗である。2021は同安窯系青磁の碗で、VI~VII-1期に属すると判断される。

NR23(図版68) 破片数413点中13点図示した(2022~2034)。2022が土師器、2023が青磁。2024が灰釉陶器、2025~2034が灰釉系陶器である。2022は土師器高杯F1で、III-2~IV-1期に属すると判断される。2023は龍泉窯系B-1類の碗で、VI~VII-1期に属すると判断される。2024は灰釉陶器壺で、V-3期に属する。2025・2026は灰釉系陶器皿、2027~2034は碗である。2025は西坂1号窯式、2027・2028は谷迫間2号窯式、2026・2029・2031~2034は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、2030は白土原1号窯式でVI-2期に属する。2029・2030・2034の底部外面に墨書がある。2029は花押状、2030は略押状、2034は「一」が記されている。2028・2032には炭化物が付着する。特に2032は口縁部~体部中程にかけて帯状に煤が付着している。

NR34(図版68) 破片数192点中14点図示した(2035~2048)。2035は弥生土器、2036・2037は土師器、2038~2044は須恵器、2045は灰釉陶器、2046・2048は中世土師器、2047は灰釉系陶器である。2036は弥生土器埴輪底部平底1で、II-2期に属すると思われる。2036は土師器甕D4でV-1~2期に、2037は高杯Fと思われIII-2~IV-2期にそれぞれ属すると思われる。2038は須恵器杯蓋Aで、IV-2期に属し6c前葉に位置づけられる。2039は壺、2040・2041は有台杯、2042~2044は無台杯で、V-2期に属し、2043が7c末~8c初頭、2040・2044が8c後半、2041が8c後半~9c初頭、2042が8

c末～9c初頭、2039が9cにそれぞれ位置づけられる。2045は灰軸陶器皿で、V-3期に属し10c後半に位置づけられる。2047は灰軸系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。内面に漆が付着する。2046は中世土師器の高台付皿で、V-3～VI-1期に属すると思われる。特徴的な白色のきめ細かい胎土である。2047は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

NR35 (図版68) 破片数62点中4点図示した(2049～2052)。2049は須恵器有台杯で、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。2050～2052は灰軸系陶器で、2050・2052は碗、2051は皿である。2050は4型式、2051は谷迫間2号窯式、2052は浅間窯下1号～窯洞1号窯式で、いずれもVI-1期に属する。

NR36 (図版68) 破片数62点中3点図示した(2053～2055)。2053は須恵器杯蓋Cと思われ、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。2054・2055は灰軸系陶器碗で、2054が谷迫間2号窯式、2055が浅間窯下1号～窯洞1号窯式でいずれもVI-1期に属する。

NR41 (図版69～70) 破片数1233点中55点図示した(2056～2110)。2056は縄文土器、2059は弥生土器、2057・2058・2060～2062・2065～2067は土師器、2063・2064・2068～2075は須恵器、2076～2078・2110は灰軸陶器、2079～2105・2107は灰軸系陶器、2106・2108・2109は白磁である。2056は縄文土器深鉢で、縄文後期でI-1期に属すると思われるが、よくわからない。2059は弥生土器壺の体部片で、II-2期に属すると思われる。2057は土師器甕D4でIV-3～V-2期に、2058は甕F6いわゆる宇田式甕でIII-2～IV-1期に、2060は甕D2でIV-1～2期にそれぞれ属すると思われる。2061は壺Eで、III～IV-1期に属すると思われる。2062は高杯F4でIII-2～IV-1期に、2066・2067は高杯EもしくはFの脚部で、III～IV-2期にそれぞれ属すると思われる。2065は手捏ね土器で、IV期に属すると思われる。2063は須恵器フラスコ瓶、2064は甕、2068～2070は有台杯、2071・2075は甕、2072は大型太頸壺、2073は佐波里写しの無台碗、2074は無台盤である。2064はIV-2期に属し6c末に、2063はIV-3～V-1期に属し7cに、2068はV-1～2期に属し7c末～8c初に、2072・2075はV-2期に属し8c前半に、2069・2073・2074は8c後半に、2070は8c末に、2071は8cにそれぞれ位置づけられる。2076～2078は灰軸陶器碗でV-3期に属し、2078は9c後半に、2076・2077は11c前葉～中葉にそれぞれ位置づけられる。2078の底部内面には「今」とへら書きがある。2110は灰軸陶器壺でV-3期に属する。2079～2095・2103・2104は灰軸系陶器碗、2096～2102は皿、2105は仏器、2107は耳皿である。2079は西坂1号窯式、2085は4型式、2080～2084・2086～2098は谷迫間2号窯式、2099～2102は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に、2104は白土原1号窯式でVI-2期に、2103は明和1号窯式でVII-1期に、2105・2107はVI期にそれぞれ位置づけられる。2087・2091は美濃須衝産の可能性が高い。2103・2104の底部外面には墨書がある。2103は縦3本、横3本の直線を交わらせたもの「井」で、九字の省略形と考えられよう。魔よけの記号と思われる。2104は墨点が3点記されている。2090・2098は内面に墨が付着しており、転用碗の可能性が高い。2087・2091・2097には炭化物が付着している。2106は白磁Ⅶ類の碗、2108はIV類の碗、2109は壺の体部片で、いずれもVI-1期に属すると判断される。

NR56 (図版70) 破片数729点中11点図示した(2111～2121)。2111～2114・2117～2121は灰軸系陶器、2115・2116は土錘である。2111・2112・2119・2120は碗、2113・2114・2121は皿、2117は壺、2118は片口碗である。2112・2113・2119～2121は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI-1期に、2114は白土原1号窯式でVI-2期に、2118は大畑大洞4号窯式VII-1期に、2111・2117は詳細は不明であるがVI期

にそれぞれ属する。2111は美濃須産産の可能性が高い。2119・2121の底部外面、2120の体部外面に墨書がある。2119は花押状である。2120は記号状で、4953に似る。2121は「大」である。

NR57(図版71～72) 破片数1020点中41点図示した(2122～2162)。2122～2124は弥生土器、2125～2133は土師器、2134～2145は須恵器、2146・2147は灰釉陶器、2148～2156・2158～2162は灰釉系陶器、2157は中世土師器である。2122・2123は弥生土器甕A1、2124は壺B1で、いずれもII-2期に属すると判断される。2125は土師器甕D4でIII～IV期に、2126～2132は手捏ね土器でIV期に、2133は高杯FでIII-2～IV期にそれぞれ属すると判断される。2134・2135は須恵器無台杯、2136～2141は有台杯、2142は有台盤、2143・2144は甕、2145は壺である。2143はIV-2期に属し6cに、2144はIV-3～V-2期に属し7～8cに、2134・2140はV-1～2期に属し7c末～8c前半に、2136はV-2期に属し8c前葉に、2135・2137・2138・2145は8c後半に、2142は8c末に、2141は8c末～9c前葉に、2139は8cにそれぞれ位置づけられる。2135の底部外面には墨書がある。積文は「福□」である。2136は底部内面に「美濃国」刻印がある。刻印の型式はA-II-5である(岐阜市教育委員会1981)。2137の底部内面には墨が付着しており、転用碗の可能性が高い。2146・2147は灰釉陶器碗で、V-3期に属し、2146は10c前半に、2147は10c後半にそれぞれ位置づけられる。2146の底部外面には墨書がある。文字を組み合わせた呪いの記号のようである。2148・2152～2154・2156・2158～2162は碗、2149～2151は皿、2155は小型壺である。2148～2154・2156・2160・2161は谷迫間2号窯式、2158は5型式、2159・2162は浅間窯下1号～窯洞1号窯式で、2155を含めいずれもVI-1期に属する。2162の底部外面には墨書がある。積文は「+」である。2149は内面に墨が付着し、転用碗の可能性が高い。2152は内外面に煤が付着しており、特に内面は厚い。2157は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。

NR62(図版72) 破片数3点中1点図示した(2163)。2163は灰釉系陶器皿で、VII-1～2期に属する。底部外面に墨書がある。積文は「=」である。遺構はVI期と考えられるので混じり込みであろう。

NR64(図版72) 破片数135点中4点図示した(2164～2167)。2164～2166は灰釉系陶器碗で、いずれも浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。2165・2166の底部外面に墨書がある。2165は花押状、2166は「+」である。2167は白磁四耳壺で、VI期に属すると思われる。

NR80(図版72) 破片数177点中2点図示した(2168・2169)。いずれも灰釉系陶器で、2168は碗、2169は皿、白土原1号窯式VI-2期に属し、底部外面に墨書がある。2168はかな状で2文字あるように見える。2169は真ん中で割れているが、両数から「大吉」の可能性が高い。

SW52(図版72) 破片数13点中1点図示した(2170)。2172は灰釉系陶器皿で、5型式VI-1期に属する。

SW56(図版72) 破片数78点中1点図示した(2171)。2173は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SW60(図版72) 破片数126点中7点図示した(2172～2178)。2173は弥生土器、2174は土師器、2175・2176は須恵器、2172は灰釉陶器、2177・2178は灰釉系陶器である。2173は弥生土器高杯Cで、II-3期に属すると判断される。2174は高杯Eの脚部で、III-1期に属すると判断される。2175は須恵器有台杯、2176は高台盤の台部で、いずれもV-2期に属し、2175は8c中、2176は8c後半に位置づけられる。2175の底部外面には墨書がある。積文は「小家」である。意味は未詳であるが、地名あるいは、文献史料にある「右大臣家」などの用法と同じで、小は官職を指すか。2172は灰釉陶器碗で、V

—3期に属し11c前～中葉に位置づけられる。2177・2178は灰釉陶器碗で、いずれも谷迫間2号窯式VI—1期に属する。2177の内外面には炭化物が付着する。

SW61 (図版72) 破片数66点中4点図示した(2179～2182)。2179は須恵器杯蓋Cで、V—2期に属し8c後半に位置づけられる。2180は灰釉陶器壺で、V—3期に属する。2181は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI—1期に属する。2182は白磁Ⅷ類の碗で、VI—1期に属すると判断される。

包含層 (図版73～82) 493点図示した(2183～2675)。2183～2545は灰釉系陶器、2546～2566・2658は白磁、2567・2569～2572は青白磁、2573～2607は青磁、2608～2621は陶器、2622～2675は中世土師器である。2183～2295は碗である。2183～2186は西坂1号窯式、2187・2203・2207・2224・2226・2229は4型式、2188～2202・2204～2206・2208～2223・2225・2227・2228・2230は谷迫間2号窯式、2231～2264は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI—1期に、2265～2281・2294・2295は白土原1号窯式でVI—2期に、2290・2291・2293はVI期にそれぞれ属する。2211・2212は美濃須衛産の可能性が高い。2288は内面に卸し目をつけた碗で、白土原1号窯式VI—2期に属する。2289は輪花碗で、谷迫間2号窯式VI—1期に属する。2292は外面にへら書きで何か描かれているが、破片が小さいためよくわからない。2296～2491は皿である。2296・2297は西坂1号窯式、2298～2328の内、2300・2302・2306・2310・2314・2316・2320・2326・2328が4型式、以外は谷迫間2号窯式、2329～2394の内、2330・2332・2353・2374・2377・2384・2390が5型式、以外は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI—1期に、2395～2491の内、2421が6型式、以外は白土原1号窯式でVI—2期にそれぞれ属する。2492は入子で、白土原1号窯式VI—2期に属する。2493も入子で、VI期に属する。2494・2501は輪花鉢で、VI期に属する。2495～2498は皿で、内面に漆が付着する。残りがよく、一部には漆を取った際の痕跡が明瞭に残る。パレットとして使用したと思われる。2497が5型式、2496・2498が浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI—1期に、2495が白土原1号窯式でVI—2期に属する。2499は白磁玉縁碗を写した灰釉系陶器碗で、VI—1期に属すると判断される。2500は片口碗で、VI期に属すると思われる。2502～2509は蓋で、VI期に属すると判断される。2508の天井部内面には竹管による花模様を描かれている。2501は底部穿孔のある皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI—1期に属する。2510はへら書きのある皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI—1期に属する。墨書土器に見られる「+」に似る。2512～2514は仏供、2515～2521は子持ち器台で、いずれもVI期に属する。2522は輪花を施した入子で、VI期に属する。2523は紡錘車と思われる。2524・2527は合子の蓋と思われ、2525・2528は合子の身である。2529～2532は片口鉢で、2531は時期不明、以外は6型式でVI—2期に属する。2533・2534・2538・2539は短頸鉢で、VI期に属する。2533の体部外面にはへら書きで模様のようなものが描かれているが詳細は不明である。2535～2537・2540・2541は壺である。2542～2545は陶丸である、2542には4孔1組の押印が3箇所ある。2546・2549は白磁Ⅱ類の碗、2552～2556はⅣ類の碗、2557・2559はⅤ類の碗、2558・2560・2561はⅧ類の碗、2562はⅢ類の皿、2563はⅣ～Ⅵ類の皿、2564は四耳壺、2565・2568は合子の蓋、2566は合子の身である。2570・2571は青白磁の皿、2567・2569・2572は合子の身である。2573～2578は同安窯系青磁で、2573～2575は碗、2576～2578は皿である。2579は同安・龍泉窯系Ⅰ類の碗である。2580～2607は龍泉窯系青磁で、2580・2581・2589がⅠ—2類の碗、2582～2586・2588・2599がⅠ—4類の碗、2587・2590～2598・2600・2601はB—I類の碗、2602は皿A、2604・2605は杯B、2606は杯C、2603は杯D、2607は合子の蓋である。2608～2621は陶器である。2608は古瀬戸前期の華瓶、2609は古瀬戸後期の小壺あるいは水注で

ある。2610～2621は常滑で、2610～2612・2619は壺、2613は三筋壺、2614～2617・2620・2621は甕、2618は羽釜である。2622～2632は中世土師器Ⅰ類で、2622は碗、以外は皿である。2624～2626のように漆が内面についたものもある。2633～2664はⅡ-B類の皿である。2665～2675は伊勢型鍋で、2674がA類、2665～2669・2672・2673がB-1類、2670・2671・2675がB-2類である。

第7項 VII期

SH23 (図版83) 破片数37点中5点図示した(2676~2680)。2676は須恵器杯蓋Aで、IV-2期に属し6c中に位置づけられる。2677は龍泉窯系青磁B-1類の碗で、VI-VII-1期に属する。2678~2680は灰釉系陶器皿で、2678・2680は5型式VI-1期に、2679は白土原1号窯式VI-2期にそれぞれ属する。

SA58 (図版83) 破片数3点中1点図示した(2682)。2682は須恵器高杯で、IV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。

P481 (図版83) 破片数2点中1点図示した(2681)。2682は中世土師器伊勢型鍋B-2類で、VII期に属すると思われる。

P1519 (図版83) 破片数1点中1点図示した(2683)。2683は灰釉系陶器皿で、白土原1号窯式VI-2期に属する。

P2827 (図版83) 破片数4点中1点図示した(2684)。2684は灰釉系陶器碗で、生田2号窯式VII-2期に属する。

P3265 (図版83) 破片数13点中1点図示した(2685)。2685は灰釉系陶器碗で、大洞東1号窯式VII-2期に属する。

SK75 (図版83) 破片数13点中1点図示した(2686)。2686は志野丸皿で、大窯4VII-3期に属する。

SK77 (図版83) 破片数39点中2点図示した(2687~2688)。2687は灰釉系陶器碗で4型式、2687は皿で浅間窯下1号~窯洞1号窯式で、いずれもVI-1期に属する。

SK110 (図版83) 破片数360点中33点図示した(2689~2721)。2689~2703・2710~2721は灰釉系陶器、2704~2709は陶器である。2689~2700・2710・2711・2716・2717は灰釉系陶器碗、2701~2703・2714・2715・2718~2721は皿である。2689・2690・2712・2717は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、2691・2714・2715は白土原1号窯式でVI-2期に、2692・2693・2713・2718~2721は明和1号窯式、2694は大谷洞14号窯式でVII-1期に、2695~2700・2710・2711・2716が大洞東1号窯式でVII-2期に、2701~2703はVII-1~2期にそれぞれ属する。2710~2721は底部外面に墨書がある。2710は「い」、2711は「の」もしくは「の」の書き出しが円弧より出る記号状、2712は花押状である。2713はかな状の文字が複数筆記されている。2714は記号状で、同じようなものに4949や4950がある。2715は「大吉」で、内面に墨が付着しており転用碗の可能性ある。2716・2717・2720は記号状である。2718は「+」、2719は「≡」である。2721は分類不能である。2694の口縁部内面に煤が付着している。2704・2705は陶器華瓶で、いずれも古瀬戸で、2704はよくわからないが、2705は古瀬戸前期に属する。2706は常滑の壺で、VI-1期に属すると判断される。2707は古瀬戸の縁釉小皿で、VII期に属する。2708は古瀬戸後期の小鉢で、VII-2期に属する。2709は古瀬戸後期の天目茶碗で、VII-2期に属する。

SK116 (図版83・84) 破片数382点中28点図示した(2722~2749)。2722は灰釉陶器、2725は土師器、2724は須恵器、2723・2726~2743は灰釉系陶器、2744は白磁、2745~2748は中世土師器、2749は陶器である。2722は灰釉陶器壺で、V-3期に属する。2723は灰釉系陶器坏で、VI期に属すると思われる。2724は須恵器高杯で、IV-2期に属し6c後半に位置づけられる。2725は清野型鍋でV-3~VI-1期に属する。2726~2737は灰釉系陶器碗、2738・2739・2741~2743は皿、2740は仏供である。2730は片口が付く。2726・2737は西坂1号窯式、2735は4型式、2727~2734・2738・2739は谷迫間2号窯式、

2736・2740～2743は浅間窯下1号～窯洞1号窯式で、いずれもVI—1期に属する。2739は内面全面と口縁部外面の一部に漆が付着していた。2729の内面の一部には付着物があるが、何かはよくわからない。2744は白磁D群の皿で、VII期に属すると判断される。2745～2748は中世土師器I類の皿で、VI期に属すると思われる。なお2748はIII～IV期の土師器高杯の可能性があるが判然としない。2749は常滑の甕でVI—1期に属する。体部外面には押印がランダムにある。

SD58 (図版84) 破片数83点中1点図示した(2750)。2750は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI—1期に属する。

SD109 (図版84) 破片数4点中1点図示した(2751)。2751は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI—1期に属する。

SD204 (図版84) 破片数1384点中6点図示した(2752～2757)。2752は灰釉陶器皿で、V—3期に属し10c後半に位置づけられる。2754・2756は灰釉系陶器碗、2753は皿である。2753・2756は浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI—1期に、2754は大洞東1号窯式VII—2期に属する。2756の底部外面には墨書がある。釈文は「□〔右又は石〕上」である。2755は龍泉窯系青磁I—4類の碗で、VI期に属すると判断される。2757は古瀬戸の深皿で、VI～VII期に属する。底部内面に波状文がある。

SD205 (図版85) 破片数299点中6点図示した(2758～2763)。2758は灰釉系陶器碗、2759が皿、2763が仏供である。2758は明和1号窯式VII—1期に、2759は4型式VI—1期に、2763はVI期にそれぞれ属する。2760は大窯の丸碗で、VII—3期に属する。2761は皿で、VIII期に属すると思われる。2762は中世土師器であるが、器種、時期ともに不明である。

SD206 (図版85) 破片数240点中4点図示した(2764～2767)。2764は灰釉系陶器碗、2765～2767は皿である。2764は谷迫間2号窯式、2767は5型式、2765・2766は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でいずれもVI—1期に属する。

SD210 (図版85) 破片数1085点中4点図示した(2768～2771)。2768は須恵器杯身で、IV—2期に属し6c初に位置づけられる。2769は灰釉系陶器鉢で、VI期に属すると思われる。2770は灰釉系陶器碗で、脇之島3号窯式VII—2期に属する。2771は古瀬戸後期の水滴で、VII—2期に属する。

SD243 (図版85) 破片数91点中2点図示した(2772・2773)。2772は灰釉系陶器碗で、大洞東1号窯式VII—2期に、2773は皿でVII期に属する。

NR28 (図版85・86) 破片数3271点中31点図示した(2774～2804)。2774～2796は灰釉系陶器、2797・2798・2803・2804は陶器、2799は土師器、2800は須恵器、2801・2802は青磁である。2774～2788・2796は灰釉系陶器碗、2790は子持ち器台、2791は壺、2789・2792～2795は皿である。2785は無高台碗である。2774・2792は浅間窯下1号～窯洞1号窯式でVI—1期に、2775～2777・2791・2793～2795は白土原1号窯式でVI—2期に、2778～2782は明和1号窯式、2783・2784・2796は大谷洞14号窯式でVII—1期に、2785～2787は脇之島3号窯式、2788・2789は生田2号窯式でVII—2期にそれぞれ属する。2795・2796の底部外面には墨書がある。2795はベタツとした墨点である。2796は草書体のような書ききょうで、釈読はできない。2774・2781・2793には煤などの付着物が確認できる。2797は古瀬戸の水注で、VI期に属すると判断される。装飾のある注口が付いていたと思われるが、欠けていてよくわからない。2798は大窯の甕で、VII—3期に属する。2799は土師器高杯Eで、III—1期に属すると判断される。2800は須恵器有台杯で、V—2期に属し8c前葉に属する。底部内面に「美濃国」刻印A—II—5が確認で

きる。ただし「濃」字がさんずいを除いて見えない。擦り消されたようには見えないので、押印する際にうまく写らなかったかと思われる。2801・2802は龍泉窯系の青磁で、2801は碗、2802は皿Bで、VII期に属すると思われる。2803は天目茶碗、2804は志野碗で、いずれもVIII-1期に属する。

NR29 (図版86・87) 破片数4189点中66点図示した(2805~2870)。2805は弥生土器、2806~2811は須恵器、2812~2826・2836~2860は灰釉系陶器、2827は白磁、2828~2830は青磁、2831~2835は中世土師器、2861~2870は陶器である。2805は弥生土器壺で、II-1期に属すると思われる。頸部に突帯が巡り、突帯上には斜格子状に刻みが施されている。2806は須恵器杯身、2807・2810は壺、2808は長頸瓶、2809は有台杯、2811は甕である。2806・2807・2811はIV-2期に属し6cに、2810はIV-3~V-1期に属し7cに、2808・2809はV-2期に属し、2808は8c後半、2809は9c前にそれぞれ位置づけられる。2809の底部外面には墨書がある。2文字あるが釈読できない。2812~2826・2849~2851・2853・2854・2857は灰釉系陶器碗、2836は入子、2837~2848・2852・2855・2856・2858~2860は皿である。2812・2813は谷迫間2号窯式、2838は5型式、2814~2816・2837・2839~2841・2851・2852・2857は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、2817~2820・2842~2844・2850・2854~2856・2858は白土原1号窯式でVI-2期に、2821・2849・2853は明和1号窯式でVII-1期に、2822は大洞東1号窯式、2823~2825は脇の島3号窯式、2826は生田2号窯式でVII-2期に、2836はVI期に、2845~2848・2859・2860はVII-1~2期にそれぞれ属する。2849~2860は底部外面に墨書がある。2849・2850は「+」、2851は花押状、2852は「わ」、2855・2859は「上」、2856は記号状、2858は略押状である。2853と2854は削れており文字内容がわからない。2860は複数字あるが釈読できない。2844の底部外面には墨が付着する。2827は白磁D群の皿で、VII-2~3期に属すると判断される。2828~2830は龍泉窯系青磁で、2828はB-I類の碗、2829はI-2類の碗でVI期に、2830はA類の皿でVII-1期にそれぞれ属すると判断される。2831は中世土師器II-B類の皿、2832~2835はI類の皿で、いずれもVI期に属すると思われる。2861は古瀬戸中期の平底末広碗で、VII-1期に属する。2862は小壺で、VI期に属すると思われる。2863は皿で、VIII期に属する。2864は大窯の折縁皿、2865は志野丸皿でVII-3期に属する。2866~2868は小杯で、VIII-2~3期に属する。2869は丸皿で、VIII期に属する。2870は古瀬戸後期の折縁深皿で、VII-2期に属する。

NR30 (図版87) 破片数77点中2点図示した(2871~2872)。2871・2872は灰釉系陶器で、2871が碗、2872が皿で、いずれも白土原1号窯式VI-2期に属する。

NR31 (図版87) 破片数1498点中9点図示した(2873~2880・2882)。2873・2875~2880は灰釉系陶器、2874は青磁、2882は土師器である。2873・2875・2879・2880は灰釉系陶器碗、2876~2878は皿である。2876は5型式、2875は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、2877~2879は白土原1号窯式でVI-2期に、2880は明和1号窯式でVII-1期に、2873は大洞東1号窯式でVII-2期にそれぞれ属する。2880の底部外面には墨書がある。積文は「=」である。2875は外面に炭化物が付着する。2874は同安・龍泉窯系青磁0類の碗で、VI期に属する。2882は土師器甕D4で、V期に属すると思われる。

NR33 (図版87) 破片数23点中1点図示した(2881)。2881は灰釉系陶器皿で、VII-1~2期に属する。底部外面に墨書があるが、割れているため釈読できない。

NR40 (図版87) 破片数422点中4点図示した(2883~2886)。2883は須恵器鉢で、IV-2~V-1期に属し6c末~7cに、2884は長頸瓶で、V-2期に属し8cにそれぞれ位置づけられる。2885は灰

釉系陶器碗、2886は皿で、いずれも白土原1号窯式VI-2器に属する。

NR74 (図版87) 破片数1点中1点図示した(2887)。2887は大窯の天目茶碗で、VII-3期に属する。

NR80 (図版87) 破片数177点中1点図示した(2888)。2888は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2器に属する。

SW40 (図版87) 破片数4点中1点図示した(2889)。2889は灰釉系陶器碗で、西坂1号窯式VI-1器に属する。内面に炭化物が厚く付着している。

SW41 (図版87) 破片数268点中2点図示した(2890-2891)。2890は灰釉系陶器皿で、谷迫間2号窯式、2891は碗で浅間窯下1号-窯洞1号窯式で、いずれもVI-1器に属する。

SW43 (図版88) 破片数430点中22点図示した(2892-2912)。2892は弥生土器、2893は須恵器、2894は灰釉陶器、2895-2912は灰釉系陶器である。2892は弥生土器壺で、II-2期に属すると思われる。口縁部やや下に2孔1組の孔が開けられている。2893は須恵器瓶で、V-2期に属し8cに位置づけられる。2894は灰釉陶器瓶で、V-3期に属する。2895-2905・2907・2908・2911・2912は灰釉系陶器碗、2906・2909・2910は皿である。2895・2902は谷迫間2号窯式、2910は浅間窯下1号-窯洞1号窯式でVI-1期に、2896-2901・2906・2908・2909・2912は白土原1号窯式でVI-2期に、2903-2905・2911は明和1号窯式でVII-1期に、2907はVI期にそれぞれ属する。2907は内面に卸目がある。2908-2911は底部外面に墨書がある。2908は花押状、2909は「○」である。2910は「井」で九字の省略形と考えられる。2911は「+」である。2897の体部外面には点々と墨痕がついており、また2902の高台の一部にも墨が付着している。2912の底部には穿孔が施されている。

SW44 (図版88) 破片数7点中1点図示した(2913)。2913は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。底部内面に墨が付着しており、転用碗の可能性はある。

SW89 (図版88) 破片数57点中4点図示した(2914-2917)。2914は須恵器杯身で、IV-2期に属し6c前半に位置づけられる。2915は土師器壺E、2916は雙底部台付2で、いずれもIII-1期に属すると判断される。2917は弥生土器壺で、II-2期に属すると思われる。

SM284 (図版88) 破片数380点中8点図示した(2918-2925)。2918は須恵器杯蓋Aで、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。2919は灰釉陶器碗で、V-3期に属し10c前半に位置づけられる。2920・2923-2925は灰釉系陶器で、2923・2924が碗、2920・2922・2925が皿である。2923・2925は浅間窯下1号-窯洞1号窯式でVI-1期に、2924は白土原1号窯式でVI-2期に、2920・2922はVII-1-2期にそれぞれ属する。2922・2925の底部外面には墨書がある。2922は複数字記されるが、釈読不能である。2925は墨点である。2921は中世土師器II-B類の皿で、VI期に属すると思われる。

包含層 (図版89-92) 184点図示した(2926-3109)。2926-3013は灰釉系陶器、3014-3021は白磁、3022-3032は青磁、3033-3074・3077-3079・3081・3082・3089-3109は陶器、3075・3076・3080・3085-3088は中世土師器である。2926-2932は灰釉系陶器碗で、明和1号窯式VII-1期に属する。2933・2934・2938-2966は皿で、明和1号窯式-脇之島3号窯式VII-1-2期に属する。2935・2936・2937は片口鉢で、7型式VII-1期に属する。2967・2968は碗で大畑大洞4号窯式、2969-2979は碗で大谷洞14号窯式で、いずれもVII-1期に属する。2980-2988は碗で大洞東1号窯式、2989-3000・3002・3003は碗で脇之島3号窯式、3001・3004-3007・3009-3011は碗、3008・3012・3013は皿で生田2号窯式で、いずれもVII-2期に属する。3014-3021は白磁で、3014・3015がIX類の碗、3017・3020がIX

類の皿、3018・3019がD群の皿、3016は不明の小碗、3021は猪口である。3014～3017・3020はVII-1期、3018・3019はVII-2期に、3021はVII期にそれぞれ属する。3022～3032は龍泉窯系青磁で、3022がA類の碗、3023がB-I類の碗、3024・3026がB-II類の碗、3025がD類の碗、3027・3031がI類の碗、3028がI類の皿、3029は香炉?、3030は端反皿、3032が瓶である。3022～3024・3026・3028がVII-1期に、3025・3027・3031がVII-2期に、3029・3030・3032がVII期にそれぞれ属する。3033は古瀬戸後期の碗で、VII-2期に属する。3034は大窯の灰釉天目茶碗で、VII-3期に属する。3058は卸皿、3060は柄付片口、3068は合子の壺、3079は合子、3078は華瓶で、古瀬戸中期でVII-1期に属する。3035・3039・3089は天目茶碗、3036・3037は平碗、3038・3041は浅碗、3040・3044は小鉢、3042は輪花小鉢、3045～3054は緑釉小皿、3055～3057は卸皿、3059は直縁大皿、3061・3062は折縁深皿、3064は腰折皿、3063・3065は搥鉢、3066・3037は双耳小壺の蓋、3069は瓶子、3071は筒型香炉、3073・3082は土瓶、3077は華瓶、3084は花活、3043は器種不明で、古瀬戸後期でVII-2期に属する。3070は柄付片口で、古瀬戸中期～後期でVII-1～2期に属する。3072は、古瀬戸であるが器種不明、3074は古瀬戸平碗と思われる、3081は古瀬戸甕で、VII期に属する。3090は大窯前半の天目茶碗で、大窯前半でVII-3期に属する。3091は大窯4後半の天目茶碗で、VII-3期に属する。3092は大窯～蓮房第2小期の天目茶碗で、VII-3～VIII-1期に属する。3093は大窯3の丸碗で、VII-3期に属する。3094は皿で、VII-3期に属する。3095は志野丸皿で、3096は大窯2の端反皿、3097は大窯4前半の折縁皿、3098・3100は大窯の丸皿、3099は大窯の灯明皿、3101・3102は大窯3の稜皿、3105は大窯4の搥鉢で、いずれもVII-3期に属する。3104は古瀬戸後期の茶釜で、VII-2期に属する。3106～3109は常滑の甕で、3106が5型式、3107・3108が6型式でVII-1期に、3109が11型式でVII-2期にそれぞれ属する。3075・3083・3085・3086は中世土師器羽釜、3076・3080は皿、3087は伊勢型鍋B-2類、3088は内耳鍋で、いずれもVII期に属する。3103は瓦質陶器の火鉢で、VII-2～3期に属する。

第8項 VIII期

P2234 (図版93) 破片数3点中2点図示した(3110-3111)。3110は陶器皿、3111は徳利で、いずれもⅦ-3期に属する。3111は外面に3文字確認できる。

P2255 (図版93) 破片数3点中1点図示した(3112)。3112は瀬戸美濃の行平で、Ⅶ-3期に属する。

SK66 (図版93) 破片数5点中1点図示した(3113)。3113は志野丸皿で、Ⅶ-3期に属する。

SD56 (図版93) 破片数375点中5点図示した(3114-3118)。3114は中世土師器Ⅰ類の皿でⅦ期に属するか。3115は灰釉系陶器皿で、生田2号窯式Ⅶ-2期に属する。3116は天目茶碗、3118は播鉢で、いずれも大窯4Ⅶ-3期に属する。3117は大窯-連房の皿で、Ⅶ-3~Ⅷ-1期に属する。

NR20 (図版93-94) 破片1079数34点中点図示した(3120-3153)。3120は縄文土器、3121は弥生土器、3122は土師器、3123は白磁、3124-3128・3140-3144は灰釉系陶器、3129は青磁、3130-3138は中世土師器、3139は須恵器、3145-3153は陶器である。3120は縄文中期咲畑・醍醐第2様式の深鉢で、Ⅰ-1期に属する。3121は弥生土器甕A1で、Ⅱ-2期に属すると判断される。3122は土師器甕D2で、Ⅲ-Ⅳ期に属する。3123は白磁Ⅳ類の碗で、Ⅵ-1期に属する。3124・3140-3144は灰釉系陶器碗、3125-3128は皿である。3140は谷迫間2号窯式、3125・3142は浅間窯下1号-窯洞1号窯式でⅥ-1期に、3126・3127は白土原1号窯式でⅥ-2期に、3128・3141・3143は明和1号窯式、3124は大畑大洞4号窯式でⅦ-1期に、3144は大洞東1号窯式でⅦ-2期にそれぞれ属する。3128・3140-3144の底部外面には墨書がある。3128は六曜文、3141は「大」、3144は「+」である。3142は割れているため釈読できない。3143は割れているか、「か」と思われる。3124-3127の内面には付着物がある。3129は同安窯系の青磁碗で、Ⅵ-1期に属する。3130-3137は中世土師器Ⅰ類の皿でⅥ-1期に、3138はⅡ-B類の皿でⅦ期に属すると思われる。3139は須恵器有台杯で、Ⅴ-2期に属し8c末-9c前に位置づけられる。底部外面に墨書があり、図像のようにも見えるがよくわからない。3145は古瀬戸後期の折縁皿で、Ⅶ-2期に属する。3146は常滑の三筋壺で、Ⅵ期に属する。3147・3148は瀬戸美濃で、3147が小杯、3148が小碗で、いずれもⅦ期に属する。3149は古瀬戸か大窯の碗の加工円盤で、Ⅶ-2~3期に属する。3150・3151は大窯の丸皿で、Ⅶ-3期に属する。3152は瀬戸美濃の仏供で、Ⅷ-2~3期に属する。3153は大窯の甕でⅦ-3期に属する。

NR74 (図版93) 破片数1点中1点図示した(3119)。3119は瀬戸美濃、織部の皿で、Ⅶ-1期に属する。

SW68 (図版94-95) 破片数2275点中34点図示した(3154-3187)。3154-3156は灰釉系陶器、3157-3164・3168-3187は陶器、3165・3166は中世土師器、3167は灰釉陶器である。3154は灰釉系陶器皿で、谷迫間2号窯式Ⅵ-1期に属する。3155は碗で白土原1号窯式Ⅵ-2期に属する。底部外面に墨書がある。釈文は「+」である。3156は仏供で、Ⅵ期に属する。3157-3163は大窯の小皿で、Ⅶ-3期に属する。3164は瀬戸美濃の灯明皿で、Ⅷ-2~3期に属する。3165・3166は中世土師器Ⅰ類の皿で、Ⅶ期に属すると思われる。3167は灰釉陶器の鈴で、Ⅴ-3期に属する。3168は陶器仏供、3169・3171・3180は壺、3170は羽釜、3172は煙硝播、3173は徳利、3174は鉄銚皿、3175は瓶、3176は香炉、3177は乗燭、3178は猪口、3179は火鉢、3181は銅皿、3182は器種不明、3183が染付丸皿、3184は片口鉢、3185-3187は播鉢で、Ⅶ期に属する。

包含層 (図版95) Ⅱ中点図示した(3188-3198)。すべて陶器である。3188は合子の身、3189-3191

は土人形、3190は徳利、3192は加工円盤、3193は焙烙、3194は丸皿、3195は落し蓋、3196は皿、3197は染付丸碗、3198は皿である。

第9項 時期不明

包含層（図版95） 14点図示した（3199～3212）。3199～3208は土鉢である。3209～3211は土製紡錘車である。3212は輪の羽口である。

第10項 多時期

SD22 (図版96) 破片数158点中1点図示した(3213)。3213は灰軸系陶器碗で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。

SD34 (図版96) 破片数86点中1点図示した(3214)。3214は弥生土器高杯Aで、II-3期に属すると判断される。

SD46 (図版96) 破片数323点中11点図示した(3215~3225)。いずれも灰軸系陶器で、3215~3219は碗、3220~3225は皿である。3218は無高台碗である。3215~3218・3220・3221・3225は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、3219・3222~3224は白土原1号窯式でVI-2期にそれぞれ属する。3225は底部外面に墨書がある。釈文は「いわ」である。

SD93 (図版96) 破片数39点中1点図示した(3242)。3242は土師器甕C2もしくはC3で、III期に属すると思われる。

SD100 (図版97) 破片数99点中11点図示した(3251~3261)。3257は弥生土器、それ以外は土師器である。3257は弥生土器壺B3で、II-2期に属すると判断される。3251は甕D3、3252・3254・3255は甕D2である。3255の底部外面には木葉痕が残る。3253は壺C4、3258は壺E2、3256は鉢D、3259は高杯Fの脚部、3260は高杯G2である。3261は杯部が大きく開く鉢形であるが、高杯Fの一種かと思われる。土師器はまとめて出土しており、同時期に廃棄されたものと考えられる。高杯Fの存在と須恵器が混じらないことから、III-2期に属すると判断される。

SD126 (図版98・99) 破片数1681点中39点図示した(3262~3300)。3262~3286・3289・3293・3294・3296~3299は須恵器、3287・3288は灰軸陶器、3290~3292・3295・3300は土師器である。3262・3263は須恵器杯蓋Bで、3262はV-1期に属し7c末に、3263はV-1~2期に属し7c末~8c初にそれぞれ位置づけられる。3264~3268は杯蓋Cで、3264はV-1~2期に属し7c末~8c初に、3265~3268はいずれもV-2期に属し、3265・3266は8c前半に、3267は8c末~9c初に、3268は9c初にそれぞれ位置づけられる。3267・3268の天井部内面には墨書がある。いずれも釈文は「田寸」である。3269~3272は無台杯で、いずれもV-2期に属し、3269・3270は8c前半に、3271・3272は9c前半にそれぞれ位置づけられる。3272の底部外面には墨書がある。釈文は「大方」である。3273は大型無台杯で、8c前半に位置づけられる。3274~3282は有台杯で、いずれもV-2期に属し、3274~3276・3280は8c末~9c初、3277~3279・3281・3282は9c前葉にそれぞれ位置づけられる。3278・3280・3281の底部外面には墨書がある。3278は割れているため釈読不能、3280は「日寸」、3281は「田寸十」である。3280は「日寸」であるが、3267・3268・3281などの例から「田寸」と書くところを「日寸」と誤った可能性が考えられる。3283は把手付大盤で、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。把手は欠失しているが、付いていた痕跡が確認できる。3284は有台盤で、V-2期に属し9c前半に位置づけられる。3285は有台杯と思われるがやや異質である。V-2期に属し8c前半に位置づけられる。3286は瓶で、IV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。3289は須恵器短頸壺、3293・3294は壺、3296~3298は甕、3299は鉢である。3289・3296・3297はIV-3~V-1期に属し7cに、それ以外はV-2期に属し3293・3298は8c、3294は8c後半~9c前半にそれぞれ位置づけられる。3287・3288は灰軸陶器碗で、いずれもV-3期に属し9c中~後半に位置づけられる。3287の底部外面には墨書がある。釈文は「万得」である。3290・3295は土師器甕D4、3291・3300は甕J、

3292は甕底部平底2で、いずれもV-1~2期に属すると思われる。

SD106(図版96) 破片数497点中16点図示した(3226~3241)。3226・3227・3229~3232は土師器、3228・3233~3236は須恵器、3237・3238は灰釉陶器、3239~3241は灰釉系陶器である。3226は土師器甕C2もしくはC3でIII期に、3227は甕F1でII-4期にそれぞれ属すると判断される。3227は壺C4で、III期に属すると思われる。3230・3231は高杯EでIII-1期に属すると思われる。3232は手捏ねでIV期に属すると思われる。3228は須恵器高盤で、V-2期に属し8c末~9c初に位置づけられる。3233は杯蓋AでIV-2期に属し6c前に位置づけられる。3234は杯身、3235は甕でIV-3期に属し7c前半に位置づけられる。3236は高杯でIV-2~3期に属し6c末~7c初に位置づけられる。3237・3238は灰釉陶器でいずれもV-3期に属し、3237は碗で9c中~後半、3238は皿で10c前半にそれぞれ位置づけられる。3237には漆が付着する。3239~3241はいずれも灰釉系陶器碗で、3239・3240は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、3241は大谷洞14号窯式でVII-1期にそれぞれ属する。3241の底部外面には墨書がある。半分割れているため、釈読はできない。

SD129(図版96) 破片数188点中2点図示した(3243・3244)。3243は土師器甕D4で、V期に属すると思われる。3244は須恵器有台杯で、V-2期に属し8c末~9c初に位置づけられる。底部外面に墨書が認められるが文字ではない。

SD130(図版96) 破片数347点中6点図示した(3245~3250)。3245は灰釉陶器碗で、V-3期に属し10c後半に位置づけられる。底部外面に墨書がある。釈文は「山口」である。「山」は「小」の可能性もある。3246は須恵器杯身で、V-1期に属し7c後半に位置づけられる。3247・3250は壺で、3247がIV-2~3期に属し6c中~7c前半に、3250がV-2期に属し8c中にそれぞれ位置づけられる。3248は灰釉系陶器皿で、5型式VI-1期に属する。3249は碗で、谷道間2号窯式VI-1期に属する。内外面ともに炭化物が、破断面には墨らしきものが付着している。

SD131(図版99) 破片数16点中1点図示した(3301)。3301は須恵器高杯で、V-1~2期に属し7c後半~8c前葉に位置づけられる。

SD134(図版101) 破片数1444点中15点図示した(3358~3372)。3358・3359は土師器、3360~3366・3369は須恵器、3367・3368は灰釉陶器、3370・3372は灰釉系陶器、3371は陶器である。3358は土師器甕D3で、III~IV-2期に属すると思われる。3359は器台Cで、II-4期に属すると思われる。3360は須恵器杯蓋、3361は杯身、3362は短頸壺蓋、3363は杯蓋B、3364は壺、3365は杯蓋C、3366は有台杯、3369は甕である。3360はIV-2期に属し6c後半に、3364はIV-2~V-1期に属し6c後~7cに、3362はIV-2期に属し6cに、3361はIV-3期に属し7c前半に、3363はV-1期に属し7c中葉に、3366はV-1~2期に属し、7c末~8c前に、3365・3369はV-2期に属し8c後葉にそれぞれ位置づけられる。3367は灰釉陶器碗で、V-3期に属し9c中~後半に位置づけられる。3368は白磁写しの灰釉陶器碗で、V-3期に属する。3370は灰釉系陶器皿で、浅間窯下1号~窯洞1号窯式VI-1期に属する。3371は古瀬戸の香炉で、VI期に属すると思われる。3372は灰釉系陶器碗で白土原1号窯式VI-2期に属する。

SD163(図版99) 破片数9点中1点図示した(3302)。3302は土師器甕D2で、III期に属すると思われる。

SD221(図版99) 破片数692点中11点図示した(3303~3313)。3303・3304は須恵器、3305~3310は土

師器、3311~3313は灰釉系陶器である。3303は須恵器ミニチュアの短頸壺で、IV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。3304は盤で、V-2期に属し8c後半に位置づけられる。3305・3307~3310は土師器高杯で、3305はF、3307はG2、3310はEの脚部、3308・3309はEもしくはFの脚部である。3305はIII-2~IV-1期に、3310はIII-1期に、以外はIII~IV-2期に属すると思われる。3306はやや大振りの小型壺でIII期に属すると思われる。3311・3312は灰釉系陶器碗で、谷迫間2号窯式VI-1期に属する。外面に炭化物が、内面に墨が付着しており、転用碗の可能性もある。3313は小碗でVI-1期に属すると思われる。

SD229 (図版100) 破片数3876点中37点図示した (3314~3350)。3314は須恵器、3315・3316は灰釉陶器、3317・3328~3330・3333は中世土師器、3318~3327・3331・3332・3334~3344は灰釉系陶器、3345は土師器、3346・3348~3350は陶器、3347は青磁である。3314は須恵器鉢で、IV-2期に属し6c後半に位置づけられる。3315は灰釉陶器碗、3316は皿で、いずれもV-3期に属し、3315は9c中~後半、3316は10c前半にそれぞれ位置づけられる。3317は中世土師器II-B類の皿、3328~3330・3333は中世土師器I類の皿で、いずれもVI期に属すると思われる。3318~3327は灰釉系陶器碗、3331・3332・3334~3344は皿である。3318・3326・3327・3332・3339・3341は白土原1号窯式でVI-2期に、3319~3324は明和1号窯式でVII-1期に、3325は脇之島3号窯式でVII-2期に、3331・3334~3338・3340・3342~3344は明和1号窯式以降でVII-1~2期にそれぞれ属する。3326・3327・3339~3344の底部外面には墨書がある。3326・3339は記号状、3327は「上」、3340は「|」、3341は「は」である。3342~3344は複数字あるが釈読はできない。3点とも同じ文字が記されており、あるいは呪いに使用したものの可能性もある。3335は底部が焼成時に割れている。3345は土師器高杯Eで、III-1期に属すると判断される。3346・3348はVIII期に属する陶器で、3346は壺、3348は仏供である。3349は水注で、VI期に属すると思われる。3350は常滑6型式の甕で、VII-1期に属する。3347は龍泉窯系A類の青磁碗で、VI-2期に属する。

SD241 (図版100) 破片数1点中1点図示した (3351)。3351は土師器手捏ねで、IV期に属すると思われる。

SD242 (図版100) 破片数339点中3点図示した (3352~3354)。3352・3353は土師器手捏ねで、IV期に属すると思われる。3354は鉢B2で、III-1期に属すると思われる。

SD262 (図版101) 破片数149点中3点図示した (3377~3379)。3377は土師器甕C2もしくはC3、3378は甕の体部片で、III期に属すると思われる。3379は甕底部台付2で、甕F1~3のものと思われ、II-4期に属すると判断される。

SD265 (図版100) 破片数127点中2点図示した (3355・3356)。3355は土師器甕D4でIV-2~3期に属すると思われる。3356は須恵器高杯で、IV-2期に属し6c後半に位置づけられる。3方向に透かし孔を持つ。

SD271 (図版101) 破片数523点中4点図示した (3373~3376)。3373は須恵器杯身で、IV-2期に属し6c後葉に位置づけられる。3374は提瓶で、IV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。3375は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。3376は灰釉系陶器皿で、生田2号窯式VII-2期に属する。

SD279 (図版100) 破片数点19中1点図示した (3357)。3357は須恵器杯蓋で、Bと思われる。V-1

期に属し7c後半に位置づけられる。

SD280 (図版101) 破片数50点中1点図示した(3380)。3380は土師器甕C 2もしくはC 3で、Ⅲ期に属すると思われる。

SD283 (図版101・102) 破片数2167点中22点図示した(3381~3402)。3392は弥生土器、以外は土師器である。3392は弥生土器壺の底部で、Ⅱ-2期に属すると思われる。3381は高杯E 1、3382は高杯Eの脚部で、いずれもⅢ-1期に属する。3383・3386は甕C 2もしくはC 3、3384・3385・3388は甕D 2でⅢ期に属すると思われる。3387は甕F 1でⅡ-4期に、3389・3390は甕F 4でⅢ-1期に、3391は甕底部台付2でⅡ-4期にそれぞれ属すると判断される。3393は壺Eの体部でⅢ期に属すると思われる。3394は小型壺A 3、3395~3397は小型壺Bの体部で、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。3398は高杯E 1、3399はE 2でいずれもⅢ-1期に属すると判断される。3400は須恵器杯蓋Aで、Ⅳ-2期に属し6c前半に、3401は無蓋高杯でⅣ-1期に属し5c末にそれぞれ位置づけられる。3402は壺Cの頸部から体部で、Ⅲ期に属すると思われる。

NR 1 (図版102~107) 破片数2951点中109点図示した(3403~3511)。3477は弥生土器、3495~3498・3500・3501は須恵器、それ以外は土師器である。3403・3404・3406・3407は甕C 2もしくはC 3、3405はC 4で布留式系で、3405はⅢ-1期、以外はⅢ期に属すると思われる。3408~3412は甕D 2、3413~3416は甕D 3、3417は甕D 4、3422は甕D 5で、3408・3412はⅢ-Ⅳ-2期、3417はⅣ期、以外はⅢ期に属すると思われる。3418は甕F 1、3419・3423・3424は甕F 3でⅡ-4期に、3420・3421は甕F 4、3425・3426は甕F 5でⅢ-1期にそれぞれ属すると判断される。3425と3426は同じいわゆる山陰系口縁のS字甕であるが、体部の調整が違っている。3425はS字甕、3426はS字甕と同じ調整をした後ナデしており、そのナデ方が甕Gに似る。3430~3434は甕Gで、Ⅲ-1期に属すると判断される。3427~3429は甕底部平底3で、Ⅲ~Ⅳ期に属すると思われる。3435・3436は甕底部台付3でⅡ-4~Ⅲ期に、3437・3438は台付2で、3437がⅡ-4期に、3438はⅢ-1期にそれぞれ属すると思われる。3439・3440は鉢F、3441~3443は鉢I 3で、Ⅲ-2~Ⅳ-1期に属すると思われる。3444は壺C 2、3445・3446は壺C 1もしくはC 2の頸部から体部片でⅡ-4期に属すると判断される。いずれも赤色塗彩されている。3447は壺F 3で、Ⅱ-4期に属すると思われる。3448・3449・3451・3452は壺C 3に分類できるが、いずれも特徴的で多様である。3448は口縁部外面に横線が施され、3449は口縁部が断面T字状になっている。3448・3451はⅢ期に、3449はⅢ~Ⅳ期に、3452はⅢ-1期に属すると思われる。3450・3453・3454は壺Eで、いずれもⅢ期に属すると思われる。3457は壺G 1でⅢ-1期に属すると判断される。3455も上段が欠けているが、壺GでⅢ-1期に属すると判断される。3456は壺H 2、3458は壺H 3で、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。3459は他に例が無く分類不能の壺で、Ⅲ~Ⅳ期に属すると思われる。3460~3464は壺底部平底1で、Ⅱ-4~Ⅲ期に属すると思われる。3465は小型壺A 1、3466・3467は小型壺B 1、3468~3473は小型壺B 2、3474~3476は分類不能の小型壺で、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。3467は体部中程できれいに割れており、また破端部をなめらかにしたように見受けられる。3477は高杯Aで、Ⅱ-3期に属する。3478~3481は高杯D 2、3480は高杯Dの脚部で、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。3482は高杯E 1、3483・3484は高杯E 2、3485~3488は高杯Eの脚部で、いずれもⅢ-1期に属する。3483はハケ調整が明瞭に残る。3489・3491は高杯F、3493・3494は高杯F 4、3499・3502~3507は高杯Fの脚部で、Ⅲ-2期に属すると判

断される。3490は高杯G 2に分類できるが、脚部にも突帯があり珍しい。Ⅲ-2期に属すると思われる。3492は高杯G 2で、Ⅲ-Ⅳ期に属すると思われる。3495~3498・3500は須恵器杯身、3501は甕で、3495がⅣ-1期に属し5c末に、以外はⅣ-2期に属し、3498・3501が6c前葉に、3496・3497・3500が6c中葉にそれぞれ位置づけられる。3498の底部外面にはヘラ記号がある。3508~3511は土師器手捏ねで、Ⅲ-Ⅳ期に属すると思われる。

NR 2 (図版107・108) 破片数529点中26点図示した(3512~3537)。3520は弥生土器、3535~3537は須恵器、それ以外は土師器である。3512は甕C 2もしくはC 3でⅢ-Ⅳ期に、3514は甕C 4布留式糸でⅢ-1期に、3513・3515・3516は甕D 2でⅢ-Ⅳ期にそれ属すると思われる。3517は甕F 6で、Ⅲ-2~Ⅳ-1期に属する。宇田式甕は柿田遺跡では珍しい。3518は鉢FでⅢ-2~Ⅳ-2期に属すると思われる。3519は壺の体部片で、Ⅲ期に属すると思われる。3520は分類にない壺で、文様などからⅡ-2期に属すると思われるがよくわからない。頸部に糜状文が巡らされている。3521は壺H 2でⅢ-1期に、3522・3523は壺E、3525は壺Eの体部でⅢ期に属すると思われる。3524は小型壺B 2でⅢ-Ⅳ期に属すると思われる。3526は器台A、3527は器台CでⅡ-4期に属すると判断される。3528は高杯Dと思われるが、短脚で杯部との接合部分が太い。Ⅱ-4期に属すると判断される。3529は高杯E 4でⅢ-1期に属すると判断される。3530は高杯F 4、3532は高杯Fの杯部、3533・3534は高杯Fの脚部で、Ⅲ-2~Ⅳ-2期に属すると判断される。3531はミニチュア高杯なのか、分類、時期ともによくわからない。3535は須恵器杯身で、Ⅳ-2期に属し6c初に位置づけられる。3536は有蓋高杯、3537は高杯の脚部で、いずれもⅣ-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR 3 (図版108~113) 破片数2538点中106点図示した(3538~3643)。3558・3592は弥生土器、3606~3643は須恵器、以外は土師器である。3538は甕C 2もしくはC 3、3539~3545・3647・3548は甕D 2でいずれもⅢ-Ⅳ期に属すると思われる。3546・3549~3553は甕D 4で、3546・3553はⅣ-3~Ⅴ-1期に、それ以外はⅣ期に属すると思われる。3554は甕底部平底3で、Ⅲ-Ⅳ期に属する。3555は甕F 3でⅡ-4期に、3556は甕F 5、3557は甕F 4でⅢ-1期に、3569は甕F 6でⅢ-2~Ⅳ-1期にそれぞれ属すると判断される。3569は宇田式甕であるが、内面に赤色顔料が付着している。炭化物がその上を覆っていることから、赤色顔料付着後も煮炊きに使用していたことが推測できる。3558は甕の体部片で、Ⅱ-3期に属すると思われる。3559は甕底部台付1でⅢ期に、3560は台付2でⅢ-1期に属すると思われる。3561は甕Hで、Ⅳ期に属すると思われる。3562は台付の体部片で、現状の体部の高さから台付鉢(鉢C)ではないかと判断される。Ⅲ-1期に属すると思われる。3563・3564は鉢Kで、Ⅲ-Ⅳ-2期に属すると思われる。3565は形状から台は無いが台付鉢(鉢C)になるのではないかと推測される。Ⅲ-Ⅳ-2期に属すると思われる。3566・3568は鉢I 3で、Ⅲ-Ⅳ-2期に属すると思われる。3567は手捏ねでⅢ-Ⅳ-2期に属すると思われる。3570は甕の体部片、3571は平底1の甕で、いずれもⅣ期に属すると思われる。3572は壺C 1、3573は壺C 1もしくはC 2で、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。3574~3576は壺Eで、Ⅲ期に属すると思われる。3577は壺H 2でⅢ期に、3578は壺H 3でⅢ-Ⅳ期にそれぞれ属すると思われる。3579は壺であるが口縁部を欠き、他にあまり無い形状のため分類不能である。Ⅲ-Ⅳ期に属すると思われる。3580は小型壺A 1、3581は小型壺A 3で、いずれもⅢ-Ⅳ期に属すると思われる。3582は器台EでⅢ-1期に、3583は器台CでⅡ-4期に、3584は器台Eで、Ⅲ-Ⅳ-1期にそれ属すると思われる。3585・3586は高杯F 1、3587

は高杯G3でⅢ-2～Ⅳ-1期に、3591は高杯EでⅢ-1期にそれぞれ属すると判断される。3588はミニチュア高杯なのか、詳細は不明であるが、Ⅲ期に属すると思われる。3589・3590は分類にない高杯で、Ⅳ期に属すると思われる。3592は高杯AでⅡ-3期に属すると判断される。3593は高杯Dの脚部でⅡ-4期に、3594・3597・3598は高杯Fの脚部でⅢ-2～Ⅳ-1期に、3595は高杯Eの脚部でⅢ-1期にそれぞれ属すると思われる。3596は高杯G2でⅢ-Ⅳ-1期に属すると思われる。3599～3605は高杯Fで、Ⅲ-2～Ⅳ-1期に属すると判断される。3606～3615は須恵器杯蓋Aで、3606～3611はⅣ-2期に属し、3606・3609・3610は6c初に、3607・3608は6c中に、3611は6c後半に、3612はⅣ-2～3期に属し6c末～7c初に、3613・3614はⅣ-3期に属し7c前半に、3615はⅤ-1期に属し7c後半にそれぞれ位置づけられる。3616～3623は杯身で、3616はⅣ-1期に属し5c末に、それ以外はⅣ-2期に属し、3618～3621・3623は6c初に、3617・3622は6c中にそれぞれ位置づけられる。3624は壺でⅣ-2期に属し6c後半に位置づけられる。3625は有蓋高杯、3627は無蓋高杯、3626は高杯の脚部で、いずれもⅣ-2期に属し6c後半に位置づけられる。3628・3629は壺で、Ⅳ-2期に属し6c前半に位置づけられる。3630は甕でⅤ-2期に属し8c中葉に位置づけられる。3631は鉢で、Ⅳ-2期に属し6c後半に位置づけられる。3632は壺でⅣ-2期に属し6c後半に位置づけられる。3633は壺で、Ⅳ-1～2期に属し5c末～6c初に位置づけられる。体部に波状文とカキ目があり、形状から甕の可能性もある。3634・3635は甕でⅣ-2期に属し6c初に位置づけられる。3636は脚付壺の脚部と思われ、Ⅳ-2期に属し6c後半に位置づけられる。3637は壺で、Ⅳ-1～2期に属し、5c末～6c初に位置づけられる。3638は横瓶でⅣ-2期に属し6c前半に、3642は平瓶でⅣ-2～3期に属し6c末～7c初にそれぞれ位置づけられる。3639・3640は器種不明である。シャープな造りと波状文から、Ⅳ-2期に属し6c前半に位置づけられる。3641は無台杯で、Ⅴ-1～2期に属し7c後半～8c前葉に位置づけられる。3643は甕で、Ⅳ-2期に属し6c初に位置づけられる。

NR4 (図版114・115) 破片数414点中36点図示した(3644～3679)。3677は弥生土器、それ以外は土師器である。3644・3649は甕CもしくはC3で、3644がⅡ-4～Ⅲ-1期、3649がⅡ-4期に属すると思われる。3645～3647は甕D2で、3645・3647がⅡ-4期、3646がⅢ-1期に属すると思われる。3648は甕F4でⅢ-1期に、3653は甕EでⅡ-4期に、3654は甕HでⅢ-1期にそれぞれ属すると判断される。3650・3651は甕底部台付3、3652は台付1で、いずれもⅡ-4期に属すると思われる。3655は鉢B2、3656は鉢Cで、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。3657・3658は壺C1で、Ⅱ-4期に属すると判断される。3657は口縁部外面を赤色塗彩する。3659は壺F1、3660は壺F2でいずれもⅡ-4期に属すると判断される。3661・3662は壺の体部で、胎土や調整からいずれもⅡ-4期に属すると思われる。3662は外面を赤色塗彩する。3663は壺Cで、Ⅱ-4期に属すると思われる。3664・3665は高杯D1、3666・3670～3672は高杯D3、3667は高杯Dの杯部で、3668は器台A1、3669は高杯B、3674～3677は高杯Dの脚部で、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。3670は口縁部内面にも多条沈線を施す。3671は杯部内面が赤色塗彩される。3673・3678は高杯EでⅢ-1期に属すると判断される。3679は他に例のない高杯脚部で、胎土からⅢ-1期に属すると思われる。

NR5 (図版116・117) 破片数167点中22点図示した(3680～3701)。3697～3699は土師器で、以外は弥生土器である。3680・3684は甕A2、3681は甕C2もしくはC3、3682は甕E、3683は口縁部が欠けているが甕C2もしくはC3と思われ、3685は甕D2で、いずれもⅡ-3期に属すると判断される。

3686は甕底部平底1で、II-2期に属すると判断される。底部外面に布目匠痕が残る。3687-3689は甕底部台付1で、いずれもII-3~4期に属すると思われる。3690-3691は壺C1、3692は壺C3で、いずれもII-3期に属すると判断される。3693は壺F1でII-4期に、3694は壺F4でII-3~4期に属すると思われる。3695は壺B3の頸部から体部でII-2期に属すると判断される。3696は鉢B2でII-3期、3697は鉢B3でII-4期に属すると判断される。3696の口縁部は受け口状になっている。3698は器台A1で、II-4期に属すると判断される。3699は鉢I3、3700は高杯A、3701は高杯A-Cの脚部で、いずれもII-4期に属すると判断される。

NR6 (図版117~119) 破片数936点中44点図示した(3702~3745)。3702・3703・3728・3729は弥生土器、3743~3745は須恵器で、それ以外は土師器である。3702はハケ条痕調整を施した甕A1の体部片で、II-2期に属すると判断される。3704は甕底部台付1でIII-1期に、3703は台付3でII-3~4期にそれぞれ属すると思われる。3705は鉢DでIII-1期に、3706は鉢F、3707・3708は鉢I3でいずれもIII期に属すると思われる。3709は甕F4でIII-1期に属すると判断される。3710~3712・3713・3715は甕D2でIII期に属すると思われる。3716は壺C3でIII期に属すると思われる。3717は甕D3でIII期に、3713は甕D4でIII-2~IV-2期にそれぞれ属すると思われる。3718は甕の体部片で、外面に竹管状工具による円形の刺突が施されている。布留式甕に類例があり、その影響であろうか。III-1期に属すると判断される。3719・3720は鉢あるいは杯としてもよい器形で、III-1期に属すると思われる。3721は壺C4でIII-1期に属すると思われる。3722・3723は壺H3でIII-1期に属すると判断される。3724は壺Eの体部で、胎土からII-4期に属すると思われる。3725は壺E1でIII期に、3726は壺E3でII-4期に属すると思われる。3727は小型壺で、III期に属すると思われる。3728は高杯AでII-3期に属すると判断される。3729は高杯A-Cの脚部で、II-3期に属すると判断される。730は高杯Fの脚部、3742は高杯F4でいずれもIII-2~IV-2期に属すると思われる。3731は高杯EもしくはFでIII期に属すると思われる。3732~3739は高杯E1で、III-1期に属すると判断される。3741は高杯G3でIII-2~IV-2期に属すると思われる。3740は手捏ねでIII期に属すると思われる。3743は須恵器杯蓋A、3744・3745は杯身で、いずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR7 (図版119) 破片数553点中4点図示した(3746~3749)。3747は土師器、それ以外は弥生土器である。3746は甕A3、3748は壺C1、3749は赤色塗彩した小型の壺で、いずれもII-3期に属すると判断される。3747は甕F3でII-4期に属すると判断される。

NR8 (図版119・120) 破片数1289点中24点図示した(3750~3773)。3752・3753は弥生土器、3772・3773は須恵器、それ以外は土師器である。3750・3751は甕D2で、III期に属すると思われる。3752・3753は甕C1で、II-3期に属すると思われる。3754は甕A3で、II-4~III-1期に属すると思われる。3755は甕C3でIII期に、3756は甕F2でII-4期に、3757は甕GでIII-1期に、3758は鉢FでIII-1期に属すると思われる。3759は壺C3、3760・3761は壺Eで、いずれもII-4期に属すると思われる。3762は甕D2、3763は壺C4で、いずれもIII期に属すると思われる。3764・3765は高杯E1で、いずれもIII-1期に属すると判断される。3766は壺F2でII-4期に、3767は壺G1でIII-1期に、それぞれ属すると思われる。3768は壺の底部でII-4~III-1期に、3769は甕底部台付1でII-4~III-1期に、3770・3771は高杯Eの脚部でIII-1期に、それぞれ属すると思われる。3772は須恵器杯蓋A、3773は杯身で、いずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR10 (図版120・121) 破片数761点中8点図示した(3774~3781)。なお破片数は次のNR10SU1・SU2も含んでいる。3774・3776・3777・3780は弥生土器、それ以外は土師器である。3774はミニチュアの壺C1、3776は口縁部を欠くが壺C1で、いずれもII-3期に属すると判断される。3775は壺F3で、II-4期に属すると思われる。3777は甕C1でII-3期に、3778は甕D2、3779は甕F3でII-4期に、それぞれ属すると思われる。3780は高杯Dの脚部でII-4期に、3781は高杯Eの脚部でIII-1期にそれぞれ属すると判断される。

NR10-SU1 (図版121・122) 土師器15点を図示した(3782~3796)。3782は甕C2もしくはC3、3783~3785は甕C2、3786は甕F1、3789は甕D1である。3787・3788は甕底部台付1で、3789の形状に似る。3790・3791は壺D1、3792は器台A4、3793は鉢E、3794・3795・3796は高杯D1である。いずれもII-4期に属すると判断される。

NR10-SU2 (図版122) 土師器2点を図示した(3797~3798)。3797は壺C3、3798は布留式系の甕C4である。いずれもIII-1期に属すると判断される。

NR12 (図版122) 破片数551点中11点図示した(3799~3809)。すべて土師器である。3799は高杯Dの脚部でII-4期に属すると判断される。3800は甕D2であるが、体部外面に列点文や横線を巡らす点は鉢B2に似る。II-4期に属すると判断される。3801は甕F2でII-4期に属すると判断される。3802・3803は鉢I3でIII期に属すると思われる。3804は壺の体部でIII-1期に属するか。3805・3807は高杯F1、3806は高杯Fの脚部で、III-2~IV-1期に属すると判断される。3808は壺C1もしくはC2でII-4期に、3809は壺C3でIII期にそれぞれ属すると思われる。

NR13 (図版123~131) 破片数9271点中217点図示した(3810~4026)。3810は縄文土器、3811~3813・3848・3881・3882・3898・3902・3916・3933・3941・3948・3949・3956・3957・3960は弥生土器、4020~4026は須恵器、それ以外は土師器である。3810は縄文土器深鉢で、縄文中期でI-1期に属し、吹煙・醒醐式第1様式に位置づけられる。3811は壺で、小片のため分類はできないが、II-2期に属すると思われる。3812は甕底部平底1で、II-2期に属すると判断される。3813は鉢B1でII-3期に属すると判断される。3814~3816・3818・3819は甕C2もしくはC3、3817は甕C3で、いずれもIII-1期に属すると思われる。3820~3840は甕D2で、3821がII-4期、3820はIII-1期、以外はIII期に属すると思われる。3821は口縁部外面に横線5条がめぐる。3841・3842は甕D6で、III期に属すると思われる。3843・3844は甕D5、3845は甕D3、3846・3847は甕D4で、3843~3845はIII期に、3846・3847はIII~IV-2期に属すると思われる。3848は甕Eで、II-3期に属すると思われる。3849は分類のない甕で、口縁部の断面形が甕D5に似る。III期に属すると思われる。3850は甕F1、3851~3853は甕F2、3854~3859は甕F3でII-4期にそれぞれ属すると判断される。3860は甕底部平底3、3861~3864・3868・3870・3871は台付1、3865・3866・3869は台付2、3872は台付3で、いずれもII-4~III-1期に属すると思われる。3867は甕の体部で、3873~3878は甕Gで、III-1期に属すると判断される。3879は甕Hで、III~IV-2期に属すると思われる。3880は甕IでII-4期に属すると思われる。3881・3882は鉢B1でII-3期に、3883は鉢B3でII-4期にそれぞれ属すると判断される。3884~3887は鉢Dで、III期~IV-2期に属すると思われる。3888・3889は鉢EでII-4~III-1期に属すると思われる。3892は鉢F、3890・3891は鉢Hで、いずれもIII期に属すると思われる。3893は鉢I3で、III期に属すると思われる。3894は小型壺B2でIII期に属すると思われる。3895・3896は鉢I

1で、Ⅲ-1期に属すると思われる。3897は鉢Jで、Ⅳ期に属すると思われる。3898は壺Aで、Ⅱ-2期に属すると判断される。口縁部内面に浮文がある。3899・3902・3904・3906は壺C1で、3902がⅡ-3期、3899・3906がⅡ-4期、3904はⅡ-4～Ⅲ-1期に属すると判断される。3902は赤色塗彩の痕跡が確認できる。3900・3901は壺C2でⅡ-4期に属すると判断される。3903・3905・3907は壺C3で、3903はⅢ-1期、3905はⅡ-4～Ⅲ-1期、3907はⅡ-4期にそれぞれ属すると思われる。3907は頸部や上に穿孔がある。3908は壺C4でⅢ-1期に、3910は壺C5でⅢ期にそれぞれ属すると思われる。3910の頸部には爪形の列点文が施されている。3909は口縁部が欠けているが、壺C2と思われ、Ⅱ-4期に属すると判断される。3911・3918は壺E1、3912・3915・3916・3919は壺E2、3913・3914は壺Eで、3913が胎土・調整からⅡ-4期と、3916がⅡ-3期と考えられる他はⅢ期に属すると思われる。3916は外面全面を赤色塗彩したように見えるが、表面の劣化が激しくはっきりしない。3918の体部には焼成前と思われるが、孔が穿たれている。3917は壺C4で、Ⅲ-1期に属すると判断される。3920は大型で、壺G2に分類でき、Ⅲ-1期に属すると思われる。内外面ともに炭化物が付着する。3921・3922は壺G1で、Ⅲ-1期に属すると判断される。3922は内外面ともに赤色塗彩する。3923は壺H1、3924～3929は壺H2で、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。3930は口縁部が欠けているが、壺H2と判断されⅢ-1期に属すると思われる。3931は分類にない鉢で、口縁部外面に横線をめぐらせ、Ⅱ-4期に属すると思われる。3932は破片が小さいため判然としないが壺の口縁部で、Ⅲ期に属すると思われる。3933は壺の体部片で、文様から壺C1のものとして判断でき、Ⅱ-3期に属すると思われる。3934・3935は壺の破片で、分類できないが胎土や調整からⅡ-4～Ⅲ-1期に属すると思われる。3936は壺Iで、Ⅲ-1期に属すると判断される。3937・3942は小型壺A、3938は小型壺A1、3939・3943は小型壺B1、3940・3944～3945は小型壺B2、3946・3947は小型壺Bで、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。3944・3945・3946は二次焼成を受けている。3941は小型壺A4で、Ⅱ-3期に属すると判断される。体部外面には沈線や羽状列点文などの文様が描かれている。3948は器台A1、3949は器台A2で、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。3950は器台CでⅡ-4期に属すると思われる。3951・3952は器台A1と考えられ、Ⅱ-4～Ⅲ-1期に属すると思われる。3952は外面を赤色塗彩する。3953・3954は器台Aで、Ⅱ-4期に属すると判断される。3955は器台Dで、Ⅱ-4期に属すると判断される。二次焼成を受けている。3956は高杯A、3958は高杯B、3960は高杯C、3957は高杯A～Cの脚部で、いずれもⅡ-3期に属すると判断される。3959は高杯Bに分類できるが小型である。Ⅱ-4期に属すると思われる。3961・3963～3966は高杯D1、3962・3969～3971は高杯D2、3967は高杯D3、3968は高杯D4、3972～3975は高杯Dの脚部で、いずれもⅡ-4期に属すると判断される。なお3974・3975はいわゆる有稜高杯の脚部と思われる。3974は二次焼成を受けている。3976～3986は高杯E2、3987～3989は高杯E3で、いずれもⅢ-1期に属すると判断される。3990は高杯F1、3991～3993は高杯F4、3994～4001は高杯Fの杯部で、いずれもⅢ-2～Ⅳ-1期に属すると判断される。4002～4004は高杯Eの脚部でⅢ-1期に、4011～4016は高杯Fの脚部でⅢ-2～Ⅳ-1期に、それぞれ属すると判断される。4005は高杯G1、4008・4009は高杯G2、4006・4007・4010は高杯Gで、Ⅳ-1～2期に属すると判断される。4017・4018は分類のない高杯片で、4017がⅢ-Ⅳ-2期に、4018がⅢ-1期に属すると思われる。4019は手捏ねでⅢ-Ⅳ期に属すると思われる。4020～4022は須恵器杯蓋A、4023・4024は杯身、4025は高杯、4026は甕で、いずれもⅣ-1期に属し

5c末に位置づけられる。4026の底部外面にはへラ記号がある。

NR14 (図版132-133) 破片数1668点中51点図示した(4027-4077)。4027は縄文土器、4065は弥生土器、4073-4077は須恵器で、それ以外は土師器である。4027は縄文土器深鉢で、縄文後期に属し中津式に位置づけられる。4028は甕C1でⅢ-1期に属すると思われる。4029-4033は甕D2で、いずれもⅢ期に属すると思われる。4031は体部を打ち欠いて穿孔している。4033は平底の底部外面の縁に豆粒大の粘土を貼り付けている。4034は甕F1でⅡ-4期に、4035は甕F4でⅢ-1期に、それぞれ属すると判断される。4036は甕GでⅢ-1期に属すると判断される。4037は甕底部台付2、4039・4038は台付1で、いずれもⅡ-4～Ⅲ-1期に属すると思われる。4040は壺の体部で、分類不能、胎土や調整からⅡ-4期に属すると思われる。4041は壺C2、4042は壺C3で、いずれもⅡ-4期に属すると思われる。4043・4045は壺C4で、Ⅲ-Ⅳ-1期に属すると思われる。4044は壺F1でⅡ-4期に属すると判断される。4046は二重口緑気味ではあるが、壺C4でⅢ-Ⅳ-1期に属すると思われる。4047は壺H4、4048は壺E2でいずれもⅢ期に属すると思われる。4049は分類にない壺で、Ⅳ期に属すると思われる。4050は壺D1、4051は壺D3でいずれもⅡ-4期に属すると思われる。4052は分類にない壺で、内外面に赤色塗彩し、Ⅱ-3期に属する可能性もある。4053・4054は小型壺A2、4055は小型壺A、4056は小型壺Bで、Ⅲ-Ⅳ-1期に属すると思われる。4057は小型壺であるが、外面に線刻でへびと思われる絵画が描かれている。また体部中程に穿孔が、穿孔のすぐ下には石か何かの割れ落ちたような痕跡がある。Ⅲ期に属すると思われる。4058は器台A4で、Ⅱ-4期に属すると判断される。4059-4064は高杯E2で、Ⅲ-1期に属すると判断される。4065は高杯Aの脚部でⅡ-3期に属すると判断される。4066-4068・4071・4072は高杯Eの脚部でⅢ-1期に、4069は高杯Fの脚部でⅢ-2～Ⅳ-1期にそれぞれ属すると判断される。4070は器種不明で、胎土や調整からⅢ期に属すると思われる。4073は須恵器高杯、4074-4077は杯蓋Aで、いずれもⅣ-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR16 (図版133) 破片数9点中2点図示した(4078-4079)。いずれも土師器手捏ねで、Ⅲ-Ⅳ期に属すると思われる。

NR17 (図版133) 破片数56点中1点図示した(4080)。4080は土師器高杯Fで、Ⅲ-2～Ⅳ-1期に属すると判断される。二次焼成を受けている。

NR18 (図版134) 破片数7点中6点図示した(4087-4092)。4087-4089は土師器、4090-4092は須恵器である。4087は土師器甕底部台付2で、Ⅱ-4期に属すると思われる。4088は壺EでⅢ期に、4089は鉢I1で、Ⅲ-Ⅳ-2期に属すると思われる。4090・4091は須恵器杯蓋Aで、Ⅳ-1期に属し5c末に位置づけられる。4092は須恵器甕で、Ⅳ-2期に属し6cに位置づけられる。

NR21 (図版134-136) 破片数617点中42点図示した(4093-4134)。4109・4112は弥生土器、4117-4134は須恵器、それ以外は土師器である。4093は甕D4で、Ⅳ-3～Ⅴ-1期に属すると思われる。4094-4096は甕D2で、4094・4095がⅣ期に、4096がⅣ-1～2期に属すると思われる。4094は底部丸底である。4097・4098は甕D4でⅣ-3期に、4099は甕F4でⅢ-1期に、4100は甕底部台付3でⅢ-Ⅳ-2期にそれぞれ属すると思われる。4101は鉢B3でⅢ期に、4102・4103・4105は鉢I3、4104は鉢FでⅣ期にそれぞれ属すると思われる。4106は壺底部平底1で、Ⅲ-Ⅳ期に属すると思われる。4107は小型の壺G2、4108は壺Eの体部と思われ、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。4109は器

台A1でⅡ-3期に、4110は器台AでⅡ-4期にそれぞれ属すると判断される。4111は高杯Dの脚部でⅡ-4期に、4112は壺C1もしくはC2の脚部で、Ⅱ-3期に属すると思われる。4113・4114は高杯Fの脚部、4115・4116は高杯F1でⅢ-2～Ⅳ-1期にそれぞれ属すると判断される。4117・4118は須恵器壺で、Ⅳ-2期に属し6c後半に位置づけられる。4119は器種不明で、時期も詳細は不明であるがⅣ期に属すると思われる。4120は口縁部を欠くが、横瓶でⅣ-2～3期に属し6c後半～7c初に位置づけられる。4121・4122は須恵器杯蓋A、4123～4128は杯身、4129は有蓋高杯蓋、4130・4134は有蓋高杯、4131は無蓋高杯、4132は提瓶、4133は甗である。4132はⅣ-2～3期に属し6c末～7c初に、それ以外はⅣ-2期に属し4121・4123・4126・4128～4130は6c前葉、4122・4124・4125・4133は6c中葉、4131・4134は6c後半にそれぞれ位置づけられる。4128の底部外面にはへら記号がある。

NR48 (図版136) 破片数256点中14点図示した(4135～4148)。4138～4140・4142・4144は弥生土器、4135～4137・4141・4143・4145は土師器、4146～4148は須恵器である。4135～4137は甗D4で、Ⅳ期に属すると思われる。4138・4139は壺の頸部片、4140は壺AでいずれもⅡ-2期に属すると判断される。4140は口縁部内面に浮文が1個確認できた。4141は壺C3でⅡ-4期に、4142は器台AでⅡ-3～4期に、4143は小型壺B1でⅢ-1期に、4144は高杯Aの脚部でⅡ-3期に、4145は分類にない高杯でⅣ期に、それぞれ属すると思われる。4146は須恵器杯蓋A、4148は甗でⅣ-1期に属し5c後葉に、4147は杯蓋AでⅤ-1期に属し7c末にそれぞれ位置づけられる。

NR53 (図版133) 破片数112点中5点図示した(4081～4085)。4081は土師器壺IでⅢ-1期に、4083は弥生土器高杯Aの脚部でⅡ-3期に、4084は土師器甗D2でⅣ期に、それ属すると思われる。4082は須恵器杯身でⅣ-1期に属し5c末に位置づけられる。4085は灰釉陶器壺で、Ⅴ-3期に属すると判断される。頸部中程にへら書きで縦線が二本描かれている。

NR54 (図版133) 破片数40点中1点図示した(4086)。4086は土師器甗Gで、Ⅲ-1期に属すると判断される。

NR55 (図版136) 破片数54点中6点図示した(4149～4154)。4149は縄文土器と思われるがよくわからない。口縁部付近に2つ孔がある。4150は弥生土器甗B1、4154は壺で、いずれもⅡ-2期に属すると思われる。4154は沈線で文様が描かれている。4151は土師器甗D4でⅢ-Ⅳ期に属すると思われる。4152は須恵器杯身で、Ⅳ-2期に属し6c中に位置づけられる。4153は灰釉系陶器碗で、口縁部から体部までの破片なので詳細が不明であるが、Ⅵ-1期に属すると思われる。

NR65 (図版137) 破片数126点中13点図示した(4155～4167)。すべて土師器である。4155は甗D2に分類できるが、口縁部が短い。Ⅲ-1期に属すると判断される。4156・4158は甗D2、4157は甗C2もしくはC3で、いずれもⅢ-1期に属すると思われる。4159は鉢I3、4161は小型壺A1でⅢ-1期に、4160は壺でⅡ-4期にそれぞれ属すると思われる。4162は分類にない高杯で、胎土や調整からⅢ-Ⅳ-1期に属すると思われる。4163は高杯D2でⅡ-4期に、4164～4166は高杯Fの脚部でⅢ-2～Ⅳ-1期に、4167は分類にない高杯であるが脚部からⅢ-2～Ⅳ-1期にそれぞれ属すると思われる。

NR66 (図版137) 破片数25点中3点図示した(4168～4170)。4168は弥生土器壺C1で、Ⅱ-3期に属すると判断される。4169は器台EでⅢ期に、4170は高杯G3でⅢ-2～Ⅳ-2期に属すると思われ

る。

NR68 (図版137) 破片数259点中6点図示した(4171~4176)。4171・4173は土師器高杯Fで、IV-1~2期に属すると思われる。4172は甕底部平底1で、条痕調整を施し、II-2期に属すると判断される。4174は甕の体部以下、4175は甕D2で、いずれもIV期に属すると思われる。4176は高杯D1で、II-4期に属する。

NR79 (図版138~143) 破片数10,747点中175点図示した(4177~4351)。4213~4216は弥生土器、4177~4212・4217~4221は土師器、4222~4296・4341は須恵器、4297~4335・4337・4340は灰釉陶器、4336は白磁、4338・4339・4347は中世土師器、4342~4346・4348~4351は灰釉系陶器である。4177は甕C2もしくはC3、4178は甕C2で、いずれもII-4期に属すると思われる。4179・4180・4182・4183は甕D2でII-4期に、4184・4185は甕D4でIV-3~V-2期にそれぞれ属すると思われる。4181は甕底部台付1で、形状から甕CもしくはDのものと思われ、II-4期に属すると思われる。4186・4192は甕Iで、II-4期に属すると思われる。4187~4189は甕F3でII-4期に、4190は甕F4でIII-1期にそれぞれ属すると判断される。4191は甕底部平底3で、甕D4のものと考えられIV-3~V-1期に属すると判断される。4193~4198は甕Jで、V期に属すると判断される。4199・4101は鉢D、4200は鉢Cで、いずれもII-4期に属すると思われる。4203は甕でIV~V期に属すると思われる。4202は分類のないミニチュアの壺で、II-4期に属すると思われる。4204・4205は壺C3で、4204はII-4期に、4205はII-4~III-1期にそれぞれ属すると思われる。4206は壺F4、4207は壺C4で、いずれもII-4期に属すると思われる。4208~4210は口縁部を欠く壺で、4208・4210はII-4期に、4209はII-4~III-1期にそれぞれ属すると思われる。4211は器台A4、4212は器台A3で、いずれもII-4期に属すると判断される。4216は高杯B、4213~4215は高杯A~Cの脚部で、いずれもII-3期に属すると判断される。4217・4220は高杯D1、4219・4221は高杯D2で、いずれもII-4期に属すると判断される。4218は手控ねで、II-4期に属すると思われる。4222~4230は須恵器杯蓋Aで、4222はIV-1期に属し5c末に、4223・4224はIV-2期に属し6c中に、4225・4229はIV-2~3期に属し6c末~7c初に、4226はIV-2期に属し6c末に、4227・4230はIV-1期に属し7c前半に、4228はIV-3~V-1期に属し7cにそれぞれ位置づけられる。4231~4237は杯身で、4231・4235はIV-2期に属し4235が6c中に、4231が6c末に、4232・4234・4236はIV-2~3期に属し6c末~7c初に、4233・4237はIV-3期に属し7c前半に、それぞれ位置づけられる。4238~4243はへう記号のある破片で、4238はミニチュアの壺で時期不明、4239は杯でV-1期に属し7c後半、4240は杯でIV-2期に属し6c後半に、4241は杯蓋AでV-1期に属し7c後半に、4242は杯蓋AでIV-2~3期に属し6c末~7c前に、それぞれ位置づけられ、4243は杯蓋で時期不明である。4244は有蓋高杯蓋でIV-1期に属し5c末に位置づけられる。4245~4247は無蓋高杯でIV-2期に属し6cに、4248~4250・4252・4253は高杯の脚部で、4248・4249はIV-2期に属し6c後半に、4252はIV-3期に属し7c前半に、4250・4253はV-1期に属し7c後半にそれぞれ位置づけられる。4251は高盤の脚部で、V-2期に属し9c前葉に位置づけられる。4254・4255・4258は甕で、4254はV-1期に属し7c後半に、4255はIV-3~V-2期に属し7~8cに、4258はIV-2~3期に属し6c末~7c初に、それぞれ位置づけられる。4257はワイングラス型の高杯で、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。4256は壺で、IV-2~3期に属し6c末~7c前に位置づけられる。4259は鉢で、V-2期

に属し9c前半に位置づけられる。4260・4261・4264は平瓶で、4260・4261はIV-3~V-1期に属し7cに、4264はIV-3期に属し7c前半にそれぞれ位置づけられる。4262は器種不明であるがIV-2~3期に属し6c末~7c前に、4263は短頸壺と思われるIV-3~V-1期に属し7cにそれぞれ位置づけられる。4265は形状は捏ね鉢であるが、底部中央に孔があることから甔と思われる、IV-3~V-1期に属し6c末~7c前に位置づけられる。4266・4267はフラスコ瓶で、いずれもIV-3~V-1期に属し7cに位置づけられる。4268は何かの把手で、時期は不明である。4269は甔で、IV-2期に属し6c末に位置づけられる。4270~4274は杯蓋Cで、4274はV-1~2期に属し7c末~8c初に、以外はV-2期に属し、4270・4271は8c前半、4272は8c後半、4273は9c前葉にそれぞれ位置づけられる。4272の天井部内面にはへら書きがあり、「井」にみえる。4275~4281は無台杯で、4279~4281はV-1~2期に属し7c後半~8c前半に、4275~4277はV-2期に属し8c前半にそれぞれ位置づけられ、4278は時期不明である。4278・4279・4281の底部外面にはへら記号がある。4282~4288は有台杯で、4283はV-1~2期に属し7c後半~8cに、以外はV-2期に属し、4284は8c前葉、4287・4288は8c後半、4285は8c末、4286は8c、4282は9c前葉にそれぞれ位置づけられる。有台杯としたが、これらのうち、4283は佐波里写し、4284は老洞古窯特有の稜碗、4286はコップ形有台杯である。4289は高盤でV-1期に属し7c末に、4290・4292は有台盤、4291は有台鉢でV-2期に属し9c前にそれぞれ位置づけられる。4290の台部には円形の孔が3つ開けられている。4293は長頸瓶、4294は壺、4295・4296は鉢で、いずれもV-2期に属し、4293は8c後半、4294・4295は8c、4296は8c末~9c前葉にそれぞれ位置づけられる。4297~4323は灰釉陶器碗、4324は段皿、4325~4330は碗もしくは皿、4331~4335は皿、4337は耳皿、4340は小瓶である。いずれもV-3期に属する。4311は底部外面に墨書がある。釈文は「垣田」である。おそらく「柿田」に通じ地名であると考えられる。4303の内面には漆が、4307の外面には墨が付着している。4336は白磁I類の皿で、VI期に属すると思われる。4338・4339・4347は中世土師器I類の皿で、いずれもVI期に属すると思われる。4341は須恵質の壺で、V~VI期に属すると思われるがよくわからない。4342~4345は灰釉系陶器碗で、4342・4343・4345は谷迫間2号窯式、4344は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でいずれもVI-1期に属する。4346・4348~4350は皿で、4348は4型式、4346は浅間窯下1号~窯洞1号窯式でVI-1期に、4349・4350は白土原1号窯式でVI-2期にそれぞれ属する。4351は小壺で、VI期に属すると思われる。

NR82 (図版144) 破片数97点中1点図示した(4352)。4352は土師器甕D4で、III-2~IV-1期に属すると思われる。

NR83 (図版144) 破片数71点中3点図示した(4353~4355)。4353は高杯F1、4354は手捏ねで、いずれもIII-2~IV-1期に属すると思われる。4355は須恵器杯蓋Aで、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR86 (図版144~145) 破片数675点中28点図示した(4356~4383)。4366は弥生土器、4383は須恵器、以外は土師器である。4356~4358・4362は甕D2、4359は甕D4、4360は甕D3で、4358はII-4期に、4356・4357・4360・4362はIII期に、4359はIV期に属すると思われる。4363は甕C2もしくはC3で、III期に属すると思われる。4361は甕F2、4364は甕F3でII-4期に、4365は甕F4でIII-1期にそれぞれ属すると判断される。4366は細頸壺の頸部で、II-2期に属すると判断される。4367は壺

C 2 でⅡ-4 期に、4368は壺E 2 でⅢ-2 ~Ⅳ-1 期に、4369は壺H 1、4370は壺H 2 でⅢ-1 期にそれぞれ属すると思われる。4371は鉢F でⅢ-Ⅳ-2 期、4372は手捏ねでⅣ期にそれぞれ属すると思われる。4373~4375は口縁部に欠く壺で、4373・4374がⅢ期に、4375がⅡ-4 ~Ⅳ-1 期に属すると思われる。4374は体部に円孔が開けられている。4376は小型壺A 2、4377は小型壺A で、いずれもⅢ期に属すると思われる。4378~4382は高杯F で、いずれもⅢ-2 ~Ⅳ-1 期に属すると判断される。4383は須恵器杯身で、Ⅳ-2 期に属し6 c 前半に位置づけられる。底部外面にヘラ記号がある。

NR89 (図版145) 破片数177点中4点図示した(4384~4387)。4384は甕F 4 でⅤ-1 期に、4385は甕B 3 で、Ⅳ期にそれぞれ属すると思われる。4386は壺E 2 でⅢ-1 期に、4387は高杯F の脚部でⅢ-2 ~Ⅳ-1 期にそれぞれ属すると思われる。

NR91 (図版145) 破片数3点中1点図示した(4390)。4390は土師器壺C 4 で、Ⅲ-1 期に属すると思われる。

NR97 (図版145) 破片数1点中1点図示した(4388)。4388は須恵器壺で、Ⅳ-2 ~3 期に属し6 c 後半~7 c 前半に位置づけられる。

NR99 (図版145) 破片数7点中1点図示した(4391)。4391は弥生土器壺で、Ⅱ-1 期に属すると判断される。頸部に斜格子状に刻みを入れた突帯がめぐる。

NR104 (図版145・146) 破片数1,254点中47点図示した(4389・4392~4437)。4395は縄文土器、4425~4432・4435~4437は須恵器、それ以外は土師器である。4389は甕D 2 で、Ⅳ-3 ~Ⅴ-1 期に属すると思われる。4392・4393は鉢F でⅣ期に、4394・4397は鉢I 3 でⅣ期に、4396は鉢D でⅢ-Ⅳ-2 期にそれぞれ属すると思われる。4394の底部外面には木葉痕が残る。4395は縄文土器深鉢で、中期に属し船元・里木式第4様式併行のものと思われる。4398~4401・4404は甕D 4 でⅣ期に、4402・4403は甕D 2 でⅢ-Ⅳ-2 期に、4405・4406は甕D 3 でⅢ-Ⅳ-2 期にそれぞれ属すると思われる。4407・4408は甕F 3 でⅡ-4 期に属すると思われる。4409は甕底部台付3、4410は平底3でいずれもⅢ期に属すると思われる。4411は壺F 4、4412・4413は壺E、4415は分類にない壺で、いずれもⅢ~Ⅳ-2 期に属すると思われる。4414は壺H 1 でⅢ-1 期に属すると判断される。4416は器台C でⅡ-4 期に属すると判断される。4417~4424は高杯F で、Ⅲ-2 ~Ⅳ-1 期に属すると思われる。4425~4427は須恵器杯蓋A で、4425・4426はⅣ-1 期に属し5 c 末に、4427はⅣ-2 期に属し6 c 末にそれぞれ位置づけられる。4428~4431は杯身で、4428・4429はⅣ-1 期に属し5 c 末に、4430・4431はⅣ-2 期に属し6 c 前半にそれぞれ位置づけられる。4432は長頸瓶蓋でⅣ-3 期に属し7 c 前半に、4435は高杯の脚部でⅣ-2 期に属し6 c 前半に、4436は甕でⅣ-3 ~Ⅴ-1 期に属し7 c に、4437は壺で、Ⅳ-2 期に属し6 c 後半にそれぞれ位置づけられる。4433・4434は土師器手捏ねで、Ⅳ期に属すると思われる。

NR106 (図版147) 破片数2122点中22点図示した(4438~4459)。4438は土師器甕D 2 でⅡ-4 期に、4439は甕D 3、4440~4442は甕D 4、4443・4456は甕底部平底2でいずれもⅣ期に属すると思われる。4444は須恵器杯蓋A、4445は杯身でいずれもⅣ-2 期に属し6 c 初めに位置づけられる。4446は倒形の有台杯でⅤ-1 ~2 期に属し7 c 後~8 c 初に、4447は杯蓋C でⅤ-2 期に属し8 c にそれぞれ位置づけられる。4447の天井部外面には墨書がある。釈文は「×□女」である。4448は無蓋高杯、4449は提瓶、4450・4453は鉢、4451は壺、4452は器種不明、4454は甕、4455は平底である。4454はⅣ-1 期

に属し5c末に、4451はIV-2期に属し6cに、4448・4450はIV-3期に属し7c前半に、4449・4452・4455はIV-3～V-1期に属し7cに、4453はV-1期に属し7c後半にそれぞれ位置づけられる。4457は他に例にない土師器把手付小型鉢でIV期に属すると思われる。4458・4459は灰釉系陶器である。4458は碗で、大谷洞14号窯式VII-1期に、4459は皿で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期にそれぞれ属する。

NR107 (図版148) 破片数912点中21点図示した(4470～4490)。4470～4483は土師器、4484～4487・4490は須恵器、4488・4489は灰釉系陶器碗である。4470・4471・4474は甕D4でIV期に、4472は甕D3でIII～IV-2期に、4473は甕底部平底3でIII～IV-2期にそれぞれ属すると思われる。4475は甕F4でIII-1期に属すると判断される。4476は甕B3でIV期に属すると思われる。4477は鉢I1でIII～IV-2期に、4478は壺G1でIII-1期に、4479は高杯F4でIII-2～IV-1期に、4480は高杯Dの脚部と考えられII-4期に、4481～4483は高杯Fの脚部でIII-2～IV-1期にそれぞれ属すると思われる。4484は杯身、4485は無蓋高杯、4486は無台杯、4487は鉢である。4485・4488はIV-1期に属し5c後半に、4484はIV-2～3期に属し6c末～7c前に、4486はV-1期に属し7c後半にそれぞれ位置づけられる。4488・4489は灰釉系陶器碗で、4488が浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に、4489が大谷洞14号窯式VII-1期にそれぞれ属する。4490は須恵器壺でIV-2期に属し6cに位置づけられる。

NR108 (図版147) 破片数591点中7点図示した(4463～4469)。4463～4466は灰釉系陶器碗で、4465が白土原1号窯式VI-2期に、4463・4466は明和1号窯式、4465は大谷洞14号窯式VII-1期にそれぞれ属する。4467は古瀬戸後期の緑釉小皿でVII-2期に属する。4468は甕IでII-4期に、4469は甕底部台付1でIII-1期にそれぞれ属すると思われる。

NR109 (図版147) 破片数1257点中1点図示した(4460)。4460は灰釉系陶器碗で、浅間窯下1号～窯洞1号窯式VI-1期に属する。

NR110 (図版147) 破片数332点中2点図示した(4461・4462)。4461は灰釉系陶器碗、4462は皿で、いずれも白土原1号窯式VI-2期に属する。4461の内面には付着物がある。

NR112 (図版149・150) 破片数2626点中56点図示した(4496～4551)。4496～4542は土師器、4543～4548は須恵器、4549は灰釉系陶器、4550・4551は灰釉陶器である。4496は土師器甕B3、4497・4498・4503は甕D4、4499～4501は甕D2、4502は甕D3、4504は甕Jで、4496・4499・4500はIII～IV-2期、それ以外はIV期に属すると思われる。4505・4506は甕F3、4507は甕Fの底部で、いずれもII-4期に属すると判断される。4508・4509・4511は鉢F、4510は鉢DでいずれもIII～IV-2期に属すると思われる。4512は瓶で、IV期に属すると思われる。4513は壺C3でIV期に、4514は壺C4で、4515は壺C5でIV期にIII～IV-2期にそれぞれ属すると思われる。4516は小型の壺H3でIII期に、4517は壺の体部片、4518は壺E2、4519は壺E、4520は壺C5、4521は壺底部平底1で、III～IV-2期にそれぞれ属すると思われる。4522・4524は小型壺B、4523は小型壺Aで、いずれもIII期に属すると思われる。4525～4527は手捏ねで、IV期に属すると思われる。4528は高杯F1、4529・4530は高杯FでIII-2～IV-1期に、4531は高杯G2でIV-1～2期に、4532は高杯DでII-4期にそれぞれ属すると思われる。4533～4542は高杯の脚部で、4534・4535はIII-1期に、以外はIII-2～IV-1期に属すると判断される。4543・4544は須恵器杯蓋A、4545・4546は杯身、4547は無蓋高杯、4548は壺である。4548はIV-1期に属し5c後半に、4543・4545は6c初、4546は6c前に位置づけられIV-2期に、4544・4547は

IV-3期に属し7c前半に位置づけられる。4549は灰釉系陶器碗の口縁部片で、VI-1期に属すると思われる。4550は灰釉陶器碗、4551は壺で、いずれもV-3期に属し、4550は9c中～後半に位置づけられる。

NR117 (図版148) 破片数157点中5点図示した(4491~4495)。4491は土師器甕底部台付1、4492は鉢F、4493は壺C1、4494は高杯DでII-4期に属すると思われる。4495は須恵器無台杯で、V-2期に属し8c前半に位置づけられる。底部外面に墨書がある。女をもとにした組み合わせ文字のようであり、呪いに関係する可能性がある。

NR118 (図版150) 破片数386点中8点図示した(4552~4559)。4552は土師器甕D2でIII~IV-2期に、4555が甕底部台付3でIII-1期にそれぞれ属すると思われる。4553は壺の底部で、III期に属すると思われる。4554は弥生土器高杯A~Cの脚部でII-3期に、4556は器台A3、4557は高杯Dの脚部でいずれもII-4期に属すると判断される。4559は須恵器杯身でIV-2期に属し6c後葉に、4558は高杯でIV-2~3期に属し6c末~7c前半にそれぞれ位置づけられる。

NR119 (図版150・151) 破片数299点中20点図示した(4560~4579)。4560は縄文土器?、4561・4575は須恵器、4562は灰釉陶器、4563は灰釉系陶器、4564~4574・4576~4579は土師器である。4560は口縁部に突帯で眼鏡状の文様を施す鉢と推測されるもので、縄文土器と思われるがよくわからない。4561は須恵器杯身で、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。4562は灰釉陶器碗で、V-3期に属し12c前半に位置づけられる。4563は灰釉系陶器碗で、白土原1号窯式VI-2期に属する。底部外面に墨書があり、釈文は「十」である。4564は土師器甕D1でIII-1期に属すると思われる。4565・4568は甕D2、4566は甕Fの底部、4567は甕底部台付1、4572は甕F1で、4565がIII-1期になる以外はII-4期に属すると思われる。4569は壺E2、4570は壺E、4571は壺E1、4573・4576は壺F1で、4573がII-4期に、4576がII-4~III-1期にそれぞれ属すると判断される。4574は類例のない土師器の底部で、胎土や調整からII-4期に属すると思われるがよくわからない。4577は高杯D1でII-4期に、4578・4579は高杯EでIII-1期にそれぞれ属すると思われる。4575は須恵器壺で、IV-2期に属し6cに位置づけられる。

NR120 (図版151・152) 破片数50点中9点図示した(4580~4588)。4580は土師器甕B3、4581は甕D2でいずれもIII期に属すると思われる。4582は小型壺B1でIII-1期に属すると判断される。4584は甕底部台付4でIII期に属すると思われる。4583は壺EでII-4期に属すると思われる。4585は高杯EでIII-1期に、4587は高杯F1、4588は高杯G3でIII-2~IV-1期に、それぞれ属すると判断される。4586は手焙り形土器と考えられII-4期に属すると思われる。

NR121 (図版152・153) 破片数1174点中52点図示した(4589~4640)。4602・4603・4608・4630は弥生土器、4640は須恵器、以外は土師器である。4589・4590は甕C2もしくはC3で、III期に属すると思われる。4591~4594は甕D2でIII期に属すると思われる。4595~4598は甕F3でII-4期に属すると思われる。4599は甕GでIII-1期に、4600・4601は甕底部台付1でIII期にそれぞれ属すると思われる。4602は壺B1で、II-2期に属すると思われる。4603は鉢B2でII-3期に、4604は鉢C、4605は鉢F、4606は鉢I3でIII期にそれぞれ属すると思われる。4607は壺H4でIII期に、4608は壺C1、4609は壺D3でII-4期にそれぞれ属すると思われる。4610・4611は壺E、4612~4614は壺E2で、いずれもIII期に属すると思われる。4615は壺F4でIII-1期に、4616は壺F1でII-4期にそれぞれ

属すると思われる。4617~4619は小型壺A 2、4620~4622は小型壺B 2、4623・4624は小型壺Bで、4618はII-4~III-1期に、4620・4621・4623・4624はIII-1期に、以外はIII期~IV期に属すると思われる。4625・4626は高杯E 3でIII期に、4627・4628は高杯F 1、4629は高杯FでIII-2~IV-1期に、それぞれ属すると判断される。4630~4638は高杯の脚部で、4630がII-3期に、4631・4632がIII-1期に、4633~4638はIII-2~IV-1期に属すると判断される。4639は手採ねでIV期に属すると思われる。4640は須恵器杯蓋Aで、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。

NR122 (図版154~156) 破片数1874点中69点図示した(4641~4709)。4641~4707は土師器、4708・4709は須恵器である。土師器は4641~4644がII-4~III-1期に属する以外は、II-4期に属するものと思われる。4641~4644は土師器甕D 2、4645はD 5、4646はD 3である。4646の底部は台付甕とするには台が低く興味深い。4647・4648は甕F 1、4649~4651は甕F 2、4652~4654は甕F 3である。4655は4646に似た甕底部平底2である。4656~4660は甕底部台付1である。4662は口縁部の欠く甕と思われるが、壺の可能性もある。4661・4663・4664は鉢D、4665は鉢I 1である。4666は壺C 1、4668は壺C 2、4667・4671~4673は壺C 1もしくはC 2、4669は壺C 2のミニチュアである。4668・4673は赤色塗彩されている。4670は壺C 4、4674・4675は壺D 1、4676・4677は壺D 2で、4677には赤色塗彩の痕跡が認められる。4678は口縁部が直立気味ではあるが壺C 4としてよいと思う。4679は分類にない壺である。4680・4681は壺F 1で、いずれも赤色塗彩されている。4682は壺F 3である。4683・4685は壺Eと思われる。4684は壺の底部である。4686は外面の調整が珍しい。壺C 4になると思われる。4687・4688は小型壺A 1、4689は小型壺A 4である。4690・4691は小型壺であるが、分類にはない。4692は器台Cである。4693・4694は高杯D 1、4695は高杯D 4、4696・4698~4707は高杯Dである。4697は器台Dである。4708は須恵器杯蓋A、4709は有蓋高杯で、いずれもIV-1期に属し5c末に位置づけられる。

SW19 (図版156) 破片数127点中7点図示した(4710~4716)。4710は甕D 5、4711は高杯D 4、4712は小型壺A 2 II-4~III-1期に、4713は口縁部が欠けているが壺Dと考えられ、4714は高杯Dの脚部、4716は甕DでいずれもII-4期に属すると思われる。4716の体部中央付近には穿孔がある。4715は須恵器杯蓋Aで、IV-1期に属し5c末に位置づけられる。

なお実測図、観察表がなく写真のみの掲載であるが、5081~5084に現代陶磁器を示した。いずれも占領時下、おもに輸出向けに作られたもので、5081は人形、5082は皿、5083・5084は陶製のシンクである。5081と5082には「MADE IN OCCUPIED JAPAN」とある。

第11項 墨書土器・ヘラ書き土器 (図版157~166)

出土文字資料は、墨書土器・ヘラ書き土器・刻印土器・木簡がある。このうち木簡は第6章第2節で、土器については922点中、遺構出土のうち175点を本節第10項までで述べた。本稿では残り747点中図化した364点について述べる。なお出土文字資料については極力図化し掲載することをつとめたが、土器が割れて残画のみの場合や薄くなりよくわからないものは図化しなかった。図化しなかったものの中にも最終的に釈文が立てられたものもあり、それらを掲載できなかったことには断腸の思いが残る。土器関係の文字資料については、そのような未掲載も掲載分とあわせて第5分冊表322~344に掲載した。

4717~4739は墨書須恵器、4740・4741はヘラ書き、4742は刻印土器である。4717~4718は杯蓋Cの天井部内面に墨書がある。4717は土器が割れた全体がわからないが、残画から「上」の可能性はあるか。4720はこれも割れているため全体がわからないが、二文字確認でき、1字目は「廣」と読んだ。4722は「福□」である。4718は「大方」である。第5項で述べたように、「太万」であったものが「太」の点が下の「万」の方に下がり、「大方」のようになってしまった可能性がある。4719も「大方」で、無台杯底部外面に記される。4721は無台杯の底部外面に「廣□」とある。4723・4724・4728は有台杯底部外面に、4726は無台杯底部外面に「田寸」とある。「寸」は村の省略字の可能性が高い。「田寸」については第8章第7節で述べる。4725は有台杯体部外面に「田□」とあるが、2字目が中程で割れている。2字目の残画は「村」の可能性はある。4727は杯蓋Cの天井部内面に、土器が割れているため全体はわからないが、「寸」と読める一文字がある。割れているため確定できないが、他に「寸」字がないことから「田寸」の可能性はある。4729は有台杯底部外面の台の付け根部分に一文字あるが、釈読できない。4730は有台盤底部外面に一文字分の残画がある。4731は無台杯底部外面に一文字あるが釈読できない。4732は無台盤底部外面に墨書があるが、土器が割れており全体がわからない。残画から「田寸」の可能性が考えられる。4733~4735は無台杯底部外面に墨書があるが、いずれも釈読できない。4736は無台杯底部外面に「+」とある。4737は杯蓋C天井部内面に「□罌□」とある。1字目はおそらく「天」で、北斗七星を指す「天罌」であったと思われる。3字目は文字に見えず、上記二文字が「天罌」であるなら符籙の可能性はあるのではないか。4738は無台盤底部外面に一文字あるが、釈読できない。4739は無台杯底部外面に「井」とある。4749は杯蓋と思われる破片で、一文字ヘラ書きされる。土器が割れているため全体がわからないが「寸」にもみえる。4741は無台杯と思われるが、底部外面に「大」とヘラ書きがある。4742は無台杯底部内面に「美濃国」刻印がある。刻印の分類は、A-II-2と思われる。

4743~4747は灰釉陶器で、いずれも底部外面に墨書がある。4743・4744は「富」、4745は「万得」である。4746は「□田」で、1字目は土器が割れているためよくわからない。4747は□で、「珠」と読めるか。文字はもう一字上にあつた可能性もある。

4743~5077は墨書灰釉系陶器、5079・5090はヘラ書き灰釉系陶器である。4748~4760は碗、4759~4774は皿で、いずれも底部外面に「上」と記される。文字は底部の中央付近に書かれている例が多いが、4748・4762・4770のように、文字の上下方向でいうと上側に寄せて記された例もある。4775~4785は碗、4786・4787は皿で、いずれも底部外面に「大」と記される。4778は内面に漆が付着している。4788・4789は碗で、いずれも底部外面に「天」と記される。文字は、文字の上下方向でいうと上側に寄せて

記されている。4790は碗で、底部外面に「岩」とある。4791は碗で、底部外面に一文字ある。画数があっていないが、全体の雰囲気から「岩」であると思われる。4792~4794は碗で、いずれも底部外面に「石」とある。4795・4796・4798は碗、4797は皿で、いずれも土器が割れて文字の全体は見えないが、底部外面に「平」とある。4799は碗底部外面に「下」とある。4800は碗底部外面に一文字あり、「小」と読めると思われる。4801・4802は皿底部外面に文字があるが割れて全体が見えない。残画から「田」ではないかと推測される。4803は碗底部外面に一文字あり、割れて全体が見えないが、4804の例から「品」ではないかと推測される。4804は碗底部外面に「品」とある。4805は碗底部外面に一文字あり、「七」と読めると思われる。4806は碗底部外面、4807は皿底部外面に、それぞれ一文字あり、字形から「人」ではないかと思われる。4808は無高台碗底部外面に一文字あるが、釈読できない。4809は皿底部外面に一文字あり、「く」と思われる。4810は碗底部外面に「わ」とある。4811・4812は皿底部外面に一文字あり、割れて全体が見えないが、4811は「つ」、4812は「わ」と思われる。4813・4814は碗、4819は皿で、いずれも底部外面に「大□」である。2字目は4813・4819を見ると「カ」にみえる。「カ」であるならば、4820も碗底部外面におなじ「大□」を記したと思われる。4815~4822は皿底部外面に、同じ文字を記している。二文字で1字目は「や」にみえるが一画足りなく、別の字と思われる。1字目は「家」の崩しに似ている。4818は碗底部外面に、「岩□」とある。2字目は土器が割れているため、判読できない。4823は碗底部外面に、SD229から出土した3342~3344と同一文字が記されているが、判読できない。4824は皿底部外面に「□か」とある。1字目は花押状にも見えるが、呪いの記号の可能性もある。4825は碗底部外面に、一文字一文字はよくわからないが複数数字記されている。4826・4827・4830・4831は碗、4828・4829は皿で、いずれも底部外面に「上□(花押状)」と記されている。その意味については第8章第7節に述べた。4832~4827は碗、4848~4858は皿で、いずれも底部外面に「いわ」とある。6839は「わ」が「わ」として意識して記されていないようにみえる。4842は「わ」字の下側が消えてしまっている。4843は体部外面にも文字があるが、土器が割れているため判読できない。4859~4861は碗、4862・4863は皿で、いずれも底部外面に「ミろく」とある。4864~4872は碗、4873~4885は皿で、底部外面に複数数字記されているが、いずれも判読できない。その中で、4874の1字目が「え」、4876の1字目が「か」にみえる。4886は皿で、底部外面に「鳴|」とある。4887は皿底部外面に、横書きで「□師」とあり、1字目は割れているため判読できない。横書きは珍しい。4888~4905は碗、4906~4915は皿で、いずれも底部外面に「□(花押状)」とある。4916~4919は碗、4920~4922は皿で、いずれも底部外面に「の」の書き出しが円弧部分から上に突き出した状態に書かれている。略押状の一種と思われる。4923・4924は碗、4925~4930は皿で、いずれも底部外面に「の」とある。「の」はひらがなの可能性もあるが、略押状の一種と考えられる。4931~4933・4937は碗、4934~4936・4938~4940は皿で、書き出し書き止めはまちまちであるが基本的には「○」と記している。略押状の一種と思われる。4941~4045は碗、4946~4948は皿で、いずれも底部外面に結び状の記号が記され、略押状の一種と思われる。4949~4985はいずれも底部外面に記号状もしくは略押状の一文字が記されている。4952と4953、4975と4980のようによく似たものを記す例もある。4986~4988・4990・4994・4995は碗、4987・4989は皿で、いずれも底部外面に「一」もしくは「|」と記す。4993は碗、4991・4992・4996・4997は皿で、いずれも底部外面に「=」と記す。「=」は「||」の可能性もあるが、判断はできない。4999~5013は碗、5014~5035は皿で、いずれも底部外面に「+」と記す。

「十」は「×」の可能性もある。5036・5037・5041は碗、5038～5040は皿で、いずれも底部外面「卍」と記す。5042～5044は碗で、いずれも底部外面に「卍」と記す。次にみる「卍」と同様、九字「卍」の省略形と考えられ、魔よけの記号と思われる(平川 2000)。5045・5046・5052は碗で、底部外面に「卍」が記されている。5047～5049は皿で、いずれも底部外面に六曜文が記されている。なお5048・5049は割れているが残画の配置からそれと推定した。5050・5051・5053～5055・5057は、いずれも呪いに関わるものと推定される。このうち、5054の底部内面に書かれた複数の「口」状を線で結ぶ図柄は、道教あるいは陰陽道で使用される呪符にみられ(特定の星座を示す場合もある)、底部外面の記号も同様に呪符にみられるものに似ている。5056は皿で、底部外面に花の絵が描かれている。5058～5068は底部外面に墨書があるもののうち、文字とも記号とも判断のつかないもの、5071～5077は体部外面に墨書があるものである。5074は「ろ」、5072は「上」、5077は「六」と読めるが、割れて全体が不明なのが残念である。5078は中・近世陶器片で器種は不明である。墨書があるが、破片のため内容まではわからない。5079は灰釉系陶器皿で、底部内面に「夫」とへら書きがある。5080は灰釉系陶器碗で、体部外面にへら書きで文字が記されるが、割れて全体が不明である。

第2節 木製品

当遺跡出土の木製品を、第4章第5節の表9のとおり19項目に分類した。分類にあたっては、当センターの遺物データベース分類表の項目を基に若干修正しながら整理・分類していった。なお、さらに細かい分類については本文中において説明することとする。

以下、分類に基づいて出土木製品を器種毎に説明していく。

1 農具 (6001~6232)

農具には、鋏・鋤などの耕作具のほかに、農作業に付随する道具として横槌・整杵なども含めた。また、(D)における未製品は、必ずしも農具のそれとは限らないがここに措いた。

(1) 鋏 (6001~6092)

鋏は、身と柄から構成される。柄は木製だが、身はその材質から3種類に大別される。すなわち、刃先まで木でできた木鋏、木製の台(風呂)に鉄の刃先を装着した風呂鋏、すべて鉄でできた金鋏である。当遺跡からはこのうち木鋏と風呂鋏が出土し、ほとんどが木鋏であった。以下、木鋏と風呂鋏を一括して「鋏」として扱い、必要に応じて「風呂鋏」の名称を使用することとする。

鋏は、身に柄孔を開けて真っ直ぐな棒状の柄を差し込む直柄鋏(図30)と、身の上部に伸びた着柄軸に頭部が屈曲した柄を緊縛する曲柄鋏(図35)に大別される。

① 直柄鋏 (6001~6030)

直柄鋏は、刃先がフォーク状に分かれた又鋏と、通常の刃部を有する平鋏に分けられるが、当遺跡では直柄又鋏は出土していない。また、平鋏は身の幅により広鋏と狭鋏に分けられるが、ここでは一括して「平鋏」として扱うこととする。

平面長方形を呈し木目が横方向に走る横鋏はここに含めた。ただし、横鋏の一種ともいえる「えぶり」については、別項として後に述べることとする。また、未製品もいくつか出土しているが、ここで述べる未製品は、ほぼ鋏の形態が完成しており明らかにそれとわかるものである。

i 柄孔隆起

直柄鋏は、先述のとおり身に柄孔を開けて柄と接合するわけであるが、身に開けられた柄孔の周囲は通常の場合厚く作られる。これを柄孔隆起と呼ぶが、その隆起の仕方によって一般に次のように分類されている。

A型隆起 身と隆起部の境が明瞭な段をなすもの

B型隆起 身と隆起部の境が不明瞭で、徐々に厚みを増して柄孔に至るもの

当遺跡ではこのうちA型隆起のみが確認できた。これを平面形の特徴に従うと、やや細くなるが以下のように分類できる(図31)。

I類 円形を呈するもの

II類 円の下部が下に伸びた形態を呈するもの

IIIa類 長方形を基本とするが、上部が丸みを帯びるもの

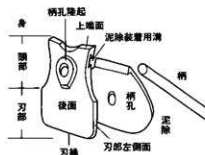


図30 直柄鋏の部分名称

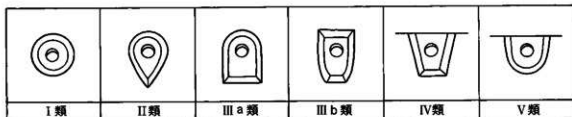


図31 柄孔隆起の分類

III b類 長方形を基本とするが、下部が丸みを帯びたり、すばまって台形状を呈するもの

IV類 逆台形状を呈するもの（横線にみられる）

V類 半円形を呈するもの（横線にみられる）

このうちIII類（III a・III b）が多いのは当遺跡の特徴の一つである。

ii 直柄平鍬（6001～6016）

直柄鍬（横線・未製品も含む）は、図示した30点のうちで全体の形状がはっきりするものは12点と少ないが、平面形の特徴を捉え9種類に細別した。そのうち平鍬は6種類に分類した（図32）。

A類 平面形が全体的に台形を呈し、頭部の左右が若干くびれるもの（6001・6002）

B類 A類の頭部左右のくびれがはっきりした形態を呈するもの。身の最大幅は刃縁よりやや上にある（6003・6004）

C類 平面形はB類に似るが、身の最大幅がほぼ刃縁の位置にあるもの。頭部上端面が波状に挟られる場合がある（6005～6009）

D類 ナスビ形の風呂鍬である。頭部は平面形で台形状であり、左右は緩やかに外反する。筈部の左右は、ほぼ平行する場合と内側にすばまる場合とがある（6010～6013）

E類 断面台形状の突帯が身の中央を横断するもの。平面形は全体的に台形を呈し、頭部の左右が若干くびれる（6014・6015）

F類 E類に似るが、柄孔隆起をもつもの（6016）

A～C類は、頭部上端前面側に泥除装着用の蟻溝を有する。

A類は、『木器集成図録』（奈良国立文化財研究所1993）の広鍬V式にあたる。6001はほぼ完存した状態で出土した。柄孔隆起はIII a類である。6002は、右側縁が大きく欠失しているものの全体の形状がよくわかり、頭部左右のくびれと刃部の境がはっきりしている。柄孔隆起はI類である。

B類は、『木器集成図録』の広鍬VII式にあたる。6004は、ほぼ完存した状態で出土した。柄孔隆起はIII b類である。柄孔には柄の頭部がはまったまま残存していた。6003は、柄孔にほぼ完存する直柄がはまったまま出土した。鍬身は泥除装着用の蟻溝が半分割がれ落ちているなど遺存状態は良くないが、頭部左右のくびれからB類とした。柄孔隆起はII類である。柄は直伸性が高く、基部に向かうにつれて細くなっている。基部は残存していない。

C類に属する6006は、刃部の一部が欠失しているものの刃縁まで残存している。柄孔隆起はIII a類である。6007は、柄孔隆起が完全な直方体で柄孔も開けられていないことから、C類の未製品と判断した。刃縁は後面側を斜めに削り落として刃先としている。6005・6009はとりえずC類としたが、残存率が低く柄孔隆起が確認できないなどの疑問点も残る。



図32 直柄平鋏の分類

D類は、U字形の刃先を装着する風呂鋏である。刃部は笠部より幅を減じ、刃縁は表裏より斜めに削り出す。柄孔は長方形で、柄孔隆起はもたない。6010は、ほぼ完全な状態で出土した。前面の柄孔周囲には、柄の頭部と思われる圧痕が残る。おそらく、長野県生簀本誓寺遺跡の出土例（『木器集成図録』より）にあるような柄の頭部を納差するタイプで

あると思われる。6011・6012は、試掘・確認調査の際に同一の試掘坑から出土した。この試掘坑は、6010の出土した地点と同一またはすぐ近くであるため、この3点には何らかの関係があるものと推定される。6013は一部しか残存していないが、かろうじて残っている柄孔の形態からD類とした。

E類は、欠損状態での出土であるために全体の形状がはっきりしていないことをまず断っておく。それにもかかわらず一つのカテゴリとして取り上げたのは、身を横断する突帯の存在が数少ない例として挙げられることにある。6014は、比較的遺存状態が良好である。頭部から刃部へ移行する辺りに横断する突帯が見られ、その縦方向の断面はほぼ台形状である。刃縁は一部原形を留めているが、頭部に比べて刃部が短い点が気にかかる。使用により摩滅した結果なのか、本来の形状なのかは定かでない。今後より多くの類例を待つこととする。なお、頭部上端には軸部が付いていたような痕跡も見られることから、後に述べる曲柄鋏の可能性もあることを付け加えておく。

F類は、未製品1点のみの確認である。6016は、頭部に平面五角形の大きな柄孔隆起（柄孔はまだ穿たれていない）があり、そのすぐ下で身を横断する突帯につながっている。突帯の上下方向の断面はほぼ台形状であるが、刃縁側の境はやや不明瞭である。同様の形態を示す直柄鋏が、千葉県国府岡遺跡群（菅谷通保他1993）、奈良県平城宮下層（佐藤興治・町田章他1981）で出土している。

iii 横鋏 (6017～6026)

横鋏は3種類に分類した（図33）。

A類 平面形がほぼ正方形を呈するもの。柄孔は長方形を呈し、柄孔隆起はもたない（6017～6023）

B類 平面形はA類とほぼ同じで、柄孔隆起をもつもの（6024・6025）

C類 平面形がほぼ長方形を呈するもの。柄孔隆起をもつ（6026）

A類は、頭部上端前面側に泥除装着用の突帯（いわゆる「ゲタ」）を有する。6017は、柄孔に柄の頭部がはまったまま、水制遺構の構成材として使用されていた。柄は一部しか残存していないが断面方

形であり、抜け落ち防止のための楔が柄と身の間に打ち込まれていた。柄孔内面に見られるへこみから、楔が柄の左右に打ち込まれていた可能性も考えられる。また、使用中抜け

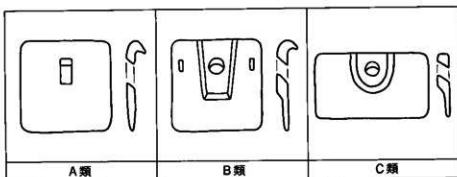


図33 横截の分類

てしまったためか、柄の頭部にさらに小さな楔が打ち込まれていた。「ゲタ」は剥がれてしまったのか痕跡を留めるのみである。6018は、「ゲタ」がきれいに遺存しており大きく前面側に張り出している。柄孔上部の周囲には、6017と同様に楔が打ち込まれていたらしく圧痕が残っている。刃縁は前面側を斜めに削り落として刃先を作り出している。6019・6021・6022はとりあえずA類としたが、「ゲタ」と柄孔隆起の有無が定かでないため、横縁に装着される泥除の可能性もある。6023はA類の未製品であると思われる。前面側の頭部上面には「ゲタ」が部分的に遺存している。泥除とするには身が厚いためここに措いたが、決め手に欠けることを付け加えておく。

B類に属する6025は、「ゲタ」とその周囲の遺存状態が悪いが、その他は比較的良好に遺存していた。柄孔隆起はIV類であるが、身から隆起への移行は緩やかである。柄孔の左右側縁部には、泥除を固定するための緊縛孔が穿たれており、「木器集成図録」の泥除装着法のⅡ式にあたる。6024は、柄孔の中心付近で横方向に割れており、柄孔隆起の形態は定かでない。裏面には「ゲタ」が残存し、材も農具によく使用される広葉樹であるが、柄孔隆起から横方向に小さな突帯が付いていること、「ゲタ」が表の面に対して90°に作り出されあまりにも大きいことなどから、別製品の可能性もある。

C類は、未製品1点のみの確認である。6026は、横長の長方形板材の上端ほぼ中央に接するように柄孔隆起が作り出されている。柄孔はまだ穿たれていない。

iv その他 (6027~6030)

分類には含まれなかったものについてここで少し触れておく。6030は、その平面形から直柄平縁の未製品と思われる。しかし、柄孔隆起にあたる部分は無く、全面にわたって切り傷も多いため、製作途中で刃などに転用された可能性も考えられる。

② 曲柄鋏 (6031~6078)

曲柄鋏に装着される曲柄は、頭部が屈曲して鋏身の刃縁方向へ伸びる膝柄と、頭部が鋏身の刃部と

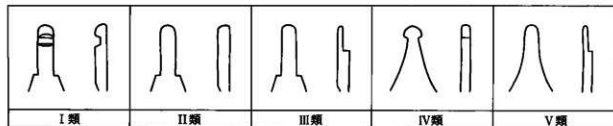


図34 軸部の分類

逆方向に反り返った反柄とがある。その形態から、曲柄鋏を膝柄鋏と反柄鋏とに分類する方法があるが、ここでは一括して「曲柄鋏」として扱うこととする。

曲柄鋏は軸部の形状から、棒状の軸部をもつ棒軸形の曲柄鋏と、いわゆる「ナスビ形鋏」と呼ばれるものに分類でき、それぞれに平鋏と又鋏がある。

i 軸部の形態

軸部は、曲柄と鋏身を装着する機能をもつ。通常は軸部と刃部全体を含めて形態を分類すべきであろうが、当遺跡では軸頭部が欠失したものが出土したり、逆に軸部のみの出土であったりすることから、ここでは軸部だけに着目して分類することとする（図34）。

I類 後面側を溝状に削ったもの

II類 軸頭をやや丸くするか特に何も作り出さないもの

III類 軸部の前面側を削って段を作るもの

IV類 軸頭部を有頭状に仕上げるもの

V類 ナスビ形の鋏で、軸部の前面側を削って段を作るもの

I類は、溝を断面V字状に削るものとやや幅広に削るものがある。II類はI・III類に仕上げる前のものとも捉えられ、未製品の可能性もある。

ii 棒軸形曲柄鋏（6031～6066）

棒軸形曲柄鋏は、平鋏・又鋏ともに出土した。又鋏は、歯の数から二又・三又に分けられるが、ここでは分類しない。

A類 肩部を水平に作り、刃部の最大幅が中程か下寄りであるもの。軸部と刃部の境は明瞭である（6031～6036）

B類 肩部が水平に広がった後、「ハ」の字状に開くもの。刃部両側はほぼ平行で、軸部と刃部の境は明瞭である（6037～6045）

C類 B類に似るが、「ハ」の字状に開ききった辺りで身を横断する突帯が付くもの（6046・6047）

D類 又鋏である。軸部と刃部の境が明瞭であり、肩を水平に作り出すもの。刃部は最大幅が中程か下寄りである（6048～6054）

E類 又鋏である。軸部が「ハ」の字状に開きながら刃部に移行するもの（6055）

A類は、ほぼ完全な形で出土したものは無い。したがって刃縁部の形状は不明である。6031・6035は、刃部の後面側を肩から刃縁にかけて薄く削り込んでおり、軸部はI類である。当遺跡の曲柄平鋏は、一般的にこのような特徴を持つものが多い。6036は刃部のみの出土である。軸部のすぐ下は断面三角形に近く、刃部の左右側面も薄く削り出されている。刃部左側面の下方は薄く抉られているが、どのように刃縁に至るのかは不明である。

B類は、肩部が2段あると考えてもよい。6037は、細かい破片に分かれていたが造作は丁寧である。

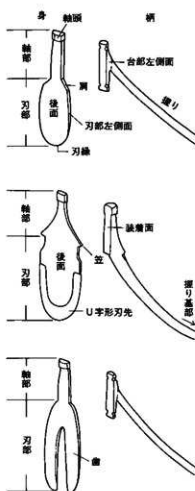


図35 曲柄鋏の部分名称

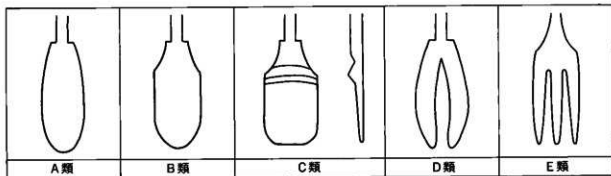


図36 棒軸形曲柄鍬の分類

6038は、想像を逞しくするならば側縁の形状から風呂鍬の一部とも考えられる。6040は、ほぼ全体形を確認できる。「ハ」の字状に開く肩はかなり長く、刃部の約半分に至る。6041はとりあえずB類に措いたが、以下の点で他の製品と若干雰囲気異なる。

ア：軸部の断面形がどちらかというところと円に近いため、曲柄と緊縛する際には不利である。

イ：「ハ」の字状に開いた肩付近の断面形が半円形に近く、木取りが一般的な鍬類とは異なる。

当初、船に溜まった水を汲み出す「あかき」も想定してみたが、管見の限りでは曲柄鍬とせざるを得なかった。6042は、全面にヤリガンナによる調整痕が確認できる。軸部はII類だが、製作途中の可能性もある。6043・6044は刃部のみの出土であるが、掘り棒などの製品の可能性も考えられる。

C類に属する6047は、比較的遺存状態が良く、軸頭部にはやや浅いが緊縛溝も作られていることから曲柄鍬と推定されるが、身のほぼ中央を横断する平面三日月形の突帯は他に類例をみない。

D類は、又鍬である。6048は、右の歯が刃縁まで良好な状態で遺存していた。刃部は二叉に分かれてからほぼ平行に伸びる。これも、刃部の後面側を肩から刃縁にかけて薄く削り込んでおり、軸部はI類であるという特徴をもつ。6051は三又鍬であり、又の部分がかろうじて残存している。

E類は、1点のみの確認である。6055は、軸部が「ハ」の字状に広がりながら刃部に至り、明らかに他の棒軸形と異なる。中央の歯は尖らず平面長方形であるが、欠失の可能性が高い。軸部はナスビ形に多くみられるIV類である。

その他、歯のみの出土が何点かある。ナスビ形又鍬の可能性もあるが、とりあえずここで紹介しておく。6056は、歯の断面形が不整の五角形を呈し、とてもしっかりしている。6057は、木目を縦方向に合わせると刃縁が「ハ」の字状に広がったまま収束する。これをD類としてもよいのだが、不明な点が多いためここでは紹介するだけに留めておく。

iii ナスビ形曲柄鍬 (6067~6078)

A類 笠の下のくびれから刃縁に向かって徐々に幅を増し、刃部は最大幅が中程か下寄りであるもの (6067・6068・6071)

B類 笠の下のくびれから「ハ」の字状に外反しながら幅を増し、刃部途中で屈曲してほぼ平行に刃縁に至るもの (6069・6070・6072)

C類 又鍬である。笠の下のくびれから刃縁に向かって徐々に幅を増し、刃部最大幅が下方にあるもの (6073・6076)

D類 又鍬である。C類とほぼ同じだが、刃部の両側がほぼ平行するもの (6077・6078)

6067は一部欠失しているがA類の好例であり、軸部はIV類である。

B類は、刃縁まで確認できたものが無く、その形状は不明である。6072はV類の軸部を有する。

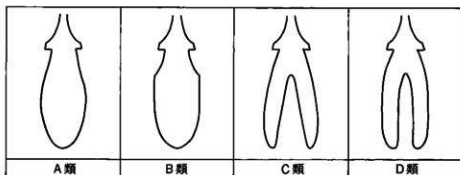


図37 ナスピ形曲柄鍬の分類

C類のうち6073は、左と中央の歯を大きく欠失しているが、全体の形状はよく見て取れる。棒軸形を思わせるほど真っ直ぐに伸びた軸部はV類である。

D類は、笠部から刃部にかけての破片資料のみであるが、6078は刃縁まで確認できた。刃縁は使用による摩耗のためか尖っていない。

③ 柄 (6079～6092)

鍬に装着される柄は、その形態から直柄と曲柄に大別され、曲柄はさらに膝柄と反柄に分けられることは先述のとおりである。この項ではその分類に従って説明していくこととする。

また、端部が欠失している棒状材のうち、横断面の形状や直伸性を考慮して鍬柄と考えてもよいものについてもここに措いた。

i 直柄 (6079・6080)

鍬身に装着された状態で出土したものについては、先述のとおりなのでここでは説明しないこととする。直柄の基部は、有頭状に作り出して先端を斜めに削り落とす種類のものが多く見られる。6079はその好例で、柄の頭部まで良く遺存している。頭部は柄状になっており、鍬身には長方形の柄孔が穿たれていたと思われる。6080は柄がほぼ完存しており、隆起部だけであったが鍬身が装着されていた。柄の基部は炭化していたが、特に形状に特殊性はみられなかった。

ii 膝柄 (6081～6085)

未製品が3点、製品が2点確認できた。6081は柄が緩やかに湾曲しており、鍬台の部分はほとんど加工されていない。6082は、装着面が平坦であり、鍬台の基部に緊縛用の溝が抉られている。6085は鍬台に対して右方向に湾曲しており、鍬台基部には加工の痕が少し見られる。

iii 反柄 (6086)

1点のみの確認である。6086は、緊縛しやすくするためか鍬台の頭部が一段低く削られている。しかし、鍬台の中央には平面長方形の孔が穿たれている。一体どのような結合方法だったのか、類例の増加を待ちたい。

その他、6087・6088・6091は、基部に6079と同様の造作が施されているため鍬柄としたが、鎌柄の可能性も否定できない。

(2) えぶり (6093～6096)

『木器集成図録』では横鍬の一種として分類しているが、泥除が着かず鋸歯状の刃部を有する独特の形態から横鍬と区別した。木目は横鍬と同様に横方向に走る。

当遺跡からは、確実にえぶりとわかるものは4点出土しているが、6094・6095は転用品である。

柄孔の数から2種類に分類した(図38)。

A類 柄孔の数が1個のもの(6094・6095)

B類 柄孔の数が2個のもの(6096)

この他に柄孔が見当たらないもの(6093)もあるが、実際に無いのかどうか不明なので、ここでは分けないこととする。

A類の柄孔の形態は、円形と長方形の2種類がある。6094は直柄鋏を転用したもので、長方形の孔が直柄鋏の時の柄孔であり、身の厚さも右の方が厚く左へいくに従って徐々に薄くなっていく。6095も転用品で、曲柄平鋏を転用したものと思われる。右が平鋏時の軸部側で身が厚く、柄孔より左は転用前の形状をよく留めている。この2点はいずれも、身が薄くなっている左の歯が欠失している。

B類は、6096の1点のみの確認である。身はどこもほぼ同じ厚さであり、歯は前面側がやや斜めに摩耗しており使用の痕跡と思われる。縦長の長方形の柄孔が2個穿たれているが、柄との装着方法は不明である。

全体形のわかる3点に共通して言えることは、①：柄孔隆起は持たないこと、②：歯の数が6本であることの2点である。

(3) 泥除 (6097~6115)

泥除とは、その名のとおり耕作時に飛び散る泥が耕作者に付着しないようにするためのものであり、その有効性については『顔戸南遺跡』にて報告されている(小野木学編2000)。

泥除は、木目が横方向に走り、極めて薄手に作られる。当遺跡で出土した泥除は次のような特徴がある。すなわち、平面形は上端が直線的な不整形で、上端後面側に鋏身と装着される突帯(鋏柄)が付き、時に柄孔の下方に長方形の小孔を有することである。6097はその好例であり、ほぼ完全な形で出土した。柄孔付近で横方向に折れたのを皮紐結合で補修している。6098も遺存状態が良いが、全面にわたってヤリガンナによる調整痕を残し、中軸線上の小孔が見当たらない。6110・6113などは、上方が欠失しているが、中軸線上に小孔が穿たれている好例である。6103は、柄孔が無いため未製品と思われる。

(4) 鋤 (6116~6124)

鋤は、鋏と同様に身の材質によって木鋤・風呂鋤・金鋤に大別できるが、ここでは、このうち木鋤を「鋤」として扱うこととする。

鋤は、身と柄を一本から作り出す一木鋤(図39)と、身と柄を別の材で作る組合せ鋤に大別される。そしてそれぞれが身の形状から平鋤と又鋤に分かれる。当遺跡では、未製品も含め一木鋤のみの出土であり、組合せ鋤は確認していない。ただし、鋤身だけが残ったようなもの(6119)については組合せ鋤の可能性は否定できないし、柄だけのもの(6122)についても同様のことが言える。また、又鋤が確認できなかったのも、刃部のみ出土を又鋤と誤認している可能性があることを加筆しておく。

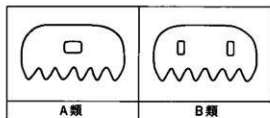


図38 えぶりの分類



図39 鋤の部分名称

鋤身を分類する際に着目するのは、身幅、肩の平面形、刃部の断面形であるが、当遺跡の例は遺存状態が良くないため、ここでは肩の平面形についてのみに着目することとする。遺存状態の良いものについて肩の平面形を分析したところ、ほとんどが「角肩」であり、次のような特徴がみられた。すなわち、柄から水平に肩が伸びた後屈曲して刃縁に至り、刃部最大幅は肩の付近にあることである。

6118は身の肩が、6119は刃縁がそれぞれ良好に遺存している。6123は、身の大部分が欠失しているものの把手の部分は良好に遺存している。把手も含めた柄長は約103cmと極めて長い。6120・6124はともに未製品であり、6120は6124より製作が一步進んだ段階であるといえる。6124は全体の形状がよくわかる例で、ミカン割りした材の形状を随所に残している。全体に手斧痕が無数に残存しており、側面には樹皮がまだ付いたままの部分もある。6122は柄の上部であり、当遺跡で出土した鋤柄の把手は6122・6123とともに、逆三角形に近い平面形の中央に孔が開き、上端の横木を太くするという特徴がある。6124にも逆三角形の把手が作り出されるものと思われる。

(5) 馬鍬 (6125)

牛馬が引く代掻き用の農具が馬鍬である。馬鍬は、土塊を掻き砕くための歯を一定の間隔で植え込んだ台木、牛馬につなぐための引棒、使用者が握る把手の付いた柄から成る。当遺跡では1個体のみ確認できた。6125は、一部欠失しているものの台木の部分がほぼ完存している。台木には歯を差し込む孔が10個穿たれている。台木の側面には4個の長方形の孔があり、外側2個のやや大きな孔に引棒を、内側2個のやや小さな孔に把手の付いた柄を差し込むものと思われる。

6125は、水制遺構(SW14)の構成部材として出土し、発掘時は中央やや右の辺りで折れ曲がった状態であった。おそらく、使用時に折れたため水制遺構を造る時に転用したのであろう。また、引棒や柄の部分は出土していないが、それらは単独では馬鍬の部材であると判断しにくい見落としていた可能性もある。

(6) 横槌 (6126~6146)

円筒状の敲打部に細い柄が付き、全体が一木で作られられた形態のものを横槌とした(図40)。大型のもので「掛矢」としたものもあり、詳しくは掛矢の項を参照されたい。

横槌を形態分類する際、身と柄の太さや長さに着目する場合が一般的であるが、ここでは肩部から身にかけての形態を重視して分類することとした(図41)。

A類 肩部がほぼ垂直に張り出すもの (6126~6129)

B類 肩部がやや斜めに落ちるもの (6130~6136)

C類 肩部が少し垂直に張り出した後、斜めに落ちるもの。斜めの部分には削った痕が良く残っている (6137~6139)

D類 柄と身の境は明瞭だが、肩部がはっきりしないもの (6140~6141)

E類 D類に似るが、柄と身の境がはっきりしないもの (6142~6147)

出土例が少ないためははっきりしないが、A類には柄の先端をグリップ状に仕上げたものが多いようである。

B類には7点が属する。6134は、表・裏面が平坦に作り出されており、そこに傷が多く見られる。刃物の背中をこの横槌で叩いたためこのような傷が多数付いたものと思われる。また、身の先端部分が「整杆の搦き部」のように丸くなっており



図40 横槌の部分名称

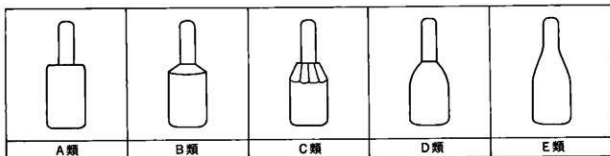


図41 横樋の分類

使用した痕跡も見られるため、整杵を転用した可能性も考えられる。

C類に属する6137は精製品である。グリップ状に作られた柄の端部にはさらに乳頭状の突起が付いている。柄と肩部には細かく調整した痕が確認できる。

D類に属する6140は、柄が欠失しているが、身の表・裏が平坦で傷が多く残ることから横樋とした。

E類は、全体的に細身のものが多い。

(7) 整杵 (6147～6161)

杵は搦くための道具であり、搦き臼とセットになる。杵は一般に整杵と横杵に大別できるが、当遺跡からは整杵のみが確認できた。

整杵は、長い棒の中央を細く削り込んで握部とし、その両側を搦き部とするものである(図42)。搦き部と握部の形態から2種類に分類した(図43)。

A類 搦き部が円柱状を呈し、搦き部と握部との境が明瞭なもの(6147～6159)

B類 搦き部が円錐状を呈し、搦き部と握部との境が不明瞭なもの(6160～6161)

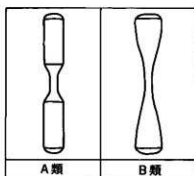


図43 整杵の分類

ほとんどの整杵がA類に属し、敲打部の形状は、平坦なもの(6147・6148など)と半球状のもの(6150・6151など)に大別できる。

B類は少ない。6160はほぼ完存しており、上・下で搦き部の大きさが異なり、敲打部の形状も大雑把にみれば、先述の平坦なものと同半球状のものに見取れる。使用状況の違いによる摩耗なのか、使用法の違いを考慮して取えて作られたものなのかは定かでない。

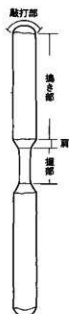


図42 整杵の部分名称

(8) 木錘 (6162～6184)

木錘は、俵や蓆などを編む際に使用する道具の一部で、刻みを入れた目盛り板とそれを支える脚とを組み合わせたもの(編台)とともに使用する。ただし、編台は当遺跡からは出土しなかった。

木錘を形態に基づいて次のように分類した(図44)。

A類 円筒形の材の中央を一周するように浅い溝を削り込んだもの(6162～6166)

B類 A類とほぼ同じであるが、中央の削り込みが幅広で深く、側面から見て鼓形に仕上げたもの(6167～6176)

C類 断面がほぼ三角形の材の上端に孔を穿ったもの(6177～6184)

A類に属するものは5点で、B類に比べて数が少ない。6164は転用品であり、A類の木鍬を材の軸方向に半割し、その後左右を削り落としたものと思われる。6166は、一周するように削った溝が他のA類に比べると広く、A類とB類の中間的な形態を呈している。

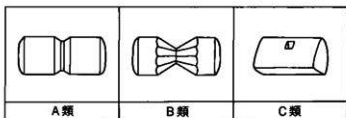


図44 木鍬の分類

B類は最も多く出土した。木鍬は一般に2個一対で経系につながれて使用され、「木器集成図録」によると、古墳時代の標準的な編み台は経糸6本で計12個の木鍬を使用するとしている。したがって、まとめて出土するのは当然かもしれない。

A・B類が芯持材であるのに対し、C類は半割や四分割された材を使用する。方形の孔は表・裏の両方から穿たれている。

(9) 田下駄 (6185~6195)

田下駄は主に、湿地で農作業をする際に足が沈まないようにするための履き物である。縦長の板材で、方孔や円孔の配置が結孔を想定できるものを田下駄の足板とした。

① 単純田下駄 (6185)

当遺跡では、単純田下駄としたものは1点しかなかった。しかし、後に述べる板状木製品の中には有孔のものがいくつかみられることから、この中に田下駄が含まれている可能性がある。

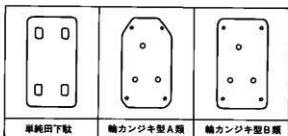


図45 田下駄の分類

② 輪カンジキ型田下駄 (6186~6195)

輪カンジキ型田下駄は、細い樹枝を輪(円形枠)にしておき、その上に横木と足板を十字に組んで置いた形態を示す。当遺跡ではこのうち足板が確認できている。しかし、横木は単独で出土した際には紡織機の部品と誤認される場合も多いため、後述の紡織具(織機)や棒状木製品に拵定した有頭状の部材の中には、この輪カンジキ型田下駄の横木が含まれている可能性がある。

当遺跡で出土した輪カンジキ型田下駄の足板を2種類に分類した(図45)。

A類 平面形が不整の六~八角形を呈するもの(6186・6191)

B類 平面形が長方形を呈するもの(6187~6190・6192~6195)

緊縛用の穿孔について着目すると、A類に属する6186は4個確認できる。6191は2個残っているが、欠失部分を考慮すると4個であった可能性がある。同様に、B類に属する6187は4個、6189は2個と様々である。さらに、6194は緊縛用の穿孔が変則的に穿たれており、本来何個開けられていたのかは不明である。

00 大足 (6196~6225)

大足は、方形枠付田下駄のことであり田下駄の一種であるが、以下の点から別項として扱うこととする。第一に、大足は一般に代掻き・緑肥踏み込み用であるといわれ通常の大足とは使用法を異にすること、第二に、その形態が特殊であり比較的容易に判別できることである。

大足は図46に示すように、足板・足板横杵・縦杵・横木の各部材から構成される。当遺跡からはこのすべての部材が一通り確認できた。中でも、6204・6205・6216・6225は、不完全ではあるが一部組み合わさった状態で出土した(第6分冊一写真図版228)。



図46 大足の部分名称

① 縦杵 (6196~6206)

縦杵には使用の際手綱が緊縛される。この手綱の緊縛法にはいくつかあるが、当遺跡から出土したものは、手綱を直接縦杵に結び付ける方式のものであり、その結び方は2種類みられた(図47)。

A類 縦杵の上・下それぞれを1箇所ずつ結ぶもの(6196~6198)

B類 縦杵の上・下それぞれを2箇所ずつ結ぶもの(6199~6200)

6196・6197は完全しており、いずれもA類である。6197は、長方形孔に横木の端部がいくつか残存しており、そのすべてに抜け落ち防止用の楔が打ち込まれていた。しかし、同様に横木の端部が残存していた6198には、楔は打ち込まれていなかった。

6199・6200はB類に属する。同一遺構からの出土であるが、木取りが異なるため別個体であると思われる。しかし、大足の縦杵は2本で一組であるため、6199・6200は一組だった可能性もある。なお、6201も同じ遺構からの出土である。

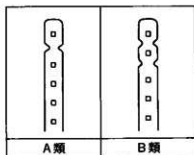


図47 縦杵の分類

② 足板 (6207~6209)

明らかに足板であることが確認できたのは3点であり、2種類の形態がみられた(図48)。

A類 平面長方形の本体に、長方形の柄を作り出すもの(6207・6209)

B類 平面八角形の本体に、やや有頭状の柄を作り出すもの(6208)

6209はA類の基準となる資料である。それに比べると、6207は柄がやや有頭状である。全体的に摩耗が激しいことを考えると、柄の部分も摩耗によって有頭状になったのかもしれない。表面には横木の圧痕が確認できる。

B類は、6208の1点のみの確認である。遺存状態が良好で、裏面には横木・足板横杵の圧痕が明瞭に残っている。

③ 足板横杵 (6210~6216)

足板横杵には2種類がみられた(図49)。

A類 左右の端部に柄を作って縦杵にはまるもの(6210~6215)

B類 左右が徐々に細くなり、端部が縦杵にはまるもの(6216)

6210はA類の好例で、左右の柄が欠失しているものの全体の形状はよくわかる。柄孔を比較してみると、6210・6215はやや小さめの長方形であるのに対し、6212・6214などは横長の長方形である。平面形も若干異なるようであるが、破片資料であるためここでは言及しない。

B類に属する6216は、6204・6205・6225とともに一括出土資料である。先述のように、不完全では

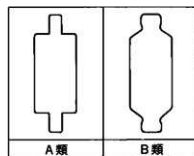


図48 足板の分類

あるが組み合った状態で出土しているため、同一個体であることは間違いない。この個体は、足板横枠のみならず横木もB類である。単にこの個体のみの特徴なのかどうか、類例の増加を待ちたい。

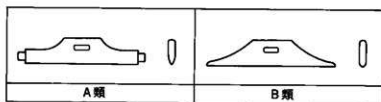


図49 足板横枠の分類

④ 横木 (6217~6225)

左右の端部の形状から2種類に分類した(図50)。

A類 端部に枿を作って縦枠にはまるもの(6217~6224)

B類 左右が徐々に細くなって端部が縦枠にはまるもの(6225)

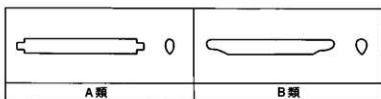


図50 横木の分類

ほとんどのものがA類に属する。断面が卵形を呈し、接地する側がやや尖っているものが多い。

(1) 未製品 (6226~6232)

この項で述べる未製品とは、製品名の特定がしがたいもので、主に広葉樹材でミカン削りを施した痕跡のあるものを示す。先述したように、必ずしも農具のそれとは言いがたいものも含まれている。

一口に未製品といってもその段階は様々である。ミカン削りしたばかりで樹皮が付いたままのもの(6227)、側面を表裏や左右から斜めに削り山型にしたもの(6229・6230・6231)、細かな成形を意図して削りや抉りを入れたもの(6232)などが見られる。また、大型のミカン削り材も確認した(6228)。

2 工具 (6233~6254)

工具には、斧柄・作業台・掛矢・楔・木針が含まれる。また、工具といえるかどうかは不明だが、へら状木製品もここに措いた。

(1) 斧柄 (6233~6238)

斧は、木を伐り倒したりする本体である身(斧身)と、これを装着する柄(斧柄)から成る(図51)。斧柄は原則として木製であり、真っ直ぐな棒状の頭部に孔を開け斧身をはめ込む直柄と、斧身を装着するための斧台を屈曲した頭部に作り出す曲柄とがある。また、曲柄は鍔の柄の場合と同様に膝柄と反柄とに分けられる。

当遺跡で確認された斧柄はすべて膝柄である。製品として確認できた6233・6236・6237は、すべて袋状鉄斧装着用の柄であり、斧身が柄の主軸とほぼ平行する縦斧用の斧柄である。6234・6235は斧身の装着部が明瞭でないため未製品と考えられる。なお、鍔用の膝柄が本項の中に含まれている可能性もあることを付け加えておく。



図51 斧柄の部分名称

(2) 作業台 (6239~6241)

主に直方体をした材の一端に握るための柄が付き、全体が一木で作り出された形態のものを作業台とした。作業台には、何かを打ち叩く時の台や切り刻んだり孔を開けたりする時の台などがある。他

の遺跡では把手の付かない形態のものも出土しているが、ここでは把手付きのものだけに留めた。

6240は、ややつぶれた直方体の上部に断面八角形状の把手が付く。6241は、上部の中央に半球状の窪みが見られる。大きさからみると掛矢の可能性もあるが、窪みのある面がほぼ平坦であることからここに措定した。

(3) 掛矢 (6242)

掛矢とは、杭などを打ち込んだりするものであり、形態は横槌に似ているが、連続して何度も振り下ろすのに困難と思われる大型のものを掛矢とした。6242は、数破片に割れて出土したため細かな点は不明であるが、身部の一つの面に明らかな敲打痕が認められる。全体の形状はやや湾曲しており、身部の先端は2方向から斜めに削り落とされている。

(4) 楔 (6243～6250)

一方の端部を尖らせた棒状のものを楔とした。端部は、2方向から削って斧刃状にしたものや全周を削って尖らせたものなどがある。その機能は、割り裂くための工具としての楔や抜け落ち防止のための楔など多様であると思われるが、個々の遺物からその使用方法を特定することは難しい。したがって、ここに措定したものの中には、鉾ややすなど別の製品とした方がよいものもあるかもしれないことを断っておく。

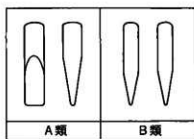


図52 楔の分類

楔は先端部の削り方から2種類に分類した(図52)。

A類 板状や円柱状の材の向かい合う2面を斜めに削り落としたもの(6243～6246)

B類 円柱状の材の全周を削り落として尖らせたもの(6247～6250)

6245はA類に属し、主軸が若干屈曲しているものの、割り裂くための楔と思われる。6243は、形状や大きさからみて、抜け落ち防止のための楔であると思われる。

B類は削り出し材が多く、全面に削った痕跡が見られる。その意味では、6250は下端が尖っているとはいえ、芯持材であるためやや疑問も残る。

(5) 木針 (6251)

断面がほぼ円形の棒状材の一端に切り込みや小さな孔を有し、紐などをかけられるようにしたものを木針とした。6251は上端に小孔があるが、下端は欠失している上に太さも変化しないため、木針とする積極的根拠にやや欠けるが、とりあえずここに措定した。

(6) へら状木製品 (6252～6254)

幅・厚さがほぼ一定の材で、一端が平面U字形に丸くなっているものを「へら状木製品」とした。ここに措定したものの中には、後述する形代の可能性があるものも含まれている。6252は、幅がほぼ一定で下端がU字状になっている。6253は、正面にはほぼ一定幅でケビキが施されている。曲物側板を転用したものかもしれない。6254は、わずかに切っ先らしき形状が見受けられるので刀形の可能性があるが、腹側は薄くなっていないためへら状木製品とした。

3 紡織具 (6255～6278)

紡織具には、「糸を作る」・「糸を巻き取る」・「布を織る」際に使用する道具を含めた。具体的には、紡錘車・糸巻具・織機がある。

(1) 紡錘車 (6255~6257)

繊維に撚りをかけて糸を丈夫にする道具が紡錘であり、円盤状の紡錘車と回転する軸（紡茎）から成る。当遺跡では、紡錘の完形は確認できなかったが、直径7cm程度の円形に近い板材で中央に円孔の開いたものを紡錘車とした。

6256は、裏面は平坦であり断面は台形状である。しかし平面形は円形でなく、中央の孔も貫通していない。紡錘車の未製品としたがやや積極的根拠に欠ける。

(2) 糸巻具 (6258~6270)

紡いだ糸を巻き取るための道具を糸巻具とした。具体的には、かせ(棒)、かせかけ(総かけ)、たたり、糸巻・糸巻状木製品がこれにあたる。

① かせ (6258~6261)

かせは、糸を手動で絡め取って糸の束（総）を作る道具であり、2本の腕木と1本の支え木とを「T」の字状に組み合わせたものである（図53）。

腕木と支え木の結合方法には2種類がみられた（図54）。

A類 腕木の中央に柄孔を開け、支え木の柄を差し込むもの（6261）

B類 A類と同じ方式だが、木釘で固定するもの（6258）

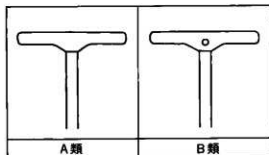


図54 かせの分類

6261はA類であり、抜けにくくするため支え木の柄は先端が若干広くなっている。B類の6258は、腕木の柄孔の中に支え木の柄の一部と木釘が残っていた。楔らしきものも確認できたが、柄の一部が剥がれた可能性もある。6259は、支え木の一部が欠失しているが精製品であり、上面に突出した柄の根元には小孔が開けられている。また、6260も支え木であり柄が一部残存しているが、6259・6260ともに木釘がはまっていたかどうかは不明である。



図53 かせの部分名称

② かせかけ (6263~6267)

かせかけは、その名のとおり総をかけておくものであり、糸を糸棒などに巻く際に取り出しやすくなるための道具である。十字形に組まれた支え木に総を巻く腕木が差し込まれ、支え木の交差部に回転軸を介して台（たたり）が付く形態をとる（図55）。当遺跡で確認できたのは、このうちの支え木とたたりであるが、たたりについては次項で述べることとする。

6267は、支え木の中央で折れているが、中心となる円形の軸孔、幅広の中央部、腕木を差し込む孔の開いた羽部が比較的良く遺存している。腕木を差し込む孔は斜めに開けられる。6263・6264は、2枚の支え木が重なり合う一段低い部分が蟻溝状に抉られており、抜けにくくするための工夫と思われる。なお、6264は中心の軸孔が開けられていない。

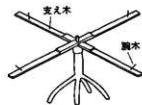


図55 かせかけの部分名称

③ たたり (6262)

たたりは、かせかけの台となる道具である。しかし、かせかけに組み合わさって出土したわけではないため、ここに指定したものがたたりであるとの根拠は低く、別の何かの台かもしれない。

6262は半分に割れているが、復原して考えると平面隅丸方形で断面台形状であり、台の頂点に方形孔が穿たれている。台の上面となる面には多くの傷が確認できる。

④ 糸巻・糸巻状木製品 (6268～6270)

糸巻具には、一つの材からなる一木式と複数の部材を組み合わせて作る組合せ式とがある。先述のかせやかせかけも組合せ式糸巻の一種であるが、ここでは別項として説明した。

6268は、一部組み合わさったまま出土した組合せ式の糸巻であり、「木器集成図録」では「糸枠」としている。支え木は中央で折れているが、円形の軸孔が一部確認できる。腕木と柄結合しており、抜け落ち防止のため木釘が打たれていたようである。炭化部分の観察から、組み合った状態で焼けたものと思われる。6270は一木式のものであり、材の中央と端部付近には貫通する円孔が穿たれている。中央の円孔は内面が摩滅しているため回転の軸孔と思われるが、全体がかなり厚重であり、側面に糸擦れなどの使用痕も見られないため「糸巻状木製品」とした。静岡県伊場遺跡（浜松市教委1978）・兵庫県袴狭遺跡（鈴木敬二編2000）より類似品が出土している。

(3) 織機 (6271～6278)

織機の部材はその同定が難しく、ここでは端部に削りや抉りが施されている棒状や板状の材を経巻具や布巻具など織機の部材としたが、ここに拮定したものが必ずしもそれであるとは言い切れない。したがって、この中に先述の田下駄の横木が含まれていたり、後述の有頭棒状材の中に織機の部材が含まれていたりするかもしれない。

6271・6272は中筒とした。中筒とは、細長い板状の材の両端に紐かけを作り出した材であり、緯糸を絡めるために経糸群を上下に分ける開口具だが、6271は材の厚さを考えると輪カンジキ型田下駄の横木の可能性もある。

4 漁撈具 (6279～6281)

漁撈具としては、舟の推進具である櫂が出土した。当遺跡で出土した櫂は3点とも一木式のものであり、真っ直ぐに伸びた柄から徐々に幅を増し、厚さを減じて身（水かき）に至る。

6280は、身の一方の面を浅く削り込んでいる。6279・6281は、身の横断面が三角形であり、板状や紡錘形・三日月形を呈する一般的な櫂とは形態を異にする。しかも6281には、厚い方の側面に大きな抉りが入る。6279は未製品の可能性もあるが、6281は精製品であるため不明としか言いようがない。

5 運搬具 (6282～6294)

(1) 天秤棒 (6282～6283)

細長い材の両端に、荷を掛けるための削り込みを有するものを天秤棒とした。6283はその好例で、小枝をはらった弓なりの材の両端に削り込みを入れて紐かけとしている。6282は、上端に溝、下端に削り込みが施されているが、直線的な板状の材であるため、天秤棒とする積極的根拠にやや乏しい。

(2) 付札状木製品 (6284～6294)

付札は荷の運搬の際に付ける札とされているが、ここでは、墨痕や緊縛痕など明瞭な痕跡は見られないが形態が似るものを「付札状木製品」として拮定し、墨痕のあるものについては「木筒」の項に含めた。板状の材の両端を両側面から抉り込んで端部を有頭状に作り出すという形態は、先述の中筒と同じであるため、やや小型のものをここに拮定した。したがって、形態の似ている、付札状木製品、中筒、輪カンジキ型田下駄の横木については、誤認している可能性が大きいことを断っておく。

6 武器・馬具 (6295~6300)

(1) 鞍 (6295~6298)

「へ」の字状に屈曲した材で、表から裏へ貫通する孔が開けられているものを馬具である鞍としたが、犂や馬轂を引く牛の肩に乗せる荷鞍の可能性もある。

6297は前輪か後輪か不明だが、居木を結合するための長方形の柄孔が3箇所確認できる。類似品が福岡県辻田西遺跡で確認されている(北九州市教育文化事業財団1982)。6296・6298は、柄孔が穿たれていないため鞍の未製品としたが、6298は自在鉤や轆の可能性もある。6295は、全面に黒漆が均一に塗られており、前輪か後輪かは不明であるが、乗馬用の鞍の一部であると思われる。

(2) 木鎌 (6299)

6299は木鎌であり、身の断面が円形を呈する杵状鎌である。砲彈形をした矢尻の下部に矢柄が付いた形態を示し、矢柄の下部は垂直に切り落とされている。祭祀具(形代一鎌形)の可能性もある。

(3) 靱 (6300)

6300は盛矢具の一つである靱の一部と思われる。本体は皮革製であり、その底板の可能性はあるが、正確な使用法は不明である。側縁が一部欠失しているものの遺存状態は良く、平面長方形の材の長辺側に円孔を6~7個穿っている。孔内面の観察から、焼け火箸によって開けられたものと思われる。

7 服飾・装身具 (6301~6347)

(1) 下駄 (6301~6340)

下駄は、足に乗せる台と歯を一木から削り出して作る連歯下駄と、台と歯を別々に作って納で組み合わせる差歯下駄とがある。さらに差歯下駄は、歯の納の先端が台表から見える露印下駄と、台表から見えない陰印下駄に分けられる。

当遺跡で出土した下駄の大部分は連歯下駄であり、差歯下駄は2点のみでともに露印下駄であった。

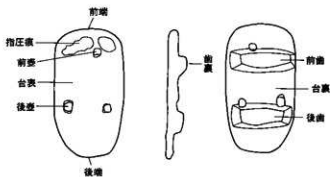


図56 下駄の部分名称

① 連歯下駄 (6301~6331)

連歯下駄の分類にあたっては、緒孔(前壺)の位置と歯裏の幅の2点を重視した(図57)。

緒孔(前壺)の位置の分類

A類 前壺を左右どちらか一方に寄せて開けたもの(6301~6305)

B類 前壺を台のほぼ中央に開けたもの(6306~6322)

歯裏の幅の分類

1類 歯裏が台の幅と同じ。つまり、台の側縁から垂直に歯が伸びるもの

2類 歯裏が台の幅より広い。つまり、台の側縁から外開きに歯が伸びるもの

以下、これによりA1類、B2類などと呼称することにする。なお、一般的に下駄を分類する際に、側面から見た前歯・後歯の開き方や歯の断面形、あるいは台の平面形などを観点として分類する方法もあるが、この場ではそこまで言及しない。

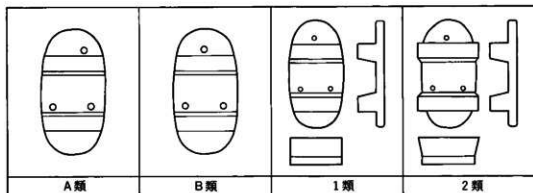


図57 連歯下駄の分類

6301・6304はA1類の好例である。台表には指圧痕が明瞭に残っているが、側面から見た歯の開き具合は異なっている。

6311はB1類に属し、歯がかなり高い。前歯は通常前歯のすぐ上に開くことが多いが、これはかなり離れて穿たれているため、歯と歯の間の距離が狭めになっている。6319は原形をよく留めており、B2類の基準資料である。しかし、B1・B2類に措定したものの中には、歯の接地面・側面や台表の側縁部が磨り減ったり欠失したりして原形が定かでないものも多く、1類か2類かの判断については難しいものもある。

6331は、後歯が台の後端にあるため、別の分類になるべきものであるが、出土遺構が中世から昭和の耕地整理前まで続く溝跡であり、時期がかなり新しくなる可能性もあるため、ここでは細分しないことにしておく。

② 差歯下駄 (6332・6333)

差歯下駄は2点が確認できた。ともに柄の先端が台表から見える露脚下駄である(図58)。6332は、前歯に断面方形の柄を2箇所作り出して、台部に差し込んでいる。差し込んだ後、表側から楔を打ち込み抜けにくくしている。後歯は欠失しているが、柄は1箇所である。6333は元々連歯下駄であったが、後歯が取れたために別の材で柄を作り差歯式に変更している。台部の大きさから推定すると、柄は2箇所あったと思われる。

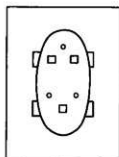


図58 差歯下駄

(2) 草履芯 (6341)

6341は草履の芯である。2枚の薄板からなり、この上に藁を被せ鼻緒をかけて草履とする。楕円形状の薄板が2枚に割れていると思われるが、表面の観察から、半円形状に削った板を最終段階で薄く割り裂いて2枚にした可能性もある。片方の薄板の表面には傷が多く見られることから、転用品かと思われる。

(3) 扇骨 (6342・6343)

6342・6343は、「檜扇」の骨の可能性もあるが、骨の途中で線目が無いことや檜扇にしてはやや厚すぎることから扇子の骨とした。線目が存在しない形式の檜扇もあるし、檜扇の親骨である可能性も捨て切れないが、要孔らしき孔の存在だけで檜扇と決定するには根拠が薄いと考えた。ただし、6342は復元幅が3.8cmとやや広すぎるような懸念もある。

(4) 櫛 (6344~6347)

当遺跡では4点出土した。いずれも横方向に長い横櫛である。背部の形態に関して2種類に分類した(図59)。

A類 背部が直線的なもの。肩部が丸みを帯びるものもある(6344・6345)

B類 背部が半円形のもの(6346・6347)

6344・6345は、左側が欠失しているがA類である。6345は肩部がやや丸みを帯びている。

6347はB類に属し、歯はとれてしまっているが全体形のよくわかるものである。背部の表側中央には刻印らしきものが見られるが、字なのか記号なのかは不明である。

4点はいずれも、側面形がほぼ二等辺三角形であり、刻歯のための目処線が引かれている。

8 食事具 (6348~6464)

(1) 箸 (6348~6457)

細い棒状の材で端を尖らせたものを箸とした。折れたり曲がったりした状態で出土したものが多いが、完存しているものでは、最長26.8cm、最短5.6cmであり、20cm前後のものが大半を占める。直径は0.5cm前後で、断面は多角形~円形である。粗削りのものが多く、「木器集成図録 古代編」では、「現代の割箸のように一時的に使用され捨てられたものようである」としている(奈良国立文化財研究所1985)。また、「箸には魂が宿る」とも言われ、宗教的な儀式にも使用されたと考えられる。

(2) 匙 (6458)

柄と身とから成り、身が厚手で一方の面を削り込んだものを匙とした。6458は、身の外面を半円形に、内面を台形状に削り込んで作られている。内面は削り込んだだけで荒削りであるが、外面は細かい調整痕が多数残存しており、亀甲を思わせる外観である。柄の付け根は厚手に作られており、柄が鈍角に付くと思われる。

(3) 杓子状木製品 (6459~6464)

真っ直ぐな柄に、扁平で幅の広い身が付くものを「杓子状木製品」とした。身の横断面は概して薄板状であるが、やや厚いものもある。身の平面形によって次の2種類に分類した(図60)。

A類 方形を呈し、柄と身の境が明瞭なもの(6459~6462)

B類 楕円形状を呈し、柄と身の境が不明瞭なもの(6463~6464)

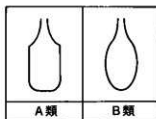


図60 杓子状木製品の分類

9 発火具 (6465~6470)

(1) 火鑽臼 (6465~6467)

火を生じさせる方法には摩擦式や火打式があるが、そのうち、下に置いた棒状の木片に丸棒の先端を押し当てて回転の摩擦により発火させる回転摩擦式において、下に置く木片を火鑽臼、丸棒を火鑽杵と呼んでいる。その性格から、当遺跡から出土した火鑽臼にはすべて炭化の痕が見られる。6465は、火鑽穴の周囲が削り込まれており、火鑽杵が安定するように前もって火鑽臼の上面を浅く窪ませたものと思われる。6466は、材の側面が剥がれてしまっているが、火鑽穴の部分の痕跡が多数確認できる。

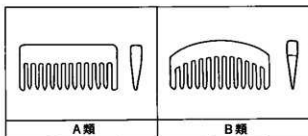


図59 櫛の分類

(2) 火鑽弓 (6468~6470)

回転摩擦式の発火法において、火鑽杵を回転させる方法はいくつかある。

キリモミ式 火鑽杵を両手で挟んで回転させる

ヒモギリ式 火鑽杵に紐を結ませ、その紐を動かして火鑽杵を回転させる

弓ギリ式 小型の弓の紐を火鑽杵に結ませ、弓を水平方向に動かして火鑽杵を回転させる

舞ギリ式 舞錐の弓の紐を火鑽杵に結ませ、弓を上下方向に動かして火鑽杵を回転させる

舞ギリ式による発火法が古来存在していたかについては諸説ある。また舞錐の弓も、穿孔のための工具として使用された可能性もあり、ここに指定したものが発火具であるという積極的根拠は無いが、先述の火鑽臼がいくつか出土していることから考えて、これを火鑽弓とした。

6468は、弓の断面がほぼ方形である。軸孔の内面に摩擦による擦過痕は無く、弓の左右の長さも異なる。6469は、断面が円形に近い。軸孔の内面は摩擦のためか滑らかになっている。表面は平坦だが裏面は腐食のためはつきりしない。6468・6469は、いずれも軸孔が斜めに開いている。6470は大半が欠失しているため、原形ははつきりしないがここに指定した。軸孔と思われる付近が表裏とも平坦である。これら3点は、弓の先端に弦かけ孔が無い点に疑問が残る。

10 容器 (6471~6720)

容器は、その製作技法によって刳物・挽物・指物・曲物に分けられる。刳物は、その名の如く材を刳り抜くことによって作る。挽物は、粗く加工した材を轆轤にかけて成形する。指物は、板材を柄・樹皮紐・釘などで結合して組み立てる。曲物は、薄板を筒状に丸めた側板とそれに合う底板を樹皮紐などで結合する。

容器が平面円形であったり底部外面に轆轤の爪跡が残っていたりする場合には挽物と判断しやすいが、出土品の表面が荒れていたり変形したりしているとその判断は難しい。したがって、ここでは刳物と挽物の区別はせず、槽・盤、碗、皿の項目を立てることとした。曲物は項目として残し、指物は箱・箱物の項目に含めた。また、漆器、柄杓、注口、ひょうたんは特別に項目を立てた。

(1) 槽・盤 (6471~6492)

平面形が方形や円形を呈する刳物の容器を示す(図61)。器壁は厚手で粗削りのものが多い。底部外面に脚が付くものや短辺側に把手が付くものもある。槽と盤の区別は、一般に浅いものを盤、深いものを槽とすることが多いが、

ここでは区別しなかった。

平面形態から3種類に分類した(図62)。

A類 長方形を呈するもの
(6471~6480)

B類 円形または楕円形を呈するもの (6481~6487)

C類 台形状を呈するもの
(6488~6491)

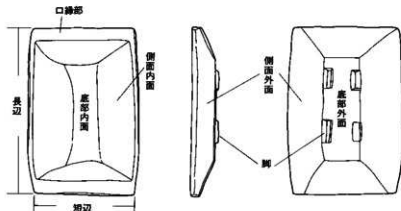


図61 槽・盤の部分名称

A類に属するものは多い。6472は半分に割れているものの、把手付盤の好例である。似た形態のものが滋賀県鴨田遺跡で出土しているが、それによると把手は1本である（『木器集成図録』より）。6475はA類であるが、平面形は隅丸長方形を呈しB類にやや近い。短辺側の中央には幅広の把手が両側に付き、内外面は工具による調整痕が明瞭に

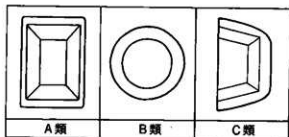


図62 槽・盤の分類

残る。6476・6477などは、短辺側に棒状の把手が付き、そのすぐ下の外面を斜めに切り落としている。6479は、口縁部の立ち上がりが1.7cmと低い。表面には平面台形状を呈する脚が台部長辺に平行して2個ずつ連結して作り出されている。脚の接地面はほぼ平坦であり、高さは約6.0cmである。6480は、短辺側に把手部が2箇所作られ、底部外面には突起状の脚が4箇所付いていたと思われる。半截した丸木の内部を削り抜いて製作されている。

B類の多くは、底部の平坦な碗形を呈し、比較的器壁が厚い。6484・6487はいずれも半分に分れた状態で出土した。6484は遺存状態が良く、外面には削りの痕が明瞭に残る。口縁部は面取りが施されている。6483は、平面形が隅丸長方形に近く器壁も薄いため、A類もしくは後述の皿に含めてもよいかもしれない。

C類のうち、6491は把手付盤であり、把手が垂直方向に付く例である。出土時には、把手の握り部に紐状の繊維ないしは樹皮製品が巻き付けてあり（第6分冊—写真図版243）、裏面には把手以外に脚が1箇所確認できる。把手先端の摩滅が著しいことから、おそらく把手先端と脚2つの合計3箇所を盤を支えていたと考えられる。類似品が島根県白環遺跡（大岡晴雄他1989）、愛知県山崎遺跡（埋蔵文化財研究会1996）などで出土している。6488・6490はやや小型であり、6491の把手が付かない形態を呈し、6488は四辺に縁を有する。

(3) 碗 (6493～6500)

平面円形を呈し、薄手で深めの容器を碗とした。その多くは漆器碗である。6493は、一部欠失しているが原形がよくわかる。内外面とも何かが塗ってあった可能性があるが、自然の変色かもしれない。6496は、高台高が約3.0cmと高く、高台内は約1.1cmほど狭られる。体部下方は張りがあり、内面には丹塗りが施されている。

(4) 皿 (6501～6518)

平面円形で浅めの容器を皿とした。槽・盤との違いは、器壁が比較的薄いことである。その多くは、平面形が整った円であることから挽物であると思われるが、6506は、内外面に削った痕が多数残されていることから割物と考えられる。

(5) 曲物 (6519～6702)

曲物は184点図示した。木製品が出土している地点では曲物も出土する傾向があるが、中でもA16地点の出土量が特に多い。曲物の身、把手、脚に分けて報告する。

① 曲物身 (6519～6697)

底板と側板を曲物身とする。今回は、底板の形態を中心に分類し（図63）、底板と側板の結合分類を補足した（図64）。なお、蓋と底板の区別はしていない。

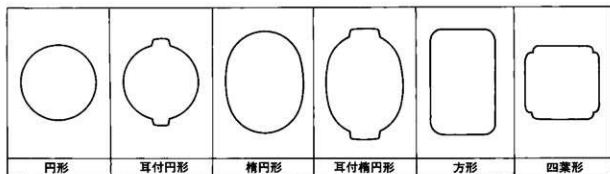


図63 曲物底板の分類

底板の分類 (図63)

円形・耳付円形・楕円形・耳付楕円形・方形・四葉形の6種類に分類した。方形は長方形と正方形のものを一括している。また、楕円形と方形の違いは、短辺が直線的なものを方形、弧状となるものを楕円形とした。楕円形のもの半数近くは耳付きである。四葉形は花卉を象ったものであり、今回は1点のみ確認した。

底板と側板の結合形態の分類 (図64)

すべて「六大A遺跡」の分類(A~H類)に従った(穂積裕昌2000)。しかし、今回の調査では、六大A遺跡のA・B・C1・C2類の確認はなかった。また、六大A分類以外の形態を新しくG2類・I類とし、六大A分類のG類をG1類とした。以下にその分類項目を示す。

D類 底板周縁段を直角に削り込み、そこに紐孔を2孔穿ち、側板の紐孔1孔と結合するもの

D1類 木栓がないもの

D2類 木栓があるもの

E類 底板周縁段を直角に削り込み、そこに紐孔を1孔穿ち、側板の紐孔1孔と底板外縁部を巻き込むように結合するもの

F類 底板周縁段を直角に削り込み、木釘により側板と結合するもの

G類 底板周縁段が無く、側板と紐結合するもの

G1類 底板周縁に紐孔を2孔穿ち、側板1孔と結合するもの

G2類 底板周縁に紐孔を1孔穿ち、側板1孔と底板外縁部を巻き込むように結合するもの

H類 底板周縁段が無く、側板と釘結合するもの

I類 底板周縁がL字状に突出し、側板がその内側に結合するもの

なお、皮紐の綴じ方は「木器集成図録 古代編」に従った。

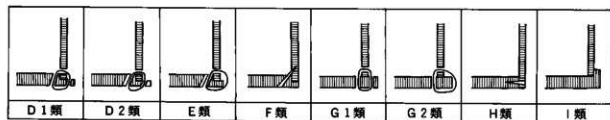


図64 底板と側板の結合形態の分類

i 円形曲物 (6519~6587)

円形曲物は69点図示した。そのうち、底板と側板の結合形態がわかるものは44点で、H類が27点と最も多く半数以上を占めている。以下D2類、D1類の順に多い。

6530はD1類であるが、釘孔も1箇所見られる。周縁段の内側には側板の圧痕が残る。

D2類に属する6531は、底板がほぼ完存している。側板もわずかに残り、紐結合は4箇所で行われている。6529も底板がほぼ完存し、紐結合は4箇所で行われている。6532は、側板と底板が結合して遺存している。側板の高さは2.1cmである。6525は、底板の中央に小円孔が穿たれている。

E類・F類はそれぞれ1点ずつ確認した。6536はE類であり、底板周縁段の打合せ部分が広く削り込まれている。6534はF類であり、木釘孔が6箇所見られる。木釘はいずれも側板の外側から底板に向かって打ち込まれており、そのうち3本は底板裏面まで貫通している。

H類には27点が属する。6538・6539・6540は底板が完存しており、側面には不規則な配置の木釘孔が、6538は7箇所、6539は3箇所、6540は6箇所ある。6538は中央部分がわずかに窪み、6540は表裏面に手斧痕が明瞭に残る。6548は、乾燥のため歪んでいるが底板の完形であり、側面4箇所に木釘が残る。6552は底面に木釘が1箇所残っており、H類の中でも底板底面から側板へ打ち込み形態であると思われる。6555は木釘が隣接した場所に打ち込まれており、木釘の長さは約2.0cmである。6551は中央に鑿による不定形の穿孔があり、6559は表面にヤリガンナの痕跡が残る。6550は正面に漆が筋状に数条残っており、拭い取りの痕跡と考えられる。そのため、漆を入れる容器として使用された可能性がある。6542は裏面に、6558は正面の周縁部に、やはり漆らしき痕跡が残っている。6553・6556は、周縁部の内側に黒色ラインが弧状に巡ることから、蓋として使用された時期があった可能性がある。6565は井戸底に設置されていた曲物であり、側板のみが残存するが、上げ底であったと思われる底板の痕跡が側板内面の下端に残されている。側板は二重になっており、内面は幅約30cmの一枚板を1列上下内下5段縦じで、外面は幅約10cmの板を3段に積んで2列前外3段後外3段縦じで打ち合わせている。両者は底板とともに木釘で固定されている。外面の打合せ部先端は上下より弧状に削り込み、内面と外面の打合せ部の位置は180°反対の位置にある。内面には0.5~1.2cm間隔で縦平行にケビキが入る。結合のための木釘は無数に見られ、大半が一辺約5mmの方形釘である。

その他、結合形態が分からないものも25点図示した。6562は、表面に幅2.2cmの溝が平行しており、溝以外の箇所には鉋の痕跡と考えられる細かい平行線が無数に見られる。また右側面には断面方形の溝が削り込まれている。これらのことから、建具を曲物の蓋に転用した可能性がある。6569も、側面が斜めに削られているため曲物の蓋の可能性がある。6563は表裏面と側面に漆が塗られており、表裏面とも極めて平滑である。6577も表裏面に漆が塗られ、裏面の周縁部には円形の変色帯が見られる。6580は正面にのみ漆が付着している。6576・6579は、中央に円形の窪みがあるが、ともに貫通はしていない。6578は中央に小円孔があり、その周囲に円形に溝を削り込んでいる。6582は、中央に2個の小孔が穿たれている。

ii 耳付円形曲物 (6588)

底板1点のみ確認した。側板との結合形態はD2類である。紐孔と木栓が5箇所残っており、左右対称の位置であったとすれば8箇所に孔が穿たれていたことになる。側板の打合せ部と思われる周縁段の窪みが1箇所確認できる。

iii 楕円形曲物 (6589~6598、6602)

楕円形曲物は11点図示した。底板と側板の結合形態は、約半分がD2類である。6594は、側縁部に9箇所の円形孔、割れた面に4箇所の方形孔がある。方形孔には皮紐が残っており、いずれも木栓で固定してある。6591は、表裏・側面ともに漆が塗られており、中央に3個の小穿孔がある。6598は、周縁段の打合せ部分が広く削り込まれている。

iv 耳付楕円形曲物 (6599~6601、6603~6607)

耳付楕円形曲物は8点図示した。底板と側板の結合形態は大半がD2類である。6606は、ほぼ全体の形状がわかる資料である。紐孔と木栓が左右対称の位置に8箇所あり、打合せ部が2箇所にある。6599は、底板と側板の結合形態がI類で、木栓と皮紐が4箇所に残っている。正面にはヤリガンナ痕が残っており、裏面から側面にかけては丸く削られており、全体的に丁寧な加工が施されている。耳部には直径約5mmの小穿孔がある。

v 方形曲物 (6608~6666)

方形曲物は59点図示した。底板と側板の結合形態はD2類が最も多いが、円形曲物ではほとんど見られなかったG1類・G2類も多い。

D2に属する6614・6615は、皮紐と木栓が4箇所残り、破損部には補修孔が2箇所見られる。6614は、周縁段の打合せ部分が広く削り込まれている。6610は、周縁段に製作時の刃物痕と幅約1.5cmの側板の圧痕が見られる。6612・6619も周縁段に刃物痕が残る。6613は、側板がわずかに残っており、その高さは約1.4cmである。6622は、側板と底板が結合しており、側板の一部が欠落しているものの全体の形状がわかる資料である。側板の高さは平均1.5cmであり、1列上下内1段縦じで1箇所打ち合わせられる。底板との結合孔は6箇所に開けられ、皮紐と木栓が残る。皮紐の幅は約0.4cmである。底板の周縁段には側板の圧痕が明瞭に残っている。

6625・6626はG1類であるが、底板に孔を穿つのではなく切り込みを入れてそこに皮紐を通す形態である。6633は皮紐が3重に巻かれており、表裏面には無数の線状痕が残っている。6631は表裏面にヤリガンナの痕跡が残る。6634は側縁が表裏より斜めに削られている。6629は、表裏面と側面に漆が塗られている。表面の側縁部には側板の痕跡が残る。裏面には円形の圧痕が残ることから、曲物底板として使用された後に蓋として再利用された可能性がある。6623も曲物底板を他の材に転用したためか、下辺の調整が極めて粗い。

6636はG2類であり、底面側縁部に皮紐結合のための孔が4箇所あるが、木釘孔も底面に2箇所、右側面に3箇所見られる。6637も左側面中央に長い木釘がほぼ水平に打ち込まれているが、その用途は不明である。6639はほぼ完形であり、四隅に直径約1.5cmの円形孔が穿たれる。6643は、正面に幅約2mmの断面V字状ないしは逆台形状の溝が直線的に4本彫り込まれている。曲物底板でこのような溝を有するものは、今回の調査ではこの1点のみである。

I類は、方形曲物では6645の1点のみである。正面は側縁の突帯に向かって緩やかに斜めに削られ、裏面の周縁端部は斜めに削られている。

その他、6624・6632 (G1類)、6641・6644 (G2類)、6646は、角が短く切り落とされて八角形を呈する曲物であり、6624は小型品である。また、6649~6658は同一遺構からの出土であり、方形曲物の底板をほぼ同一の幅に切断したものと思われるが、用途は不明である。

vi 四葉形曲物 (6667)

6667の1点のみの確認である。底板と側板の結合形態はI類であると思われるが、側板と結合した痕跡は確認できない。

vii 曲物側板・底板 (6668~6697)

側板のみのものは26点図示した(6668~6693)。6668Aと6668Bは同一個体であり、打合せ端部は側板全体とほぼ同じ幅である。6669は2枚の側板が打ち合わせられており、2箇所1段の皮紐綴じがなされている。6670は3枚の側板が重なって綴じられている。6671は、打合せ端部に沿って内側の板に刃物痕が見られるため、側板を綴じてから切断した可能性がある。皮紐の綴じ方は1列上外下内2段綴じである。6673・6674は、2枚の側板が打ち合っており、綴じ合わせは、6073が2列前外2段後内綴じ、6074が1列内3段綴じである。6676も2枚の側板が打ち合っており、2箇所の綴じ合わせ部は1列内1段綴じと1列上外下内1段綴じである。6678は左右端部に縦方向のケビキが入るため、方形曲物の側板と考えられる。6684はヤリガンナの痕跡と思われる加工痕が残っており、内面には縦平行線と斜平行線を組み合わせて斜格子にケビキを入れている。6683は、内外面ともに漆が塗られている。6689~6692は、曲物の側板を細かく切断したものである。

なお、形態のわからない曲物底板は4点図示した(6694~6697)。

② 曲物把手 (6698~6699)

側板の打合せ部と考えられる箇所に、装飾的な形の板材が結合されているものを曲物の把手とした。把手部上下端は表裏面より斜めに削り込まれ、断面三角形を呈する。6698は右側面が滑らかな曲線を描き、上部はさらに右方向へ水平に板材が伸びていたと想定される。6699も6698と同じ形態であることから、6698と左右対称の位置にあったものと考えられる。

③ 曲物脚 (6700~6702)

6701はほぼ半分に割れており、下方は逆V字状に切り込まれていたと思われる。6702は同一個体が2つに割れている。上方両端に直径約1.8cmの円形孔があり、側面は一端屈曲して下端まで緩やかに広がる。いずれも岐阜県吉城郡宮川村の民俗例(山田昌久1997)と類似するため、曲物脚とした。

(6) 箱・箱物 (6703~6711)

ここでは、箱形の容器もしくはその部材と思われるものを指定した。板材に納・樹皮紐・釘などの結合の痕を有する指物と思われる部材もここに含めたが、中には本来の器種がはっきりしないものもあり、容器以外の指物が含まれている可能性もある。

6707Bは刳物の箱であり、6707Aが蓋となる。箱の内側に蓋が入り込んだ状態で出土した。類似品が奈良県平城宮で出土している(『木器集成図録』より)。

(7) 漆製品 (6712~6717)

ここでいう漆製品は、漆を塗ってあるものの形態がはっきりしないものを取り上げた。漆が付着した曲物底板や漆塗りの柄など、元の形態がはっきりしているものについてはそれぞれの項に措いた。

(8) 柄杓 (6718)

1点のみ確認した。6718は、身が平面方形の柄杓であり、柄と一体化した身の底板に長方形の板を4枚貼り合わせて側板としたものである。身の底板と側板は木釘で結合されており、身・柄とも全体に漆が塗られている。

(9) 注口 (6719)

1点のみ確認した。6719は、材の中を削り抜いて空洞にしている。先端は外側の周囲を面取りして丸みを帯びさせている。根元は一部杓状に残っているが、どのような仕組みであったかは不明である。

(10) ひょうたん (6720)

比較的残りの良いものを1点図示した。6720は、底部付近が割れたため、割れ面に沿って3箇所に2孔一対の小孔を穿って補修している。底部は平坦面を有し、中央の直径約5mmの孔はひょうたんの臍が抜けたものと思われる。

11 籠織物 (6721・6722)

網代以外の籠織物として、籠の一部と思われるものを2点確認した。6721は、周囲に竹らしきものが巡ることから農具の「箕」である可能性もある。周囲の竹は10数cmごとに樹皮紐で縦じらされている。6722は、編み目が小さいため籠とは限らないかもしれないが、とりあえずここに措いた。なお、網代については、第1分冊の第5章第4節を参照されたい。

12 家具 (6723～6732)

(1) 机 (6723～6728)

机の脚らしき板材と天板を確認した。天板はいずれも平面長方形で、下面の周囲は斜めに削られて周縁部が薄くなっている。下面の短辺側には、溝を彫り込んで脚をはめ込む仕口を有しており、溝の断面は確認できたものすべて蟻溝状を呈する。この場合、2本の脚は長辺側からスライドするように差し込むことになるが、2本が異なる鋼から差し込む形式になっている。6724は、長辺方向に走った裂け目を樹皮紐で補修している。

脚らしき板材は2点確認した。6723は、脚の上端部分が天板下面の溝にはまった状態で出土した。6728は表面が蟻納状になっており、未貫通の孔は、机にはめ込んだ後に抜け落ちを防止するため木釘を打ち込んだものかもしれない。転用されているらしく、脚板としての原形は留めていない。

(2) 椅子 (6729～6732)

椅子には、座板と脚を一本で作り出したものと、座板と脚を別の材で作る組合せ式（指物）のものがあるが、当遺跡から出土した4点はいずれも組合せ式であり、そのうち確認できたのは座板だけである。短辺側の端部寄りに柄孔を開けて、脚板上端を柄孔に結合する方式であり（図65）、6731は脚板の柄の一部が残存していた。原形がほぼ確認できる4点のうち3点は、座板の中央部が緩やかに窪んでいるのが特徴である。平面形は4点とも異なり、柄孔の形態もそれぞれに特色があるが、長辺方向の全長が50数cmと似通っているのは興味深い点である。



図65 椅子の部分名称

13 祭祀具 (6733～6812)

祭祀具は、人形・馬形を始めとして多様なものが出土しており、当遺跡の特徴の一つとして挙げられる。器種としては、齋串・形代に加えて、実用的とは思えない「ミニチュア製品」も本項とした。

(1) 齋串 (6733～6762)

平面形や側面の切り込みの形態から4種類に分類した（図66）。

- A類 上下両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落としたもの (6733)
- B類 両端を圭頭状や剣先状にしたもの (6734~6744)
- C類 B類とほぼ同じだが、上端近くの両側面に1箇所ずつ切り込みを入れるもの (6745)
- D類 B類とほぼ同じだが、両側面に三角形の切り欠きを入れるもの (6746)

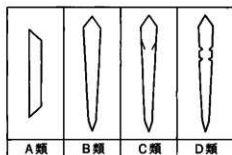


図66 斎串の分類

A・C・D類は、それぞれ1点ずつの確認にとどまるが、その形態的特徴はいずれもはっきりと見て取れる。

B類は最も多く、そのほとんどが、上端より3分の1ほど下がった所から左右が若干くびれて細くなる特徴がある。6744は、上端が欠失しているものの非常に長く、現存で全長約67cmである。

斎串は、一部分のみが出土した場合その認定が難しい。したがって、不明品の中に斎串が混じっていたり、一次整理の段階で認定できずにやり過ごされていたりする可能性もあることを断っておく。それは、形代類の出土数から考えると斎串がもっと多かったかもしれないということが前提となっているが、裏を返せば当遺跡の特徴であるのかもしれない。

(2) 形代 (6763~6808)

① 人形 (6763~6772)

当遺跡から出土した人形は、短冊状の板を切り抜いて作る扁平なものであり、正面を向いた全身を表している (図67)。腕を表現することがよく行われるが、実際には欠失していることが多いため、ここでは、分類の基準から外すこととした。よって、頭部と脚部の形態から次のように分類した (図68)。

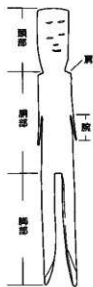


図67 人形の部分名称

頭部の形態の分類

- A類 頭部側が長く肩部側が水平きみで、怒り肩状になるもの (6763~6769)
- B類 頭部側が短く肩部側が長いため、撫で肩状になるもの (6770~6772)

脚部の切り込みの分類

- 1類 逆V字状に切り込むもの
- 2類 「コ」の字状に切り込み折り取るもの

これらを組み合わせてA 1類、B 2類などと呼称することとする。

6763はA類、6766はA 1類に属し、いずれも頭部側を大きく切り込んでいる

ため、やや頰がこけた状態に見える。A 2類に属する6767は、頭部上端が直線的に切り出されている。6764・6768・6769は脚部が欠失しているため、A類としかわからない。

6770はB 1類に、6771はB 2類に属する。6772はB 2類に属し、頭部がやや欠失しているが、遺存状態は良い。腕は、腰の辺りから薄く削り込むことで表現されている。

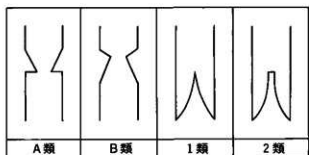


図68 人形の分類

② 馬形 (6773~6791)

馬形は以下のような形態を示す。すなわち、腹側に頭部・尾部を表す弧状の切り欠きを入れ、背側は中央を弧状に切り欠いて両端を丸めるように切り落とす。また、四肢を差し込むための切り込みが表・裏に付けられていることが多い(図69)。

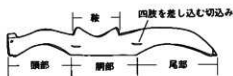


図69 馬形の部分名称

背側の鞍の有無によって2種類に分類した(図70)。

A類 鞍の前輪・後輪を明瞭に表現した、いわゆる「飾り馬」であるもの(6773~6778)

B類 鞍が無く背部を切り欠いただけの、いわゆる「裸馬」であるもの(6780~6788)

A類・B類とも、刺突により目を、切り欠きにより口を表現したものや、頭部上辺を突出させたものが多く見られる。

6791は、鳥形などの動物形の可能性もあるが、とりあえずここに拮定した。

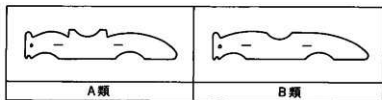


図70 馬形の分類

③ 鳥形 (6792)

6792は、その平面形が鳥の頭部と背部を思わせることから鳥形とした。腹側は欠失部が多く、原形は不明だが、中程に孔の痕跡らしいものが確認できる。ここに羽状のものを差し込んで、より立体的な鳥形としたのかもしれない。

④ 刀形 (6793~6803)

鞘から抜いた状態の刀を模している(図71)。刀形と刀子形を、その大きさで区別する場合もあるが、ここでは一括して論ずることとする。

柄部の形態から4種類に分類した(図72)。

A類 背・腹の両方から削り込み、柄を曲線的に表現するもの(6793)

B類 A類とはほぼ同じだが、柄を直線的に表現するもの(6796)

C類 腹側からのみ削り込んで柄を表現するもの(6794・6797)

D類 柄を表現しないもの(6795)。

A~C類は、いずれも切っ先まで丁寧に表現されたものが多い。B類に属する

6796は刀身に方孔を有するが、その機能は不明である。

D類に属する6795は小型のものであり、刀子形といってもよいものである。切っ先付近の腹側を薄く削り込んで刃を作り出している。

6798は、細くなった下端を柄部、薄くなった上方右側面を刃部腹側とみて刀形としたが、欠失部が多い上に粗削りであるため、詳細は不明である。6802はとりあえずここに拮定したが、斎申の可能性も考慮したい。



図71 刀形の部分名称

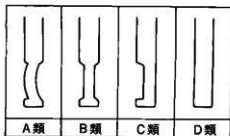


図72 刀形の分類

⑤ 剣形 (6804・6805)

刀形に似るが、両側に刃を付け、切っ先を山型に尖らすものを剣形とした。6804は、剣身と柄を材の厚さ・幅で表現しているが、切っ先はあまり鋭くない。

⑥ 舟形 (6806~6808)

木の葉状の材の中央に船槽を削り抜いて作られる。船槽の平面形は舟の外形に相似するが、6806は、船槽を大きく2回削っただけのシンプルなものである。また、外形が直線で構成されている点でも、他の2点とはやや印象が異なる。

(3) ミニチュア製品 (6809~6812)

一般的に形代には農具や生活用品を象るものもみられるため、非実用的と思われる小型の製品をミニチュア製品として祭祀具の項に含めた。ここでは、ミニチュアの横槌と竪杵を拵定したが、必ずしも祭祀具であるとは限らず、他の用途もしくは実際に農具として使用された可能性もある。

6809は、端部がもぎ取られたままであるため、単なる横槌の柄または陽物形とみるのも可能である。6810・6811はその大きさからミニチュア横槌としたが、小型の横槌の柄であるかもしれない。6812は平面形からミニチュア竪杵としたが、握部と搦き部の径の差があまり無い点にやや疑問が残る。

14 楽器・遊戯具 (6813~6815)

(1) 琴柱 (6813)

琴本体は確認していないが、琴柱が1点出土している。6813は、上面に弦受けの溝が切られ、下面には三角形の削り込みが見られる。

(2) 独楽状木製品 (6814・6815)

遊戯具としての一般的な独楽は、径がおおよそ数cmと小型であり、回転体に仕上がっていて下端が乳頭状に突出するものであるが、ここに拵定したものは、単に形態が独楽に似ているということから「独楽状木製品」としたものである。したがって、遊戯具の範疇に入れるべきものではないかもしれないが、とりあえずここに措くこととした。

6814はおおよそ独楽のような形状を呈するが、軸がずれており、削りも粗いままで一部には樹皮が残っている。6815は回転体に近いが、独楽としては大きすぎると思われる。

15 雑具 (6816~7076)

(1) 樹皮紐 (6816~6824)

樹皮紐は、曲物や指物などの結合や割れた材の補修などに使われる。一般には「樺紐」と呼称することも多いが、ここでは「樹皮紐」とした。

ここでは樹皮紐のうち、単に曲物などの綴じ部から剥落したような小物は対象とせず、それらに使用する前段階と思われる塊状のものを中心として図示した。図示数は少ないが、約5mm幅の狭いもの(6816)から、約6cm幅の広いもの(6824)までがある。

(2) 火付け木 (6825~7076)

先端(主に片方のみ)が炭化した棒状の材を火付け木としたが、その性格には不明な部分が多い。静岡県上土遺跡(矢田勝他1996)では「箸状木製品」、山梨県大師東丹波遺跡(小林健二編1997)では「斎申」と呼称され、いずれも出土状況から考えてその祭祀性が論じられている。ここでは、とりあえず単純ながら「火付け木」と呼ぶこととし、雑具の項に含めた。

火付け木は、古墳時代から中世後期まで様々な時代の遺構から出土しているが、特に、馬形などの祭祀具が多く出土する遺構・層位に集中する傾向がある。全部で2,180本出土したが、そのうち252本について実測し図示した。

16 土木材 (7077~7159)

ここに含めたものは、(1)水制遺構の芯材、(2)種、(3)平成11年度発掘の水制遺構の構成材及び主に自然流路出土の杭である。

(1) 芯材 (7077~7110)

平成12・13年度に発掘した水制遺構を構成する杭類は、構造上の性格から、直立杭・斜杭・横木・縦木・矢板・構造材・かませ木に分別して取り上げてきた。詳細は、第1分冊の第4章第2節を参照いただきたい。

水制遺構の構成材は総数9,037本に及び、土木材全体としては13,325本に達する。このうち図版として取り上げたものは、建築部材などの転用品が主である。表18は、水制遺構の構成材の数が200本を超える遺構について、第4章第5節で述べた杭の木取りの分類ごとに集計した表であるが、この中でも、SW14におけるIV類(板材転用品)の割合が比較的大きいことがわかる。そこで、板材転用品と思われる杭のうち、SW14の構成材を中心にして実測した。なお、ここでは個々の遺物についての説明は省くこととする。

表18 主な水制遺構の構成材の分類

遺構名	各分類毎の本数と割合 (上段=本数 下段=割合「%」)							合計本数
	I	II-1	II-2	II-3	II-4	III	IV	
SW43	2395	40	15	64	26	48	113	2793
	(85.8)	(1.4)	(0.5)	(2.3)	(0.9)	(1.7)	(4.0)	
SW55	517	1	1	13	14	15	44	659
	(78.5)	(0.2)	(0.2)	(2.0)	(2.1)	(2.3)	(6.7)	
SW62	542	2	0	8	11	2	20	597
	(90.8)	(0.3)	—	(1.3)	(1.8)	(0.3)	(3.4)	
SW30	441	2	0	2	8	2	1	458
	(96.3)	(0.4)	—	(0.4)	(1.7)	(0.4)	(0.2)	
SW13	290	8	2	5	6	2	1	319
	(90.9)	(2.5)	(0.6)	(1.6)	(1.9)	(0.6)	(0.3)	
SW72	248	3	0	2	16	2	17	313
	(79.2)	(1.0)	—	(0.6)	(5.1)	(0.6)	(5.4)	
SW63	259	0	0	6	9	3	15	299
	(86.9)	—	—	(2.0)	(3.0)	(1.0)	(5.0)	
SW47	249	1	3	3	4	3	11	276
	(90.2)	(0.4)	(1.1)	(1.1)	(1.4)	(1.1)	(4.0)	
SW14	149	7	5	10	10	9	53	247
	(60.3)	(2.8)	(2.0)	(4.0)	(4.0)	(3.6)	(21.5)	
SW87	64	0	0	1	2	0	10	223
	(28.7)	—	—	(0.4)	(0.9)	—	(4.5)	
SW 1	190	0	0	4	5	1	5	209
	(90.9)	—	—	(1.9)	(2.4)	(0.5)	(2.4)	

(2) 樋 (7111~7113)

断面形がU字形ないしはV字形を呈した長い材を樋とした。7111は2つに分割され、矢板・枕列に転用されていた。両側面と裏面が垂直に近いことから、角材を転用した可能性もある。内面は逆台形状に抉られており、きれいに成形はされていない。

(3) 杭 (7114~7159)

ここで述べる杭は、平成11年度発掘の水制遺構構成材と、単独で出土した杭である。平成11年度の水制遺構構成材は、先述のような分別をせず、単に「杭」として取り上げたため、ここに一括した。

7130は、木取りや断面形状にこそ特徴は無いが、正面に未貫通の方形孔が開けられている。7139は、左側面が丸みを帯びていることとその木取りから、板材の転用であると思われる。

17 建築部材 (7160~7677)

(1) 柱 (7160~7322)

柱材は、建物の上屋構造を支持する最も重要な部材である。発掘調査においては、柱穴に遺存している柱根は柱材の最下部として認定できるが、柱穴以外の場所で出土した部材を柱材と認識することは極めて困難である。その理由として、床材や梁・桁などの横架材との仕口部に加工痕が残りにくいことや、柱材が完全な形で遺存していることが少ないことなどが挙げられる。そのため今回は、横架材との仕口方法が推定できる28点の材と、発掘調査時に確認した柱根・礎板を「柱」として報告する。なお、柱材は竪穴住居用と掘立柱建物用に区別されることもあるが、今回はすべて一括する。

① 柱材 (7160~7187)

横架材との仕口部の形態から以下のように分類した (図73)

A類 二股に枝分かれする部分を利用しているもの

A 1類 V字状の枝分かれ部分を利用するもの (7160~7165)

A 2類 L字状の枝分かれ部分を利用するもの (7166・7167)

B類 柱頭に出納を作り出すもの

B 1類 出納の断面形が円形を呈するもの (7168~7176)

B 2類 出納の断面形が方形を呈するもの (7177~7180)

C類 柱頭に鬚太を作り出すもの (7181~7187)

C 1類 縦の半截距離が短いもの (7181・7182)

C 2類 縦の半截距離が長いもの (7185・7187)

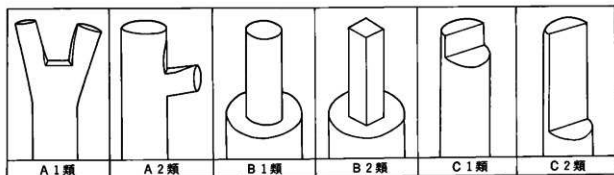


図73 柱材の分類

A類は、二股部で横架材を受けるものである。A1類は分かれた2本の枝の太さがほぼ均等であるが、A2類は樹幹から伸びる枝の方が細い。また、A1類は樹幹が太く屈曲しているものが多いが、A2類は樹幹がやや細く直線的である。そのため、A1類とA2類では同じ柱材でも用途を異にする可能性がある。7165は、一部剥落しているものの完形品に近い。二股部の先端はいずれも斜めに加工され、樹幹の下端は平坦である。下端から二股部までの長さは約290cmで、樹幹の下方がどれくらい埋められていたかは不明だが、仮に建物が平地住居で柱穴が深さ約70cmと仮定すると、二股部までの長さ、つまり天井までの高さは約220cmになる。7166は、木肌面がとても平滑であり、上端の加工も丁寧に施されている。7167は、全面に手斧痕が明瞭に残り、2次的に転用されている可能性が高い。

B類は、出柄で横架材の柄孔を受けるものである。B1類の出柄は、直径2.5~3.5cmとほぼ均一である。長さは様々であるが、12~15cmほどのものと21~26cmのやや長めのものが比較的多い。B2類の出柄は、最大幅が4.2~4.9cmで長さ15cm以上のものが多いが、7179は最大幅が3.6cmとやや狭く、長さも3.8cmと短い。B類の樹幹の断面形は大半が円形であるが、7180は方形、7171は三角形である。7171の2面は打割製材時のままであり、1面のみ手斧痕が確認できる。7174・7175は、いずれもSW63の出土であり、長さが約260cmでほぼ同じであることから、同一の建物で使用されていたと考えられる。7175は、下端より約35cm上を境に風蝕具合が違ふことから、柱穴内に35cmほど埋まっていたと考えられ、仮に建物を平地住居とすると、出柄までの長さ、つまり天井までの高さは約228cmとなる。7177も、下端より63cm上を境に風蝕具合が違ふため、柱穴内に約60cmほど埋まっていたと思われる。また、下端より約100cm上を境に、上部は樹幹の直径が12.3cm、下部は7.6cmと異っており、その境は上部より斜めに削られている。7170は、樹幹の直径が7cmとやや細く、表面が炭化している。

C類は、隅柱と隅柱の支点間距離内に架かる横架材を支持する柱とされている(伊藤友久2000)。C1類の2点は、いずれも樹皮が残存しており、樹幹と鬘太の境は垂直に削り込まれている。7182は、半載した部分の裏面に一辺5.7cmの未貫通の穿孔があり、周囲に浅い溝が巡ることから、この部分で梁材と桁材が結合し、縄などで緊縛していたと考えられる。C2類のうち、7185は、樹幹と鬘太の境が約45°の傾斜で削り込まれており、鬘太の長さは約80cmである。7183は、上端に鬘太の痕跡が残る。柱身には上下2箇所にて緩やかな削り込みがあるため横架材と組み合っていた可能性があり、削り込み間の距離は心々で約110cmである。7184は、鬘太の削り込みが約2cmと浅いが、樹幹が直線的であることから柱材とした。7186は、柱身にV字状の削り込みを有する。

② 柱根 (7188~7306)

柱根は、竪穴住居や孤立柱建物に使用されていた柱の地下部分が残存していたものである。ここに指定したものは、基本的にはピットや竪穴住居の柱穴から出土したものである。

木取りや断面形、底部の形態から以下のように分類した(図74)。

木取りの分類

A類 丸木を分割した材を用いているもの (7188~7247)

B類 芯持材を用いているもの (7248~7306)

断面形の分類

1類 多角形が明瞭なもの

2類 ほぼ円形を基本とするもの

底部の形態の分類

a類 ほぼ平坦に削られるもの

b類 斜めに削られ平坦でないもの

また、実測しなかった柱根についても、可能な限り上記の観点に従って分類した。表19は、実測の如何に関わらず柱根の形態分類を集計したものである。

A類では、四・六・八分割されたものが多い。

1類では、方形の角を面取りした八角形が多い。面付けの幅も様々であり、7207のように正方形に近いものや7225のように正八角形に近いものなどが見られる。

底部の形態については、据え置くということをご考慮すれば平坦、つまりa類の方が理想的であると思われる。しかし、当遺跡の場合b類も比較的多く見られる。当遺跡及びその周辺は比較的軟弱な地盤が多いこと、何らかの関係があると言えよう。

底部には、斧または手斧による切断・加工の痕が多く残されているが、7202・7204などの底部は鋸によって切断されている。なお、底部や胴部側面に見られる工具の痕から読み取れるその刃幅は、3cmを始めてとして4.5～6cm辺りが多く見られ、最大幅は9cmである。

③ 礎板 (7307～7322)

礎板は、柱の下や周囲に敷いて柱の沈下防止や正立の働きなどをする。

実際に柱とともに出土したものは少なく、ここでは、主に柱穴と思われるビットから出土したものを礎板として措置した。

7307～7309は、同一の遺構から一括で出土した。そのうち7307は、出土時には5つに分かれていたが(7307A～7307E)、接合して一つの大きな塊になった。その形状から、柱を分割して転用し礎板としたものと思われる。7319は、上面に柄状に突出する部分があることから、何かの転用品と思われる。

全般的に礎板の形態的特徴としては、①：平面形は長方形が多く、②：短辺側を表から斜めに削り落としており、③：裏面はほぼ平坦である、ということなどが挙げられる。

(2) 横架材 (7323～7494)

横架材は172点出土した。柱などの垂直方向の材と直交して組み合うものを横架材として報告するが、横架材9・10の丸木芯持材などは柱の可能性も考えられる。

形態の特徴から以下のように横架材1～10に分類でき、さらに分類毎の細分が可能である。

① 横架材1：端部に柄を作り出す材 (7323～7340)

A類 柄が中央にあるもの (7323～7328)

B類 柄が一方に偏るもの (7329～7340)

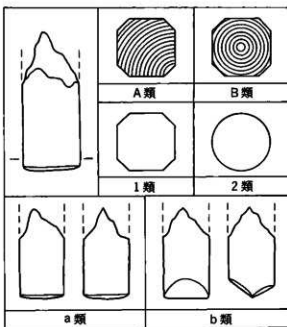


図19 柱根の分類

表19 柱根の分類集計

A類	B類
97本	93本
1類	2類
90本	77本
a類	b類
123本	60本

A類には、大型のもの(7327・7328)と小型のもの(7323~7326)がある。大型のもののうち7327は、上端に柄、下端に凹字状の削り込みが見られる。凹字状の削り込みは横架材9の7480と7482にも見られる。7328は、右側面に楕円形状の丁寧な抉り込みがあり、正面の左右側縁部は断面三角形状に盛り上がる。また、材全体は正面中央が高く、側縁に向かい緩やかに傾斜している。この材の性格として、楕円形状の削り込みを船の櫂を設置する場所とすることで船材の一部とも考えたが、削り込み部に櫂の摩滅が見られないため、その可能性は低い。また、両側縁部の盛り上がりと材の断面形から、大和葺きの屋根板の下板とも考えたが、出土した遺構の時期(II~IV期)が大和葺きの時期(IV-3期)よりやや遡ることや、一般の屋根板にはみられる風蝕が見られないことから、屋根板と断定することはできない。小型のものうち、7325は柄内に方形孔があり、込み栓で固定したと考えられる。7326は、柄の肩部が斜めに削り込まれている。

B類には、柄が長いもの(7333・7337~7339)と短いもの(長いもの以外)がみられる。長いものうち、7339は、上下に柄を有するが、右側は割れ口であるため、方形孔が2個あった可能性もある。短いものうち、7332は右側面に切り欠きを有する。7330は、柄上端に釘孔らしき小孔があり、釘により垂直材との結合を強固にしたと思われる。7335・7340は、側縁に方形孔があることから壁板材の可能性もある。7334と7335はほぼ同じ大きさで、ともに柄とその周辺が表裏より斜めに削られる。

② 横架材2：端部に段や傾斜を作り出す材(7341~7364)

A類 段を作り出すもの(7341~7344)

B類 傾斜を作り出すもの

B1類 丸木芯持材(7345・7346)

B2類 半割材(7347~7350)

B3類 断面方形の材(7351~7364)

A類のうち、7342は、上端を材に対し約30°の角度で切断して段を作り出しており、段には方形孔を穿っている。7341は、上・下端部に段を作り出している。

B1類の2点は、いずれも直径12cm前後の太い丸太材であり、先端を1方向から斜めに大きく切断している。B2類の7348~7350は、先端を3~4方向から斜めに削り出している。7350は先端が柄状になっており、7349は下端も左右から削り出している。7347は、削り込みの下部に溝状の抉りがある。B3類のうち、7351は削り出した部分に方形孔をもつ。7354~7357はいずれも幅30cm前後で、手斧に刃こぼれがあるという共通性がある。7359の先端は表面が段状になり、裏面が傾斜している。7362は先端を表裏から削り出し、最終的に折られている。7364は、表面のみ斜めに削り込んでいる。7358は表面の一部が円形に窪み、その周囲まで炭化している。

③ 横架材3：端部を斜めに切断する材(7365~7369)

5点図示したが、いずれも屋根に懸かる壁板材の可能性もある。7369は下方が炭化しており、7365は下端が欠落しているが、ともに方形孔があった可能性もある。

④ 横架材4：縁辺部に溝が彫られる材(7370~7373)

7371は、上端に帯状の変色帯、下端に断面皿状の溝をもつ材であり、両端とも他の材と組み合わせていたと思われる。7373は、上端の正面側に段、裏面側に溝を有することから、縄などによって他の材と緊縛していたと考えられる。

⑤ 横架材5：側面に挟り込みがある材（7374～7402）

A類 垂直に近い角度で他材が組み合うもの

A 1類 断面三角形形状の材（7374・7375）

A 2類 断面方形形状の材（7376～7387）

B類 水平に近い角度で他材が組み合うもの

B 1類 右側面から左側面まで挟り込みがあるもの（7388～7396）

B 2類 一側面から中央まで挟り込みがあるもの（7397～7399）

C類 斜めに他材が組み合うもの（7400～7402）

A 1類は、棟を支える横架材、もしくは、床板を支える横架材である。7374の左右側面にはいずれも、上端に1箇所斜めの挟り込みが、上端より約70～90cm下に2箇所弧状の挟り込みがそれぞれ施される。棟を支える横架材とした場合、斜めの挟り込みは梁と桁の交点付近から斜めに伸びる材を固定しており、弧状の挟り込みは叉首を支えていたものと考えられる。7375は、上・下端に水平方向に貫通する方形孔を有する。上下とも孔から約80cm内側には縦方向の挟り込みがあり、ここに他材が垂直に組み合っていたものと思われる。挟り間の距離は心々で約290cmである。A 2類は、挟り込みが弧状を呈するもの（7377～7380・7387）と方形形状を呈するもの（7376・7381～7386）がある。7380は斜めの挟り込みであり、7377～7379は表裏より断面円錐状に挟られている。7376は、材の断面形が台形～蒲鉾形を呈する。挟り込みは近い位置に3箇所あり、下方の2つは丁寧な加工が施されているが、上方のものは粗い。7382は上下に挟り込みがあり、その距離は心々で約126cmである。7383は、挟り込みの上に2条の溝が斜めにあり、いずれも樹幹を全周する。これは、縄などで緊縛する用途が考えられるが、斜めであること理由は定かでない。7386は、現状では断面三角形を呈するが、2次的に打割されているためA 2類とした。

B 1類は、丸木芯持材（7393・7395・7396）と板材（芯持材以外）に分かれる。7394は上端に長さ12.5cmの方形の挟り込みがあり、その中央に直径4.0cmの円形孔が穿たれている。挟り込みは他の横架材との仕口であり、円形孔は柱の出柄を受けたものと考えられる。7388も、7394と同様に挟り込みと孔が表裏に見られるが、孔は未貫通である。7395は、両端に断面逆台形状の挟り込みを有し、平坦面の長さは約16cmである。挟り間の距離は心々で約196cmであり、表面は一部炭化している。B 2類のうち、7398は、長さ約12～17cmの方形の挟り込みが4箇所以上にあると思われる。挟り間の距離は心々で約30cmと狭いことから、床を張るための根太を設置した大引の可能性もある。7399も、7398と同じ形態であるが、挟り間の距離は心々で約70cmと広い。

C類は3点図示した。7400は、材全体が断面台形を呈するが、材の中央付近に垂直に穿たれた横孔（えつりあな）があることから、他の材が斜めに結合していたと考えられる。

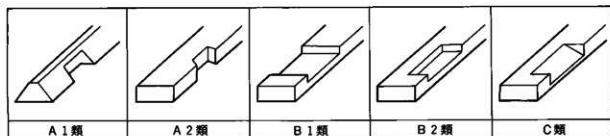


図75 横架材5の分類

⑥ 横架材6：材の中央に溝や連続する小穿孔を有する材（7403～7409）

A類 溝が彫られるもの（7403～7406）

B類 小孔が連続して穿たれるもの（7408・7409）

C類 断面L字状を呈し、連続する小穿孔（釘孔）を有するもの（7407）

A・B類はいわゆる壁受材であり、C類は茅負である。

A類は4点図示した。7403は、上方に幅約15cmの断面逆台形の蟻溝を有しており、そこから下に幅約3cmの板溝が掘られている。蟻溝と結合する頭部をもつ明確な柱材は出土していないが、不明材に描いた7636などはその可能性が高い。7404は両端に方形孔がある。明確な溝ではないが、幅2～3cmの平坦面が直線的に伸びていることから壁受材とした。7405は2条、7406は1条の溝を有する。

B類は2点図示した。7408は、材の中心に一辺約7cmの方形孔が40cm前後の間隔で4個並んでおり、材は厚さ4.7cmで他の材と比較して厚い。7409は、一辺2.0cmの方形孔4個と一辺3.5cmの方形孔1個が、孔間約9cmで直線的に並んでおり、下端には材を横に貫通する方形孔もしくは抉り込みがある。壁木舞を挿入した壁受材と考えられる。

C類である7407は、正面上段に無数の竹釘孔があり、部分的に竹釘が残っていた（7407A～7407C）。5本の鉄釘が竹釘の上から打ち込まれており、その間隔は平均で39.8cmである。正面下段から裏面にかけては、ほぼ垂直に方形孔が穿たれており、その間隔は平均24.8cmであり、鉄釘孔と考えられる。裏面の方形孔の周囲には、垂木の圧痕と思われる皿状の窪みが残っており、その断面形態から垂木は丸垂木であった可能性が高い。左側面から裏面に抜ける目途孔（もくとあな）と、正面上段中央の窪みは、茅負使用後に施されたものと思われる。

⑦ 横架材7：側縁に小孔が穿たれる材（7410～7418）

横架材7は、主に壁板材か床板材と考えられる。梁や桁などとの組み合わせ方は、横架材1のような柎と柎孔との結合や、横架材6のような壁受材との結合が考えられる。

7410は、左右側縁や中央に小穿孔とその痕跡があり、上下側縁には窪みや傾斜を有する。7411は、腐食のため定かではないが、右側面が断面柎状に突出している可能性がある。7415と7417は、右側面が「く」の字状に抉られている。7417は左側面が二刃刺（すべりははぎ）状となっており、その脇には目途孔と思われる小孔が50～60cm間隔で穿たれることから、側面の継手と目途孔に通す紐による緊縛で他の横架材と組み合っていたと考えられる。7416は、左上方に右下がりの小穿孔が3箇所ある。

⑧ 横架材8：丸木芯持材で、通し柎孔を有する材（7419～7427）

未貫通の穿孔（通し柎孔）をもつ材である。芯持材であることから柱材の可能性もあるが、7423は、上端に方形孔、側面に通し柎孔があり、両者の角度は約130°である。仮にこの材を柱として、通し柎孔を壁木舞などの挿入孔とした場合、建物は多角形状を呈するはずであるが、当遺跡の調査で検出した竪穴住居跡や掘立柱建物跡はすべて方形であることから、こうした材をすべて横架材として報告することとする。7421も、下方の削り込みと通し柎孔の角度はやや異なる。7424は、孔間の角度が約145°の2孔1対の孔が3段あり、1段毎の間隔は約50cmである。7426は、丸木芯持材の表裏・側面を手斧で加工し、断面方形としている。上・下端に通し柎孔があり、その間は心々で約115cmである。7427は断面八角形を呈し、全面に手斧痕が残る。上端約25cmが風蝕しており、風蝕部と通し柎孔までの長さは約90cmである。

⑨ 横架材9：横架材1～8以外で柄孔を有する材（7428～7487）

7434は、上方の長さ約9cmの削り込み内に一辺約4.2cmの方形孔が穿たれており、そこから約20cm下に通し柄孔を有する。7441は、一辺約10cmの削り込み内に一辺約4cmの方形孔が穿たれ、下端部は他材との継手と考えられる断面台形状の削り込みがある。7442は方形孔が2個穿たれており、上方の孔の表面は孔周囲を斜めに削っている。下方の孔は裏面に溝状の圧痕が残ることから、他の材と組み合っていたと思われる。7443は、材の両端に2段に穿たれた柄孔がある。柄孔付近の断面は溝鋸形であるが、中央は楕円形～隅丸方形を呈する。7454は、表・裏面に手斧痕と刃物痕がよく残っており、正面中央付近には円形の刃物痕が見られるため、円く削り抜く意図があったのかもしれない。7463は、上端に通し柄孔、その14cm下に方形柄孔を有する材であり、正面の中央部分か約4cm幅で帯状に盛り上がっている。7464は、下端に方形孔があり、その周囲のみ円形に炭化していないことから、方形の出柄を有する円柱材と組み合っていたと考えられる。また上端部は、幅約5mmの溝が削り込まれ断面凹字状となっており、他の板材との仕口加工の可能性が考えられる。7466・7472・7485は、角材に柄孔を穿ったものであり、7466は4つの角を削いで断面八角形にしている。7467は、上下2箇所方形孔を有し、左側面の上下は弧状に削り出される。左側面の形状から妻側屋根板の可能性も考えられる。7468は、上端に方形孔、下端には段を有する。方形孔は柱との仕口孔で、段は継手の可能性が高い。正面には、長さ約10cm、幅約6cmの2孔一対の削り込みによる穿孔が3箇所あり、その断面形態は逆台形状を呈する。7471は、正面が右側面に向かって緩やかに傾斜しており、幅1～2cm程度の浅い溝状の窪みが5～8cm間隔で多く見られる。この窪みは垂木の圧痕の可能性もある。7478は方形孔が2個有し、上端には棧孔と考えられる小孔が穿たれている。7480と7482は、上端に凹字状の削り込みを有する材であり、7482は表裏面に粗い手斧痕が無数に残っている。7486は、上下両端に一辺約6cmの方形孔を有し、孔間は心々で約169cmである。7487は丸木芯持材であり、方形孔2個と上端に方形の挟りが1箇所見られる。孔間の距離は心々で約140cm、孔と挟りの距離も約140cmであることから、挟りは孔であった可能性もある。なお、7487は柱材の可能性もあるが、方孔が3個並ぶ可能性もあるため横架材として報告する。

⑩ 横架材10：横架材のうち、分類していないもの（7488～7494）

7489は、断面L字状を呈し、左右両側面に挟り込みないしは方形孔を有する。7490は板材であり、左側縁上下を大きく弧状に削り込んでいる。7491は、左右側面に未貫通の方形孔を有する材であり、柱材の可能性もある。孔間の距離は心々で約50cmである。7492・7493は、上下両端に幅約10～12cmの平坦面があり、その間が皿状に窪んでいる。7494は、上端部が3.5cmほど盛り上がる材であり、盛り上がりの上は平坦に仕上げられている。

(3) 戸口装置（7495～7521）

扉板とその周囲を構成する枠組みであり、扉板のほか、方立、辺付、楣・蹴放しなどがある(図76)。今回の調査では方立と辺付は確認できなかったため、扉板と楣・蹴放しのみを報告とする。また、楣と蹴放しの区別が困難であるため、一括して報告する。

① 扉板（7495～7506）

扉板は12点出土した。すべて一木作りであり、門受けの有無・形態と凹孔の位置によって、以下のように分類できる(図77)。なお、分類は「六大A遺跡」を基本とした(穂積2000)。

門受けの分類

A類 門受けの無いもの (7495~7497)

B類 門受けのあるもの

B 1類 門受けが撥状に開くもの (7502~7504)

B 2類 門受けが撥状に開かないもの (7499)

門孔の分類

a穿孔 把手側面の中央に穿孔が施されるもの

b穿孔 把手側面の扉板本体に接する部分で穿孔が施されるもの

ほぼ完存しているものは3点のみであるが、B類よりA類の方が、縦・横に長いものがみられる。扉板の側面は概ね扉軸がある側が丸く、反対側は尖る傾向がある。丸いものは扉の閉閉を円滑にし、尖るものは本体の軽量化の意図や、両開きの召し合わせを意図しているものと考えられる。

A類のうち、7495は上方に補修孔があり、把手部の直線的な割れ面には鋸痕が残る。7496は下端が表表面より削られており、類似品が当遺跡に北接する顔戸南遺跡でも出土している。

B 1類の7502~7504は、いずれも門孔から扉軸がある側面にかけて門がスライドする部分のみ顕著に窪んでいる。また、7503は右下に補修孔がある。B 1類の門孔はすべてb穿孔であり、1点のみの出土であるB 2類 (7499) の門孔はa穿孔である。

なお、12点いずれも時期は弥生~古墳時代 (II~IV期) に属する。

② 楣・蹴放し (7507~7521)

楣・蹴放しは15点図示した。楣と蹴放しを区別する基準として、(i)扉の振れ防止のための突起 (扉当り)の有無、(ii)一方の長辺の断面形の屈曲 (風返し)の有無、(iii)扉軸孔の貫通・未貫通などがある。今回図示した15点をこの基準で分類すると、(i)では2点：13点、(ii)では0点：15点、(iii)では10点：1

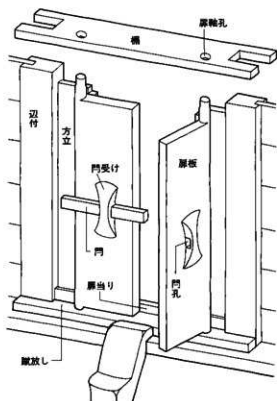


図76 戸口装置の部分名称

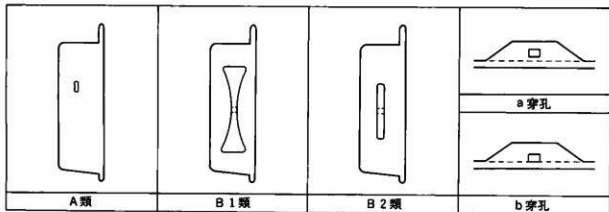


図77 扉板の分類

表20 櫛・蔵放しの属性分析

掲載番号	遺構名	時期	仕口孔 (個)				側面の抉り		帯状突起	断面形態	
			扉軸孔	方立孔	辺付孔	正方形孔 (片側)	開閉側の抉り	逆側の抉り		方形 (A1)	滴錐形 (A2)
7508	NR119	II~IV	1	2	0	0	有	有	無	●	
7509	NR13	II~IV	1	1	—	0	—	—	無	●	
7510	SD78	IV	1	0	0	2	有	—	無	●	
7511	NR86	III~IV	2	2	0	0	有	無	有	●	
7513	SW14	IV	—	1	—	—	無	無	無		●
7514	SW55	IV	2	0	0	2	有	無	無	●	
7515	SW 8	IV	1	2	1	0	無	無	無		●
7516	SW57	IV	—	2	2	0	無	無	有		●
7517	SW62	IV	1	0	0	2	無	無	無		●
7518	NR50	IV	1	—	—	—	有	—	無	●	
7519	SW87	V	2	1	—	—	無	—	無		●
7520	NR37	V	1	0	0	0	—	—	無		●
7521	NR68	II~IV	2	—	—	—	無	無	無		●

点となり、大きく差が生じる。そのため、櫛と蔵放しを区別せずに、ほぼ全体の様相がつかめるものについて表20のような属性分析一覧を作成した結果、断面形と仕口孔の形態から以下のように分類することができる (図78)。

断面形の分類 (A分類とする)

A 1類 方形を呈するもの (7508~7512・7514)

A 2類 滴錐形ないしは一方の先端のみが収束するもの (7513・7515~7521)

仕口孔の分類 (B分類とする)

B 1類 方立仕口孔や辺付仕口孔が長方形を呈するもの

B 2類 B 1類のような長方形孔が無く、材の側縁部に正方形に近い孔を2~3個有するもの

断面形の分類 (A分類) では、扉板が開閉する方向の側面にある抉りの有無も分かれる。つまり、A 1類では7509を除いて扉板が開閉する方向の側面に抉りを有し、A 2類では7518を除いて抉りが無い。この抉りは、7511では材の裏表面に対して斜めに、7508と7514ではほぼ垂直に抉られ、その角度に違いがある。また、7508は扉板が開閉する方向と反対の側面にも抉りを有する。なお、この抉りの用途は不明である。

仕口孔の分類 (B分類) では、B 1類とB 2類で仕口孔の形態と位置が大きく異なるため、戸口装置全体の形態も異なっていたと考えられる。B 1類のうち、方立仕口孔と辺付仕口孔が両方あるものは7515と7516の2点のみで、辺付仕口孔が7516は貫通、7515は未貫通という違いがある。また、方立

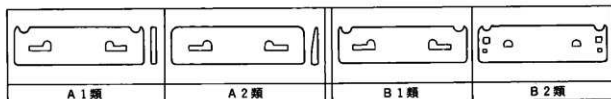


図78 櫛・蔵放しの分類

仕口孔のみあるものは、7508と7511である。B2類の正方形孔は、今回の調査では、材の側縁に2個ずつ見られるが、孔周辺が欠失しているものが多いため不明な部分もある。当遺跡に北接する顔戸南遺跡では3箇所ずつ穿たれたものがあるため、当遺跡出土のものも2箇所ではなく3箇所ずつ穿たれたものが含まれている可能性がある。

扉当たりと考えられる帯状突起は7511と7516にあり、ともに材の一側縁部が約5mm高くなっている。扉軸孔は、1辺が丸く、他3辺が直線的であるものが多く、丸い方向に扉板が開閉すると考えられる。孔数については、2孔あるもの(両扉式)が4点(7511・7514・7519・7521)、1孔のみのもの(片扉式)が5点(7508・7510・7515・7517・7520)であり、7520以外はいずれも貫通孔である。7520は、扉軸の位置に相当する箇所に直径約4cmの窪みがあるが、未貫通である。7513は、方立仕口孔はあるが扉軸孔は確認できなかった。扉軸孔が2孔のもの孔間距離は、心々で7511が60cm、7514が57cm、7519が54cm、7521が61cmであり、いずれも60cm前後となっている。扉板の幅は、7502が31.0cm、7503が32.8cmであり、召し合わせ部分を考慮すると扉軸孔間が約60cmであることに矛盾はない。なお、15点のうち8点が炭化している。

他の特記事項を以下に記す。7514は正面中央付近のみ炭化しており、自然に焼失したものとは考え難い。また、表裏面ともに手斧痕がよく残っている唯一の材である。7515は、方立仕口孔と刃付仕口孔の周辺のみ炭化していないことから、方立と刃付の断面形や位置をある程度推定できるとと思われる。7516は、左側面が弧状を呈するため柱材と接していた可能性があり、表面の刃付仕口孔周辺が斜めに削られている。なお、時期については、7519と7520が古代(V期)で、他はすべて弥生～古墳時代(II～IV期)である。

(4) 屋根材 (7522～7574)

いわゆる小屋組を構成する材であり、ここでは、垂木・屋根板・柿板(こけらいた)・束を報告する。なお、棟木は横架材5として、茅葺は横架材6として、それぞれ報告する。

① 垂木 (7522～7546)

垂木は25点図示した。垂木は、棟木から桁に架ける細長い材であり、上端部に棟木との仕口加工が施される。しかし、それ以外には明確な加工痕が残ることが少なく、垂木と認識できなかった個体も多いと考えられる。上端部の形態より以下のように分類できる(図79)。

A類 上端部の下に1箇所抉り込みを入れるもの(7522～7539・7542)

A1類 抉り込みの底面が平坦になるもの(7522～7527)

A2類 抉り込みの上方が緩やか、下方が急になるもの(7528～7538)

A3類 抉り込みの上方が急、下方が緩やかになるもの(7539・7542)

B類 上端部より垂直に抉り込みを入れるもの(7546)

C類 上端部を乳頭状に作り出すもの(7540・7541・7543～7545)

A類の上端部の加工には、表面より斜めに削るもの(7539)、裏面より斜めに削るもの(7522・7529・7531・7536)、表・裏両面より斜めに削るもの(7525・7534・7538)、全周を削るもの(7523・7528・7535・7537ほか)などがある。7532は杭に転用されているが、表面は手斧で丁寧に削られ、断面は多角形になっている。7539は、表面と裏面に抉り込みを入れているが、その位置はずれている。直径が11.7cmであり、今回垂木としたものの中では比較的太い。

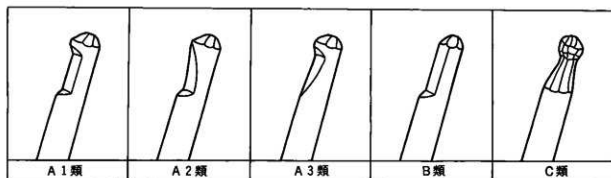


図79 垂木の分類

B類は1点のみの確認である。7546は、上端からはほぼ垂直に削り込まれるが、途中からはやや傾斜しているため、A類の2次的加工の可能性もある。上端部は、裏面より粗く斜めに削られている。

C類の断面形は、大半が円形であるが、7543のみ板状を呈する。そのため、7543は紡織具の可能性もあるが、長さが約130cmで紡織具としては長すぎるため垂木とした。7540は、頭部と頸部の加工が丁寧であり、頭部の直線部分はとても平滑である。7541は、頭部よりやや下に上方が緩やかで下方が急になる袢り込みを有する。また、下方にも袢り込みが2箇所ある。

② 屋根板 (7547~7556)

10点の板材を板葺屋根の板材とした。その理由は、表面ないし裏面に葺足と考えられる風蝕があること、両側縁の上下いずれかに小穿孔があること、表面中央に方形の削り込みがあること、の3点である。これらの材は、いずれもSM284で護岸施設の矢板として使用されていたことから(第6分冊一写真図版434)、一軒の家屋を解体して、そのまま矢板に転用したものと考えられる。

10点はいずれも、長さ55cm前後、幅15~20cmほどの方形の削り込み部があり(表21)、その部分は概ね黒色を呈している。なお、表側に風蝕があるものについては、削り込み部が方形であったのか、上端から下端まで抜けていたかは定かでない。穿孔はいずれも左右に1箇所以上あり、7552のみ四隅に穿たれる。削り込み部下端の左右に穿孔があるもの(7553~7556)は、穿孔が水平な位置になく、わずかに上下にずれている。裏面には手斧痕が明瞭に残り、7552は左下側面に袢り込みもある。

表21 屋根板の属性分析

掲載番号	7547	7548	7549	7550	7551	7552	7553	7554	7555	7556
全長(cm)	61.2	63.2	63.5	64.3	64.5	64.9	65.3	66.5	67.4	68.7
幅(cm)	22.3	21.5	22.0	24.2	25.5	22.7	25.5	24.7	25.1	19.5
厚さ(cm)	2.0	2.0	1.8	2.0	1.9	1.5	2.0	2.1	1.8	2.3
削り込み幅(cm)	16.5	15.8	16.8	17.5		18.0	20.5	17.5	19.0	
削り込み長さ(cm)		56.5		55.1	54.0		54.5	55.6	55.0	54.3
上段の長さ(cm)		6.7		9.2	10.5		10.8	10.9	12.4	14.4
左側縁	上穿孔	有	有	有		有	有	有	有	有
	下穿孔				有	有	有	有	有	有
右側縁	上穿孔			有	有	有				
	下穿孔	有	有	有			有	有	有	有
表風蝕	有		有			有				有
裏風蝕				有	有		有		有	有

③ 柿板 (7557~7573)

厚さ1cm以下、幅7cm以下で、長方形を呈する板材を柿板とした。その理由は、これらの板材で、竹釘(木釘)が残っていたものが2点以上(7557・7564など)、釘孔のみ残るものが20点以上(7562・7566・7567・7572など)確認できたためであり、図化した以外にも数多く出土している。こうした材は、A8・A16・D1・D6地点から出土しており、特にA16・D6地点の木制遺構からの出土が多い。A16地点では、約50枚の柿板(細かく裂けたもの以外)が出土し、そのうち釘孔があるものが12枚あり、竹釘は1枚のみ残存していた。柿板の残存長は30~40cmのものが多く、稀に50cmを超えるものがある。残存幅は3~5cmのものが多く、釘孔は上下方向に偏り、大半は1枚につき1個である。竹釘(木釘)の多くは、長さ約5mm、厚さ約1mmほどで、大半は先端が尖っている。

7557は下端が風蝕しているが、上下に2箇所ずつ、計4箇所釘孔があり、そのうち3箇所に竹釘(7557A~7557C)が残っていた。7558・7561・7562は、上方に数本の線状痕が見られる。

④ 束 (7574)

束には、床を支える床束や小屋組に使用される小屋束があるが、当遺跡では、小屋組に使用される束と思われる縦材を1点確認している。7574は、上下に方形枘をもち、枘の基部は風蝕している。束身の長さは約75cmである。

(5) 梯子 (7575~7581)

梯子は7点図示した。いずれも、表側に足掛部を作り出した一本梯子(板梯子)で、足掛部の断面形態により以下のように分類した(図80)。なお、分類は「六大A遺跡」と同じである(穂積2000)。

A類 足掛部上面は直立し、下面はなだらかに平坦面へ移行するもの(7576~7579・7581)

B類 足掛部上面は直立し、下面は直線的に平坦面へ移行するもの(7575・7580)

完形品はなく、全体的に遺存状態は良くない。7579は、中央で半分に割れているが、下端部は中央から側面に向かって弧状に削り込まれており、全体では逆V字形を呈していたと考えられる。7578は、上端部の裏面が約70°の傾斜に削られている。足掛部間の長さは、7577・7579が約25cm、7576・7580が約30cm、7575・7578が約35cm、7581が40~45cmであり、一様ではない。

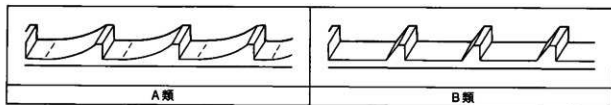


図80 梯子の分類

(6) 藪戸 (7582~7624)

藪戸には、上下2段になっていて、上半分が開き下半分がはめ殺しになる「はじとみ」と、上から下まで一枚に開く「一枚しとみ」、全部をはめ殺しにした「たてしとみ」の3種類がある。このうち、普通よく知られているものは「はじとみ」で、藪戸の上半分が長押を吊元にして上に開き、掛金物で吊り、下半分のはめ殺し部分は必要に応じて取り外せるようになっている(清水英男編1974)。

藪戸は、縦板・棧・枠という各部材から構成される。屋外を向く表の面は縦枠と横棧が格子に組み合い、屋内を向く裏面は横棧のみである。表と裏の区別は、「墓塚絵詞」(遊澤敬三編1987)の中で、

幅1.0cm、深さ1.2cmの溝と、表棧と裏棧が組み合うための長さ3.0cm、幅0.7cm、深さ2.0cmの方形孔が4個見られる。中棧が組み合う方形孔には、直径約1～2cmの小孔が表面から裏面まで斜めに貫通していることから、中棧が緩んだために釘で補修したものと考えられる。

上下枠は、下枠が1点(7621)出土した。上面には、縦板を入れる幅1.0cm、深さ1.4cmの溝があり、その底面には鑿の痕跡が明瞭に残っている。表面には、縦枠の痕跡と釘孔があり、釘は平均15.1cmの間隔で打ち込まれている。なお、釘はいずれも裏面まで貫通していない。表面の左から6番目と7番目の釘孔の間には、下面側に緩やかな挟りがあるが、裏面には見られない。もし、この挟りが藪戸を跳ね上げた時の掛物の圧痕とするならば、表面が抉れていることから、藪戸はやはり屋内に跳ね上げていたことになる。

棧は、表棧が3点(7617・7618・7622)、裏棧が2点(7619・7620)、表裏不明の棧が1点(7623)、計6点出土した。表棧のうち、7617は表中棧、7618は表下棧であり、いずれも表面に縦枠の痕跡が明瞭に残っており、釘孔位置は表23にあるような縦枠の釘孔位置と対応している。裏棧の7619・7620は、釘孔がそれぞれ2箇所に見られるが、これらは偶発的に釘が裏面まで抜けてしまった可能性が高い。なお、いずれも右枠と組み合う端部は、表面が一段低く削り込まれており、上下より斜めに切断され平面台形状を呈している。

今回出土した藪戸(7624)は、現存長166.2cm、現存高41.7cmで、左側面と上部は欠失しているが、検出した建物の柱間より、藪戸の幅は180～200cm程度であったと思われる。また、下枠や右枠に掛物の痕跡らしきものが見られるため、「はじとみ」の上半分であり、その痕跡の位置から判断して屋内に跳ね上げていた可能性が高いと考えられる。

(7) 不明材(7625～7677)

建築部材のうち、その用途がわからないものを一括して不明材とし、丸太材(7625～7631)、棒状材(7632～7656)、板材(7657～7677)に大別した。

丸太材のうち、7626は、下端を周囲から削り込んだ加工痕が残るが、樹幹には加工痕ほとんど見られない。7627はヤリガンナで、7628・7631は手斧で、それぞれ樹幹全体を加工しており、いずれも断面形は多角形状を呈する。7629は、上下端を斧で粗く加工しており、正面側面に一定間隔で無数の線状痕を残している。

棒状材のうち、7639・7642・7647・7652・7654などは、数面に手斧痕が残っており、他の面は打割製材時の状態のままである。このような加工が見られる材は多く、大半が建築部材を杭などに2次的に転用しているものと思われる。7636は、上端に蟻柄状の加工が施されており、柄の基部より下方が風蝕している。また、上端には鋸痕が残り、下端は炭化している。7655は、丸木芯持材の表裏2面を平坦に加工しており、断面は長楕円形状を呈する。

板材のうち、7658は、正面上方に幅5mmほどの窪みが同心円状に見られ、何らかの文様の可能性がある。7662は、上端左側がやや突出しており、左側面が丸みを帯びている。また、7665も、右側面と下端部が丸みを帯びていることから、ともに扉板の可能性が考えられる。7669は、断面が三角形形状を呈する材であり、正面の炭化は顕著であるが裏面は薄く焦げている程度であるため、裏面は他の材の上に載っていた可能性がある。7672は、全面に手斧痕が明瞭に残っており、上下端部は2次的に削り込まれている。

18 用途不明品 (7678~7976)

これまでに説明してきた分類に含まれないものをここで扱うこととする。中には、孔や柄を有するものがいくつかあり、これらの中には指物の部材が含まれている可能性もある。他にも、これまでの分類に含めるべきものや名称のはっきりしたものが、ここに含まれているかもしれない。

用途不明品の形態は多種多様であり、細かく分類することは不可能であった。そこで、とりえず以下のように大別した。なお、この分類はたぶん主観的な要素が大きいため、客観性に欠けるものであることを断っておく。

板状木製品 材の厚さよりも幅が著しく大きいもので、いわゆる板状のもの (7678~7793)

棒状木製品 材の厚さと幅が同じくらいのもので、いわゆる棒状のもの (7794~7892)

その他 上記のいずれとも言い難いもの (7893~7976)

(1) 板状木製品 (7678~7793)

柄孔や釘孔をもつ有孔板材のうち、7681は一部欠失しているが、団扇を逆にしたような形態をしており、中軸線上に小孔が3個開けられている。7684は木の葉状の平面形を呈し、側面同士をつなぐ形で孔が貫通している。7710は、腐食が著しいため上半部の形態は不明だが、下半部は柄状に伸びており、四角い木栓がはまり込んでいる。7711は、円形だったと思われる板材の一部であり、周縁部は表裏両面から斜めに削り落とされている。割れ口から周縁方向に向かって3箇所木栓が打ち込まれており、だば継ぎであったと思われる。

その他の板材のうち、7734は、隅丸方形を呈する薄い小板の左右側縁の正面側を小さく欠き込んでいる。7754は、木の葉状の平面形を呈する極めて薄い板である。7762は、材の右側が割れて欠失しているが、正面にはほぼ等間隔の帯状の疵痕が見られる。大足尾板の欠失品(転用品)あるいは紡織具の可能性などが考えられる。7778・7782は、端部の仕上げなどは若干異なるが、平面形は似ている。7785は、厚さが一定のきれいな板材であり、船底のような形態を呈する。7791は、広葉樹(アカガシ亜属)により作られた長大な材であり、両端が剣先状に尖っている。

(2) 棒状木製品 (7794~7892)

棒状木製品の中には、端部を有頭状に仕上げたものが少なくない。そうした有頭棒状材の断面は、円形・半円形・方形と様々である。7795は、上部は断面半円形だが、下部は断面円形になっている。また、7797も、上部の断面形は正方形に近いのに対して、下部はかなり扁平な長方形になっている。7802は精製品であり、上端には溝が一周巡らせてある。下端は平たくなっており小孔が穿たれている。7799は、上端に溝が巡る点では7802と似ているが、下半部の荒れ具合から考えると何かの栓のようなものであったのかもしれない。

7803・7805・7827は、断面形を多角形状に削り込んだ材であり、7805には長方形の孔があり、7803の上部には側面方向に木釘が2箇所貫通している。7814は、遺存状態が極めて悪く詳細は不明だが、ほぼ等間隔に円孔が穿たれていることから「たも杵」の可能性もある。7840は精製品であり、上方の突起部がないものの紡織具の6259と似た形態をしている。7868は、丸木材を削り出して表面を平滑に仕上げている。その形状から弓を想定できるが、弓弦が確認できないため不明品とした。7872・7892は、丸木の端部のみを細かく加工したものであり、太さもほぼ同じで出土地点も近い。7884は、端部がやや有頭状であり、折損している辺りが湾曲しているため、天秤棒の可能性もある。

(3) その他 (7893~7976)

7943は連弁のような平面形である。断面は隅丸三角形に近く、上方は表側に向かって反り上がっている。下端は裏側を方形に抉り込んでおり、表側から穿った小円孔とつながっているが、下端付近は荒れているため詳細は不明である。7945は、板材の上部を有頭状にして下端の柄状の部分に方形孔を穿っており、『木器集成図録』では「栓」とされている。7946は、その形態から刀鞘の可能性もあるが、欠失部分が多いため詳細は不明である。7949は、側面形がやや反っているが紡錘形を呈する。中央の太い部分には長方形の孔があるが、軸が傾いて穿たれている。7950は、丸木材の上端を四方から削り落とし、表側を階段状に抉り込んでいる。

19 木簡 (7977~7981)

出土状況 木簡は7点出土したが、そのうち3点は同一個体と思われるため、5個体になる。1点はV期に遡る可能性があるが、残りはVI期の屋敷地に関わるものである。

7977~7980は、A地区で検出した屋敷地に伴う遺構からの出土であり、7977~7979は屋敷地を囲うSD18から、7980は屋敷地内のSK52からそれぞれ出土した。7977~7979はSD18の東北隅、北辺部分のFD41グリットで埋土上層からまとまって出土した。溝の埋土は2層に分けられ、下層は薄い。7978は、埋土の上層底付近を掘削中に発見された。VI期(中世)に属するSD18からの木簡の出土は、当初あまり予想をしておらず、埋土の掘削は通常の溝と同様におじり鎌で掘り込み、遺物はグリット毎に置かれた回収カゴに入れていた。一方、当遺跡では木製遺物の残りが良く、美濃国刻印須恵器が試掘で確認されていたことなどから、古代の木簡出土を期待し、特に木簡にふさわしい板状の木製品が出土した場合は、調査員・作業員とも注意をするという心構えを持つようにしていた。これが幸いしてか、出土を予想していなかった遺構であったが、板状木製品が出土した直後に調査員がチェックに回っており、7978の発見につながった。7978の発見後はさらに木簡の出土を期待し、調査方法を、まず溝の埋土をブロック状に切り出し、それを割って木製遺物を選別し、水洗して墨書の有無を確認するという工程に切り替えた。なお、木簡が出土した場合には出土位置を押さえる必要があるが、今回の場合、溝の埋土は植物遺体が非常に多く、通常の掘削では木簡を破損させたり見落とす可能性が高いと判断して、上記の方法をとった。7977・7979は、水洗時に発見したものである。ケズリ屑については、掘削時・水洗時ともに見落としの無いように慎重に作業を進めたつもりであるが発見できなかった。また、7977はバラバラに割れており、破片がまだある可能性があったが、それ以上は発見できなかった。すでに掘削した土中にあるかと思ひ、廃土も探したが見つからなかった。慎重に作業を進めたつもりだが、見落としの可能性もあり残念である。7980は、SK52から出土した。SK52は屋敷地の主屋の東側にある遺構である。SD18と同時期もしくはやや後に埋まりきったと考えられる。7977~7980は、出土状況からいずれも屋敷の廃絶もしくは廃絶にほど近いそれ以前に廃棄されたものと推測され、屋敷に深く関わる遺物と考えられる。

7981は、D7地点NR106から出土した。NR106は西流する自然流路で、III期~VI期にまたがる。木簡はV期と判断される埋土から出土したが、VI期になる可能性もある。

形状 7977Aは傷みが激しく、現状で6片に割れており、また他に失われた部分がある。破断面を見る限り、刃物などを用いて割ってはいない。割れたのが、廃棄時かあるいは調査時かはわからない。木材はヒノキ、木取りは板目で、横材として使用している。文字方向から見ると、左右端は欠失して

おり、本来の大きさは不明である^{*1}。上下端ともに部分的に確認でき、上端は残存長が約0.8cm、下端は約3.0cmである。下端部分を見ると、木目に対して右側から下方にやや丸く膨らんでおり、現状の残存部からだけではそれ以上のことはわからないが、下端は直線的でないことは確かである。現状で、下端のもっとも膨らんだ部分と上端の距離は約21.4cm、狭い部分で約21.2cmである。現存部分に穿孔や切り込みなどの加工は確認できない。7977B・7977Cは墨痕のある木片で、肉眼観察から7977Aと同一個体と思われる。7977Bが長さ約2.8cm、7977Cが長さ約3.5cmである。7978は、下端が欠失し、上端を方頭で作っている。内容から付札と判断されることや、現状での下端幅が上端幅に対し約1mm狭いことなどから、欠失している下端は尖らせていた可能性が考えられる。木材は肉眼観察から7979と同じと思われるのでヒノキと推測され、木取りは板目である。7979は、上端が欠失し、下端を尖らせたものである。現状での上端幅は約1.2cmである。木材はヒノキで、木取りは板目である。7980は幅約1.9cmの角材で、傷みが激しく上下端ともに欠失している。正面とした面に対し右面・左面とも表面が削られており、文字は残画が確認できるのみである。木材は不明だが、木取りは柃目である。7981は幅約1.8cmの板状で、上下端とも欠失している。板材はややいびつで、文字面についてみると下方でやや右方向に曲がっている。木材はヒノキで、木取りは柃目である。

釈文^{*2}

7981		7980	7979	7978	7977
九斗	・ × □ □	・ × □ □	□	・ □ □ □ 三 ×	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
十斗		□			□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
一斗	×	×			□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
(斗力)	(左面)	(右面)			□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
(100) × 18 × 3	(125) × 19 × 18	(用カ) (正面)	(81) × 12 × 3	(82) × 17 × 2	(81) × 214 × 5
081	081	039	019		

7977は、左右両端が欠失しているため一行の字数は不明であるが、上下端は残存しており、6行にわたって記されていることが確認できる。裏面に文字は無い。字数を復元的に見てみると、材の右端は失われているが、「仁王会」の上のスペースの存在から、2行目の1文字目よりさらに右に文字があったとは思われない。下方は、材を横材として利用していることから、横より縦が長くなることは考え難いので、「根」より下に3～4字程度想定できる。したがって、一行6～7字で6行にわたり文字が記されていたものと復元できると思われる。釈文については上記のとおりであるが、3行目の1字目は「志」もしくは「意」の可能性が有る。6行目の文字は木簡の性格から「法」の可能性が考えられるが、現状では不明である。木簡の内容については、「仁王会」という書き出しや「善根」・「奉」など

の文字から、仏教との関わりが明らかである。その性格については、法会を行う際に、その旨と功德を願って僧に書いてもらう「巻教」に当たる可能性がある*²。7978は付札木簡であり、「三斗」という単位から、白米の付札と考えられる。表面の5字目は傷のためはっきりしないが、「と」または「ど」の可能性がある。当遺跡の北側の字名に「顔戸」（ごうど）があり、これに通じるかと思われる。裏面は、文字上に傷があり、また文字についても釈読不能で、内容はわからない。7979も、形状から付札木簡と考えられる。肉眼で見える限り材が7978に似ており、同一個体の可能性が考えられるが確証はない。7980は、四角材の3面に墨書が確認されるが、傷みが激しく、2面については削られて残画のみであるため、釈読不能である。したがって内容や性格は不明である。7981は、習書あるいは何かの書き付けのようなものかと思われるが、よくわからない。

なお、木製品の執筆分担は、19木簡が近藤、10容器—(5)曲物・17建築部材が小野木、他は笹木が執筆し、平田が全体のレイアウトを担当した。

* 1 本木簡の上下左右は、木取りと文字方向から、釈文として掲げた文字方向に対しそれを指している。したがって文字方向上が右、文字方向下が左、書き出し方向が下、書きとどめ方向が上となる。

* 2 木簡釈文の符号・型式番号は原則として木簡学会編「木簡研究」に従うが、ここで使用したもののみについて下記に引用する。

「 」 木簡の上端ならびに下端が原形を留めていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。

□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

[] 欠損文字のうち字数が数えられないもの。

× 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

[] 校訂に関する註で、本文に置き換わるべき文字を含むもの。原則として文字の右傍に付す。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

081型式 折損・腐食その他によって原形の判明しないもの。

019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐食で原形が失われたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損しているもの。

* 3 木簡の釈読については寺崎保広氏、三上喜孝氏、山下留一郎氏、渡辺寛氏に、性格については三上氏に、それぞれご教示いただいた。

第3節 石器類

当遺跡からは合計497点の石器類が出土した。各器種の定義や使用用途、分類、出土点数、石材などについて順に報告する。

1 石鎌 (8001~8026)

刺突による殺傷が想定できる石器。27点出土。その多くが貝殻状の剥片および横長剥片の縁辺に調整を加え、形状を整えたものである。石材は、チャートが18点で全体の66.7%を占め、残りの部分を他地域からの搬入石材である下呂石7点、黒曜石1点、サヌカイト1点が充填している。

刺突の度合いを示唆する先端部と、矢柄との装着を示唆し、石鎌の形態を最も特徴づける基部の形態をもとに次のように分類した。

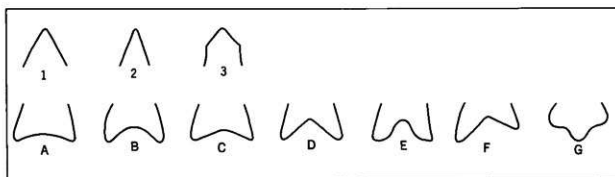


図81 石鎌の平面形による分類

〈鎌身部を含む先端部の分類〉

- 1類：鋭角な先端部をもつもの。(平面形先端角 $50^{\circ}\sim 69^{\circ}$)
- 2類：1類より鋭角な先端部をもつもの。(平面形先端角 $\sim 49^{\circ}$)
- 3類：先端部は尖り、側縁部に肩が張った形状をもつもの。

〈基部の分類〉

- A類：凹状のわずかな袈りが入るもの。
 - B類：丸みを帯びた深い袈りが入るもの。
 - C類：「く」の字状の浅い袈りが入るもの。
 - D類：「く」の字状の深い袈りが入るもの。
 - E類：U字状の袈りが入り、脚端部の外側は直線状で、内側は丸みを帯びるもの。
 - F類：いわゆる片足鎌で、基部の片方にしか脚部がないもの。または、片方の脚部が、もう一方に比べ小さいもの。
 - G類：いわゆる有茎鎌で、基部に茎部をもつもの。
- 各類の出土点数と各類の挿図番号を表24に示した。

表24 石鏃の分類別出土点数 ()内は遺物番号

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	計
1類		2点	2点		1点		3点	8点
2類	1点	1点		1点		1点	6点	11点
3類							4点	3点
不明	1点						4点	5点
計	2点	3点	2点	1点	1点	1点	17点	27点

また、合計27点のうち、折損のみられるものは19点であった。その部位によって図82のように分類した。それぞれの点数は次のとおりである。

a 2点 b 3点、c 2点、d 1点、e 3点、f 2点、g 4点、h 1点、i 1点

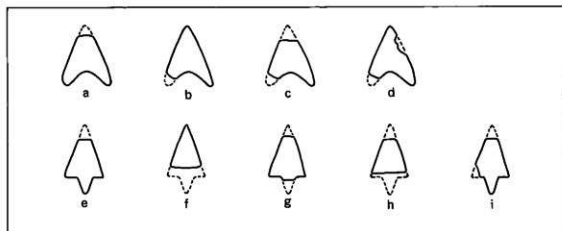


図82 石鏃の欠損部位

2 磨製石鏃 (8027)

1点出土。石材は泥岩を用いており、平面形はやや肩の張った五角形を呈する。基部にU字状の抉りを入れ、ほぼ中央部に表裏両面から円錐状に穿孔している。

3 石鏃 (8028~8030)

穿孔および刺突の作業が想定される石器。両側縁からの調整により、錐状の突出した機能部を作出している。3点出土。石材は、チャートが2点、下呂石が1点である。いずれも縦長切片を素材とし比較的厚みのない縁辺部に錐部を作出している。錐部による磨耗が観察されるものはなかった。機能部の形態や数などにより、次のように分類した。

1類：錐部作出しのための調整が進み、基部（つまみ部）を有し、錐部と基部が区分されるもの。

錐部は1箇所。1点出土。(8028)

2類：平面形が概ね三角形または菱形で、錐部と基部との境が不明瞭なもの。錐部は1箇所。1点出土。(8029・8030)

4 スクレイパー類 (8031~8049)

切削、または掻くなどの作業が想定される石器。出土総数22点。切片素材の縁辺に緩い角度、または急な角度の剝離を連続的に施した石器群をスクレイパー類とした。平面形や刃部の位置、刃部調整

方法などにより、次の7種に分類した。なお、図化にあたっては、つまみ部付きスクレイパーと搔器は刃部を下にし、他は基本的に素材となる剥片の打点を上にして表現した。

(1) つまみ部付きスクレイパー（石匙）(8031・8032)

背面の一部に2箇所から抉り込みを入れることによって、つまみ状の突起を作出し、両面からの調整により刃部を作出した石器。2点出土した。石材は、石英が1点、チャートが1点である。器形は縦長で、両側縁部に2箇所の刃部を有している。いずれも刃部は急角度である。

(2) 削器 (8033～8045)

不定形な剥片の縁辺に、概ね60°以下の緩い角度の連続調整（縁辺の長さの2分の1以上）を施して刃部を作出した石器。15点出土。石材は、チャート12点、下呂石が3点である。なお、刃部の角度は、一部において60°以上の箇所がみられても刃部全体の傾向として判断した。このことは、他のスクレイパー類でも同様である。

刃部数および調整方法により次のように分類した。

1類：1箇所の刃部を有するもの。

a類：片面調整により刃部を作出したもの。3点出土。(8033・8034)

b類：両面調整により刃部を作出したもの。3点出土。(8035～8037)

2類：2箇所の刃部を有するもの。

a類：片面調整により作出した刃部を同一面（背面または腹面）の2ヶ所に有するもの。

2点出土。(8038・8039)

b類：片面調整により作出した刃部と、両面調整により作出した刃部を1箇所ずつ有するもの。

3点出土。(8040～8042)

c類：両面調整により作出した刃部を同一面（背面または腹面）の2箇所に有するもの。

2点出土。(8043・8044)

3類：3箇所の刃部を有するもの。片面調整により作出した刃部1箇所と、両面調整により作出した刃部2箇所を有するもの。1点出土。(8045)

合計15点の削器には、24箇所の刃部が確認できた。刃部の平面形については、直線状のものが10箇所、全体で42%、凸状のものが10箇所、全体で42%、凹状のものが4箇所、全体で16%であった。

平面形に注目すると、縦長剥片の縁部に刃部をもつ縦形削器が10点、横長剥片の縁部に刃部をもつ横形削器が5点であった。

(3) 搔器 (8046)

素材となる剥片の縁辺に、急角度（概ね60°以上）による調整を施して刃部を作出した石器のうち、不定形な剥片を素材として用い、刃部の位置や刃部の平面形、刃部作出方法がランダムなものを搔器とした。2点出土。石材は、チャートである。刃部数は1で、いずれも片面調整により刃部を作出している。

(4) ノッチドスクレイパー (8047)

やや厚めの不定形な剥片の縁辺に、片面から細部調整による直角に近い急角度のノッチ（抉り）状の刃部を作出した石器。1点出土。石材は、チャートである。刃部は1箇所を有する。刃部の調整は、表から裏へ施している。

5) 複合スクレイパー (8048・8049)

素材となる剥片の縁辺に、複数器種の刃部を併せもつ石器。2点出土。石材はチャートを用いている。刃部の種類は、削器にあたる刃部と挿器にあたる刃部を併せもつものである。

5 くさび形石器 (8050)

被加工物を割るためのクサビとしての使用が想定される石器。1点出土。潰れ状の剥離痕が上下になるようにして図示した。石材は、下呂石である。平面形は四辺形を基本とし、向かい合った二辺の縁辺部に加撃と衝撃による階段状の剥離痕が対になって存在する。いわゆる挟み撃ちによって形成された端部をもち、剥片剥離以外の意図的な作出を有している。

6 打製石斧 (8051~8064)

主に掘削などの作業が想定される石器。原礫や剥片を素材とし、縁辺から粗めの調整を施して形状を整え、長軸の一端に刃部を作出している。38点出土した。使用した石材は、ホルンフェルスが34点、泥岩が4点であった。石材の多くは、川原石を素材としているが、これらの石材のフレイクは遺跡内からはほとんど出土しないことから、この石器の製作は採集地付近の川原で行われたものと推測される。製作方法は、自然面を表面に残す横長剥片を用い、その縁辺部に調整を加えて形状を整えるものが多くを占め、13点出土した。これに、柄部分との着莖を意識し、素材の厚みを調整するための剥離や折りとりを施している。

形態的視点から類別を行うと次の3分類となる。

- 1類：両側縁がほぼ平行する、いわゆる短冊形を呈するもの。18点出土。(8051・8055・8058)
- 2類：両側縁が基部に向かって収束する、いわゆる撥形を呈するもの。16点出土。(8052・8053・8056・8060・8062・8063)

なお、折損により分類不明のものは4点であった。

腹面および背面に自然面を有するものは22点あり、全体の59%を占めた。刃部に使用による磨耗が認められるものは、3点であった。基部に装着等によると考えられる潰れが認められるものは確認できなかった。凶化するにあたっては、素材の背面側を正面とし、裏面と側面および最大厚部位の断面を示した。

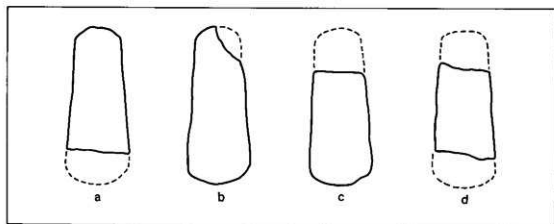


図83 打製石斧及び磨製石斧の折損部位

なお、折損が認められるものは21点で、全体の54%となる。その部位によって図83のように分類した。それぞれの出土点数は次のとおりである。

a 7点 b 2点 c 9点 d 3点

7 磨製石斧 (8065・8066)

伐採・切断・加工の作業が想定される石器。対象物は木材と推定される。折損品が2点出土した。石材は、安山岩と泥岩が各1点である。

平面形は、最大幅が胴部に位置し、両側縁がわずかに外湾するタイプのもので両側縁がほぼ平行するタイプのものが1点ずつ出土した。基部断面形は、いずれもやや丸みを帯びた長方形で定角式の稜が明瞭である。

8 扁平片刃石斧 (8067・8068)

2点出土。石材は安山岩質火砕岩と砂岩が各1点である。8068は刃部が作出されておらず未製品と思われるが砥石の可能性もある。

9 粗製刃器 (8069～8074)

穂を刈る作業が想定される石器。いわゆる打製石庖丁で、刃部に抉りは有しない。

33点出土。石材は、泥岩が6点、ホルンフェルスが27点である。軟質の石材を用い、自然面を有する大型の一次剥片を使用している。自然面を有するものは17点あり、全体の52%を占める。一見して、打製石斧の折損品らしきものもあるが、刃部調整や刃部使用痕が認められず、また、刃部の厚みも打製石斧としては薄いことから打製石斧とは区別した。ただ、打製石斧に含めたものの中で、刃部を欠損するものの中には、まだ数点この機種に含まれるものが存在する可能性がある。

形態により、次のように分類した。

- 1類：平面形が長方形のもの。9点出土。(8069・8070)
- 2類：平面形が三角形のもの。1点出土。(8072)
- 3類：平面形が杏仁形のもの。4点出土。(8071)
- 4類：平面形が楕円形の長軸で半折した形態をもつもの。1点出土。(8073)
- 5類：平面形が楕円形のもの。1点出土。
- 6類：その他不定形のもの。17点出土。(8074)

10 石庖丁 (8075～8090)

穂を刈り取る作業が想定される石器。磨製の石庖丁である。

概ねの形態により次のように分類した。

- 1類：平面形が杏仁形のもの。4点出土。(8075～8077・8087)
- 2類：平面形が楕円形の長軸で半折した形態をもつもの。8点出土。(8078～8083・8088～8090)
- 3類：その他不定形のもの。2点出土。(8084・8085)

なお、折損により分類不明なものが1点出土した。(8086)

石材はいずれもホルンフェルスであり、8075・8087・8088はSB7より3枚重なって出土した。

表25 石虎丁の分類

形態	刃部の平面形	孔の数		コーングロスの有無	未貫通孔の位置	掲載番号
		貫通	貫通せず			
1	外彎			有		8075
1	やや外彎	1		有		8076
1	外彎	2		有		8077
2	やや内彎	1		測定不能		8078
2	やや外彎	1		有		8079
2	直線	1		有		8080
2	直線	2		有		8081
2	直線	2		無		8082
2	直線	2		無		8083
3	やや外彎	1		無		8084
3	やや外彎		(2)	無	表(1)、裏(1)	8085
分類不能	不明	2		有		8086
1	外彎	1	(3)	有	表(3)	8087
2	やや内彎	2		有		8088
2	直線	2		有		8089
2	直線	1	(2)	有	表(1)、裏(1)	8090

11 大型板状石器 (8091~8096)

弥生時代における除草具としての使用が想定される石器。7点出土。石材は、泥岩を用いている。中部地方に特徴的な石器であるが、両側縁の抉りが不十分であるため、仮称である。刃部は直線状あるいは大きく外彎する。

12 石核 (8097)

素材剥片を剥離した残核を総称し、石器の製法や仕事量を考察する要素となるものである。6点出土。石材はいずれもチャートである。厚手の原礫を素材とし、平坦な面を打面とする。作業面は2面で、剥離された剥片は2~3枚と少ない。打面数は2。

13 銅片類

剥片剥離によって生産された素材を間接的に推定できる要素となり、原石・石核として遺跡内に残された資料の限界を補う資料となり得るものである。出土総数は210点である。その内訳は次のとおりである。

表26 石材別の出土剥片数

石 材	点 数 (個)			質 量 (g)		
	遺 構	包含層	計	遺 構	包含層	計
チャート	109	60	169	1518.4	641.9	2160.3
下呂石	14	9	23	77.8	42.4	120.2
泥岩	2	0	2	745.6	24.1	769.7
ホルンフェルス	6	8	14	389.0	143.9	532.9
安山岩	1	0	1	15.4	39.2	54.6
黒曜石	0	1	1	0	1.4	1.4
計	132	78	210	2476.2	892.9	3639.1

14 調整剝離を施された剥片 (RF) (8098~8101)

素材となる不定形な剥片の縁辺に、二次加工を施して刃部を形成するが、連続性・統一性に乏しく定形的な刃部をもたないものを総称した。12点出土。石材の内訳は、チャート12点である。

表27 RF 分類別出土点数

刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数	刃部のタイプ	刃部数	刃部箇所の平面形と調整方法	出土点数
擗器的	1	直線状 (片面)	1	削器的	1	直線状 (片面)	2
	1	直線状 (両面)	1		1	凸状 (片面)	2
	2	凸状 (片面調整)	2		1	凸状 (両面)	1
			1		凹状 (片面)	1	
					2	直 (片)・凹 (片)	1
					3	直 (両)・凹 (両) ・凸状 (片)	1
		計	4		計	8	

15 微細な剝離痕を有する剥片 (UF) (8102~8106)

素材となる剥片の鋭い縁辺を刃部に用い、その結果として、ある程度連続的に刃こぼれ状の微細剝離痕を有するものを総称する。14点出土。石材は、すべてチャートである。微細な剝離痕は、全部で15確認できた。このうち、側縁部は11箇所、末端部は5箇所であった。

表28 UF 分類別出土点数

剝離痕の箇所	縁辺の角度	剝離痕箇所の平面形	出土点数	箇所数	掲載番号
側縁部	急	直線状	3	5	8102
		凸状	2	3	
		凹状	3	3	8104・8106
	緩	凸状	1	1	8105
		計	8	11	
末端部	急	直線状	1	1	
		凸状	1	1	
		凹状	2	3	8103
		計	5	5	
総計			14	17	

16 打欠石錘 (8107)

礫の長軸または短軸の両端を打ち欠き、紐掛かりの部位を作出した石器を打欠石錘とした。1点出土。片面(表裏は任意とした)と最も特徴的な部位の断面形を図示した。石材は砂岩である。

17 敲石頭 (8108~8112)

敲く(叩く)、磨るなどの作業が想定できる石器群。

円形・楕円形、さらに、棒状の礫の表面に、敲打・叩き・磨りなどの痕跡がみられる石器を、それぞれ敲石・叩石・磨石とした。出土数5点。石材は、安山岩が4点、泥岩が1点である。これらのうち、単一の機能をもつものは3点、複数の機能を併せもつものは2点である。なお、図示するにあたっては、凹みや敲打痕の範囲と形状は点描で表し、叩きはその程度によって通常の剝離痕で表現した。

(1) 敲石 (8110・8112)

敲く作業が想定される石器。2点出土。178は石材に安山岩を用いており、表の平坦面のはは中心に敲打痕が認められる。181は石材に凝灰岩を用いており、表裏の平坦面の中心から離れたところに敲打痕が認められる。

(2) 叩石 (8109・8110)

叩く作業が想定される石器。敲石と類別するため、礫の長軸の一端または両端に剝離を伴うような激しい敲打痕が認められるものを叩石とした。2点出土。

(3) 磨石 (8108・8109・8111・8112)

磨る作業が想定される石器。5点出土。磨面はいずれも自然面をそのまま使用している。

18 石皿 (8113)

磨る・敲く(叩く)などの作業が想定され、扁平な形状で器面に凹部や磨面を有する石器。堅果類の製粉具としての用途が考えられる。2点出土。石材は、安山岩と花崗岩を用いている。入手が容易な自然面を有する円礫を使用したものと砂岩の板状剝離材を用いたものが各1点出土した。

これらは皿部の断面形から、凹状を呈するタイプ(1類)と平坦な形状を呈するタイプ(2類)の2種に分類できるが、凹状のものが1点で、平板状のものが1点であった。

断面が凹状を呈する8113には、周囲に渦巻文が施され、器面にも加工が施されている。平板タイプのものには磨痕や擦痕が認められず、その上、折損などによって機能部が詳しく観察できないため、その性格を明らかにすることはできなかった。

19 台石

1点のみ出土したが円化していない。

20 砥石 (8114~8129)

研ぎの作業が想定できる石器。42点出土。石材は、砂岩が16点、凝灰岩が11点、ホルンフェルスが7点、流紋岩が5点、泥岩が3点である。

形態的視点から次のように類別した。

1類：方形・円形の扁平な平砥石。

a類：緻密な石材を使用した仕上げ砥用のもの。3点出土。(8116)

b類：粗い石材を使用した荒砥用のもの。6点出土。(8115)

2類：柱状の砥石。

a類：緻密な石材を使用した仕上げ砥用のもの。5点出土。(8114・8122・8123)

b類：粗い石材を使用した荒砥用のもの。9点出土。(8126・8129)

3類：不定形な砥石。

a類：緻密な石材を使用した仕上げ砥用のもの。4点出土。(8124・8125)

b類：粗い石材を使用した荒砥用のもの。6点出土。(8117・8118・8127・8128)

4類：その他。欠損等により分類が不可能なもの。8点 (8119・8121)

全体をさらに受動作用および能動作用の観点から分類すると次のとおりである。

・置砥の上で被加工物を動かすもの。9点出土。(8121・8126~8129)

・手に持った砥石の上で被加工物を動かすもの。32点出土。(8114~8119・8122~8125)

置砥の場合は砥面に大きな圧力を加えることができ、大きな被加工物の研磨に適するものであり、手持ちの場合は圧力は小さく、小型品の細部仕上げに適するものであり、被加工物の角度を変えたり研磨部分を回転させるなど、力の入れ方が自由に調整できるものである。

なお、研磨面の数は次のとおりである。

1面 12点 2面 8点 3面 12点 4面 10点

21 石棒 (8130)

敲打または研磨によって、長く棒状に整形された石器。縄文時代晩期の祭祀用具と想定される。折損品が1点出土。石材は、安山岩を使用し、自然の形態を生かしつつ敲打によって形状を整えたと思われる。

22 紡錘車 (8131・8132)

2点出土。石材はいずれも滑石である。8131は上下面に矢羽状の文様が描かれている。

23 勾玉 (8133~8137)

弥生~古墳時代における祭祀用具と想定される。5点出土。石材は滑石が3点(8133~8135)、ヒスイが1点(8136)、チャートが1点(8137)である。

24 管玉 (8140~8145)

6点出土。石材は緑色凝灰岩が4点(8140~8143)、凝灰岩が2点(8144・8145)である。8145はバリの部分が残る未製品である。

25 白玉(8146~8168)

25点出土。石材はすべて滑石である。

26 双孔円盤(8139)

1点出土した。石材は滑石である。鏡の石製模造品と思われ、水辺の祭祀との関連が考えられる。時期的には、IV-1・2期(5~6世紀)と思われる。

27 その他の搬入石材(8138)

瑪瑙5点、土岐石2点、水晶1点、黒水晶1点(8138)が出土している。8138は弥生時代の水田耕作土中より出土している。

第4節 金属製品

1 鋼鎌 (図版432 9001~9003)

鋼鎌は3点出土した。9001は逆刺をもたない有茎の鋼鎌で、鎌身関部はナデ関である。鎌身部の断面は両鑄形で、先端から茎部にかけて不明瞭な稜線が走る。茎部は断面が円形であり、茎部の長さは鎌身部のそれのほぼ2分の1である。9002は種子形の鋼製品であるが、無茎の鋼鎌かと思われる。薄く扁平であるものの、片方の面の中心線上に不明瞭な稜線を確認できる。9003は逆刺をもたない鋼鎌で、やはり中央には稜線が確認できる。鎌身の中央付近で折れ、その折れ口の一部分を欠損しているため、接合することはできなかった。

2 鉄鎌 (図版432 9004~9008)

鉄鎌は5点出土した。9004は鎌身部は長三角形で、片切刃造である。鎌身関部は角関であるが、頸部と茎部の境は不明瞭である。先端を欠損している。9005は鎌身部を大きく欠損しているが、長三角形であると思われる。鎌身関部は腸袂で、頸部、茎部とも断面は角形である。重厚な頸部、茎部に比べ、鎌身部は非常に薄い。9006は腐食と欠損のため原形をとどめておらず、鎌身部の外形や断面の形状は確認できない。鎌身部と茎部の厚みは同じである。9007は鎌身部が長く、11.6cmを測る。身巾は先端に近い部分で最大となり、それより先が刃部となる。関部は台形関で、茎部断面は角形である。使用時の衝撃によるものか、鎌身部先端を欠損し、刃部両端が捲れ上がっている。9008は鎌身部は片鑄造で、先端から鎌身関部の山形の頂点の部分まで両刃をもつ。頸関部は円形関で、茎部断面は角形である。

3 鉄斧 (図版432 9009)

袋状鉄斧が1点出土した。1枚の鉄板の3分の1程度の部分を、残りの部分の中央辺りまで折り返し、その山折り部分に刃を造っている。柄を装着するための袋部は、撫で肩の長方形をしており、巻き上げの両端は1cm程度空いている。刃先の両端は左右不均等に摩滅している。

4 鉄釘 (図版432 9010~9014)

鉄釘は8点出土した。9010・9011は小型の釘である。断面は角形で、先端に近づくほど細くなる。後者は、頭部を欠損している。9012は頭部を環状に造る特殊な形状の釘である。1本の棒状鉄材を、他の棒状のものに巻き付けて一周させた後、その端部を身部に接合している。断面は角形である。9013・9014は、一端をL字状に折り曲げた重厚な釘で建築材と思われる。断面は角形である。釘はこのほかに3点出土している。

5 紡織具 (図版433 9015)

紡織具としては、紡錘車の芯が1点出土した。先端の尖った鉄製芯材に鉄板を巻き付け角錐状に成形したものである。

6 細棒状鉄製品 (図版433 9016~9017)

細棒状鉄製品が2点出土した。両端が尖り、断面は角形である。箸あるいは金串かと思われるが、用途は不明である。

7 農具 (図版433, 434 9018~9025)

農具としては、鋤鋤先2点、鎌4点、馬鋸2点が出土した。

9018と9019は、どちらもU字形鎌先である。9018は耳部から刃部まではほぼ均一な身幅で、刃部端部がやや角張る形状のものである。片方の耳部から刃部の大部分を欠損している。9019は耳部から刃部にかけて身幅が次第に広がる蹄鉄形の鎌先である。刃部両端が角張らないため刃部と耳部との境が不明瞭である。外縁が不整形なのは、使用による変形のためである。

9020～9023は鎌である。9020は身部と茎部の境で、「く」の字に曲がる形態のものである。茎部には柄を装着・固定するため穿孔がある。また、茎部は途中で90度捻られている。身部の大部分を欠損している。9021は曲背直刃の形状を呈するもの、9022は背・刃とも緩やかに内湾するものである。9023は身部と茎部との境で「く」の字に折れ曲がり、その外側に刃をもつ小型の鎌である。

9024と9025は馬鎌である。

8 刀子 (図版434 9026～9029)

刀子は5点出土した。9026は刀身が途中で欠損している。9027は茎部のほぼ全体を欠損している。9028は細身であるが、明瞭な鑄を確認できる。刃身先端を欠損している。9029は、意識的に折り曲げられた刀子である。刀子が折れ曲がるということは、地金が低炭素鋼であり、折り曲げるために造られた製品であったと判断できる。(村上1998) このほかに刀子と思われる金属片(鉄製)が1点出土した。

9 その他 (図版435 9030～9037)

その他の金属製品としては、不明鉄製品1点(9030)、銅製の管1点(9031)、真鍮製の煙管1点(9032)、鉛玉4点(9033～9036)、焼夷弾の破片(9037)が出土した。9030は穿孔のある鉄製品で、刀身を欠損した刀子の茎部の可能性もある。9033～9037の鉛玉4点はいずれも三叉玉である。このほかに、鉄製の戸車1点が出土した。

10 銭貨 (図版435、436 9038～9062)

銭貨は28点出土した。その内訳は、中国からの渡来銭が15点、不明銅銭2点、近世の銭が8点、近代銭が3点である。

渡来銭では、唐銭1点、北宋銭13点、明銭1点が出土した。9038は唐の開元通寶で、元字の第1画が短い短頭元と分類されるものである。7世紀に鑄造された最初期のものであるが、北宋銭等に混じって中世に渡来したのであろう。9039は咸平元寶、9040は景德元寶、9041は天聖元寶、9042～9046は皇宋通寶、9047・9048は嘉祐通寶、9049は熙寧元寶、9050は元祐通寶、9051は紹聖元寶で、これらは北宋銭である。9043・9045の皇宋通寶2点と9049の熙寧元寶は、銭体に欠損がある。また、9051の紹聖元寶は腐食により外縁がぼつれているため外径は小さいが、内径は縮小していないことから、模鑄銭ではなく北宋本銭と判断した。9052は明の永樂通寶である。永樂通寶の銭文をもつ銭貨には日本で模鑄されたものも多く存在するが、銭文書体及び銭径より判断して明本銭とみられる。

9053は不明銅銭で、2枚の穴銭が青錆により付着したものである。腐食が著しく、剝離作業を行うと破損の恐れがあるため銭文は確認できないが、II層中より中世の土器片に混じって出土していることから、渡来銭の可能性が高い。なお、さらに1点の不明銅銭(穴銭)がII層中より出土しているが、銭体の腐食が激しいため採拓を避けた。

9054～9061は近世の銭で、すべて寛永通寶である。9054は寛永期の古寛永、9055・9056は明暦期の古寛永、9057は寛文期の背文銭、9058～9061は享保から元文期に鑄造された新寛永で、18世紀後半以

降の鑄造になるものは含まれていない。これら8点の寛永通寶はすべて銅銭である。

9062は近代銭で、大正八年銘の桐一銭青銅貨である。この外にも大正八年と同九年銘の桐一銭青銅貨が各1点ずつ出土しているが掲拓を略した。

報告書抄録

ふりがな	かきだいせき							
書名	柿田遺跡							
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第92集							
編者名	鈴木隆雄、笹木幸司、山内裕行、平田篤志、松岡千年、近藤大典、小野木学							
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058 (237) 8550							
発行年月日	西暦2005年3月18日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
柿田遺跡	岐阜県可児市 柿田 可児郡御嵩町 顔戸	21214	08846	35° 25' 40"	137° 06' 14"	19990524 ～ 20000310 20000703 ～ 20000309 20000521 ～ 20010308	78,058㎡	東海環状 自動車道 (八百津 ～笠原) 建設事業
柿田前山遺跡	岐阜県可児市 柿田	21214	09609	35° 25' 25"	137° 06' 14"	20000703 ～ 20000309	670㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柿田遺跡	集落跡 生産遺跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 近現代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 井戸 埋納遺構 水田跡 溝 自然流路 水制遺構など	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 中近世陶磁器 木製品 石器 金属製品など		縄文時代から近 現代までの複合遺 跡 約41万点の土器 と約2万点の木製 品が出土		
柿田前山遺跡	集落跡	中世 近世	土坑 溝など	土師器 須恵器 中近世陶磁器				

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第92集

柿 田 遺 跡

(第1分冊 本文編1)

2005年3月18日

編集・発行 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 西濃印刷株式会社